
Silent Lyric ~ 疵だらけの魔術師 ~

赤井呂色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Silent Lyric 〈疵だらけの魔術師〉

【Nコード】

N9819J

【作者名】

赤井呂色

【あらすじ】

世界には魔術師が存在する。それは、公にされない、世界に秘された存在。そして、同時に在る疵術師という存在。“キズモノ”として嘲りの対象にされ、魔術師の劣等種とみなされる彼らは、しかし自らの尊厳と意義を求めて戦い続ける。その敵こそは
人喰いの異形

窓から差し込む陽光で、俺は目を覚ました。

なんて気持ちのいいありがちな方法ではなく、俺の覚醒を促したのは、7時にセットしたケータイのアラームだった。

そもそも、俺の部屋に限って、朝日が部屋に入ってくることはない。廊下を挟んで反対側にあるあいつの部屋なら、心地よい日の光が優しく起こしてくれるだろうが。

そんなとりとめもないことを思考しつつ、俺はベッドからのそのそと這い出る。ベッドの横にある服掛けに掛けてある制服を取り、適当なインナーを選んで、約5分かけて着替える。そしてまだ執念深く鳴り続けるケータイのアラームを止めて、充電器から外して制服のポケットに放り込む。で、この後またこの部屋に戻ってこなくてもいいように（階段の上り下りが面倒だから）カバンを持って部屋を出る。

階段を下りると、廊下にカバンを立てかけて、洗面所で顔を洗う。うがいをした後、もう一度顔を冷水で洗い流す。と、ここで俺はようやく本格的に目を覚ます。今まではほとんど寝惚けながらやってきたことだ。

俺は鏡を見返す。覚醒したばかりの俺の顔は、少し覇気にかけるが、いつもどおりだ。若干切れ長の目に、あとは細面気味であることを除けば大体平凡……………だと思いたい。

と、こんなことをしている場合ではない。こんな風に鏡の中の自分と見詰め合っているなどという光景、誰かに見られたら、変な思考のナルシストかなにかだと思われるしまう。

「なにやってんの、ナツ。鏡と見つめあったりして。えらくキモいんだけど？」

ほら見る。選りによって一番見られたくない人物に見られてしまった。

この的確かつ酷すぎる評価を俺にくれやがった主は、名を亜美つぐみという戸籍及び遺伝子の上では、俺の母親を名乗ることができる唯一の人物である。

自分でいうのもなんだが、この人、かなりの美人である。スツとしたあごのラインにその中に納まる顔のパーツの配置が絶妙なのだ。ってか、自分の母親をここまで絶賛する子ってどうなんだろう？

……まあ、いいや。ちなみに俺の切れ長な目はこの人からの遺伝である。父親はどちらかというと垂れ目だから。

紹介終了。とにかく俺は、実の子どもに向かって「キモい」って、しかもご丁寧に「えらく」なんて修飾語までつけて強調するってどういうことだ、と問い詰めたい衝動を理性と朝のたるさで適当に押さえ込み（どうせいつものことだ、それにしたくてもできない）、せめてもの復讐として、母親を睨みつけながら洗面所を出る。

そして、いつも通りカバンを廊下に置きっ放しにして居間へと向かう。

その前に、俺の紹介をしておこう。母親の紹介のほづが早くなっってしまったが、まあいいだろう。俺の名前は幣原しちはら 奈都海なつみ。3ヶ月前の6月に誕生日を迎えて17歳になった、世間的には高校2年生をしている学生である。

それはさておき、俺が住んでいるのは特に大きいともいえない一軒家なので、洗面所から居間まではそんなに距離があるわけじゃない。俺は無駄な思考をする間もなく、居間に到着した。

この先には、いつも通りの光景があるはずだった。だが、それは俺にとつての、であって他人にとってはどんなものはわからない。そして、俺は俺にとっていつも通りの光景があるであろうリビングの扉を開けた。

そこには、俺と同じ学校の女子制服を着た、後ろ髪を結うために口にゴムを啣えて髪を纏めている……………

……………ここからは少し間を置こう。慣れていない人には少し刺激の強い描写かもしれない。いや、別にそいつが全裸だったとか自慰行為をしていたとか、あるいは内臓がデロデロ飛び出していたとかいうそういうのじゃあない。ていうか、自分家の居間でそんな光景が繰り広げられていたら、そしてそれがいつも通りだったら、俺は間違いなくこの家をとっの昔に出て行っている。とにかく、俺は今の居間の光景（ダジャレじゃない）には慣れているが、やはりこの光景は、普通は一般には許容されるものではない。では、いくぞ……………

そこには、俺と同じ学校の女子制服を着て、後ろ髪を纏めながら

口にゴムを啜えた、ぱっちりとした猫目に形の良い鼻と薄桃色の唇が実に可愛らしい美少女然とした、俺より1歳年下の

俺の“弟”が、いた。

俺の弟、幣原唯利亜は、ちょうど2週間前に誕生日を迎えた16歳の男子高校生である。

男子高校生である。

そう、男子である。男である。漢である。X染色体とY染色体を併せ持つ性別である。あるもんはあるし、ないもんはない。それがこいつだ。その点では、俺と同じだ。

だというのに。

なにをまかり間違ったか、こいつは女子制服を着ている。俺たちの通う学園の中等部に入った頃からずっと。

確かに似合っている。

猫のような丸い瞳に、低いが逆にそれが可愛い鼻、桜の花弁のような唇、とおよそ男には見えない顔立ちをしている。体つきも線は細いし、腰骨が張っていて、胸は、まあ、当然だが、全体的に女性的なフォルムだ。髪も、基本的には後ろ髪を可愛いりボンで結ってあり、しかも似合っている。何も知らない奴が見たら、十中八九、女だと思うだろう。実際、学校では勘違いしたままの奴らのほうが多い。むしろ、こんな奴が男子制服を着ているほうが不自然に見えるかもしれない。

.....

まあ、こいつになったのは俺の責任でもあるため、強くは言えないのだが

まさか、ここまでになるとは……………

「あ、兄さん、おはよう」

俺に気づいた唯利亜は、爽やかな笑顔でもって朝のあいさつをしてくる。そのせいで啜っていたゴムが落ちかけたが、唯利亜は器用に纏めた髪はそのままに、それを途中でキャッチした。

その一連の動きを見届けた俺は、今日は珍しく髪を結ぶのはゴムかと思いつながら、適当に腕を挙げてあいさつの代わりとする。

恐らく唯利亜が起きてからずっと付けっ放しであるうテレビに目を遣ると、どこかの局の女子アナが星座占いの内容を読み上げているところだった。俺の双子座は……………5位。まあまあ、なのか？

「あ、そうだ。兄さん、朝ごはん食べるよね？」

俺が頷くと、唯利亜は、ぱつと笑顔を浮かべてキッチンへと駆けていった。それを見送った俺は、特にすることもないのでテレビのチャンネルをいろいろと変えてみたりしていた。と言っても、この時間帯は大体朝の情報番組ぐらいしかしていないから、大抵同じ内容のニュースを垂れ流している。

しかし、最近、物騒な話をほとんど聞かない。事故のニュースはあるが、日本国内に限れば、人が殺したとか殺されたとかテロリズムがどうだとかというニュースが最近2ヶ月ほどめつきり減った、いや、なくなったと言ってもいい。いいことだとは思う。俺だって、他の多くに変わらず平和主義者だ。殺人やらテロなんかは、ないほうがいい。だが、少し変だとも思う。なぜなら、2ヶ月前以前

までは普通にそういう話はいくらでも、掃いて捨てるほどあったのだ。それがいきなり、7月の終わりごろからぱったりなくなったのだ。不自然にもほどがある。

もちろん、この異常に対して考察する評論家なんかもいる。しかし、いつもしたり顔で適当なことをのたまっては自分勝手かつ曖昧な結論で締める彼らも、どうにも決定的な結論に至らない。犯罪者の心理状態が云々かんぬんらしいが、そもそもなぜいきなりそうなったのかについては、全く言及しようとしない。

まあ、俺が何を考えてもどうしようもない。興味がないわけではないが。とりあえず唯利亜が持ってきてくれた朝食をいただくことにする。

「はい、どうぞ」

俺が手を合わせると、そう言ってくれる。これが本当の妹なら微笑ましいんだが……。妹にしか見えない弟というのも、微妙なものだ。

それにしても、いまさらだが、唯利亜という名前は男の名前としてはどうなんだ。確かに今の状態を見れば、何の違和感もないわけだが、もしこいつがむさい筋肉男に育っていたらどうするつもりだったんだろうか、うちのバカ親は。似合わないことこの上ないぞ。

と、居間の扉が開き、そのバカ親が入ってきた。というか、元々こいつに女子制服を買ってやったのはこのバカ親じゃないか。自分の息子が女装趣味に走るのを、止めないならまだしも、推進してどうする。いずれ、唯利亜が性転換手術したいとか言ったら、金出してやったりするんだろうか。多分、するだろう。

と思っていると、そのバカ親はこちらに視線すら向けずに俺たちに言った。

「おい、二人とも。玄関のところに九能ちゃんが来てるぞ」

「え、ほんと？兄さん、早く食べちゃわないとっ！」

唯利亜が急かすので、俺はペースを上げる。というか、九能、わざわざ家の前まで来ることないだろ。いつもは俺らの通学路で待ち伏せしてるくせに。

とはいえ、あいつを待たせるのは、俺も本意ではない。できるだけ急ぐとしよう。

「あ、やーっと来たわね」

俺は、あの後、驚異のスピードで朝食を平らげると、既に準備を終えていた唯利亜を連れて玄関へ向かった。

俺たちが玄関の扉を開けると、唯利亜にとっては先輩であり友人、そして俺にとってはクラスメイトであり恋人である西園寺さいおんじ 九能くのうが待ち受けていた。いや、母親から聞いて既に知っていたわけだが。

こいつも、数少ない（？）唯利亞の正体を知る者の一人だ。というか、俺の恋人になるからには知っておいてもらわないと困るわけだが、こいつの場合、恋人になる前から知っていた。

「おはようございます、九能さん」

「おはよう、唯利亞ちゃん。今日もまた一段とかわいいね。怖いお兄さんに何かされなかった？」

そう言っつて、俺に視線をくれる九能に、俺は手を挙げて（いろいろ突っ込みたいところはあったが、どうせ言っつてないことにされる）あいさつの代わりと

「捕獲」

「？」

しようとして、意味の計りかねる単語とともにいきなり腕を掴まれた。

何事かと思っつて、九能を見つめると、

「ちゃんとあいさつしなさい」

幼稚園の先生みたいなことを大真面目な顔で俺に言っつ。俺のことを多少なりとも知っつているなら、絶対に言わない台詞の一つだ。しかし、こいつ（と俺の家族）に対してだけは、それは適用されない。俺は溜め息を吐いて諦めを表す。面倒だが。だから、俺は口を開く。

『わかつたよ……………おはよう』

しかし、そこからは声が発せられることはなく。唇の動きだけでそれを読み取った九能は、

「うん、おはよう!」

満面の笑みであいさつを返してくれた。

そう、俺は喋ることができないのだ。

S i l e n t L y r i c - 0 - プロローグ? (後書き)

初めまして、アカイロイロです。

他の方々の秀逸な作品を多く読ませていただき、自分も書けたら、と思っていました。今回、このような形でやっと実現した次第です。

これからも続けていく気です。どうか私の拙文、ただの時間つぶしでも結構ですので読んでいただき、少しでも多くの人に楽しんでもらえれば、と思っています。私も少しでも多くの人に楽しんでもらえるよう、努力していきますので、どうぞよろしく願います。

喋ることができない、とは言っても俺は今まで普通の生活を送ってきた。

喋れなくなる以前、中等部の2年になる前までは当然だが、その後突然口が利かなくなっただけから家族や友人に支えられて、何不由なく暮らしてきた。

特に、両親がなぜか読唇術を習得済みだというのが助かった。唇を動かすだけで意思が伝わるのだから、俺は手話を覚える必要もなく、それを見ていた唯利亜も唇の読み方を覚え、さらにこれまたデフォルトで読唇術の使える恋人ができた。正直、恋人になってもらった理由には、読唇術の存在が大きい。決定的、というほどではなかったが。

他の友人、読唇術を使えない人と会話する際には、基本的には筆談になる。いまさら手話を覚える気もない。それに、筆談できない状況なら、家族か九能が通訳してくれる。

しかし、読唇術を使える人なんて、知り合いに1人いるだけでも珍しいものだ。俺はかなり恵まれている、と言ってもいい。

それに、喋れなくなって変わったことと言えば、唯利亜が読唇術を覚えたことぐらいだ。家族はもとより、友人たちも心配こそしたものの、その後の態度なんかは何一つ変わらなかった。

声を失った俺にとって、これがどれだけ救いになったことか。筆談でこれを打ち明けたとき、あいつらは一瞬驚いた顔をしたが、すぐにいつもの笑顔に戻って遊びに誘ってくれた。しかし、なんだ、

その日のラストがカラオケって何だ。絶対に俺が喋れないってこと、忘れてただろ。それとも、俺へのあてつけだったのか、あれは。だが、それは、俺はなんにも変わってはいないってことを言いたかったんだろ。あいつらにそのつもりがなかったとしても、少なくとも俺にとつて、それは救いだっただ。

家族に至っては、俺が喋れなくなったのをいいことに、自分に都合の悪いことを俺が伝えようとすると、気づいていない振りをする。唇を見れば、俺が言いたいことが分かるはずなのに、絶対に見ようとしな。両親だけでなく、唯利亜まで。そうになると、わざわざ紙に書いて直接見せなければならぬので、非常に面倒くさい。でもそれがいつも通りの家族で、面倒でも安心する。それに読唇術が必ずしも万能ではないことを考えると、何を言っても絶対に正しく読んでくれるだろう、というの俺の一方的な我が侷だ。唯利亜は特に、まだ上手く読唇できなかつたりする。

.....

以上、これが俺、幣原しでほん 奈都海なつみの紹介だ。

俺たちは、我らが学園に向かう通学路を歩いていた。

時間が少し早めなせいか、生徒の姿はちらほらとしか見ない。しかし、それも当然だ。もし、生徒が多い時間帯に通学すれば、大騒ぎになる。なぜなら、こちらには学園のアイドルがいるからだ。

誤解がないように言っておくが、九能ではない。

確かに、九能は綺麗だ。可愛い、ではなく綺麗。これは別に俺だけの、恋人による贔屓目があるからとか、そんな評価ではないらしく、俺が九能と付き合うことになった、と知ったら何人かの友人は羨ましがってくれた。余談だが、その中に彼女持ちの奴がいた。しかも、その彼女の目の前で「いいなあ〜」なんてほざきやがったから、危うく俺のせいでの二人は破局しかけた。

んなことはどうでもいい。当時は本気で焦ったものだが、今はもう正直、心底どうでもいい。

で、学園のアイドルだが……………

俺じゃない。当たり前だ。だとしたら、俺はもう退学届けを出してる。

なら、誰か？

我が弟、幣原しでほいらい 唯利亚ゆじあだ。

まあ、予想はつくだろう。理由は割愛する。自分の弟をもつこれ以上可愛いだのなんだの言いたくない。

それなりに人気は出るだろうな、とは思っていた。しかし、現実に、一生徒のためにファンクラブができるとか、学園のアイドルと呼ばれるなどと誰が予想できようか？少なくとも、俺はできなかつた。これが赤の他人なら、大変だねえ、で済むが、俺はこいつの兄だ。肉親がこんな扱いを受けるなど、予想できるか？その予想が当たったとしても、そんな予想ができる奴の頭はどうかしてる、絶対ファンの男女の比率は大体4：6で、意外にも女子が多い。九能

いわく、意外でもなんでもないらしいが。

しかし、それが厄介だ。

どこからか、唯利亜は男だと知った女子生徒が、これ幸いと交際を求めてくる。いや、それだけならまだいい。恋愛なら大いにやってもらって構わない。しかし、それだけでは満足できない人間もいるものだ。それは男女の区別などありえない。

いつだったか、梅雨の時期だったと思う。

昼休み、あいつは3年の女子の先輩に呼び出しを喰らった。俺と九能はまたか、という顔であいつを見送った。唯利亜はこうしてよくファンクラブの、特に女子の先輩方に呼ばれることがある。

あいつは、他の多くの生徒がいつも昼休みに溜まり場になっている食堂から出て行った。俺たちは基本的に昼食を取る場所を決めていない。日ごとに違うのだが、今日は食堂にいるところを見つけられってしまったらしい。

その後、3限目が始まるまで（この高等部は1日90分4時間授業である）唯利亜は戻ってこなかったが、俺たちは特に気にすることもなかった。戻ってこない理由などいくらでも思いつくし、別にわざわざこちらまで戻ってくる必要もないからだ。

しかし、3限目の授業を受けている最中、小学生の頃からの唯利亜の友人であり、俺も昔からの顔見知りである神田かんだ 愛燕えのが俺たちの教室に、息を荒げながら飛び込んできて、やっと異常に気付いた。いつもは泰然自若としているというか感情をほとんど表に出さない彼女が、ここまで取り乱しているのは、何か異常が起きたのだと容易に予想できた。

愛燕によれば、3限の授業に唯利亜が出ていないという。体調が悪くなったといっても、メールぐらいはしてくるはずだと思い、自分からメールしてみたという。しかし、待てど暮らせど唯利亜からの返事は一向に來ない。教師に見つからないよう、電話もしてみ

たらしいが、電源は切れていないにも関わらず、全く出る気配がなかった。そこで愛燕はこれは異常だ、ということに思い至った。唯利亜が呼び出された現場には、愛燕もいた。だから、そこで勘付いたのだろう。

そこまで聞いて、俺も大体わかった。一緒に教室を出て、走った。目的地は、あの時、ちらつと聞こえた体育館裏……………、いや、その近くにある今はもう使われていない部室棟だ。さすがに外でどうしようとは思わないだろう。

果たしてその予想は当たっていた。その部室棟の一階のちょうど真ん中の部室に、唯利亜を含めたそいつらはいた。

だが、その光景は、俺の予想を遙かに上回っていた。予想は当たっていたが、程度は全く違っていた。

その時の直接的な描写は避ける。R指定しなければならなくなるので。

控えめな表現で言うなら、こいつらは変わる変わる唯利亜とやっていたわけだ。しかも、その時の様子からして、そこにいた3人の女はそれぞれやってしまった後だったらしい。さらに正確に言うなら、2周目に入ろうとしていた。

俺はなるべく他の女に目を遣らないようにして、唯利亜の方へ歩み寄った。こういう時、男の本能というのは恨めしい。そんな価値もない屑だとわかっていても、どうしても意識してしまう。しかし、そんな考えは一気に吹っ飛ぶ。唯利亜は息を上げて完全に疲れきっていた。当然だ。3人と立て続けにやれば、体力はかなり消費されるだろうし、体力のない唯利亜なら、なおさらだ。いや、それ以前にレイプされていつものままで居られるはずがない。そのときの唯利亜も、肉体的な疲労よりも精神的な磨耗のほうが激しかった。

そのとき、俺の中に、怒り、という言葉では表現できない何かがある。怒り、なんて感情ならまだ制御できた。

だが、無理。

その時、俺はなんの躊躇いもなく、周囲のほぼ全裸の女子生徒を

睨み付けた。俺は、そんなことをしたことなど憶えていないが、愛燕が教えてくれた。だが、多分、その時やっと思いついた愛燕が俺の名前を呼んでくれなければ、その3人を殴っていたかもしれない。下手をすれば、男として最低のことをしていたこともあり得る。

愛燕の声で冷静になった俺は、スカートを着けている以外はほとんど全裸の唯利亜を担ぎ上げ、愛燕に言っただけで唯利亜の制服を回収させた。

結果、残ったのは、唯利亜に刻まれた女性への強烈な恐怖心と不信感。

失ったのは、唯利亜の貞操といくらかの友人。

その時、唯利亜を犯した3人の女子生徒は、当然退学。3人ともに元々は成績優秀な優等生だったので、一応、他の高校への編入の機会が与えられたらしいが、詳しくは知らない。知りたくもない。

これを受けて、学園側も対策を取ろうとした。しかし、俺や九能、愛燕はそれを突っぱねた。唯利亜自身も拒否していることもあり、結局、俺たちだけでこいつを守るようになった。

だが、そちらのほうがいいと思う。下手に第三者を介入させるのはむしろ逆効果にしかない。それに、この事件の後、ファンもそれなりに自重してくれるようになった。それに、九能と愛燕にはさほどの拒否反応は出なかったため、今は、普段は俺、九能、愛燕が唯利亜の傍に付いておき、学校では主に愛燕が、日常では俺や九

能が主になる、という役割分担ができている。

しかし、一番辛かったのは、当然唯利亜だ。今でこそ普通に笑顔を浮かべてくれるが、今でも知らない女性と会うだけでかなり緊張するらしい。突然話しかけられた途端、泣き出したこともある。女子ファンを怯えた目で見ることもしばしばだ。何をされたか、具体的には知らないが、それほどに傷は深い。

しかも、さらに追い討ちをかけるように、唯利亜が女友達を見る目が変わった、という事態も起こった。さらにその逆、つまり唯利亜をまるで汚物でも見るかのような目で見てくる女子生徒が出てきたのだ。そのせいでいじめめいたことも偶に起こるようになった。個人が特定できない上に、陰湿。これは、もう熱が冷めるのを待つしかない。

逆に、唯利亜に気を使いすぎて、まるで腫れ物を扱うかのように接してくるようになった友人もいた。彼女たちからしてみれば、親切心からの行動なんだろうが、それはある意味、一番精神に響く。親切心からだと言利亜本人もわかってしまったため、拒否できない。それどころか、嬉しがっている振りをする。そうして、周りが冗長する。そんな負のスパイラルが続いていた。今はほとんどなくなっただが。

それでも、唯利亜を慕ってくれるファンは、まだ多い。それに、今は抑止力があるため、もう以前のようなことは起きないだろう。逆に唯利亜を間接的に守ってくれる人も出てきて、俺たちのほうも楽になった。

なぜこんなことを語ってしまったんだろうか。

いくら兄弟とはいえ、こんな過去を晒すようなことは普通はしない。

しかし、これで唯利亜の人気っぷりが分かってもらえたと思う。ファンクラブには、中等部、高等部合わせて全生徒の1割が入っていると聞いて驚いたのは、結構最近だったと思う。

なんか、俺の都合で唯利亜の過去を晒してしまったような気がするが、知っておいてもらわないと後々面倒なので、良かったはず。

愛燕も、唯利亜のクラスメイトとして、親友として、そしてなぜか唯利亜のファンクラブの長として唯利亜を守ってくれているし、それ以前に友人として普通の付き合いをしてきているのは、とてもありがたいことだ。

次は、我が恋人たる西園寺 九能か。

正直、語ることはあまりない。

付き合い始めて、約半年。ちょうど今年の春休みに入る頃に出会い、いろいろあって俺が惹かれるようになり、いつの間にか恋人になっていたのだが……………。

というか、語るならそのときのことを語ったほうが、いいような気がしてきた。九能と出会ったことによって、俺の世界の価値観は180度変わってしまったと言っても過言ではない。いろんなことが終結した今において、何を話しても基本的には完成されているのだから。

まあ、それはさておいて。

見た目は文句なしに綺麗だと思う。背は高いほうでもなく、雰囲気も歳相応なのに、何気ない挙措や態度が妙に大人びていたりする。物事をやや斜めに見る癖があり、俺の価値観とマッチするところが多かったりする。

だが、基本的には俺には勿体ないくらいに優秀な奴だ。

成績優秀、品行方正、運動神経もいいし、教師受けもいい。後輩への面倒見もいいし、先輩からの信頼も厚い。唯一の弱点といえば、食べ物の好き嫌いが激しいということぐらいだろうか。

その他にも、家事は一通りできるし、なんと云うか、食べ物を除けば弱点がない。

これほどの完璧超人なのに、一緒にいても気負うことがない。これは多分、あいつがそうなるように配慮しているからだろう。彼女にそんなことをさせていることに負い目がないわけではないが、未熟な俺にはどうしようもない。しばらくは甘えさせてもらうことにした。

これ以上、語ることはない。いや、実際はあるにはあるのだが、
今ここで言うことではない。言っても混乱するだけだろうし。

紹介文の長さの比率がおかしいことになったが、これで終了。次
からは普通に進んでいく。

S i l e n t L y r i c - 1 - プロローグ? (後書き)

気分を悪くした方がいましたら、申し訳ありません……

「ん？」

俺が肩を叩いたので、九能は俺のほうを向いてくれた。喋れない俺は、俺のほうを向いていない人に話しかけるときは、こっするしかない。離れている人間に話しかけることなど、無理。

とにかく、俺は、唇だけを動かして疑問に思ったことを率直に訊ねる。

『……………あれは一体なんなんだ？』

と俺は、前方で自動販売機に向かってなにやら威嚇っぽいことをしている少女を指差す。着ている制服は俺たちの通う鳳霊学院高等部の女子のものの中のセーラータイプの内の一つ。背はかなり低い女子と比べても低いほうに入る唯利亚よりもさらに低い。

「さあ……………？できれば、関わり合いになりたくないんだけど、あれ」

俺の唇を正確に読んでくれた九能がそう言うが、俺も同感だ。朝から無機物に威嚇している奴なんぞとは、目も合わせたくない。まあ、傍から見るぶんには微笑ましい光景だと思う。いや、皮肉じゃなく。なんか、猫が鏡に映った自分と喧嘩してるのを見るのに近い感覚だ。どっちにしろ、人間として見てないのはしょうがない。

「うーん……………あれ、なにやってるんだろ……………？」

あの誰にでも優しいと（ファンの間でだけ）評判の唯利亞まで、苦笑気味にそんなことを言う。3人揃って1人の少女を「あれ」呼ばわりである。

というか、あいつを見る俺たちへ向けられる視線が痛い。関係者だと思われているんだろうか。いや、その通り、その予想は当たっている。何せ、あの自販機に対して毛を逆立てんばかりに牙（八重歯）を向く少女、彼女こそ

唯利亞の親友にしてそのファンクラブの主、かんだ神田 えの愛燕、その人である。

.....

頭痛がしてきた.....

「あ、皆さん、おはようございます」

ついさっきまでとは打って変わって、本当にあんな自販機に喧嘩を売っていたようには見えない、丁寧な口調かつ無表情であいさつしてきた。

これが俺と九能に対する愛燕の素の対応である。唯利亜とは普通に会話する。それでも俺の見る限り、堅いイメージは残っているが、表情がほとんど動かないから、そう見えるんだろうか。本当に何があっても、涼しい顔で流すのだ。

「おはよー、えっちゃん」

唯利亜はいつも通りの笑顔であいさつを返す。誤解なきように言うておくと、唯利亜はたまにしか愛燕のことを「えっちゃん」とは呼ばない。結構レアだ。

「おはよう、愛燕。ところで、何してたの、こんなところで」

あいさつ早々、九能が一番訊きたいことを訊いてくれた。俺もそれは気になるので、あいさつは省略させてもらった。

「実は、あの自販機に500円飲み込まれてしまいました」

「それで、愛燕は自販機相手に威嚇してたの？」

「はい。おかげで500円、戻ってきました」

んなわけがない。愛燕が手に持っているのは、別の500円玉なのだろう。愛燕なりのジョークなのだろうが、言っている間も表情が変わらないので、親しくない人間が見ると、反応に困る。もちろん、10年近くの付き合いのある俺はそんなことはない。が、反応に困ることに変わりはない。九能も唯利亜でさえも苦笑いを浮かべているし。

しかし、俺は、いつもしているように愛燕の頭を撫でる。30cm近く身長差があるため、ちょうど置きやすい位置に頭があるのだ。なぜいきなりこんなことをするのか、というと、愛燕が俺の目を見つめてくる時、俺が愛燕の頭を撫でると、なぜか愛燕は嬉しそうに目を細めて、ほんの少しだが微笑んでくれるからだ。俺が唯一、愛燕の表情を変えられる手段だ。しかし、これをし過ぎると、

「……………」

九能が嫉妬する。

いや、気持ちにはわかる。俺だって、九能が他の男の頭を撫でていたら、そりゃ嫉妬する。

だが、そこまで怨嗟のこもった視線で睨まなくてもいいのではなからうか。ただ、嫉妬している、という態度が表せばいいんじゃない？とも思うわけだ。しかも、その対象が俺だけってどういうことだ。なぜその矛先が愛燕に向かない？別に、愛燕を憎んでくれとか思っているわけではなく、ただこの理不尽さを嘆いているだけだ。

『なんだ……………？』

九能が俺の顔を見つめていたので、俺は遠慮なく喋らせてもらおう。声は出ないが、九能は普通に俺の唇を読み、

「……………別に……………」

エ 力様か。20年以上も前のネタを引つ張ってくるか。いや、それを意識したわけじゃないだろうけど。というか今のこの時代にこのネタを知っている人、憶えている人がどれだけいるか。

しかし、そう言われた以上、俺は黙るしかない。はずなのに、

「なに黙ってんの!？」

『はあっ!?!』

いきなり叫ばれて、普通に驚いてしまった。

「普通、こういう時は私をフォローすること言うもんでしょ!?!なんでわかんないの?」

そんなこと言われても。どうフォローすればいいのかわからないし、なによりまず、何をフォローすればいいのかわからない。

はて、愛燕の頭を撫でる以外に、何か九能の気に障るようなことをしただろうか?俺の場合、気付かない内にしていたということはほとんどない。エロゲの主人公じゃあるまいし、そんなことある、わけ……ない………と思う………よ?」

「あ、あの、九能さん、落ち着いて。兄さんもあんまり九能さんのこと怒らせちゃ、ダメだよ?」

『あ、ああ、うん』

唯利亜の言葉に生返事しかできない。正直、なにが九能の琴線に触れたのか、皆目見当がつかない。

俺が、依然として頭を傾げていると、

「はあ。もういい。奈都海がこういうのだったってことは、もうわかってたことだし」

自分の彼氏に向かって溜め息を吐きやがりましたよ、こいつ。しかも、こういうのってなんだ。まあ、鈍い奴だっただけを言いたいのだろうけど、にしても酷い表現だな。

というか、元凶である愛燕がさっきから涼しい顔で俺の手を握ってくるのですが？愛燕さん？空気は正しく読みましょかね？

ほら、やっと収まってくれそうだった九能が、これを見つけて表情消したし。まるで能面みたいな顔で俺を見つめてくる。視線で死にたくなつたのって、初めてなんです。できれば、一生体験したくなかつたけど。

とにかく、この俺の焦燥を愛燕に伝えようと、手を握る力を少し強めてみる。すると、それに応えるように、愛燕も手に少しだけ力を入れてくれた。ああ、ここでその反応は、断じて求めてない。せめて、視線をこちらに寄越すだけでよかったのに。なぜ、そんな初々しい恋人同士みたいなことをせねばならないのか。

そして、俺の顔色から何かを察知したのか、九能はついに俺から目を逸らし、早足に一人で先へと進んでいってしまった。

こうなったら、俺にはもうなす術はない。声は出せないから、呼び止められないし、それ以前にああなつた九能は俺では抑えきれない。

「あーあ……………」

唯利亜が俺を見ながら溜め息を吐く。弟よ、お前もか。
で、肝心の愛燕は、というと、

「ナツ先輩」

『ん？』と俺は、次の言葉を予想しつつも愛燕のほうを見る。すると、愛燕は相変わらぬ無表情で、告げた。

「ナツ先輩、好きです。付き合ってください」

いや、無理だって知ってるだろ、お前。

我が学園 名を鳳霊学院フウレイというが は、中高一貫校である。

俺や唯利亚、愛燕は中等部の頃から通っている。九能は高等部からだ。

この学校の、他にはない（かどつかはわからないが）特徴としては、中等部から高等部へ進学するとき、通常は無条件に近い条件で進学できるはずだが、ここはそうではない。普通に全員に入試を受けさせる。しかも、規定の点数に届かなかった者は中等部からの生

徒であつても、問答無用で弾く。中高一貫校の名は、基本的には飾りである。

他にも、多彩な制服がある。男子は学ラン1種類、ブレザータイプ2種類から、女子はセーラータイプ2種類、ブレザータイプ2種類から制服を選択できる。もちろん、経済的に許せば、前種類揃えてもいい。

前にも書いたが、一日の授業が90分×4時間という大学に近い時間割というのも、ここの特色だろう。というか、ぶっちゃけ私服で登校しても何も言われない。まあ、そうするのは、基本的には、何らかの事情で制服が着られなくなった生徒だけだが。なんの理由もなしに私服で来る奴は、俺は一人しか知らない。

学力で言えば、二駅分ほど離れた真聖蝶学園とかいう馬鹿でかい学校のほうが遥かに高い。だが、全国的に見ればそこそこ高いほうだ。

スポーツのほうは、強いところもあれば言うては悪いが弱いところもある。最も有名なものには、柔道や剣道といった武道やサッカー、フェンシングなんかがある。いずれも全国大会の常連である。

位置は、俺の家から歩いて大体10分弱。周囲には特にこれといつて特別なものはない。最寄りの駅からは、急げば歩いて5分程度だ。

俺は、そんな学校の高等部の2年Bクラスに所属している。九能も同じだ。

生徒玄関で、唯利亜と愛燕と別れた俺たちは、自分たちの教室へと向かっていた。つまり、2 Bの教室に。三階にあるので、階段

を上るのが面倒だ。

校門の辺りでやっと機嫌を取り戻した九能と取り留めもないことを話しながら（俺はただ唇を動かすだけだが）、教室へ向かう。その途中、

「や、おはよう。二人とも」

やけにフランクな声が、俺たちに向けられた。

声の主は、俺たちのクラスメイトの一人、槻野つきの 那束なつか。スレンダ
ーな体つきと短くカットされた髪、中性的な顔立ちのせいで、性別
が分かりにくいのが、立派な女である。しかし、性格は大雑把だが他
人への気遣いは忘れないし、面倒見のいい姉御肌で、男子よりも女
子からの人気のほうが高い。顔がなまじ整っているせいで、こいつ
のせいでいけない道に堕ちてしまった女子生徒は、結構な数に上る。
唯利亜といい、こいつといい、なぜ俺の周りには人を墮とす才能の
ある奴ばかりなのだろうか。九能にしても、面倒を見てやった後輩
（女子）が告白してきたこともあったらしいので、正直俺はこの学
校の生徒の未来が心配だ。俺としては、この学校が同性愛者育成所
になっていくことに憂慮を憶える。

今はそうではなく。那束があいさつしてきたのだから、俺たちも
返さなければならぬ。

「おはよう、那束。今日も早いね」

俺が手を挙げただけなのに対して、九能は笑顔とともにあいさつ
を返す。

「おー、まあねー。部活の朝練があるからね。先輩が引退してから、
大変でさ」

「部長になつたんだっけ？」

「ああ、九能もだろ？」

那東は弓道部の部長、九能は演劇部の部長だ。

弓道部は、団体ではそれほど有名でもないが、個人では優秀な成績を残す人も出ている。那東もその一人だ。よくもまあその性格で礼節を重んじる武道をやる気になったなと思わんでもない。言ったことはないが。

対して、演劇部は知る人ぞ知る、と言うと大げさかもしれないが、そこそこに名の知れた部だ。特に全国規模のコンクールには大体名を残している。その中でも、九能は脚本、演出を担当している。そのなりなら、いくらでも主演を張れそうなものだが、本人が、演じるよりも裏方のほうがいい、と言っている。あれだけうまい演技ができるんだから………、いや、閑話休題。

とにかく、俺たちは、おそらくシャワーを浴びたのだろう、やけにさっぱりしている那東とともに再び教室に向かう。

那東も交えた会話を楽しみつつ、教室に着いた。九能が教室の扉を開けるとともに、いつも通り、あいさつをする。

「おはよー」

教室にいる人数は少ない。ざっと15人ほど。1クラスの半分ほどだ。そのほとんど全員が、口々に九能にあいさつを返してくれる。九能の人望がうかがえるというものだ。

俺は、そんなクラスメイトを尻目に自分の机に向かう。と、イスに座った途端、後ろから頭を軽く叩かれた。

「よっ、今日も同伴出勤か？お盛んだねえ、最近の若者は」

正直どこから突っ込んだらいいかわからなくて面倒な台詞とともに俺に絡んできたのは、友人の南坂みなみざか 宇類うるいだ。悪友と言い換えてもいい。こいつとは、愛燕と同様、小学生のころからの付き合いだ。見た目どおりの印象で、印象どおりの素行。背が高く、顔も男の俺から見てもいいとは思うのだが、気に入った女が目に入ったら、すぐに声をかけるといふ癖が災いして、運よく交際まで漕ぎ着けてもすぐに破局する。いい気味だ。イケメンは滅びろ。

と、俺は気付く。いつもこいつの隣にいる、ある男の姿が見えない。だから、俺は机に書いた。

友人とのコミュニケーションは筆談が主になるので、俺はいつもポケットにシャーペンを忍ばせている。いつもは九能を介して会話をしているのだが、今、九能はあちらの友人に捕まっている。俺とは特に接点もないので、俺が入るのは得策ではないだろう。

で、俺が書いたのは、

『あいつは?』という一言。

それを読んだ宇類は、数多くの女の子を誑かしたであろう快活な笑顔を浮かべて、

「あいつなら、今は彼女さんとよろしくやってんじやないのか?」

あいつのことを考えている宇類は本当に嬉しそうだ。聞いているこつちが笑みを浮かべてしまうくらいに。喋った内容のせいで、ぶち壊しだが。

だが、その言葉の中に聞き捨てならない単語を耳にした。

彼女?

あいつが?彼女?

そんな疑問が表情に出ていたのか、宇類は得意げに笑って教えてくれた。

「そう、あいつが、彼女だよ。まさか、と思うだろ？でも、ほんと。あいつ、元々女受けする顔だったから、今更って感じもするんだけどな。やっと、独り立ちしてくれるっつーか、なんというか。」

驚いた。まさか、と思った。まあ、確かに元々童顔だし、母性本能をくすぐられる顔だとは思っていた。だから、女子からの告白は結構あったと聞くし、あいつのことを噂する女子の姿を見かけたこともある。まあ、付き合いたいというよりは、守ってあげたいという気持ちのほうが強かったと思うが。

だが、あいつは、そのままの表現を使わせてもらえば、宇類にべったりだった。昔の出来事がきつかけらしいが、俺たちにそこまで突っ込む道理はない。俺の知らないところでなにかあったんだろう。とにかく、この二人は仲が良かった。それこそ、周囲の女子がアッな妄想をするくらいに。実際は二人ともにそういう趣味はないと知っているので、心配はしていなかったが。

だから、あいつが彼女をつくることは元より、宇類から離れることなど想像できなかった。

と、そこに、

ガラツ という扉の開く音とともに、件の少年 えびかわ 海老川 真 ま 実 こと が現れた。

その顔は、本当に高校生かと思うほどの童顔。背もどちらかといえば低いほうで、体が細すぎるわけではないが、線の細さは力を入れればすぐに折れてしまいそうなほど。色素の薄い髪はさらさらとしていて、ありとあらゆる要素が母性本能をくすぐる。男の俺ですら、守らなければ、というような義務感みたいなものが湧いてくる。女顔の童顔という時点で、こいつが他人には思えない。女装趣味はないが。

その真実は、一度教室を見渡して、そしてついに宇類の姿を捉え、

「あ！宇類！」

満面の笑みでこちらに駆け寄ってきました。それはもう、教室中がほんわかした空気に包まれるぐらいに晴れやかな笑顔で。独り立ちしたんじゃないのか。

って、待て。その後ろに女の子が一人。彼女さんじゃないのか、あれは。

って、重ね重ね悪いが、待て。あれは、まさか……………
深夜？

「？」

その真実の彼女さんと思しき女子生徒は、俺の姿を見て首を傾げた。まあ、何の用もないのに男が女を見つめていたら、不審に思うだろう。しかし、それは俺の予想を外し、かつ俺の予想通りだった。

「奈都海さんじゃないですか。このクラスだったんですね」

ああ、予想通りだった。あいつは、俺の知り合いだ。名は大原おおはら深夜。俺の友人の中で唯一と言ってもいい常識人だ。女装趣味のある弟や怪力を駆使する恋人（後で説明する）や無表情で俺に浮気を勧める後輩や同性愛を助長する女や軟派なイケメン野郎やそいつにべつたりな童顔っ子とは違い、いたって普通。普通すぎて存在感がない。黙っていると、すぐ隣にいても気付かなかったりする。

日本人標準の黒髪、黒目。身長も高くも低くもなく、スタイルも若干胸が寂しいような気もするが、それ以外はおそらく平均的だろうし、学業のほうも取り立てて言うほどのことはない。

良くも悪くも、普通の体現と言ってもいいほどに平均を貫いた女だ。ミスアベレージ。

……………まあ、別の意味で普通とは大きく逸脱した奴ではあるのだが。しかし、これが彼女？ 真実の？

どうも、この二人の繋がりが見えない。話しているところもあまり見たことがない。

と、俺が頭で疑問を巡らせていると、近くの子が深夜のもとへ走りより、

「ね、海老川さんと付き合ってるってほんと!？」

「いつから?いつから?」

「でも、大変じゃない?あんなだよ、海老川くん」

口々に深夜に質問をぶつけていく。俺らの会話を盗み聞きしてたのか。確かに真実がどんな女性とくつつくのか、というのは結構話題になっていた。余計なお世話だとは思うが、その辺りの情報に対する女子の嗅覚は目を見張るものがある。見習いたいとは思われないが。

深夜はそれらの質問に短く答えていく。意外と深夜は社交性が高い。友人というか知り合いはかなり多い。しかし、忘れていたが、深夜は後輩なんだ。このクラスの間とはほとんど面識がないのに、このクラスの者どもは、そんなこと知ったことかと遠慮なしに質問している。相変わらず自由だな、このクラスは。

だが、あの問答を聞いている限り、真実と深夜が付き合い始めたというのは本当らしい。おめでたいことだ。これで、俺の友人の中のカップルは俺たちも含めて三組目だ。……………多すぎじゃないか?

さて、そうこうしているうちに、ホームルームが始まる時間になった。生徒たちはチャイムと同時に自分の席に着き始める。

俺の隣には、九能がいる。俺が発言したとき、通訳する役が必要だからだ。なら、俺に当てるな、と言いたいがそうはいかないらしい。世の中、そう簡単には思い通りにはならない。喋れなくなったとき、これで授業寝られる！と思ったのに。

九能は、俺の隣に来られてうれしそうだ。俺もうれしいことにはうれしいのだが、授業中こっくりこっくり来たりしたとき、容赦なく後頭部をはたいてくるので、クラスメイトの中には俺が尻に敷かれていたりか思っている奴も多い。失礼な。単純な強さで言うなら俺のほうが強いのに。

ホームルームが終わり、授業が始まる。ここでは、午前2時間、午後2時間、1時間90分で計360分だ。

1時間目は地歴。特に苦手でもないのに、何の問題もなく終了。しかし、次は体育。90分間動き続けるなんて、どんな拷問だと思っかもしれないが、そんなことはない。まあ、毎日部活で走り回っている奴らにしてみれば、そうでもないかもしれんが、俺は純正の帰宅部だ。90分も走りつづけたら死んでしまう。だが、ここ鳳霊学園高等部の体育は好きなきに参加して好きなきに休むというのが基本だ。だから、やる競技も自分たちで決められる。ついでに体育教師も堂々とサボれる。

だが、疲れることに変わりはない。

次が昼休みなのがせめてもの救いか……

俺はそう思いながら、必死でボールを追いかけるクラスの女子生徒を眺めていた。さっきまでサッカーをしていて、疲れているのだ。少しぐらい目の保養をさせてもらっても罰は当たらないだろう。

ちなみに九能のほうは見ないほうがいい。テニスボールを音速に近いスピードで飛ばす奴なんぞ、見ても疲れるだけだ。見る、相手の女の子が泣きかけてるぞ。あれ？言ってることが矛盾している？

その後、宇類と真実を交えて女子を眺めて、授業を終えた。

後で九能たちに見つかって、冷たい目で見られたのは言ってもない。

かぎかつこについて、ですが。

二重の『』は奈都海の発言、つまり、声は出ておらず、唇だけを動かしたものです。

普通の「」は他の人物の発言です。

それと、話は変わりますが、何分私はこのようなことをするのは初めてですので、私の作品を読んでの感想、ご意見など書いていただければ、と思っております。

お待ちしております。

昼休み。

俺たちは屋上にいた。

俺たちというのは、俺、九能、唯利亞、愛燕、そしてもう一人。

「お姉ちゃん、はい」

「ありがとう、未来小。奈都海、どうぞ」

『ああ、悪い』

パツクのジューズを渡してくれた九能に、口だけで礼を言う。ストローをぶつ刺して、飲み始める。

と、その前に紹介しておかなければいけない人物がここにいる。

九能のことをお姉ちゃんと称した女子生徒、彼女は浄美きよみ 未来小あすかだ。

苗字が違う時点で本当の姉妹ではないことは、明らかだが、戸籍上は近い。九能は、未来小を後見人として浄美家に住んでいるのだから、実際には未来小は九能の保護者ということになる。一応家族だが、法律上の立場は年齢とは逆。それでも、未来小は九能のことを姉と呼ぶ。実際、幼い頃から未来小は九能のことを慕っていたようだし、九能もこのことには何の疑問も抱いていないらしい。傍から見ていると、正直、本物の姉妹よりも姉妹らしいとも言える。まあ、この二人は俺と同学年だし、（表向きは）九能のほうが4ヶ月だけ早く生まれた、というだけなのだが。

ついでに容姿もあまり似ていない。九能は不健康には見えない程度に白い肌に黒髪。対して未来小は健康的な適度に焼けた小麦色の肌に色素の薄い茶味がかつた髪色。ある意味正反対。

ああ、あとこの状況で誤解されても困るので説明しておく、別に未来小に使いっ走りさせていたわけじゃない。結果的にはそうなっているが、ただ、愛燕が購買派なので、ついでに買ってきてもらおうと思っただが、1人では自分の昼食も持ったまま5人分のジュースを屋上まで運ぶなど、とてもではないが、できない。そこで、助っ人に未来小が立候補したわけだ。

紹介はこれぐらいでいいだろう。俺も早く飯が食いたい。

「そっいえば、兄さん」

と、愛燕からパツクの茶を受け取った唯利亜が、話しかけてきた。俺は顔をそちらに向ける。

「今日の放課後、第二会議室に来てほしいって。会長さんから」

またか。夏休みもずっとじゃなかったか？正直面倒だ。

言うまでもないと思うが、ここで言う会長とは生徒会長のことだ。以外に思うことだろうが、俺はこの学園の執行部の一人だ。役職としては、会計委員長。ただ単に、気に入ったから、という理由で指名されてしまった。ついでに唯利亜も第三生徒副会長にされた。いや、実際は俺のほうがついでだったのだが。

入ったのは半年前。正確には九能と出会って色々あった春休みが終わり、唯利亜や愛燕の入学式も終わったその翌日。俺と唯利亜がこの学園の生徒会室とも言える第二会議室に呼び出され、生徒会長によって半ば強制的に役員にさせられてしまったのだ。

と、ここでこの学校の生徒会について説明する。

この学園の生徒会は、高等部、中等部で一つだ。つまり一つの生徒会で、中高合わせて1200人以上の生徒を統率しなければならぬ。この学園は生徒による自治が強いため、他の学校と同じような労力ではできない。生徒会長一人に全権を任せるなど、

到底できるものではない。だから、まず、執行部においていくつかの役職を分担する。その役職は、中等部統率委員会、高等部統率委員会、運動部統率委員会、文化部統率委員会、治安委員会、会計委員会、外交委員会の7つに分けられる。

前2つはそれぞれの生徒会だと思えばいい。特に中等部統率委員会には委員長以外ほとんど中等部の生徒しか入らない。

その後の2つも、名称通りだ。ただ、運動部統率委員会は運動系の行事、文化部統率委員会は文化系の行事の計画、準備、開催も一任されている。

治安委員会は、俗に言う風紀委員だと思ってくれればいい。

会計委員会も、名称通り、予算の割り振りやら臨時予算の組み込みやらという仕事がある。

外交委員会というのは、近隣の他校、あるいは他国の姉妹校との交流を中心に校外での活動を主だった仕事としている。

さらに、生徒会長は生徒会長直属として、3人の副会長と2人の書記を就けることができる。これは生徒会長の独断で指名することができる。つまり、唯利亜は現会長さんのお眼鏡に適ったために、1年にして生徒副会長とかいう大層な立場になってしまったわけだ。実際には副会長も書記もやることは、生徒会長がやるまでもない雑務を片付けるのが主だったりするから、別に誰でも良かったりする。

とはいえ、今年度の生徒会長は、例によってかなり優秀らしい。前年度までの生徒会長が手をこまねいていた問題のいくつかを解決した、と聞くし、傍で見ていると彼女の指揮はかなりの確だと思つ。彼女のアドバイスのおかげで俺も助けられたことがある。

この学園は生徒による自治力が強いので生徒会のできることは多い。問題を起こした生徒の停学、退学などの処分も、生徒会が関わる。思い出したくないのだが、あの唯利亜を襲った3人の女子生徒も、最終的には生徒会長の一声で退学が決まったというから、正直驚いた。

部活の部長及び副部長は生徒会、執行部への加入を認められてい

ないため、九能や那束は入っていない。

「奈都海？食べないの？」

と九能が声をかけてきた。弁当は開けたのに食べないのはさすがに変か。

今日は豚の生姜焼き弁当。無論、作ったのは九能。この中等部に入って給食というものがなくなってから、母親が弁当というものを作ってくれたことは一度としてなかった。九能が作ってくれるようになるまで、愛燕と同じく俺と唯利亜は購買派だった。

しかし、俺が九能と付き合い始めてすぐに、唯利亜は九能に料理を習い、自分で弁当を作るようになった。元々飲み込みの早い奴だったから、料理もすぐにそれなりのものが作れるようになった。なら俺の分も作ってくれ、と言いたいが、というか実際に言ったが、唯利亜は「九能さんがいるでしょ？」と言って作ってくれることはなかった。今もない。九能がある事情で学校に来られなくなった時は、さすがに作ってくれたが。ちなみに言うと、美味かった。九能の弁当もそれ以上に美味いぞ（と言っておかないと後が怖い）。

ただ、前にも言ったが、九能は好き嫌いが激しい。この豚肉もそのうちのひとつだ。九能は鶏肉以外の肉類が苦手で、魚介類も大概ダメ。だから、料理をする場合、自分が食べる気のない料理を作ることもある。というか、そちらのほうが多い。未来小の両親は共働きで夕飯はよく九能が作っているからだ。

とはいえ、本人は飽きにくい性格らしく、毎日同じような献立でも平気らしい。特に弁当は、ご飯、鳥の唐揚げ、卵焼き、ほうれん草のおひたし、そして温野菜がいくつか、という内容で固定されてしまっている。アクセントとしてたまにご飯にふりかけがかかっているぐらいだ。対して、俺の弁当は毎日変わる。昨日は鮭のホイール焼きがあっただし、一昨日はハンバーグが入っていた。鮭も肉ミンチも九能の苦手とする食べ物だ。ここまでされては、もはや九能には頭

が上がらない。本人曰く、好きでやっている、らしいのだが……
……、それでもだ。

俺は手を合わせて、いただきます、と口だけで言う。九能が笑顔で「どうぞ」と言ってくれる。その後で九能も食べ始める。唯利亜は自分の弁当に箸を向け、愛燕と未来小は購買で買ったパンにかぶりつく。

と、少し食べ進めたところで、

「奈都海くん」

俺のことをくん付けで呼ぶ人物は、かなり限られる。ここでは未来小だけだ。友人によると、何でも俺にくんを付けて呼ぶのは、かなり違和感があるらしい。わけが分からん。

それはともかく、俺は『ん？』と未来小に視線を向ける。

「最近、お姉ちゃんはどう？」

俺は首を傾げる。どうって何なのだろう？九能自身のことなのか、それとも九能と俺の関係についてだろうか。どっちにしろ、大して面白いことはないぞ。というかなぜに俺に訊く？

九能も「それ、本人のいるところで他人に訊く？普通……」と呟いているが、未来小はそれを黙殺。九能もそれ以上何も言ってこないし、俺も未来小の質問のほうに気になるので黙っておく。

と、怪訝な顔をする俺に気付いたのか、未来小が、

「じゃあ………お姉ちゃんとは、もうやった？」

と言い直してくれた。

何を？と訊くまでもない。

この手の省略に弱い愛燕は首を傾げているが、唯利亜は顔を赤ら

めているし、九能も箸を止めて固まっている。未来小が言わんとしている事が分かっている証拠だ。が、すぐに九能は正気に戻り、

「ちよっ……未来小！？食事中に何訊いてるの!？」

九能よ、突っ込むべきはそこじゃない。なら、食事中でなければいいのか、ということになってしまっ。それに気付けないほど狼狽しているのが、俺にもわかるから何も言わないが。

俺としても、その質問はご遠慮願いたい。食事中ってこともあるし、何より華の女子高生が男のいるところで言うことじゃないだろう。俺もあまり答えたくないし。それにこの屋上にいるのは俺たちだけではない。この季節だから、人は案外多い。そういう周囲に聞かれたらという危惧はないのだろうか、こいつには。

そう思っのだが、

「ね、どうなの？YesかNoで答えてくれればいいからさ」

俺は喋れないから、そういう手法で来たのだろう。これなら首を縦に振るか横に振るかでわかるから。友人たちも、便利だからこういう方法をとることがあるが、今はただただ面倒なだけだ。

さて、どうしようか。俺はこういう時の対処法はわからない。姉である九能のほう詳しいんじゃないか、と思って九能のほうへ視線を向ける。が、九能は首を横に振るだけ。………詰んだか。

というわけで、俺は真実を教えることにした。

俺は首を横に振った。

「ええー!?まだなのお!?!」

ええい、うるさい。何が悪い。

「だって、もう付き合って半年でしょ?なんでまだ……。奥手すぎるよ、奈都海くん」

奥手で悪かったな。どうせ、俺は根性なしのヘタレだよ。

まあ、実際のところは何回かしてほしい、と言われていたのだが、俺の覚悟が決まらない、ということと遠慮させてもらっていた。逃げている、とか言うな。下手したら将来が決まることだってあるんだぞ。九能だけじゃない、他ならない俺の未来まで、一時の欲望で狂わされてたまるか。

まあ、これで一応難は逃れたか、と思っていたその矢先、

「でも、キスは結構見境なくやってるよね」

と、限りなくどうでもいい、余計なことを喋ってくれたのはご存知、さつきまでこの事態を静観していた弟の唯利亚だ。ああ、ほら、案の定目をキラキラさせながらこちらを見つめている腐った女子高生が一名。こういうのを腐女子というんだっか?あれ、違ったっけ?

さらにもう一人。

「そういえば。以前なんかは、何の躊躇いもなく路上で九能さんとキスしていましたよね?ナツ先輩?」

なんでこいつらは、こども余計なことばかり憶えていて、しかもそれを最悪のタイミングでカミングアウトしやがりますか。これが

根も葉もない嘘なら普通に否定できるのに、完全無欠の事実をここで言うのか。

というか、愛燕。お前、まだよく状況が理解できてないだろ。多分、楽しそうだから、とかいう理由でそんなこと言っただろ、お前は。

弁解させてもらつと、愛燕の言ったことは、事實は事實だが別にしたくてしたわけじゃない。待ち合わせ場所で待っていた九能がナンプアされているところに、ちょうど俺が到着して彼氏付きであることを九能が説明していると、なら証拠を見せろということになったのだ。まあ、その彼氏が、現れてから一言も喋らないのは確かに不審だろうな。九能が、喋れないということの説明していたはずだが、えてしてああいう輩は理屈が通じるものではない。だから、証拠としてキスを試してみせたのだ。

その時は二人きりのデートではなく、唯利亞や愛燕も交えて遊びに行くというものだったので、もちろん、こいつらはその現場を見ていた。というか、唯利亞や愛燕を連れていたから、九能の恋人である、と信じられなかったのではないだろうか。

って、俺がここで語つてもしょうがない。九能に言ってもらわないと、読唇術の使えない未来小には伝わらない。

のだが、

「ああ……うう……」

と、唯一の救いたる我が恋人は顔を真っ赤にしながら俯いていた。駄目だ。こうなった九能は、しばらく再起不能だ。しかし、通訳できるのが、ここには九能と唯利亞しかいないし、唯利亞は正しく通訳してくれるかどうか怪しい。

……

一回詰んだと思ったから、開き直つて答えたら、それが掘った墓穴をさらに深くして抜け出せなくしてしまいました。掘ったのは、

俺ではなく唯利亜と愛燕だけだ。あ、いや、そういう意味の掘ったではなく。

さて、今度こそどうしよう……………
と思っていたとき、

「あー、面白かった！」

と未来小のからかいタイム終了。

未来小はよく、こうして九能をからかって楽しんでいる。それ自体はべつにいいのだが、それに俺を巻き込むのはやめてほしい。こいつの場合、どこまでが本気なのかわからないから対応に困る。今回はわかりやすかったが、内容が内容なだけに対処がしづらい。

だが、この未来小の一言で、唯利亜も愛燕も、何事もなかったかのように昼食の残りを片付けにかかった。九能も、まだ顔が赤いものの溜め息を吐きつつ食事を再開する。

ま、これが俺たちのいつもの昼食光景だ。

そう、いつもの……………だ。

「……………で？どつよ？首尾は」

「うん、順調だね。久宮がしくじらなければ」

「そーかい。んじゃ、行きますか」

「あ、久宮くん、待って。今は止めたほうがいいのかも」

「ん？ああ、そうだね」

「あ？なんでだよ。今が絶好のタイミングだろうがよ」

「……………あれが？」

「よく見ようよ、久宮。あの状況で突っ込んだら、絶対殺されるよ」
「？」

「上等オー！殺されると言われて黙っている奴は男じゃねえー！！」

「あ、じゃあ僕は男ではないんだね。結構傷つくよ、それ」

「……………行っちゃったよ」

「むしろ、逝っちゃったよね、あれ」

「大丈夫かな……」

「大丈夫ではないね、絶対。今のうちに咲ちゃんを呼んでおこうかな」

「もういいんじゃない？あれは殺しても死なないタイプよ。それよりも始末書かされるあたしの身にもなってみてよ。しかもあれじゃ、絶対、説教長いよ？」

「ご愁傷様です、としか言えないね。少佐」

「……階級、交換しない？」

「2階級特進は魅力的だけど、今は丁重にお断りさせてもらおうよ」

「提案したのは魅戈なのに……」

「採用したのは少佐だけどね、この作戦」

「作戦って言うていいの？これ」

「一応は。作戦行動中だから、何買っても経費で落ちるよ？なんか買っつ？」

「……いい……」

「少し悩んだね」

「はあ……」

「それは僕の発言に対する溜め息？それともこの状況に対する溜め息？」

「両方よ……」

「お、帰ってきたよ」

「え？」

「標的付で」

「はあ……」

S i l e n t L y r i c - 3 - 昼休み (後書き)

いつ本題に入れるのか、私にもまだわかりません……

それから、2つの授業を終えて、放課後。

俺と唯利亜は、特別教室棟の一階にある第二会議室に向かっている。ちなみに、第一会議室は教員棟の二階だ。第二会議室は生徒会のための会議室である。

九能は授業が終わると、すぐに部活へ向かってしまった。俺に一言ぐらいあってもいいのに。一応、彼氏ですよ？

それはさておき、件の会議室に着いたわけだが……。この会議室の扉を開けるのは、さすがに若干の勇気が要る。あの面子の中に入っていくのだ。少しくらい心の準備ぐらい

「あら、来てたのね。何してるの？」

……会長、空気は読むためにあるんですよ、知ってました？

とまあ、この読めるはずのない空気を読まずに扉の向こうから現れた方が何を隠そう、この我らが学園の生徒会長、後朱雀（しんすけ） 沙夢濡（さむぬ） 様だ。どっかの救世主みたいな名前みたい、というかそのものだが、その名に違わず誰もが羨むような容姿と頭脳、そして運動神経を持つていらっしやる。ジャンヌなどという大層な名を冠しておきながら、名前負けしていないのは正直すごいと思う。いや、皮肉でもなんでもなく。ただし、様をつけたのは皮肉だ。別に趣味とか、そういうことではない。決して。

この容姿だから、支持者は多いと聞くが、俺はどちらかといえば苦手な部類だ。理由を聞かれてもありません。困る。

だが、同時に感謝もしている。あの事件の後、九能と愛燕、未来小、そして俺たちの母親と少数の友人以外の女性にはほとんど近づ

こうとしなかった唯利亜を今の状態まで持ち直させたのは、この会長の尽力があつてこそだ。荒療治ではあつたが、会長がいなければ唯利亜がここまで立ち直れたかどうかは激しく怪しい。たった3ヶ月弱で今では普通に会話できるまでに回復したのだから。

だから、その影響もあつてか、唯利亜は会長を敬遠するどころかむしろ慕っている。その証拠に、早速唯利亜は会長と談笑に入っている。楽しそうで何よりですね、はい。

そうして会議室に入っていく二人に俺も追従する。そこにいたのは、俺と唯利亜、会長を除いて5人の執行部。全員長机の前に座っているから、手前から紹介していこう。

一番手前にいるのが、文化部統率委員会委員長の小野原 礼香さん。3年だ。トレードマークというか、特徴は無表情。小柄であるということも含めて、ある意味愛燕に似ている。

その次が、外交委員会委員長の山科 由宇也。こちらは2年。生徒会では数少ない俺と同じ2年生だ。

その奥が、第一書記の片桐 亜美さん。3年だ。名前が母親と同じ漢字なので、勝手に親近感とともに苦手意識を抱いている。俺の母親は“つぐみ”と読む。

次が、運動部統率委員会委員長の棗 新さん。こちらも3年。スポーツマン然とした風貌で、実際も役職もスポーツに精通している。

そして最後が、第一副会長の後朱雀 竜樹さんで、3年。苗字で何かしらの関係はあるということは察せられると思うが、生徒会長とは従姉弟の関係にある。

この他に、5人の生徒会役員がいるが、ここには来ていないらし

い。その5人は全員が高等部の3年。つまり、この生徒会の中で、2年は俺と由宇也の2人だけ、1年に至っては唯利亜の1人だけである。基本的に2年は各委員会の副委員長になり、任期が過ぎた後、次の生徒会で委員長に繰り上がる、というのが通例だ。俺と由宇也の場合、その委員長になるはずの人が委員長になるのを拒否したために空いたところに入っただけ。このこと自体は特に珍しくはないらしい。

だが、入ってから聞いた話だが、1年で生徒会に入った生徒は、今までも前例がないらしい。

その最初の前例となった我が弟は、この生徒会でも人気者である。というか、マスコットである。特に会長にはいつも愛でられている。抱きつかれたり、頭を撫でられたり。唯利亜はそれをされると、嬉しそうに顔を綻ばせる。……別に妬いてなんかいませんよ？

「ああ、やっと来てくれた。奈都海、こっち、こっち」

そう俺を呼んでくれたのは、由宇也だ。2年にして外交委員長に抜擢された。実際、成績もいいようだし、生徒会の仕事もほとんど独力でこなしている。俺とともに生徒会で唯二の2年なので、必然的に仲良くなった。

「幣原兄妹も呼んだんだ。別に必要ないような気がするけど……。ま、奈都海くんが見られたからいいかな？」

と、嬉しいと言っていいかどうか判断に困る発言をしてくれたのは、片桐 亜美さん。時々こういうことを言ってくれるのだが、普段の行動を見る限り、俺に気があるようには到底思えない。からかって楽しんでいる、と言われたほうが納得できる。十中八九、そうだと思うが。俺には、そこまで自分に自身があるわけでもないし、そもそも俺には恋人がいる。本気だろうとなかろうと、あまり関係

はない。……と言ったら、その恋人である九能に殴られた。何で？
あ、あとなみに、亜美さん（生徒会役員のことは名前で呼べと言われた。俺は実際に呼ぶわけではないが）は、未来小に次いで俺の名前にくんを付けて呼ぶ人物の一人だ。

まあ、というふうに俺たちに反応してくれたのは、この2人だけ。
小野原 礼香さんは、いつも通りに読書をしていてこちらに目すら向けてはくれない。棗 新さんは、机に突っ伏して寝ているし、後朱雀 竜樹さんは、書類に目を通すのに忙しそうだ。

この中で俺がまともに話せるのが、由宇也だけだ。学年とか関係なく、性格的に。

わざわざ筆談で話すようなこともないので、由宇也の話に耳を傾けていると、

「さ、それじゃあ、本日の本題に入りましょうか」

と一通り唯利亚を愛でた会長が、切り出す。

その鶴の一声で、礼香さんは本を閉じ、新さんはむくりと起き上がり、竜樹さんは手と目を止めて会長を見る。

俺と由宇也も雑談をやめて、会長へ視線を移す。ようやく会長から開放された唯利亚も、手近の折りたたみイスを適当な場所に広げて座る。

その俺たちの反応を見た会長は、

「で、まあ、今日の議題は言うまでもないと思うけど……」

と言いながら背後にあったホワイトボードになにやら書き込んでいく。

鳳秋祭、と。

「あゝ、もうそんな季節だったか。鳳秋祭……ね」

気だるそうにそれに応じたのは、新さん。それでも少し楽しそうなのは、しょうがないだろう。他の学校でいう学園祭だ。だが、俺たちにとっては今更言うほど、感慨深いものでもない。

「なーに言ってるの。鳳秋祭については、夏休みのころから話し合ってたんでしょ」

「知るかよ。俺はサボってたんだから」

そう、亜美さんの言うとおり、俺たちはこのことについて夏休みに入ってすぐのころからずっと、毎日という訳ではないが話し合ってきた。特に、これには、裏方ではあるが、2年である俺と由宇也の役職が大きく関わってくる。まあ、表で活躍するはずの新さんが、夏休み中ずっと学校に来なかつたわけだが。受験生なのに、大丈夫なんだろうか。というか、それを堂々と言うのはどうなんだろうか。そして、それに対して何も突っ込まないこの生徒会もどうなんだろうか。

まあ、それは置いておいて。

鳳秋祭、つまり学園祭といえば、模擬店である（かどうかは個々人で変わるだろうが）。クラスでもいいし、部活で個別に、あるいはそれらが合同で行ってもいい。何より、その売上げが今後のクラス費や部費になるのは大きい。だからこそ俺の出番というわけだ。この学校、比較的生徒の自治権が強い、とは言っても、さすがに模擬店の売り上げを個人で持って帰ってもらっては困る。俺は

そういうことを防ぐために、売り上げの改竄や虚偽報告をしないよう呼びかけ、万が一された場合、それを調査しなければならない。どの道、すべての模擬店についてそういう調査を行うのだが、事前に行く売り上げ予想金額と大きく食い違っている場合は特に入念にチェックする。ちなみに、その売り上げ予想金額を設定するのは、プロの方々である。何のプロかは知らない。というか、いつそんな調査をするのかもわからない。一般の生徒には知られていないし、俺も会計委員長になるまで知らなかった。

また、学園祭はその学校の生徒だけではない、他校あるいは地域の方々にも来てもらって楽しんでもらわなければならない。それは外交委員会たる由宇也の仕事である。ただ、これは外交委員会だけではなく、治安委員会との連携が必要になってくる。学外からの来客が問題を起こした場合、鳳霊学園のルールを適用するのは難しい。学園祭というのは、誰もがテンションが上がり、判断力が鈍る期間でもある。その中で彼らは冷静な思考力を保っておかなければならない。俺はどちらかと言えば祭りが終わってからの仕事が主なので、学園祭中は思いつきり遊べる。というか、遊ぶ。でなければもったいない。

あと、まだ決まっていないが、生徒会企画とかいうものもあるらしい。今回はそれも決めるためらしいが、5人もいないのでは決めようにも決められないだろう。

9月になったとはいえ、まだまだ強い陽光が部屋に差し込んでく

る。クーラーが効いてはいるが、直射日光に当たっていたら、そりや暑い。俺の隣で涼しい顔でいられる由宇也が不思議でならない。

「でね、今日はそろそろ本格的に模擬店について話しておきたいんだけど」

会長は、それぞれの部活の統率委員長である礼香さんと新さんに目を向ける。

「部活がやる模擬店については、2人に一任していいかしら？」

「ん」

「ああ、別にいいぞ」

2人が頷いたのを見て、今度は竜樹さんに目を遣る。そうすると、竜樹さんはメモ帳になにやら書き込んでいく。

「じゃ、2人は今ここで部長会の日取りなんかを話し合って決めてしまつて。予算もその後ね。文化祭では、模擬店に関しては運動部も文化部も関係ないから負担も五分五分に分けて……、あと、部長会は来週でいいけど、水曜日までにね。で、後は……」

会長は2人の了承の声を聞く前に、俺たちに顔を向ける。

「2年の2人にとっては、一任はちょっと厳しいかな。初めての大事な仕事だしね。私が色々サポートしていくから、わからないところがあつたら、訊いて？」

「はい」

俺は頷くだけ。

「あと、2人には私の書記が副会長を1人ぐらいなら付けてもいいんだけど……どうする？」

書記と副会長はあんだのではなく、生徒会ですよ、と突っ込みたかったが、俺は喋れないし、何より実際のところ彼ら彼女らは会長の私設秘書みたいなものだ。

しかし、会長の申し出は有り難い。今の書記と副会長は、唯利亜以外全員が1年以上生徒会に所属していた経験がある。その内の1人を付けてもらえるのなら、願ってもないことだ。

だが、由宇也は、

「あ、あの、じゃあ、俺は唯利亜さんがいいんですけど……」

なぬ？あの仕事には何の役にも立たない唯利亜を？せいぜい雑務を片付けさせるのが関の山だぞ。名指しされた唯利亜自身も驚きの表情で由宇也を見ている。

「どうして？唯利亜ちゃんは1年よ？サポートにはならないと思うけど」

その通りだ。唯利亜を付けるぐらいなら、もっと優秀な先輩方がいるだろう。俺はそう思うのだが、由宇也は引き下がらない。

「俺は、この仕事にも結構慣れてきたんで、片手間程度に会長のサポートがあれば大丈夫です。それより、唯利亜さんはまだ入ったばかりでまともな仕事もしてないと思うので、なるべく生徒会の職務にも慣れておいたほうがいいと思うんです。これから先も生徒会に

残るでしょうし」

それはわからん。こいつは結構楽なほうに流されやすいタイプだから、生徒会が厳しかったりすると辞める可能性も高い。1年からいる、となると生徒会長になる可能性も高いだろうし。だが、まあ、あいつの兄という立場で言わせてもらえば、由宇也の申し出は嬉しいことでもある。まだ入って3ヶ月もない（入れ、と言われたのは4月だが、実際に入ったのは6月の終わりごろだった。あの事件のせいで色々と問題もあったが）唯利亜にとってもプラスになることだろう。唯一気にかかることは、由宇也に苦勞をかけてしまう、ということだが、ここは友人のよしみでチャラにさせてもらおう。

「ううん……、そこまで言うならそうしましょう。ただ、これ以上は私のほうから人員は回せないわよ？こっちはこっちで忙しいしね。いい？」

「はい。必要なら自分で調達しますから」

と、由宇也は人好きのする笑みで答える。こいつの笑顔はなかなか好感が持てる。笑えば、もてそうなものなのに、こいつはなかなか笑顔を見せてくれない。無表情というわけではなくて、ただ笑わないだけだ。愛想笑いならいくらでもするんだが、自然な笑顔が貴重な男だ、こいつは。

とはいえ、だ。唯利亜の育成係なら、3年のほうがいい。経験もあるし、由宇也は自分の仕事があるし。まあ、そこは突っ込まないようにしよう。下手したら俺にお鉢が回ってくることになりかねん。

「それで？ナツはどうするの？」

違和感バリバリだと思った人は、それで正解だ。俺のことをこん

な風に呼ぶのは、くん付けで呼ぶ人よりも少ない。てか、これが、俺が会長のことを苦手だとする理由の一つだ。あの母親と同じ呼び方なんだ。本能的な苦手意識が俺の中に残っている。

だが、どうする、というのは俺に付けてくれるサポートの方のことだろう。なら、と俺は手近にあった不要だろっプリントの裏に、こう書いた。

御几川 涼右、と。

「涼、ね。じゃあ、そういう風に連絡しておくから。一応、自分でも言っておいてね」

俺は頷く。というか元々そのつもりだ。

俺がサポートに選ばせてもらった御几川みきがわ 涼右りょうゆうさんは、この生徒会の第二副会長だ。この人は結構気さくで、俺も嫌いではない。のだが、よく俺をからかってくるので、あまり好きにはなれない。ただ、どうせ一緒に仕事するなら、同姓のほうが気が楽だし、竜樹さんは悪い人ではないのだが、どうにも厳しいというか堅いイメージが拭えないので、俺とは相性が合わないような気がする。となれば消去法で涼右さんになる。ちなみに、これで分かると思うが、第二書記は女性の人だ。

と、その時、会議室の扉が開き、

「す、すいません、遅れました」

と、謝罪しながら入ってきたのは、生徒会治安委員会委員長の常と盤柄きわづか 鈴音すずねさん。

まあ、印象通り、拳措は楚々としていて、普通に立っているだけだと深窓の令嬢みたいな人だが、実は柔道、剣道、弓道、薙刀と結構な数の武道を極めていらっしやる武道少女である。どれも2段以上は取っているらしい。このことを知らずに、治安委員長である彼

女に歯向かって返り討ちにされた哀れな方々は数知れず。

見た目からしても、筋肉があるようには見えないのだが、鈴音さん曰く筋肉の使い方さえ分かっていたら、最小限で充分だと言う。んなわけがない、と思っていたのだが、なら、と鈴音さんに頼まれて（ここ大事）組み手をしたことがある。その時の鈴音さんの強さといったら、もう、筆舌に尽くし難い。別に俺の醜態をここで晒したくない、とかそういうことではない。断じて、ない。

さて、治安委員長である鈴音さんが来たからには、由宇也は本格的に話し合いができるわけだが……俺は何をすればいいのでしょうか？

部活統率委員会の二人も話し合いに入っている。始めてしまえばちゃんと真面目に仕事するのになあ、新さんは。

そこで、手持ち無沙汰にしていた俺に声をかける方が一人。会長である。

「ナツは帰ってもいいわよ。ナツの仕事が本格的に始まるのは、来週からだから」

いや、待て。じゃあ、俺を呼んだのは何のためだ。

俺はいつも持ち歩いているメモ帳に、そう書いて会長に見せる。すると、

「だって、ナツが一緒じゃないと、唯利亞ちゃんが来てくれないじゃない。ねえ？」

いや、ねえ？って言われても。唯利亞はそこまでブラコンではありませんよ？

しかし、

「兄さん……帰っちゃうの……？」

なぜ、そんな悲しそうな目で俺を見る。やめろ、誤解される。その演技のせいでお前のファンに俺はどんな目で見られているのか知っているのか、お前は。

「奈都海さん、妹を悲しませちゃいけませんよ？」

鈴音さんが誤解してしまったではないか。演技でもそういうことをするのはやめてくれ。そう俺が口で唯利亜に言つと、

「ん、あれ？ばれちゃった？結構自身あつただけだなー」

当たり前だ。何年お前の兄をしていると思つている。

でも、今度は鈴音さんが慈しむような目で唯利亜を見ている。あれ？しかも、心なしか礼香さんの視線が冷たい？いや、礼香さんの視線に感情がこもっていないのはいつものことだが、今日は、なんというかむしろ冷たい感情がひしひしと伝わってくる。視線が痛いってこういうことを言うのか。で、新さんはなぜか笑いを堪えている。一番わからないのが何気にこの人だな。話し合いはどうしました？

「でも、別に居てもいいわよ。暇でしょうけど」

でしょうね。そんなところにいつまでも居られるほど、俺は我慢強くありませんよ。

というわけで、俺は会長と由宇也に、唯利亜を頼む的な旨を伝えると、この会議室をあとにした。

会議室を出るとき、唯利亜が俺を、独りで置いていかれる子犬のような目で見つめていた気がするが、演技だろう。頼むから変なフラグを立てないでくれ。お前をそんなブラコンに育てた覚えはないぞ。

唯利亜を育てたのは、母親だから当然だが。……ああ、そうか、だからか？

「あれ、奈都海。早かったね」

俺が校舎を出て校門に向かう途中、九能がいた。なぜ、お前がいる、九能。部活に行ったんじゃないのか。

「まあね、行ったけど……。まあよくあることだよ」

ああ、なるほど。俺はこいつの言葉と表情で得心がいった。つまり、

『また、部員と喧嘩したのか』

「また、とか言わないでよ。結構致命的なんだからね。この時期の喧嘩は」

そういえば演劇部はたしか鳳秋祭でなんとかいう劇を披露するんだっただな。で、お前はその脚本担当、と。今回は、演出は他の部員に任せるとか言ってたような。

『しかし、なんでまた、お前一人がここに？』

いつもなら、ここに誰かしら1、2人ほど演劇部員がいるものなのだが。まさかその子達と喧嘩したのか。

「うん……今回はちょっと、ね。出演者VS脚本家みたいな構図でさ。私、一人。つまり孤立無援。参っちゃったよ、ほんと」

かなりへビーだろ、それは。つーか、完全に九能は無理している。言葉はあえて軽いものを選んでるようだが、顔を見なくてもそれがわかるぐらいに声が震えている。よほどひどい喧嘩だったんだろ。う。

が、ここで声をかけるのはタブーだ。そんなことをしたら、それがどんな内容であっても絶対に、こいつは泣く。それがどんな種類の涙かは別として、こいつは無駄にプライドが高いから、ここで泣くことはこいつ自身が許さないだろう。泣いた後で自分を責めて勝手に自滅する。かつてそういう事態を見た俺としては、それだけは避けたい。

それに、自分勝手なことを言わせてもらえば、俺としてもここで泣かれたら、困る。周囲からなんと思われるかという危惧も当然だが、それ以上に九能の涙を他人に見られたくはない。……ああ、惚気だよ、悪いか。

とりあえず、ここから移動しよう。いつまでも校門の前には、他の生徒たちの邪魔になる。俺は、そう促した。しかし、九能は動こうとしない。思った以上にダメージが大きかったのか、とも思っ

だが、九能は、

「ね、今日……………あんたの家、行ってもいい？」

と、俯き気味に言った。

俺は、少し驚いたが、すぐに頷いて九能の手を握って歩き出した。

「ファントムでも出れば、彼女を呼ばなきゃいけないけど……そんなすぐに出てこられても困るしね。もう、あんなことは人生で1度だけでいいよ」

「あ、じゃあ、クノーちゃんのとこ、私行ってもいいー?」

「それは少佐の許可が必要だね。一応彼女は将官だし。ただじゃ会わせてくれないよ」

「んー。じゃー行ってくるー」

「はい、行ってらっしゃい」

「ちょっと、尊何さん!?!なに普通に見送ってるんですか!」

「いいでしょ、別に。誰も困らないし。困るとしたら、魅戈ちゃん本人ぐらいだよ」

「そんな短絡的な思考でいいんですか!?!もうちょっといろんな可能性を考えましょうよ!魅戈さんが准将への会見申し込みだけで終わるはずないでしょう!?!」

「無駄だつてば。魅戈ちゃんが主導している時点で、もう、ろくな事にはならないから。僕らの考える可能性なんか軽く凌駕してくるのが、魅戈ちゃんクオリティだからね」

「それって、完全に諦めてますよねえ!?!」

「まあね。だって、諦めないと魅戈ちゃんとはやっていけないから」

「私は、もう諦めることすら諦めなきゃいけない状況なんですけど！？」

「まだ、14歳でしょ、君。そんな不毛な突っ込みばかりしてないで、学校行ったら？楽しいよ？」

「突っ込みさせてんのは、あんたらでしょーが！！それにいまさら学校なんて、どの口が言うんですか！？」

「言葉遣い、荒くなってるとよ、咲ちゃん。それにもう、手遅れ、時間切れだよ」

「え……」

「いえーいっ！クノーちゃん奇襲作戦開始ー！！あ、咲ちゃん。これからクノーちゃんを奇襲することになりましたっ。準備をっ！」

「は……はあああああ

っ！？」

S i l e n t L y r i c - 4 - いざ、生徒会へ (後書き)

一気にキャラが増えました(最後のあれも含めて)。
次に出るときまで憶えていられるでしょうか……

初めて彼女を自分の家に招くというのは、かなり緊張するものだ。他の奴はどうかわからないが、少なくとも俺はそうだった。

だが、今現在、九能に関しては、こいつはもう幾度となく俺の家に来ている。それだけでなく、夕飯と一緒に食べ、一泊することもある。俺が一人暮らしならまだしも、俺は普通に家族と一緒に住んでいるのに九能は遠慮などせず、まさに勝手知ったる他人の家という感じで一週間に二、三度ほど家に来ては俺の家族との交流を楽しんでいる。むしろ、こいつもこの家族の一員でいいのではないだろうか。九能と両親が会話していると、疎外感を感じることが間々ある。なんだろう、これではどっちが本当の家族かわからない。

とはいえ、夕飯を食べ終わったらほとんどの時間を俺の部屋で過ごしている。俺との会話に興じることが多いが、お互いどちらかというと一人を好むタイプだ。二人で揃って黙って雑誌を読んでいたりと、どちらかあるいは両方が学園から出された課題をしていたり、と様々だ。たまに唯利亜の部屋にゲームをしに行くこともある。あいつはいわゆるゲーマーと呼ばれる人種だ。あいつの部屋の本棚はゲームのソフトが占めている。なら教科書なんかはどこに？と思いついてみたが、どうやらほとんどを学園のほうに置いているらしい。変なところで男の部分が残っているんだな、と思ったと言われた。男の女への幻想って結構多いんだなあ、と思わされた瞬間でもある。どうでもいいけど。

閑話休題。

今日の九能は普段の訪問とは、若干毛色が違う。

いつもは入るとき、忘れずに、お邪魔しますに相当する言葉を言
つてから入るのだが、今回はそんなことは一言も口にせず、という
か学園からここまでずっと黙ったままだったのだが、無言で家に入
ってきた。

しかも、普段はまずは家に帰って私服に着替えてからここに来るも
のなんだが、今日は学園から真っ直ぐこっちに来た。

一直線に俺の部屋に向かった九能は、そのままカバンを投げ捨て、
俺のベッドにダイブ。制服にシワが付くのも構わず、九能はそのま
ま寝始める。

いや、実際に寝たわけではない。枕に顔を埋めたまま、九能は身
動きすらしない。それだけだ。

俺は、九能に聞こえる程度に大袈裟なぐらいな音を立てて部屋の
扉を開け、また乱暴にならない程度に音を立てて閉めた。

扉の向こうですすり泣く声が聞こえたが、気づかない振りをして
一階のキッチンへ向かった。

今日の部活は、正直最悪だった。

まず、出演者との意見の不一致。これぐらいならなんとかなるが、そこに出演者同士の意見の不一致が重なると、途端に面倒なものになってくる。

三つ巴、と言ってもいいかもしれない。しかし、それは途中まで、その矛先が最も弱い勢力に向けられるのに、あまり時間は必要としなかった。この場合は脚本家である私。脚本は私一人で書いているので、実質私の味方は私一人のみ。私が標的になるのは経験から（演劇部としての経験ではなく、人間としての経験から）予想していたが、

その時の言葉は、私の心に重く暗い影を残した。

彼ら彼女らも本心から言ったわけではないだろうが、口にできたということは少なくともそういう思いが心のどこかにあるということなのだろう。

そして、それに対して私が言ったことも私がこうなることに起因していた。全くもって大人気ない。なぜあんなことを口にしてしまったのかという自己嫌悪と後悔が交互に、時には同時に私の心を襲う。こんなことで彼らは本当に私に付いてきてくれるだろうか。先輩方が言ったように、私が演劇部を引っ張っていけるだろうか？ 万事順調だとは最初から思っていない。しかし、部長に就任してすぐこれでは、今後が危ぶまれるというものだろう。先輩方が見れば、幻滅するのではないか？ 自分だけならまだいい。しかし、他の部員は？ 私のせいで部員全員の評価が下がるのは、どんな理由があっても我慢できない。たとえ、それが正当な評価であったとしても。ただのわがままだが、私はどうしてもそういう思考しかできない。演劇部以外、そうあの部隊でも同様だ。私のせいで部下の評価が下がるのは、それがどんなに正当でどんな正論であっても、私は許せない。いや、許さない。それが私のせいだというのなら、私自身を許さない。子供じみた偽善だと言われてもしょうがないだろう。しかし、私はそういう生き方しかできない。昔から。

その自分の生き方から来るもどかしさ、それから来る自分への苛立ちを部員にぶつけてしまった。完全な八つ当たり。

しかも、私はそこから逃げてきた。言いたいことだけ言って、反論する時間も考えさせる余裕も与えずに出てきてしまった。そこで指摘されることが怖かった。それは八つ当たりだと、それは逆に自分を貶める行為だと。私は怖かった。そこで部員の信用を失うことを。

結局、部員のためと言いながら、私は保身に走っていた。偽善ですらない、自分勝手な言い訳で自分の本心を塗り固めて私自身を欺いて、欺こうとして結局騙しきれなかった。自分も部員も。私が部屋を去る直前、部員たちが私に見せた表情は私の怖れていたことに気付いた、そのことを悟った顔だった。言葉にはできなくても、感覚的に気付いていた。私の欺瞞に。私の不完全な偽善に。

だから、逃げた。いや、逃げるというのもおこがましい。私はそこから目を逸らした、それを避けた、そこを知覚するのを怖れた。ただ、思考を放棄してそこに私という存在を置かないことだけを考えた。

奈都海も、私に気を使ってこの部屋から出て行った。わざわざ私に出て行くことを知らせるために大袈裟な音を立てながら。恋人にまでこんなことをさせてしまうのは、その片割れとして失格ではないだろうか。

彼らは今、何をしているのだろうか。私の言った通り、私なしで演技の練習をしているのだろうか。それはそれでいいのかもしれない。私がいなくても機能するのなら、そちらのほうがマシだ。私がいけないほうがいいというのなら、私は今すぐにでも演劇部を辞めるべきなのだろう。もっと部長にふさわしい人は、私の知る限りでもまだたくさんいる。

そんな風に、思考のドツボに嵌りそうになっていたとき、

「……………」

携帯がメールの受信を知らせるために鳴った。

まさか部員ではないだろう、と思って携帯を開く。

私のその予想は当たっていて、同時に外れていた。

それは今日、所用で部活に出ていなかった先輩からのメール。うちの学園では先輩が引退する前に部長の引継ぎは行われる。だから、先輩が、私が出て行った後に部活に来ていてもおかしくはない。そこで話を聞いたのかもしれない。

しかし、それは彼のメッセージだけではなかった。

部員一人ひとりのメッセージもそれぞれ一言ずつ書かれていた。

最初、私にはこれがなんなのかわからなかった。しかし、理解した瞬間、私の中の何かが決壊した。今まで私の中で抑制していた何か。それが大きな音を立てて崩れた。

今度こそ、私は久しぶりに、本気で声を上げて泣いた。

「おいこら奈都海九能ちゃんになにしやがったええこら」

いきなり腕を掴まれたと思ったら、俺の母親たる亜美^{つぐみ}さんは句読点を打つ暇すらないほどの早口でそう捲くし立てた。えらく物騒な口調なので、少し狼狽しながらも俺はどういうことかわからないという表情で亜美さんを見返す。というか、亜美さんが俺を奈都海と呼ぶときはよつぽど頭に来ている証拠だ。

ちなみに余談だが、俺は、母親も父親も祖父母もあらゆる親戚もおよそ苗字が同じ人物を呼ぶときはその人の名前に敬称をつけて呼ぶ。特に理由はない。俺が覚えている限りでは小学生のときからこうだ。

まあ、とにかく。

俺には本当に心当たりがないのに、文字にすると案外読みにくい言い方で問い詰められても正直困る。なにせ、心当たりがない。首を傾げる以外に何ができるといふのだろうか？

「さつき九能ちゃん、洗面所で見ただけど目の辺り腫れてたよ。泣かせただろ、あんた」

なに、九能の奴もう大丈夫なのか。と思いつつ時計を見ると、あれから30分経っていた。そりゃ泣くのにも飽きるか。

しかし、亜美さんはその俺の行動をどう勘違いしたのか、切れ長

の目をさらに細くして、

「おい……あたし、女だけは泣かすなつつつたよなあ？」

いや、口調がおかしいことになってる。それに痛い。というか苦しい。俺の制服はブレザータイプだから、ネクタイを掴まれているわけだが、そのせいで首が絞まっている。かなり絶妙な力加減。死なない程度の絞め方。まあ、どんな力でも長時間首を絞めていたらいつか死んでしまうわけだが。というか、何という力だ。なぜ一介の女流作家が180cm近い男を片手で吊るし上げてるんでしょうか。明らかに異常だろ。

それに俺が泣かせたわけではない。と弁解しても、亜美さんは「なら、慰めてきやがれ！」と俺を今度は殴るはずなので、俺は黙っておく。

「だんまりか、ああ？なんか言ってみろや、こら」

いや、だから口調、……もういいか。

というか、俺は喋れないってことをわかって言ってるんですよ、あなたは。そうですね。でなければ俺の身体を前後にガクガク揺さぶるわけがない。だってこんなことしたら、普通喋れないだろ、俺じゃなくても。

と、そこに。

「あ、亜美さん、なにしてるんですか？」

救世主、もとい九能が登場。良かった、これでこの魔手から逃れられる。

「ああ、こいつに制裁を加えてたんだよ。九能ちゃん泣かせたんだ

から当然だろ？」

と思ったのに、

「そうですか」

ええ！？そこは否定しろよ！なにナチュラルに肯定してんだよ、お前は！

「じゃ、徹底的にお願いします。じゃね、奈都海。私、部屋にいるから」

……訂正。こいつが救世主なんて間違いだ。さらなる災害をもたらすだけの悪魔。小悪魔？そんな可愛いものならどれだけ楽か。見る、こいつの笑顔。到底普通の神経持つてる奴が浮かべるような笑顔じゃないぞ。

そのまま背を向けた九能を呼び止める術は俺にはないわけで。

その後、俺は夕食の準備を一任されるといふ誠に光栄な制裁をいただきました。

女性不信になりそうです……。唯利亜ってこんな気持ちだったんだろーか。女が怖い……。

俺の作った夕食を、全員（父親以外）何のこともなく食べ終わった後。

俺と九能はいつもと同じように俺の部屋にいた。

お互い特にすることもなく、適当に世間話をしていた。

多分、だが。傍から見ると、この光景は結構異様だと思う。なにせ俺はなに一つ喋っていないのだ。それなのに九能だけで話を進めていく。まあ、読唇術が使える奴とだけできる芸当だ。俺はただ口パクをしているだけでいい。

しかし、まあ、なんだ。良かった。端的に言うとなんかそんな感じ。あれだけ落ち込んでいたのに、いつの間にか九能は立ち直っていた。自分の中でなんとか折り合いをつけたのか、あるいは他の要因があったのか。一応、九能から、もう部員とはなんの問題もないと聞いていたので、もうあまり心配していない。

誰しもそうだと思うが、こいつには笑顔のほうが似合っている。あ のとき、部屋を出て行ったのは、九能を一人にしてやりたいという気持ちもあったが、同時にこいつの泣いている顔を見ていたくないという自分勝手な思いもあった、ということとは否めない。

ああいう場合、一人にしたほうがいいのか一緒にいてやったほうがいいのか、俺にはわからない。今回は俺の事情を優先して前者を選んでしまった。結果的にはそれでよかったわけだが、もしこの選択のせいで九能がさらに苦しむことになったら？俺は自分を許

すことができるだろうか？自信がない。

まあ、「もしかしたら」だとか「かも」なんて仮定は、今はどうでもいい。今、こいつが笑っているという事実で充分だ。

「……………奈都海？どうかしたの？」

どうやら物思いに沈んでいたらしい。九能が心配そうな表情で俺の顔を覗き込んでいた。九能の顔がここまで接近していたのに、気付いていないとは……………、しかもさっきまで心配していた相手に心配されるとは、案外、俺のほうが重症なのかもしれない。

と、また九能を置いて思考に入りかけた俺の顔をじっと見つめていた九能は、少し悪戯っぽい笑みを浮かべると、ふいに顔を近づけ

俺の唇を奪った。

別に本当に俺の唇が俺の顔からサヨナラしてしまったわけではない。当たり前だ。物理的にはなく、よく使われる比喻として、つまりキスした。それだけのことだ。だが……………

「……………ふふっ」

ふいを突かれて驚いているんだろうな、俺は。だが、二人きりのときに限れば、こいつからキスをしてくることなんぞは別に珍しくもなんともない（それはそれでどうかと思うが）。それでもいきなりされれば、驚くだろ、普通。そんなえらくおもしろそうに笑わな

くてもいいだろうに。

と心の中で突っ込んでいる俺がいる一方で、九能はなぜか俺の顔の至近距離から顔を離そうとしない。嫌な予感がする俺を余所目に九能はなだれ込むようにして俺の膝の上にのしかかってきて、そのまま俺は九能に押し倒される格好のままベッドに仰向けになる。しかも、俺の腰の辺りに馬乗りになった。あ、なんかこの後の展開、読めたぞ。

という訳で、再び顔を近づけてくる九能の肩を掴んで、とりあえず会話ができる距離（俺たちの場合、唇が見える距離）まで離す。それでも、左側だけ結ってあるサイドポニーの房が頬に当たってすぐつたいのだが。

『なにするつもりだ？』

「わかってるくせに、そんなこと言うの？」

いや、わかってるけどさ。でも、なんか、ねえ？いきなりすぎではないだろうか、とも思うわけだよ、俺は。それに、だ。

『先週、やったよな？』

「うん、やったわね。それが？」

『まだ、一週間も経ってないぞ』

「……奈都海ってほんとに性欲あるの？たまに心配になるんだけど」
『お前が強すぎるだけだ』

さて、説明が必要か。

未来小に迫られて、俺がNOと答えたあれだが、あれは真つ赤なウソだ。あそこで真実を語ると面倒なことになりそうだったので、堂々と嘘を吐かせていただいた。……………まあ、嘘を言っても面倒臭かったが。

「一週間に1回なんて少なすぎるぐらいなの。ほんと毎日やってもいいぐらいだからね？」

『それはさすがにきついからやめてくれ。身体が持たない』

九能の懲りない発言に拒否を示すと、九能は機嫌を損ねたように目を細めて、

「……………甲斐性なし」

『誰のせいだと思ってやがる、誰の』

「さあ？知らない」

男にとっては致命傷にもなりうる暴言を吐きなさった九能さんは、その原因であるにもかかわらず、堂々とおとぼけなさった。

これはさすがに怒っていいよな？どうせ怒っても状況が変わるはずはないのだが、しかし男には無駄だとわかっていてもやらねばならない時があるのである。それが、今だ。

と、意気込んでいたが、

「でも……………」

と言って、俺にしな垂れかかってくる九能を俺は、急すぎて止められなかった。その体勢のまま、九能は俺の耳元で甘ったるい声を

囁きかけてくる。しかも耳たぶを甘噛みしてきた。俺の弱点を知り尽くしている奴を相手にするのがどれだけ危ないことか、もうこうなる前に俺は悟っている。

で、それと同時に九能は自分の腰を動かし始めた。あ、やば。俺のあれが活性化し始めた。いや、俺にとっては耳を攻められるだけで危ないというのに、あれに当たってるし。止むを得まい。男なのだから。

「私、ちょっと溜まってるの。一人でやるのも限界あるんだから、こういふときくらい、付き合ってくれてもいいでしょ？」

そういうことはわざわざ言わなくてもいいだろう。なぜにそういう、一人でどうか、などと恥ずかしげもなく言えるのだろうか。

そもそも、九能に乗られた時点で俺に逃れようはないのだから、諦めるのが懸命だろう。逃れようと思っても、逃れえる力が俺にはない。というか、それを見越してこいつはこうしたんだろうな。計算高いというか、なんというか。俺が情けないだけか。

俺は、そう現実逃避気味に思考しながら、俺の口内に欲望を持って余した九能の舌が侵入してくるのを感じていた。

「兄さん？」

扉をノックする音とともに聞こえてきた唯利亜のくぐもった声に、俺と九能は揃って、ビクウ！と身体を止める。

「兄さん？あ、九能さんでもいいけど。お風呂、空いたよ」

唯利亜は親切心で言うてくれたんだろうが、今回の場合は余計なお世話としか言いようがない。しかし、不幸中の幸いと言うべきは、扉をちゃんと閉めておいたことだろう。俺は、ノックされても応答のしようがないので、入ってきてほしくないときは扉を閉めておくことで対応している。入ってきてもいいときは少しだけ隙間を開けておく。まあ、きちんと閉めておいても、何の関係もなしに入ってくる不逞の輩もいるわけだが。具体的には亜美さんとか。一応、九能が来たときはそんなことないけど。

だから唯利亜は入ってこようとはしない。まだ九能も服は脱いでないし、何もしていないわけだが、この体勢はまずい。普通に言い逃れできない。

「あ、それとも、一緒に入るとか？……ははっ、それはさすがにないか。じゃ、確かに言ったからね」

と、下世話な冗談（唯利亜にしては随分と珍しい）とともに、唯利亜は扉から離れていく。ような心配がした。

これで一安心か、と俺たちが目を合わせる。

「そうだ、二人とも」

「えあ！？な、なに！？」

そう思った矢先の不意打ちに、戸惑って声の上擦りながらも九能が応える。扉一枚挟んでいるぐらいなら気配の把握なんぞ九能にとつては造作も無いことのはずなんだが、よほど焦っているらしい。俺ももし声が出せるなら、同じような反応をしていただろう。あるいはもつと酷かったかもしれない。

「もう一つ言うの忘れてたんだけど……」

なんだ、焦らすな。心臓に悪すぎるだろ。さっきのタイミングといい、意図的にやっているとしたか思えない。と俺が思っていると、

「そういうことは、みんなが寝ちゃってからのほうがいいと思うよ？防音はしっかりしてるから、声は聞こえにくいけどさ」

普通に意図的でした。完全無欠の確信犯でした。

おい、唯利亜。明日の朝、憶えてるよ。と俺は今度こそ離れていく唯利亜に向かって怨嗟の思念を送る。

そんな俺をよそに、

「……ね、奈都海」

九能は、俺の名を呼ぶ。なんだ、こんなときに。

「続き……やる？」

唯利亜の台詞、聞いてなかったのか？

パタン……とボクは部屋の扉を閉じる。

部屋の壁紙の色に合わせたカーテンにも、勉強途中の状態で散乱したノートや教科書が載った勉強机にも、ゲームソフトだらけの本棚にも目を向けず、ボクはベッドに向かう。

電気は全く付けてないけど、自分の部屋だし特に広くもないのでなんの問題もない。

ボクは、ベッドの上に載り、去年誕生日に兄さんに買ってもらった特大のワニのぬいぐるみに抱きつきながら、思考する。もらった当初は、なんでワニ？とも思ったが、これはこれで可愛いし、何より抱きつきやすい。抱くためのものでもないけど。

ボクが考えるのは、兄さん

と九能さんのこと。

さつきは少しだけ九能さんの声が聞こえたので、何をしようとしているかはわかっていたから、少し悪戯してみようかと思っただ。結果は成功。二人ともいい具合に驚いてくれた。兄さんの様子はわからなかったけど、多分九能さん以上にうるたえていたはず。

二人が出会ったのは、半年前、3月。新学期になっただけの間にか付き合っていて、しかもその付き合い始めがボクにもわからない。一体いつ気持ちを確かめ合ったのか、わからない。まあ、ボクが知る必要もないし、あの頃は本当に色々あったから、気付かなくてもしょうがないかもしれない。二人きりの状況も、少なからずあったろうし。

でも

「……兄さん……」

見たときから、気付いていた。彼女は隠しているのか、あるいは彼女自身も気付いていないのか。

あるいは、“識ること”ができるボクだけが、知っているのか。

「兄さん……その人は……」

ただ、ボクにはどうしようもない。

ただ、知っているだけ。誰かに教えても、またどうしようもない。どうにかできるのは、あの二人のどちらか。でも、それはできない。そんなことを知ったら、兄さんはどうするだろうか？どちらか一方の破滅を望むのか、あるいは共に世界を敵に回すのか。どちらにしても、ボクは、そんなの絶対に嫌だ。

でも、

「……兄さん……その人は、ダメだよ……」

でも、今は少しだけ、この状況に甘えさせてほしい。この平和な世界に。何もボクたちの世界を脅かすものがない、この今のぬるま湯のような状況に浸からせてほしい。

それでも。

“あたし”は、それでも、“識る”ものとして、

「奈都海”、その人はダメ。……その人は、奈都海を………絶対に、滅ぼすから」

決して聞こえることのない忠告を口にする。

そのまま、ボクは押し寄せる眠気に身を委ねた。

S i l e n t L y r i c - 5 -

平和的日常(後書き)

12月3日：ミスで消してしまったので、再投稿しました。サブタイトルは変更、内容に変更はありませんが、表現などに若干の变化があるかもしれません。……………ストーリーの大筋にかかわる話ではないので、影響は微々たるものですが。

窓から差し込む陽光で、俺は目を覚ました。

わけはなく、今朝も携帯のアラームで……

あれ？アラームが鳴っていない？というか、まだ6時じゃないか。普段よりも1時間近く早い覚醒。じゃあ、なぜ目を覚ましたのか？その答えは、俺の腕にあつた。正確には、その腕の上に載っている人の頭。ちなみに、ちゃんと首から下もちゃんとある。別に生首だとか、そんなホラーなもんじゃない。

ここまで言えばわかるだろうが、それは九能の頭だ。俺は九能に腕枕をしてやっている状態にある。かなり長い時間していたようで、腕に感覚がない。どうやら俺は腕の痺れで目を覚ましたらしい。寝ていても迷惑な奴だな、こいつは。

でも、まあ……

可愛い。

ああ、可愛い。普段は綺麗と形容される九能だが、この無防備な表情と元々の顔のせいで、途轍もなく可愛い。しかも、それに加え、少しはだけた布団から覗く裸の肩が妙に艶かしくて、それが可愛いだけではなく、見る者にそこはかとなない背徳感を与える。何か今すぐにも抱きつきたくなってくる。それしたら、たとえ恋人だとしても容赦なく肋骨をへし折ってくる（誇張でもなんでもない）のがこいつなので、しないが。

ちなみに、勘違いしないでもらいたいが、昨晚俺たちは何もしていない。風呂から出てきた九能は、結局その後「私寝る。やっぱそんな気分じゃない……」と言って布団に潜り込んでしまった。一体

何がしたかったんだろうか。……別に名残惜しかった、なんてことはない。いや、ほんと。だって、冷静になって考えてみれば、他に家に人がいるのにできるわけがない。

で、もう一つ言っておくと、こいつが裸なのはデフォルトだ。九能は寝るとき、下着だけを着けるか、よくて上にサイズにあっていない大きめのTシャツを着るぐらいだ。

しかし、俺はいつまでもこの九能の姿を見ていたかったが、時間というのはえてして残酷なものである。5分ほどして、九能も目を覚ました。やっと俺の左腕が自由になる。と、同時に俺の至福の時間も終わりを告げる。

「……ん、奈都海、おはよ……」

やけに覇気の無い声だが、朝はいつもこんなものである。だが、この無防備かつ何も考えていないような表情には、そえられるものがある。この状況で求められたら、迷うことなく俺は応じていただろう。まあ、九能はそこまで悪知恵が働くほうではないし、今はそこまでの思考能力はない。

いくら相手が九能とはいえこのままでは目のやり場に困るので、一応、服を着ろ、と言うと、寝惚けながらも正確に唇を読んで布団からのそのそと這い出て、昨晚亜美さんから渡された下着と服を着始める。

女性の着替えを見るのは、なんか変な感じがするので、俺も九能のほうを見ずに着替え始める。できれば、二人で、別室で着替えたのだが、しょうがない。わざわざ廊下まで出ることもないし。

二人が着替え終わって、ちょうど九能が覚醒しきったところになって、今日が土曜日であり、休みであることに気付いた。

で、九能と一緒に居間へ降りてみる。そこには、当然、休みであろうとなかろうといつも通りの光景がある、と想像していたのだが……

「あれ？唯利亞は？」

九能が俺の疑問を代弁してくれた。つて、それを俺に訊いても意味が無い。俺たち共通の疑問だというのに。

しかし、珍しい。あの唯利亞は、朝だけはえらく早いのだ。平日なら普通に5時起きだし、休日でも遅くとも6時には起きて朝食を作り始める。

今、時刻は午前6時半。俺にとっては、あまりにも健康的すぎる。健康的すぎて、逆に不健康になりそうだ。今も若干頭がぼーっとしている。だが、この時間に唯利亞がここにはいない、というのは若干ならず異常でもある。何かあったのだろうか？と少し心配になる。今朝はあいつに恨み言を言う予定だったのに、これでは台無しではないか。

と、そこに、

「唯利亞ー、朝飯作ってー」

と母親らしからぬ言葉を平然と言いながら、亜美さんが居間に入ってきた。普通、実の息子に朝食の用意をさせるか？と思ったが、

どうせ聞き入れてもらえないので（正確には言っていないことにされる）、黙って他の疑問を口にする。

『亜美さん、どうしたんだ？こんな早くに』

この人も、いつもは俺と同じような時間に起きてくる。なぜか、休日までほとんど同じだ。なぜ学生の生活サイクルに合わせてくるのか疑問だ。だから、この時間に起きてくるのは、少なからぬ疑問を抱かせる。まあ、いつも俺と同じ時間に起きてくるということを考えれば、ある意味いつも通りではあるのだが。

「んー？今日は、入稿の日だから。あつちの人に朝一で来いって脅されてんの。……って、唯利亚は？」

なるほど、一応の理由はあつたわけだ。

説明すると、この亜美さんは、作家である。前にもなんかの拍子に言ったような気もするが。だが、俺が知っているのはそれだけで書いている本の題名どころかジャンルすら知らない。そもそも書いている様子も見なかった。それでも信じているのは、入稿やらなんやらとあつた後にちゃんと口座に100万単位の金が振り込まれているからである。……実はとても口では言えないような手段で手に入れた金だから、それを誤魔化すために作家だとかなんとか言っているのかも知れないが。

しかし、父親の不定期かつ頻繁な収入と亜美さんの気紛れかつ集中的な収入で俺たちが食っていけているのは事実なので、文句は言わない。貯金も結構あるから、片方の収入源がいなくなったところで、特に困りはしない。いざとなれば、就職する。幸い、当てはある。肉体を資本とする仕事なので、比較的収入も高い。

って、こんなことより、今は唯利亞だ。
まだ起きてこないのは、やはり心配になってくる。九能に唯利亞の部屋に行ってくる、と言うと、九能も付いてくると言う。別段、断る理由もないので、目だけで肯定を表して居間を出て二階に向かう。なんか後ろから亜美さんの不機嫌そうな声が聞こえたが、無視なら、自分で作れ。作れるスキルは充分にあるくせに、なにをわがままな。

俺は、2回のノックの後、ほんの少し間を置いてから唯利亞の部屋に入る。弟の部屋なんだから、別に勝手に入っても問題は無い。しかし、親しき仲にも礼儀あり、とあるように最低限の礼儀としてノックはしておく。返事をする気配がないので、俺はいよいよ本格的に心配になって許可も得ないまま部屋に入る。まさか風邪じゃなからうな。

「唯利亞？どうしたの？」

と九能は言いながら、俺の後ろについてきながら入っていく。なかなか綺麗ではあるのだが、ところどころに適当な唯利亞の性分が垣間見える。例えば、勉強の途中でそのままにしてある机の上の教科書やらノートとか、開いたままのノートパソコンとか、遊んだ後でどうせまた遊ぶからいいや的な感覚で放置してあるゲーム機

とか。ソフトも2、3個散乱している。

それでもなぜか小奇麗に見えるのだから、何か秘訣でもあるんだろうか。中途半端に几帳面というのが、唯リアの適当さに繋がっているの、目に見えないところ、つまりクローゼットの中はかなり整頓されている。らしい。見たこと無いのでわからん。それに加えて、本棚に整然と並ぶゲームソフトは作品毎、ジャンル毎にまた発売された順番に並べられている。これが乱れているのは、俺が知る限りはない。俺はあまりゲームに詳しいほうではないから断言はできないが。しかし、ここまでされれば、ゲームのほうも本望だろう。たまに床の上に放つたらかしにされてしまうが。

で、その部屋の主たる唯リアは何をしていたのかと言うと、ベッドの上で、パジャマの袖で目をこすりながら、ちょこん、と座っていた。

「……………」

……………今起きたのか。唯リアにはずいぶん遅い起床だな。

「……………ねえ、奈都海？あんたも多分同じ気持ちだと思っただけど……………」

何がだ。それはどんな気分だ？

「……………」

はい、すみません。白状しますよ。九能がものすっごい冷たい視線で俺を射抜かんとしているので、両手を挙げて降伏を示す。多分、九能の言っているのは、おそらくこういうことだろう。つまり、

可愛い。

本日2回目だ。しかも、今回は弟に向かって。彼女にそういう気持を抱くのは、おかしいことじゃない。しかしだ。

実の弟に、もう16の男に対してこれはない。

たしかに、俺と同じ歳の真実のことも可愛いと思うことはある。しかし、これはあくまで男の範疇での可愛いであって、俺が今感じているような、男としての俺が、こいつのことを可愛いなどと評価している、こんな感覚ではなかった。

それがどうだろう。俺は今、実の弟に、九能に感じていたものと同種の感情を抱いている。端的に言うと、ときめきかけた。まだ、ときめいたわけではない。あくまでときめき“かけた”だ。まだ、とか言ったら、将来そんなことがあるのか、と言われそうだが、今の段階では自身を持って否とは言えない。

どうやら俺は、寝ている、あるいは寝起きの姿に弱いようだ。しかも極端に。さらに厄介なことに男女の関係なく。寝ているときの無防備な姿がいいのか、はたまたこの覚醒しきっていない半眼がいいのか。おそらく両方だと思う。

意図せずして発覚した俺のフェチとそれに準ずる感情を必死で抑えながら、俺は唯利亞のほうへ歩みを進める。あくまで唯利亞の様子を見るためだ。どちらにせよ、唯利亞がいつも通りではないことは明白なので、この俺の行為は間違っていないはずだ。何か後ろから氷河期もかくやというほどの恐ろしく冷たい視線が、さつきから背中に突き刺さってきているが、俺は気にしない。これに屈したら何か負けた気がする。男として最後の砦が崩れるような気がする。その前にある他の砦をすべてすっ飛ばして、長距離核弾頭が俺の砦を木っ端のごとく微塵にしてくれるだろう。

そんな俺の苦悩に、寝起きの唯利亞が気付くはずもなく、唯利亞は視界に入った俺に、小首を傾げて疑問を示しながら無邪気に問いかけてきた。

「どうしたの、兄さん？……はれ？九能さんも？」

まだ上手く呂律も回っていない唯利亜は九能を視界に捉えて、さらに首を傾げる。そのまま倒れてまた眠ってしまったうんではないだろうか、というぐらいに。

その問いかけに、九能は一瞬で冷気を引っ込めて、唯利亜に微笑みかける。なんだろう、この変わりよう。本当に女性不信になりそうだ。

「って、兄さん、早いね。何かあったの？」

時間見てみる、と俺は口を動かす。が、唯利亜はまた首を傾げた。解読できなかったらしい。両親のしているのを見て学んだから、不完全なんだろう。起きたばかりの上手く働かない頭では、わからなかったらしい。なので、俺は無言でこいつの携帯に視線を移す。俺の視線を追いかけた唯利亜は、携帯を手に取り、時間を見て、

「え！？もうこんな時間？起きないって」

と慌ててベッドから飛び上がる。こんな時間って。まだ、7時にもなっていないぞ？休日には早すぎるぐらいだ、俺にとって

は。
しかし、唯利亜にとっては違う。いつもより予想外に遅い起床に驚いて、急いだせいで勢い余ったのか、足を纏れさせ、

「わ、わわっ！？」

俺のほうに倒れこんできたので、とりあえず受け止める。って、軽っ。一体こいつの体重はいくつなんだ。同年代の女と比べても、

軽いんじゃないか、こいつ。

いや、そんなことよりも、こいつ、熱があるんじゃないか？俺の腕の中で顔を赤くしている唯利亜を見て、俺は九能にそう言ってみる。

「熱？ほんとに？」

九能がなぜか一瞬呆れたような目で俺を見た後、疑わしげにそう言った。そう言うのなら、確かめてみるとしよう。俺はとりあえず、唯利亜の額に手を当てた。が、その瞬間、唯利亜が「ひゃっ!？」なんていう悲鳴を上げた。確かにいきなり目の前に他人の手があったら驚くだろうが、これは少し傷つくぞ。

だが、これは確かに……

『いや、本当に熱があるみたいだ。風邪を引いたのかもしれない』

「そう。風邪薬とかいる？亜美さんに訊いて取ってくるけど」

どうしようか。診たところ、それほど熱は高くないようだし……。ぶつちやけ寝しているだけでも、充分治りそうな気がする。だが、

『一応、頼む』

「ん、じゃあ待ってて」

念には念を、だ。こういうことは念を入れすぎる、ということはない。対処さえ間違えなければ。

九能が風邪薬を手に入れるべく部屋から出て行き、ここには俺と唯利亜のみ。

「？九能さんは？」

『お前の薬取りに行ったよ。熱があるから』

「え？ボクに？」

俺は頷く。どうやら、自分でも気付いていないらしい。確かにだるそうには見えないし、顔色も特段悪いという風には見えない。実際に体温計で計ってみないと正確な体温はわからないが、それでも微熱より少し高い、程度の熱はあったはずだ。それに、さつき足を縛りさせたとき、通常の平衡感覚なら容易に立て直せたはずだ。熱と寝起きということも手伝って、上手くバランスが取れなかったんだらう。

「うーん……そんなことないと思うんだけどな……」

こういう時は本人に限ってこんなことを言うのだ。そういう風に強がってかかって痛い目を見た俺としては、唯利亜に同じ道を歩ませたくはない。風邪ごときで大袈裟だが。こういう時に強がってしまうと、強がり癖が付いてしまう。後で後悔してもしようがない。

『まあ、とりあえず体温を計って、薬を飲んで寝ておけ。今日は俺と九能の二人で行くから』

どこに、とは言わなくてもわかるので、言わない。明日には行けるだらうし。

っと、ん？

「えー……？でも……」

俺は唯利亜が何か言おうとしているのを無視して、唯利亜の両肩を掴んで正面を向かせる。

「ひゃっ！？ち、ちよっ、兄さん！？」

抗議してくる唯利亜をこれまた無視して、俺は唯利亜の瞳を凝視する。正確には、眼球の動きを観察していた。唯利亜がそわそわし始めたころになって、俺はやっと唯利亜を解放する。

『唯利亜』

「え？な、なに？」

名前を呼んだだけで、何か半歩ほど後ろに引かれた。え、なんで？俺、なんかしたか？

そんな疑問を傷ついた心の奥底に押し込んで、俺は本当に言うべきことを口にする。

『目の焦点が合ってなかったぞ。大丈夫か？』

「え？あ、それは……」

さつきとは別種の狼狽を顔に浮かべて、目を逸らす。やはり無理していたんだろうか。

『やっぱり風邪か？今日は寝ておけ。どうせ今日も何も無い』

「うー……、……わかった」

やっと折れてくれたか。強情だな、こいつは。わかっていたこと

だが。

「あ、でも朝ごはんは？」

んなもん、自分らで作れる。その心配は無用なものだ。九能や亜美さんは言うまでもないが俺だって料理スキルはある。昨日の夕食は俺が作ったんだぞ。まあ、野菜と鶏肉を切って炒めて煮てルーを入れただけのカレーだったけど。

と、思い出した。そういえば、亜美さんは出版社のほうへ行くはずだったな。つまり、この家には唯利亜しか残らない。となると、他から誰かを呼んでこなければならない。俺が残るという手もあるが、そうなれば十中八九九能も残ると言うはずだ。それはまずい。九能があつちにはいないと、いざというときに対応が遅れる。

ならば選択肢は一つしかない。今、暇で、かつ唯利亜を任せるのに最も信頼が置ける存在といえは 俺は一人しか思いつかない。

『朝食は自分で作る。それよりも、看病は愛燕に任せようと思うんだが、あいつ、今日大丈夫か？』

「え？母さんは？」

『今日は出版社に行くらしいから、看病はできない』

「そっか。えと、愛燕だね。何も言っていなかったから大丈夫だと思っよ」

『そっか。じゃあ俺から連絡しておく。お前の看病だと言ったら、すぐに来てくれるだろ』

そう、愛燕だ。あいつなら、100%信頼できる。特に唯利亞に
関することならなんでも。今日は暇かどうかということが唯一気が
かりだったが、唯利亞の返答を聞く限り大丈夫だろう。

唯利亞がベッドに戻るのを見た後に俺が携帯で愛燕へのメールを
打っているところへ、タブレット型の風邪薬を手に入れたらしい九
能が戻ってきた。

俺は喋れなくなってから、携帯の電話機能を使ったことが無い。
当たり前だ。たとえ使ったとしても、あちら側には何も伝わらない
のだから。こればかりは読唇術が使えても、何の意味も無い。相
手の顔が見えなければ使えないし。

「何してんの？」

『愛燕にメール』

そう言っただけで九能は「ああ」という顔で頷いてくれた。頭が
いい奴と会話するのは、非常に楽でいい。1の情報で10までわか
つてくれる。筆談でも、書くことは最低限のことでもいいし、唇を動
かすのも少しでいい。声が出ないのに唇だけを動かす、というのは
普通に話すよりも体感で数倍以上疲れる。喋っている自分の声が聞
こえないのに口だけを動かすのがどれだけ大変か。長期間こんなこ
とをしていたら、普通は唇の動かし方すら忘れてしまつらしいのだ
が、俺は今のところそんなことはなく暮らしている。

「唯利亞、薬。朝と夜に一回ずつね。食前食後は問わないみたいだ
けど、ちゃんと飲んでおくのよ」

「ありがと、九能さん。じゃあ、あっち、よろしくね？」

「はいはい。咲にもちゃんと saying おおくから、安心しなさい」

唯利亜は、胸中を見透かされてしまったことにはつの悪い表情を浮かべ、言われた内容に若干の喜色を含んだ笑みを浮かべる。

その後、いくつか言葉を交わしてから俺と九能は唯利亜の部屋を出た。あとは愛燕に任せればいい。

九能の作った朝食をかきこむようにして食べて（もう少し味わって食べやがれ）、すぐに亜美さんは出版社のほうに出かけていってしまった。結局この人は自分で朝食を作らなかった。客人に飯を作らせるとは、どれだけ遠慮がないんだ、この母親は。

かくいう俺も九能の作った朝食を堪能させてもらったわけだが。で、俺と九能は現在、家から学校へ向かう方向とは反対側へ向かう道を歩いている。できれば、愛燕が来るまで待っておきたかった

のだが、事前にその愛燕からすぐには行けない、と連絡があつたので唯利亜を一人にして出てきてしまった。心配がない、と言えば嘘になるが、愛燕に任せれば大丈夫だという気持ちも同時にある。だからこそ、短時間とはいえ唯利亜を一人にしてきた。

さて、今の時間は通勤時間に当たっているので、隣の車道は車の往来が多い。歩道には自転車通勤する会社員、あるいは部活かなにかで学校へ行くこうという学生もちらほら見かける。まあ、その中を歩く俺たちもある意味で言えば、“通勤”しているわけだが、正直最近の緊張感のない職場には、通勤というより遊びに行っているという感覚のほうが強い。それに、形だけを見れば、今日のこれはデートでもあるわけだし。

これは、半年前から毎週末に行っている恒例行事なので、もう意識しなくても脳が自動的に道のりを思い出して足を動かしてくれる。この辺の街は、一見都会に見えなくも無い。だが、実際は言うなれば都会と田舎の境界線だ。西に行けば、真聖蝶学園などという馬鹿でかい学校があり、しかもその周辺にはその学校のせいで異常に増えた学生を対象とした施設や店舗が増加し、住宅と公的施設が混在したカオスな都会になっている。逆に東に二、三駅ほど行けば、一面に広がる田園風景が見られる。

全体的に言えば、この辺りは学生の割合が非常に多い。俺たちの通う鳳霊学園があるのも原因の一つだが、生徒数で言えば、さほど多いというわけではないこの学園だけではこうはならない。最大の要因は、この真聖蝶学園だ。なにせ、この学校、5年前の2024年に開校したわけだが、初等部から高等部まで総合して万単位の生徒が通っているのだ。西へ2駅ほど行けば、どこに行っても学生のほうが多いという光景が見られる。この少子化の中、都心部以外でこんな光景が見られるのはかなり珍しい。というか、ここ、中国地方では最大の高等学業施設であるわけだし。

それに、鳳霊と真聖蝶は結構交流が深く、あちらから生徒が派遣されることも多く、逆にこっちから生徒が行くことも多い。実際、

俺も行ったことがある。ただ、その時が初めてだったのが失敗というかなんというか。まあ、詳細は省く。いずれ近いうちに行くことになるだろうし。鳳秋祭関連で。

俺の家から1時間ほど歩いたところに俺たちの向かう場所はある。結構な距離があるが、そこに、九能と適当な会話をしながら向かっていると、もう後100mほどになり、肉眼でも見えるようになった。のだが。

「……………」

九能が立ち止まる。こんな往来のど真ん中で立ち止まれば迷惑極まりないのだが、すべての人が九能と俺を視界に映っていないかのように、だというのにまるで見えているかのように俺たちを避けていく。

まさか、とは思うが。

まさか、ねえ？

「奈都海」

ああ、九能さん。それ以上何も口にしないで。したら、現実に向かい合わなければならなくなってしまふから。だって、今まで2ヶ月ほど何もなかったんだぞ？俺は今の大部分の日本人の例に漏れず、平和ボケしすぎた平和論者なんだ。それを半年前にぶち壊されて、やっと訪れたこの2ヶ月の平和を謳歌していたのは俺だけじゃないだろう。だから、ほら、まあ落ち着いて、

「……行くわよ」

ええー。問答無用ですか。

「へくちっ」

上体を起こした途端、背筋に悪寒が走って思わずくしゃみが出ました。

その後、兄さんと九能さんが出て行ってから30分ほど後に愛燕^{えの}が来てくれた。

のだが、その間にボクの身体に何が起こったのか、急に身体が重くなってきて、なんだか寒気がするようになってきたのだ。

それを愛燕に言つと、愛燕はすぐに体温を測ってくれた。

結果は、38度8分。ほとんど39度に近い。どうやら、いつのまにかどこからか本格的な風邪をもらっていたらしい。

なので、ボクは愛燕に言われるまでもなくこうして寝ていたのだが、朝食がまだだったボクのために愛燕がお粥を作ってくれたので、食べるために上半身だけを布団から出したときにくしゃみが出ってしまったのだ。さっきのがそれ。

「あう、ごめんね、愛燕。お粥、ありがとう」

前半はくしゃみしたことへの謝罪。後半はお粥を作ってくれたことへの感謝。

だったんだけど……

「……………」

なぜか、愛燕がボクのほうを凝視していた。瞬きもせずじー…

…つとこちらを見つめている。結構怖い。ボク、何かしたかな？

と、唐突に愛燕はお粥の載ったお盆を机の上に置いて、こちらに静かに、ゆっくりと歩み寄ってきて

ぎゅっとボクを抱きしめた。

「……え、あ、あの？愛燕？」

突然のことに戸惑うボクを置いて、ボクを抱きしめたまま愛燕は一言。

「……かわいい……」

「へ……？」

何が？と訊きたい。もしかして風邪を引いてしまったボクが？だとしたら愛燕は人が苦しむのを見てかわいいと思ってしまうような、かなりのSっ気に溢れた娘ということになるんだけど。看病に来てくれてなんだけど、そんな人に看病されているのはかなり不安だよ？しかし、ボクの不安は杞憂だったようで、

「くしゃみ、かわいい……」

ああ、そういうことね。できれば最初から目的語を明示しておいてほしかったんだけどね。いや、でもくしゃみがかわいいってどういうこと？ボクが変なのかな。理解できないんだけど。

「？もしかしてわかってない？」

もしかしなくてもそうだよ。ボクの顔を覗き込んできた愛燕が、

ボクの表情を見てそう訊いて来たので、今度は疑問を表情に表す。多分、これで通じるはず。その証拠に、愛燕はボクを解放して、

「くしゃみは女の子の一種のステータスなんだよ？知らない？」

知らない。くしゃみって喉や鼻の中の異物を外部に出すためのものだよ？それにかわいさ求めてどうするの。

「とにかくっ、唯利亜のくしゃみはかわいかったのっ」

「え？あー、うん、ありがと……」

そんなむきになって言われても。本人は怒ってるつもりかもしれないけど、むしろその愛燕のほづがかわいいよ？

普段表情があまり変わらない分、よけいに本当にかわいいので、今度はボクから愛燕を抱き寄せようとして、

「あ、」

「あ、唯利、ひゃっ」

風邪のせいでバランス感覚がおかしいことになっているボクは、ボクを支えようとした愛燕まで巻き込んでベッドから落ちた。

「うー……痛い……」

もういるんなところが。風邪のせいで頭がズキズキするし、落ちたときに打ったのか知らないけどなんか右肩が。

そして、ボクがその痛みと風邪のたるさですっと動かないでいると、

「……唯利亞、あの……」

どうやら、ボクは愛燕の上に馬乗りになっている状態らしい。らしい、というが見ればそうなっているのはわかるんだけど。しかし、ボクが急いで愛燕の上から降りようとしたとき、

「え、えと……いいよ?」

と下から、なぜか媚びたようなというか熱っぽいというかそんな声が聞こえた。

……

ああ、なんだろう。今日は愛燕が、一番の親友なのによくわからなくなっていく。なにがいいの? 知りたいけど知りたくない。知らないと怖いけど、知るともっと怖いような気がして。

いや、でも本当に今日の愛燕はわからない。だって、おかしいでしょ? 愛燕が好きなのは兄さんだし、それはボクも昔から知っているし、ボクにわざわざ……

あれ? でも、ボクは、肉体は男のままだし、それに対してこういう反応はあまり変でもない? いや、でもでも、精神的にはボクは女のもつもりだし、自分で言うのもなんだけどボクは女の子に見えると思うんだ。そんな人に興奮するのってつまり、同性愛に入る? ……あれ?

頭がぐるぐるする。これ以上思考を続けると脳がショートしそう

だ。というわけで、ボクは一切の思考を放棄して、愛燕の上から降りてベッドに戻る。

「唯利亞のバカ……」

なぜか親友に罵倒されたけど、今のボクにそれに反応する気力はない。なんか邪悪な笑みを浮かべているような気がしたけど、確認するような気力もない。

だから、

「はい、唯利亜、あーん」

「ん、あーん」

というふうになんか羞恥プレイも甘んじて受け入れる。まあ、他に人がいないというのも大きいけど。周りに人がいたら、断固として拒否する。たとえ相手が愛燕でも。思考能力が奪われていても本能が拒否する。だって、本当に恥ずかしいし。経験はないけど。

なんか愛燕が、ボクが口を開ける度に、恍惚とした表情を浮かべていたような気がしたけど……。気のせいにしておく。

色々していた間にお粥は適度に冷めていたので、ボクは10分ほどかけてゆっくり食べさせてもらった。味付けが完全無欠にボク好みだったのは、さすが愛燕と言わざるをえない。

うーん……

いよいよ愛燕がいないと何もできなくなりつつある。どうしようか？

いや、もちろん本当に何も、というわけじゃない。ただ、愛燕へ

の依存度が最近急に高まっているというか……。あの事件以降、愛燕がボクのことをいろんな面でサポートしてくれているし、ファンクラブの統率もきちんとしてくれているし。

本音を言えば、できればファンクラブはなくしてほしいんだけど、そうすると逆に自制できないファンが出てきて危険度が増すと愛燕が教えてくれたので、一度言ったきりで二度と言っただけはない。というか、むしろファンって何？ボクはあの事件があつて初めてファンクラブなんてものの存在を知ったんだけど？そして、それを愛燕が作っていたというのは本当にどうということなんだろう。愛燕本人に問い詰めても適当にはぐらかされるだけなので、もう諦めているけど。

ボクは元々というか今も男だし、どんなに女を装つても、手術でも受けない限りそれは覆せない。学園にはまだボクの性別を間違つて認識している人は多い。なんというかそれに対して罪悪感がある。

ボクがこうなり始めたのは、年齢が二桁に入った頃。つまり小学4年生の辺りだったと思う。

原因はある人による洗脳。と言っても差し支えないほどの意識誘導というか、操作？よほど巧妙だったんだろう。当時のボクは何の疑問も抱かずに、その人の言うとおりにしていた。直接的に、女になれ、と言われたわけじゃない。ただ、そうしているうちに、いつの間にかボクは精神だけが完全な女の子になっていた。

もちろん、周囲からしてみればボクの変わりようは異常だっただろう。ボクはそれまでは普通に男の子だったし、友達も、愛燕を除けばほとんどが男の子だった。特に異性を意識し始める年代だったから、それは顕著だった。そんな中で男か女か判断が難しいボクという存在が現れたらどうなるか、なんて簡単に予想が付く。

つまり、いじめ。

ボクという異物を排除するためのいじめ。特にそれまで仲良くしていた男の子からのいじめが目立った。女子のほうも、ボクをどう

扱えばいいのかがわからなかったのか止めようとはしなかった。当時からボクは小柄で、度々女の子に間違われることもあったから、いじめやすかったのかもしれない。抵抗できるほどの力もなかったし。

愛燕はもちろん知っていた。だけど、愛燕だってその時は小学生だし、人に言うほどの正義感があるわけじゃないから表立って助けることはしなかった。でもボクの心の支えになってくれたのは事実。ボクを見る度に申し訳なさそうな表情を浮かべるけど、ボクが笑顔を浮かべれば愛燕も微笑んでくれた。当時は愛燕も単純で可愛かったのになあ……。

だけど、それが唐突にある日を境にぱったりと止まった。

小学6年の秋だった。その頃には、もういじめもほとんど下火状態で散発的だった。ボクも男の子と女の子とも普通に遊んでいたりしたし。しかし、それをよしとしない人が現れた。

ボクがいじめられていることを知られないように最も気を遣った人物。ボクを女の子になるよう誘導した張本人。ちなみに母さんじゃない。母さんなら、このことを知っても「あっそ」で済ませられない。兄さんでもない。兄さんはもうその時には知っていたし、ボクが何もしないで、と兄さんに散々言っていたので違う。

……

とにかく、その人が鳳霊学園中等部の制服でボクの通う学校に来た。しかも、ありがちな、直接ボクをいじめていた生徒に制裁を加えるなんてことはせず、職員室に乗り込んだのだ。

そこでその人が何をしたのは、怖くて訊けなかった。自分と友達も含めた身内のためなら手段を選ばない人だったから。先生の弱みを握っていじめ対策を強要することぐらい平気でやる。さらにその方法まで指示することも考えられる。

その人のおかげでいじめはなくなった。

そのせいでというかおかげでというか、とにかくそれでボクは鳳霊学園に行っても、女の子として扱われることになった。なぜ、学園の理事が、男であるボクの女子制服の着用を認めたのかは容易に予想できるけど（だって理事長があんなだからね……）、生徒名簿にボクが女子として登録してあるのはどうかと思うんだ。副会長になって初めて見たときは驚いた、ほんとに。高等部になったときはあの会長さんだからわかるけど（それもどうかと思うけど）、中等部から一貫してボクは女子として扱われていたらしい。戸籍には“幣原唯利亜という女性”は存在しないのに。

ただ、こうして性別を装ったまま生きていけるのも、この高校生という色々な要素から守ってもらっている立場でいる間だけ、だということとはわかってる。

性転換手術をしても戸籍の性別を変えられない、というような時代はもう大分前に終わったし、今ならそれなりのお金さえあればその手術はできる。さらに言えば、ボクの家にはそれだけのお金がある。

でも、ボクはそこまで考えていない。わざわざ手術までして性別を変えようなんて思わないし、今のところこの状態で困ったことは……、なかった、とは言わないけど、この歳でそんな手術をするわけにはいかないから、たとえその気があったとしても結果的には何も変わらないはずだ。

なにせ、ボクのこの女の子な心は人によって植えつけられたようなものだし、ボク自身も特に思い入れがあるわけでもない。だからこそ一人称はこうなる以前から使っていた“ボク”のままだし、これからも変える予定はない。

ただ、今すぐ捨てる、と言われても、これはボクの思春期、もっ

たとえばボクのアイデンティティを形成する時期にその根幹になつていたものだから、そう簡単にはいかない。そうするなら根本的な部分から意識改革が必要だろう。

でも、捨てる、と言われれば、時間がかかってもいいのならそうする。所詮、その程度のもの。

それなのになぜ今までこうして女の子にこだわっているのか、にはそれなりの理由がある。

あまり言いたくはないけれど……

ボクが唯一持っていていられるあの人の形見だから。

いずれ、あれを手にすることが許されるまでの、ボクの中にあるあの人の唯一の証拠だから。

だから、ボクは、少なくともその時までは女の子を演じていく。せめて、それまでは女の子であることを許してほしいと思う。

男に戻れ、と言うなら、戻る。でも、せめて、このボクの女の部分以外のあの人の遺してくれたものをボクが手にできるようなるまでは。

このままでもいいしてほしい。

「あ……」

ボクは思わず声を上げた。

怪訝な表情でボクを見る愛燕に、笑顔を作ったつもりの表情を向ける。

でも、案の定失敗したようで、愛燕は心配そうな顔になってボクのほうへ近寄ってくる。……いや、実際に完璧な笑顔を浮かべていても愛燕になら容易に本心を見透かされる。

「どうか、したの？」

「ん……ちょっと、ね……」

誤魔化そうとして、やめた。ボクの即興の嘘は愛燕には通用しない。

「また、あれ？」

「うん……多分ね。……かなり集まってきた……」

と、言うと、愛燕がさらに顔を曇らせるので、ボクは努めて明る

く、

「でも大丈夫だよ。兄さんと九能さんがいるんだから」

そうは言っても愛燕は、ボクが無理しているってことぐらいはお見通しだと思う。ボクも愛燕のことは大抵わかるけど、それでもここまでじゃない。ちょっと不公平だと思う。

……

愛燕はボクたちが何なのか、を知っている。でも、兄さんや九能さんは、愛燕が知っていることを知らない。

ある、ボクだけが関わった事件で愛燕が巻き込まれてこうなった。普通なら、こうして巻き込まれた一般人には、記憶にいくつかの加工を施してから解放するのだけど、愛燕はそれを拒否した。で、ボクはそれを尊重して愛燕の記憶には一切手をつけずに今に至る。

立派な軍規違反。たとえ口外しない、と約束したとしても自白剤なんて使われたら意味はないし、それに相当する魔術がないとも限らない。そこまでして得るほど価値のある情報を持っているほうが少ないのだけど、魔術の存在が世間に認知されるだけで世界に与える影響は大きい。

実際、魔術が軍事運用でもされれば戦術核ですら無効化できるのだから、世界の戦力バランスは大きく崩れることになる。万能ではないけれど、それほどに魔術は使い方と場合によつては現存のどの兵器よりも脅威となりうる、あるいはどんな脅威も無効化できる力を秘めている。

そんな魔術を、ボクたちは使うことができる。そして、そういう存在を管理する組織にも所属している。というか入らせられた。半年前に。

まあ、魔術の詳しい説明は後ですとして……

今はちょっと気になることがある。それというのも

「愛燕？眠いの？」

実際は風邪であるボクのほうが寝るべきなんだろうけど、愛燕がさつきからゲームをしながら頭をこっくりこっくりとさせているので声を掛けてみる。

すると、ぱつ、と頭を起こしてぶんぶんと頭を振る。必死すぎてもうほんとにわかりやすい。

ボクは思わず、クスッと笑い、

「寝てきてもいいよ？ボクももう寝るし、愛燕も疲れたでしょ？」

と言ってみる。

それでも、愛燕は意地を張り続けるかな、と思っていたけど、

「……………うん、じゃ……………」

と言っつて、ボクのベッドに這い上がるうとしてきた。

……………

あれ？いろいろと予想外なんだけど？どういうことなのかな、愛燕？

「えーと……………」

と、ボクが対応に迷っていると、愛燕は、

「……………」

と熟睡し始めた。よっぽど眠かったんだらうけど…………、昨夜何してたの？

風邪移しちゃったらまずいからボクは他の部屋に移動するのがベスト。だとは思いつけど、身体が異常にだるくてそれどころじゃない。愛燕と会話してた時はそうでもなかったけど、それがなくなると思っ出したように一気にだるさが身体に戻ってきた。

ああ、眠い……

というわけで。

ボクも寝ることにした。

というか、ボクって暗い過去が多いような気がするよね。って軽く言えるものでもないんだけど。でも、ボク以外の人は…………、なんというか、複雑すぎたり重すぎたりしてこんな風に語るの難しいんだよ。ほんとに。愛燕にだって他人には言いにくい経験があるし、九能さんに至っては、もうかなり多いだらうね…………。

…………あ、寝ないと。というわけでおやすみ。

俺たちは、朝の街中を疾走していた。

いや、正確に言うなら、走っていたのは九能だけだ。つまり、どういうことかと言うと

『……やっぱり恥ずかしいよなあ……』

「え？何か言った？」

唇が動いたのが視界に入ったのだろうか、怪訝な顔を向けてきた九能に、俺は首を横に振る。わざわざ九能に聞かせるようなものでもない。

俺が恥ずかしいと言ったのは、この体勢。俺は今、走っていない。だというのに周囲の光景は目まぐるしく変わっていく。しかも、今は九能を見上げる格好になっている。

俺は、今、

九能にお姫様抱っこされている。

これを恥ずかしいと言わずして何と言おうか。

だって、彼女にお姫様抱っこつて。反対でも充分恥ずかしいというのに、この状況では恥ずかしさ倍増だ。

ああ、でも他の連中はもっと別のところに突っ込みたいんだろうな。まあ、つまりはなぜ九能が俺を担いだまま走っていられるのかというのを。しかも、かなり速い。隣を併走する普通乗用車を軽く追い越している。というか、追い越しているかどうかすら肉眼ではわからない。常人のやることではない。なにしろこいつは常人ではないから。

そして、この状況も常ではありえないことだろう。なにせ、俺たちの後方には何かよくわからない飛来物が迫ってきているのだから。しかも九能よりも若干速く。さらに追尾して。90度曲がってもまだ追ってきているのだから、追尾機能があるのは間違いない。あれに当たったら、間違いなくただでは済まない。俺たちを追うついでのように今では数少なくなつた電信柱をなぎ倒したり、アスファルトの道路を抉っているのを見れば、その威力がよくわかる。というか、その壊れた部分、後で直すの誰だと思つてんだ。いつも軽くやつてたから簡単だとも思つてんのか。だとしたらとんだ勘違いだ。あれをやった後はかなりの疲労感が身体に残る。翌日までそれが残ることまであるんだぞ。次からこの仕事だけ拒否しようか……。

なんて思っていると、九能がいきなり減速しだした。そして少し進んだところで、ついに完全に止まった。やはりいつまでも逃げ続けていてもジリ貧にしかならないと思つたんだろう。その判断は正しい。だって俺、少し怖くなつてたし。九能がそのまま走り続けていたらどうしようかと。

まあ、それも取り越し苦労だったらしい。九能の判断力に感謝。

と、九能は突然、バッグの横に付けられていたキーホルダーを掴み、

と呟く。と、

そのキーホルダーは、

九能の横に、2 mを優に超える巨大な斧として突き立っていた。

そう、斧。

柄から刃の部分まですべてが重厚感のある鋼鉄の光沢を放っている斧。特に両端に付いた刃は分厚く、さぞかし重illardろうと見る者に思わせる。

ただ、最大の特徴はやはりその大きさ。九能の身長の1.5倍以上はある2 m 50 cmほどの、人間が持つことを前提としていないような大きさだ。

それを九能は、柄の中ほどを掴んで引き抜き、さっきまでの逃走劇なぞ嘘のように、俺たちを追ってきていた飛来物に突っ込んでいった。そう、軽く200?は超えそうなその鉄の塊を手にとって、俺を抱いて走っていたときとほとんど変わらないスピードで。

数は5。

近づいてくるほどにその正体が把握できるようになってくる。

それは槍だった。しかし、ただの槍ではない。周囲に薄い靄のようなものを纏っている。おそらくは冷氣だろう。あれを推進剤としてここまで飛ばしたというわけだ。……なぜここまで予想できるのか?心当たりがあるからだよ。

しかし、数は少ないが、直撃すれば人体などひとたまりもなく砕け散るだろう。大きさもそうだが、何よりスピードが半端ない。

俺と同じ結論に至ったであろう九能は、まず先頭の槍をその手に持つ斧でぶった切った。というか叩き割ったと言ったほうが正しいかもしれない。巨大な斧を持っているとは思えない拳動で、九能はさらに2つ目、3つ目と槍の横っ腹に斧を力づくにぶつけて無効化する。そして、唐突に九能はその斧を投擲し、4つ目を破壊する。得物を失った九能は、身軽になった自分の身体で跳躍し、5つ目の槍を素手で掴んだ。その圧倒的な冷気が腕を包み込むのも気にせず、九能は直径10cmはあろうかという槍を自身の握力だけで握りつぶし、中ほどで真っ二つにした。

ものの十数秒で脅威をすべて無効化した九能は、斧を回収した後、俺の元に戻ってきて、

「ね、どうだった？」

と、まるで初めて逆上がりができてそれを見ていた大人に出来を尋ねる小学生のような笑顔で訊ねてくる。この程度のことなら別に自慢できるようなことでもないのだが、久しぶりということもあって少し気分が高揚しているのだろう。

『相変わらずだな。見事な手際だよ』

だから、俺はいつも通りの台詞で九能を労う。

「ん、ありがとっ」

九能は素っ気無さを装っているが、どうにも喜びを隠し切れていない。そんな反応されるとこっちまで恥ずかしくなるから、やめて

くれ。

しかし、九能はすぐにその笑顔を一転、厳しい表情に戻し、

「さて……、奈都海、どこにいるかわかる？」

目的語がないが、言いたいことはわかる。つまり、あの槍を使って俺たちをここまで追い掛け回した下種野郎のことだろう？だが、それぐらいなら、

『それぐらいなら、お前でもわかるだろ。むしろ、お前のほうが鋭いんじゃない？』

「どうやら、単独じゃないみたいなのよねえ。協力者が攪乱してるから、少しわかりにくくなってるのよ。でも、奈都海なら……」

『やれ、と？俺が？』

俺が顔を顰めて尋ねると、九能は満面の笑顔で頷いた。やめてくれ、これ以上俺の負担を大きくするな。それでなくとも、ここ最近何もなかったから感覚が鈍っているのに。数ヶ月でも運動せずつきに筋トレしたら、筋肉痛になるだろ。それと同じだ。

そんな俺の心中を表情で九能に伝えるが

九能は、まるでワクワクという擬音が聞こえてきそうな笑顔で俺を見つめていた。

断りにくいだろ。こんな無邪気な、俺を信じきった顔をされてしまったら。……ただ単に言うことを聞かなかつたら後で何されるかわからないから、というのもあるが。

俺が渋々頷くと、九能はまたその笑顔を引っ込めて、真剣な表情に戻った。切り替えのお早いことで。

「じゃ、お願い」

『見つけたら、どうするつもりだ？』

「突っ込む」

即答ですか。お前の戦闘は周囲への被害が無駄に多いから、できれば自重して欲しかつたんだが。あるいはこれから自重した戦い方をしてくれるなら構わないが。

まあ、今更言ってもしょうがない。あいつに対して少なからず殺意を抱いているのは俺も同じだ。

では、始めるとしよう。

『……………』

俺は目を瞑る。この行動自体には意味はないのだが、気分だ。精神統一以上の効果はないが、これが結構影響してくる。

次に、俺は人差し指を俺の唇に近づけ、その指の腹を噛み切る。当然、そこからは微量ではあるが、出血する。そして、その血を振り払うように手を振るう。

しかし、そうして飛び散った血液は地面に着くことなく、俺の膝丈辺りの空間に、ピチヨン という音を立てて落ちた。2、3滴が落ちた後、そこから、俺の膝を取り囲むようにして魔法陣に似たものが出現する。もう見慣れた光景なので特に気になりはしない。と

言っても見ていないから見慣れた、という表現はおかしいか。

まあ、いい。ここからが本番だ。

ただ、この次の俺の行動は、俺のアイデンティティを根底から覆すような重大なものだ。これは、俺のアイデンティティを形成している一要素であると認めたくなくても認めざるをえないものなのだが、それを覆す。

さて……

成功するか……？

俺は、すう、と大きく息を吸い、

「Search for object」

喋った。

九能が、ではない。俺が、だ。

英語だけしか喋れない、などということではない。さっきの言葉は必要なものだから、口にしただけ。必要なら日本語も喋ることができる。

俺のアイデンティティと言ったのは、このことだ。つまり喋ることができない、というのが俺の特徴だったが、それはここで打ち崩された、ということだ。実際は喋れないことにさして変わりはないのだが。

「Make my body a compass, and expose your body in the room not distorted」

さらに言うなら、これ自体も別に英語で言う必要もない。あえて言うなら、これもまた気分。実際、この技術、“魔術”の本場は英語圏なのだから、間違っではないはずだ。

それに、英語は俺の得意分野なんだ。筆記は今もだし、声を失うまでは話すのもネイティブの人から上手いと言われるほどだった。こういうところぐらいカッコつけさせてくれ。

「So... My tears distort everything」

しかし、なかなか上手くできた。こういう汎用術は俺の苦手分野なのだ。だから得意な英語で補ってみた。いや、本当に効果があるかどうかはわからないが。

なにはともあれ、ここまでくれば後は

仕上げだ。

「Perversion」

途端、

俺の頭に無数の情報が雪崩のように流れ込んでくる。

九能に抱かれて走っていた街の光景。

その中のあらゆる建造物、あらゆる人も含めた生物。

建造物なら、その窓ガラス一枚一枚も、その中の家具調度も、その中の柱一本一本も、木造ならば釘一本一本に至るまで。

生物ならば、その毛を剥ぎ、その皮を剥き、筋肉を削ぎ、骨を晒したその姿まで、細胞一つ一つの細胞小器官からDNAまで、その神経と血管の末端まで。

およそ“対象”として扱われるものの視覚情報はほとんどすべてそれがほぼ同時に俺の脳に。

それは人一人が処理できるような情報量では、決してない。

なら、なぜ俺が処理できているのか？

それは“異なっている”から。

情報には、決して同じものは存在しない。たとえ現存の最高性能のコンピュータを使って情報をコピーしても、何かしらのノイズが入る。今の時代においても、俺が知る限りでは完璧なコピーができる、あるいは全く同じ情報を持つ人工物など存在しない。

その意味で言えば、完全無欠に同じものを作るのなら自然物のほうが可能性は高い。

たとえば、細胞分裂。全く同じDNAを持った細胞を複製するのだから、コピーに近いものはある。しかし、それでも、大きさ、あるいは形という情報が同じことなど到底ありえるものではない。

俺はそれを、そのまま“異なっている”と認識できる。俺の捜している情報を持つ媒体と異なっていれば、その情報は思考に入ってくる前に廃棄する。俺にはそれができる。それに今回は外見だけに絞っているから、余計にわかりやすい。

だから、俺の生来の能力とこの魔術は相性がいい。広範囲に及ぶ探索可能地域に比例して膨大な情報量。それを扱えるのは基本的に、元々情報処理能力が高い人か俺のような特殊な人間に限られる。た

だ、ここのように情報を持つ対称が多い場合、処理能力が高い、というだけでは扱いきれるものではない。つまるところ、コンスタントに使えるのは俺程度にチート級の能力を持つ人間に限られるということである。

っと、お。発見。

「……Put my will on the compass」

俺の脚に纏わり付いていた魔法陣が、その中にある幾何学模様や解読不能の文字を伸ばしながら、俺を中心として拡がっていく。

そして、ある程度まで拡げた後、もう一度血を一滴、魔法陣に落とす。すると、俺の胸元から時計の長針のような巨大な針が出現する。

そこにあるのは、直径5kmに及ぶ巨大な羅針盤。

ただし、指すのは決められた東西南北の方角ではない。

俺たちの求める標的。

俺たちが狩るべき獲物。

俺の平穩をぶち壊してくれたクソつたれな外道。

「……ん、あそこね」

九能は俺の針が指す方角へ全速力で突っ込んでいく。瞬く間に九能の姿は見えなくなり、この場には俺だけが残される。

ま、相手も動く気配はないし、放っておいてもいいか。

……

いや、だめだ。下手したら殺しかねん。俺でもそこまではやりすぎだと思える良識くらいはある。俺も早急に向かわねば。

と思い、羅針盤を手の平サイズまで収縮させてから、俺は歩き出そうとした。

その時、

「どこに向かわれるんですか？奈都海さん？」

少女の声で呼び止められた。

私は、奈都海の魔術によって示された方角へ向かっていた。一応おまかな場所はわかるので、迷うこともない。

あれだけ大規模な魔術を使ったのに、相手はその場から動こうとしない。よほど自分に自信があるのか、よほど頭が悪いのか。どちらにしろ、私にとっては好都合だ。相手が、ただ戦うだけ、という認識なら私が負けることは決してありえない。

しかし、あの槍を冷気で飛ばす技術。あれには心当たりがある。負けはしないが、勝つには一筋縄ではいかない、そんな相手。特に複数だから、さらに面倒なことになっている。

「……ま、いつか。ここまでするなら、それなりの覚悟はあるってことよね……？」

どの道、やることは変わらない。

やるなら、徹底的に叩きのめす。

私は、久しぶりの戦いに、血が躍るのを感じて知らず口の端を吊り上げた。

1分も経たず、相手がいるはずの場所にたどり着く。しかし、姿は見えない。どこかに隠れているのだろうか？

気配察知の簡易魔術を使っても、感知できない。

「面倒ね……」

私は思わず心中を口にする。

真正面からやりあつつもりはないらしい。別にそれでもいいけれど。

私はその場で周囲の様子を伺うために身を翻す。

その瞬間。

「な……！」

私が気付いたときには、背後から射出されたそれは私の目前まで迫っていて、

私はなす術もなく、頭を吹っ飛ばされた。

戦闘（？）シーンがちちゃちですがお許しください。

難しいのです。戦闘シーンは……

「いよっしゃ

っ!!」

威勢のいい男の雄叫びが蒼い空をつんざかばかりに響く。

叫んだ男の駆ける先には、頭を丸々失ってその身体をビルの屋上に横たえる少女の姿がある。誰がどう見ても、少女は死んでいる。脳漿は飛び散り、眼球ははるか後方、屋上の隅に転がっているのが見える。かろうじて形を残している下顎が生々しく、死という概念を強烈に示す。

その男もそう思ったのだろうか、その凄惨と言っても生温い光景を一瞥しただけで、男はさらに、

「やっと……やっと一矢報いることができた……くく、くくっ、あーはっはっはっはっはっ!!」

と、高笑いを始めた。

大口を開けて笑うその姿は、ちょっとした怒りを誘う。つまり、イライラする。非常に。

なので、“私”は、

その男の脚を払ってバランスを崩させたところで一気に身体を起こして男の首根っこを掴んでコンクリートに叩きつけた。

「ぐうえ!？」という呻き声が聞こえたが、私には関係ない。
さらに私は、斧をその脚の上に乗せる。300kg以上ある
からこれで脚は動かせない。それに刃がコンクリートにめり込んで
いるからもう私でないと抜けないし。

その後空いている左手で男の両手を砕いておく。これでこの男の
反撃手段は8割がた削った。

私はこれで満足なんだけど、男は情けなくも涙目で、

「ちよつ、准将!？なんで腕までえ!？めっちゃくちや痛いんです
けどお!？」

と、抗議してきた。人の頭を吹っ飛ばしておいて何を言ってるん
だろうか、こいつは。

面倒なのでとりあえず微笑むと、そいつは押し黙った。別に私の
笑顔に見惚れたわけじゃない、というのは男の恐怖に歪んだ表情を
見れば容易にわかる。

でも、私はそれを無視して、

「ねえ、久宮……?」

「は、はい、なんででしょう……」

声が震えている。他人のこういふところを見るとすごく気持ちい
い。もつと虐めたくなる。奈都海だともつとこうゾクゾクするけど。
それはさておき、男 浅木 久宮は、何も行動を起こさそうと
しない。それでも私は脚から斧を退かすことはしないし、当然掴んだ
首を離すつもりもない。いつでも首をポキつといけるように。や、
いったら死んじゃうけどね?

「あのね?私、一つ知りたいことがあるんだけど」

「な、なんで、しょう？なんなりと……」

「な・ん・で、こんなことをするのかしら？詳しく教えてくれる？」

久宮の言葉を途中で遮って、私は顔を彼に近づけつつ言った。もう、少しでも動けばキスできそうなほどの距離だけど、久宮の顔は赤くなるどころかどんどん蒼褪めていく。

「い、いえ、あのですね。ええ、いろいろありましてですね」

「へえ……いろいろって何？」

「え、あ、提案したのは魅戈のやつでして、はい。それで少佐がOKしたという……」

「魅戈？あの子、また……」

私の表情が和らいだのを見て、久宮は安堵の溜め息を吐こうとする。が、私はそれを許さない。

「で？なら、なんで、あんたがこんなことやってるわけ？ん？」

と、再び腕に力を込めて首を軽くねじる。

恐怖心が戻ってきたらしい久宮は息苦しそうにしながら、「あー」とか「えー」とか言うだけ。恐怖の余り喋れなくなったというわけではなく、単純に返答に困っているだけのようだけど……？

ま、なら締め上げればいいだけの話なので、その通りに

「その辺にしておいてもらえますか、准将？」

と、突然背後から聞き慣れた少女の声が聞こえた。

出鼻をくじかれた格好になった私は、溜め息を吐きながら声のした方向に向く。

「なーに？ 咲、あなたも一枚噛んでたわけ？」

私自身も少し意地が悪いかなー、なんて自覚できる表情を浮かべつつ言つと、

「ええ、まあ。上官の命令ですので」

と、あっさりと冷静に答えられた。ここでうるたえてくれれば、可愛げがあるというもののなに。今更ではあるけど。

で、そこにはもう一つ看過できない状況があるわけで。

「で？ 奈都海？ なんであんたまで一緒にいるわけ？」

そう、その隣には奈都海が立っていた。

当然、私が思い至るのは奈都海もグルだったのではないか、という推測。それを見切れなかったとなると、私、奈都海の恋人としての自信がなくなるんだけど。あ、ちよつと泣きそう。

しかし、幸いなことにそれは本人によって否定された。

『お前が飛んで行ってからこいつが来たんだ。別に俺がグルだったなんてことはないから安心しろ』

なんか心を見透かされた気がして、私はばつが悪くなって奈都海

から顔を背ける。気持ちをわかってくれた、という点では嬉しいけど。でも、奈都海が咲と一緒に来たことにほんの少しだけ嫉妬してしまっているのは、やっぱりまずいかな。依存しすぎ？というか……

「准将、そろそろやばいです。浅木中尉の顔色が」

本当だ。久宮の顔が蒼を通り越して白くなりつつあることに、私は咲の言葉で気付く。人間としてあってはいけない色に……
というわけで私はあわてて久宮の首から手を離す。

『どんだけの力で掴んでたんだ、お前は……』

視界の端で奈都海がそれっぽいことを言っていたが、読み取れなかったってことでスルー。ま、実際に読唇術で内容まで詳しく読み取るなんてほとんど不可能だけど。私の場合は……まあ裏技があるから。

とにかく、この久宮の状態もそうだけど、上腕骨も前腕骨も砕かれて完全に使い物にならなくなった腕をこのままにしておくわけにはいかない。

「咲、お願いできる？」

そう私が尋ねると咲　居川いかわ　咲はコクリと頷いて、失神してしまった久宮の横に膝をついてしゃがみ込んだ。

そして、咲がその手を久宮の腕にかざす。すると、
キンツ、

という金属と金属がぶつかり合うような音が聞こえたと思ったら、彼の腕は半円のドーム型の膜に包まれていた。さらにその膜から光が収束して彼の腕に注がれる。それに応じて久宮の腕が淡い光を纏い始める。腕が治り始めている証拠だ。厳密には“治っている”わ

けではないのだけど。

とりあえず、それらがすべて終わった後、

「……はあ……」

と、咲は息を吐く。

この程度で疲れるはずはないんだけど、多分、こんなくだらなことに労力を消費してしまったことになにか疲れに似たものを感じているんだろう。うん、わかるよ、その気持ち。私も奈都海にアレしてあげたときに涼しい顔されてたときなんか、ものすごく虚しくなるから。ま、ちゃんと効果はあるみたいだけど……ね？つて、例がおかしいか。

そんなことより今は訊かなきゃいけないことがあるのだけど。

「一仕事終わったところで悪いけど、咲」

「何でしょう？」

咲はこちらを見もせず answers が、私は続ける。咲には、久宮のもう片方の腕も治してもらわないといけないから。それでも訊くことは訊くけど。

「他にも協力者、いるでしょう？」

咲は先ほどの久宮の居場所の攪乱工作には関わっていない、という予想の下での質問。というか咲が本気で攪乱なんてしてきたら、私たちは今頃この街を見慣れた街だとは知らずに彷徨っている頃だと思う。

だから、彼らが本気ではなく戯れ的一种として行ったのだということとはわかるのだけど……。私と奈都海が会話をしているところに

乱入してきた時点で、それは万死に値する行動であると彼らは知っているはずなのだから、私のこの行動は間違っていない。多分に私情が含まれているけど。

で、咲の回答は案の定、

「ええ、部隊のほとんどの方は関わっていますが」

……

正直に告白すると、私は正直驚いた。だって、ほとんど全員って。予想外なんですけど？

今まで、というか未だに一体感の欠片もないあの部隊が？3ヶ月前のあの時だってその片鱗がちよこつとだけ見えたって程度だったのに？や、まあ、そんなんでよく部隊として成立してましたね、なんて言われそうだけど、やるべきときはやるから。でも、なんで私たちの邪魔をする時だけ、こう連帯感が生まれるのかな。今は、そのやるべきときじゃないよ？

ああ、もういいや。とりあえず今は私のやるべきことをやっておかないと。

「ええ、そうね、もういいわ……」

「はい？何がいいんですか？」

「なんでも……。……で、そいつらはどこに居るのかしらねえ……」

私の独り言に耳聴く反応した咲は、次に発した私の声に身体を震わせた。よっぼど殺気の乗った声だったんだろっけど、どうでもいい。

無力感とともになぜか猛烈な殺意がこつ、ふつつつと……。この二つって同時に成立しえるものなんだね。初めて知った。できれば一生知らずにすむ人生を送りたかったけど。

「奈都海い……」

なんかものすごく裏切られた気がして、女々しくも奈都海に縋り付いてみる。って、まあ女なんだけど、私は。

そんな私を奈都海は優しく愛撫してくれた。 え？もちろん頭を、だけど？

完全に世界に入り込んでいる私たちを、咲は非常に冷めた目で見ていたけど……。そんなことに構っていられるはずもなかった。

はぁ……。至福……。

「……」

「……………」

『……………』

端的に言おう。気まずい。

一応、俺は被害者なわけだから別に身構える必要はないのだが、
なんというか、ここの雰囲気、な……。いつも通りのはずなのに、
どうにも居心地が悪い。なんなんだ、これは。

ああ、言っておくが、ここにいるのは俺、九能、久宮さん、咲に
さらにここに来る途中に拾った連中を加えた面子だ。ここ　俺と
九能が当初目指していた場所　の説明は後ですとして、今は一
応ここにいる面子を紹介しておこう。

まず、浅木　久宮さんと居川　咲はさつきいたからいいだろう。
歳はちなみに久宮さんは22歳で咲は14歳だ。以外だと思っただろ
うが。

で、普通はそんな場合ではないと思うのだが、常に笑顔を浮かべ
ている（個人的にそんな印象のある）男性が、小鳥遊たかなし　尊何さんそんか。
歳は確か27だったはずだ。

次が三井みつい　魅戈さんみか。背は高いほうではなく顔も幼げなのでどう
見ても中学生、よくて高校生にしか見えないのだが、これでも19
歳である。性格も無邪気というか幼いというか、そんな感じなので
どうにも年長者として扱うのに違和感がある。

まあ、いい。で、その次が伊神いがみ　未永栖さんみえす。この面子での数少
ない常識人。突出した特徴がない、という意味で。まあ、俺の主観
ではあるが、そこそこ、という失礼かもしれないが、美人なので
強いて言えばそれが特徴。それと、左手薬指に光る指輪が示すよう

に既婚者である。歳は21だ。このご時勢にしては早めの結婚だろう。普通なら、大学生だという人が多いのだから。

ここにいるのはこの5人で、俺と九能を含めて7人。まだいくらかいるはずなのだが、ここにはいないようだ。今回のことには関わっていないのか、あるいは逃げたか。俺としては別にどちらでもいい。ただ、九能がご立腹の様子だから……。今のうちに言うておこう。ご冥福をお祈りします。

で、俺たちがいるこの場所についてだが

ここはADEOIA日本中国地方支部、だ。

と言ってわかる奴はいないだろうから簡単に説明しよう。

ADEOIAというのは、ドイツの大手の企業の一つだ。何が専門、というのは言いにくいがかなり手広くやっているらしい。俺が知るだけでも衣服や家具なんかの日用品、電化製品から船舶の製造やら学校の運営まで、様々だ。これだけ色々やっているが、世界的な知名度はそれほどでもない。ただ、規模だけは、かの大手自動車メーカー（別にどれを思い浮かべてもらっても結構）にも勝るとも劣らない。はずだ。なにせ、世界各地に支部が200ヶ所以上あるのだから。ある意味企業の域を超えている部分もある。ここ、日本中国地方支部はその一つである。日本には他に、北海道、関東、九州の3つの支部がある。

これが一般に知られているだろう情報だ。まあ、そもそも名前自体がマイナーだし、一般に知られていないものもある。というか、そっちのほうが本命だ。

あと、日本での読み方は“アディア”と読む。

さて、いつまでも現実逃避しているわけにはいかない。そろそろ九能をどうにかしなければ。

「……………」

とは言ったものの、どうすればいいのかわからん。

別に一触即発とまではいかないが、俺が入る余地があるように見えない。途方に暮れるとはこのことが。

「……………」

あ、咲がなんか「なんとかしてくれ」ってな視線を俺に送っているのだが。むしろ俺のほうがどうにかしてほしいというのに。

まあ、誰かが動かなければこの状況は全く進展しないだろう。下手すれば日が沈むまでこのままかもしれん。さすがにそれは勘弁願いたい。

なので、俺は手始めに九能の意識をまず俺に向けさせるために、九能の肩を叩いてみた。

「……………なあに？奈都海」

表情こそにこやかだが、腹の底では怒りの炎が燃え滾っているのがわかる。相手が俺だから辛うじて抑えられている、というところか。俺に甘えてきたさっきの殊勝な態度はどこにいった？せめて、あれが残っていればまだ対処は楽だったのに。

このまま何も言わずに引き下がってしまいたいが、今の九能がそれを許すかどうかは激しく疑問だ。これはもう腹を括るしかあるま

い。

『そろそろ終わりにしないか？いくらなんでも根に持ちすぎだろ』

俺の決死の提言。しかし、それは、

「はあ？」

の一言で一蹴された。これはまずい。案の定地雷だったらしい。
と、今更ながらに気付いたが、もう遅い。

「あのね、奈都海。私たちが何されたか、理解してるの？攻撃されたのよ？明確な敵意を持った攻撃を。この子たちに本当に敵意があったかどうかはわからない。でも、客観的に見て、あれは完全に敵意があると言わざるを得ない。どう見てもあれは殺傷能力が高いし、街に被害も出た。私は、普通なら蘇生不可能な損傷を受けた。それが、私が異常な再生能力を持っているということを知っているの行動だとしても、許されることじゃない。下手すれば造反と取られてもおかしくない。言っておくけどね、私たちは腐っても軍人なの。遊びで自分の能力を使うなんてもつての外だし、ましてやそれを仲間を使うなんて言語道断、危険と判断されて処分されてもおかしくない。それが遊びだとしてもね。ここはそういうところなの。確かに今こうしている理由には私情も含まれている。奈都海との会話を邪魔されたっていう私的な理由もある。でも、それだけじゃなくて私はこれ以上、この子たちに軽率な行動をしてほしくないの。どんなに力や実力があっても、それを使う人間に問題があったら意味がないでしょう？むしろ危険人物だと扱われるのが普通なの、そういう人は。この組織にそう判断されて殺された人間がどれだけいるか、知ってる？今はまだ大丈夫かもしれないけど、将来、どうなるかわからない。もしかしたら私たちの誰かが、違う私たちの誰かに殺さ

れることだつてあるかもしれない。私はそういうのは嫌なの、絶対に。わかった？」

九能は流れるように捲くし立てた後、そう締めくくった。

お前の言いたいことはわかる。だが、それは、今回のこととの関係者を正座させて無言で責め立てる理由にはならない。それなら、そのまま注意を喚起するだけでいいだろう。なぜここまで引き摺るのか。お前らしくもない。

お前が部下思いだというのはわかる。だが、その方向性を間違えるな。

「お前が部下思いだつてのは知ってる。お前のこの行動が部下のたれを思つてのことだというのも理解できる。だがな、語弊を怖れずに言えば、それはただのお前の自己満足だよ。それこそ、あなたのためを思つて言っている、とか言つてネチネチと説教する、子ども立場に立とうとしないあるいは立てないだめな母親の典型、それと同類なんだよ、今のお前は。余計なお世話つて言葉も憶えておけ。まあ、簡単に言えば、俺が言いたいのは勝手な親切心を他人に押し付けるな、つてことだ。そういうのが必要な時もあるかもしれない。だが、今はその時じゃない。その判断はお前にだつてできるだろう？」

結構早口で言つたから全部読み取れたかどうかは怪しいが、大筋はわかつてくれたようで、九能はわずかに頷いてくれた。

「それに、だ。ここまで言うことでもないだろう。街のほうは俺と咲で修復しておいたし、人的被害はなかった。始末書でも書かせれば問題もないだろ。」

「始末書ね……」という九能の言葉に、未永栖さんが肩をびくつ

かせたが気にしない。九能が笑顔で「そうね」なんて言ったから、表情に絶望の二文字が浮かびかけたが、

「じゃ、それは久宮に」

「え！？俺つすかあ！？」

当然と言えば当然な気が。なぜなら、実際に行動を起こしたのは久宮さんだけだから。そもそも上司に対して致命傷を与えかねない攻撃を加えること自体がご法度なのだから、始末書程度で済むことを、むしろ喜ぶべきではないだろうか。下手すれば、いや下手ななくても普通は反逆罪なんだと言われて捕まってしまうのが常識だろう。

「あ、もちろん未永栖もね。一応上への体裁もあるから」

「……………はい、わかりました……………」

安堵しかけたところへの不意打ち。未永栖さんはもう諦め気味だな。聡明な人だから最初からこうなることはわかっていたはずなのに……………って、聡明でなくても並みの判断力があればわかるのでは？まあ、これで空気は若干軽くなった。嬉しい限りだね。

「で、魅戈？」

「？なにー？九能ちゃん？」

と、唐突に九能は魅戈さんへの攻撃に入った。なぜ攻撃なのかわかるのか、と言えば、そういう目をしているから。そうとしか答えられないが。

「今回のこと、魅戈が立案したって本当？」

「うん、そうだよー」

「……なんで？」

えらく快活に答えられて、九能は額を押さえながらも訊ねる。

「だって、九能ちゃんが私に会いに来てくれないんだもん。だから、会いに行こーってなったの」

ずいぶんと軽い感じで殺されかけたのですね、俺たちは。なぜ、会いに行く、が巨大な槍で追いかける、にシフトしたんでしょうか。甚だ疑問ですね。

と、その疑問の答えは未永栖さんの口から発せられた。

「今回の作戦内容はこの部隊員での模擬戦闘。敵からの奇襲をかわり、反撃にスムーズに移行するための技術及び判断力、さらに窮地における味方との正確な意思疎通ができるかどうかを身につけるための訓練です。と、珍しく魅戈からまともな提案があったので、採用しました。でも、ですね。言い訳させてください。魅戈は准将の許可は取ってある、と言ったんですよ？それなのに、なのに、こんな……。もういいですけど」

最後に、はあ、と溜め息を吐いた未永栖さんはそのまま俯いてしまった。未永栖さんが非常に気の毒に思えてならない。

誰が悪いかと言われれば、もちろんこの場合は魅戈さんだろう。しかし、その当の本人が、当初の目的を達成してとても満足そうに微笑んでいるから手に負えない。罪悪感はないのだろうか。……あ

るなら最初からこんなことはしない、か。

と、突然、今まで笑顔で無言を貫いていた尊何さんが口を開いた。

「まあ、いいんじゃないかな。今回のことを正式な訓練だつてことにすれば万事解決じゃない？それに、もう中將にはそう報告してあるよ?」

「え?そうなの?」

それは初耳なんです、尊何さん。九能も当然初耳。

「そうですよ。私が許可申請書を書きましたから。誰も書かないので」

咲がそう言って、信憑性がますますアップ。と、いうことは……? ?

「それって……、私が報告書まとめて提出すれば、解決……?」

「そういうことになるね」

九能の予感を尊何さんが肯定して決着。准将という将官に就いていながら一部隊の部隊長でもある九能は、そういう雑務も自分で片付けている。

のだが、

「でも、二人には一応始末書は書いてもらうからね?」

九能は准将にしてこの中国地方支部の副支部長だから、その程度の権限はある。

久宮さんと未永栖さん二人が頷き、さて、これで一件落着か。

そう、全員が思った、その時。

ADEOIA日本中国地方支部に、警報がけたたましく鳴り響いた。

俺たちのいるここ、A D E O I A 日本中国地方支部に警報が鳴る。これはあることを意味する。すなわち、敵の出現。

いきなり敵、と言うと物騒に思いかもしれないが、ここにいる以上ほぼ日常的に遭遇するものなので俺たちにとっては特になんということもない。ただ、これから固有名詞が連発されるだろうから、これらについては後で説明しよう。

とにかく、敵だ。この場合、俺たちにとっての敵は、大方 D M F B に限られる。

D M F B とは何か？簡単に言えば魔力でできた怪物だ。これについても詳しいことは後で説明するから、今はとにかく話を進めよう。

157

警報が鳴ったとはいえ、しかし、すぐに動くわけにはいかない。無秩序に動くのは危険すぎる。特に魔術師は、全員が全員、同じ能力を持っているわけではないのだから、敵の規模やそれがどこに現れたのかだけでなくこちらの戦力をどう使うかも重要になってくる。まあ、戦いは基本的にはそんなものだと思うが。

しかし、すぐに追加で告げられるはずの詳細が、今回は遅い。これが遅れると、それは対応の遅延に繋がるので、褒められたものではない。情報課は何をしてる？

『……………えー……………』

と、来たか。って、待て、この声は

『……静鈴町しやうちやうにて多数のDMFBを確認。各員、第二戦闘配置にて出撃準備。以降、え？何ですか？いいじゃないですか、これでメンドイですし……ひゃうっ、す、すいません、じゃあ、各員、第一戦闘配置！ってわけで出られる人はとっとと出て……って痛っ、なにするんですかあ。暴力反対ですよ？……あ、これで連絡は終わり、以上で、じゃないです冗談ですわかってますっ！！』

……

これぞ中国地方支部名物、戦意の殺がれる警報だ。別に有名ではないが。初めて聞けば、意味がわからず途方に暮れること間違いなしだ。俺はそうだった。

しかし、今の俺たちにとってはもう慣れたもので、もう既に各々が自分のすべきこととして準備を始めている。まあ、準備と言っても九能や久宮さんのような武器を使う人がそれぞれの得物を用意する程度だが。

ここは、機構が軍に似ているとはいえ、軍服のような指定された制服があるわけではない。着用した者の魔力を増強するような、そんな都合のいい不思議道具もない。むしろ、決められたものを嫌々着るよりも自分の好きな服を着たほうがいいコンディションで戦える。というか、着ただけで魔術が強化される服があるなら、普通に欲しい。魔術なんてそんなものだ。

『続けて報告！敵勢力の数はおよそ50、ランクはF〜Bまでです。……えっと…………なんでしたっけ………？あ、いや、冗談ですってば、冗談ですからそれだけはやめて！ちゃんと仕事はしますから！（クシー）から（シグマ）までの部隊は出て下さいっ！これで

いいんでしょっ！……っただからじよ　ブツッ……』

「……………」

絶句。この空間にはそんな言葉が似合う。

いやはや、今日はなんというか、ボケにさらに磨きがかかった漫才だった。向こうで今何が起こっているか、本当に手に取るようにわかる。これから死地に赴くというのになんだ、この緊張感のなさは。

それに、内容のインパクトに食われているが、敵の数は50だという。いつもなら多くても20がせいぜいだというのに。これは結構ハードな任務になりそうですが、皆さん、気付いてらっしゃいますか？

「……………みんな、行きましょう。敵の攪乱にまんまと乗っちゃだめよ」

拳句、思いつきり味方だというのに九能に敵扱いされるオペレーター。これは、確実に後で九能の説教がいくパターンだ。

こんなので本当に大丈夫だろうか。いつか、あいつのせいでここが壊滅、なんてことになりそうだな。……………笑えない。

まあ、冗談はこのくらいにしておいて。

俺たちの部隊は、に当てられているから出る必要がある。戦力

が4人ほど足りないが、まあいいだろう。

つまり、この部隊は合わせて11人（と非戦闘員が2人いるが）。この程度の人数だと、陸軍を基準に考えれば、小隊の規模にすら達していない。そもそも准将という階級は旅団の指揮に当たるのが通例じゃなかったか？軍事関係には詳しくないのでよくわからんが、とにかくこの機構が軍に準じていることを考えれば、この部隊が普通じゃないことはわかるだろう。

それも当然だ。なぜならこの部隊はいわゆる特殊部隊で、その中でも遊撃に特化した部隊だからだ。設立したのが九能で、いろんなところから優秀な（というか単純に欲しい）人材を引っこ抜いてきては組み入れているのだ。だから、単純な単体毎の戦力だけ見れば、この支部どころか日本の中でもトップクラスに入るだろう。とはいえ、その人材も大体はADEOIAのどこかの部署から引き抜いてくるので、俺や唯利亜のような一般人だった者が直接、というのは少ない。というか俺と唯利亜、ともう一人だけだ。

そんな部隊が出る必要がある、ということはやはり上の方も今の状況が異常だと認識しているからだろう。なにせ、50という数のDMFBはなかなか現れない、というか俺は見たことがない。

で、他の人はどうかと言うと

「50か……少し多くねえか？」

「そうでもないわよ。運がよければ千単位で見られることもあるから」

「それって運がいいって言うんでしょか……。でも、確かに50は多いですね。たった5部隊で殲滅できるんですか？」

「できるんじゃないかな。他からも出るだろうし。あと誰か一人、源破顕現でもしてくれれば楽だと思うけど」

「じゃ、私するー」

「やめておきなさい、魅戈。あなたのは周辺への被害が大きすぎるから」

……結構皆さん、落ち着いてらっしゃる。慌てていたのは俺だけか？

こんなことに疎外感を抱いてしまうのは、会話に参加できないから、だけじゃない。まあ、経験の差だろう。俺はこういうことをしだして半年だが、ここにいるのは5年以上のキャリアのある人ばかりだから。

ちなみに、尊何さんの言う“他”というのは、この支部の支部のことだ。どういうことかというと、当然ながらDMFBが出現するのはこの中国地方支部など他の支部の周辺だけということはありえない。日本全国をたった4つの支部でカバーするのは実質不可能。そのため、それぞれの支部には、カバーしきれない地域をカバーするためのさらに小規模の支部が存在するのだ。この中国地方支部では中国、四国、近畿と中部地方の一部の小支部を管理している。

さて、全員大方の準備が終わった。まあ、準備と言っても（ryだから5分もかからないのだが。

とにかく、これで出よう、というまさにその時、

『んっ』

俺の携帯が鳴った。しかも、電話のほうだ。俺は喋れないから、出ようにも出られないんだが。

そう思いながらとりあえず懐から携帯を取り出すと、ディスプレイには“唯利亜”の名が。なぜこのタイミングで唯利亜が？とも思ったが、いつもしているように九能に携帯を渡す。

出ようがないとはいえ、かかってきたなら出たほうがいい。俺は電話がかかってくると、周囲に友人以上の人間がいるならそいつらに出てもらおうようにしている。今は九能というわけだ。まあ、最近は何とんどないが。

しかし、唯利亜は、あいつの能力を鑑みるに今のこの事態を把握していないはずがないんだが。もしかしたら、何かあったのかもしれない。

九能も同じ予想に行き着いたのか、こちらに目配せしてすぐに電話にでた。

「もしもし、唯利亜？どうしたの？」

本当にどうしたのか。そもそも、唯利亜は俺がこうすると知っているのだから最初から九能の携帯に電話すればよかったのではないだろうか？メールでもいいだろう。どちらにしろ、俺に電話するメッセージがない。何が要件であっても結局は全員が知ることになるのだから。

「え？うん、じゃ、ちょっと待ってて」

と、九能はそう言うと、おもむろに携帯をいくつか操作してこちらにかざしてきた。

『あ、みんな？聞こえる？』

そこから唯利亜の声が聞こえてきた。ここにいる全員に唯利亜は風邪で休養すると言っている。それこそ全員が怪訝な表情でその声を聞くなかで、唯利亜は平然と続ける。こちらの様子がわかるはずがないので当然だが。

『もうDMFBについては知ってるよね？なら、時間ないと思うからボクのほうでわかったことを手短かに話すね』

なるほど、“識ること”のできるお前なら、この中国地方支部の“眼”たるお前なら、量も多く、かつ正確な情報が得られるだろう。だが、話は変わるがお前、風邪はどうした？そして愛燕は？そこにいないのなら問題ないんだが。
などと俺は暢気にもそう思っていた。

『現段階で、だけどね。DMFBの数は120前後。確認できる最高ランクはBランクだけど、数はまだ増えそうだから、運が悪いとSランク　ファントムも来るかも。……そつちじゃ、まだそこまです把握してないよね？』

「は？ひゃく……？」

「えー……つと、何それ？ほんと、に？」

俺も言えることなら、そう言いたい。DMFBが120体？どんな冗談だ、それは。50でも多いと言っていたのに、その倍以上？それに加えてファントムまで来られたら、こちらに勝ち目はないぞ？
だが、唯利亜は無情にも否定の材料は与えてくれない。

『残念だけどほんと。ボクの遠視がもう少し不正確なら、まだ希望』

はあつただけどね……』

それは、唯利亚も自分の視たものを信じたくない、ということ。
唯利亚の眼は、何か大きな不確定要素がない限りは信用に値する。
逆に言えば、唯利亚のその言葉は間違いようのない事実である、と
いうことになる。

正確な情報が手に入るのはいいことだが、そのせいで自軍の士気が低下しては意味がない。

『それともう一つ、重要な情報があるんだけど』

なんだ？まだ、俺たちを絶望させる状況があるのか？

『そのDMFBたちね、ある一つの地点に向かって集まってるんだよね。で、その地点の中心に一般人の存在を確認したよ。多分、いや確実にDMFBの存在を認知している、ね』

「一般人？生きてるの？」

『うん。ボクが識るかぎりでは、完全な無傷だよ』

それはどういうことだと、ここにいる全員が共通の疑問を抱く。

つまり、なぜ、その一般人はDMFBを認知できるのか？なぜ、その一般人を中心にDMFBは集まっているのか？そして、なぜその一般人はDMFBに何一つ手出しされていないのか？この3つだ。

そもそもDMFBは通常の人間には見えない。なぜなら、DMFBは純粋な魔力の集合体であり、もし一般人が肉眼でその姿を直に見たのなら、その高濃度どころか濃度100%の魔力は確実にその

人間の脳を蝕むからだ。だから、体内に一定以上の魔力を持たない人間は、本能的にその視覚情報を網膜に映っている時点で見えていないものとして処理する。つまり、光受容が行われる網膜において、そのDMFBが反射した光は光として扱われないのだ。

実際には俺たちの目に見える以上は、DMFBもちゃんと光を反射しているのだが、魔力の乏しい人間はなぜか網膜にその光が届かないらしいのだ。そもそも、俺は今のこの能力が発現するまでDMFBなど見えなかったし、見えない以上はその存在も知らなかった。その辺りの見えるのか見えないのかの変化については……何かいろいろ難しかったから割愛する。

誰かに教えられた、ということも考えられなくはないが、俺たちの中で認知している、と言うとそれは見ることができると同義である。そもそも知っているだけなら、唯利亜がわかるはずはない。

また、個体差はあれど、大抵のDMFBはなぜか人間を襲おうとする。この辺りの理由もまだ説明できていないらしく、これがわかればある程度のDMFB絡みの問題は解決できるのでは？と期待されているらしい。ただ、DMFBは基本、倒すだけの存在なので研究など進むはずもないのだが。

しかし、DMFBが人を襲う、というのは紛れもない事実であり、今回の、120体ものDMFBが集まっているながら目の前の人間に何一つ手を出さない、という状況は極めて異例と言わざるを得ないだろう。

ちなみに、なぜDMFBがその人を中心に集結しているのか、については全く見当もつかない。

やはり、同じ疑問が頭を巡っているのだろう、全員が黙り込んで考え込んでいる。

いや、ただ一人を除いて。

「ねえ、唯利亞」

『なに？』

沈黙を破った九能の突然の発言に、唯利亞だけでなくこの場の全員が九能の言葉に耳を傾ける。

「それって本当に一般人？魔術師じゃなくて？」

それは尤もな質問だ。魔術師ならDMFBの群れの中を掻い潜ることができる可能性もないわけではない。ただし、トップクラスの才能と技術と経験、そしてかなりの強運が必要になってくるだろうが。

しかし、唯利亞は、

『ううん、魔術師ではないよ。これは絶対』

否定した。しかも、断言した。唯利亞にしては珍しい。

『だって、その人が誰か、もう個人まで特定できているしね』

待て、唯利亞。もし、それが本当なら、お前は遠視で人間一人の詳細情報まで読み取れる、ということになる。それがどういう意味を持っているか、わかるか？そんなぶっ飛んだ能力は人の手に余るぞ。

しかし、その危惧は、次の唯利亞の言葉で完全に忘却の彼方に葬り去られた。

『性別は女性、歳は18歳。身長は160cm弱。今DMFBの中

心にいるのは……

鳳霊学園生徒会会長、
後朱雀ごすざく
沙夢濡さんしゃんぬ、だよ』

……なんだって？

章前 あってはならない記憶 (前書き)

冒頭にあるように、この話の舞台は本編とは全く違います。

なので、これは本編の進行には、直接的には関係ありません。ただし、間接的には関係あるかもしれません。

また、タイトルにあるように、この後に第1章が始まります。今まではプロローグでした。

……プロローグ長っ！と思うのは当然かと思えます。自覚はありますから(笑)

ちなみに、いつもより短いです。

章前 あつてはならない記憶

時は西暦1972年末。場所はベトナム、ハノイ。

当時、そこはベトナム戦争の真つ只中。特にここ、ハノイは、米軍による広範囲かつ圧倒的な絨毯爆撃によつてほとんど焼け野原と化していた。

米軍では、この空爆を“ラインバッカー作戦”と呼称していたが、自らの命に危機が迫っている中でそんなことに気が回る者など、ここにはいなかった。

しかし、その中に爆撃を難なく逃れた者たちがいる。

一方は自らを魔術師と呼んだ。

もう一方は自らの意思に関係なく、ただその姿から異形と呼ばれた。

魔術師はその魔術という異能によつて、上空から無差別に放り込まれる無数の爆弾の災禍から逃れ、異形はその異形たる術によつてあるものはそれを避け、あるものはそれを呑み込み、またあるものはそれを自らの剣とした。

彼らは、ただそこにあるだけではない。

彼らは自分たちの存亡を賭け、ただひたすらに敵たる存在を薙ぎ倒さんとして各々の得物、あるいは牙や爪を振るつていった。

そこは戦場だった。

しかし、そこで行われているのは、戦いと言うのが憚られるほどのあまりにも一方的な“虐殺”。そこは無抵抗な獲物　つまり爆撃を逃れた数少ない民間人や抵抗する術を失った魔術師たちが乱雑に殺されていく、いわば屠殺場だった。

経過する時間に比例して増え続ける人の死体。いや、死体となっ

たそれは、もう人とは呼べない姿になっていた。

頭や手足がバラバラになるだけなら、まだマシだった。

そこに転がっていたのは、下顎だけが砕かれた頭や、指先がねじれた二の腕に食い込んでいる腕や、内臓の詰まっているはずの腹に頭頂部のない頭が無理矢理突っ込まれた胴体や、性器に何本もの腕が刺さっている女性の下半身、等々……。それはまさしく地獄絵図というに足る光景だった。

そんな残虐というも生温い所業を半日も続けているのは、周囲を飛び交う、あるいは走り行く異形たち。

犬や猫などの馴染みのある動物に似たものもあれば、蛇の頭が馬面になった龍のようなものもある。また、それらが人型となり、二足歩行するものもある。あるいはこの世には決してありえない形状の生物、例えば身体の8割が眼球に占められているものや骨格だけで動くものもあった。

それら、異形たちが、その脚で地を駆け、翼を持つものは上空を飛び、逃げ惑う人々を殺し尽くさんとして襲い掛かっていた。

その中心に一人の少女の姿がある。

ただ一人、その異形に一切牙を向けられることのない存在。

人は彼女を、“女王”と呼んだ。

一人の少女が、玉座と呼ぶに相応しい豪華なイスに座っていた。少女の服装はどこかの学校の制服と思しきセーラー服。十代半ばになろうかという少女には、別段不自然ではない。

ただ、その周囲に無数の異形を侍らせていなければ。

加えて、ここが戦場の只中でなければ。

“私”は、その少女を見上げる。

「……あれ？来てくれたんだ、ちゃん？嬉しいなあ、あたし」

その少女は 橘 竜児たちばな じゅうじは、私の名を呼んで、白々しくもそんなことを言う。私への攻撃を控えさせて、私だけをここに連れてきたのは彼女のはずなのに。

しかし、それは逆に彼女の意思一つで、私はここに来る途中で見た、あの人も呼べない姿にされてしまう、ということ。

「竜児……ちゃん……」

発言は慎重にしなければいけない。

「なあに？」

「……こんなことして、楽しいの？」

だというのに、口から出てきたのは彼女を責めるような台詞。しまった、と思ったときにはもう遅い。私は内心焦るが、しかし竜児は私の言葉を字面どおりにしか受け取らず、

「うん、楽しいよ？だって、見て。こんなにたくさん人が死んでいく……。あはっ、ほら見て！目玉が口の中に入ってるー！眼っておいしいのかな？ね、ね、知ってる？」

私は愕然とした。明らかに常軌を逸した感性。これはもう竜児ではない。絶対に避けるべきだと何度も言われ、竜児自身もそうならないようにと言われていたはずなのに……！

「それに、見て！あたし、この子たちの女王様になったんだよ！すごいでしょ？」

そう言うと同時に竜児の背後の異形たちが咆哮を上げる。私はその姿に萎縮することはないけれど、考えうる限り最悪の事態に途方に暮れていた。それでもなお表面上は平静を装う余裕はかるうじてある。ただ、途方に暮れて表情を変える余裕もないだけかもしれないけれど。

しかし、竜児は、表情の変わらない私を見て何を思ったのか、さらに笑みを深くして、

「ね、すごいと思わない？だってあたし、この子たちに認められた

んだよ？」

私は反応しない。こうなったときの対処はもう決めてある。

「大変だったんだよ？この子たちに認められるためにたくさんの人を殺した……。何人も何人も何人も何人も……」

竜児は、殺すなどという言葉をそう簡単には使わない。既に完全に壊れてしまっている。あつてはならないことなのに……。

いつ、何が来てもいいように、私は竜児に気取られないように身構える。

と、その瞬間、竜児がそれまでの笑顔を消し、冷たい目で私を見つめた。

「あんまり、そんな風にされると困るんだけどなあ……。楽にしてくれていいんだよ？あたしは君を殺すつもりはないから」

「……っ」

なぜ、わかった？竜児は戦闘に関しては素人なはずなのに。訓練を受けている私が、そんな簡単に竜児にわかるほどのミスをするはずがない。それは驕りなどではない、客観的な事実。そのはずなのに。

「ふふっ……。不思議そうな顔。でも教えてあげない。君の知らないことが少しぐらいあってもいいでしょ？」

台詞こそ笑っているが、表情は全く動かず無表情のまま。

その今まで見たことのない竜児の冷たい表情に、私は鳥肌が立つのを感じる。それが恐怖からなのかはわからない。ただ、得体の知

れない何かを感じていた。そのせいで、突然私の頬に何かの肉片が飛んできたことにすら数秒経たなければ気付けなかった。

「……君は、これを見てどう思った？」

と、竜児は唐突に、周囲の虐殺を繰り返す異形たちを見ながら、私に問いかけてきた。

「酷いと思う？ やめろって言いたい？ 止めたい？ いいよ、別にどう思ってくれても。どうせ君にはあたしを止められない。それにね……」

私は声が出せない。竜児の次の言葉を待つことしかできない。

「」

「……え？」

その言葉は、異形に撃ち落とされた米軍の爆撃機ボーイングB52の、立て続けに起こった爆音によって聞き取りにくかったが、唯一聞き取れた単語が、私の思考を凍りつかせた。

「聞こえなかった？ じゃ、もう一度言っただけよ」

……九能さんが死んじゃったら、もう君たちには勝ち目はないよね？って言ったんだよ、あたしは「

もう一度、私の背後で大きな爆音が響いた。

第1章 誘惑の狂姫 # 1

「じゃ、いつも通りに各個撃破でいいわね？」

この世界には、魔術師という存在がある。

魔術師がいる以上はもちろん魔術も存在する。

魔術は、現段階では人間の身体能力の一つとして捉えられている。しかし、その有無が極端で、使える者は使えるが、使えない者は使えない。

ただ、素人が練習すればプロほどできなくてもそれなりの形にはできるスポーツのように、魔術も、魔術師以外の人間でも修練さえ積み重ねれば簡単な魔術ならば使えるようになる可能性はある。それでもそれはあくまで“使えるだけ”で、魔術師のように魔術で何かができるレベルにはならない。

「おう、いいぜ。んじゃ、俺もそろそろ出ますかね」

「じゃ、私も。いいよね、お姉ちゃん？」

「ええ。久宮と未来小には前線に出てもらうから。あとは私と……天代はどうする？」

魔術には魔力が必要になる。この魔力という呼称は便宜上そう呼んでいるだけで、正式名称を“術性元素”という、元素の一種である。

この元素は、体内に保つことでその生物の自然治癒能力や体内の有害物の無毒化を促進する効果がある。この効果は量に比例して上昇する。

しかし、この術性元素は、存在が知られているだけで未だ観測さ

れていない、存在そのものが疑わしい元素である。

ならば、なぜこの存在が知られているのか？

それは、魔術があるから。現段階では誰もがそうとしか答えられない。

「あ、はい。僕も出ますっ。運ぶだけしかできないんですけど……」

「じゃあ、私連れてってー！。最初の内に減らしておいたほうがいいでしょー？」

「そうね。なら、天代、魅戈のこと、お願いできる？」

「はい。わかりました」

今のところ、この世界には魔力を持たないものはない。

人間だけではない、哺乳類も爬虫類も魚類も鳥類も、生物ではない無機物にさえ魔力たる術性元素が含まれている。ないのは、術性元素ではない元素だけである。

そして、その中でその魔力を使って魔術を行使する器官を持っているのが、唯一人間だけ。

人間が魔術を行使する仕組みはこうだ。

まず、その魔術を行使する人間、術者には、当然のことながら魔術を使うに十分な魔力が必要となる。

その術者は、まず詠唱文と呼ばれるものを口にする。この詠唱文は、他に呪文や祝詞などと呼ばれるが、ここでは最も広く使われている“詠唱文”で固定する。それを口にするのも、唱える、で固定しておく。

詠唱文を唱えると、声を出すことで声帯が運動する。この声帯の運動は一般人ならば普通、反回神経によって支配されているが、魔術師はさらに声帯から喉応術性神経と呼ばれる神経が全身に向かっ

て伸びている。これは、声帯の運動に反応してそれを信号に変換し、その信号に適合した身体の部位に信号を伝達する神経である。この間に魔術師の脳は、その魔術の行使に必要な魔力の量を計算し、適合部位の血液に含まれる魔力を体外に放出する。こうすることで、それは「魔術を起こす現象」として発現する。これに関しては、喉応衝性神経の電気信号と魔力がなんらかの反応を起こして魔術となるのではないか、と言われている。ただ、魔術の種類そのものが膨大なので、その反応がなんなのか、については魔術一つ一つの研究が必要であり、完全な説明はほぼ不可能ではないか、とも言われている。なにせ、今現在においても現在進行形で新しい魔術は増え続けているのだから。

「……行きましたね。私たちはどうしますか？あちらから要請があるまで車内で待機しますか？」

「いや、どうせなら僕たちも積極的に参戦するべきだろうね。この状況で何も出し惜しみすることはないから。着いたらすぐ出たほうがいいね」

「そうね。でも、咲には今回はあまり能力を使わずに、事後処理に徹してもらおうかしら」

「わかりました。深夜さんはどうしますか？」

「私は……どうせできることないしなあ……。奈都海さんは？どうするんです？」

『ん？……（後方支援ぐらいしかすることがないし、そうするが？まあ、場合によっては突っ込むかもしれんが） 筆談』

声帯の動きの違いが変換される信号の違いとなり、それが魔術の違いとなる。魔術は、ほぼ完全に詠唱に依存している、と言っている。しかし、詠唱文を唱えれば必ず魔術が発動するわけではない。

魔術師は、その詠唱文を繰り返し唱えることによって自身の身体に特定の声帯の動きを定着させる。その後、魔術の発動過程における使用魔力量の計算をスムーズかつ正確に行えるようにする。これができるなければ、魔術の発動が遅くなったり無駄な魔力を消費してしまったり、逆に魔力が足りずに威力が減衰したり、最悪発動しないことさえある。使う魔術が同じでも個々の魔術師によって消費する魔力は異なる。この使用魔力量の計算が上手くできるかどうかで、大抵の魔術師の優劣は決まってしまうほどである。

それさえできれば、血液の魔力を体外に放出するという行為はほとんどの魔術師が共通してできるため、ほぼ問題はない。そもそも、意識的かどうかの違いはあれど、すべての生物は代謝の一環として、常に体内の魔力をごく微量ではあるが体外に放出している。逆も然りである。

これは、生物の個体毎に体内に留めておける魔力の量に制限があるために起こる。前述したように、魔力は身体に有益なのだが、同時にその個体の許容量を越えた魔力が体内に侵入した場合、一転してその身体を蝕む毒になりうる可能性を秘めているのである。

また、魔力は生物の体内に留まっている間、その生物の精神情報、つまり感情を取り込んで純度が落ちていく。純度が落ちると身体への恩恵の効果が下がってしまうため、その純度を回復させる手段を取る必要がある。それが魔力の排出である。

魔力は大気中を漂っている間は純度を下げる唯一の原因である生物の精神情報と接することがないため、純度は回復する。人間も含めた生物は、それを取り込んで排出した部分を補っている。

「では、尊何さんと未永栖さんは中衛で、奈都海さんがそれを援護する形で、どうでしょう?」

「いいよ。未永栖さんも奈都海もそれでいいね？」

「ええ」

『（コクリ）』

生物の代謝によって排出された魔力は、前述のように感情を含んでいる。そして、その魔力は、含んでいる感情に準じた指向性を有する。魔力には、その指向性が似通っていれば反発しあい、異なっていれば差はあっても大抵は引き合う性質を持っている。それを繰り返すと、膨大な魔力の塊になることがある。大抵はそうなる前になんらかの生物に取り込まれるのだが、稀にそうならず魔力の集合体になることがある。その集合体は、それを支えうる指向性のない魔力、すなわち生物の純性魔力（いわゆる魂。生物の根幹を成す重要な魔力で、これだけは生物の精神情報に汚染されることはない。基本的にここで言う純性魔力とは、死後の生物の魔力に限定される）と融合することで、お互いがお互いにとっての自身の器としての機能を補い合い、魔力だけで構成された新たな生命体が誕生する。こうして、魔力だけによって形作られた生命体、DMFB（Directional Magic Fusion Being＝指向性魔力複合生命体）が誕生する。

また、この過程で人間の純性魔力と統合したDMFBは、人間に近い、あるいはそれ以上の知能を併せ持ち、DMFBの中でも最大級の危険度を誇る。これは、IDMFB（Intelligent DMFB＝有知性DMFB）と呼ばれており、その分野では通称として“ファントム”と呼ばれている。ただし、IDMFBは人間並みの知能と同時に理性も持っているため、DMFBとしての本能に従うことがなければ、他のDMFBと比べて最も危険が少ないとも言える。

このIDMFは、人間の純性魔力が他の異質な魔力と結合しにくい、という性質のせいで発生するのはごく稀である。同様の例として爬虫類の純性魔力が挙げられる。爬虫類の純性魔力は、人間と同様に他の魔力と結合しにくい性質がある一方、DMFBとなった際、その力を大幅に増幅する性質も併せ持っている。このことを“魔力の質が高い”と言い、爬虫類がよく魔術に関わる所以でもある。また、猫にも同じことが言える。

「……さすがに多いわね」

「こんなに……？」

「すごいな……。実際に見ると結構な威圧じゃねえか」

「でもこつち全然見てないねー」

「都合いいんじゃない？奇襲、奇襲」

しかし、これらのDMFBを抑えるのは、魔術師ではない。

“疵術師”と呼ばれる存在である。

疵術師とは、一言で言えば、魔術師の亜種のような立場の存在である。

疵術師は、様々な魔術を使うことができる魔術師とは異なり、通称“源血”と呼ばれる、疵術師それぞれに特有の、身体の一部にある交換不可能な純性魔力によって行使できる魔術が限定されている。しかし、その代償として、魔術の発動に詠唱を必要としないことが多く、使う魔術を一分野に限っているため魔術の規模が並みの魔術師よりも高いことがほとんどである。そのため、特別、長期間の修練が必要なく、即戦力として前線に投入できるという魔術師にはない大きな利点がある。

疵術師にはなぜ魔術の発動に詠唱が必要なのか、については、そもそも声帯から全身に広がっている喉応術性神経がなく、代わりに他の部分（主に脳）から、魔力と反応する電気信号を送る神経が、全身に広がっているためである。

疵術師が公式に確認されたのは、19世紀末期。魔術師全体の歴史から見れば、ごく最近である。つまり、疵術師は魔術師のはるか後に出現した、ということになる。実際にはさらに以前から存在していたことも充分考えられるが（むしろ、そうであることはほぼ確実）、これは、疵術師が魔術師の派生系、あるいは突然変異種である、ということの一つの根拠となっている。

「ま、それでも“Purgatory Week”ほどじゃないけどね」

「……あれってやっぱりそんなにすごかったですか？」

「すごいってもんじゃないよね。まさにDMFBの巣窟って感じだったから」

「うげ……見たくねえな、そんなもん……」

「私、見てみたいなー」

また、世界の疵術師のほとんどは、ADEOIA（Affected Deference Encampass Office Official International Association” 疵術師公式国際魔術協会）に所属しており、その能力を用いてDMFBの索敵、討伐、研究を行っている。それと同時に疵術師の能力の悪用を防ぐ役目も担っている。ちなみに、ADEOIAのAD（Affected Deference）は、疵術師の英訳Aff

ected Deferrance Magicianに由来している(というより、疵術師がADMの和訳である、というほうが正確)。

また、ADEOIAでは、DMFBを、Sランクを頂点としてさらにその下に位置するA〜Fにランク分けしている。これは、そのDMFBの魔力の密度によって定められており、基本的にDMFBの単純な強さはその密度に比例する、という性質を利用している。もちろん例外は存在する。それはIDMFと爬虫類、猫類の純性魔力をもととしたDMFBである。これらは、問答無用でSランクに分類される。

「さ、じゃあ行くわよ」

「りょーかい」

「さつてと……。天代は下がっておいたほうがいいんじゃない？」

「はい、そうします」

「よーしっ、それじゃ、詠うぞー」

ADEOIAは、表向きの形として一つの企業を装っており、実際に商業活動を行うことで活動資金をほぼ完全に賄っている。

そのため、ADEOIAには当然魔術について全く知らない社員が存在する。これらの社員にも魔術について説明することはなく、むしろ徹底的に隠匿される。

ADEOIAの実働部隊は、基本的にアメリカの陸軍を基準とし

た階級で分けられている（そのため、階級における陸海空の区別はない）。また、部隊編成においても一般的な軍隊のそれと似通っている。ただし、人員数の関係上、一部隊を構成する人数が一般的な人数の半分から3分の1程度になることもある。

また、ADEOIAでの昇格は完全な成果主義に基づいており、どれだけの戦闘に参加しつつ生き残り（新人であれば大抵はそれだけでも難しい）、どれだけのDMFBを討伐したか、のこれだけで決まる。そのため、上記の即戦力云々の理由も相まって、10代で尉官に就く者も多く、20代で佐官に就く者も珍しくはない。

「さて……着いたはいいけど……」

「なんですか、これ……」

『……………』

「これは……予想以上ね……。……深夜？」

「……魔力の記憶にありました。ちょうど前方約1380メートルに救出対象がいます」

ADEOIAは世界各地に支部を置いており、その数は2000以上に及ぶ。支部の支部、小支部を合わせればその30倍、6000を越える。

DMFBは当然ながらADEOIAの支部の置かれた地域のみに見れる、ということなどない。文字通り神出鬼没なのである。そのため、現れた場合比較的被害が大きくなりがちな、人の住む地域に小支部を集中させても、6000という数は、むしろ少ないほうであり、しかも、その支部や小支部に十分な戦力が配備されているとは限らない。実態として、疵術師が一人しかいない小支部も数え切

れないほど存在し、また、逆に他の地域の小支部に劣る戦力しかない支部も少なからず存在する。この人材不足は、今最もADEOIAを悩ませている問題であり、現在、応急処置的に規模の大きい支部、あるいはADEOIA本部からある程度の戦力を人員の乏しい支部、小支部に派遣することで対応している。しかし、規模の大きい支部には、当然その規模たる所以があり、それは周辺のDMFBの出現率が非常に多い、ということがほとんどで、規模が大きくとも戦力に余裕があるとは必ずしも言えない。

現在の応急処置も根本的な解決には決して至っていない。

『案外近いな……。俺が行きましょう』

「何、唐突に手なんか挙げてるんですか、奈都海さん？」

「自分が行くってことなんじゃない？それぐらいは察してあげようよ、咲ちゃん」

「待つて、それなら、私のほうが……。……。わかったわ、行つてらっしゃい。いきなり作戦が破綻することになるけど」

「……言い出したら案外強情ですよね、奈都海さんって」

その日本における代表例が、中国地方支部とその周辺の小支部である。

中国地方は、2年ほど前の2027年11月1日〜6日に起きた前代未聞のDMFB大量発生現象、通称“Purgatory Week”の舞台となった地域であり、その対処に当たるほとんどの戦力を送り込んだのが中国地方の支部と小支部であったために、貴重な戦力、特に主力となりうる百戦錬磨のベテラン疵術師を多数失った。

これは当時のみの損害に留まらず、後の活動にも支障を来たした。中国地方の支部と小支部は、失った戦力を補うために、本来は使えない新人を投入せざるを得ない状況に陥った。もちろん、その新人に、戦いに精通したベテランの疵術師と同等の働きなどできるはずもなく、その足りない部分は、生き残った数少ないベテラン、中堅の疵術師に負担となつて押し掛かった。どれほどの戦闘経験があつても、元は人間であるため、当然限界はある。Purgatory Week 以前の整った戦力であつても、下手をすれば北海道や関東の支部以上の負担を強いられる中国地方支部で、この問題はそれこそ支部どころか、この中国、四国、近畿地方の人類の存亡を左右する大問題であつた。

『よっ』

「わっ!?!?つて、奈都海!?!?何してるの、こんなところで!早く下がって!?!」

『いや、会長を助けようかと……』

「はあ!?!?バカなの、あんた!?!?徒手空拳で自衛手段持たないあんたが行つてどうすんの!?!?」

しかし、この問題はある一人の女性疵術師によつてある程度の解決を果たすこととなる。

その疵術師は、中国地方支部の副支部長に任せられると、その後自らを隊長とする遊撃を専門とした特殊部隊を編成する、という異例とも言える行動をとつた。彼女を含めて10名にも満たないその部隊は、その後1年半ほど隊員の増強も行わなかつた。しかも、彼ら部隊員は幾人かを除いて、元々所属していた支部や小支部では特に名があるわけでもなく、さほどの戦果も上げていなかった。し

かし、彼女の巧みな選別眼によって日本各地から選び抜かれた疵術師たちは、彼女の指揮下で優秀とも言えるほどに着実に戦果を上げていった。

敵であるDMFBは同時に複数出現することがあっても20体が精々。ランクがC以下であるなら、彼らだけで大体10体ほどは同時に相手できることを考えれば、充分に失った戦力の補充となりえるものだった。

これが問題の完全な解決になったか、と問われれば、それは否と答えざるを得ない。なぜなら、彼女が解決しようとしたのは戦力面での問題だけであり、それ以外の根本的な人材不足については何一つ解決していないからだ。しかし、それでもこの彼女の行動がなければ、少なくとも中国地方は今までの平穏を保っていられなかっただろう。そういう意味では、彼女の貢献は中国地方支部のみならず中国地方そのものにとって大きなものだったはずである。公に賞賛されるかどうかは別として、だが。

『だからこそ、だろ?』

「……………どういう意味よ?」

『お前が俺の護衛をする。俺はただ突っ込むことだけ考えてればいい。なんて効率的なことか』

「……………私が怪我する、とかは考えないの?ていうか、それなら私だけ行ったほうが効率はいいような気がするんだけど?」

『どうせ、すぐ直るだろ?それに、群れの中心に行ったほうが俺としてはやりやすい。殲滅を前提とした効率で言えば、これ以上はない。お前にとっても』

「……………もういい、わかった」

また、彼女の部隊は、約4ヶ月前のファントム襲来の際にもその討伐に貢献しており、中でもその1ヶ月前に部隊に入った2人のきょうだいの疵術師の功績は大きかった。彼らもまた、部隊長たる女性疵術師によってスカウトされた身だった。

「はあ……………じゃ、ちゃんとついてきてね?……………行くわよっ!!」

『あいよ。そっちもちゃんと守ってくれよ!!』

彼女の名は西園寺九能。

そのきょうだいは、当然ながら、幣原奈都海と幣原唯利亜である。

第1章 誘惑の狂姫 #1 (後書き)

6月5日

後の展開を考えて、ほんの少しだけ改変しました。設定や物語の進行に大きな変更があるというわけではないので、スルーできるレベルですが。

第1章 誘惑の狂姫 #2

「……んっ……う……」

目を覚ました気配がしたので目を向けると、そこには案の定、我が校の生徒会長 後朱雀沙夢濡さんがちょうど起き上がろうしているところだった。

彼女は一通りこの部屋を見渡してから、最後に私を視界に入れて首を傾げた。

「えっと……あなたは……？」

私は、暇つぶしに読んでいた學術書を閉じて会話をする態勢に入る。ちなみにその學術書は半分も理解できなかったから、本当に暇つぶし以外の何物でもなかったけど。

「5月の球技祭で一度お会いしましたね。西園寺九能といいます。……ジャンヌさん、とお呼びしていいでしょうか？」

学園にはもう一人後朱雀さんがいるので、一応そう訊ねると、ジャンヌさんは「ええ」という言葉とともに頷いた。が、すぐにまた顔に困惑を浮かべ、

「あの、ここは……？」

おそらく、今のジャンヌさんの最たる疑問だろう。目が覚めたとき自分の知らない場所について不安にならない人間などそうはいない。しかし、私はそれを知っていながらも、

「それについては後で答えます。今は私の質問に答えてください。」

急を要しますので。いいですね？」

と、提案でもなんでもなく、命令としての言葉を与える。

この説明をすると、連鎖的に説明することが増えていく。いずれはしなければならぬだろうけど、今はまずジャン又さんに訊いておくべきことを訊いておかないといけない。だから、ジャン又さんには悪いけれど、その質問については先送りにさせてもらう。

私は、ジャン又さんの表情の困惑がさらに深まったのを無視して、質問を始める。

「まず……ジャン又さん、あなたはいつ、どこで、何が原因で気を失ったか、憶えていますか？このうちのどれか一つでも構いませんが。どうですか？」

「気を……？え、私……」

その反応で大体はわかった。つまり、ジャン又さんは自分が気を失った、ということ自体に思い至っていない。

となれば、可能性として考えられるのは、寝ている状態のままあそこに運ばれた、ということ。今は朝だから、考えられなくもないけど、だとしたら、服装がどう見ても外出用であるのは不自然だ。

しかし、自分で着替えて現場まで向かった、というのも、また解せない。なぜなら、今回戦場となった静鈴町は、ジャン又さんの家からかなり離れているからだ。ここ、ADEOIA中国地方支部を挟んで奈都海たちの家とほぼ正反対にある。そして、静鈴町は奈都海たちの住む多根木町たねきまちのさらに向こう。徒歩では2時間半以上かかるし、他の交通手段を使うにしても、ジャン又さんは今、財布も定期パスの類も持っていない（失礼だけど、勝手に調べさせてもらった）からバスや鉄道といった公共交通手段は使えない。

さらに、ジャン又さんをここに連れてきてから、もう1時間以上

経つ。私有車で送ってもらったとしても、これだけ長時間戻ってこないとなれば、連絡が来てもおかしくない。友人が誰かに会いに来たとしても、その誰かから連絡が来ないのはおかしい。

ここまで考えて、疑問しか残らないと悟った私は、とりあえず思考を一時中断した。どの可能性にしても、結局はジャンヌさんに訊いてみないことにはわからない。

ちなみに、なぜ私がジャンヌさんの家を知っているかというのと、とてつもなく大きいからだ。もちろんジャンヌさんの自宅が。新興住宅街の中にいきなり現れる広大な日本家屋があれば、少なくとも記憶には残るだろう。それが通っている学園の有名人ともなれば、なおさら。職業柄、この辺をあちこち飛び回るので、余計に目に付くし。

それはさておき。

私は、とりあえず、続いて用意していた質問をしていく。

「次に、最近おかしなこと、変わったことはありませんでしたか？ 具体的には、他人には見えないものが自分だけには見える、とか」

なんか、変なオカルト宗教の勧誘文句みたいになってしまったけど、しょうがない。他に表現のしようがないから。DMFBなんて言って理解できるはずもないし。

しかし、ジャンヌさんは、客観的に見て怪しすぎる私の言葉に対して、

「……………いいえ。ない、わね……………」

と、しばし考えてから、律儀に返答してくれた。

そういうところに気付く余裕がないのか、あるいはこの状況を鑑みて私に従ったほうがいいと悟ったのか、それとも元々そういう性格なのか。どれにしても、私にとっては好都合なので、特に問い詰めることはしない。自分が気を失っていた、ということに困惑していたから、やはり余裕がないのかもしれない。

次に私が口にしたのは、次、というか一応最後の質問。

「そうですか。では、これが最後なんですけど……」

そう前置きして、私は続ける。

「ジャン又さんは……魔術師を知っていますか？」

……

一般的に見れば、何の意味があるのか、と疑わせるような質問。今時、魔術師なんて言葉は様々な創作物に使われている。“魔術師という単語”だけなら、知らない人のほうが少ないだろう。そういう意味では、さっきの質問とは違う意味で怪しいとも言える。

「……？ええ、知ってはいるけど……？」

怪訝そうな表情ながらも、ジャン又さんは答えてくれた。ジャン又さんもおそらく単語としての魔術師について言ったのだろう。

となれば、ジャン又さんは私たちと同じ世界の人間では、少なくともないということになる。

やはり、唯利亜の遠視は正しかった。というか、唯利亜はほとんど毎日ジャン又さんと会っているという話だから、“識ること”のできる唯利亜がそれを間違うはずがない。魔術師でなくとも、魔術について知っているかも、という推測に基づいた質問だったけど……。不発に終わったようだ。元々期待していたわけではないけど……

しかし、そうなると、この後が問題だ。

それは、魔術師や魔術について説明するかどうか、という問題だ。私たちについて説明するなら、魔術師についての話は絶対に避けられないし、当然魔術なくして魔術師は語れない。加えて、疵術師、ADEOIA、DMFBについても説明せざるをえないだろう。テンプル魔術団については……まだいいか。

と、言っても、必ずしもそうしななければならない、というわけではない。今回のことに関するジャンヌさんの記憶を消して、解放するという手もある。

つまり、0か10か、何も話さずに解放するか、すべてを明かしてこちらの保護下に入れるか。後腐れがないのは前者だし、安全性を重視するなら後者を選ぶのが妥当だ。

……という選択を、普通は迫られるのだが、今回は少しばかりイレギュラーが多い。

一つは、発見当時の状況の異常性。気を失ってはいたけど、唯利亜の言うとおり、DMFBの群れの中心にいたにも関わらず、ジャンヌさんは無傷で、かつ発見したときも周囲のDMFBは彼女を攻撃しようという素振りすら見せなかった。むしろ、私たちからジャンヌさんを遠ざけようという意思さえ垣間見えた。このこと自体は、前例がないわけじゃない。DMFBは“基本的には”人間に危害を与えるものだけど、少数、人間を敵視せず、逆に守ろうというものも存在する。これが一般的に守護霊と呼ばれるもので、DMFBの絶対数から考えればごく少数だが、学校や企業などの比較的巨大なコミュニティなら10人ほどは持っている人を見ることができるといふ程度の頻度で確認できる。しかし、これは、大抵は一人につき一体、多くても2、3体が常で、今回のように100体以上のDMFBが一人の人間に取り憑く（厳密には違うが、便宜上そう言うておく）ことなんて、到底ありえることじゃない。

もう一つは、そもそも100体以上のDMFBが一度に一つの場所に集結することなど、ほとんどありえない、ということ。2年前のPurgatory Weekを別にすれば、前例などほとんどない。

ただ……、このことに関しては、私には心当たりがないわけではない。でも、相違点が多くて、確固たる証拠もないから、まだみんなには言えないけど……。

これらの要素を鑑みると、今回のことの原因がわからないまま解放するのは、危険すぎる。私たちにとっても、もちろんジャンヌさんにとっても。

なら、やっぱりこちらの保護下に入ってもらおう？でも、すべてを説明するとなると……。

「……えっと、西園寺さん？」

「あ……」

私はジャンヌさんの声で我に返った。

また私の悪い癖が出てしまった。考え事をすると、すぐに周りが見えなくなる。

「すみません。その、考え事を……」

「ああ、そう……。それで、私からの質問も、そろそろ受け付けてもらえる？」

「……………ええ、どうぞ」

少し考えたが、今はジャンヌさんを安心させるのが先決だと結論付けた。今、ジャンヌさんの質問を拒んだら、ジャンヌさんの私への印象はあまり良くならない。今はジャンヌさんの信頼を獲得することを重要視したほうがいいはずだ。“わからない”というものほど人を不安にさせるものはないわけでもあるし。

「ごめんなさい。ええと……………さつきも言ったけれど、ここはどこ？」

早速、ジャンヌさんは質問をぶつけてきた。

私はとりあえず、簡潔に、

「ADEOIA中国地方支部。その中の医務室です」

と、真実を答える。すると、当然、

「アディア……………。ADEOIAコーポレーションのこと？ドイツの多国籍企業の一つ……………？」

やっぱり、ジャンヌさんなら知っていたか。それなら話は少しだけ省略できるかな？

「さすがですね、その通りです。ここはその日本の中国地方の支部なんです」

「……………うちの学園では、アルバイトは申請制になっていたはずだけど……………？」

「確かにそうでしたね」

「あなたから申請を受けた覚えはないんだけど？」

「私は正社員ですから」

「……………」

呆気に取られたというか絶句したというか、ジャンヌさんはそんな表情で私を見る。当然といえば当然かもしれない。学生がいきなり、自分は企業の正社員だ、なんて言ったら、それは驚くだろう。私だって、その企業がA D E O I A以外の企業だったら、驚くだろうし。

しかし、私は助け舟を出してあげることもなく、ただただ次の質問を待つだけ。

今、この空間には私とジャンヌさんの二人だけ。この二人だけの空間にしばし沈黙が降りる。

しかし、その沈黙を破ったのは、私でもジャンヌさんでもなかった。

ガチャ、という扉を開ける音とともに部屋に入ってきたのは、

「……………え……………？な、ナツ……………？」

そう、誰であろう、幣原奈都海だった。

……………で、その呼び方はいったいどうということ？

「……………」

とりあえず、俺たちについての大きかな説明を終えると、会長さんはいきなり黙りこくってしまった。と言っても、九能が説明している間は、意外にも何の質問もせずに黙っていたのだが。

もちろん、俺たちについて洗いざらいすべて話したわけじゃない。機密に関わることは当然伏せてあるし、個人的に知ってほしくないことは黙ったままだ。

「ジャン又さん？これで一応、説明すべきことは説明しました。何か質問はありますか？」

九能がそう訊ねると、会長は少し躊躇いがちに、なぜか俺の顔を見て、

「……………えっと、あの……………唯利亜ちゃんは……………？」

「え？」

と、またなぜか九能が答える。俺に答える術がないのは事実だが。

「ナツが……ってことは、唯利亞ちゃんも、もしかたら……」と思っただけだ……」

なるほど、いい推理です。

「その通りです。唯利亞も魔術師……その派生系である疵術師です」

「っ……そう……」

会長は、落ち込んだように俯いてしまった。俺だけでも結構ショックだったようだし、俺以上に親密にしている唯利亞が自分とは違う人種だと知ってしまったら、それは相当ショックだろう。

しかし、会長が魔術の存在を疑うことはないだろう。今この場で魔術そのものを見せたから、自分の目で見たものを疑うことはないはずだ。それに、九能がこんなところでそんな冗談を言うようには思えない、というのもあるかもしれない。完全に主観的な感想だが、こんな異常な状況で落ち着いて客観的にものを見られる人などそうはいない。……最近、また増えてきたキャッチセールスなんか同じ心理を利用してらんだろうか。本当にどうでもいいが。

さらに、俺がここに来たのは、九能の言うことに信憑性を持たせるため。やはり、あまり接点の多くない九能より、生徒会という共通のコミュニティに所属している者のいるほうが精神的にもリラックスできるだろうし、そういう人間が言うことのほうが信憑性は高まる。

というのもあるが、同時に唯利亞の敬愛する会長がどういう状態なのか心配だったのもある。唯利亞はあのままだと無理してでもこっちに飛んで来そうだから、早めに会長の無事を伝えておいたほうがいい。

俺が会長を発見した時、会長はDMFBに囲まれて気を失っていた。周囲のDMFBはほとんどが低ランクだったのだが、会長に近寄りうとするとなぜか攻撃を加えようとしてきた。自分の仕留めた獲物を外敵から守るのは野生動物の習性ではあるが、DMFBはただ殺すだけで食べるわけではないので、それが当てはまるはずもない。まあ、周りはすべて低ランクということもあって、さほどてこずったわけではない。

が、想定外ではあった。なにせ、そのDMFBたちは何の例外もなく、会長を抱きかかえる俺を狙ってくるのだから。

幸い、優秀な部隊によつてDMFBは当初の半分の60〜70程度に減らされ、最後には九能の一撃で一掃された。一掃した手段については追々話そう。そういう必殺技めいたものは土壇場まで隠しておくのがセオリーだろう？

とにかく、その後はDMFBが追加で現れることもなく、平和的にここに戻ってきた。終始逃げ回っていたとはいえ、軽い怪我はそれなりにしていたから、隣のもう一つの医務室のほうで簡単な治療を受けていた（咲の能力はそれなりに貴重なため、他の部隊の重症を負った疵術師たちの治療に回っている）。他の部隊員たちは、今頃力フェテリアで戦いの後の休息でも満喫しているのだろう。

おそらく、誰一人として会長について自分から興味を向けるものはいない。薄情、などとは思わない。戦いの中でも自分が生き残るだけで精一杯なのだから、その後のフォローなど任せられるものなら任せてしまったほうが断然楽だ。その顕著な例が咲で、彼女は戦闘能力が皆無、というほどではないが、戦闘を行うぐらいならいっそ戦いに参加せずに戦後処理を担当させたほうがその能力を存分に生かせるタイプの能力を持っている。

さらに具体例を出すなら、けが人の治療。疵術師は特定の魔術しか使えない、といつても、元々特に詠唱の必要ない汎用魔術と呼ばれる魔術は使える。その中には治療術も含まれている。俺も九能も他の疵術師も、特殊な例を除いてほとんどが使える。

しかし、だからといって全員が治療に携わるのか、といえば決してそんなことはない。

汎用術はいわば誰もが使える常識的な技術のようなもの。人間に例えるなら、歩く、走る、跳ぶ、手で掴む、といった他のあらゆる運動の基本となるような動きのようなもの。しかし、これらのいずれかに特化した者も当然存在する。歩くのが、走るのが速い者、人よりも高く跳べる者、握力の強い者、といった具合に。ならば、特化した分野以外には関わらせずに、一分野に集中させたほうが組織の全体的な効率から見れば、都合が良い。……といっても、咲の能力は戦後処理については治療だけではなく、戦闘で破壊された建造物の修復なんかもできるから、戦闘を度外視すればオールマイティとも言える。ちなみに俺も建造物の修復ならできる。

……

話がそれた。それすぎた。元に戻す。

今は会長の話だ。そうだ。心配して来た、と言ったのになんなんだ、俺よ。

と、自分を叱咤しつつ再び会長と九能に意識を向けると

「それで、唯利亚、どうしたんですか？」

「それがね。次の瞬間に唯利亚ちゃん、すっごく必死になっちゃって。その時の唯利亚ちゃん、ものすごい可愛かったんだから、ほんとうに」

ん？あれ？おかしいな。シリアスな場面はずなのに普通に談笑している。世間話なんかする余裕、あつたんですか、会長さん。

しかし、幸せそうな顔ですね、会長。唯利亜がそんなにいいですか。

「あ、そうだ、ナツ」

はい、なんででしょう。などと強がってみるが、内心結構びびっていたりする。九能と会話していたはずなのに、不意打ち気味に俺を、しかも亜美さんと同じ呼び方で呼ばれたら、そりゃびびる。あ、ここの亜美さんとは、母親のつくみさんのほうだ。ややこしいな。しかし、会長は俺の戸惑いに気づくこともなく、言葉を続ける。……本当は気付いていてあえて言わないだけかもしれないが。

「唯利亜は？ここには来てないの？」

そういえば、まだ言ってなかった。その質問には九能が答える。

「唯利亜は、今日は風邪で。家で休んでいますよ」

「あ、そうなの。後でメールでもしておこうかしら」

かなり喜びそうですね、唯利亜が。唯利亜の機嫌がよくなるなら、大歓迎ですよ。

……

って、違う。そういう話は今の本題を終えてからにしてくれ。これから、会長はどうするんだ？会長の処遇を決めておかないと、後々面倒だぞ。

という気持ちを込めて九能に視線を送る。すると

「あ、ジャンヌさんの監視と護衛は唯利亜に任せることにするわ。同姓のほうジャンヌさんも安心できるだろうし」

それは、俺に面倒ごとが回ってこなかった、という観点からすればいいことではあるが、唯利亜は今風邪で寝込んでいるはずだから無理だ。そして、普通にスルーしかけたが、唯利亜は男だ。ジャン又さんとは真正銘の異性である。

しかし、九能はそんな突っ込みをする暇すら許さず、さらに言葉を続けた。

「だけど、唯利亜は今風邪でしょ？だから、唯利亜の風邪が治るまでのジャン又さんの護衛は奈都海に任せることになったから」

……は？なんだって？

いやいや、なんで俺なんだ？お前、さっき同性のほうが会長が安心できるとか言ってたよな？なら、そこはお前か咲か魅戈さんだろ？未永栖さんは家庭があつて無理だから、この3人になるわけだが、その選択肢に俺が入るのはどう考えてもおかしいだろう？

「もう決まったことだからね、拒否権なんかないよ？」

いや、だから……

「上司の命令が聞けないの……？」

いきなり、九能が無表情になってそんなことを言い出した。

……

演技だとわかっていても、こっつ、なんか背筋に冷たいものが走るというか。

しかし、こいつが上司という言葉を使うということは、なにか考えがあるんだろう。こいつが遊びで仕事に関することを言うはずがないから。だから

『……わかった』

「ん、じゃあよし！がんばってね！」

ああ、九能の笑顔がかわいい……。

じゃない。なぜこんな状況でのろけにやらんのだ。

護衛ということになったら、俺は会長とともにここに泊まることになるんだが、そんな準備は当然していかない。ここに最低限の用意はあるのだが、それで十分なはずもない。

のだが、その懸念は杞憂に終わった。最悪の形で。

「奈都海にはジャンヌさんの家に行ってもらうから。ジャンヌさんの家なら宿泊する用意はありますよね？」

「ええ、大丈夫よ。一人ぐらいなら急に泊まりに来ても問題ないわ」

後半は会長に向けた言葉だが、俺にとっては当然前半の言葉が問題になる。まさかそんな軽い感じで死刑宣告されるとは思わなかった。会長も快く了承してくれたし、もう逃げ場はない。

しかし、こんな絶望的な命令を聞いても特に何も感じないということは、やはり感覚が麻痺してきているのか。そろそろ危険かもしれない。どうすればいいんだ。

「じゃ、よろしく、ナツ。ちゃんと守ってね？」

まあ、とりあえずは、会長のお守りに専念することにしよう。今までしてきた仕事の延長だと思えば、なんてことはない。

……多分。

第1章 誘惑の狂姫 #3 (前書き)

初めて1万字超えました。

なのほとんど進んでないって……

見返してみると半分近くが状況説明や語句説明。

やっぱり無駄な設定を増やしすぎた……？

とりあえず、第1章3話目です。

第1章 誘惑の狂姫 #3

「ってわけで自己紹介してくれる?」

「……………どういうわけで、ですか?」

という九能に対する咲の疑問も尤もである。いくらなんでも急すぎるだろ。一体何があった?

「だって、これからあなたたち、ジャン又さんを守ることになるのよ?守られるほうだって自分を守る人間の正体ぐらい知っておいたほうがいいでしょう?」

「え…………、私たちがやるんだ…………。めんどくさ…………」

と言ったのは未来小。相変わらず怠慢好きなやつだな。しかも、それを守るべき本人の前で言うとは、度胸がある。相手は通っている学校の生徒会長だぞ?知らないはずはないのだが。

というか、俺たちへの襲撃に関わったことについて何かないのか。九能も忘れていそうだが、それについてはしょうがないか。DMFBのせいでもかなり忙しかったし。

さて、今俺たちがどこにいるのかというと、もう大丈夫だと判断された会長とともにこの部隊のミーティングルームに集まっている。そして、皆が集まるやいなや、九能があんなことを言いだしたのである。

しかし、いきなりであるにも関わらず、

「ま、いいじゃない。いずれにしろ、いつかはうちが担当することになるんだから。」

そう皆を諭す大人な未永栖さんは、その直後に早速、

「私は、伊神未永栖^{いがみみえす}。階級は一応少佐ということになってるけど…
…。この部隊ではあまり意味はないかな？とりあえずよろしく」

そう言つて、手を差し出す未永栖さんに、会長も、

「はい、よろしく願いますね」

と、同様に手を伸ばした。

「さて、次は僕かな。僕は小鳥遊尊何^{たかなしそんか}。階級は大尉だから少佐の未永栖さんとは2階級違うということになるね。間に准佐という階級が入っているから。これからよろしく」

「はい、よろしく願います。」

続いて尊何さんが紹介を終える。一見すると、人の好いお兄さん的な印象の尊何さんは、やはり会長からも好印象なようだ。

で、次は、

「私はね、三井魅戈^{みついか}っていうんだよ。君よりも年上なんだからちゃんと敬語使つんだよー？階級は大尉だから尊何ちゃんと同じなんだからね！」

「はあ……。えっと、よろしくね……？」

「ん！よろしい！」

いや、魅戈さん、前の台詞からすれば全くよろしくないでしょう。まあ、本人が満足してるからいいか。

「んじゃあ、次は俺だな。俺は浅木久宮だ。階級は中尉。まあ、せいぜい頼りにしてくれや」

「はい、頼りにさせてもらいますね」

久宮さんにしてはおとなしい自己紹介だったような。と言っても、久宮さんは真面目なときは真面目だから、付き合いの長い他の奴からすれば不思議でもないかもしれない。

「あ、あの、それじゃ次、僕いいですか？えっと、僕は上杉天代と
います。階級は……伍長になってます。よろしく、お願いしま
す……」

「ええ、よろしく」

後半で顔を赤くしながらも言い切った天代に、会長は微笑ましいものを見る表情で答える。

天代は、俺や唯利亜よりも遅く今年の7月にこの部隊に入ってきた、いわば新人。まだ11歳で、実際、前の職場ではあまり戦場には出ていなかったらしく、能力の使い方も俺よりも覚えのない部分が多い。汎用術も上手いとは言えないし。かといって決して弱いわけではないが。

「あー、私は浄美未来小と言います。って、一応同じ学校なんで知

つてますかね？階級は中尉です。はい、次どうぞー」

「あ、じゃ、続けて私の紹介を。名前は大原深夜おほはらいわねです。私も同じ学校なので、学校でも声をかけてくれれば。では、次、咲ちゃんどうぞ？」

「はい。私は居川咲いかわさきといいます。ちなみに私と深夜さんには階級がありませんから。いわゆる士官候補生とも思っていただけはいかと。これからよろしくお願いします」

「ええ、浄美さんと大原さんは知ってるわ。居川さんは……ええと、多分中等部にもいなかったはずだけど……？」

3人の紹介をそれぞれ聞いた会長は、首を傾げて咲にそう訊ねた。中等部の生徒まで把握しているとは、さすがと言える。しかし、確かにそういう疑問は当然か。どう見ても学生にしか見えない年齢だから。といっても、この辺りに中学校は他にもあるし、会長もそれを考慮しての質問だろう。

「ええ、まあ……。学校には通っていないので」

「訊いてもいい？どうして？」

「こういう仕事をしていますから、元より正式な戸籍がないんです。疵術師には私のような方が多いので一応知っておいてください」

そう、疵術師のみならず魔術師は、優勢遺伝形質としての性質が強く、なんの能力もない人間との間の子でもほとんどが魔術師、あるいは疵術師として生まれる。咲はその家系で、父親が疵術師である。その父親は最初から咲を戦士として育てるつもりだったらしく、

戦っただけなら邪魔にしかならない戸籍が咲にはない。普通なら憤るところだが、本人には自分は戦場にいるもの、という認識しかないため、怒ることはない。それを幸とるか不幸とるかは見人次第だろうが、咲によればどうでもいいらしい。咲はそういう価値観しか持ち合わせていない。

それに戸籍ぐらいなら、頼めばA D E O I Aが偽造してくれる。九能もそれで鳳霊学園に入ったらしい。

で、最後にその九能が会長に向かって口を開く。

「では、最後に私たちですけど。知つてのとおり、こっちは幣原奈都海です。私は西園寺九能。奈都海には階級が設定されていませんが、私は准将で、この部隊の隊長をしています」

そう九能が言うと、会長はわずかに目を見開き、

「え？西園寺さんが？それに、准将って……」

さすがに表向きは17歳である九能が准将という高位に就いているのは、どう考えても不自然か。しかし、年齢が問題だということなら、本来は問題などない。なぜなら

「驚かれるでしょうが……、私は、既に年齢は70近いんです。正確には68ですけど」

「……は？」

おお、会長のこんな声は初めて聞いたかもしれない。貴重だな。というのは置いておいて、九能の言うことは真実である。

「私は、11まで魔術師の存在を知らずに過ごしていました。です

から能力が使えず、それが私自身の肉体に作用することもなかった。ですが、11歳の時、私は自身の正体を知り、魔術を使うようになりました。疵術師には、源血というものがある、と説明しましたね？源血はその疵術師自身の肉体に作用することもあり、私にとってはそれが老化の遅延だったんです。私は老化のスピードが約8分の1程度に落ちました。……実際は老化の遅延そのものではないんですが、詳しくは追々説明していきます」

そして、九能はそこで一旦区切り、

「さらに、奈都海にとっては喋ることができなくなるという弊害をもたらしました。ですから、奈都海は自覚していませんただけで、この症状が出た14歳のころには疵術師の能力は発現していません。自覚していなかったので、使うこともできなかったようですが」

「……………」

そう、九能の実年齢は68である。そのためにADEOIAの前身であるADUIAにも所属していた。

鳳霊学園には、未来小が高等部に入るのに合わせて入ったらしい。ちょうどその時、九能の外見年齢は17、8だったからちょうどよかったというし。……入る必要性があったかどうかについては、俺にはわからない。

そして、俺が喋れなくなったのは、14になる年の初春。しかもある人物の命日と重なった。俺が声をなくした日にその人は死んだ。もう、悪い思い出しかないのだが、だからといって忘れるわけもなく、未だに引きずっている。

まあ、それは関係ない。九能が言うには、俺はその当時から疵術師としての能力があったらしい。

しかし、だ。俺はその時から半年前までの3年間、当然魔術など使ったことはなかったし、DMFBも見なかった。つまり、魔術師である、という証になるものが何一つなかった。そもそも、なぜ自覚もなしに能力が発現したのかも不明だ。俺の能力が規格外というのもあるが、これはわからないことだらけだ。

さて、会長はまだ表情から驚きが抜けきっていないのだが、九能はそんなことおかまいなし、とばかりにさらに続ける。

「他にもまだいるんですが……、今はまだいいでしょう。必要あるかどうかは微妙ですし」

まだいたな、そういえば。人間と人間じゃない奴が。

ちなみに魔術師も一応人間ではある。ただ魔術が使えるだけだから誤解しないでほしい。

なら、誰が人間ではないのか？

それは

「失礼する。魔女はいるか？ここにいと聞いて来たのだが」

魔女とは、九能のことである。こいつは九能のことをこう呼ぶ。言い得て妙である。

じゃなくて。

さて、どう説明しようか。

この

この身長50cmにも満たない3頭身の生物のことを。

それ以外にもまだありえないところはある。

まず、この大きさにして人型。

次に背に生えた蝙蝠に似た翼。

さらに手に持った三叉の矛。

こんな姿をした生物が普通の人間の大体3分の1以下の大きさになったものだ。それが今、この目の前にいる。

これは一体なんなのか、という問いの答えは、まあ、予想はつくだろう。

DMFBである。

正確には、IDMF B、つまりファントムである。

ファントムも含めたDMFBは、普通人間に敵対するものだが、守護霊のように人間に味方する、あるいは味方にも敵にもならず中立を保つものもいる。こいつは後者で、ただ単に人間を敵視していないだけ、というファントムである。

名前はノクターン。これは人間が付けただけなのだが、どうやら本人(?)も気に入っているようで、呼べば普通に応答してくれる。

しかし、誤解しないでもらいたいのは、この3頭身はこいつのデフォルトではなく、普段のファントムゆえの強大な力を抑制するための姿である。本来の姿は、俺よりも背が高い、普通の人間の頭身の割合になる。そこからいろいろ制限した結果、こういう姿になったらしい。不思議だね、DMFBって。

しかし、それがなぜこのADEOIA中国地方支部にいるのか？それはこいつに訊いてほしい。実は強制されてここにいるわけではないらしいから。

と、立て続けの驚愕に固まっている会長に、九能が気付き、

「あ、ジャンヌさん。これ、というか彼はノクターンといいます。ファントムって説明しましたよね？彼がそれです」

「ん？」

その九能の紹介に反応したのは、会長ではなくノクターン。その直後に、ノクターンは会長を視界に入れ、

「ほお……、なるほど……」

と呟いた。

それを聞いた俺たち一同は、驚いてノクターンと会長をそれぞれ見遣る。なぜなら、ノクターンが魔術師以外の人間に関心を示すことなど滅多にないからだ。普段のこいつを知っているなら、多少ならず驚くはずだ。

「ノック？どうかしたの？」

「いや……、なんでもない。今日はお前に用があつて来たんだが」

しかし、ノクターンはすぐに興味をなくして九能に話を始めた。なんだったんだ、さっきのは？

九能も同じ心境のようで納得しかねているようだが、

「そう……。で、なに？」

と、ノクターンの話に意識をシフトさせた。

「いや、実はどうということもないのだがな……」

ん？珍しくノクターンがどもっている？今日はノクターンの意外な一面が見られる日か。

「どうしたの？」

「いや………まあいい。実はシャトーが、だな」

「ちょっとー！？ノクターン！どこにいるの！？」

突然聞こえてきた絶叫にも近い声に、一同が驚く中、

「来たか……」

と、ノクターンだけが辟易とした表情（実際は一つ目の描かれたアイマスクをしているので推測）で呟いていた。“また”なにかしたのか、お前は。

などと思っていると、
ドガンッ！！

という音とともにこの部屋の扉が外側からぶっ飛ばされた。つまり部屋の中にそのひしゃげた扉が飛んできた。

そして、そんな物騒なことをしてのけたのは

「いた！ノクターン！あんた一体どういうつもりよ！？」

と、息を荒げながら叫んでいるのは、ノクターンと同じように宙に浮かぶ3頭身の生物。

当然、ノクターンと同様にこいつもファントムである。しかし、ノクターンと違う点はいくつかある。

まず、性別。元になった純性魔力を持っていた人間の性別によるのはわからんが、ノクターンは男でこいつ、シャトーは女だ。

次に羽。ノクターンは蝙蝠の翼だが、シャトーのものは蝶の羽をスマートにしてそれが半透明になったようなもの。

全体的には、典型的な妖精を思い浮かべてもらえばいい。服装も大体そんな感じだ。

ちなみに、簡単に、とはいえ汎用魔術で強化を施してある扉をいとも簡単に破壊したのは、周囲を飛び交う光球によるものだ。あれは普段から100kg以上の重量を持っており、シャトーはこの形態でもそれを音速に近いスピードで飛ばすことができる。そこまですれば、さすがに壊れる。

しかし、そんなシャトーがなぜここまで憤っているのか。怒って大声を出すのはいつものことだが、ここまで頭に来ていることは滅多にない。

さて、その理由を聞きたいのだが。

「ノック！あんた、なんであたしを置いていくの！？」

「いや、寝ていただろう、お前は」

「起こしなさいよ！」

「起こすのは悪いかと思ったんだが」

「はあ！？あんたがそんな殊勝なこと考えるわけないでしょ！？言

い訳なんて訊いてないのよ！」

「まあ……確かに言い訳かもしれんが……」

「そうよ！一緒に行くって言ったでしょ！？なんで起こさなかったの!？」

怒鳴り散らすシャトーに、困惑するノクターン。

だが、その応酬がしばらく続いてから、事態を静観していた九能がようやく止めに入った。

「あーっと……、そろそろやめたら？」

「うっさい！薄汚い年齢詐称魔女のくせして口出しするな！事情もしらないくせに!!」

おお、九能に向かって薄汚いとは。しかも年齢詐称って、九能に對しては禁句だろう。こんな口を利けるのは、ここではこいつだけかもしれない。立場的に言える人はいるが、そこまで汚い罵倒を言うような性分の人ではないから。

しかし、俺が言えば確実に処刑台行き決定な罵声を浴びせられても、九能は表情一つ変えず、

「ええ、知らないわ。だから、教えてくれる？場合によってはあなたの味方になれるかもしれないし」

「はんつ。人間ごときに理解できるほど単純じゃないのよ。いいから、黙ってくれる?」

「あ、そう。それを人間が理解できるようにまとめることもできな

いほどあなたたちって無能だったの？それは残念だわ、ほんとに「

「なっ……あんたねえ……！」

変わっていないのは表情だけで、はらわたは活火山の火口のごとく煮え滾っていたようだ。相変わらず仲のよろしいことで。

「……はっ、もういいわ。人間なんかと張り合ってもしょうがないし。で、ノクターン！」

だが、シャトーのノクターンに対する怒りはかなり深いようで、シャトーはすぐに怒りの矛先をノクターンに戻した。一方、九能はノクターンやシャトーのことなど他人事のようになにやら会長と会話を始めた。

で、ファントム二人（？）のやり取り

「……………なんだ」

「なんで、寝てた私を起こさなかったの!？」

また同じ質問を繰り返した。なぜ、そこにこだわる。どうやら、一緒にいずこかへ行こうと約束していたが、ノクターンが寝ていたシャトーを置いていってしまったことが問題らしい。

そして、怒るシャトーの質問にしばらく黙っていたノクターンは、しかし、

「いや……」

と、なぜか顔をシャトーから逸らしながら、

「なによ?」

ノクターンのその行動にますます機嫌を損ねたように、シャトーの語調はきつくなっている。
が、

「……………お前の寝顔がかわいかったからだ……………」

と、かなり溜めてからとんでもない爆弾発言をしなされた。

「……………は……………」

シャトーよ、その疑問は俺たち共通のはずだ。
まさか、ノクターンが……………デレた?

「あ、え、あうえ……………ええ!??」

数秒かけてゆっくりその言葉を反芻したシャトーは、理解した途端、意味のわからない母音の羅列でもって驚きを表した。さらに、
どういう原理かは知らんが、シャトーの顔が真っ赤になっている。
しかし。

俺は、いや、俺たちはある可能性に思い至る。

あの堅物のノクターンが、なんのフラグもなしにいきなりこんなことを言うはずがない。必ず何か外的要因が関わっているはずだ。

……………まあ、その可能性を持っているものにも心当たりが一つしかないんだが。

俺と同じ結論に至った尊何さんや未永栖さんは微笑ましくこの状況を見ている。しかし、未来小はノクターンがデレ発言をしたという事実だけで満足らしく、真実に思い至っているはずなのに目を輝かせている。久宮さんはやにやと二人を眺めているだけで、同様に悟った深夜や咲は特に反応がない。これはこれで異常だ。

一方、よくわかっていない魅戈さんは「シャトーちゃんはかわいいんだよー？」とどこかずれた発言をしている。天代はただただ首を傾げているだけ。

で、九能はこちらなどほったらかしで会長と雑談していた。会長はこつちを気にしてはいるようだが。

なんなんだ、このカオスな空間。どう対処すればいい？

「異邦者。どうすればいいんだ、これは？」

ノクターンはなぜか俺を異邦者と呼ぶ。俺は歴とした日本人なのに。

いや、そんなことは今はどうでもいい。どうすればいい、だと？そんなの俺が訊きたい。そもそも、この事態を引き起こしたのはお前だろうが。

とりあえず、俺は時間の流れるに任せた。幸い、あの後すぐに気を取り直したシャトーがノクターンを半ば強引に連れ去り、この部屋にも静寂が戻ってきた。

が、また厄介事が転がり込んできた。これはそろそろ神様を呪ってもいい頃合いではないだろうか。天罰が下りそうだが。

それで、その厄介事だが。もう勿体ぶるのも面倒なので、簡潔に

述べる。

我が弟である幣原唯利亜が来た。

別に、来ること自体は悪いことではない。それを責めることはできないし、そもそも責める理由もない。

しかし、これは正真正銘の厄介事である。なぜなら、唯利亜は今風邪で、かつそのために看病を任せた愛燕が一緒だったはずなのだ。もちろん、訊きたいことはいくらでもある。

なぜ、風邪をひいている身でここまで来たのか？そして、愛燕はどうしたのか？あ、この二つだけか。いや、この二つで十分だ。これより多くても面倒なだけだ。

しかし、このどちらも唯利亜には訊けていない。部屋に入るなりいきなり会長に飛びつき、その後会長を助けに行けなかったことについて謝り、許してもらえたと思っただけに二人だけの空間である。訊けるはずがない。下手したら俺と九能以上だぞ。……自覚はあるんだ、普通以上だという自覚が、俺には。

まあそれはともかく、だ。一応愛燕にそれとなくメールはしておいたが、返ってきたのが“早く帰ってきてください。準備して待ってます（はあと）”である。俺のメールの内容に全く触れていないことに加えて、結局何が言いたいのかがさっぱりわからん。

だから、再び同じ内容のメールを送ってみたのだが、ほとんど間髪入れずに前と全く同じ内容のメールが返ってきた。これは、新手的嫌がらせかなんかか？俺にどうしろというのだろうか。

しかし、それを見る限り、愛燕については問題ないようだ。唯利亜が上手くやってくれたのか。軽い記憶の改竄ぐらいならできるからそうしたのかもしれない。愛燕相手に、というのが解せないが、仕方ない処置だと思えば問題ないだろう。

「ごめんね？ボク、助けに行けなくて……。ジャンヌさんのこと最

初に見つけたのボクなのに……」

「こら、また言ってる。だから、いいって言ってるでしょ？唯利亜ちゃんが来てくれただけでうれしいもの。私はそれだけでいいの」

「ん……。ありがとう」

もう少し睦み言は続くと思っていたが、やっと一段落したか。

唯利亜はやっと会長から離れて、普通にイスに座りなおした。会長はまだ名残惜しそうだったが。

とりあえず、その唯利亜に、まず九能が声をかけた。

「唯利亜、風邪はもう大丈夫なの？私たちが出て行ってからひどくなっただって聞いたけど」

その報告は愛燕から俺へのメールでもたらされた。俺たちが久宮さんに襲われる前だ。

「うーんとね……。実はまだちょっときついな。頭がぐわんぐわんするし」

そんな状態でよくここまで来れたな。称賛に値するぞ。

「そう。それじゃ、ジャンヌさんの護衛はやっぱり奈都海に任せることになるわね」

「あ、兄さんがするんだ？じゃ、安心だね」

唯利亜はそう言って俺に笑いかけた。ここで唯利亜が、自分が見たい、たとえば俺は会長の護衛から逃れられたのに。最後の砦はあ

っさりと崩れ去ってしまった。

まあ、いい。それは一度了承したことだし、唯利亜は風邪だから、したいと言ってもさせるつもりなど元よりない。

「そういえば、疑問に思ったことがあるのだけど」

と、あらかたの話題が終わったところで、いきなり会長が声を上げた。突然こんな状況に放り込まれて疑問を持たないことのほうが異常なのだが、その中でもより疑問に思ったことなんだろうか。特に、シャトーやノクターンについてはわからないことだらけだろう。俺だって詳しいことはほとんど知らない。

「魔力は体内の有毒物の無毒化を促進するって言うてたわよね？なら、なんで魔力を多く持っているはずの唯利亜ちゃんが風邪なんか引くの？病原菌ぐらいなら簡単に排除できそうなものだけど」

そっちですか。しかし、よく覚えてますね。俺なんか説明された時、そんなことは聞き流していましたよ。

なので、ここは九能が答える。

「あー……、それはですね。簡単に言えば、ただの風邪しか引き起こさないような毒性なら有毒物として見なされないうですよ。魔術師になると、魔力の制御力が強くなるので、その魔術師自身が、自分の生命に特に危険はない、と判断すると魔力も作用しにくくなるんです。だから、抵抗力も常人並みにしかならない、ということですよ」

つまり、死に至りそうな重い病気にはなりにくいですが、そうではないものには魔術師ではない人と同様にかかることがある、ということか。

これを医療に使えば、と思う者も多いと思うが、高濃度の魔力は耐性のない身体には毒にしかならない。しかも、魔力に対する耐性は生まれつき決まっており、上がることも下がることもない。

このことについて、1世紀程前に実際に実験したことがあるらしいのだが、ほとんどの被験者は魔力中毒（正式な名称はまだ決まっていない）になり、しかもひどい記憶障害に陥ったらしい。

これは、日常でも間々起こっていることで、“重侵干渉”と言われていている現象である。高濃度の魔力に耐性のない人間がさらされることで起こるこの現象は、魔術師やDMFBの存在が今まで公に秘匿されてきた所以でもある。

なぜなら、この現象は、耐性の低い人間が、魔術師の魔術の行使、あるいはDMFBの出現時に近くにいるだけで起こるものだからだ。その効果は、軽度から重度の記憶障害。ゆえに重侵干渉を受けた人間はほとんどがその時に見たもの、例えば魔術を使う魔術師や見えるならDMFB（実際に魔術師以外に見える人間がいるかどうかはこの現象のせいで未だに不明）を見た記憶を根こそぎ奪われる。

俺たちを見た人間が一人や二人なら、記憶に作用する精神干渉術を使えばいいだけなのだが、実際はそうもいかない。市街地で戦闘になれば、数十人、数百人単位でその記憶を消す必要がある。そんなことはとてもではないができないので、この現象は魔術師にとつてのある意味においての生命線ともなっている。

しかし、魔力の濃度は当然すぐに上がるわけではない。記憶が消える、というレベルまで濃度が上がるには、しばらく戦い続け、周囲に魔力を拡散させなければならぬ。また、記憶を消すためだけにそこまで魔術を使うわけにもいかない。だから、至近距離で魔術を見たり、ファントムというDMFBの頂点に位置すると言ってもいいシャトーやノクターンの近くにいたりしても、会長に記憶障害は起こっていない。低濃度でも多少気分が悪くなることがあるかもしれないが、それも5分や10分程度さらされるだけなら、出たと

しても軽い車酔い並みの症状しか出ないだろう。

初めて聞いた時は、どんなご都合主義な現象だ、とも思ったが、これがなければ魔術師の存在を隠し続けることなど不可能だったに違いない。まあ、魔術師の存在が当たり前になった世界というものがどんなものか、にも興味がないわけではないが。

「どちらにしても、体調管理がなっていないのは、戦士として失格なんですけどね。唯利亜はもう少し戦う者としての自覚を持ってもらわないと」

九能はあえて大げさに言っているが、そこまで重要でもなかったりする。風邪程度なら魔術でどうにでもなるからだ。ただ、魔術師が魔力中毒にならないとは限らないため、緊急時以外で魔術での治療は奨励されていない。治療術自体、対象者に魔力を吹きかけるようなものなのだから。

さて、その後は特筆するようなことはなかったから、割愛しよう。一つだけ言うなら、九能が未来小に制裁を加えたのはこの時だった。どんな制裁だったかは……言わないでおこう。主に未来小の名誉のために。

そして

「ま、当面は様子を見ましょう。わからないことが多いので、今何が起こってもどうしても後手に回らざるを得ないでしょうから。……ほんとはダメなんだけどね、保護対象を解放するなんて。でも、私の判断でOKってことで。解散！おつかれさまでした！」

今日の最後、九能がそう締めくくって今日の仕事が終わった。

「さ、ナツ、行きましょう。案内するから」

……俺以外。

第1章 誘惑の狂姫 #4 (前書き)

また1万字超えです。

しかも、また新キャラです。

ただ、この新キャラはこれっきりかもしれませんが。ただ出した
かっただけなので。

また出したくなったら出すかもしれませんが。

右を向けば、何の変哲もない民家の並ぶ住宅街。

左を向けば、5mはあろうかという木製の塀。それが遙か遠く、少なくとも俺の目が届く距離までは続いている。というか、ここまで来れば、塀というより壁である。

それは、当然、会長の自宅を囲む塀であり、俺は会長に連れられてそこに向かうところである。

……ただし、そんなただならぬ関係だったりほしくない。もしそうなら、俺の命はなくなるだろう。誰に命を奪われるかは察してほしい。あいつは簡単にヤンデレじみた行動をとるから怖い。

しかし、こうすることは、場合によっては俺の命を奪いかねない張本人から言いつけられたことだから、心配はない。今回に関しては、だが。

元々は、我が弟たる唯利亜がこの役割、つまり会長の護衛に当たる予定だったが、あいつは今風邪なので、俺が代わりにやっている。しかし、同性のほうが便利であるという理由で唯利亜を選んだのなら、咲や魅戈さんのほうが代わりとしては適任だったのではないだろうか。

そして、しつこいようだが、唯利亜は男であり、会長とは性別は違う。なんかもう、周囲には、唯利亜が男である、という意識は毛頭程度もないようだが。親ですら性転換に協力しているのだから。ただ、父親なら………毛頭程度ならあるかもしれない。でなければ、困る。俺が孤立する。

「どうかしたの？ ナツ？」

我が弟の不遇さ（本人にとってはどうなのかわからんが）を嘆いていると、そんな俺をどう思ったのか、会長が心配そうに訪ねてきた。しかも、それが冗談っぽくなく、本気に聞こえたので、なんか切なくなる。おそらく、俺の今の心境を理解してくれる人はいないだろう。

とは言うものの、護衛される立場である俺が心配されてもしょうがないので、俺は首を横に振って会長の懸念を否定する。

「そっ？ならいいけど……」

会長はそう言ってまた歩き出した。

しかし、この塀、一体いつまで続くんだろうか。この塀が見えるようになってから、もう10分近く歩いているような気がするんだが。

と、思った矢先、

「もうそろそろ門だから。もう少しだけ我慢してね」

会長は心でも読めるんですか。それとも、俺はそんなにわかりやすい雰囲気出してましたか？

そんなことがありつつも、喋ることができない俺と読唇術を使えない会長では、会話などできるはずもなく、沈黙の中で歩き続けることさらに数分。やっと門らしきものが見えてきた。

しかし、その門もやはりでかい。こんな大きさ、必要あるのだろうか？

「ちょっと待ってて、すぐだから」

俺は頷いてから、少し下がる。

すると、会長はその純木製だと思われる門には似つかわしくない機械的なインターフォンに向かっていくつか話しかける。そして、さらに数分待ち

ゴウン……

という低い、うなるような音を立てて門が開いた。そして、その門から一つの人影が現れた。

周囲にほとんど街灯のない暗がりでも、シルエットから辛うじて女性だとわかる。それでも、近づいてくるにつれて細かいところまで見えるようになってきた。

歳はおそらく20代前半ぐらい。髪は肩口あたりで切りそろえられている。暗闇でも浮くくらいに白い着物を着ており、その上から短めのエプロンを着けている。昭和以前のお手伝いさん、ということこんな感じかもしれない。

「お帰りなさいませ、お嬢様。事前に言われていた時間よりも多少ご帰宅が遅れたようですが……」

「ええ、まあ、いろいろあってね……」

実際にお手伝いさんだったらしい。よく見るとヘッドドレスまで着けているから、むしろ、和風メイド？に近いかもしれない。まあ、なるべく髪の毛が落ちないように、ということでは言うなら別段不自然でもないのだが。

「ナツ、紹介するわね。こちらは住み込みで私の家でお手伝いをしてくれる千恵ちえ 蜜華みつかさん。この家にはもう数人ほどいるんだけど、蜜華さんは私の専属、みたいなものかな」

会長の紹介が終わると、その人、蜜華さんは俺のほうを向き、

「どうも、紹介にあずかりました、千恵蜜華といます。お嬢様のご学友の幣原奈都海さまでいらっしやいますね？お嬢様からはもちろんです、ごきょうだいの唯利亜さまのお話からもよく聞いております」

「唯利亜もね、うちにはよく来るのよ」

会長の補足によって、俺の唯利亜云々の疑問はすぐに解消された。そして、もう一つ、蜜華さんの言う“ごきょうだい”が“御兄妹”でないことを祈る。まさかこんなところにまで浸食されているとは思わないが。特に蜜華さんは良識派のようだし。

しかし

「しかし、お嬢様」

「なに？蜜華さん」

「竜樹さまという方がいらっしやいながら、このような方をお招きになられるのは、いささか不謹慎かと。経験を積まれるのも大事なことはありませんが、しかし、節操というものも持っていたかなければ……」

あー、話が変な方向に。

そういえば、そっちの問題があったな。俺は男で会長は女。別に忘れていたわけではなかったが、俺が会長に、あるいは会長が俺にそんな感情を抱くという発想そのものがなかった。そりゃ、いきなり自分の仕える主人がどこの馬の骨とも知れない男を連れてくれば心配にもなるだろう。いや、一応弟である唯利亜は頻繁に来ているようだから、素性が知れていない、というわけではないはずなんだが。

しかし、蜜華さんは案外必死だが、会長は対照的に疲れたように嘆息して、

「ええ、わかってる。わかってるから。それに竜樹ともナツともそういう関係じゃないから安心して」

あれ？竜樹さんとは違うのか。

「しかしですね、お嬢様」

「ああもう！私の想い人知ってるでしょ？なら、もういいから！」

「……………わかりました」

蜜華さんは渋々、といった感じで頷いて、俺たちを先導し始めた。会長の想い人、というフレーズに少し好奇心を動かされたりもしたが、久々に見る不機嫌な会長にはどうにも話しかけづらく、蜜華さんには訊いても答えてくれそうにないので自粛する。この状況で訊くと、さらに厄介なことになりそうだし。

さて、そんなこんなでやっと玄関に到着。門から玄関まで数分はかかったような。遠いな…………。と、感慨に浸る暇もなく、続く驚愕が俺を襲った。

「ようこそ、とでも言えばいいのか？待っていたぞ、奈都海。それと、沙夢濡、おかえり」

昔ながらの横開きの玄関を開けると、そこでは後朱雀竜樹さんが迎えてくれた。

「ただいま帰ったわ、竜樹。それと、ついでみたいに言うのをやめてくれる？……って、ナツ？どうしたの、そんな呆けたような顔して」

そんなわかりやすい顔してますか、俺は。

いやいや、突っ込みたいのはそこじゃなくて。

しかし、会長は俺の疑問に関して得心がいったようで、

「竜樹がうちに住んでるって言ってなかったっけ？……ん？言っただよな気がするけど」

「いや、それは昨年度、奈都海が入る前ではなかったか？たしか……会計委員長を誰にするか、という会議の時にいつの間にかその話にシフトして結局決まらなかった」

「よく覚えてるわね……。あ、じゃあ、そういうことだから、ナツ。よろしく」

はあ、まあ、そうですね。実はさほどの驚きでもなかったりするんだが。いや、本当ですよ？

「もう少し詳しく言うと、九州のほうに実家のある俺が鳳霊に入ることになって、都合がいいということでごくに下宿することになったわけだ。わかったか？」

竜樹さんの親切な説明に俺は頷く。すると、竜樹さんも頷いて、

「では、俺は風呂に入ってくる。夕飯までには上がる」

「かしこまりました。奈都海さまをご案内してから、用意いたしますので多少お待ちいただくことになるかもしれませんが」

応答したのは蜜華さん。この人、料理まで担当してるのか。

その蜜華さんの言葉を聞いてから、竜樹さんは奥に消えていったと、竜樹さんが引っ込んでいったほうの反対方向から、ドタドタと騒々しい音が聞こえてきた。しばらくして、その音に女性の声が混ざってきて……、

「あ、あのっ竜樹さまっ！タオルをお忘れで きゃっ！」

そのお方は俺たちの目の前に到達した途端、盛大にこけた。前のめりにビターン！といった感じに。盛大すぎていっそ清々しいぐらいのこけ方だった。

その女性の声を聞いてか、あるいはこけた音を聞いてか、竜樹さんはやや面倒そうな表情をしながらも律儀に戻ってきた。

「希早さん、お客さんの前ですよ？はしたないことはやめてください」

「え……！？あ！す、すいません！あの、えーと……。あ！幣原奈都海さまですね、よろしくお願いしますっ。……え、えっと……」

どうしたらいいのか、という風に困惑する女性、というか少女？年代も俺たちと大して変わりないような。その少女に、耐えかねたように会長が、

「希早、自己紹介したほうがいいんじゃない？」

「あ、そうですね。あの、私、マリア・希早・アルベールといい

ます。普段は希早とかマリーと呼ばれております。それと、竜樹さまの臨時の専属でメイドをさせてもらっています。あの、どうぞ、ごゆっくりしてってください」

道理で日本人っぽくないわけだ。ブロンドがかった色の髪で、目も少し赤みがかっていて肌も黄色人種にはない白色。そんな風に容姿が欧州系だから、典型的なメイド服も割と似合っている。この純和風家屋にはミスマツチこの上ないが。それと、日本名が入っているということは、半分か4分の1か日本の血が入っているのだろう。

「ちなみにハーフらしいんだけど……、かわいいでしょ？」

「ふえ！？お、お嬢様！？そんな、なにを！？」

訊いてないのに聞かされた。まあ確かに、かわいいという評価に頷くことにはやぶさかではない。希早さんの精神衛生上よくなさそうなので、なんの反応もしないでおくが。

「うらやましいでしょ？こんなかわいいメイドがいるなんて、竜樹も案外隅に置けないんだから」

「はぁ……何を……。そもそも希早さんを俺の担当にさせたのはお前だろうに」

「あら、希早が就くって聞いた時はまんざらでもなさそうだったじゃない？」

「それは、俺のために一人でも就く、ということに驚いただけだ。まさかいるとは思わないうが、普通は」

と、いう風に会長と竜樹さんはくだらない言い合いをしはし続けた。顔を赤くしっぱなしの希早さんを置いて。

しかし、まあ確かにメイドはうらやましいものではある。一人でもいいから雇うのは男の一つの夢ではなかるうか？いや、人それぞれでいいんだが。

逆に、会長なら十人近い執事を侍らせていてもおかしくない、と思っていたんだが、実際はお手伝いさんが数人ほどだと言ったな。この広大な、下手な旅館よりも大きい家には少なすぎると言ってもいい。

俺がそんなことを思っていると、会長と竜樹さんがそれぞれ言いたいことを言い終わったと見るや、

「そつえば」

と、今まで静観していた蜜華さんが声を上げた。当然、皆の注目は蜜華さんに向けられる。

「奈都海さまはお話になることができないのでしたね。一応、わたくしどもは手話もできますので、そちらをお使いいただいても構いませんが？」

お気遣いは嬉しいのですがね、生憎俺は手話が使えないのですよ。ということも携帯しているメモ帳に書いて見せる。すると、

「そうですか。では、普段はどのように筆談で？」

俺は頷く。本当に普段となると、九能や唯利亜のような読唇術が使えるやつに翻訳してもらっているのだが、今この場にはないのだから、説明しても無駄だ。問題も特にない。

「さ、ナツ。上がった。部屋に案内するわ。竜樹は……お風呂に入るんだっけ?」

「ああ、夕食までには上がる。どうした、奈都海、上がれ。いつでも俺の家ではないんだがな」

確かにいつまでもこうして玄関に留まっているわけにもいかない。俺はお言葉に甘えて上がらせてもらおうとした。

だが、その俺の目になにやら考え込む会長の姿が映る。なんか嫌な予感しかしないんだが……

「じゃ、希早。竜樹と一緒に入ってきたら?」

「へ?何に、ですか?……って、え!?あ、いえ、その……!?!」

かくしてその予感は的中した。

自分が何を言われているのかを理解した途端、希早さんは顔を真っ赤にして慌て始めた。これだけでここまで取り乱すって、一体どれだけ純情なのだろう。

すみませんが、会長。このままではいつまで経っても先に進めないのですが。

そんな俺の懸念に応えるように、竜樹さんが口を開いた。これでやっと先に進めるか。

と、思ったのだが、

「ああ、ならお願いしようか?背中を流すだけでも」

などと、竜樹さんは真顔で口走った。

当然、周囲の反応は、

「はあ……。もうやめてよ……。竜樹の冗談、昔っからわかりにくいんだから。ほら、ナツ、行くわよ」

いやいや、話を脱線させたのはあなたでしょう、会長。と、思いつつも俺は会長に追従する。すると、蜜華さんがさり気ない感じで俺たちを追い越して、先導する形となる。

「……わかった。なら、俺は風呂に入ってくる。……希早さん、タオルを」

「え？あ、はい！申し訳ありません！」

「いや、わざわざありがとうございます」

視界の端で、竜樹さんに礼を言われて笑顔を浮かべる希早さんが見えた。その表情は、しかし、すぐに陰って落胆を浮かべて、希早さんに溜息を吐かせた。

しかし、俺は特に気に留めることもなく、奥へ案内されていった。

「こちらが、今夜、奈都海さまに泊まっていたたくお部屋です」

そう言つて案内されたのは後朱雀邸の一角にある客間の一つ。予想通り、畳の敷かれた純和室。

なのだが、なんとさえいいのか、まあとにかく

広い。

この一言に尽きる。もちろん、俺の部屋よりは広い。しかし、驚いたことに、俺の家のリビングよりも広いというのはどういふことだろうか。家具の類がないからそう見えるだけかもしれないが。

「この後、すぐに夕食の準備をいたしますので、できましたらお呼びいたします。その後、ご入浴となりますが……、ご入浴のほうを先にいたしますか？」

部屋の広さに呆けていると、蜜華さんにそう訊かれたので、あわてて首を横に振った。

「かしこまりました。では、ご入浴されている間に布団を敷きますので、その際は私か希早か、見つからない場合は他の者でも構いませんのでお知らせください。それと」

と、蜜華さんが隅にあるやや旧式の電話を視線で指し、

「何かご入り用でしたら、あちらをお使いください。ただし、午後11時以降でなければ繋がらない場合がございます。それまで私たちは屋敷内を動きまわっておりますので、控室にいないことが多いので。ちなみに、番号を押す必要はありません。受話器をお取りになるだけで繋がるようになっておりますので」

内線電話か。まるで旅館だな。

「これで一通りの説明は終わりましたが、何か質問は？」

そう訊かれたので、俺はメモ帳にさらさらと書いて蜜華さんに見せる。

“携帯メールのアドレスを教えてくださいなのですが。電話を使い、と言われてもどうしようもないので”

「そうでしたね。失念していました、すみません」

そう言いつつ蜜華さんは袖から携帯を取り出す。ありゃ、俺よりも新しいバージョンだ。なんか負けた気分。

そのアドレス交換はつつがなく終了し、もう質問はないということとを伝えると、「では、ごゆっくりおくつろぎください」と言っ
て蜜華さんは部屋から出て行った。

さて……

暇だ。

他人の家で一人になった時の暇をつぶす手段など、無きに等しい。特に趣味と言えるような趣味がない俺にとっては、暇＝退屈という

等式が成り立つ。

やはり、唯利亜から携帯ゲームでも借りるべきだったか。そういえばまだやりかけのゲームがあったような。愛燕が推奨していたから最初は敬遠していたが、やってみると案外ストーリーがよくできていたりキャラ作りも良かったり……。やけに同性愛が多い、というところに目を瞑れば良作と言えるだろう。

などと考えていると、携帯に着信が。もちろんメールのほうだ。誰からだ、予想しつつも見てみると、案の定九能から。で、内容は

“ ジャンヌさんに手出したら殺すからね ”

.....

..... 俺は殺されるらしい。

いや、会長に手を出さなければ殺されない。はずだ。多分。

突然のメールの内容に、俺は戦々恐々としていたが、メールにはさらに続きが。

“ 帰ってきたら、当然わかってるわよね？ ”

即刻、なんのことでしよう、と返したくなかったが、寸でのところで踏み止まる。

実際はわかってている。俗に言うデートだ。なぜ、言い切らないのかといえば、今まで九能と一般的な意味でのデートをしたことがないからだ。

職業病だろうか、九能は普段からほとんど常に警戒心を絶やさずに歩いているのだ。傍目からは何も変わりがないように見えるが、傍に立ってみればわかる。自分の一挙手一投足まで監視されているような不思議な感覚に陥る。しかも、それが不快じゃないというの

が、手慣れている証拠だ。相手に悟らせないことに関しては随一じゃないだろうか。

だから、それをデートと言い切るのは少し無理があるというか。しかし、まあ最近付き合ってやれていなかったから、そろそろいだろう。明日は日曜だし丁度いい。気分転換にならないわけではない。

と、何のこともなしに思ったことに気づいて、思わず笑みがこぼれる。

こんなこと、半年前なら絶対にありえない。まだまだ祖父の影響が色濃く残っていたのだから。

まあ、今はどうでもいい。とりあえず返信しておく。期待しておけ、と。別にあいつと過ごすことが嫌いなわけじゃない。でなければ、今まで付き合っただけでいい。

その後、いくらか九能とメールを交わした後、蜜華さんがなぜか直接夕食だと伝えてきた。なぜ、携帯を使わないのだろうか。

「ねえ、ナツ？ちよつといい？」

夕食を食べた後、風呂（これもやはりでかった。しかも男女で

別だった)に入り、あとは寝るだけだという時、俺に宛がわれた部屋に会長がやってきた。

俺は既に寝る準備に入っている。たださえ慣れていない寝床なのだから、あまり遅く寝たくない。明日はあまり寝られそうにないし。

しかし、会長を追い返すわけにもいかず、何もせずに固まっていると、会長はそれを肯定と取ったのか、確認も取らずに入ってくる。元々会長の住んでいる家なのだから、問題はないが。

ちなみに、夕食時、会長の親御さんが俺と会長の関係を探ってきて少々面倒なことになったという話があるが……。俺にとっては思出したくない思い出しにしかないのではないので、ここでは割愛する。

で、なんでしょう、会長。

「えーつとね……九能さんとは何か話した？」

俺は頷く。メールを交わしたことを話したと同義に解釈しての回答。

「そう。で、何を？」

それを訊きますか。Sexについて意見交換していましたが、と真実を答えればいいんでしょうか。ほぼ間違いなくそんな答えは望んでいないだろう、会長は。

“特には。ただの世間話を”

なので、適当かつ無難な答えをしておく。別に間違っちゃいない。あれだって世間話の範疇に入るはずだ。意見交換といっても、あいつが一方的に訳のわからない文章を送りつけてきただけ、とも言えるが。ちなみに、これも筆談である。

「じゃ、唯利亜ちゃんとは？」

九能についてはそれ以上興味を示さず、すぐに唯利亜について訊いてきた。こちらのほうがおそらく本命なのだろう。それに気付きながらも、俺は普通に答える。

“ 少しだけですが、メールをしましたけど ”

夕食の後、今度は唯利亜からメールが来た。風呂に入るまでしばらく暇つぶしにメールしていたわけだが、明日からは唯利亜が会長の護衛に入れそうだという。愛燕からもあつたが……、あれは無視していいレベルだ。というか、無視しないと病む。精神が。

「 どんな？ どんなメール？ 」

“ 会長についてですが ”

そう答えると、会長の表情に喜色の色が浮かぶ。この二人はまさしく相思相愛だな。性別的には間違っていないから、いいのでは？ とは思うが、いい加減眠くなってきた。なので、

“ そろそろ、本題に入ってもらえますか？ ”

と書いて会長に見せる。

「 む…… 変なところで鋭いのね、ナツは 」

いや、九能や唯利亜と話したか、なんて訊くためにわざわざ俺の部屋にまで来るわけないでしょう。

「まあ、いいわ。えっと……DMFBだっけ？あれについてなんだけど……」

なんでしょう？

「もしかして、DMFBってあっちで見たようなのばかりなの？」

あっちで見たようなの、というのはつまり、シャトーやノクターンのことか。ん？そういえば、一人足りないような。また寝ていたのだろうか。

そんな風に頭の隅で思考しながら、俺は答える。

「いいえ、違いますよ。あいつらは特殊ですから」

「ふーん？じゃ、どんなのが主流なの？」

やけに難しい質問が来た。俺はメモ帳をめくり、新しいページを用意する。

“主流というと、かなり難しいですが。体感ですが、最も多いのは昆虫などの純正魔力から生まれたDMFBですね。DMFBが大気中の魔力と生物の純正魔力が結合してできるのは説明しました。昆虫の純正魔力は指向性のある魔力と結合しやすい性質があるんです。昆虫の場合、絶対数がそもそも多いです、自ずとDMFBの数も多くなるんでしょう。そして、DMFBの姿は基本的に元になった純正魔力の持ち主だった生物に似てきます。だから、全体的に虫に似た造形のDMFBが多いですね”

「ってことは、あのシャトーちゃんやノックくんは元々……」

“十中八九人間の純正魔力を元にしたDMFBです。これはIDMF Bと言って、通称としてファントムと呼ばれています”

これは九能も説明していたはずだから、あまり詳しく言わなくてもいいだろう。

しかし、会長はまだ考え込み、

「ねえ……それって、人間の時の記憶って残ってるものなの？」

“……どうしてそんなことを？”

こう訊いたのは、会長がそんな疑問を抱いたことに少し驚いたからだ。普通はそんなことには気付かない。というか、疑問にまで発展させないだろう。それとも生まれ変わりに近いものだと思っているのだろうか。だとしたら、それは大きな間違いだ。

「いえ、ただの好奇心だけど……。ごめん、訊いちゃいけなかった？」

“いや、構いません。……ただ、わからない、というのが現状でできる回答ですけど”

「どうして？実際にいるの？」

“基本的にはファントムであってもDMFBである限り、人間の敵なんです。シャトーやノクターンは例外中の例外です。なので、言い方はあれですが、標本が少ないのが一つ。そして、二つ目が、シャトーには記憶があり、ますが、ノクターンにはないんです。しかも、シャトーが憶えている原因もノクターンが憶えていない原因も

わからない。だから、わからないのですよ”

「そう。あ、じゃあ、シャトーちゃんは憶えてるの？」

“はい。生きていたのは10世紀頃だったらしいですね。まあ、現在から逆算してのものなので多少誤差があるかもしれませんが”

それ以外はほとんど何も教えてはくれない。シャトーは案外、何かと秘密主義だったりする。しかし、少なくとも10世紀以上はDMFBとして生きていくことになる。

さて、これで終わりなどとは俺も思っていない。会長はまだ居座っているし。

「ね、悪いけど、もう一ついい？」

ええ、ええ、構いませんとも。

「んー……ごめんね？えつと……」

会長の口ぶりからすると、意外と軽めに思えるが、表情は真剣だ。

「DMFBって……生き物、なのよね？」

“まあ、生命体というぐらいですから、そうでしょうね”

一応俺も真面目に答える。ただし、この答えは必ずしも正しいわけではない。DMFBは魔力100%でできているのだから、生物に分類できないという説があるからだ。というか、実際にはDMFBに生物と同じような器官が確認されているわけではない。だから、むしろDMFBを生物として定義するのは若干ならず無理がある。

しかし、だ。シャトーやノクターン、他のファントムを見る限りではそうは思えない。別に、人間のような知能があるから、ではない。ただ、奴らと向かい合っていると、生きていくという主張を奴らから感じ取れるからだ。それは、あいつらが人間に近いために、同じような知能を持つ俺が理解できるから、かもしれない。だが、なら、それがファントムだけに当てはまるのか、と言われればそんなことは決してない。ファントムもDMFBなのだから。

ただ一つ言っておくなら、奴らには生命がある、とういこと。でなければ、俺たちはDMFBを“殺せ”ない。

さて、そんな俺のつまらん講釈はさておき、

「……あの子たちも生きてるのね……」

俺の理論からすれば、ですが。

「……………」

沈黙。

基本的に俺から話題を振ることはないから、会長が黙ると、この空間には沈黙しか残らない。

だから、当然その沈黙を破るのも会長だった。

「……………」そう、わかったわ。ありがと、じゃ、また明朝に。おやすみなさい」

会長はそう、まくしたてるように言っ部屋から出て行くこととする。

と、その前に、

「そうそう、ナッ」

襖を開けたまま、背中越しに声をかけてきた。

そして、顔だけをこちらに向けた。その表情は、これから誰かをからかってやるう、という怪しい笑みにあふれている。そして、案の定、

「夜這いとかしないでね？私、まだ処女だから」

処女でなければいいんですか？って、違う。手出したら九能に殺されるので。って、それも違う。処女でなくても殺害予告がなくても、俺が会長を襲うことはない。

しかし、何の反応もない俺を見た会長は、どう解釈したのか、

「じゃあね、ナツ。おやすみ」

と、いたずらの成功した子どものような笑顔を浮かべて去って行った。

「あ、でも安心してね？私、ほんとはちゃんと経験あるから」

ただし、余計なひと言を置いて。嘘だったんかい。

第1章 誘惑の狂姫 #4 (後書き)

希早さんの名前は、アルゼンチンの大統領を元にしました。かなりマイナーな人ですけど。

9月も半ばに差しかかるうとしているというのに、まだ真夏のよ
うに照る日差しにさらされながら、俺は突っ立っていた。

現在時刻午前9時。目的は、昨日から言われていた九能とのデー
トに似た何か。って、もうデートでいいや、面倒くさい。

今の実際の気温はそうでもないが、時間的にちょうど日差しが強
くなってくる頃だ。15分も日なたに立っていれば暑くなるのは当
然。

約束の時間はもう過ぎている。俺は1分や2分遅れたからといっ
て相手をねちねち責めるような心の狭い男ではないと自負している
が、さすがに誘ったほうが遅れるのはどうなんだろうか、とは思っ
た。だからといってわざわざメールを送るようなこともしないが。

しかし、本当に暑い。まだ、夏休みが終わって2週間も経ってい
ないから当然かもしれないが、これだと夏休みポケが抜けにくいで
はないか。と、意味もなく天候に責任転嫁してみる。

しかし、そんなことをしてみても、涼しくなるはずもなく、俺は
仕方なく扇子を取り出して扇ぎ始める。古い、などとは思わないで
くれ。扇子はたためるから、特にバッグを持たない俺にとってはう
ちわよりも持ち歩きやすいのだから。

そんな風に扇子で涼を取りつつ待つこと数分。

「ごめん、奈都海。遅れちゃった！」

と、言いながら九能が走り寄ってきた。

当初の待ち合わせ時間より遅れること、約20分。これだけ遅れるのは、九能にしては珍しい。

「ごめんね。ちょっと、未来小がね……」

ああ、つまり余計な世話を焼こうとした、と。そして、未来小の尾行を撒くのに時間がかかった、と。そういうことか。

『なら、飛んでくればよかつただろう？あいつなら追ってこれない』
「周りに魔力ばら撒きながら？久宮の時はそれでよかつたけど、今は逆効果でしょ。何も知らない人たちに知られちゃいけないだし、それに未来小なら魔力を辿って追いつかれるし」

それもそうか。万が一見られたりしたら、いちいち記憶をどうかしなければいけない。魔力をばらまきながら、というのも重畳干渉は起こせるが、血を流しながら走り続けるのと同義なので、あまりしてほしくはない。あの時は例外だ。

「ま、未来小は諦めてくれたみたいだし、大丈夫よ」

そういう九能は、普段の制服とは違ってスカートではなく、ジーンズだ。なんとというんだったか、ジーンズを腿がほとんど見えるほどにかなり短くカットしてある、みたいなやつ。それを穿いて太ももを大胆にもさらけ出しているが、膝から下は黒いロングブーツに包まれて見えない。九能の背は元々高くも低くもないが、ブーツのヒールのせいで高くなり、今は165かそれより少し高いぐらいか？
その上半身には、ダークレッドのTシャツを着ている。まあ、こ

れだけ暑ければTシャツ1枚でもおかしくはないんだが、サイズがやや大きめなのか、鎖骨どころか胸元まで結構開いているから目のやり場に困る。

それらに加えて手首や首にアクセサリをいくつか着けている。これは制服の時でも、割と着けているから違和感もなにもない。

髪型は、いつもは左側だけ結つてあるのだが、今日は後ろで結んでポニーテールにしてある。これだけで印象はかなり変わるものだ。髪を結っているのは、鮮やかな赤色のシンプルなりボンだ。

全体的に黒と赤でまとめられている。かっこよく言えば、ノワールとルージユ？ただ、九能を見ても、俺としてはこれがいいのかわかるとは判断できない。九能は基本的にかわいさよりもかっこよさを重視した私服を選ぶから、感想としてはかっこいいというのを期待してるんだらうか？

「さ！行く、奈都海！」

しかし、九能はいきなり俺の手を引いて歩き出そうとした。そういえば、九能はそういう類の言葉は期待しないのだった。

しかし、二人ともが待ち合わせ場所に来たのだから、移動するのは当然なんだが

『せめて、どこに行くのかを言ってくれ。でないとなんか不安だから』

「なによ、それ。不安って失礼だと思わないの？」

『なら、いきなりいかがわしいホテルに連れ込まれたことのある俺の気持ちも考えてみる。そんな経験があれば、警戒するのも当然だ』

「いいじゃない、あそこじゃ結局何もしなかったんだし」

しなかった、ではなく、できなかった、だろ。俺が必死に拒んだから。今じゃ、そこまで拒絶するようなことはないが、あれは軽いトラウマになっている。

「大丈夫よ。今日は適当に買い物して、適当にご飯食べて、適当に歩いて終わるから。……多分」

おい、なんだ、その最後の多分ってのは。それが怖いんだが。

「あーもー！とにかく行こー！いつまでもここにいるわけにもいかないでしょー！」

それは確かにそうだ。ずっと路上でこんなことをしているわけにはいかない。

『……わかった。で、どこにっ？』

「んー……。とりあえず買い物できるところ」

えらく範囲が広いな。そんなこと言えば、ほとんどの店が当てはまるんだが。

などと思いながらも、俺は九能の後ろ姿を追っていった。

で、結局俺たちが来たのは、駅前にある典型的な大型ショッピングモール。

ここは、鳳霊に近いこともあって、よく学生が利用している。今日のような休日にもなれば、お隣の真聖蝶の生徒もわざわざ来るほどにここには多くのものが揃っている。基本的にここだけで1日潰そうと思えば十分できる。

俺たちは、そんなショッピングモールの一角に来ている。周りには男物の服が整然と並べられている。俺が連れてきたわけではなく、その逆、俺が九能に連れてこられた。

こいつと付き合い始めて、俺が服やらその類を自分ではほとんど買わない、と知るや九能は俺をコーデイネイトするだとかなんだとか言い始めた。それから、九能は俺を連れてこうして服を見に行くことが多くなった。俺も口を出さないわけではないが、大抵は九能に任せている。俺の審美眼はかなり信用できないので。

……まあ、九能と付き合い合うようになってから唯利亚や亜美つぐみさんからの服装に関する評価が上がったような気がしないこともない。その点に関しては感謝している。

しかし、そう気楽にはいられない。いつもなら、この後に九能自身の買い物にシフトするからだ。今は俺が当事者だから暇になりたくてもなれないわけだが、九能が一人で買い物を始めると途端に暇にしかならない。まあ、唯利亚や愛燕と一緒にいる時よりはマシだが。

「ね、これどう？合う、かな？」

『なら、こつちのほうがいいんだが。色合的にも』

「んー……そうね……。奈都海って派手な色似合わないもんねえ……

…」

そう言ってまた商品を物色し始める九能。

さて……

長くなりそうだ……。

「んー！なんか、太陽が気持ちいい！ね！奈都海！」

いや、同意を求められても困るだけなんだが。

あの後、いつも通り九能は俺を放置して自身の買い物を済ませ、しばらく店内をさまよってから出てきた。

中はクーラーが利きすぎじゃないかというぐらいに利いていたから、この太陽の熱が恋しくなっていたんだろうか。確かに気持ちいいことにはいいんだがね。

「さてと、どこ行こっか？」

俺は何も用意していないぞ。どうせ事前に考えておいても、九能によって大体無駄になるから。

まあ、行くとするなら、真聖蝶付近まで行けばもう一つほぼ同規模のショッピングモールがあるが、今から行くとなると少しばかり面倒だ。なら、あとは適当に周辺をうろつくか、近くの公園にでも

行くか？

時計を見ると、午前11時半。思いの外早めに買い物が終わったから、これからすぐに昼を食べに行こう、というには少し早いし……。別に早めに食べてしまってもいいわけだが。

と、思案していると、

「そつだ！奈都海、あれ乗ろ！」

そう言つて九能が指さすのは、ちょうどバス停に停まっている、よくこの辺りで見かけるようなローカルバス。あれに乗つて一体どこに行くか？

「ほら、早く！」

『ちよつ、おい！？』

俺はなす術なく腕を引かれて、九能に続いてそのバスに乗り込んだ。だ。

乗つてみると、休日にも関わらず人はあまり乗っていない。それをいいことに、九能は俺の手首を掴んだまま後ろの席へ一直線に向かう。

九能が座つたので、俺もその隣に座らせてもらう。

「どこに行くのかな、これ」

おい、どこに行くかもわからないバスに乗つたのか、俺たちは。ふいに九能が呟いたその言葉に、俺は戦慄する。幼少のころに乗るバスを間違えて全く知らない土地に行きついて途方に暮れたことのある俺にとっては、目的地のわからないバスはトラウマの塊ではない。バスはあまり利用しないから、俺にもどのバスがどこに行く

かよくわからないし。

しかし、九能は楽しそうに窓からの景色を楽しんでいる。いつのまにか駅前を通り過ぎて、周りはまだ緑のほうが多く残る田んぼに囲まれている。後ろを見れば、今日俺たちが行った駅前のシヨッピングモールがそう遠くない距離に見える。つまり、真聖蝶とは逆の方角に向かっている、と。

だからといって俺は安心できないわけだが。しかし、まあ、九能が楽しんでいるなら……悪くはない、か。

「では、お気をつけて行ってらっしゃいませ」

そんな蜜華さんの見送りの言葉にいくつか返しながら、ボクたちは門を出て行った。

ボクたち、というのは、ボクこと幣原唯利亜とジャンヌさんこと後朱雀沙夢濡さんのこと。

今朝、ボクはジャンヌさんの護衛役を兄さんと替わるために、こ

こ、後朱雀邸を訪れた。風邪は治っていたし、兄さんはもつと別の用事があるしね。

ちなみに、ボクの風邪は突発的なものだったらしく、昨夜には熱は結構下がっていた。もちろん、愛燕の看病のおかげもあるだろうけど。母さんから聞いた話では、愛燕が帰ったのは11時半ごろで、それまでずっとボクの看病をしてくれたみたい。ボクはその前に寝ちゃったけどね。一応、メールでありがとうとは言っておいたけど……。また学校で直接言っておいたほうがいいかな。

「さ、唯利亚ちゃん、どこか行きたいところはある？」

そうだ、ボクたちは明確な行きたいところを目指して出かけたわけじゃない。むしろ、何の計画もなしに出てみた、という感じ。無計画極まりないけど、ボクが外出する時は大抵こんな感じだ。

「んー……、じゃあ、ジャンヌさんと一緒ならどこでも」

ボクは少し考えてから、ちょっとだけ気障っぽく言ってみる。ジャンヌさんも、ボクの期待通りに、

「あら、私はそんなに軽い女じゃないから、口説いても無駄よ？」

と、冗談っぽい笑顔交じりに返してくれた。

「じゃあ、ジャンヌさんは？どこか行きたいところある？」

「唯利亚ちゃんならどこへでも行ってあげるわ」

反対にボクが訊くと、今度は悪戯をする子どもみたいな笑みで、間髪いれずに反撃が返ってきた。ジャンヌさんをからかおうとする

と、絶対こうして反撃されちゃう。それに、ボクはこれに対抗する方法がないから、多分ずっとジャン又さんには敵わないだろうね。でも、それが嫌というわけじゃなくて、むしろジャン又さんとうしていられるのはそれだけで嬉しいことだ。だって、ジャン又さんはボクの恩人だから。高等部に進学して2カ月足らずで、小学生の時の悪夢を再現しかけたボクがここまで立ち直れたのは、ジャン又さんのおかげだもの。もちろんそれだけじゃない、ボクがジャン又さんのことを好きだっていうこともある。

「それじゃ、適当にぶらぶらしましょうか。そうすれば、行きたいところも見つかるでしょうし」

「うん、賛成！あ、でも、行きたいところ見つからなかったら……？」

「もう、人の話聞いてなかったの？」

ジャン又さんは、出来の悪い生徒を叱る時の教師みたいな口調でボクに言い、

「唯利亜ちゃんとならどこへでもって言ったでしょ？私は唯利亜ちゃんと一緒になら、それでいいの」

ボクはちよつと放心状態。まさか、こんなセリフがこんなに似合う人がいて、しかもそれがボクに向けられたものだなんて。

「ふふつ……。唯利亜ちゃん、真っ赤よ？」

「もー！」

ボクだって自覚してる。ジャン又さんみたいに綺麗と格好いいを

両立したような人に言われれば、ボクじゃなくても、男の子ならもちろん、女の子だって平静じゃいられないよ？赤面するぐらいなら、まだマシだと思う。

赤くなっただことを指摘されてさらに赤くなっただボクは、固まってしまっただ、いつのまにかジャンヌさんに追い抜かれていることにも気付かなかった。どうしよ、また熱が出てきちゃいそう……

「もう、かわいいー！唯利亜ちゃんってなんでこんなにいちいちかわいいのかしら!？」

うあ、だからっていちいち抱きついてこないでほしい。いや、別に嫌ってわけじゃないけど、今は他人の目もあるし。ほら、変な目で見てる人もいるし。大半は微笑ましい光景を見るような目だけでも。

ジャンヌさんが一通りボクを愛でて満足したように離れたところで、ボクはちよっと気になったことをジャンヌさんに訊ねてみた。

「ね、ボクらって他の人から見ると、どう見えるのかな？」

「んー……どうかしらね？どう思う？」

「んっと、友達？それとも姉妹かな？それとも」

ボクがいくつかの可能性を挙げていく中で、ジャンヌさんは唐突にそれを遮って、

「それとも、恋人？」

なんてことを言った。

「……………そう見える人には病院に行くことをお勧めしたいよ、ほんとに」

少なくとも女の子に見えるはずのボクとジャンヌさんが一緒に歩いているのを見て、ボクたちが恋人だ、なんて可能性に思い至る人は絶対どこがおかしいんじゃないかな。愛燕なら冗談で言うかもしれないけど、あくまで冗談の範疇だし。

「いいじゃない、私は女で唯利亞ちゃんは男の子でしょ？」

「むー、そうだけどおー……………」

正直、この場合本来の性別は関係ないような気がする。問題になっているのは、他人からどう見えるか、だから。でも、もしかしたら

「あ……………」

「?どうかした？」

「あ、ううん、なんでも……………」

ボクが思いついた、というか思いついてしまったのは、ジャンヌさんはそういう関係を望んでいるんじゃないか、ということ。でも、それは本当にありえないことで、まさかなんて思うのが当然なんだけど。

ジャンヌさんが好きなのは、あくまで後輩とか友達としてのボクのはずだし、さっきみたいにボクを男扱いすることなんてほとんどなかった。強いて言えば、公式の場なんかではさすがに嘘を言うわけにはいかないから表立って女扱いはしてなかったって程度だった。

……まあ、それ以前に生徒名簿に女子として記録されてる時点で意味ないような気もするけど。

っと、これ以上否定すると、逆に逃れ得ないフラグが立ちそうなのでやめておく。っていうかもう立ってる？

「唯利亜ちゃん、ここなんかどう？」

「あ、いいかも。見てみよっか？」

ボクがそんなことを考えていると、ジャン又さんが一つのお店を指してボクに訊いてきた。ボクは一度頭の中をリセットしてジャン又さんの言葉に応える。ぱっと見たところ、アクセサリー店みたいだけど……？

ボクたちはとりあえず入ってみることにした。

「おー、らっしやーい」

あれ？イメージと全然違う。こういうお店よりはむしろラーメン屋なんかで聞くような……

なんて思ってたなら、

「んお？幣原妹じゃん。何してんのさ、こんなところで」

そうボクたちにやけにフランクに言ったのは、兄さんのクラスメイトの槻野那束^{つきのなつか}さん。どちらにしても予想外すぎる。なんでこの人がここにいて、しかもなんでいらっしやいなんて言っただらう？と言っても、それは考える必要もなく容易に想像がつく。

つまり、那束さんはこの店員だということ。

でも、なんかイメージがね……。ここには、かわいいっていう範疇に入りそうなものばかりだから。それに、このことを、こんな

ところ、なんて言ってたし。

と、思っていたけど、よく見るとドクロやクロスをモチーフにしたものもあるし、おかしくは……いや、でもなんで？っていう疑問は残る。

「ああ、客？改めていらっしやい。つってもわざわざ買っようなものはないと思うけどなー？」

本当にこのお店の人なのかどうか判断に困る言葉だよね、それ。ほんとに買わせたいの？

「那束さん……だよね？」

「ああ。そうだけど？」

「なんでここに？」

「ここ、あたしの店なんだよ」

当然の疑問を放ったところ、驚愕の答えが返ってきた。ここで働いてるっていうならわかるけど、那束さんのお店？

「でも、この商品作ってるのは兄貴のほう。いつもはちゃんと雇った店員がいるんだけど、ま、いろいろあって今はあたしが代わりにやってるだけ。一応店の所有者はあたしってことになってるけど」

「へえ……ここ、槻野さんがやってるの？すごいじゃない」

「おおっ……どちらさまっ？」

ここに入って初めて声を挙げたジャンヌさんに、那束さんは素性を訊いている。あれ？わからないの？

「一応はじめまして、になるのね。私は、後朱雀沙夢濡っていろいろしく」

「あー……これはまた、やけにDQNな名前を……」

那束さん、それは禁句でしょ、確実に。一番言いたかったけど、今まで皆が自制してきたセリフだよ、それは。

だけど、言われた張本人のジャンヌさんは、気にする様子もなく、

「でしよう？未だに名乗ったら、はあ？って顔されるもの」

「でしようねー。ま、んなこと言ったら、唯利亜なんてのも日本人の名前としてはおかしいですけどね」

できればほつといてほしかった。それに、ボクの名前にはちゃんとした由来があるんだから。……まともな由来じゃないけど。

「一応名乗つとくと、あたしは槻野那束。……で、お二人はどういう関係で？普通に友達？」

やっぱり、そういうのが普通の予想だよな。間違っではいるけど、さっきボクのことを幣原妹って言ってたし。やっぱり皆の頭の中では、ボクは女の子っていう設定？

でも、その疑問そのものはおかしいよね、鳳霊の生徒として。

「知らなかったっけ？ボクが生徒会に入ってるってこと」

「いや、知ってるけど?」

「その会長さん。生徒会長さんだよ」

そう言つと、那束さんはジャンヌさんをまじまじと見つめ、

「……ああ!どっかで見たことあると思つたら!」

今さらですか、と突っ込まざるを得ない。自分の学校の生徒会長の名前ぐらい憶えておこつよ。こんなに覚えやすいんだしさ。

「あーそっか。そりゃ、知り合いなのも当然だ。ゴマすつといたほうがいいかね?」

「私に取り入ってもあまり意味はないわよ。鳳秋祭が終わつたら任期は終わるんだもの」

そっか、そういえば鳳秋祭が終わつたら、今の生徒会と一緒に終わるんだっけ。兄さんと由宇也さんは変わらないうけど、会長に指名されただけの私設秘書みたいな立場のボクは、次の生徒会に残るとは限らない。といつても、ジャンヌさんが残るならともかく、ジャンヌさんも辞めるならあまり未練はないけど。

「んじゃ、奈都海か由宇也か……。両方男だな、そういえば」

何考えてるの、那束さん。自分の部活の地位向上を目指すのは結構なことだけど、それで命を捨てちゃだめだよ。特に兄さんに手出したら、ボクでも助けられないからね?あ、もちろん貞操も捨てちゃだめだよ?

「まあいいや、今は。で、なんか買っつ？良さそうなのあったら、言っておくれよ」

「このって全部那束さんのお兄さんが？」

「そ。男の自分がデザインしてるって言ったらいメージが下がるっつってあたしに任せてんの。こうしてあたしが店に出るのは珍しいけど」

「へえ……。なかなかいいじゃない？結構売れてるでしょ？」

いつのまにかお店の商品を見ていたジャンヌさんが、そんなことを言った。なんで訊くかな、そういうこと。

「まあ、どんだけ売れば売れたって言えるのかわからないんですがね。寄ってくる人は大体ひとつは買っつてくかな？」

「1日にどれくらい入るの？お客さんは」

「二桁入ればいいほうっすかね。朝の9時から昼の3時までしか開いてませんし」

それは、この規模のお店からすればかなり売れてるんじゃない？すごいと思うけど。

「それに毎日開店つてわけにもいかねえし……週3、4ぐらいか、開いてるのは。本業でもないし」

だとしても十分だと思うけど。そのお兄さんに一度会ってみたい
な。

「あ、じゃあ、那東さん。ボクも見ていいかな？」

「おお、どうぞどうぞ。見てってくださいな、お客様？」

「冗談めかして言う那東さんに笑いかけて、ボクもジャンヌさんと同じようにお店を回り始めた。

「……………奈都海」

『なんだ、唐突に』

俺たちはあれから結局1時間ほどバスに揺られた後、えぐらのみやのたかだい江倉宮高台前とかいうバス停で降りた。一応、県内だろうが、俺はこんなところ来たこともないし知ってもいない。

で、バスから降りた途端、妙に軽い足取りでその江倉宮高台とや

らに続いているであろう階段を上っていく九能の後ろを俺は追うように歩いていた。もう昼は過ぎて、日差しは強いし腹は減ったしで、非常に足が重い気がする。というか、周りには田畑以外には何もないんだが、昼食はどうするんだろうか。

などと考えていると、いつのまにか隣に並んでいた九能が感慨深げに俺の名前を呼んだというか呟いた、というわけだ。

「……………奈都海」

『なんだ？』

「あんたさ……………、私のこと、好き？」

いきなり何を言い出すかと思っただら。本当になんなんだ。

「ね、どうなの？」

『いや、好きだが？』

俺が突然のことに疑問を感じて答えを渋っていると、なおも追求してくるので俺は本心を言ってみる。何の偽りもなく好きだから。

「……………そう。なら、いい。ありがとう」

九能はそれだけ言って、また先に歩いて行ってしまった。

俺は九能の謎な行動に疑問を抱いたが、しかし、俺よりも一足先に階段を登り切った九能の声でいつのまにか忘れていた。

「わぁ……………、すげー……………」

その感嘆の声につられて、九能の視線を追うと、

『へえ……………』

俺の目に映ったのは、思わず上がらない声を上げてしまうほどの景色。眼下には一面緑の田んぼが広がり、それが風になびいて海の波のような模様を作り出している。そして、遙かかなたには駅前の繁華街や住宅街が見える。この辺りは土地の高低差がほとんどないので、こういう景色が見られるのは珍しい。方角もいいのかもしれない。生まれてから今まで住んでいた自分の町が見えるだけで、普通以上の感動を受けるものだ。単純に綺麗だというのもある。

『きれい、だな』

「……………きれい……………」

九能は景色に見入って俺のほうを見ていないために、読唇術は使えないから、俺の言葉に応えたわけではないだろうが、お互いの感想は同じらしい。やはり70年近く生きていても、きれいなものはきれいらしい。なんて言ったら半殺しにされるだろうが。

それからしばらく、お互いに無言でその景色を眺めていた。
が、

『……………』

「……………はあ……………」

九能が溜息を吐いたのは、俺の発した音が原因。いわゆる腹の虫、
というやつだ。

「花より団子、ね……。よく言ったもんだわ」

まさにその通り。情緒も何もあつたものではない。

しかし、昼食はどうするんだ？また1時間かけてバスで帰るのか？途中で飲食店らしきものは見かけなかったし、そうするしかないんだが。

と、その疑問に答えるように、

「お弁当、作ってきたから食べましょ。ちょうど木陰もあるしね」

と、九能は言って、手に持っていたバスケットを示す。今まで気付かなかつたが、まさか魔術で隠していたわけではあるまいな。

とは思うが、さすがにそれはないか。単に俺が気付かなかつただけだろう。九能はいつのまにか高台の広場の中心にある木の根もとに腰かけていた。一応ベンチもあるにはあるが、日陰がないからやめておいたほうがいいだろう。

「なにしてるのー？早く来ないと全部食べちゃうよー？」

それは無理だろう。おそらく九能自身が嫌いなものも入っているだろうから。

そう思いつつも、俺は九能に歩み寄り、その隣に座りこむ。ただの木陰でもちゃんと日除けの効果はあり、意外と涼しい。

「はい、奈都海。おにぎり、こっちだから」

と、九能によって弁当箱が差しだされるが、

『ん？唐揚げは？』

「え？もしかして、食べたかった？」

『いや……そういうわけではないんだが』

九能は鶏肉以外の肉類、魚介類が大概だめなので、主菜はほとんどが鶏肉だ。その中でも特に唐揚げを食べることが多い。俺が金曜日に作ったカレーはチキンカレーだったし。

だから、弁当に唐揚げが入っていないと、九能の食べるものがないか、と思っただけだ。

『お前、何を食べるんだ？唐揚げがないだろ？』

「ん、別に他のものが食べられないわけじゃないもの。まあ、おにぎりしか食べないけど」

大丈夫か、お前。それだけで本当に足りるか？卵は食べられるはずだが。

などと心配する間もなく、九能は突然木の根を枕にして寝転がった。しかも、その前に結っていた髪を解いている。

「んー！気持ちいい！こういうの、久しぶりだよね！」

飯はどうした。俺は食うぞ。と言っまでもなく、既に俺は食い始めているわけだが。

地面は芝生だから寝転がっても大丈夫だろうが、髪の毛に芝が着くかもしれないのに、いいのか。

九能は、そんな俺の懸念など気にかけることもなく、無邪気に訊ねてくる。

「ね、奈都海。おいしい？」

『ああ、うまいぞ』

俺は言葉とともに頷く。九能の料理が上手いのは今に始まったことではないので、特別な感動はない。

それつきり、お互いに何の会話もなく、俺は黙々と昼食を消化し続け、九能は寝転がって空を見上げたまま微動だにしない。この空間に沈黙だけが残るが、それは心地よいもので、不快でもないので、俺も九能もその沈黙を破ろうとはしない。

ここにいると、風が芝生や木の枝を揺らした音だけが聞こえてくる。時間までもが止まったような中、九能の分を残して弁当を食べ終わった俺は何をするでもなく、無意識のうちに、風に従ってさらさらと流れる九能の髪を撫でていた。

「……………」

九能は不思議そうな表情で俺のほうをちらっとだけ見たが、何も言わずにまた視線を空に戻した。

さっきも九能が言ったが、こんな風にくつろげるのは、本当に久しぶりだ。特にこうして真に二人だけで過ごすのは、実に2カ月ぶり、ぐらいかもしれない。

……

何を考えても長くは保たないか。そう思った俺は、九能と同じよ

うに空を見上げてみる。

見えるのは、当然だが青い空と白い雲と緑色の葉っぱだけ。それ以外は、たまに視界の中を数羽の鳥が飛んで横切っていくだけだ。

そんな光景をしばらく無心に眺めていたのだが、いい加減首が疲れてくる。だから、俺も九能に倣って芝生の上に寝転がってみる。これなら疲れはしまい。

そんな風にしてしばらくの後、5分か10分か、あるいは1時間は過ぎていたのかもしれない。

時間の感覚までなくなるような空間の中でそれだけの時間が過ぎた後、突然俺の視界が暗くなった。理由は簡単。九能が俺の上に覆いかぶさってきた、ただそれだけのこと。

何がしたいのか、など訊かなくても十分に察せられる。場所に少し難があるような気もするが、この状況では些事にしかすぎない。

だから、俺は何も言わずに、無言で顔を寄せてくる九能に合わせて目を閉じた。

第1章 誘惑の狂姫 #6

「んー、いい朝！ね、奈都海！」

玄関を出た途端、身体を伸ばしながらそう言う九能。確かに今、朝は涼しいから気持ちいいだろうが、昼になればそうも言っていない。昨日と同じように暑くなってくるだろうから。

それに、そんな風に気楽に構えてもいられない。会長の問題は何か解決どころか進展すらしていないのだから、そろそろ具体的な方針が何かを決めておく必要があるだろう。あまり性急なものもまずいだろうが。

昨日は会長を唯利亜に任せたが、報告によれば、結局これといったことは起きなかったらしい。ADEOIAのほうでも、それらしいものは確認できなかったという。せいぜい四国のほうで小規模なDMFBの出現が観測された程度で、それも今はもう駆逐されてしまっている。

土曜日のあれは一体なんだっただ、と言いたいくらいに何も無い。正直なところ、拍子抜けした部分もある。今までは、大きな事件があればそれに続く動きがすぐに起こったものだが、それはやはりわかりやすいほうではある。今回のように辛抱強く次の動きを待ち続けるほうが、戦いにおいては多いのかもしれない。俺はまだまだ半人前の域を出ない新参者だから、その辺りはよくわからないし、下手をすれば、半人前ですらないかもしれない。

そんな半人前以下の俺が考えてもいい案など出るはずもなく、すぐに俺はその思考を放棄する。代わりに、その視線を上げた。

その時、

「あ」

「お？」

前者はその姿を見た九能の声。そして、後者は

「ほお……、なんだ、お前ら。やることやってんじゃねえか」

ヒヒヒと下卑た笑いとともに、そんなことを言いやがったのは、
俺の悪友である南坂宇類^{みなみざか うちるい}。

さて。

俺は一度、この状況を整理してみる。

俺と九能は同じ家から出てきた。それはこの光景を見れば明白。

次に、ここは誰の家か？ 答えは、九能の、つまり浄美家の家である。そのことを宇類は知っている。

そして、最後に、俺と九能はどういう関係なのか？ 上司と部下だとか、他人には言えない関係でもあるが、宇類が知っている俺たちの関係を最も簡潔に示した言葉、それは、“恋人”である。

……

最悪だ。今日は厄日か？ そうなのか？ こんな奴に知られたら、今日の朝の雑談のネタにされること請け合いだ。いつもそういう類の話をしているバカではあるが、俺がそのネタにされるのは正直面倒くさい。

「おはよう、宇類。今、学校？ 早いよね」

九能は俺の懸念など知らず、いつも通りにあいさつする。

まあ、宇類もそういう面でのマナーはちゃんと弁えているから、話題にすることはあってもそれ以上に行き過ぎることはないだろう。

というか、そうでなければ困る。

しかし、宇類がこの時間に学校に行くのは珍しいのではないだろうか。時間はまだ7時過ぎだ。俺の場合は、九能とこうして学校に行く時はよくこの時間に出るので、特に珍しいものでもない。

「ああ、女のところに行ってたからな。少し早めに出てきた」

「また？あんまりそういうことやってると碌なことにならないわよ」

その通りだ。毎回違う女をとつかえひつかえなどとしていたら、どんな結果になるか。というのは、こいつなら既に思い知っているはずだが。

「へいへい。同級生にまで小言言われたくねえから、自重はしますよ。んなことより早く学校行こうぜ？どうせ早く出たんならさっさと行っちまいたいし」

それは俺も同感だ。九能も適当な返事をして、歩き出す。自分の忠告が流されたのはどうでもいらしい。

九能と宇類が雑談する中、俺は無言で九能の隣を歩いている。喋れないのだから無言なのは当然だが、会話にも入らない。やはり、九能にとっても喋れる人間と会話するほうが、当然のことながら、楽ではある。俺と話す時は、俺の口を凝視していなければならぬのだから、疲れるのはわかる。

しかし、こうして宇類が九能と普通に会話していることについては特に嫉妬めいた感情はない。……と言えば、やはり嘘になる。

俺が、俺自身の疵術師の特性によって口が利かなくなった、というのは以前にも説明したが、しかし、実際にはこれは偏に俺の努力不足が原因だったりする。疵術師の特徴たる源血によって喋れなくなった、というのは嘘ではない。しかし、実は同じような特性を持

っている魅戈さんは、普通に会話できる。魅戈さんも、幼いころは喋ることができなかつたらしいが、修練によって今のように自由な会話ができるようになったらしい。

だから、俺が宇類に対して嫉妬するのは筋違いもいいところなのだ。どうも男というのはそういうところで臆病というか疑り深いというか。九能のことを信用しないわけではないが、相手が宇類だから。なにせ、相手が宇類だから。大事なことなので、二回言っちゃった。

実は、2年に進級して始めの頃、宇類は九能にも言い寄っていたのだ。見事にあしらわれていたが、それを考えると心配になる。というのは、やはり独占欲か何かか？宇類も、俺が九能と、ということを知るとすぐに諦めてくれたから、俺の反応が過敏すぎるだけかもしれない。

「ね、今日も昼、一緒に食べられるわよね？今日は宇類も交えて、になるけど」

しかし、こうして九能から話しかけられると、嬉しくなってしまうのだけはしょうがないはずだ。

ただ、あからさまに喜ぶのも不自然なので、俺はその喜色を隠して答える。

『ああ、生徒会の集会か何かがなければ』

最近、鳳秋祭の関係でそういう集まりが増えている。俺は当日間近までほとんど仕事がないわけだが、その代わりに他の委員会の手伝いなんかをさせられるので、暇でもない。むしろ忙しい。

と、鳳秋祭といえば。

『……でも、今日は部活会議があるかもしれないな。模擬店の出店内

容についての話し合いがあるはずだ。昼休みになるか放課後になるかはわからないが、各部活の部長が集まることになるかもしれない」

「え、そうなの？」

金曜日の会議でそんなことを言っていたような気がする。礼華さんと新さんが月曜日にどうとか言っていたことを、俺は思い出した。

「そっか……。それじゃ、今のうちにお弁当渡しておく？昼休みに集まるとなると、会議場でお弁当食べることになるだろうし、もし奈都海に分渡すの忘れちゃったら困るでしょ？」

それがいいかもしれない。俺は頷いて九能から弁当を受け取る。

「愛妻弁当か……。羨ましいねえ、このリア充めが！」

うるさい。それを言うなら、お前だって世間から見れば十分リア充だろうが。などと心の中で宇類に悪態をつきながら、俺は九能から受け取った弁当を鞆に放り込む。……実際に放り込んだわけではなく、中身が崩れないようにちゃんと丁寧に入れたが。

そんな風にして、いつも通りの俺たちらしく、バカ話をしつつ学園へ向かっていった。

校門に着いたころ、九能と宇類がまたしても共通の話題で盛り上がっているところ、その話題に全くの門外漢である俺はボーっとしながら歩いていた。
そんな時、

「なーつみくん！」

という元気いっぱいの声とともに俺の背中にドン！という衝撃がぶつけられた。

なんとか倒れずに踏ん張って、何事か、と思っただけを振り向かせると、

「おはよう、奈都海くん！朝からボーっとしてるなんて、身体に悪いぞー！」

朝だというのにやけに高いテンションでそう言いながら、俺の首に後ろから腕を回しているのは、生徒会第一書記の片桐かたぎり亜美さん。

俺は戦慄した。

何に戦慄したかと言えば、九能の目の前で九能以外の女性と密着している、ということと会長に次ぐ生徒会の苦手人物が俺の首に手をかけている、ということにだ。実際には手をかけているのではなく、おんぶする時みたいな感じで俺の肩に乗っかっているような構図だが、金曜日つくみに亜美さんから絞殺されかけた俺からすれば、同じ漢字表記の名前の人物の腕が首に触れている時点で若干恐怖を感じてしまう。もう既にトラウマになっているのである。

それ以前に九能の俺を見る目が、亜美さんが突然現れたことによる驚愕から冷たい、非常につめたくい目になりつつあるんだが、これについての対処法を誰か教えてくれるとありがたい。本当に、切

に願う。他でもない、俺の命がかかっているのだから。
そんなことを思う俺を放って、亜美さんは九能と宇類を見て、あ
いさつをする。

「西園寺さん、南坂くん、おはよ！今日もかつこいいね、二人とも
！」

「おはようございます」

「つつす。先輩もきれいっすね、今日も」

亜美さんとこの二人は一応面識がある。会長よりは遭遇率が高い
からだ。だからといって特に親しいわけではないのだが、こうやっ
て気楽に軽口を叩けるのが宇類のクオリティだろう。九能は単に不
機嫌なだけのような気もするが。

というか、亜美さん、早く退いてくれませんか。亜美さんがどん
なに軽くても、高校生一人なら50kg前後はあるでしょうに。ず
っと乗られていると、疲れてくるのですが。

「あー！奈都海くん、さつき私のこと重いつて思ったでしょ？」

いや、思ってます。心の中でさえ頑なに“重い”という単語だ
けは避けましたから。これも周囲の女性陣の教育の賜物だろうか。
情けない……

そう思いながら首を横に振る俺を見て、亜美さんは、

「ふむ……ならいいけど」

と、許してくれた。亜美さんはさっぱりした性格だから、意外で
もない。しかし、許してはくれても、退いてはくれない。

そのせいで九能の目つきが徐々にではあるが、鋭くなっていく。別に背中に当たっている柔らかい感触が気持ちいいとか、亜美さんが喋る度に耳にかかる息がこれまた気持ちいいとか、思っていないから。誓って思っていないから、その目だけはやめてくれ。後が怖い。

「つと、そうだ！」

そう言っつて、亜美さんは突然俺の背中から離れた。未練は………
ない。断じてない。だから九能、なんで離れたのにさらに強い眼光で睨んでくるんだ。

そんな九能の無言の弾劾を、俺は断腸の思いで（むしる断命の思いで）無視して、話のあるらしい亜美さんの声に耳を傾ける。

「奈都海くんね、ジャンが、話があるから学校来たらすぐに第二会議室に来い、つてさ」

……本当に厄日らしいな。なぜ朝っぱらから苦手人物と立て続けに会わねばならないのか。土曜日はほぼ1日中会長と一緒にたわけど、あれは仕事だと割り切ればどうということにはなかった。今回もその関連か鳳秋祭のことならいいんだが、プライベートなことだと面倒かもしれない。たまにあるんだ、会長からわけのわからぬ相談をされることが。内容は………忘れた、ということにしておう。会長のプライベートもあるし。

ちなみに、亜美さんは会長のことをジャンと呼ぶ。何気に親しげである。というか、実際に親しい。

しかし、なぜ俺に直接メールでもしなかったのか、という疑問もある。亜美さんを介する理由が何かあるんだろうか？

とはいえ、断るわけにもいかなかったため、俺は了解の意を込めて頷いておく。

「ん、よし。じゃあそういうことだから！じゃねー！」

亜美さんはそう言って、スカートをなびかせながら走り去って行った。

……

さて。

「さてと……、奈都海……？」

やっぱりそうなのか、そうですか、そうですね。
唯一の助けになりそうな宇類を見るが

「ふっ……」

あいつは他の友人集団のところへ行っていた。で、そこから俺を見て、気持ち悪い笑みとともに親指を立ててきやがった。ふざけんな、その親指へし折るぞ。

が、今はそれを実行できない。

「ねえ……、片桐さんに抱きつかれて嬉しかった……？」

『いや、そんなことは……』

「ふーん、そう……。なら、いいけどお？」

うおい、なんだ、今この場で実行に移らないのか。逆に怖い、怖すぎるぞ、それは。

って、こんなこと金曜日にもあったな。あの時は愛燕が原因だっ

たが。なんで、こいつは何かと嫉妬が多いのだろうか。俺も人のことは言えないが。

しかし、俺がどんな制裁が来るのかと子羊のごとく怯えていると、

「……やっぱ、もういい」

『はっ？』

「もういいって言ったの！………許す」

許すって、俺は何もしてないんだが。それなのに、なぜか謝りたくなるから不思議である。

しかし、九能が何もしてこないとは、珍しい。勝手に思考を突っ走らせて制裁を加えようとする九能にしては………って、それが日常ってどうなんだろうか？

まあ、それはともかく、九能が許すと言っただからそうさせてもらおう。

『じゃあ、俺は会長のところに行こうかと思うんだが………』

「その前に……、……ん」

しかし、九能はそう言うってこちらに正面を向けて目を瞑った。それが何を意味しているのかは当然、瞬時にしてわかる。わかってしまう。そして、これこそが本当の目的だということも。

って、待てや、こら。こんなところでしろってか。どんな羞恥プレイだ、それは。

しかし、どう断ればいいかわからない。そもそも拒絶してはいけないような気がする。だが、九能の求めているようなことは恥ずかしすぎることができるはずもない。

などといつまでも考えているわけにはいかない。俺は、どうすればいいかわからなくなり、とりあえずの解決策として

「……む、何？」

俺は唇の代わりに、どこかのドラマか何かで見たように、九能の唇に指を当てた。九能にしてみれば、期待外れというところだろう。しかし、俺は九能に反抗の隙を与えずに、

『んなことするのは、今はいくらなんでも無理だ』

「なんで？してくれないと許さないわよ？」

九能はそう言いながら、非常に邪悪な笑みを浮かべている。しかし、俺はそれにも構わず、

『今は、って言っただろ。帰ったら満足するまで可愛がつてやるから安心しろ』

そう言い終わってから気付いた。これも非常に恥ずかしいセリフではないだろうか？ということに。

「え、うん……その、じゃあ帰ったら、ね？」

九能は少し戸惑っていたようだが、すぐにそう言ってきた。

やばい、かなり恥ずかしい。声が出ていたわけではないから他人には聞かれていないが、九能に理解されただけで十分だ。顔が赤くなっているのが自分でもわかるし、さっきの発言の内容を考えれば考えるほど余計に恥ずかしさがこみ上げてくる。なにせ、可愛がつてやる、だ。痛い。自分のセリフが非常に痛い。

そもそも、相手の唇に指を当てる、という行為自体恥ずかしくな
いかと問われれば、恥ずかしいものである。それをこの衆人環視の
中でやってしまったわけだ。喜びながらも顔を赤らめる九能を見れ
ば、俺がどんなことを言ったのか予想がつく奴もいるだろう。宇類
とか。

『……ああ、わかった。じゃあ、行ってくる。また後で』

それ以上その場にいられなくなった俺はそう言って、逃げるよう
にその場を後にした。

「どつぞー」

俺がその部屋、第二会議室の扉をノックすると、聞き慣れた声が
中から聞こえた。

その声に応じて、俺は扉を開けてその部屋に入る。

「だれー？……ってナツか。何か用？」

会長が呼んだのに、それはないでしょう。俺がそんなことを考えながら、知らずそんな表情をしていたのが、会長は俺の顔を見ながらクスツと笑い、

「冗談よ。亜美に聞いたんでしょ？もう少しで終わるから待ってて」

そう言って会長は、俺が来る前からしていたであろう作業に戻った。

そして、俺が手近にあったイスに座って待っていると、数分後、

「よし、終わった」

と、会長はそう言って、んーっと身体を伸ばしつつボールペンを放り投げた。落ちてきたそのボールペンを、会長は目の前でキャッチして、机に置いてから立ちあがった。なんの意味があったんだ、この一連の動きには。

しかし、これで本題に入れるわけだ。

と、思ったのだが。

「はい、ナツ」

会長はそう言いながら、手に持っている書類を俺に差しだしてきた。見る限りでは鳳秋祭に関する資料のようだが……、これをどうしろと？

「これ、真聖蝶まで持っていつてくれる？」

「はあ、これを真聖蝶までね。」

.....

「って、待て。真聖蝶まで？いつ？そして、なぜ俺が？」

「ちなみに今日だから。行ってもらうのは」

会長のその説明で、いつ？という疑問は解消されたが、代わりに新たな疑問が生まれた。つまり、今日の授業はどうすればいいのか、という疑問。

「で、授業のほうは私から先生のほうに言っただけあるから安心して。今日のナツの授業って国語と生物、現代社会だけよね？4限目はなかったはずだから」

確かにそうですが。そうなんですがね、来ていきなりそんなことを言われても困るというか。

「それと、交通費も学園から出してもらえることになってるから、安心して」

むしろ安心してできません。

俺が聞く前から既に外堀は埋められていた、ということですか。これで俺が断る材料はほぼ消失した。用意周到とはこのことか。

しかし、まあ、授業が堂々とサボれるならそれに越したことはない。やはり、学生である以上、それは嬉しいことではある。嫌いな人があつちにいるわけでもない。……ただ、できれば会いたくない人物はいるが。

とりあえず、これだけ準備してくれているのなら、断る意味もな

い。俺は頷いて、自分の手の中にある書類をしてみる。上部にあちらの生徒会長の名前が書いてあるから、鳳秋祭での真聖蝶との交流連携についてのものなんだろう。あっちの生徒会とも一応会ったことはある。思ったほど面倒でもなさそうだ。

「じゃ、そういうことで。よろしく〜」

そう言って、会長は手をひらひらと振りながら、部屋を跡にした。でもって、取り残された俺は、九能にどう誤解させないように説明しようか、頭を悩ませていた。

30分後、俺はこの危機をどう脱するか、頭を悩ませていた。

九能にメールでなんとか事情を説明し、事なきを得た俺は、学園にきたその足でそのまま最寄りの駅へ向かった。しかし、俺が駅に着いたのが、ちょうど電車が出た直後だったらしく、さらに30分

ほど待たなければいけなくなった。

そして、田舎の狭い駅では暇つぶしなどできるはずもなく、俺は切符だけ買って駅の周りをぶらぶらしようかと思った。思っ、実行に移して、駅を出た。

その直後の出来事である。

「幣原奈都海か……。王にもなりうるし、騎士にもなりうる。……が、はたしてそれが女王を殺す大罪人にならない証拠になるだろうか……？」

などという意味不明なことを呟くのは、人間ではない。IDMFBファントムである。

そう、ファントムに遭遇してしまった。たった一人で。この街中で。

ファントムの常として、存在するだけで周囲に重侵干渉を起こす（ノクターンやシャトーなどのように力を制限している間は起こらないらしいが）というのが働いているらしく、周りの人間には気付かれていない。いや、気付いてもその端から忘れていただけだが。

外見だけを見るなら、神父の着るようなローブを着ており、しかし、首には十字架ではなく充血した目玉を模したペンダントを着けている。それだけでは、別にユニークな人もいるものだ、で済むんだが、そもそもローブの袖からちらちらと蛇の頭が見える時点でユニークを通り越してクレイジーだ。しかも、ペンダントの目玉も心なしか、きよろきよろと動いているような気がするんだが。……あ、目が合った。

「ほう、私を見ても冷静だな。それとも反応すら、する余裕がないか？それはそれで構わんさ。私にとっては好都合だ」

何がどう都合なのか、はっきり教えてほしいものだ。そして、怖い。結構怖い。なぜ俺の名前を知っているのか、ということを考えるだけで怖いのに。

しかし、いつまでも固まっているわけにもいかず、

「……2つ教えてほしいことがあるんだが」

そうやって俺がこの場における当然の権利を主張したところ、そのファントムは眉をひそめて、

「む……？ 貴様は喋れないのではなかったか？」

「よく知ってるな。だが……もう少し情報をくれてやるなら、重傷干渉が起こってるなら俺は喋ることができるんだよ。あまり推奨はされないんだが」

「なるほど………。いいだろう、2つか？ 手短にしろ、私は急ぐ」
自分の知っている情報との食い違いに疑問を持っただけで、特に驚きはないらしい。俺は彼(?)の言葉に甘えて、早速質問させてもらう。

「じゃあ、一つ目。あんたは一体どこに何をしにいくつもりだ？」

こいつはおそらく俺が目的ではない。さっきまではこれは直感から来るただの推測でしかなかったんだが、さっきのこいつの、急ぐ、というセリフで確信した。こいつは他に目的がある、ということに。

「女王を攫いに、だ。」

「どこに?」

「女王が王城以外の一体どこにいると?」

比喩だろうか?それとも本当にどこかの王政国家に行つて攫いにいくんだらうか?イギリスか?それしか思いつかん。でも、今のイギリスは女王ではなく、王様だったはずだ。

しかし、こういうときの定番と言えば

「女王?王女ではなく?」

なぜ女王なのか?おとぎ話なんかに則るなら、攫われるのは大抵女王のほうである。女王はそれを画策した張本人かあるいは全く無関係かのどちらかだろう。こういう神話や童話の内容は、DMFBとの戦いにおいてなかなか重要だったりする。そもそも、神話や童話の多くはDMFBが元になっているという説もある。だから、もし比喩として持ち出すなら、セオリー通り王女誘拐のほうがしっくり来るような気がしたのだが、しかし、そのファントムは、俺の予想を否定し、

「違うな、幣原奈都海。プリンセスではない。クイーンだ」

「なぜ女王なんだ?」

「簡単なことだ。プリンセスはいずれクイーンを破滅に追いやる。当然のことだろう?親殺しは子の習性、本能、本懐とも言うべき事項。現実においても創作物においても、それは数多描かれている!」

なぜかいきなりハイテンションになり、演説を始めるファントム。質問に答えていないような気もするが、止めるのも面倒なので、暇

つぶしに聞いておく。そんなお気楽な心境でもないが。

「子は独立するために親を殺す。親は子を縛る鎖、枷、重圧。それを解くために親は殺される！だから、私は女王が女王に殺される前に助け出さねばならない。つまりは女王が独り立ちする前に私はその足枷を解くのだ。それがどのような結果を生むかは私にはわからない。王女は殺すべき対象を失い、狂乱するか？それとも喜び勇み女王の座に就くのか？それともまた別の結果か？どれにしる、それが正しいかどうかは王であり騎士である幣原奈都海、貴様が決めることだろう。しかし、そんなことはどうでもいい。王女の騎士となりうる貴様には若干の興味はあるが、それだけだ。女王の騎士たる私には関係のないこと。しかし、だ。その王女が女王を失ってなお、親殺しに執着するとしたらどうだろうか？女王を攫っても、女王そのものは消えるわけではない。そう、王女にとって女王の存在そのものが飛び立つ翼を縛る鎖だとしたら？自由を許さぬ枷だとしたら？成長を妨げる重圧だとしたら、どうだろうか？その答えは簡潔にして、明瞭。すなわち、女王を討伐せんとして騎士を遣わせる。あるいは自らが赴き、自らの手で女王を討つ。つまりは、女王を殺す。その、子にとつての義務とも言つべき、遺伝子に刻まれた宿命とも言つべき“親殺し”を遂行する。私にとっては、それこそが狙いなのだよ。と言つても、貴様にはわかるまい？当然だ。この国には親の心子知らずという言葉があるそうだが、まさにその通りだよ。王女は女王の心など到底理解できない。ならば、その王女に仕える騎士も、女王に仕える騎士の心など理解できるはずもない。それはいい。だがな、その逆はどうだ？女王は王女の心を理解できるか否か。答えはYesだ。なぜなら、その女王も王女である時期があったのだから。その女王も、かつては親殺しを宿命づけられた王女だったのだよ。だから、わかる。女王は殺されるものだ。王女は殺すものだと。親殺しは、子にとって最も明確かつ確実な成人の儀。親を超えることで、子は人と成る。それは当然、王室にも当てはまるも

のだ。言っておくが、クーデターの類ではないぞ？なぜなら、これは、王女による女王殺しは、正式な儀式。戴冠の儀と言い換えてもいいだろう。しかし、私はそれを奪う。今の女王にはそう簡単に死んでもらっては困るのだよ。かと言って、私ごときに、王女が女王になる権利まで奪う権利はない。私とて、こんな姿になっても、元は人間。理性ぐらいはある。だから、すべては奪わない。残すのは………幣原奈都海、貴様だ。」

そのファントムは長つたらしい演説を、そこで終わらせた。本当は終わりではないかもしれないが、俺はそう判断して次の質問に移る。内容はすべて記憶して、後で吟味する。今は考える時ではない。

「なら、2つ目の質問だ。なぜ俺の名前を知っている？」

「……クッククック……、切り替えが早いな、それとも無視しただけか？別にどちらでも構わんがな。だが、その質問は愚問と言わざるを得ん。私は女王の騎士と言ったはずだ。王女の騎士であり、かつ王にもなりうる貴様の名を知らないわけがなかるう？さらに言うなら、私はDMFBだ。貴様ごときの名を知ることなど、その名が百とあるうと千とあるうと容易だ」

全くもって言っていることがさっぱりだ。さっきの話の繋がりがらだろが、俺はそれを理解する努力すら放棄した身なので、わかるはずもない。とりあえずこの内容は覚えておくが、理解できるとは思えない。

情報を教える気がないのなら、何も教えてほしくはない。下手に比喻を使ったり、中途半端だったりする情報を与えられても混乱するだけだ。それが目的なのかもしれないが。

しかし、これで終えられても困る。何か質問を考えなければ

「それで質問はすべてか？……では、最後に私から一つだけ言わせてもらおう」

俺が、するべき質問の内容に窮していると、そいつはこれで終わりだと判断したのか、次が最後だと言ってきた。つまり、もう俺に発言権はない。

「さて、私が言いたいのの一つだ。……幣原奈都海よ、女王がいないとわかったら、すぐさま女王を唆すがいい。女王を討て、と。親殺しをしろ、と。本能に従え、と。呪縛を砕け、と。自由を掴め、と。そして、最後に」

そのセリフの途中、そいつの姿が薄くなり始めた。初めは何事か、と思ったが、どうやら逃げるつもりらしい。そして、その姿がほとんど完全に消えようとした、その間に、俺の耳にその声は響いた。

「女王を唆せ。女王になれ、と……」

気付けば、俺は真聖蝶のバカでかい門の前に立っていた。

第1章 誘惑の狂姫 #6 (後書き)

奈都海と九能ののろけシーンは書いてて……空しくなります。
なんでこいつら、こんなに仲いいんだろって。

第1章 誘惑の狂姫 #7

今日は、ボクと愛燕だけの二人での登校だ。

いつも一緒に学園に通っている兄さんと九能さんは、昨日デートをして、そのまま九能さんの住む浄美家に泊まることになったらしい。

ボクとしては、どうせならホテルにでも泊まればよかったのに、と思う。なんでわざわざ未来小さんやその親御さんのいるところに泊まるのかな？まあ、家にボクや母さんがいるのに、平然と兄さんの部屋でやってる（のをボクは知っている）ような二人だから、あまり気にしないのかもしれないけど。むしろ、こっちのほうが気になって、安眠を妨害されてしまう。だって、見ようと思えば、遠視でいくらでも見られる。ボクにだって、そういうことに対する関心はないわけじゃないんだから。男女どちらにそういう感情を抱くのかは、まだまだわからないけども。

とりあえず、今は愛燕と二人つきり。

と言えば聞こえはいいけど、実際には友達二人で登校しているのとなんら変わりはない。

今朝、会ってすぐに土曜日のお礼を言って、その後適当な世間話をしながらいつもの通学路を歩いている。いつも通り少し早目に家を出たけど、学園に近づくにつれて周りに生徒は増えていく。かといって、なにがある、というわけでもないけど。

でも、時々知らない生徒から声をかけられることはある。多分、愛燕の作ったファンクラブのせいだと思う。中部部ではそんなことなかったのに、高等部になってからそうなったのだから、おそらく間違いない。

「唯利亜」

と、いきなりそのご本人から呼びかけられた。今まで会話していたから、いきなりというほどでもないけど。

ボクが適当な返事とともに愛燕を見ると、彼女はほんの少し決まり悪そうに、

「世界史の課題、してきた？」

「うん、してきたけど？」

先週出された世界史の課題。確か、世界史の範囲内で興味を持ったことを調べてこい、とかいう面倒かつ無意義極まりない内容だった気が。なんでこの時期にそんなことをしなければならぬのかわからないし、そもそも調べてこいって言うても大半の生徒は資料やホームページの内容をコピペするのが常識だからなんの实りにもならない。それがわかっててこんな課題を出したのなら、ただの嫌がらせでしかない。生徒の自由な時間を潰してやろう、という地味にして実に効果的な嫌がらせだ。

で、ボクも面倒なことは大嫌いなので、かの有名なゴーグル先生にお伺いを立てて、それをそのまま映してきた。便利な時代に生まれてよかったね、ほんとに。

そんなボクの事情は置いておいて。

そんなことを訊いてくるといふことは、愛燕はまさか

「愛燕、もしかして課題やってない？」

「うん、やってない」

なぜか、その小さい胸を張りながら答える愛燕。なんでそんなに自慢げなの？さっき少しだけだけど申し訳なさそうにしてたよね？

「あの先生嫌いだからやってない。めんどくさかったし」

いや、嫌いって。結構評判いい先生なんだけど。ボクにも優しくしてくれるし。

「そうかなー？結構優しいし、いい先生だと思うけど」

うん、変なタイミングで変な課題は出すけど、基本的には評判の悪い先生ではない。むしろいいほう。生徒と積極的にコミュニケーションを取ろうとするし、なによりルックスがいい。だから、女子からは当然ながら不人気ということとはほとんどないし、男子からも妬みというより尊敬の念のほうが強かったりする。昼になると、食堂で何人かの生徒と食事してるのも見かける。

それに優しいだけじゃなく、適度に厳しい先生でもある。メリハリをつけるのが上手い先生だ。

けれど、愛燕は、

「だって……」

「だって？」

「唯利亜のこと、変な目で見てるから……」

いやいや、いくらなんでもそれは被害妄想以外の何物でもないと思うよ？ちゃんと教師と生徒っていう立場の距離は弁えてるはず。今まで何人かの女の子が告白したこともあったらしいけど、どれも断ったと聞くし。……あれ？逆に説得力がなくなってる気が……

「さすがにそれはないんじゃない？うん、ないと思うよ。」

ボクがなんとなく浮かんだ疑念を払うように言うと、愛燕はボクの顔をのぞきこみ、

「ほんとにそう思ってる？」

「思ってるってば。なんで？」

ほんとに鋭いんだから、愛燕は。まあ、ボクの思ったことがばれたからなんだってこともないけど。

「でも、ほんとに変な目なんだよ？舐めるような視線っていうか……」

「それは確かに怖いけど。なら、なんでその本人が気付いてないのさ？」

「……本人が鈍感だから？」

いや、だから？って訊かれても。それにボクってそんなに鈍感？人の感情の機微を見抜けるほど敏感とも言わないけど、少なくとも鈍感とは言えないんじゃないかな……なんて自分で自分を弁護するのって結構空しいよね、ほんとに。

「それが本当だとしても、別にいいんじゃない？実害があるわけでもないし」

「なにかが起こってからじゃ遅いの。前みたいなことになってもい

いの？次は男からだよ？」

それはさすがに勘弁願いたいけどさ。っていうか、あれからまだ3カ月しか経ってないのに、まだ新しめの傷を抉るってどういうことなの。一生笑い話にできるようなことでもないのに。

それだけ愛燕は危機感を抱いている、ということだろうか？だとしても、少し過剰だと思う。

「ま、唯利亜がいつて言うならいいよ。あたしの取り越し苦労……だど、いいんだけどね？」

怖い。すごく怖い。最後のそれ、すごく恐怖心を助長されるよ。どうしよう、やっぱりだめって言おうかな。あ、でもなんか変なプライドというか意地みたいなものが邪魔して、あー軽くテンパってきた……

「ほら、早く行こ、唯利亜。早くしないと登校ラッシュが来るよ」

そう言ってボクの手を引く愛燕の表情には、ほんの少しだけど笑みが浮かんでいた。完全に愛燕のペースだったってこと？最近そんなことばっかりのような気がする。どうすればいいのさ……

愛燕に手を引かれて入った教室には、時間がまだ早いということ

もあつてまばらにしか生徒はいない。

それでも、一応クラスメイトだからあいさつを交わしてから、ボクは自分の席に鞆を置いてから座る。するとすぐに愛燕が近くに寄ってきて、隣の席に座った。

「課題しなくてもいいの？」

「今からじゃ遅いもん。それよりお話しよっ」

確かにもう手遅れだけど開き直るのはどうなんだろう。

なんて思いながらも、ボクは愛燕との会話に興じる。話すのは、最近のドラマやゲームの感想や批判だったり
ファッションについてだったり。ボクと愛燕は多分、他の女の子と比べるとゲームで遊ぶ割合が高いと思う。自称するのもおかしいけど、ゲーマーでもあるしね。といってもそれだけじゃなくて、人並み程度には他のテレビやファッションにも興味はある。ふと思いついて、昨日行った那束さんのお店についても話したら、愛燕も行きたいと言ってくれた。

こうやって朝のホームルームが始まるまで愛燕と雑談するのが、ボクの大体の日課。もちろん、他にも友達はあるわけだけど、なんだかんだ言つて愛燕と一緒にいる時間のほうが圧倒的に多い。下手したら家族よりも多いぐらいだし。

そんなことを頭の片隅で考えながら愛燕と話していると、

「……………退いてくれる？邪魔なんだけど」

と、冷たく若干の威圧感を含んだ声が、やや上のほうから聞こえてきた。でも、その声はボクに向けられたものではなく

「あ……………ごめん……………」

愛燕だった。それを聞いた愛燕は、その冷たい声に思わず、といった感じに素直に席から退いた。

その声の主は、すずひらなるひめ鈴平鳴姫さん。この9月から、やけに多い席替えによって、ボクの隣になった女の子だ。同じクラスになったのも今年が初めてだ。

髪の毛は真つ黒で、瞳も漆黒。それとは対照的に肌は純白とも言えるほどに白く、そのコントラストはまさしく日本的美の体現、みたいな感じ。完全にボクの主観だけど。でも、そのかわいらしさと逆には性格はかなりきつく、話しかけても大体は無視されるし、いったん口を開けば毒しか吐かない舌を持っている。……なんかクラスにはそのギャップがたまらない、とか言う男の子もいるんだけどね、ごく少数。

でも、愛燕はすぐにボクに困惑の表情を向ける。普段、話しかけられること自体ないことだから戸惑っているのか、それともなにか言いたいけど、自分が邪魔していたのは事実だから言いにくい、ということだろうか？

だとしたらボクが言うしかない。

「あのさ、鈴平さん」

「……………」

無視された。この距離なら聞こえないなんてことはないはずだから、絶対に無視された。

でも、ボクはそれにもめげずにさらに声をかける。

「えと……あの、邪魔っていうのは、さすがに言い過ぎじゃないかな？」

「……………」

今度はこちらを向いてくれた。でも、その目には明らかな呆れと侮蔑が漂っている。

鈴平さんは、その目と変わらず嘲りのこもった口調で、

「邪魔だから邪魔だって言っただけが悪いの？」

「……………もうちょっと柔らかい言い方とかあるでしょ？なにも、わざわざ邪魔だなんて言わなくても……………」

「悪いけど、私には、邪魔な存在に対して邪魔だと言う以外に方法が思いつかないの。ごめんなさいね」

鈴平さんはもうこちらには目を向けてはいなかったけど、一応謝ってはくれた。それに明らかな皮肉が混じっているとしても、そしてそれに気付いたとしても、今はそれを指摘しないほうがいい。あまり事態を大きくはしたくないし、今は謝ったという事実があるだけで十分だ。

「うん。ごめんね、こっちも変に突っかかっちゃって」

ボクはそれだけ言って意識から鈴平さんを外した。鈴平さんが何か小さな声で言ったけど、ボクは気付かないふりをした。
なのに、

バンツ！

という音が教室中に響いた。愛燕が机を叩いた音だ。その音で、教室にいる生徒が何人か、何事かとこちらに注目する。

「さつき……なんて言った……？」

「え？なに？」

「さつき！唯利亜が謝った時、あなたはなんて言ったかって訊いてるの！」

愛燕は鈴平さんにそう怒鳴った。今度こそ、教室中のみんながこちらに意識を向ける。こんな怒鳴るなんて、いつも泰然自若としている愛燕からすれば、異常なぐらいに珍しい。鈴平さんもそれなりに驚いている。普段の愛燕を知っているなら、驚くのは当然だ。なんて感心してる場合じゃない。止めないと！

「ああ、さつきね……」

でも、ボクが止める前に鈴平さんは、その言葉を口にしてしまう。

「とんだヘタレね、って言ったんだけど……それがどうかした？」

「ふざけるな！」

まずい、愛燕が完全にキレてる。今までも何度かあったけど、高等部に入ってからにはなかったから油断してた。こうなったら……

「唯利亜はあなたのためを思ってさっきの話題をやめたの！なのに、あなたは……！」

「それがヘタレだって言うてんのよ。それにね、こっちが挑発してるのに、それを無視されるほうがよっぽど腹が立つのよ。こちらは

やめてなんて頼んでないのに、あんたたち何様のつもり？」

「それは……！唯利亜が優しいから……」

「知ってる？優しさってね、保身のためにあるのよ。他人に優しくしてほしいから自分も優しくする。皆に優しくされたいから皆に優しくする。それが当事者同士にとっての総意ならいいんでしょね。でもね、私にとってそんな自分本位な優しさなんてものは、本物も偽物も全部ひっくるめて迷惑なのよ。こっちが敵意を向けてるんだから敵意で返しなさいよ。敵意に善意で返すなんてのは、善意に敵意で返すのとそう大差ない、相手の気持ちを踏みにじる侮辱ではないのよ。それにね、あんたたちが優しさの正当性を妄信するのは別に構わないけど、それを他人に押し付けるのはやめてくれる？鬱陶しいのよ」

「な……っ……ゆ、唯利亜はっ、唯利亜はあなたとは違う！あなたはそんな考え方しかできないから」

「愛燕……！」

愛燕が決定的なセリフを言う前に、ボクは愛燕の名前を叫ぶ。

「あ……、……」

自分が熱くなっているのに気付いたのか、愛燕は怒りの表情を困惑とも悲しみともとれない、あるいは両方にとれる表情に変えて、ボクのほうに助けを求めるような視線を向ける。

でも、ボクはその愛燕の視線を無視して、

「ごめん、鈴平さん。そんな思いさせてとは思わなかったから……」

…

「その謝罪そのものも鬱陶しいの。やめて」

「……うん、やめないよ」

にべもなく切り捨てる鈴平さんに、ボクはそれでも食い下がる。

「やめない。これはボクの自己満足だから。鈴平さんに何を言われようと、ボクはやめないよ」

「……そんな自己満足のための行為が許されるとも？」

「なら、自分勝手は許されるのかな。鈴平さんのさっきの話って、結局は自分勝手だよね？他人の介入を許さないって意味で言えば」

「だから、なに？」

「別に、何も。ただ、鈴平さんがその自分勝手を貫こうって考えるなら、他人のエゴも見過ごす覚悟ぐらいは必要じゃないかな？」

そう言うと、鈴平さんはまたボクから視線を外した。また無視されるのか、とボクは思ったけど、

「……そうね。心に留めておくわ」

「うん、ありがとう」

ボクは、素直に頷いた鈴平さんに少し驚いたけど、お礼を言うのを妨げるほど大きなものじゃなかった。

鈴平さんはその直後に席を立って、どこかへ行ってしまった。

その後、昼休み直前まで、鈴平さんは教室に帰ってこなかった。

「……ってわけだから、ごめんね？多分、昼休みほとんど使って話し合っと思うから、復帰も無理だろうし。じゃ、そういうことで」

そう言い残して、九能さんは去って行った。

どうやら、この昼休みに全部活の部長、副部長を集めての会議があるらしい。話によれば、鳳秋祭で出店する模擬店の取り決めについて。といっても、希望する模擬店の種類は夏休み前に各部活から予め聞いてあるので、今回は生徒会のほうで決めた、その内訳に各部が了承するかどうか、というところだろう。これは毎年結構話がこじれるらしいけど、夏休み中の会議で見える限りでは、希望する模擬店の被っているところがほとんどなかったので、今年はすんなり

いきそうだ。

.....

なんてことを考えて現実逃避するのはそろそろやめようか。

いや、でも、本当に今この現場には目を逸らしたくなる光景が広がっている。

それというのも

「愛燕、行こっか？」

「.....」

愛燕の機嫌がひつじょーに悪い。辛うじてボクの言うことには、なにかしらのアクションを起こしてはくれるものの、それもいつもに比べてかなり鈍いし、他の人の言うことには耳を貸すことすらしない。

その証拠に、

「んじゃ、愛燕。俺に抱かれてみるか？」

「死んでください」

兄さんの繋がりで小学生のころからの長い付き合いである宇類さんの言葉にも、間髪いれずにこの返答。九能さんがいるときは反応すらしなかったんだけど、これは改善したと言えるのかどうか、甚だ疑問.....

でも、今回に関しては宇類さんも悪いと思う。いきなり抱かれてみるか？なんて言われて好意的な返答をしろ、というほうが無理な話だ。そうはいつても、愛燕の即答で死ねっていうのもどうかと思うけど。

まあ、そんなこんなあってボクたちが辿りついたのは、食堂。

ボクからすれば、人の大勢いる食堂なんていうのは鬼門ですらあるんだけど、今日はボクと愛燕と宇類さんだけだから、まあ安全だろうということここで決めた。迷惑をかける心配をする必要がないから。

兄さんは（合法的に）授業をさぼって真聖蝶に行っている。九能さんはさつきも言ったとおり部活総会。未来小さんは自分のクラスで友達と食べると言っていたし、宇類さんといつも一緒な真実まじこさんは最近付き合い始めたらしい深夜さんと一緒らしい。

えーと、一応鈴平さんについても言っておくと、昼休み直前に授業に戻ってきて、先生の追求のお言葉もどこ吹く風と終始無視した挙句、「単位やらんぞ！」という言葉にも、「どうぞ勝手に」と溜息混じりに返し、さらに、板書のスペルミス（その時の授業は英語だった）を2つ指摘した後、授業終了まで支配者のごとくイスに踏ん返り返っていた。本人にはそういう意識はないんだろうけど、少なくともボクにはそう見えた。ボクはこんな人と喧嘩になりかけたんだなあ、と少しだけ恐怖まで覚えたし。本気で喧嘩したら、口喧嘩に限れば勝つ見込みはないだろうね。

で、席を確保して、宇類さんがラーメンを取ってきてからも、愛燕はまだむすっとした表情だった。怒ること自体が珍しいことだけど、一度怒るとほんとにひきずるタイプだからね、愛燕は。時間の経過で怒りが冷めるなんてことはほとんど期待できない。

やっぱり原因は鈴平さんのことなんだろう。しかもその後、さつき言ったように鈴平さんは傲岸不遜ともいえる態度だったから、反省していない、と見たんだと思う。

「愛燕さ……、そろそろ機嫌直したら？」

「……………なんで」

愛燕は購買で買ったパンを食べずに持ったまま、いつもより数段低い声で答えた。元々高いから、あまり怖くはないけど。

「なんでって……………」

「別に機嫌が悪いわけじゃない。ただ気に入らないだけ」

なにが、なんて訊かなくてもわかることだ。だからといって、肯定するわけにもいかないけど。

けれど、ボクが言う前に、宇類さんが一拍早く声を上げていた。

「ま、話し聞く限りじゃ、相手の娘も悪いけどよ、愛燕も正しいわけじゃないぜ？世の中、スルーすることも時には大事なんだよ。その時の詳しい状況はわかんねえけど、そういう意味じゃ、唯利亜の対応のほうが無難だったってことだ。……………そうは言っても、そんないい悪いの二元論で片づけられるようなもんでもないけど、な」

麵をすすりながら、説教じみた口調で語る宇類さん。もしかして、そういう経験ある？

「ほら、あれだ。修羅場なんかになるとよくあるだろ。どっちが悪かってわけでもないし、どちらかを責めるわけにもいかねえし」

「いや、それって二股かけてた宇類さんが全面的に悪いんじゃない……………」

宇類さんらしく、ろくでもない経験だった。そんなことでそんな大事なことを悟られても……………

「それは置いても、元々愛燕は負けず嫌いだから、許せねえんじゃないの？自分が」

「それは……………そうかも。愛燕、負けず嫌いだもんね」

ボクがそう言つと、愛燕は顔を逸らした。頬が赤くなってるのが見えてるけどね。

「ほら、愛燕おっ？もうちょっと優しくしてよ」

「ひゃっ、ちょ、ちょっと、唯利亜っ」

ボクが抱きつくと、愛燕はわたわたと慌て始めた。かわいいなあ、もう。

「ふむ…………、眼福、眼福」

宇類さんの視線がものすごい気になるけど、愛燕の機嫌が直りかけてるから、我慢。愛燕に抱きつのが嫌い、ってわけじゃなく、こういう場するのは恥ずかしいだけなんだけど。宇類さんだけじゃなくて、周囲からの視線が…………ね。

「も、もうっ、唯利亜っ」

顔を真っ赤にして抗議する愛燕もまたかわいくて、だけどこれ以上続けるわけにもいかないから、仕方なく愛燕を解放する。

「ふむ、ごちそうさまでした」

「ちよっ、宇類先輩！……………あ」

宇類さんのその言葉が自分に向けられたものだと思ったのか、抗議しようとするけど、それがラーメンを食べ終わった時のごちそうさまだと気付いて、愛燕はさらに顔を赤くした。っていうか宇類さん、絶対確信犯でしょ、さっきのは。

「愛燕ってほんとにかわいいよね！」

「うっっ……」

愛燕の困る顔を見て愉悦に浸る、っていうほどボクはサディストじゃない。けど、土曜日の仕返しができて少しだけ満足。感謝もしてるけど、なんかいろいろされた気がするから。

「へえ……お前ら、ほんつとに仲いいよなあ……」

そんな宇類さんの若干呆れの混じったセリフをBGMにしつつ、ボクはその後、しばらく愛燕をからかっていた。

なんてことをしてる間にも、ボクはジャン又さんのことを見ていた。

別にストーカーだとか、そういうのではなく、ジャン又さんに何かが起こってもすぐにわかるように、だ。

今使っているのは、ボクの一部である“小動物の使役”だ。もっと正確に言うなら、使役する小動物の五感の一部を共有できる、というもの。使うのは、特に昆虫類が多い。

やり方は簡単。自分の純正魔力をほんの少しだけ切り離して、その目を付けた小動物に植え付けるだけ。まあ、植え付けるって表現が正しいかどうかはわからないけど、大体これでその小動物の視覚情報をボクも受け取ることができる。それに、ヒトの純正魔力が宿ることでその動物の視界よりも人間のものに近い視界が得られるから、どの動物を使うかなんて特に選ぶことはない。

純正魔力を切り離すのは、それこそ自分の体の一部を切り落とすのと同じことだけど、ボクの場合のこれは、髪の毛や爪を切るのと大差ないので、割と早く回復する。少なくとも通常の戦闘には影響しない。ボクが直接戦うこと自体、そう多くはないけど。

ただ、今使っているのは視覚を共有するためだけなので、ジャン又さんが何かを言ってもボクには聞こえない。それに、ボク能力は下手をすれば、プライバシーという概念を根底から崩壊させかねないものなので、慎重に扱う必要がある。例えば、トイレとか体育の際の着替えとか、そういう場合はさすがに監視を外すし、普段でも必要にならない限り使うことはない。

しかも、この能力、少し植え付ける純正魔力を多めにすれば数カ月〜半年も継続する。だから、ボクはいくらかの野生の鳥に同じよ

うな加工を施して、それをいつでも使えるようにしてある。普段は彼らに自分で動いてもらっているから、ボクが使う時以外は動かす必要もない。

ボクがジャンヌさんをDMFBの群れの真ん中から発見したのもこれを使ったからで、実際に現場に行かなくても現場に行った場合とほぼ同じ精度で情報を集められるから、かなり重宝されている。というか、これがないとボクの部隊での価値は半減すると思う。これは誇張、というほどでもないはず。

「唯利亜、そろそろ授業だよ」

「ん、じゃあ教室戻ろっか」

気付くと、もう授業が始まる10分前だった。教室に戻って準備する時間も合わせると、結構ギリギリだ。

「じゃ、宇類さん。また今度」

「ああ、またな」

「……？宇類さん、授業行かないんですか？」

なぜか、宇類さんが食堂の席から立とうとしないので、そう訊いてみる。

「いや……まあ、先行ってるや。サボるつもりはないから安心しろ」

「ならいいですけど………ちゃんと授業行ってくださいね？」

「それじゃ、また」

愛燕もそう言って、ボクたちは食堂を去った。その前にちょっと振り返って見てみたけど、宇類さんはまだイスに座ったままだった。

次の授業は古典。ボクの苦手な教科だ。とはいっても、文系全般が苦手なだけだ。

で、ジャンヌさんの次の授業は　　ありゃ、体育だ。ちょうどジャンヌさんが更衣室に向かっているとところだった。隣にいるのは亜美さんかな？

とりあえず、ボクは監視用の虫たちを引き揚げさせる。一応更衣室の前に待機させておく。着替えまで見るつもりはないし。……見たいなんて気持ちもないよ？や、ほんとに。

いや、でもさ、実際あれなんだよね。ボクってさ……

体育の着替え、いつも女子更衣室でしてるんだよね。

……とりあえず、言い訳させてほしい。

だってさ、男子のほうで着替えようと思ったら落ち着かないからやめると言われるし、女の子のほうは別にいいよ的な空気だったからそれに従っただけなんだけど……やっぱりおかしいだろうか？反対する子がいなかったわけじゃないし。

かといって、どこで着替えればいいのかわからないし……

「……どうしたの？ぼーっとして」

「あー……うん、ボク、どこで着替えればいいのかなあと思ってさ。もちろん体育で」

思わず、考えていたことをそのまま愛燕に漏らしてしまった。だからって、ボクに不利益があるわけでもないけど。

愛燕も特に考えることもなく、

「今のままでいいと思うよ？もう気にする子もないし」

「そうかな……」

「うん、むしろ女子校に潜り込んでも大丈夫じゃない？」

「それは………どうだろう、さすがに」

ちよつと考えてみたけど、それは無理じゃないかな？まず、ボク
の精神が持ちそうにないから。

「大丈夫だよ、唯利亜なら。それで、いろんな女の子食べちゃうん
でしょ？」

「ボク、そんなことしないよ！？」

思わず、突っ込んでしまった。

「男の子は皆、狼なんだよ？唯利亜は雌狼だけど」

「矛盾してるからね、それ。大体、なんで女子校なんかに行く必要
があるのさ？意味あるの？」

「それは、ほら………祖父の遺言で、とか？」

「や、とか？なんて言われても」

そんな遺言を遺すお祖父ちゃんがいたら、ものすごく嫌なだけ
ど。

って、なんか話の内容がすり替えられてるし。

と、気付いてすぐに、

「あ、先生来た」

そう言って、愛燕は自分の席に戻って行った。授業だからしょうがないけど、中途半端に発展させた話題をそのまま放置するのはやめてほしい。そもそもそんな話題をやめてほしい。

ボクはそんなことを思いながらも、ボクは同時に、この苦手な古典90分をどう乗り切ろうか思索していた。

ボクが異変に気付いたのは、その10分後だった。

突然だが、真聖蝶学園について話しておこうと思う。

今まで何度か出てきた名前だが、詳細については何も話していないような気がする。と言っても、俺が知っているのも、一般的に知られている程度の情報ぐらいだ。

真聖蝶学園 正式名称は「学校法人私立総合嬢子育学院」。

略称として、総嬢院などと呼ばれることもある。

おい真聖蝶はどうした、と言われそうだが、これは開校時の最大の出資者である扇染真、宜崩聖、茅原蝶の名から取っている、いわば俗称である。よく考えれば、正式名称の中には真聖蝶のどの文字もないし、学園とも書いてない、学院である。不思議である。

この3人は誰もが若手の資産家で、特に茅原蝶はまだ30代だという。そして、今3人は全員真聖蝶の理事に収まっている。

開校は5年前の2024年。当時はその規模からなにかと話題になり、今でも度々全国区のニュース番組でもその名前を耳にするところがあるほどだ。

次はその規模についてだが
とにかく、でかい。

物理的な規模でいうなら、総敷地面積は約5.4平方km。上から見ると、東西に長い楕円形になっているのだが、その最大半径が約1.5kmもあり、恐ろしく広い。その中に幼稚舎から高等部ま

での校舎が並んでいる。

しかも、その校舎も常識外れに大きい。高等部の校舎だと、最長で300m近い長さの廊下があったりする。実際に行ってみればわかるが、移動が非常に面倒である。校舎と校舎の間の渡り廊下も無駄に長いし。

だが、この大きさは必ずしも無駄というわけではない。必要だからこれだけの大きさになったのだ。

そして、これだけの大きさが必要になった要因の一つが、生徒の数である。開校当時の生徒総数は約20000人。現在に至っては、初等部で10000人以上、中等部で20000人前後、高等部では30000〜40000人。合計で70000人近い生徒を抱えている、マンモスどころではない巨大な学業施設である。とはいえ、これは総嬢院に籍を置いている人数であり、実際にこの真聖蝶に通っているのは、この5割程度だという。それ以外の生徒は、全国にある支部校に通っている。それでも超の付くマンモス校であることに変わりはない。

ちなみに、これだけの敷地を有しているがゆえに、地価の高い都心部周辺などではなく、比較的安価な中国地方の中途半端な田舎に建てられた、という経緯もある。

最後にこの真聖蝶というか、総嬢院全体の機構について話しておく。真聖蝶学園というのは、総嬢院の中でもここ、笠木良市かきりょういちにあるもののみを指して言う名称なので、総嬢院全体に共通することを説明する時は総嬢院を通しておく。

で、総嬢院には他と同様の普通科と特別進学科がある。のだが、その他にいくつかの専門科がある。芸術科、医療科、スポーツ・芸能科、総合工業科、法学科の5つである。

これらの専門科は、中等部から選択できるようになる。基礎ので

きていない内から専門教育を受けさせるとは何事か、などという批判もあるが、中等部では生徒のほとんどが普通科か進学科なので、専門教育は実質高等部からのものだと言っている。

総合すると、大規模な複科制の小中高複合学業施設。

奨学金の制度もしっかりしており、かつ設備の充実度、授業内容の先進性などにより、県外からの入学希望者も非常に多い。むしろ、真聖蝶には、県内の生徒は1割にも遠く及ばないほどしかないという。加えて、外国籍を持つ生徒（留学生ではない）も多く、それがこの大規模化に寄与している、という面もある。他の2つの支部校でも同様らしい。

そして、俺は今、恐れ多くもその真聖蝶の生徒会室にいる。

この真聖蝶を束ねる生徒会長を正面にして。

「……………なるほど、さすが。ただ、これで万全ってわけじゃないから、こっちでも検討してみる。結果が出たら、連絡するからそう言っといってくれ」

その人 謝花謙仁しゃばけんじんさんは、会長（鳳霊の）に渡された書類に

一通り目を通してから、そう言った。それに俺は頷き、手近にあっ

たイスに座る。

謝花謙仁さんは、この真聖蝶の生徒会長である。しかし、この生徒会は鳳霊とは異なり、数ある委員会の一つでしかない。つまり、生徒会が他の委員会をまとめている鳳霊とは違い、生徒会は他の委員会と同列なのである。

なら、真聖蝶の生徒会は何を仕事にしているのかと言えば、それぞれの委員会の橋渡し役のような立場にある。だから、結局のところ、全委員会に何か一つのことを伝えようとすれば、生徒会を紹介するのが最も手っ取り早い。それを知って、会長はこの生徒会に持つていけ、と言ったのである。

「さて、と。わざわざ悪いな、こっちまで来させてしまって。お詫びとってはなんだが、何か飲むか？ コーヒーしかないけどな」

謙仁さんがそう言うので、遠慮なくいただくことにした。

しばらく待つと、謙仁さんは2つのカップを持って、片方を俺の前に置いてくれた。その後、出来を確かめるように自分の分に一口だけ口をつけて、テーブルに置いた。

謙仁さんは、机を挟んで俺の向かいに座り、

「しかし、なんで、わざわざこんな書類にして持ってきたんだ？ こちらに送ってくるなら、メールでもファックスでもよかつただろうに。鳳霊の生徒会じゃ、今は紙媒体がブームにでもなってるのか？」

そう訊ねてきた。考えてみれば、確かにその疑問は尤もだ。なぜだろうか？

「いや、わからんならそれでいいさ。ただ、ふと思っただけだ。気にしなくていい」

謙仁さんはそう言って、書類に目を移した。

さてと……

さつきから気になっていたことをそろそろ訊きたいんだが、もういいよな？

というわけで、俺はメモ帳を取り出す。その行動を見た謙仁さんも俺に注目してくれた。夏にあつた真聖蝶の学祭で既に面識はあったため、謙仁さんを始めとするこの生徒会役員も俺の主なコミュニケーション方法は知っている。

で、俺が書いたのは、

“ 授業は？ ”

という簡潔な言葉。当然ながら、今この時間は授業がされている。そのはずなのに、この人は平然とサボって、この生徒会室に居座っているのである。俺は授業が終わるまで待つつもりだったのだが、なぜかここにいたので、待つ必要もなくなった。俺個人としてはありがたいのだが、実はサボらせているのではないかという罪悪感はあるし、授業に出なくてもいいのだろうかという心配もしてしまうのだが。

「ああ、授業なら、もう出なくてもいいんだよ。1学期で、もう高校で学習する範囲は終わったし、後は受験に向けて各々各自で勉強していくだけだな。楽でいいだろ？」

なるほど、どうやら、真聖蝶（総嬢院全般？）では受験に関しては完全に生徒に委任しているらしい。鳳霊では最低限のフォローはするし、受験対策の講義も開設されるため、大学受験を考えている大抵の生徒は受験が終わるまで学校に来る。どちらのほうがいい、とはさすがにおこがましいから言えないが、俺としては鳳霊のほうが楽でいい。せめて向かうべき方角くらいは経験のある教師に示し

てもらったほうが、いくらか安心感もあるし自分の手間も省ける。そんな理由で、だ。

しかし、疑問が解消された以上、俺にはそれ以上深く追求する理由も目的もないため、黙ってコーヒーをすすする。意外と美味い。

さて、こんなことをしている俺だが、実際のところ、こんなところでコーヒーを飲んでくつろいでいる場合ではない。

なぜなら、ファントムが出現したからだ。

今のところ、何かが起こった、という報告はないが、報告がないだけで実際は何かが起こっている可能性だってある。

一応、ADEOIAには連絡しておいた。これだけで、中国地方支部の構成員全員に通達が行くはずだ。

しかし、出現したという事実だけで俺たちは行動を起こすわけではない。相手は、ただ戦って倒せばいいだけの低ランクのDMFBとは違って、人間並みの、あるいはそれ以上の知能を持っている。しかも、それに加えて並みの魔術師では大隊規模でぶつかっても到底勝ち目がない、というほどに強大な力を持っている怪物である。慎重にして、すぎることは決してない。

さらに言えば、ノエルやノクターンのような例もある。これはごく珍しいものだが、もし万が一今回のファントムがノエルなんかと同様の類であるなら、下手に刺激してわざわざ敵にすることもない。ファントムの特徴からしても、すぐに彼らの目的を遂行しようとは考えず、出現から時間の経った、大体数日後あたりに行動を起こ

すため、万全ではないが対策を練る猶予はあると言える。余裕はないが。

が、今現在、俺の知る限りではそのファントムに直接接触したのは、俺一人である。

その唯一の存在である俺が、そのファントムから受けた言葉。

女王を攫う。

これを聞いて真っ先に思い浮かんだのは、会長のこと。そして、九能のことである。

前者の場合、会長を女王として、鳳霊学園をその女王の住む王城だと考えれば一応当てはまる。

そして、後者は、当然九能を女王とすれば、九能が副部長を務めるADEOIA中国地方支部がその王城となる。

“女王”と喻えられ、かつ組織の頂点に近い立場にある身近の女性と言えば、俺にはこの二人しか思いつかなかった。

しかし、そうだとすると、そうならば次に出てきた“王女”は一体何者か、という疑問が生まれることになる。

一般的に考えて、年齢的に会長に子どもがいるはずはない。九能なら、年齢だけで考えるなら子どもがいてもおかしくはないわけだが、いるとするなら、なぜ今までその存在が知られなかったのかわからない。九能が隠していた、という可能性もあるだろう。あるいは俺にだけ隠しているのかもしれない。だが、それはありえないと思っっている。ずいぶん不確定な物言いだが、これはほぼ間違いないと思っっているのだ、俺は。

九能がそんな重要なことを、あるとするなら俺に教えないはずがない、という希望的観測。

あるいは、九能に子どもがいるはずがない、という願望。
このどちらかではないか、と問われれば、自分の主張に何の根拠もない俺とすればぐうの音も出なくなるのだが。

まあ、どちらにしてもこれは九能自身に訊いてみればいい話だ。
いてもいなくても、この状況で保身のために嘘を吐くほど、九能も愚かではない。訊けば答えるだろう。

さて、途中から論点がずれていたような気がするが、そんなことにも関係なく、頭が疲れてきた。

俺はもう一口コーヒを飲む。

謙仁さんは、まだ書類を呼んでいる最中だ。たまに止まってペンを走らせることもあり、忙しそうだ。

俺は、することもないので、なんとなくそれを眺めていると、

ゴーン……………

という巨大な鐘を搗いたような低い音がした。真聖蝶の、他の一般校におけるチャイムに当たるものだ。

これは授業終了のものだろうか。だからといって、俺には特にこれといった影響はないんだが。

そう思って、今度はこの生徒会室の観察に移ろうかとした時、

「お、昼か」

なるほど、もう昼ですか。その証拠に、外、というか校舎全体が休憩時間以上に徐々に騒がしくなっていくのを感じる。

「俺はもう少しこれ続けるが………お前はどっする？ 食堂はあるけど、弁当かなにか、持ってきてるのか？」

俺は頷く。あの時、九能から弁当を受け取っておいてよかった。でなければ、最悪自腹で昼飯を調達しなければならぬところだった。

しかし、頷いてから気付いた。食べる場所を決めねばならないのだが、基本的にどこが使えるのかがわからない。

しかし、その懸念は謙仁さんの助言によって、杞憂と化した。

「なら、食堂で食べるといい。無駄にでかく造つてあるから、どうせ席は腐るほど余る。それと、屋上なんかには行かないほうがいい………弁当を作ってくれるような相手と一緒になら、別にいいかもしれない、がな………」

なるほど、アベックの巣窟である、と。……いや、古いか、その言葉は。

とりあえず、そういうわけで俺は、まだ仕事を続けるという謙仁さんを置いて食堂に向かった。

………とこころで、食堂の場所ってどこなんだろうか？

運よく地図を見つけた俺は、それを頭に叩きこみ、無事到着することができた。ちなみに、必死で憶えたその地図は食堂に着いた瞬間にきれいに忘れ去られた。

それはともかく、やはり広い。入った途端に少し驚いた。これが食堂なのか、と。

そもそも大ききさだけなら食堂の域を超えている。百貨店の食堂でもこれだけの広さを持つものは、そうはない。おそらく、広さは鳳霊の3倍近く。これで普通科と進学科だけの生徒専用だということからさらに驚きである。

改めて、何においても規格外な真聖蝶に驚嘆しつつ、席を探す。すると、ほどなくして隅に4人掛けのテーブルを発見。そこに座った。

しかし、一人だけ制服が違うというのは、かなり目立ちそうだが、

実はそうでもない。鳳霊の男子ブレザータイプと真聖蝶の制服はデザイナーが同じのためか、並べてもあまり違和感がない。はつきり言えば、似ている。デザイナー、まさか手抜きしたんじゃないかあるまいな。まあ、制服なんてそれほど派手にするものではないし、似ているおかげでこうして違和感なく入りこめているのだから、今は感謝しよう。

そうして、弁当を広げつつ、学校には到底ありえない広大かつ豪華な庭を眺めていると、

「ここ、大丈夫か？」

俺の向かい側から、その声は聞こえてきた。

そいつは、そう俺に訊いたにもかかわらず、俺の返答を待たずして向かいの席に座った。そのまま、そいつはトレーの上の料理を、いただきます、の声とともに食べ始めた。

「……………」

「……………ん？どうした？」

白々しくも、そんなことを訊いてきた。俺が誰か、わかっててそこに座ったんだよな？

「くつくつくつ……………ああ、いや、そんな顔をするな。俺だって少しは驚いてるんだ」

そいつは、さらに俺の顔を見て笑い出し、俺はそれを見て、自分でもわかるぐらいに顔をしかめた。だが、そいつはそれを見てさらに笑みを深くし、

「くくつ、だから、そんな顔をするな。……………ああ、わかつた、真面目にしよう。久しぶりだな、奈都海。元気だったか？」

そいつこと逢海^{おつみりようか}稜^{りょう}介^{けい}は、俺とは対照的な晴れやかな笑顔を浮かべたまま、手を差し出してきた。

俺はその手を寸分の迷いもなく、はたき落した。

「しかし、なんだ。まさか、こんなところで会えるとは思わなかったな」

稜^{りょう}介^{けい}は、いくつか昔話を（一方的に）した後、そう言った。

そりゃあ、俺だって会えるとは思わなかった。まさか会いたくない人間にピンポイントで遭遇できるとは、一体誰が予想できるだろうか？

稜^{りょう}介^{けい}は、鳳^{ほう}霊^{りょう}の中等部で一緒だったやつで、俺を始めとする大部分の生徒が高等部にそのまま進学する一方で、こいつは真聖蝶に進学した。地理的にこちらのほうが家から近いから、とか理由を言っていたが、真聖蝶に行けるほどになるまで勉強したのだから、驚くべきことだ。在学中は俺と大して変わらない学力しかなかったはずだから。

「で、なんでここに？転入してきた、なんてことはないよな？だとしたら、俺としちゃ、狂喜乱舞したいぐらい嬉しいんだけど」

こいつの乱舞している姿が見たくて、嘘を言いたくなかったが、そこは理性で抑えて真実を語ることにする。もちろん、いつもの筆談で。

“生徒会の仕事で”

そう書いて見せると、稜介は少し驚いた様子で、

「へえ、お前が生徒会に？たしか、お前は変わらず鳳霊………あ、あ、鳳秋祭つてもうすぐだったな。それで、こっちにわざわざ来たわけか」

俺は頷きながら、食べ終わった弁当を片づける。すると、稜介は興味をそちらに向けて、

「話は変わるけど、その弁当って、誰の？お前のおふくろさん、弁当作らなかったよな？」

俺は無視する。別に誰でもいいだろうが。

「……彼女、か？」

俺は知らず、顔を上げていた。こいつには教えていないはずなのに。状況からして、カマをかけただけかもしれないが、稜介の先ほどのセリフには確信が込められていた。絶対に知っている。

「……って、そんな怖い顔するな。こっちの学園祭に来ただろ？その時に見たんだよ、お前とかわいい　　というか綺麗な女が手を繋いで歩いてるのを。偶然だよ、それ以外に理由はない」

俺はまだ疑心暗鬼だったが、それ以上に稜介の声には真実味があったので、追求はしなかった。

「まあ、正直、かなり綺麗だったな。お前にはもったいないぐらいだ。ちゃんと満足させられてるのか？」

その質問は一体なにを指してのものなのか。全般的にか、あるいは下のほうか？

しかし、稜介は俺の答えを聞く前に、また、

「ま、お前なら大丈夫か。少なくとも悲しませない努力はしてるんだろ？……なら、いいだろ。お前を選んだんなら、そいつは幸せ者だ」

なぜか、褒められている。思わず質問に頷いてしまったが、そのすぐ直後に稜介からこんなセリフが聞けるとは思わなかった。

と、俺の表情から何かを読み取ったのか、

「……ん？もしかして俺らしくないこと言ってた？……なんか懐かしくてセンチメンタルにでもなってるのかね。ほんっと、俺らしくもない……」

そう言っつて、なぜか顔を伏せる稜介。どうした？本当に稜介らしくない。

「……いや、……あー……わるい、戻るわ。これ以上お前といると、ほんとおかしくなりそうだし。ほんとにわるい、俺から絡んでおいて、こんな勝手な……じゃあな、また今度機会があれば会おう。じゃ」

そのセリフを言い終わるや否や、稜介は空の皿の乗ったトレイを持って立ち去って行った。俺のほうに顔を一切向けずに。

何だったんだろうか……？

「……ってわけだから、ごめんね？多分、昼休みほとんど使って話し合うと思うから、復帰も無理だろうし。じゃ、そういうことで」

私は、一緒に昼食を食べる予定だった唯利亞、愛燕、宇類の3人にそう伝えて、部総会のある第3小会議室に向かった。

朝のHRで言われた限りでは、今回の内容は鳳秋祭での模擬店についての話。でも、私の所属する演劇部では、基本的に劇の練習に集中しているので、模擬店なんかしている暇はない。当日は公演が

終われば暇だろうけど、それまでに準備する時間が取れないからだ。だから、本来は出る意味がないのだけど、同好会も含めた全部活が招集されていたのだから、形だけでも出ておいたほうがいい。それに、模擬店を出さない、という意味を明確にしたわけじゃない。この機会にしておいたほうがいいだろう、という思惑もある。などと考えつつ、教室棟から特別教室棟へ向かう渡り廊下を歩いていると、

「あ

という声。演劇部副部長、綾羅木みちか（あやらぎみちか）だ。今回の集会には、部長、副部長ともに集められているから、その会場に行く過程で遭遇してもおかしくはないんだけど

「えーと、久しぶり？」

なんとなく気まずくて、思わず疑問形で訊いてしまった。でも、みちかはくすつと上品に笑って、

「なにそれ。まだ、2日しか経ってないじゃない。部長、まだ気にしてるの？」

「え……あ、うん。なんかごめん……」

なんとなく謝ってみた。

「はあ……」

その謝罪がお気に召さなかったようで、みちかはあからさまに溜息をついた。

「だから、それはもういいってば。そんな気にされると、こっちまで気になっちゃうし。それにさ、メール見たでしょ？みんなも言いすぎたって反省してたし、途中から部長の人格否定みたいなことまで言ってたし……」

「それなら私だって、情けなくて、部長がこんなのでいいのかなーなんて思ったり……別にみんなが言ったことが間違ってるってわけでもないし、ね」

金曜日の部活で、私たちは喧嘩してしまった。しかも、大喧嘩を。その日のうちに和解はしたものの、メール越しただから、いざ面と向かってみると結構気まずかったりする。和解はしたはずなのに、どうも心配になるし不安にもなってしまう。

70年近く生きていても、肉体の老化が遅いと精神年齢も同じように老化というか成長が遅れるのかもしれない。実年齢では孫みたいな子相手に本気で喧嘩してしまうし、その相手が後でどう思っているのか不安に思ってしまうし。昨日だって、奈都海が私に気を遣っていたのが、少しだけだけどわかった。今この場においても、言い訳みたいな、その場しのぎの言葉しか思い浮かんでこない。

会議室に向かって歩きながら、空気が重くなっているのを感じる。やっぱりお互いに気にしすぎているのかもしれない。

私には、この空気をどうすることもできず、目的地までこの沈んだ空気で過ごすことを覚悟した、その時、

「あれ？……あの人たち」

「部活の統率委員会の委員長、だね」

みちかの言葉に続けて、私は言った。

私たちの進行方向に、何かを話している運動部統率委員会委員長なつめあたらの榎新さんと文化部統率委員会委員長の小野原礼華さんおのはられいかがいた。その二人は、すぐにこちらに気付いて、

「お、西園寺九能だったよな？今日は、奈都海は一緒じゃねえんだな？」

「……………」

それぞれの方法で対応してくれた。新さんは相変わらず私たちをからかおうとするし、礼華さんもまた、相変わらず無言で軽く会釈してきた。私とみちかも、礼華さんに会釈を返した。

「2人とも、これから会議室ですか？」

「ああ、お前らもだろ？そっちは綾羅木だったな。なんなら、一緒に行くか？」

頷くまでもなく、新さんと礼華さんの2人は歩き出し、私たちもそれを追って歩き出す。ちなみに、からかいの言葉を見殺されたことに関しては、新さんは気にしていないらしい。

そうやって、私たちが横に並ぶと、早速、新さんから質問が飛んできた。

「で、どうだよ、劇のほうは？順調なのか？」

私とみちか、2人に訊いたんだろうけど、答えたのはみちかだった。

「えーと、順調とは言いつらいんですけど……、予定通りではあり

ます。必ず完成はさせるんで、楽しみにしててくださいっ」

少し興奮気味に言うみちか。校内で披露する機会は、鳳秋祭がほとんど唯一と言ってもいいくらいなので、やはり気分は上がる。同時に失敗できない、というプレッシャーもあるから、緊張もあるんだろうけど。

しかし、それに応じたのは私でもなく、新さんでもなく

「……完成させるだけじゃ、だめ。完成させた上で、最高の舞台を作ってくれないと。少なくとも、あなたたちにできる最高を魅せてくれないと、だめ」

礼華さんだった。しかも、いつになく饒舌だ。夏休みにも3度ほど会ったけど、一度にこんなに喋る礼華さんは始めて見た。

礼華さんと初対面のすのみちかはそれほど驚いていないけど、私は顔に出るほど驚いていたのかもしれない、新さんが苦笑しながらも補足してくれた。

「礼華、舞台とか、その類が大好きなんだよ。誘ったら大抵ついてくるしな」

私はなるほど、と思った。けれど、さらにその直後、

「誰が誘ってもついていくわけじゃない。新が誘ってくれたから、新じゃなきゃ、やだ」

礼華さんはすかさず追加。

「お前……そんな恥ずかしいこと、よく平然と言えるな……」

「ですね……。聞いてるこっちが恥ずかしくなりますし」

私も新さんに同意。

というか、この2人ってそういう関係だったっけ？奈都海からはそんな話は聞いたことはないし、夏休みに話した限りでは、そういう相手はいないって聞いたけど？私が話した後に、か、あるいは2学期から？

なんて考えていると、

「何言ってるの、部長……。いつつも散々、惚気話聞かせてくるくせに……」

みちかが恨めしげな目で睨みつつ、そう言ってきた。え？うそ、私、そんな恥ずかしいことしてるの？

「くくつ、確かにな。奈都海だって、たまに話すと惚気てくるからな。指摘すると顔赤くするけど」

「2人揃って天然か……。殺意が、湧いて、くるね……」

あれー？みちかが怖いんだけど？どうすればいいの、これ。

「そりゃ、恨まれてもしようがないんじゃないかね？俺にもその気持ちはよくわかるし」

「……っ！」

新さんの言葉に、過敏に反応して、ものすごい視線で新さんを睨む礼華さん。まだ、同僚か友達の域なの？新さん、早く気付こうよ

……

って、他人の心配をしてる場合じゃなくて！

「は、早く行きましょう！遅れちゃまずいですし！ほら、みちかも
」

焦っているのが丸わかりだったけど、みちかを始め、他の2人も
一応ついてきた。……新さんは笑いをこらえながら、だったけど。

なんか、奈都海が生徒会を苦手に行っている理由がわかった気がする
……

昼休みが終わり、今は3限目の現代社会。
教壇に立っている教師が、冷戦について、そしてそれに際して発

生じたベトナム戦争やプラハの春なんかについて語っている。それをリアルタイムで体験したことのある私からすれば、聞くよりもむしろ私が語りたい、という気持ちのほうが強いけど。

でも、それは許されない。公式にされていないことまで、私は知っているし（魔術師は関係ないことも）、もしそれが公にされればどうなるかは検討がついてしまう。それほどに危険なことを、私は知っているのだから。……それ以前に、いきなりただの生徒が戦争について熱く語り始めるなんて、痛い子決定なわけだけど。

でも、現代社会で学習するのは大体戦後から今まで。私は1960年代から生きていて、しかもその後10年も経たないうちに、もう普通を逸脱した生活をしていた。11歳からはADEOIAの前身であるADUIAの一員として戦っていて、そのせいで世界の政治、国際情勢なんかに触れる機会が多かった。この期に及んでそれを勉強するなんて、しかも表面をなぞる程度にしか教えられていないのだから、無意味にもほどがある。たまに事実と食い違うこともあるし、イライラする以前に、退屈、正直面倒くさい。

かといって、何か刺激のあるものを望むわけでもない。一時期は自分の能力に自惚れて、暴走気味になったこともあったけど、そんな戦闘狂みたいな時期はとうに終わったし、今は普通に平和を望んでいる。……ただ、たまに戦いに興奮してしまうのは仕方ないと思う。60年近くも続けていると、もう習慣みたいになっっているし、けれど戦いというものは決して慣れることはない。むしろ、さらに強い刺激を求めてしまうような、そんな麻薬みたいな、依存性というある種の特殊な慣れがあるのが、戦いだ。ま、その強い刺激を、ただ敵に突っ込むことによって生まれるスリルに求めるのか、緻密な計算で立てられた作戦によって得られる勝利に求めるのか、で生存率は格段に違うわけだけど。

それに、今、この状況で刺激なんて探すまでもなく、目の前にある。今はまだ何も起こっていないけど、いずれ何かが起こるのは確実だ。そして、そこに戦闘が伴うのも確実。

この数日以内、あるいはもっと長くて数週間以内かもしれないけど、とにかく近いうちにジャンヌさんに関連した何かが起こる。別に待ち望んでいるわけではないけど、少なくとも待つてはいる。来なくていいとは思っていない。解決には何かしらのきっかけが必要だからだ。

ADEOIAには、何かが起こったら優先的に連絡するように言っている。今日、早速来るとは考えにくいけど、一応、気を抜いてはいけない……

(ん……)

そう思った矢先、スカートのポケットの中の携帯が振動しているのを感じた。しかも、私用のほうではなく、ADEOIAに支給されたものだ。

ADEOIAは独自の通信回線を持っており、それを使ったネットワークの利用、情報伝達の円滑化を達成するために、すべての構成員に携帯電話を支給している。通信料はタダ。その代わりに、私用目的で使うのは禁じられている。その携帯に連絡があった、ということは……

(うそ、でしょ……)

受信したのはメールだったけど、そこには、こう書かれていた。

“今日未明、所属ナンバーJP03 - 00043が、ADEOIA - JP03管轄下・亥駆駅前にてファントムと思しきDMFBと遭遇。その時点では戦闘は行われず、当該兵との会話のみ行い、十数分後に逃走。逃走先は不明。特徴は「身長は約190cm。教

会で見かけるような黒っぽいローブを着ている。目玉を模したアクセサリーを首に着けており、ローブの袖から蛇の頭らしきものが見えることもある」とのこと。また、これによる下級DMFBの発生は見られず、同地域の所属兵からの報告がないため、現在は潜伏期間中だと思われる。ただし、当該兵からの報告から「会話の内容から、早ければ今日にも行動に移る危険がある。活動期間に移った場合の必要戦力は未知数」とあり、警戒が必要と判断し、ADEOI A-JPO3管轄下において、第二戦闘配置を発令。当該地域の所属兵は直ちに自らの持ち場に着くこと。これを読んだ時点で命令は適用される。以上”

……

まさか、と思った。だって、所属ナンバーJPO3 - - 000043と言えば、奈都海なのだから。

奈都海が、私の知らないうちに、ファントムに遭遇していた？

私は立ち上がる。授業中に突然立ち上がったのだから、当然教室中のみんなの視線が私に集まる。しかし、今はそんなことに構っている暇などない。

「どうしたの、西園寺さん？何かあった？」

当然、教師の言葉なども、どうでもいい。そうは思っけど、一応の言い訳はしておく。

「すみません、これ以上は授業に出られません。おそらく、今後1〜2週間は学校にも来られないかと。なので、休校扱いにしておい

てもらえますか？では、これで。また今度」

一気にまくしたて、ロッカーや机の中に教科書類を置いたまま、私は鞆だけを持って教室を出る。先生やクラスメイトの反応など、見る時間も惜しくて視界にすら入れなかった。

そこに、ちょうど、

「お姉ちゃん！」

未来小が教室から出てきたところだった。私は無言で歩き出し、そこに未来小もついてくる。

「ねえ、さっきの . 00043って……」

「……奈都海、ね」

私はそれだけを答えて、さらにスピードを上げる。

数分もかからず校舎から脱出した私たちは、さらに校門を抜けようとした、その時、

「九能さん、未来小さん！」

その声に呼び止められた。振り返ると、声から予想した通り、唯利亜がこちらに走ってきていた。

「どうかしたの？」

焦りからくるイライラした感情をなんとか抑えつつ、それでも手短かに訊ねる。

すると、唯利亜は息を整えるのをやめて、顔を上げる。そこには

私とは比べ物にならないくらいの焦燥と絶望を浮かべた表情があった。それこそ、最悪の事態に陥ってしまった、そんな感じの表情が。

「あ、あの、ボクがジャンヌさんを監視、してたのは、知ってるよね？」

「ええ、知ってるけど……」

まさか……？

唯利亜の表情がさらに焦りを助長する。さらに、続く言葉を予想してしまい、もしそうだったら、という焦りも加わる。

唯利亜はその私以上の焦りをそのまま言葉にしたように、途切れ途切れに叫んだ。

「どう、しよう……、ジャンヌさんが、いなく、なっちゃった……」

第1章 誘惑の狂姫 #9

俺は、慌ただしい廊下を走り進み、目的の部屋の前に到着。すぐにその扉を開ける。そこには

「奈都海！」

『おうわ！？』

その部屋に入った瞬間、何かに飛びかかられた。

よくよく見てみれば、それは九能だった。九能が突然抱きついてきたのだ。なぜに？

「奈都海、大丈夫だった！？怪我とかしてない？ファントムと遭ったんでしょ！？本当に心配したんだから！報告があったのは朝だって言っし、今までどこで何してたの！？戦ってたりしてないわよね！？」

落ち着け。まずは落ち着いてくれ。俺はそう口で言いながら、九能をひきはがす。

「落ち着けるわけないでしょ！？ほんっつとに心配したんだからね！？」

だからっていきなり抱きつくな。俺は怪我もしていないし、ファントムとは戦わずに会話をしたただけだ。そう報告したはずだが、皆には伝えられていないのだろうか？

「聞いたけど！でも、心配するじゃない、報告は朝だったのに連絡が取れないなんて！今まで何してたの！？」

……それを訊かれると、かなり答えづらいんだが。くそ真面目に真聖蝶まで行って、会長に言われたことを果たし、あまつさえ昼食を食べてきた、などと。しかも、ADEOIAに報告した後、携帯の電源を切っていたし、私用電話のほうも充電が切れていたしで、連絡手段は絶たれていた。本当なら、ファントムが出た、と報告した時点でこの中国地方における本部に戻ってくるべきだったのだ。そうすれば、もっと早い段階で九能たちに連絡がいったはずだ。

が、嘘を言うわけにもいかず、真実を答えると、

「はあ！？バツカじゃないの！？そんなことしてる場合じゃないでしょうが！」

予想通り、罵倒された。周囲の同じ部隊の皆にも呆れた表情をされている。咲に至っては、あからさまに溜息まで吐かれた。当然か

……

「はあ……、もういいけど。無事ならそれで」

九能もようやくやく落ち着いたのか、声のトーンを落として、そう言った。

さて、俺は改めてこの部屋をしてみる。当然だが、俺以外の皆は既に集まっている。それ以外にも

「あー……やっとな員集まったのね。それにしても、ファントムー

人に大袈裟ねえ、ここに2人もいるつてのに」

「ノエルも合わせれば3人か。今は……いないが」

シャトーとノクターンもいる。ノクターンの言ったノエルというのは、俺たちに敵対しないもう一人のファントムだが、ここにはいない。

しかし、なぜこの2人がここに？DMFBを相手にする時、彼らはほとんど関わってはこなかったはずだ。ここにいるということは、すなわち今回の行動に参加するということになるのだが……どうなっている？

「みんな集まったわね？なら、始めましょう」

九能がそう言ったため、疑問を抱きつつも俺は中央の会議机に着く。俺と同じように、全員が席に着いたのを確認してから、九能は喋り始める。先ほどのような俺の身を案じすぎて取り乱しているようなこともない。

「みんな知っての通り、ファントムが現れたんだけど……」

九能は俺に視線を移し、

「今のところ、そのファントムと接触しているのは奈都海だけ。一応、招集命令の中で簡単に説明されていたけど、もう少し詳しいことも知っておきたいから、奈都海、お願いできる？」

俺は頷き、目の前の端末を起動させる。同時に他の皆も同じことをし始める。

俺は、こつこつという会議の時、こつこつしてキーボードで簡単に入力でき

る方法を使っている。この人数相手では読唇術も筆談も使うのは難しい、あるいは無理だからだ。

そして、俺があらかた説明し終わった後、

「……つまり、どづいづこと?」

未永栖さんが言う。まあ、それが普通の反応だとは思うが。

俺は、わからない、という意味を告げる。

「そうですね……。そのファントム、発言内容が抽象的というか象徴的というか、とにかくはつきりしませんし。結局何が言いたいのかもわからない……。どうします?」

「手がかりとえば……。女王とか王女とか、そんなの?……。わかんないけど」

深夜と未来小が各々の意見を述べる。……意見に値するかどうかは別として。

しかし、全員が怪訝な、考え込むような表情をしている。が、一人だけ、

「女王様って言ったら、九能ちゃんだよなー?それで、王女様はー

……唯利亜ちゃん?」

「私?」

「え?ボクが?」

魅戈さんの推理に、二人は同時に声を上げた。確かに女王については俺もそう考えたが、さすがに唯利亜が王女というのは、ありえ

ないのではないだろうか？男だし。

「王女はまだしも、女王はありえないわ。……唯利亚」

「ん……えっと、みんなジャン又さんって憶えてるよね？」

九能に促されて言った唯利亚の言葉に、全員が頷く。ちなみに、シャトーは俺の話の途中に寝始めていた。

しかし、全員がただ頷くだけではない。明らかに異常な状態で発見され、しかもその異常な状況を引き起こした、と疑われている対象についての話だ。気を張らないわけがない。

「もう、さ。予想はできると思うから、手短に言っね」

そこで唯利亚は少し間を置き、

「ジャン又さんが、いなくなった。……多分……ううん、ほぼ間違いなく、だろうね、兄さんの逢ったファントムの仕業だと思っ」

唯利亚はあくまで淡々と語る。もちろんその報告の内容自体にも驚いたが、唯利亚の様子の方がむしろ驚きは大きかった。もつと取り乱すかと思っていたが、……いや、今は時間が経ったせいで落ち着いているだけかもしれない。会長がいなくなった、と言って唯利亚がここまで毅然としていられるはずがない。

「状況としては……ジャン又さんが着替えをするから、監視を外したらその間に……ってところ。いなくなったところを見てたわけじゃないけど、いくら経っても更衣室から出てこないから見てみたら、いなくなってた……」

「唯利亞さん……あまり……」

「ありがと、咲ちゃん。大丈夫だから」

咲の懸念の声にも、すぐに心配なし、と答えるが、その声にはいつものような覇気というか瑞々しさが無い。精神的な疲労があるのだろうか、表情も心なしに暗い。やはり、唯利亞にとって会長はかなり大きい存在らしい。

「でも、これでそのジャンヌ……さんが女王である、ということはおぼろしいだね。ファントムは女王を攫うと言ったんだらう？」

俺は、唯利亞から意識を外して尊何さんの質問に頷く。

「で、そのファントムの居所だけ……わからない？」

その九能の質問は、索敵のできる唯利亞と深夜に向けられている。俺は専門ではないし、少しでも妨害されれば誤った情報を与えかねない。土曜日の場合は、咲の妨害が、索敵しにくくなる、というものであったから力押しで何とかできたが、指向性そのものを曲げられたら俺にはなす術もない。

しかし、質問を向けられた唯利亞と深夜は、

「……ダメです。魔力から何も読み取れない……」

「ボクもダメだね……どの媒体を使っても視界にノイズが入る、昔のテレビの砂嵐みたいな映像しか見えない……こんなこと、今までなかったのに……」

二人とも、首を横に振りながら答える。この二人に無理なら、ここにいて誰にも無理だということだ。

「原因はわかる？」

「多分……だけど。そのファントムが何かしたんじゃないかな。……その何かがわからないんだけど」

原因もわからないのでは、さすがにどうしようもない。対策すら立てようがないのだから。

「ってことは、地道に捜すしかないってことか？」

「いえ、あの、潜伏期間が終われば居場所はわかるんじゃない……」

「それじゃ、遅いだろう。潜伏期間の今のうちに叩いておかねえとやばいって話だろう、今は」

「あ、あう………すみません………」

確かに天代の言うとおり、ファントムが活動期間に移ればその大きすぎる力を露わにするのだから、居場所はすぐにわかるだろう。しかし、そうなれば久宮さんの言葉通り、手遅れでもある。

ファントムは、発生した直後の力のまだ完全ではない潜伏期間と完全に力を発揮できる活動期間とに分けられる。当然、力の劣る潜伏期間のうちに潰すのが最善だが、力が比較的弱いためか（それでも並みの疵術師では束でも敵わないが）潜伏期間のファントムはその姿を隠すのが巧妙なのだ。それが自身を守るためなのかどうかはわからないが、こちらとしては迷惑以上に脅威でしかない。

この部隊は、唯利亜と深夜という存在によって、そのファントム

の長所を潰すことのできる数少ない部隊である。全国的に見てもかなり高い諜報・索敵能力を持つ疵術師を二人も擁する部隊など、ここがほぼ唯一と言っていていいだろう。しかも、二人とも平均以上の戦闘能力も持ち合わせている。その価値は非常に高い。

だが、今回はその強みも使えそうにはない。

「ってことは、真正面から戦うしかないのかしらね……」

九能は辟易とした表情で呟く。一度だけでも、完全なファントムと戦ったことがあるなら、当然だろう。特に九能はこの60年の間に2ケタ近い数のファントムと戦ったと聞いたが、それでもなお、いや、だからこそファントムと戦うのは忌避しているのかもしれない。俺とて一度経験があるわけだが、未熟な俺が生き残れたのはまさに奇跡としか言いようがない、というほどに熾烈な戦いだった。あれをもう一度しようなどというのは、御免被りたい。

「この件に関しては、うちの部隊が指揮を任されてる。だから、まあ、そうね……とりあえず今のところはうちだけで頑張るしかないんだけど」

どう足掻いても楽観的には考えられないこの状況で、進んで関わろうなどと思う者がどれだけいるか。俺の報告があった段階で、諜報部でファントムの探索は行っているはずだ。しかし、そこで全く手がかりさえも見つからなかった、というのなら、そのファントムの存在は疑わしいものにもなる。俺の報告が虚偽、あるいは思い過ぎしなら骨折り損だし、本当だとしてもファントムと積極的に戦いたいと言う疵術師などいるはずがない。下手を打たなくても死ぬ危険があるのに身を投じようなどとは俺も思わない。

だからこそ、この部隊なのだろう。

九能の設立した遊撃専門の特殊部隊。確かにこの部隊は中国地方

支部では大きな戦果を上げている。だが、実際のところこの部隊は正規の部隊ではなく、必要に迫られない限りは他の部隊は協力する義務はない。つまり、俺たちが中心に関わることで、作戦行動に拘束される部隊がなくなり、逆に自由に動かせる部隊が多くなる。

人員不足に苦しむこの支部では、一つのことにより多くの人員を回せない。かといって、ファントムの存在が疑われるこの状況で出し惜しみするわけにもいかず……………だから、個々の戦闘能力の高いこの部隊に白羽の矢が立ったというわけなのだろう。

「どちらにしろ、今はここに常駐してもらうことになるから。どれぐらいの期間になるかわからないけど。……………で、もう一つ」

九能は続ける。

「ジャンヌさんに関して本部に判断を仰いでおいたんだけど、その答えが返ってきたみたい。えーと……………」

と、一人の女性が一束の書類を九能に手渡す。おそらくオペレーション業務に携わる人なのだろうが、名前は知らない。

ちなみに、ここで言う本部というのは、ADEOIAの日本支部を統括する日本における総本部、つまり関東支部のことを言っているのだろう。

しかし、直後、関東支部からの、会長に関する返答が書いてあるはずの書類を見て、九能は顔を強張らせた。一体何があったのか、と皆が注視する中、九能はその口を重く開いた。

「何これ……………なんでニューヨークからの返答になってるわけ……………」

それを聞いて、ここにいる俺と唯利亚以外の皆が目を見開いて驚

く。あの尊何さんですら、いつもの笑顔をわずかに崩しているのがわかる。

ニューヨークは、ADEOIAの真の総本部の所在地である。企業としてのADEOIAの社はドイツにあるのだが、DMFB討伐組織としてのADEOIAの総司令本部はニューヨークにあるのだ。一度は中国に移転しようという話もあったが、いつだったか、中国でバブルが弾けて恐ろしいほどの経済恐慌が起こったために取り止めになったという。

そんな話は置いておいて、そのニューヨークからの返答が来た、ということとは、日本の総本部としての機能を持つ関東支部では手に負えぬと判断したために、総司令本部に判断を委託したのだろうと推測できる。つまり、それほどに会長の件は厄介なものということになる。確かにファントムが絡んでくるとなれば、厄介なことに変わりはないが、それだけなら関東支部で十分判断は可能だ。わざわざ手間までかけて上に判断を仰ぐ必要性など、どこにも見当たらない。

「とりあえず、准将。内容を」

「え、ええ、そうね……」

しばし放心状態にあった九能に、未永栖さんが声をかけて正気に戻させる。すぐに持ち直した九能は、その書類を数十秒ほどで読み終わり、

「……………禁断子第二種に指定って……………」

「はあ？それマジで言ってるの？」

「だとしたら、いきなりマジイことになるよなあ、それ。ははは…

…」

九能の言葉に未来小が眉を顰めて言い、さらに、それに久宮さんが乾いた笑みをこぼす。

先ほどに続いて、これまた俺と唯利亜だけが置いていかれているのだが？そもそも禁断子という言葉そのものが初耳なのだが。

それは唯利亜も同じなのか、唯利亜は俺を一瞥すると九能に向き直り、

「あの、九能さん。その禁断子って何？なんかまずいことなの？」

「ああ、そういえば唯利亜と奈都海にはまだ言っただけだったっけ。

……ええ、まずいわよ、禁断子になんか指定されたら」

九能は疲れたように溜息を吐くが、それは他の皆のように完全な不意打ちにあつたのではなく、むしろ、もしかしたらあり得る可能性としては考えていたが頭の片隅にあつた程度だった、ということにそうなつてしまった、という驚きがあるように思える。まあ、それも逆に衝撃が大きいような気もするが。

九能はそんなものにも関わらず、説明を始める。

「禁断子っていうのは、簡単に言えば犯罪者につけられる、いわば指名手配みたいなもの。確か“Forbidden Apostle”の和約だったかな？とにかく、魔術師がもし魔術を使って犯罪を行った場合、一般の裁判じゃ裁けないでしょ？魔術は使っても一般人が観測できるような痕跡が残らないし、世間じゃ魔術なんて何の証拠にもならない。だから、魔術師を裁く独自の仕組みが必要なの。ADEOIAがテンブル魔術団の中の一組織だつてことは前に説明したわね？疵術師でも、罪を犯せばADEOIAじゃなくて魔術団のほうで裁かれるのよ。だから、禁断子の指定には少なくとも、

同じく魔術団の一組織のFASCAが関わってるはずなんだけど

あ、ちなみにFASCAっていうのは、禁断子討伐軍（Forbiddan Apostle Subjugation Combat Army）の略ね。で、そのFASCAは魔術犯罪の調査、禁断子の指定や捕獲、討伐を行うの。禁断子には第一種から四種まであって、第一種は問答無用でFASCAに討伐されることになるんだけど、それ未満なら、なんとか捕獲とか監視で済むでしょうね。ジャンヌさんはその第二種に指定されたってわけなの。第一種の上も、一応あるんだけど」

「……ん？でも、ジャンヌさんは魔術犯罪なんてしてないし、それ以前に魔術なんか使えないじゃない。どうして？」

唯利亜はそう訊くが、それは俺の疑問でもある。会長はそもそも、つい最近まで魔術とは無縁の立場だったはずだ。それがなぜいきなり犯罪者にされてしまうのか。

「それね、説明は難しいんだけどね……。簡単に言えば、禁断子の指定条件がかなり曖昧なのよ。魔術団の活動に支障を来すと判断された場合にも指定されるし、そうでなくても強くなりすぎた魔術師だったり脅威になりそうな魔術を会得していたりしても指定されたり……。とにかく邪魔、あるいは将来敵に回ったら厄介な魔術師は指定しとけ、みたいな感じだからジャンヌさんの場合もそうかもしれないわね。魔術師以外が禁断子になったっていう話はないわけじゃないけど、かなり少ないから私も少し戸惑ってるんだけどね」

そう言って、九能は苦笑した。

しかし、すぐにその表情を引き締めて、

「で、詳しい内容だけど。『対象者は保護を最優先。やむを得ない

場合は殺害も許容するが、極力避けるよう努力されたし。なお、保護に成功した場合、対象者の身柄は総司令本部に委託すること。関連のDMFBは殲滅すること。ただし、最終的な優先度は対象者の保護が最上位のため、留意して作戦行動に当たれ』……だって。どうする？一応みんなの意見も聞いておきたいんだけど？」

「禁断子第二種でしたよね？なら、確かにその扱いで納得できるんですけど、DMFBの殲滅より優先度が高いなんてありえないことじゃありませんか？ましてや、相手はファントムですよ？」

「あの、聞いたことがあるんですけど、欧米ではアジアよりもファントムの出現率がかなり高いって。もしかしたら、そのせいでファントムの希少性？っていうんでしょうか、ファントムに対する意識が違っんじゃないかと……」

「だからってファントムの強さが変わるとは思わないけどなー。あつちの疵術師がこつちよりもはるかに優秀だっていうならわからないでもないけどさ、そんなに変わんないでしょ。ねえ、咲？」

「さあ、どうでしょう。私の場合、能力が他人と比べにくいのでわかりません。他の方について論じるにしても、私が語るのは非常におこがましいので、避けさせていただきます」

「ふえ？咲ちゃん、強いよねー？みーんな閉じ込められるんだもん！」

「まあ、でも、実際に疵術師同士を比べるなんて、1mと1gとか1mmと1mg、どちらが大きいかって比べてるようなものだからね。全く違う要素を比べても優劣なんて付けようがない」

「といつても、領域支配に関しては咲の右に出る者はそういないでしょうね。ちなみに、アジアと欧米、規模を比べればあっちのほうが大きいか、個々の戦闘能力を平均すればそう変わらないと思うけど？アメリカでもファントム一体のせいで支部が一つなくなっただけの話もあるくらいだから」

各々が好きに会話を始めた。論ずるべき主題がどこかへ飛んで行っているような気がするの、俺だけか？

すると、久宮さんが、座っていたイスの背もたれに身体を預けながら言った。

「でもよー、本当にどうすんだよ、この先。あの嬢ちゃんを捜すか？そうすりゃ自ずとファントムも捜すことになるんだけどよ……」

「そうだね。当面はそれが主になるかな。といつても、唯利亜ちゃんや深夜が見つけれなかった、ってくらいだから潜伏期間中は無理かもしれないけど」

応じた尊何さんもその表情に余裕はない。

しかし、それ以上に余裕がないのが

「……………九能さん」

「唯利亜？どうしたの？」

「ジャンヌさんを助け出したら、絶対向こうに連れて行かれるの？例外なく？」

そう九能に訊く唯利亜の目はまさに必死。わずかでも希望があればすぐにでも縋りつきたい、という思いで溢れているのだろう。た

とえ助け出しても会長の傍にいられないのでは、唯利亚としても不本意というか、心配なはずだ。

しかし、九能は、

「そうね、100%、確実に。でないと、私たちが禁断子扱いされることになる」

一分の隙も残さずに、完全に否定する。それを聞いた唯利亚は当然、顔を泣きそうなくらいに歪ませるが、寸でのところで踏み止まった。

状況からして、会長がファントムに連れ去られたのはほぼ確定している。そのファントムが、何らかの目的のために会長を使うこともわかっている。なら、それを止めるのが俺たちの仕事であり、俺たちが軍人である以上、上司の命令には従うのが常識以上の真理。唯利亚にもそれがわかっていてから何も言い返しはしない。が、会長を慕う私的な感情が邪魔をして、それに素直に頷くこともさせてはくれない。

俺の主観でしかないが、今まで16年間ずっと傍にいたのだから、唯利亚の大体の心中は察せられる。今の唯利亚は、葛藤と戦っているのだろう、絶対に片方しか選び得ない葛藤と。絶対に本人にとつて不本意な結果でしか解消できない、この不条理な葛藤と。

だからといって、俺たちに唯利亚を癒す術はないし、唯利亚の望む結果を出せるような力もない。

全員が心配そうに見守る中、

「悪いが、俺たちはお暇させてもらおう」

その声はノクターンのものだった。背にはまだ眠ったままのシャトーが乗っかっている。

「ええ……もういいの？」

「ああ、シャトーはこの通り寝てしまっている。それに、話を聞く限りでは、そのフロントムは我々とは相容れない存在であるようだし、な。今回も傍観者に徹するとしてしよう。ただし」

そこでノクターンは言葉を区切り、視線を唯利亞に向け、

「もし、偽識者に戦う意思があるのなら、ノエルが加勢するはずだ。………奴の気分もあるだろうが」

偽識者とは、唯利亞のことだが……その後、ノエルが加勢するとはどういうことだろうか？何を意味している？

「理解しようとしなくていい。ここに来る前に奴にそう言えと言われていただけであるしな。では、またいずれ」

ノクターンはその言葉を最後に、部屋を出て行った。

「なるほどね……」

俺の耳に入ってきたのは、九能の声だろう。しかし、誰も反応しないのを見ると、俺にしか聞こえなかったようだ。この中で彼らと最も付き合いが長いのは九能である。俺たちにわからなくても、九能にはわかることがあるのだろう。しかし、俺はなぜかその内容を訊く気にはならなかった。

「さて、と。みんな！」

九能は皆の注目を自分に向けさせる。

「今日は何もなければ、これで終わりね。本格的に動くのは明日からになるわ。今、諜報・斥候部隊が街中を搜索しているところだから、もしかしたら夜中に叩き起こされるかもしれないけど、今日はもう寝ちゃってもいいから。今のところ、私たちができることで緊急が高いものは……ないわけでもないけど、今日は無理ね。でも……、そうね、咲と天代は残ってくれる？少し話したいことがあるから。」

「あ、はいっ」

「わかりました」

2人の返事を聞いてから、皆が各々立ち上がり始めた。

俺も続いて、半ば茫然としている唯利亜を連れて部屋へ向かった。

俺と唯利亚は、ADEOIAの宿部屋の一つにいた。

ここは唯利亚に割り当てられた部屋で、広さは大体7、8畳ほどで、その隅にベッドが鎮座し、その他に最低限の家具が置いてある、というもの。

人が住むにも十分の広さで、かつ清潔。というか、久宮さんや咲は、この宿部屋に住んでいる。その他にもここに住んでいる人は多いらしい。自分の部屋を持ち、思い思いにアレンジしていると聞いたことがある。

しかし、今のところ親の脛をかじっている身である俺たちからすれば縁のない話であり、将来はここに住もうなどとも思っていない。ADEOIAの社員、あるいは兵士であるなら無料で住めるし、働いていれば当然給料ももらえる。と、いいこと尽くめのようにも見えるが、実際にするとなると、それは職場に住むのと同じである。俺が独立した後であっても、それだけはさすがに御免である。

「兄さん……」

俺がそんなとりとめもないことに思いを馳せていると、唯利亚が声をかけてきた。俺は答える代わりに唯利亚の顔を見つめる。

「……兄さんさ、九能さんのどこが好きになったの？」

はい？ 一体何をいきなり。

「いいから、答えて」

唯利亚は俺の怪訝な雰囲気を感じ取ったのか、すぐにまた念を押してきた。

しかし、どこが好きになった、と言われても……。困る、というのが正直な感想である。なぜならありすぎるから。こんなところで

上げるのも恥ずかしいから、特に言わないが、まあ、単純に好きな部分、要素と言われれば、かなりの数を上げることができる。

しかし、これらは九能と付き合い始めて知ったことがほとんどである。対して、唯利亜が求めているのは、おそらく好きになった要因なのだろう。なぜ、九能と付き合い合おうと思ったのか？俺はそれを訊かれている。

のだが、やはり思いつかない。漠然と、ああ、こいつになら俺自身を任せられるかもしれない、と感じた程度である。俺としては、これが恋心だと思っている。具体的に、ここが好きだ、と言う人もいるだろう。そういうものは人それぞれのはずだから。

とりあえず、そういう理由で俺は具体的にどこが好きになって、とは答えづらいのである。だから　ん？いや、一つだけそう言えるものがあつたような……

「兄さん？どこなの？」

唯利亜が俺の顔を覗き込むようにして、さらに訊ねてきた。
なので、俺は頭に浮かんだそれを口にする。

『確か……胸、だつて「死ねばいいのに」

言い終わる前にそんな罵声を浴びせられた俺の気持ちにもなってみるといい。悲しすぎて、怒りすら湧いてこない。

「だって！胸って！おかしいと思わないわけ！？」

『うん？どこがだ？』

確かに大きいほうではないかもしれないかもしれないが、俺はむしろ大きすぎるのは好きではないし、ちょうどいい大きさでかつ形もいいから好き

なだけなんだが。って、何を力説してるんだろうか、俺は。

「普通、こういう時って外面じゃなくて内面のほうを言うものじゃないの！？兄さんのそれじゃあ、胸が好きだから付き合ってますって言ってるようなものだよ！？」

確かにそれは不本意だ。それに、俺の場合好きになったから付き合うのではなくて、俺そのものを任せるに値すると判断したからそういう関係にもなろうと思えるのである。やけに抽象的だが、こう表現するしかないのだから致し方あるまい。で、付き合っていく過程で少しずつ好きになっていけばいいと思っている。

「じゃ、質問変えるよ、もう……。じゃあ、なんで九能さんと付き合ってるの？」

『俺を任せられると判断したからだ』

「今度は即答だね……」

それなら常に心に留めてあるからな。

「でも……、うん？自分を任せられると思ったから？……つまりどういこと？」

『さあ？感覚的なことだから言葉にはしづらい』

「そっか……なら、いいよ」

唯利亜は、特に落胆した様子もなく俺への追求を諦めた。

しかし、唯利亜がこんなことを訊いてくるとは、何かあったのだ

ろうか？会長についてのことはあったが、それが今の話に結びつくとは考えにくい。もしかしたら、好きな人ができた、とかいうことなのかもしれない。女性恐怖症はまだ完全に抜け切ったわけではないが、それでも好きになれる人ができた、というならそれは歓迎すべきことだ。……まさか男ではあるまいな？

と、唯利亜がその道に行くことについて危惧していると、

「制服、着替えよ……」

と、なぜか唯利亜が俺のほうを見ながら、そう言った。着替えるなら着替えればいいだろうに、言外に俺にも着替えろと言っているのだろうか。

「……兄さんさ、なんで部屋を出ていくっていう発想が出てこないのかな。いくらきょうだいでも着替え見られるのは恥ずかしいんだけど……」

なるほど。さすがにこういう時にまでお前は男だから、なんて言うてまでここに残ることはできない。というか、こいつの服装は普通に女性のそれだから、着替えを見せられる俺からしてもあまり心臓にいいものではない。

しかし、

「……む。なんなのさ」

俺は部屋を出て行く前に、唯利亜の頭を撫でておく。子ども扱いされたのが癢に障ったのか、唯利亜は少し上目づかいに睨んでくる。そんな、中学生の頃とはまるっきり反応の変わった唯利亜に、俺は、

『大丈夫だ』

何が、とは言わない。ただ、唯利亜はこういう言葉を待っていたような気がする。そう思ったから、言ってみたわけだが、

「やめてよ……気休めにもならない……」

そっぽを向いてそんなことを言う。

いつにも増して可愛らしい反応をした唯利亜だが、そこから機嫌が悪くなると思えず、俺は苦笑しながらも、その部屋を立ち去った。

そして、向かうところと言えば、当然俺の部屋。といっても、唯利亜の部屋の向かいなのだが。部屋数は限られているため、あまり無駄に使うわけにもいかない。男子用・女子用と分かれているわけでもないのだ。……まあ、唯利亜は男だが、もし分かれているなら女子用に向かうだろう。それはもう、どうしようもない。

しかし、部屋にいても暇。一部の人たちは、今も忙しく働いている最中だろうが、俺たちのような戦闘中心の部隊では、戦いが始まらなければやることはない。武器の必要もないから、その点検・整備も要らない。魔術師は、それ自身が兵器でもあるため、他に火薬兵器など必要としない。それらのために時間を割くこともないのである。ただ、未来小や未永栖さんのように銃器を持ち、それに魔

術を付加して戦う疵術師もいるが。

とにかく、俺にはそんな銃器などは必要ないため、それ故に、暇やることがない。

俺はそうして、ベッドに腰掛けて暇を持て余していた。が、そこへ、

「奈都海？いる？」

ノックとともに聞こえてきたのは、九能の声。俺は了解の声をかけることはできないため、直接俺が扉を開ける。すると、九能はすりりと抜けるように入りこんできた。猫か、お前は。

俺が扉を閉めてから振り向くと、九能はベッドの俺がいたところに腰かけてくつろいでいた。何をしに来たのだろうか、と俺が訊く前に、九能は自分の横辺りをぽふぽふと叩いた。

「座れば？ずっと立ってても仕方ないでしょ」

では、お言葉に甘えて座らせてもらおうとしよう。いつかみたいなお話があるのではないかと身構えもしたが、この状況でふざけられるほど九能は無神経ではないし不真面目でもない。警戒したことは起きなかった。

しばらくお互いに黙ったまま、ボーっとしていた。

「ねえ……唯利亚、どうだった？」

脈絡もなく口を開いた九能を見てみるが、九能は前方を見詰めたまま視線を固定して動かない。つまり、返答は期待していない、ということ。俺も答えを要求されれば、どう言えればいいかわからずに戸惑うのは目に見えているから、助かる。

それからまたしばらく沈黙が続いた後、今度は九能がこちらに向

き直りながら訊ねてきた。

「大丈夫かな……みんな。またファントムと戦うことになるのよね。……奈都海はどう？心配とか、ない？」

『正直に言えば怖いな、あんな化け物と戦うのは』

先ほどの質問などなかったかのように違う話題になったが、気にする必要もなしと判断して、俺はいつも通りに九能に対応する。今ここであいつに関して話してもしょうがない。

「そうよね……やっぱり怖いか。私も怖いしね」

そう言っつて、九能は軽く笑う。思わず弱音を吐いてしまったことが、隊長として好ましいことではない、と思っつているのだろう。しかし、DMFBは人間の天敵みたいのものだし、ファントムともなれば鼠が猫を恐れるように、本能的な恐怖を感じるのが当然だ。相対し、加えて戦ったことがあるのなら尚更。

「それに、これは私たちだけの問題でもない。私たちがやられたら役目が他の部隊に回るだろうし……そうなら勝てるかどうか……」

ファントムは数の暴力が全く効かない相手でもある。たとえ大隊レベルの人数で、かつ優秀な指揮官のもとで戦ったとしても、その大隊を構成する兵士のレベルが一定以上なければ勝ち目など到底ない。戦闘の基本が通じない相手でもあるのだ。

だからこそ、個々の能力の比較的高いこの部隊が選ばれた。他の部隊では、数が揃っていても勝てるかどうかは微妙なところだ。

「自惚れるわけじゃないけど、私たちが勝たなきゃダメなのよね、今回の戦いは。私たちが、勝たなきゃ……」

九能は決意のこもった目でそう呟く。

それは俺に聞かせているようでもあり、また自分に言い聞かせているようにも思えた。

歴戦の勇士とも言える九能とて、戦いに対する恐怖がないわけではない。その肉体が死ぬことを許さないとしても、否、そうだからこそ、そして加えて他人よりも長命であるが故に、今まで戦いで失った戦友の数は他の誰よりも多いはずだ。

いくなれば、仲間を失う恐怖。

俺は経験がないために、その恐ろしさはわからないが、近い人を失う虚無感めいたものはわかる。今まで自分の一部を埋めていた何かがそっくりそのままなくなる感覚。あんな思いはもう二度とたくはない。人間である以上、逃れられないことである、とわかってはいてもそう思ってしまう。

九能の「勝たなければ」という言葉には、勝つだけではない、死者を出したくはない、という気持ちも含まれているのだろう。しかし、それは戦う者にとって実現の難しい願いであることも、重々承知のはずだ。実現するにしても、自分一人で達成するのは不可能だともわかっているはず。まして、相手はDMFBの中では最強とも言われるファントムである。生きて帰れば幸運、倒すことができれば奇跡、とまで言われる相手に、勝つて、そして生きて帰っていくには、まさに奇跡以上に無理を道理に変えなければならない。

今の俺たちにそんなことができるだろうか？と訊かれれば、それは否としか答えられない。しかし、できないわけでもない。不可能なら、今の俺たちはない。かつて、この仲間たちでファントムに打ち勝ったことがあるのだ。だからといって油断するわけにはいかないが、不可能だと悲観する必要もない。

だが

「奈都海……私、大丈夫かな………みんなを守れるかな？全然、自身が持てないよ………」

九能にとつて、それは計り知れない重圧となつて押し掛かる。自分で定めた目標が、自分を押しつぶそうとしている、そんな状況では、さすがに九能であつても耐えられるものではない。

ともすれば今にも泣きそうになる九能を、俺は軽く抱き寄せた。力の抜けた九能は何の抵抗もなく、俺のほうへ寄りかかってくる。

今はこれだけでいい。声もかけない。キスもしない。

自分を厳しく律しているからこそその、弱音。それを俺に明かすだけでも大きな勇気がいるはずだ。その勇気を汚したくない、と言えば大袈裟かもしれないが、少なくとも俺はその九能の気持ちを尊重したいと思つている。九能が弱音を吐いたのは、慰めてもらいたいわけではなく、ただ聞いてほしかっただけ、聞いて傍にいてくれればそれでいいと、そんな風に言つているのだと、俺は感じた。

九能も何も強請ろうとはしない。

俺はただ一言、口にした。

『……守らなくてもいい。お前だけにそんな重荷を背負わせようなんて、誰も思つちやいない。だから………』

安心しろ、と言いかけて口を噤んだ。たとえ聞こえていないとしても、そんな無責任な言葉はかけられない、と思つたからだ。

かといって、もう俺には何も思いつかない。

相も変わらず口下手な自分に溜息をついて、いつのまにか眠つていた九能にまた溜息をついてから、九能を運ぶべく、俺は立ちあが

つ
た。

第1章 誘惑の狂姫 #10

私は、頬に触れる冷たい硬質な感触に目を覚ました。

まず目に入ってきたのは、コンクリートの床。私が目を覚ました原因はこれだろう。

そして、起き上った私が次に見たのは、鉄骨が幾本も幾重にも張り巡らされた天井。そこからは、暗くてよく分からないけれど、何か細長いものが垂れ下がっている。

やけに広い空間に、10mはあるだろうかという天井。ここは何かの倉庫だろうか？そうは思ったが、ここには何も無いし、私以外には誰もいない。

……………否。

「目が、覚めたか」

声のしたほうに振り向くと、そこには一つの人影があった。

暗がり慣れつつある目をよく凝らして見れば、それは体格からしておそらく男性。ローブのようなものが包むその体躯は、2mは近いかもしれない。この人は誰？という疑問よりも先に、この人に連れてこられたのだろうか？という推測のほうに立った。

「まずは非礼を詫びよう。手荒な真似をして悪かった。ついて来いと言ってついて来るとは思えなかったのでな、仕方なかったわけだが」

「い、いえ…………」

いきなり謝られて、私はしどろもどろにそう答えるしかない。

しかし、頭は冷静にこの状況を分析していた。

まず、最新の記憶は、私が学校の更衣室で着替えているところだ。そこから遡ってみても、いつも通りだったし、特に変わったことはなかった。

しかし、その着替え以降の記憶がないし、それ以前に着替え終わった記憶もない。上半身を着替えた記憶はあるけど……………

と、そこまで思い至って、あることに気付いた。

私は制服を着ている。

上半身だけは体操服に着替えたはずなのに。

…………なぜ？

「あ、あの…………」

「なんだ？」

「私って、最初からこんな服装だった……………んですか？」

少し遠回りに訊ねてみる。すると、

「いや、違っていたな。だから、外で見かけても不自然ではない格好に着替えさせたわけだが」

という答えが返ってきた。

「あなた、が？」

「そうだが？」

私は、場違いにも自分の顔が熱くなるのを感じた。場違いな質問をして、場違いに照れるなんて、一体私は何をしているのだろうか、と軽く自己嫌悪に陥る。

しかし、私はふと、ひっかかりを覚えた。

彼の、着替えさせた、という表現。普通は、彼が私の服を脱がせて他の服を着させた、と取るんだろうけど、私はそこに少し違和感を覚えた。

つまり、“彼が着替えさせた”のではなく、“私に着替えさせた”のではないかと。

しかし、私にそんな記憶はない。記憶もさせずにそんな芸当ができるのは

「あなたは……誰？」

あまりにも今さらな疑問を、私は思わず口にしていた。普通なら真っ先にするはずの質問を今頃向けられたその男は、それに気付いた様子もなく答えた。

「……名は、ない。だが、貴様の知識に準じて言うならば、そう……
IDMFB ファントム、だ」

ファントム。それは、魔力が集結して生まれる生命体、DMFBの中でも強力な部類。私が知っているのは、土曜日に出会ったシャトーやノクターンといったものだけだが、実際はここまで人間に近い、いや、むしろ容姿だけなら人間そのものだと言っても過言ではない、ここまでとは思っていなかった。

しかし、私はそれを聞いても、なぜか恐怖は感じなかった。敵意や殺意を感じ取れるようなスキルは持っていないけれど、少なくとも今の彼にはそれに類するものはないように思えた。

だからかもしれない。私は、一度質問した、その勢いをバネにさらに質問を重ねた。

「あなたが私をここに運んだんでしょう？なんで、こんなことを？」

その気になればいつでも自分を殺せる力を持っている相手を目の前にして全く恐怖を感じない私を見て、何を思ったのか、そのファントムは口の端を吊り上げ、

「理由は至極簡単。私が、後朱雀沙夢濡、貴様の騎士だからだ」

「……………」

これは、なんなのだろう？もしかして、愛の告白とか、そんなものじゃ……………ないわよね？だって、騎士って……………なんで？

困惑する私を置いて、彼はさらに続ける……………

「自己紹介はこれでいいだろう。これ以上話す必要もない。……………さて」

続けるどころか、話題を終わらされた。

これは、怒るべきか戸惑うべきか、どうするべきかと私が迷っていると、彼は、まだ座り込んだままの私と視線を合わせるためか、私の目の前にしゃがみ込んだ。

私が何をするのかと怪訝に思っていると、

「貴様にはあることをしてもらおう。いや、してもらわねば困るのだが、な。故にここに連れてきたのだ」

彼の手……………否、彼の腕にある、蛇の頭を先端に付けて触手のように蠢くそれが、私の頬を撫でていく。私はそれに対して恐怖を感じることもなければ、嫌悪感も覚えなかった。なぜ私はこんなにも落ち着いているのだろう、と疑問を抱くことも。

「我々には貴様が必要なのだ。……そう、子に親が必要なように、な……」

私はいつのまにか、固まったまま彼の言葉を聞きながら、その瞳を見詰めていた。

まるで恋人同士のように、無心にその視線を交わしあう。

私たちは、時間まで止まってしまったかのようにその距離を保ったまま

「ッ！いやっ！」

私は思わず、彼の胸を突いて遠ざけようとした。彼は瞬時に立ちあがって、尻餅をつくという醜態を晒すことを避けた。

「あなた……何を………！」

訊かなくても、状況さえ見ていればわかる。

彼は、私の、唇を奪おうとした。

その当の本人は、私の唇を奪うはずだった、その口をゆがめて嗤い、

「ふん……さすがにまだ無理か……」

「いつになっただって、死んでも、あんたとなんか御免よ！」

反射的に女としての、生理的な嫌悪を感じた。目前まで迫った、そのファントムの顔が網膜に焼きつき、そのファントムの息の臭いが鼻孔にこびりついて、さらに嫌悪感だけでなく吐き気までも助長する。今さらながらに、頬に残る、爬虫類特有のざらざらとした鱗の感触を思い出し、それを倍増させる。

「そうか、それは残念だ……ククッ……」

彼はそれだけ言って、未だ自身を睨む私を置いて、どこかへと消えた。

一人になると、急に寂しくなる。

あんな下衆のような男（？）でも、私の寂しさを紛らわしていたのか、と思うと、途端に苛立ちが込み上げてくる。

けれど、やはりこの暗闇に一人でいるのは、恐怖、と言うと言い過ぎかもしれないけれど、それに似た、人間に備わる、暗闇に対する原初の畏れは感じざるをえない。ここにいる限り、それは解消されることはないだろう。

かといって、逃げだそうとしても不可能だということももうわかってる。一度逃走を試みたけれど、この倉庫から出ることさえ不可能だった。彼の能力によるものかもしれないが、詳しいことはわ

からない。

色々と落ち着くと、今度は少しだけ考える余裕ができた。

私は気絶させられてここまで連れてこられたはずなのだけど、私
が気絶していた時間はどれぐらいなのだろうか。外から入ってくる
光が全くないため、今は夜なんだろうけど、だとすれば、私は四半
日近くも眠っていたことになる。でも、夜でもないのにそこまで長
く眠っていられるものだろうか？最近寝不足であるということもな
いし、私は1日4時間ぐらい眠れば十分疲れは取れてしまうタイプ
の体質だ。それこそ5時間以上寝たことなど、ここ7、8年はない。
だとしたら、あのファントムが何かしらの工作をしたのかもしれない。
それがなんなのかは、私がここから出られない原因と同様に、
さっぱりわからないけれど。

特に何もすることがなく、私がついついそ寝てしまおうかとも思
い始めた、そんな時。

唐突に私の周囲が、淡い光で照らされた。

その光の発生源を追って上を見上げると、暗闇ではわからなかつ
た天井の天窓から月明かりが差し込んで、私を照らしていた。

思わずその月を、見上げ続ける。ほぼ真上を見ていたから、少し
ずつ首が痛くなってきたけれど、それも無視して。

が、いくらか経って、月が隠れそうになり、同時にそろそろ首の
痛みが我慢できなくなってきた頃、

「……………」

私の視界を何か横切った。

何か、と言っても、それはゆっくりと横切っていったので、断定
するのは容易だったけれど、ここにはどうも似つかわしくない存在

だったから、私はもう一度確かめるべく首を元に戻す。
まだ少し痛む首を巡らして辺りを見渡すと、そこには

(蝶？なんで？)

蝶がひらひらと舞っていた。暗いところでも、一層黒を強調するその羽は、おそらくカラスアゲハのはず。今の季節に現れるのが特別珍しいわけではないけど、なぜこの倉庫に入ってこられたのだろうか？という疑問が湧いてくるのは当然だ。もしかしたら、人間だけは通さず、他の動物は通してしまうのだろうか？だとしたら、説明はつくけれど、その分野には全くもって疎いので、それこそ全くわからず、推測しかできない。

そんな風にうんうんと思案していると、なんとなく胸元辺りまで掲げていた手の甲に、その蝶がとまった。私が気付いて、それを見ても、その蝶は逃げようとしなかった。

少し面白くなって、蝶を刺激しないように、そっとその手を目線の高さまで上げてみた。

私の手にとまったまま、ゆっくりと自身に風を送るように軽く羽を飛ばたかしている、その蝶を観察する。こんな風に近くで蝶を観察することは始めて。そもそもそんな機会がなかったし、しようとも思わなかった。

けれど、しばらく眺め続けて、ふと違和感に気付いた。

(……？なに？)

もう一度よく、目を凝らして見てみる。

(なに、これ……)

それは、私の知っている蝶とは、若干姿が異なっていた。

ありえない器官がある、というわけではない。むしろその逆、あ
るべきもの、具体的には“頭部”が、その蝶にはなかった。

不気味と思うよりも前に、なぜ、こんなものが動いているのだろ
うか？という疑問が先に立った。蝶は頭がなくても、動けた？……
そんなはずはない。頭なしで少なくとも私が見ていたようなこの長
時間を生き続ける生物など

「もしかして……」

D M F B？思わず、そう口にしかけた、その瞬間。

『……見つけた』

聞き慣れた声が聞こえてきた。

ヒュン！

という風切音とともに、目の前の蝶が鱗粉すら残さず、掻き消え
た。

驚いて、私が顔を上げると、そこにはあのファントムがいた。彼
は、大股にこちらに歩み寄ってくると、

「先ほどの……」

「え……？」

「先ほどの蝶はなんだ！答える！」

突然浴びせられた怒声に、私は肩を竦める。

恐る恐るその顔を見上げると、その表情は怒りと焦燥で染まっていた。しかし、それと同時に、相対した相手に質問の返答を強制させるような、不可思議な威圧感も有していた。

「わ、わからない、わよ……知らない内に、ここに……」

その威圧感に押されるように……いや、まさにそのまま、威圧感に押されて、私は口籠りながらも答えた。先ほど聞こえてきた声のことなど、既に思考領域の遙か遠方に追放されていた。

「それに嘘偽りはないな？」

私は頷くことしかできない。

彼は、チツと舌打ちすると、この倉庫内を見回した。私が見た限りでは何も無い。しかし、

「細工はしてある。奴らにここを知る術はないはず………だが

」

彼は何事かをぶつぶつと呟く。その表情に、私と対した時のような余裕はない。

「おのれ………やむを得ん、早急にここを動かねば

」

「ねえ……知ってる？」

突如、倉庫内に、先ほど聞こえてきた声と同じものが響く。

「蝶はさ、耳が頭にないんだよね。だから頭をもいでしまえば、目と触角を失うから、視覚と触覚がなくなる。逆に言えば、聴覚だけが残るから、それに依存するしなくなる」

その声の主は、気楽とも言える口調で喋りながら、こちらへと歩み寄ってくる。

「だからこそ、捜すことができた。見つけることができた」

言葉に笑みすら交えて喋る、一種異常とも言えるその姿を、私の横に立つファントムは一直線に睨んでいた。

「対策するなら、もう少し念入りにするべきだったね。聴覚を含めた五感すべてをシャットするとか、ジャンヌさんを物理的に完全に隔離するとか、さ。ま、今さら言ってもどうしようもないけど？」

今度は挑発するように嘲る言葉に、ファントムは全く反応しない。

「さてと、もういいよね？そろそろ」

やっと姿が見えるほどの距離まで近づいてきた。

その姿は、この暗闇でも見間違えるはずがない、その小柄な姿は、しかし、今となってはこれ以上に頼もしい姿は

「そろそろ、返してもらおうかな、ジャンヌさんを」

幣原唯利亜、だった。

その姿に、真っ先に反応して声を上げたのは、私ではなく、ましてや唯利亜ちゃん本人でもなかった。

「クククツ……クク、ク……クハ、ハハツハハハハハハハハハハハハハハアツ……！」

突如湧いた、大口を開けた笑い声に、私はまたしても驚いた。唯利亜ちゃんは、その様子を見て、ただ怪訝な表情を浮かべただけだった。

本当にそれだけで、唯利亜ちゃんはすぐに私に満面の笑顔を向けて、

「ジャンヌさん、大丈夫だった？もう安心していいよ」

「え、ええ……」

まだ笑いを堪えようとして失敗している隣のファントムに意識が及び、強張った笑顔しか浮かばない。しかし、唯利亜ちゃんはそれ

を気にした様子もなく、

「さ、帰ろう。みんな心配してるしね」

「え……？他のみんなは……」

「ここはボク一人だよ。みんなは向こうで待つてるから、行こう？」

唯利亜ちゃんが私に歩み寄り、さらに距離を縮めようとする。しかし、その途端、ファントムが次なる声を上げた。

「クハハッ！まさか、まさかなあ！まさか、貴様が来るとは思わなかった！終ぞ思っていなかった、全く予想外だ！まさに僥倖、もしや貴様は」

「喧しい、死ね」

「ツツツ！？」

大声でわけのわからないことを叫んでいたファントムが、突然横腹に何かの衝撃を受けたように吹き飛んだ。ファントムは倉庫の隅まで飛んでいき、何かが積み上げられていたのか、ガラガラと何かが崩れる音が同時に響いた。

「……………、さ、行こう、ジャンヌさん」

その光景を無感情に見詰めていた唯利亜ちゃんは、すぐに飽いたようにまた私に歩み寄る。

しかし、私はそれを、諸手を上げて歓迎することなどできなくなっていた。

先ほどの所業は、この唯利亜ちゃんがやったのだろう。でなければ誰もやりようがないのだから。

……目の前にいる、この子が？

そう、いつもならありえない口調でファントムを罵り、異能の力を振るってあのファントムを一撃で吹っ飛ばした。

こんな途方もない能力を持った子が、今まで私の近くにいた？こんな力を隠して？………否、使う必要がなかったから使わなかっただけ。なら、その必要ができたら………？

考えると、途端に目の前の唯利亜ちゃんが、得体の知れない何かに見えてきた。

「さあ、ね？」

「……っ………」

しかし、得体の知れない、というならあのファントムも同じ。私は、差し出された唯利亜ちゃんの手を取ろうと、自分の手を伸ばす。その瞬間、

ビュオン！！

という音が空気を切り裂き、今度は唯利亜ちゃんの矮躯を吹き飛ばした。

「……ふん、不意打ちとは、よくやる………だが、効かぬさ、その程度では………な」

彼は、自身の腕を何十mにも伸ばして、唯利亜ちゃんを襲っていた。その腕は、大の大人の腕ほどもある蛇が幾重にも絡みついて、恐ろしいほどの太さになっていた。それこそ、巨人の腕を連想させるほどの。

しかし、

「蛇の腕……………やっぱり、報告にあつたのは君で間違いないみたいだね」

それは唯利亜ちゃんの声。ファントムが腕を元の長さに戻したために露わとなった、そこには、何か黒いものに包まれた唯利亜ちゃんの姿があつた。その黒い何かは、絶え間なく唯利亜ちゃんの周囲を回り続けていたが、唯利亜ちゃんが腕を軽く振ると、それは跡形もなく霧散した。

「さすがだ。虫……………いや、蟲の壁か？やはり、小動物の使役がメインとなる能力か……………」

「さあ、どうだろうね。君こそ、潜伏期間中だつていうのに、中々やるね？少し驚いたよ」

見下すファントムと見上げる唯利亜ちゃん。身長差はあれど、そこに戦いにおける戦力差はないように思えた。

お互いに視線を固定したまま、両者ともに動こうとしない。まるで動けば死んでしまうかのように、どちらも静止したまま。

空気が、その緊張感に重くなっていく。心なしか、息苦しくも感じる。

この空間には、この戦う二人だけ。私など、今や風景の一部ではない。

さらに十数分、あるいは数十分か、とにかく時間の感覚が狂い始めるころ、

ブブブ……………

という、羽虫の羽音のような音が聞こえた。

しかし、それはこの戦いを目の前にしては、些事にしかすぎない。

そう思った、直後、

「……………ふ……………私の周りに蟲を集めて何をやる気だ？」

「ッー！」

ファントムの言葉に、唯利亜ちゃんは目を見開いて、手の平をファントムに向かってかざす。すると、どこからか、ブブブ、という耳障りな音を立てながら蠅のような無数の蟲が現れ、ファントムの周囲を渦巻きだした。瞬く間に、その小さく黒い竜巻はファントムの姿を覆い、ある大きさに到達すると、それが収束し始めた。このまま羽虫の大群で押しつぶすつもりなのだろうか？それは私からすれば、あまりにも無謀だった。

「ふんっ！」

と、その竜巻からファントムの腕が突き出てきた。しかし、羽虫はその腕さえも一瞬にして包み込み、

「ぬ……………うおおおおお！？」

何が起こったか、私にはわからない。ただ、腕を包んでいた羽虫が数秒後に散り、竜巻に再び合流するころには、その竜巻から生えていた腕はなくなっていた。

「残念でした　ボクの操る蟲は大喰らいになっちゃうからね、なんでも食べちゃうんだよ。もちろん、魔力の塊であるDMFBでも、ね」

唯利亜ちゃんが、いかにも楽しそうに解説する。その顔には、狂気でしか説明できない笑顔が浮かんでいる。

だが、次の瞬間、その笑顔は消え去った。
ゴウッ！

という音とともに、視界が赤く染められる。黒かったはずの竜巻が、今、赤々と燃え盛る炎に包まれていた。

すぐにその炎は消え去り、中からは、片腕を失いながらも、未だ傲然と立ち続けるファントムがいた。

「……やるね……いや、やっぱりファントムか。一筋縄じゃ、いかないってことかな……」

「笑止！貴様のような己の分も弁えぬ脆弱な疵術師に、私が負けるとでも？」

忌々しげに呟く唯利亜ちゃんに、ファントムは挑戦的に嘲りの言葉を投げかける。

「これで貴様は蟲を失った。どうする気だ？」

「蟲ならこの季節、いくらでもいるからね。すぐに調達できるけど？」

「クハハッ……なら、やってみるがいい。できるのなら、な……」

その挑発の言葉に、唯利亜ちゃんは、さらに忌々しいものでも見るように顔を顰め、

「……そんなこと、するまでもないね！」

そう叫んで、両手を広げる。

さらにその両端、つまり両の手の平に、眩い光が集まっていく。

そして、その光量が、直視できないほどになった時、

「……………はあっ！！」

裂帛とともに、両腕を薙ぐと、その光は軌跡を描きながら、ファントムに向かって飛来した。

しかし、

「ぶん……………」

つまらなそうに鼻を鳴らし、ファントムはこともなげにその二つの光球を避けた。

しかし、その光球が避けられる前に、唯利亜ちゃんはファントムに向かって走り出していた。数十mの距離をほんの瞬きの間に詰め、回避行動を取ったばかりのファントムに、殴りかかった。

「バカな！ファントムである私に肉弾戦を挑もうと言うのか！」

ファントムは、その唯利亜ちゃんの行動を笑いながら、しかしそれに対応しようとした。

その瞬間に、

「喰、らええ！！」

「ぬお……………っ！」

ファントムの直下の地面が盛り上がる。否、鋭く尖り始める。それは、ファントムを貫かんとして、さらに長さを増し、

「ちい！」

ファントムは後方に退かざるを得なくなった。

唯利亜ちゃんとファントムの間に、尖った長大な石槍が一本そびえ立ち、それはお互いの視界を遮る。これで仕切り直しかと思ったが、しかし、これは唯利亜ちゃんの、さらなる猛攻への伏線でしかなかった。

二人の間に立つ、その石槍。そこからさらに、

「な、に!?!」

さらに槍が幾本も生えてきた。

当然、ファントムはさらに後方に退くしか選択肢はなくなる。

だが、その背後には、さらに地面から突き出た石槍があった。しかし、これで退路がなくなったわけではない。まだ一つ、

「チツ、面倒な……!」

舌打ちしつつ、ファントムは上空へ跳び上がる。

が、これこそ愚策にしかすぎない。

「ッ!?!?!」

ファントムの着地地点には、無数の、と言つていいほどの石槍が地面からそびえ立っていた。あの中に飛び込めば、いかなファントムといえど無事でいられるはずがない。

しかし、ファントムは、その腕の中から数本の蛇を伸ばし、手近な柱に巻きつけた。そして、その長さを元に戻し、その慣性によって着地点を大きくずらすことに成功する。

が、もちろん、その瞬間を唯利亜ちゃんが逃すはずもない。

「こ、れ、でえええ……………終わりだあああああ……！！！！」

今までにない、その雄叫びとともに空中に現れたのは、石槍。無数の石槍。ただただ石槍。ひたすら石槍。それが、

「……………なん……………」

一斉にファントムに降り注いだ。

「はあ……………はあ……………はあ……………んっ……………」

無数の槍が降り注いで起きた轟音が止んだ後、息を荒げる唯利亜の声だけが倉庫の中で聞こえていた。

「っふう……………勝った……………」

しかし、唯利亜はジャンヌのほうを向いて、微笑んだ。その笑みは、戦いの中で見せた狂気の混じった、歪んだ笑みではなく、純粹な喜びによって自然に形作られた笑みだった。少なくともジャンヌにとってはそう見えた。

ジャンヌも、それに釣られて笑みを浮かべて、自身に向かって歩いて来る唯利亜を見詰める。と、見つめていたが、唯利亜は戦いで

疲弊していると思に至り、ジャンヌも唯利亞に歩み寄ろうと立ち上が

ぞぼっ、という、何か固いものが肉塊を貫くような音が響き、

唯利亞の腹から、幾匹もの蛇が生えていた。

「あ……え？」

ジャンヌの頬に肉片が飛び、付着する。同時に噴出した鮮血がジャンヌの全身にシャワーの如く降り注ぎ、着ていた白と赤を基調とした制服を、真っ赤に染めた。

ジャンヌは最初、それがなんなのかが理解できなかったが、数秒経ち、この状況、光景がジャンヌの中で現実として処理され、それが理解されてしまった、その時、知らぬうちにその口腔を大きく広

げ、

「?……え、……あ?……い、いやああああああああああああああああ!?!?!」

ジャンヌ自身でも自分でどこからそんな声が出たのか、と思うぐらいの叫び声が、その喉から吐き出された。

その顔に付いた肉片が誰のものなのか、飛び散った鮮血が誰から出てきたものなのか。そんなことはとうに理解しているというのに、ジャンヌの頭の中では否定する言葉ばかりが、浮かんでは変わりよのない現実には打ちのめされて消えていった。

さらに、ジャンヌの目の前の頂垂れた顔のその口から血の塊が吐き出され、座り込んでしまったジャンヌの顔に降りかかった。ジャンヌにはもう、それを拭う気力すらない。

「やれやれ、という言葉しか思いつかん……あの程度で勝った、と?笑わせる。潜伏期間中とはいえ、貴様程度が勝てるなら、この世界において我らファントムが脅威となり得たはずがない」

ファントムが話しかける相手は、すでに表情を失い、指一本動かしていない。いや、動かせない。

もう一度、ぞぐちゅ、という肉の抉られるおぞましい音とともに、その身体から蛇が抜かれ、支えを失った身体が地面に倒れこむ。既に地面にまき散らされていた血や内臓の上に倒れ、べちゃっという音が響き、周囲にまたそれらをまき散らした。

「いや、あ……あ、うつ……」

ジャンヌは、目の前の光景に、恐怖し、歯の根が合わず、吐き気を抑えるのも苦勞する。そもそもその光景を直視できなかった。両

手で顔を覆い、しかし、完全に覆うわけにはいかず、視界にどうしてもその惨状が入ってくる。

目の前で親しかった人が死んでいく悲しみよりも、まず、次は自分ではないか、という死の恐怖がジャンヌを襲った。ジャンヌ自身の力では、どうしようもない、抗うことのできない恐怖は、ジャンヌの身体を苛み、完全に硬直させた。

「まあ、いい。これで死んだのなら、また別の王女を捜すまで。最初から女王を殺すために来たわけではないようだし、な……………さて、女王よ」

そう言っつて、そのファントムは、その視線をジャンヌに向けた。しかし、その向けられた目は、完全に人のそれとは異なり、まるで底の見えない深淵のような眼窩だけになっていた。それを見ただけでジャンヌの恐怖は最高潮に達し、何の憚りもなく、みつともなく失禁した。既にジャンヌの足元に届くまでに広がっていた血の海に、ジャンヌの漏らしたそれが混じり、わずかに湯気が上がった。

「とりあえず場所を移すでしょう。幸い、今は夜だ。その姿で歩いても多少の無理は利く」

そう言っつて、ファントムはジャンヌの身体を抱きかかえた。顔は涙と鼻水に塗れ、制服は鮮血を浴び、股は尿に汚れ、脚はべつとりと血が付着していたが、ファントムは構うことなく、震えるジャンヌをその腕に巻きつけて持ち上げた。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

その後、再びこの倉庫に響いた少女の声に、ファントムは動きを止めた。

第1章 誘惑の狂姫 #10 (後書き)

少しまずかったですかね？女性の失禁って……

まあ、あらかじめ15禁にはしてあるので大丈夫ですよ。

なにせ、最初はもっと酷かった……いえ、なんでもありません……

人外の力を持つ人間と人外の力を持つ人外の戦いが終結する、その時より遡ること約5時間前。

つい数分前まである部隊の会議が行われていたその部屋に、今、3人の人影があった。

一人は、西園寺九能准将。ADEOIA日本中国地方支部の第1特殊遊隊隊長であり、かつその支部の副部長でもある。外見こそ十代半ばから後半程度の少女だが、実際には60年近い戦闘経験を持つ、未だ前線に残る中では最年長の兵士の一人である。

そして、それに向き合って立っているのは、同じく第1特殊遊隊所属の居川咲と上杉天代である。この二人は見た目通りの年齢で、この部隊どころかADEOIA全体でも、前線に出る者としては最年少に当たる。片や日本では中学生であるはずの年齢である咲と、現役で小学校に通う天代。年齢では3つほどしか変わらないこの二人は、しかし、そのキャリアには6年以上の差がある。

弱冠8歳にしてDMFBとの戦いに赴き、その戦いで6体を討伐するという疵術師の常識では考えられない戦果を残した彼女、居川咲の存在は、畏敬の念を込めて“断裂の聖女（を各国の言語に訳したもの）”という名で海外の疵術師にも知られている。しかし、実際に、それに類する呼び方は、ある病気に罹患するも同義であると考えられているため、その名で呼ぶものは少ない。というか、彼女自身も嫌っている。彼女の14歳という年齢が、その病名に関係ある云々……………

とりあえず、今はそれはさておく。

それに対して天代は、九能が一般の家庭から捜しだした疵術師である。しかし、天代は養子である、ということが判明したため、実親は疵術師か魔術師であると思われる。

彼が疵術師である、と判明したのは、九能がDMFBから彼を助け出そうとした時である。彼は完全にDMFBを視認した様子で怯え、錯乱し、そして逃走するために、その背中に人間にはありえない巨大な翼を顕わして飛び去った。

この時初めて天代の疵術師としての能力は発現したのだろうが、使えるようになった直後では、その力の繰り方も魔力の使い方も、素人とすら呼べない状態だった。そのために、途中で魔力が尽きたのだろう、数百m離れたところで倒れているのを、戦いを終えた九能が発見、保護した。

彼の主な（というか、現段階では唯一使える）能力は、飛翔能力。部隊に入った当初から安定した飛行を見せていた天代のその能力は、偶然見かけたADEOIAの空軍から羨ましがられるほどである。飛ぶことしかできないとはいえ、長時間滞空するのが難しい者がほとんどの、いわば名ばかりの空軍からすれば、その能力は羨ましいものなのだろう。実際にそれが戦力になるか、と問われれば、当然それは難しいものだが。

このような過程で部隊に入った二人だが、天代はともかく、なぜ世界にもその名を知られる咲がこのような部隊に入っているのか、という疑問は当然ながら浮かんでくる。

比較的即戦力として扱いやすい、という疵術師の特性があるにしても、8歳という年齢でDMFBを倒すことそのものは異常と言われても過言ではない。それが成長すればどれだけの実力者になるかなど、誰もが予想できることだった。それだけを考えれば、咲は有用な戦力として重用されてもおかしくはない。

しかし、ADEOIAでは、強すぎる疵術師というものは重要な戦力として扱われるだけでなく、むしろ危険視されることのほうが多かった。

故に、彼女を封印しようという話が持ち上がったのは、至極当然のことかもしれない。

まだ対抗できる疵術師ならいくらでもいる。

しかし、いずれすべての疵術師を下すほどの力を持つようになるかもしれない。

だから、その前に無力化する必要がある。

その計画は、九能が部隊を立ち上げた頃には、まだ立案段階だったが、いずれ実行される可能性はあった。実際には、当時の咲の能力は、疵術師としては比較的高い部類にあったが、九能のように、戦略兵器と同列に扱われるようなある種の化け物じみた疵術師にははるかに及ばないものだった。

それでも、かつての功績というものはその人物を表す要素として人々に認知されるものである。それは咲も例外ではなく、咲自身の能力と当時戦ったDMFBとの相性が良かっただけだ、ということがほぼ事実になっても、一度広まった風評がそう簡単に変わるものではなかった。

その咲を、自分の部隊に呼び込もうと思ったのは、西園寺九能が最初で、かつおそらく最後になることだろう。いわゆる“厄介者”という認識をされている彼女を好き好んで自分の配下に置こう、などと思う好事家はそうはいない。その能力を利用するにしても、咲の能力は自らの手に余ると考える者が大半だったというのもあるだろう。もっと言えば、咲を擁することによって、自らの部隊が孤立することを怖れていた、ということもあるだろう。

しかし、九能は、この中国地方支部に新部隊を設立する時、迷うこともなく咲の加入を考えていたという。むしろ、咲の存在は自分の部隊に必須であるとさえ考えていた。

だが、その理由は、多くが予想するように戦力としてではなかった。もちろん、人材不足に喘ぐADEOIAにおいて、戦闘能力がある限りは戦闘への参加は義務とも言うべき事項だが、九能は咲を、戦闘だけを行うような、“戦うだけの力”ではなく、“戦える力”

として採用しようとしていた。

九能は、咲を、次のように言つて勧誘したという。

「あなたのその能力、戦いにしか使つてこなかった？……そう。なら、うちの部隊では戦闘は極力抑えて、戦後処理に徹してもらふことになるわ。そちらのほうが、あなたの能力を最大限に発揮できる。……え？戦後処理なんて何すればいいかわからない？いいわよ、教えてあげるから。それに……あなたの源血“断つこと”だったわね。それを応用すれば人を助けることもできる。どう？無理には言わないけど……あなたが欲しいと思つているのよ、私は。あなたが必要なの、私たちには。だから……少し考えてもいいわ、この手を取りたいと思つたら声をかけてちょうだい」

それを聞いた咲は、その場で九能の手を實際に取つて、九能を驚かせた。そこで、咲は当時の部隊を辞して九能の部隊に入ることを決めたのだつた。

九能は、ADUIAの時代からDMFBと戦つていた古参の疵術師であるため、彼女に表立つて意見する者はほとんどいなかったが、それでも「居川咲は危険である」、「そもそも居川咲を擁する部隊などどこにも置けない」などと思ひこんでいる者からの中傷、批判はあつた。もちろん、九能はそれを、結果を見せつけるという形で捻じ伏せたわけだが。

九能が二人に残るよう言って、その他の部隊員が部屋を辞した後、早速九能は二人に要件を伝えた。

「あなたたちにはジャンヌさん 第二種禁断子、現状での最優先保護対象の搜索を命じます」

あくまで仕事と割り切った、ある種冷徹とも言える呼び方にわざわざ言い直したその言葉を聞いた二人は、揃って怪訝な表情をした。しかし、二人の疑問はジャンヌに対する呼称などではない。

「……それはうちの職分ではないのでは？ 諜報部が行っているはずですが」

咲がその表情の理由を遠慮もなく述べる。

この九能が率いる部隊は戦闘を中心とする部隊であり、そのような搜索行動などは諜報・斥候部隊が行うものである。ADEOIAにおける斥候部隊が、ほとんど偵察に特化してしまっているため、現在の斥候部隊は情報収集と戦闘からの離脱能力は高いものの、純粹な戦闘能力は貧弱であることが多い。その護衛要請がこの部隊に来た、と言われれば納得はできるが、なぜそれにこの咲と天代が選ばれたのか、という疑問が生まれる。咲はともかく、天代は戦闘能力を一切持たないのである。むしろ、この人選は、搜索を前提とした人選と言える。

「確かにこれは出すぎた真似とも言えるけど………実際の目的は対象の搜索じゃないのよ」

「じゃあ、何を？」

咲がそう訊くと、九能は少しだけ言い淀んだ。それを見て、咲は

わずかに眉を顰めたが、そのすぐ後に九能が口を開いたため表情を元に戻した。

「……唯利亜の監視よ」

「?それって……どういうことですか?」

そう思わず言ってしまったのは、天代だった。一方、咲は納得したように目を伏せ、無言を貫いた。

「唯利亜は、ジャン又さんをかなり慕っていた。もつと言えば恋愛感情まで抱いているかもしれない。少なくともそれに近い感情を持っているのは確実だから、唯利亜は今、かなり錯乱してるはずよ。今までは何とか繕ってきたけど、いつ爆発するかわからない。いつ、どんな形で暴走するかわからない。でも、唯利亜の暴走はかなり静かなの。水面下で準備を進めてそのまま水面下でことを終わらせる。暴走とも言えないかもしれないわね。でも、今回は相手が悪すぎる。ファントム相手じゃ、唯利亜一人では絶対に死ぬ。それを止めるためにあなたたちをここに残らせたの」

九能の言葉に、天代はあからさまに狼狽したが、咲は静かに無言のまま聞いていた。その心中は、九能ですら読み取れない。

「それなら、准将自身のほうが確実だと思うのですが。常に傍にっいていらっしやれば、それでいいのでは?」

咲は無表情のままそう意見した。しかし、九能はそれを、首を振って却下した。

「駄目よ、絶対に何かしらの理由をつけて一人になろうとする。そ

ここに下手に食い下がったら、不審に思われる。諭すなんて以ての外。そうなったら、最悪内紛よ」

九能は忌々しげに吐き捨てる。

「今のあの子は、もう正常な判断ができない。私たちが助ければ、本部に送られるとわかってるから、自分だけで助けようとしてる。もう、頭にそれしかないんでしょうね」

「……なら、拘束しておけばいいでしょう？なぜわざわざ監視などという回りくどいことを……」

咲の言うとおり、それが最も確実な予防策だろう。何もできなくしておけば、したくてもできないのだから。だが、それも九能は却下する。

「できればそうするわ。でも、唯利亜に対する有効な拘束方法があると思う？封印魔術ですら難なく抜け出すようなあの子に対して、どうしろっていつのよ」

これは本当のことだ。基本的に自分ではなく使い魔とした小動物で戦う唯利亜は、彼自身を拘束しても全く意味はない。その気になれば、数十km離れた位置からでも使い魔を使って攻撃できるのである。実際には、その距離から相手の正確な座標を知ることなど不可能であるため、可能とは言いづらいが。

対して、封印魔術は、物理的な拘束効果だけではなく、拘束対象からの魔力の排出も抑えてしまう、魔術師全体に有効な汎用的な魔術だが、例外的に唯利亜には十分な効果は見込めない。唯利亜の場合、使い魔を操るために必要なものはその使い魔に与えられている自身の純正魔力の一部であるため、すでに排出されている魔力には

何の効力も発揮しない封印魔術では、その行動を完全に抑制することはできないのだ。

九能に言われてそれを思い出した咲は、それでも食い下がろうとして、その手段がないことに気付いて口を噤んだ。

その際に、九能はさらに言葉を重ねた。

「それに正直なところ、私は唯利亜のこと信用してないのよ。あの子は確実に私たちの知らないことを隠しているし、私たちの知らない能力を使うことができる。だから、私はあの子の隣の部屋で見たくけど、あなたたちには外から見たいしてほしいの。私の知らない何かで脱出される可能性も無きにしも非ず……いえ、その可能性が高いから、ね」

隊員を信用していない。このことほど、部隊にとって致命的なものはない。

そもそも、この部隊の隊員は元の部隊でも疎まれていた者がほとんどで、その理由が忌わしくも払拭できない過去であったり、難のある性格であったりするのである。この部隊では、お互いがお互いのことを熟知している、とは言いづらく、故に信用する材料が極端に少ない。戦闘においては、その能力に一定の信頼はあるものの、それが絶対とは言い切れない。一つ例を挙げるなら、魅戈はかつて自らのトラウマから来る能力の暴走によって、自分の所属する部隊を一つ全滅させているのだ。魔術の発動の制御はほとんど脳に依存しているため、トラウマの再発などの強烈な刺激によって、不具合を起こすこともある。強力な能力が自身の首を絞めることにもなるという一つの例だ。

部隊の総合能力を重視するあまり、それらの部隊員は人間である、という配慮を失ってしまったのが、九能の最大にして致命的な失敗である。だからこそ、この部隊は大きな戦果を上げているものの、設立から数年経った今においても、この少人数にして未だ十分な統

率ができていないのである。

それでも解散させられずに今まで残ってきたのは、九能の積極的な戦闘参加とファントムを討伐した、という実績によるものである。このことで、最低限の存在意義はあるし、そもそも九能は最古参の疵術師で、少将以上の者でもおいそれと意見できる者は少ないというところもある。また、部隊員のほとんどが戦闘経験に秀でていたために、戦闘での全滅の危険も相当低かった。

それを踏まえて言えば、今回の部隊を超えた搜索行為 九能の言う出すぎた真似にも、否を唱える者はいないだろう。

九能は、もう二人に言うことはないだろうと判断し、最後に口を開いた。

「斥候部隊の隊長には話は通してある。今回指揮しているのは雪川^{ゆきか}瀬井中佐^{わせい}。名目上は、あなたたちを貸しているっていうことだから、それを念頭に。……以上よ。くれぐれも慎重に、ね」

九能がそう言うと、天代は返事とともに、咲は無言かつ無表情で軽く敬礼をして去って行った。

部屋には九能一人が残る。

一人になった九能は、イスの背もたれに背を預けて天井を仰いだ。腕で目に入ってくる光を遮りながら、思索に耽る。

考えるのは唯利亜のこと。

よりもよって、今回の被害者は唯利亜の慕う後朱雀沙夢濡。唯利亜がジャンヌに向けるその感情は恋愛と言うにも生温い、友愛とも親愛ともベクトルの違う、しかし信仰と言うには過ぎる。今の九能には、いや、70年近く生きてきた九能ですらわからない感情。だというのに、唯利亜の感情は傍目にも直情的で、彼がやるうとしている陰謀には大体の予想ができてしまう。

本人は冷静なつもりだろうが、九能にはわかってしまった。大切なものを取り戻そうという強い気持ち。それだけなら戦う糧にもできるが、しかし強すぎて自分では制御できずに暴走する危険も孕んでいる、そんな気持ちを唯利亜は持っていた。そして、唯利亜はすでに暴走寸前であることもわかってしまっていた。

いつもなら考えなくてもいい懸案が増えて辟易としている九能は、深く溜息を吐いてさらにイスに身体を沈める。

「……………」

それから幾分か、空白の思考に身を委ねた九能は、唐突に奈都海の部屋に行こう、と思い至り、向かった。

A D E O I A 日本中国地方支部・情報部・斥候大隊大隊長、雪川瀬井中佐は、自らの所属する中国地方支部から離れた笠良木市の南部の廃工場街に仮の指令所を設置し、そこで報告とある人物を待っていた。

わざわざ中国地方支部から離れて、この廃工場街に仮の指令所を置いている理由はいくつかある。

まず、ここが搜索範囲の中心地点だからである。

斥候部隊には、少なからず領域支配の能力を持つ疵術師が存在する。この能力は、精度の違いこそあれ、支配領域の情報を掴むことができるという、斥候には欠かせない能力であり、かつ数も多いために A D E O I A の斥候部隊ではほぼ例外なく使われている。また、この領域支配は基本的に円形の効果範囲を持っており、同心円状にしかその範囲を広げられないために、使うなら中心地で使ったほうが、効率がいいのである。

もう一つは、万が一戦闘にでもなった場合、防衛線及び撤退がしやすい場所を選んだ、ということもある。もし、外部に指令所を設けずに中国地方支部から指令を送るなら、ファントムとの戦闘に陥った場合、撤退するのは街中にあるそれである。当然一般人への被害は免れないし、一般人という護衛対象が発生するために、戦いにも制限が生じる。それ故に、そのような制約のない、居住地域から離れたここを選んだ。

人間と対するならば、通常、戦闘に関係のない一般人はそれが敵領の人間であっても手は出されず、その身の最低限の安全は保障される。しかし、ファントム、ひいては D M F B にはそれが通用しない。基本的に人間ならば襲う、という本能に基づいているため、D M F B との戦いでは対人戦以上に一般人の護衛は戦いでの足枷となる。

ADEOIAにおいて、疵術師が相手をするのは、基本的にはDMFBであり人間ではない。この人間を相手としない、ということがあるからこそ、この軍隊を持ち得ない日本にも機構的には軍であるADEOIAが存在できている。また、軍を持たない国家に配慮して、その名称だけは軍(Army)ではなく協会(Association)になつてゐる。ADUIAは、名称そのものも軍であつた。日本のような国にも、魔術師以外にはほとんど知られていないとはいえ、これといった大きな問題もなくADEOIAが駐留できているのは、やはり国家間の紛争には直接関わらないというのが大きい。

もし魔術師が戦争に使われることになれば、この世界での勢力図は大きく変わることになる。並みの魔術師であっても、魔術の使い方によつては世界に存在するほとんどの兵器をたつた一人で無力化することさえ可能なのである。

戦略兵器と同等の能力をたつた一人で扱うような疵術師もいれば、たつた一体で、たつた一瞬でそれらの兵器以上の被害を及ぼすDMFBも存在する。

一という戦力が、実際には100にも1000にも、場合によっては1万、1億にもなるのがこの戦いであり、それらの戦力は、通常の軍隊での戦略兵器とほぼ同様の扱いを受けている。兵器に人権など存在しない。その例外が西園寺九能であり、彼女も切り札の一つとしてADEOIAに“保管”されていてもおかしくはないのだが、その能力の制御力が認められたために普通の生活が送れている、希少な存在である。

彼女が畏怖されるのは当然であり、恐怖すら抱かれるのはそれが人である以上真理とも言える。

それほどの存在が率いる部隊。そこからわざわざ協力要請(事実上の命令だが)が来たのだから、そろそろ40も半ばを過ぎようと言つベテランの瀬井にとつても胃が痛む話である。

「中佐」

部下が瀬井を呼ぶ。しかし、瀬井はその視線を、ちらとその部下に向けただけでまたすぐに前方へ視線を戻してしまった。それでも、それが応答の証であると知っている部下は、さらに続ける。

「本当によろしいのですか、中佐。あれと手を組むのは、魔女と契約するも同義だとも言われています。しかも、あの“断裂の聖女”などと」

その単語を発した途端、瀬井の瞳がぎよろりと隣に立つ部下を睨んだ。それだけで、その部下は固まって口を噤んだ。

「……少尉、かつてその名を呼んで彼女をからかった者がどうなったか、知っているか？」

「は……っ？い、いえ、存じ上げませんが……」

突然問われたその少尉は、うろたえながらも答えきった。しかし、彼はそれで安堵はできなかった。

「なら、いい。ただ、彼女の前でその名を口にはするな。生首だけを我々の前に晒したいのなら、別だが」

生首“だけ”をやけに強調した瀬井の意図を勘ぐる間もなく、生首を晒すということに怖気を感じたからだ。

それきり、その少尉を始め、周囲の数人の部下は黙り込んでしまった。

それからほどなくして、指令所に一人の疵術師が入ってきた。

「第一特殊遊隊の居川咲特尉と上杉天代伍長が到着しました。こちらに通します」

通すかどうかの選択権は、中佐にはない。すでに西園寺九能准将から、来るという報告と協力するようという命令があったからだ。拒否などできるわけではない。

しばらく待って出てきたのは中学生程度の少女と小学生ほどの少年。同じ支部に所属しているのだから、その姿を見たことがない、ということはないのだが、それでも顔を顰めずにはいられない。こんな少女が自分たちと同じ場に立っている、ということに対して。

しかし、目の前の当の本人たちは、それが当然とでも言うように、軽い敬礼をし、

「ADEOIA日本中国地方支部・第一特殊遊隊、居川咲です」

「同じく、上杉天代伍長です」

その挨拶が終わると、指令所に沈黙が降りた。瀬井が何もその口から発しないためだ。瀬井はただ、目の前の二人を見詰めたまま、黙りこくっている。

それから10分ほど経って、瀬井と咲以外がそろそろ我慢できなくなったころ、

「中佐……」

「居川咲特尉」

一人の部下が自分と呼ぶのに重なるように、瀬井は咲を呼んだ。

「……なんでしょう？」

見方によれば不遜ともとれる応答に、瀬井は何も言わず続けた。

「なぜ、ここに来た？」

咲はその言葉に怪訝な表情をしながらも、

「保護対象の搜索のためですが？連絡は行っていなかったのでしょうか？でしたら、ここで説明でもいたしますが」

そう答えた。その答えにはさすがに瀬井の周囲も、驚くとともに咲を睨むしかなかった。字面こそ丁寧だが、その口調には傍から見てもわかるような侮蔑が込められていたからだ。

が、瀬井は表情を変えず、

「そんなことは既に聞いている。それが真に目的なら、なぜ幣原唯利亜や大原深夜ではない？彼女らのほうが索敵には適しているはずだ」

「さあ？なぜでしょう。准将に訊いてください」

本当は咲も、彼女らの能力では見つけれなかった、と知っているのだが、咲は億劫そうにそう答えた。

「特尉は疑問を抱かなかったのか？」

「抱きませんでしたね。そんな疑問は無意味ですので」

「なぜそう思う？」

「私は彼女の命令を聞いていればそれでいい。それなら何も考えなくていいので、楽ですから」

「……まるで人形のような思考だな」

「中佐がそう思われるなら、そうなのでしょう。ただ、人形は思考しません。本能によらない論理的思考ができるのは人間だけです。まあ、私が人形のようなのだ、ということは否定しません。どこかの誰かのせいでこうなってしまったのですから」

その言葉に、瀬井は初めて表情を変えた。それは怒りと憐憫がなймаぜになったような表情。ただ、その怒りも憐憫も、誰に向けられたものかは誰にもわからなかった。瀬井本人ですら。

「もういい。自分らの行動に移ってくれ。必要であれば小隊を一つでも貸し与えるが？」

「結構です。そのようにしていただく義理はありません」

瀬井の言う小隊の小隊長であろう先ほど瀬井と会話した少尉を見ながらの瀬井の提案を、咲はにべもなく断った。

その後、咲と瀬井がほんの一瞬だけ視線を交わし、咲は背を向けてその場を去った。天代は瀬井に向かって頭を下げた後、慌てて咲を追っていった。

「あ、あの……」

咲の隣を歩く天代がおずおずと話しかける。

「なに？」

その相手である咲は、天代のほうを見ようともしせずにそれだけを言っただけだ。

「えっと……さっきのは、さすがにまずいんじゃないですか？」

「さっきのって？」

「さっきの、中佐に対する対応です。いくらなんでも失礼に過ぎますよ、あれは」

そう諫める天代に、咲はそれでもなお、前方を見たまま答えた。

「……礼を尽くす必要がないもの、あの人には」

「……何か、あつたんですか？」

その咲の声に、何か違和感を抱いた天代はそう訊いていた。しかし、咲はそれきり黙ってしまい、天代も訊き直すことはなかったために、答えることはなかった。

天代がこの部隊に入ってから、まだ2ヶ月しか経ってはいない。彼の両親は、天代の能力に関して九能から知らされており、その上でこの部隊での活動を認めている。天代のしていることは、名も実も軍事活動であるにも関わらず、である。その理由が、「天代がそのような経験ができるならそれに越したことはない。力があるなら使うべきであるし、それが人のためになるなら尚更だ」というものだった。それが親として適切かどうかは別として、九能ひいてはADEOIAにとっては好都合なものだった。

もし断られたとしても、教えたことに関して忘れるよう魔法を使うだけだが、天代本人に使うわけにはいかない。というよりも使っても効果がほとんどないのである。それもあって、一般人を親に持つ未成年の疵術師をADEOIAに加入させるのは中々に難しい。もちろん本人には真実を話した上で判断を仰ぐのだが、その保護者が魔法について全くの無関係であるなら、その幼い疵術師を抑える抑制力がないのだから、ADEOIAで保護できないなら拘束魔法で制限をかけるより他ない。そのための魔法もある。ある一つの簡単な解除方法があり、しかし何も知らない未熟な疵術師では解けない拘束魔法が。

一般人に保護されているような疵術師そのものが少ないため、それに比例して上記のような例も多いわけではない。むしろ、最も多いのが、その保護者らが疵術師である者たちを不気味がつて手放す、という事例である。そういう場合も親の記憶を消すわけだが、これが最も簡単かつ蟠りの残りにくいものだ。本人の気持ちを度外視すれば、だが。

そんな中で、親公認でADEOIAでの活動をしている天代は、

本当の親の顔を知らない。物心ついたころから養親のもとで育てられ、小学校に入る前から両親から、自分たちは本当の親ではない、と聞かされてきた。

天代はこの世界に身を投じてまだ2ヶ月。しかもまだ11歳という幼さで、前線に出してもらえらることも5度の出撃があれば1、2回あるかないか、という程度。伍長という階級も、この部隊に入るときに与えられた便宜上のもので、名乗る際に使う以上のものでもない。さらに、前線に出ても、まともな戦闘能力を持たない彼は、その飛行能力を生かした運搬作業ぐらいしかできない。

その度に、戦場に出る度に、天代は、なぜ九能が自分を部隊に入れたのだろうか、と不思議に思っていた。“普通の”社会の中では不要な能力を持つ自分を憐れんでくれたのだろうか。だから仕方なく自分の部隊に入れたのだろうか。そう天代は思い、そして実際に九能本人にその心中を吐露したこともあった。

だが、返ってきた答えは、否。

九能が語ったのは、理由があつて天代を自らの部隊に入れたのだ、ということ。しかし、その理由を教えてくれなかったために、天代は納得できなかった。

自分とほとんど同じ境遇でありながら、第一線で活躍する幣原きようだい、自分と3歳差でしかないのに世界にも名を知られている居川咲。どうしても比べてしまう対象が身近にいて、しかもその対象が自分とは大きくかけ離れた存在となっている。それが彼に劣等感を与えていた。それは咲の隣を歩く今も、解消されてはいない。

「……………」

天代は、自分よりも少しだけ背の高い咲の横顔を見上げる。

その顔には年齢相応の幼さもあるが、表情から滲み出る雰囲気は対照的な大人っぽさを見る者に感じさせる。彼女の年齢以上の経験を想起させるものでもある。九能や未来小が将来は相当の美人にな

るだろう、と予想するほど整った顔だが、色恋にまだそこまで興味のない天代にはいまいちよくわからなかった。
と、

「……なに？」

ずっと顔を見られていた咲が、横目で天代を見ながらそう訊いた。天代もさすがに失礼なことをしていると気付いたのか、咄嗟に顔を背けて、

「い、いえ、あの、なんでもないです」

「そう」

戸惑った時の常套句で誤魔化すと、咲はさして興味もなさそうに頷いて、また前方に視線を戻した。

また沈黙の散歩が続く。傍から見ればさぞかし不思議な光景だろうが、今は夜中であるため、彼らを見る者はいない。

咲は元々喋るほうではないし、天代も特段沈黙を苦痛だと捉えるような性格ではない。その後も沈黙が続いて10分ほど。

「この辺でいいわね……」

という言葉とともに、咲が立ち止った。それに伴って天代も歩くのをやめる。

そこはあの廃工場街をさらに南に下って、笠良木市の南の市に入っつてすぐの、ある公園だった。天代も学校の遠足で一度来たことがあるという。

「天代、飛んでこの公園の外枠の形を教えてください？」

「え？あ、はい、わかりました」

そう言って、天代はその背から瞬時に翼を顕す。

その翼は、よく見る天使の翼に近いもの。しかし、よく見ればところどころにねじれた鉤爪が付いており、暗闇で見ても感じる神々しさの中に同時に禍々しさをも感じるものだった。

大きさは翼長で4mを超える、小柄な天代には不釣り合いなほどに巨大な翼。

その翼をはためかせて、天代は一気に上空へと飛び去った。飛んだ際に生じた風に、咲は思わず目を瞑る。同時に、周囲には散った羽がいくつかが舞っていた。

上空を見上げてみると、この暗闇で見ても見失わないことから、さほど高くは飛んでいないと咲は目星を付けた。どんな高さに飛んでも、目的さえ達成してくれば咲にとってはどうでもいいのだが、ちなみにこの翼、これも純粋な魔力で構成されており、その粒子は衣服の繊維を容易にすり抜けてしまうような大きさのため、着ている服に穴が開くようなことはない。らしい。

ほどなくして降りてきた天代に、咲はどうだったのかと質問する。

「ほとんど正五角形に近かったです。少し丸かったりしますけど…」

「構わないわ。……五角形ね、都合がいい」

そう呟くと、咲はおもむろにその場に両膝を付いた。

すると、突如地面に、咲を中心として光り輝く五芒星が出現した。

天代が、その五芒星に入るまいと反射的に飛び上がると、

「そのまま飛んでおいて。降りてきたら、多分呑み込まれるから」

目を瞑ったままそう言う咲に、天代は返事とともに頷いた。そこから少し、さらに高度を上げる。

咲はその姿勢のまま、数秒、再び天代に声をかける。

「……天代。頂点の方向を一つだけ教えて」

「えっと……咲さんから見て2時の方向です」

それを聞いた途端、咲の足元の五芒星がわずかに回転し、天代の言った通りの方向に一つの頂点を合わせた。

準備が一通り終わった咲は、一度深呼吸をして気分を落ち着かせる。

「さて、では」

天代が息を呑む中、咲は始めた当初と全く同じ体勢で、身動ぎす
らせず、唱えた。

「
始めましょう」

瞬間。

咲の下に、さらに新たな五芒星が次々と現れる。それは最初にあ
ったものとはほんの少しだけ重なっていた。

それが、10か、100か、あるいは1000かもしれない、そ
れだけの数が重なった後、最初の一つだけを残して拡散していった。

しかし、上空にいた天代にはわかった。それはこの公園からは出ず、否、出られずにその公園の中を縦横無尽に駆け回っていた。まさに星の乱舞ともいえるこの光景の中、咲は先ほどまでの体勢を解いて立ち上がる。

目も眩むような目映さの中、一人だけ一つの五芒星を従えているように、足元を輝かせている咲は、さらに、片手を上に掲げ、

「！！！！」

叫んだ。

それは、誰が聞いても、到底人間に出せる声ではなく、しかもどの国、民族の言葉でもなかった。

あえて言うなら、魔術の言葉。しかし、魔術師の一種の疵術師である天代にも、その言葉の意味は何一つわからなかった。

たとえ魔術師であっても理解できないだろうその不可解な叫びが響くその公園に、果たして変化は訪れた。

それまで暴れ狂っていた五芒星が突如、動きを止めたのだ。

しかし、それもほんの束の間、それらの星は再び動き出し

「うわ！？」

天代は思わず悲鳴を上げていた。

それも当然、地面を走り回っていた五芒星が、放つ光とともに四方八方に飛び散って行ったからである。その光量たるや、周囲に街灯のない暗闇であっても晴れた真昼のごとく明るく照らすほどであった。確かに、この中で地上に突っ立っていれば、この光に呑み込まれて視力でも奪われていたのは想像に難くない。

五芒星が彼方に飛び去って、公園の輝きも収まった頃、もう大丈夫だろうと判断した天代は地上に降りてきた。

まだ若干ちかちかする目を擦りながら、天代は咲を見る。咲はま

だ目を閉じたまま、上空を仰いでいた。天代が近づいても全く微動だにしない。

「……あの、咲さ」

「天代」

思わず手を伸ばそうとした天代は、咲に名前を呼ばれて、慌ててその手を引っ込めた。

「は、はいっ、なんですかつ？」

「……これで魔力になんらかの動きがあれば、よほどのことがない限りわかるから。天代は空から肉眼で捜してくれる？何かあったら連絡するから」

ようやく目を開けた咲は、天代を見ながらそう言った。

「はい……でも、咲さん一人で大丈夫なんですか？」

「大丈夫よ。それに、戦闘能力のないあなたがいたって意味ないでしょう。むしろ邪魔よ」

「え、あ………すみません………」

真っ向から邪魔と言われて落ち込む天代に、咲もさすがに良心の呵責を覚えたのか、

「……適材適所よ。私は機動性がないからこんなことしかできないけど、結局のところ魔力の動きだけでは確実じゃないの。その点、

あなたはその現場に行つて直に見てくることが出来る。私たち二人なら唯利亞さんにも勝る索敵能力を発揮できるのだから、お願いね、天代」

そう優しく励まして、天代を立ち直らせようとする。結果として天代は、「はいっ！」と返事をして、元氣よく飛び立って行ったのだから目的は達成できたようだが、少し優しくすぎたかもしれない、と今更ながらに咲は反省した。

二人なら唯利亞にも勝る、と言ったが、その唯利亞が今の監視対象なのだから皮肉なものである。ついでとしてファントムやジャンヌの索敵も魔術に組み込んであるが、見つけるのは絶望的だろうと咲はすでに諦めている。

先ほど咲が使った魔術は、範囲内の魔力の座標を逐一記録して、その動きに不自然なものがあれば術者に知らせられる、というものである。

範囲内のある一定空間　　咲の場合は約10立方cmで、これはかなり細かい区切り方である　　で、代表となる魔力を設定し、それが通常の大気中の魔力にありえない動き、つまり大規模な魔力の排出による大きな座標変化や周辺の魔術行使による魔力の純化あるいは不純化などをした場合、それを感知して術者へとその情報を送るのだ。これらの現象が起きれば、その周辺に少なくとも魔術を使える者がいる、ということになり、その変化の規模が大きければファントムの存在が疑われる。ただ、ファントムについては、深夜が索敵不可能となった時点で諦めているが。

しかし、今回の対象は唯利亞である。唯利亞は類稀な索敵能力を持つているにも関わらず、自身を隠蔽する手段をほとんど持っていない。一度でも魔術を使ってくれば、それが唯利亞のものだと、大体の目星はつく。支配領域における行動の自由度及び敵への拘束力では、おそらく咲の右に出る者はないとされており、敵の場所を知ることが敵の動きを封じることにもなる、故に、唯利亞がもし範

囲内にいるなら、さほどの誤差もなく探し出せる。

「……………」

咲は、唯利亞を想って空を見上げる。当然そこに唯利亞がいるわけでもないが、晴れた夜空の星がなんとなく太陽を直接見た時みたいに眩しく見えた。あの魔術を使った時のほうがよっぽど光は強かったのに、だ。

今の咲は、この場から動けない。動けば魔術の効力が失われてしまう。

自分に送る情報をかなり制限しているため、送られてくる情報は少ないが、だからこそ思考に隙間ができる。その隙間に何が入ってくるのか、本気で怖くなって無理やり頭に入ってくる情報を増やしてみる。

「……………」

処理が追い付かず、頭がぎしぎしと軋んでいるような錯覚に陥るが、魔術には何の支障もない。

頭にどんどん入ってくる魔力の情報。笠良木市に展開している斥候部隊の隊員や天代の位置も大まかではあるが確認できる。

そんな今においてはどうでもいいことも、咲にとっては思考の隙を埋めてくれるものだった。

しかし、

「…………？」

咲の頭を過ぎった違和感。それは小さなものだが、同時に大きいような気もした。

その判然としない違和感は、ある方向に向かって移動している。

わずかに不安定に上下しながら、それでも落ちることもなく飛んでいる。

まるで、蝶のように。

そこで思い至る。

この魔術に引つかかるほどの魔力を持つ蝶など、いただろうか？
いるとするならそれは

「……！」

さらに魔術の精度を増していく。その蝶を視るためだけに集中させていく。

視るのはその外観だけではない。それに加えられた魔力、その質量、その魔力がどんな用途で使われ、どのようにしてその蝶に内包させられてしまったのか。

頭に入ってくる情報をその蝶に限る。それ以外の情報を排除し、魔術の支配領域を極限まで縮小する。

そして、確信した。

確信した瞬間、咲は携帯で天代へ連絡していた。

魔術を瞬時に解いて、咲はその公園を走り出ながら、天代へ焦ったように告げた。

「天代、すぐに戻って。唯利亜さんはやっぱり何かしようとしてる。早くしないと 手遅れになる……！」

第1章 誘惑の狂姫 # 1 2

「……………迷宮」

その声は、その凄惨な光景の広がる倉庫に響いた。

そこには、声の主も含めて4人がいたが、一人は瀕死の重傷、一人は目の前で繰り広げられた光景に自失しており、その声を聞いていたのは一人だけだった。

「……………何者だ？」

その唯一の存在であるファントムは、この状況では当然ともいえる疑問をその口にする。

しかし、それが聞かれることはない。ただ、少女の声が、幼くも妖艶なその声が続いて響くだけだ。

『迷宮。鬼と羊の迷宮。鬼は羊を追い、羊は鬼から逃げ、その迷宮に迷い込んだ』

倉庫の入り口に佇んだまま、全く動かずにそれを唱える少女。ファントムはジャンヌを抱えているために、無暗に動くことができない。もしジャンヌが標的ならば、ファントムにとって最優先に守らねばならない存在であるジャンヌがその手中にあるのは、それを守るといふハンデを持つということ。目の前で倒れ伏している死に損ないは、ファントムにとって既にどうでもいい存在だが、今相対するその力が未知数である以上、迂闊な行動は避けるべきであった。たとえ、ファントムが強大な力を持つていたとしても、決して無敵にはなり得ないが故に、そのわずかな油断、驕りが死に繋がること

はそう珍しいことではない。それは、高い知能を有するがために持つ、他のDMFBにはない欠点でもあった。

それを知り、理解しているから、そのファントムは黙ってこと成行きを見守る。

『羊は鬼の道標で、鬼は羊の道標。鬼は羊を逃がすまいとして追い、羊は鬼に喰われようと走る』

だが、そのファントムには、どんな攻撃が襲ってこようとそれをやり過ごす自信があった。彼が、彼自身を最もよく知る、だからこそその自信が。

だからこそ、彼はわざわざここから逃げることもせず、相手の動きを待っている。ここでこちらから仕掛けて魔術そのものを止めることもできる。だが、ファントムは過剰に慎重とも言えるほど、罠を警戒した。ならば安全策としてここで何かを使わせる。そうして敵の手の内を一つでも知り得るのなら、彼はそちらを選択した。

『鬼は迷宮を脱する導^{みち}を求め、羊は冥界^{みやうがい}へ達する導^{みち}を求め。しかしそれは相容れず、破綻^{へたん}を導^{みち}き、永久^{とわ}の徘徊^{たわ}の導^{みち}となる……』

だが、ファントムは根本的なところで間違っていた。

『鬼は叫ぶ。羊はどこ？羊はどこ？羊は問う。鬼はどこ？鬼はどこ？』

そのファントムが大抵の攻撃ならばやり過ごせるだろうということとは、唯利亜のあの攻勢をいとも簡単に耐えきり、あまつさえ失われたはずの片腕を既に備えていることからもある程度の判断はできる。

しかし、ファントムはそれでも間違っていた。あるいは慎重に過

ぎた。

『それらは迷宮を彷徨う。自らの望まぬその道を歩き続ける。叫びも問いも、壁が遮り、絶望を呼び、歩む一步が空しく軋む』

一つは、少女の狙いはジャンヌにはなかったこと。

『しかし、片方にのみ、希み、望む導が示された。それは鬼か？羊か？彼の者が問うも、それは万人に理解され、それ故に選ばれぬものは憐れと嘆いた』

そして、もう一つは

『望みを叶えしもの、それは当たり然るも、羊。冥府への導は鬼にあらず、迷宮、それが弱きものの望みを叶え、強きものは望まず、そこに留まった。羊が望む“死”それが唯一にして無二の、迷宮より脱する道。鬼は理解できず、強者ゆえに矜持でもって強欲に溺れた。故に旧き門も、旧き壁も、旧き装飾も、旧き床も、そこにあつて、それにあるのは、鬼でしかなかった』

少女の紡ぐその詩の結末、それは決して、攻撃などではなかった。

『その上で刻む、それは

無限連壁

』

突如、ファントムの目の前に巨大な壁がそそり立ち、地面に伏す唯利亜と彼とを分断した。

続いて、その壁が横に伸び、その中途からまた壁が生え、そこからさらに壁が生え　　ファントムが呆気にとられているほんの1秒程度の間、それは完成していた。

それは、彼女の創り出した迷宮。

一度入りこんだ者をとことん迷わせ、拳句、それを飢え殺す。

無尽蔵に取り込み、脱出の選択肢としての死のみしか与えない。

ファントムとジャンヌはその迷宮の中にいた。

「ちい……！見誤ったか……！」

ファントムはその中であって毒づくが、もう遅い。既に死に損ないと化した唯利亜を判断の材料から排除したがために、その唯利亜を救出しに来た、という発想がファントムの中にはなかった。

あったのは、ジャンヌを救うためか、あるいは自身を滅するためか、というこの二つのみ。

「おのれ……！抜け出せるか、この迷宮……！」

ファントムは周りを見渡すが、その目に映るのは無機質な壁のみ。その高さは、どう考えてもありえないほどに高く、上を見上げてもその壁と空の境界はわからない。倉庫の天井など既にあつてないようなものだ。しかも、ファントムの知り得ることではないが、上空から見たその迷宮はまさに周囲一帯を覆うように展開していた。

完全に閉じ込められた。活動期間ならまだしも、力を十分に発揮できない潜伏期間ではどうしようもない。

ファントムはジャンヌを抱えたまま、その場に立ち尽くした。

咲は、倉庫の入り口から、迷宮から故意に弾き出した唯利亞へ走り寄った。唯利亞の傍らに膝をつく咲は、その唯利亞の様子を見て顔を顰めた。

「……………ここまで……………、……………出血が酷い。これじゃ、傷だけ治しても……………」

唯利亞は地面にうつ伏せに横たわっていた。その身体の中には大きな穴が開き、上から見ても赤黒い床が見えた。さらに、未だに腹側からも背側からも深紅い血が流れ続けていた。咲が見る分にはそれ以外に目立った外傷はない。といっても、唯一の負傷が致命傷に近いのだから、それ以外に小さな傷があったところで構っている暇はないのだが。

咲が唯利亞の状態を簡単に診たところで、後ろから天代も追従して走ってきた。

「さ、咲さんっ、唯利亜さんは……」

天代は慌てた様子で叫ぶが、咲はそれを無視し、黙って唯利亜へ手をかざした。

すると、ドーム型の膜が唯利亜を包み、それに宿る光が唯利亜の腹部へと注がれた。

咲はもちろん、天代もそれを固唾を飲んで見守る。

少し経って、咲はまだ魔術を使いながらも、天代へと話しかけた。

「……天代」

「あ、はい」

「准将には連絡した？」

「はい、すぐに向かうって……」

「そう……」

天代から咲の表情は窺えないが、採るのを惜しんで熟れすぎた果実がきつい臭いを発するように、抑え込まれて逆に大きくなった怒りがその声には滲み出ていた。

しかし、天代にも、その怒りが咲自身に向けられたものであるとわかったから、天代がそれに臆することはなかった。かといって、咲に、自分を責めるな、などと言えるはずもなく、咲が魔術を終えるまで二人とも何も喋ることはなかった。

「……………」

咲は唯利亜への治療が終わり、立ち上がる。その視線は自らの創

った迷宮に向けられていた。天代も釣られてそちらを見る。

その中にはファントムがいるはずなのだが、そこからは絶対に出られないと知っている咲は、危惧も感じず、ただただ唯利亜をここまで傷つけたことに対する怒りをそちらに向ける。自分に向けた怒りとは全く質の違うものだが。

しかし、その迷宮に閉じ込めてしまえば、こちらから手を出すことができないことも知っているために、唯利亜を助けるために必要だったとはいえ、自分のしたことにさえ咲は恨めしく思っていた。こんな方法でしか唯利亜を助ける手段がないのだから、それは自分の無力を嘆く以上に恨みを感じてもしようがない。咲の生真面目な性格ではなおさら。

しばらくして、九能が到着して、すぐに唯利亜を連れて中国地方支部へと帰還した。

俺は、自分の部屋から唯利亜の運ばれたという医務室に向かって歩いていった。本心を言えば走りたいのだが、それに反して身体は言うことを聞いてくれない。今唯利亜に会って、俺があいつに何を言えればいいのかわからない。

大丈夫だ、などと言っておいて、あいつの気持ちを察せずにこのざまだ。

九能には軽々しく安心しろ、と言えなかったのに、唯利亜には何の疑問も感じずに大丈夫だ、と。

俺はバカなのだろうか？いや、そうなのだろう。俺が唯利亜のすべてを知っているとは、さすがに言えないが、それでもおかしいとは感じなかったのか。鈍感だと言われることは確かに多いのだが、こういう時にそれが発揮されると、正直死にたくなる。

などと、くだらない自己嫌悪を頭で巡らせている間に、例の医務室へと辿りついた。

その扉を開けるのに少し躊躇したが、既に出てしまった手は止められず、扉は開けられた。

「あ……奈都海……」

真っ先に声をかけてきたのは九能。今日（といっても日付は既に変わって昨日になっているが）のように飛びかかってくることもなく、ただ俺のほうへ振り向いただけだった。その表情にはいつものような明るさも覇気もなく、影がかかって暗く沈んでいた。

しかし、俺はそれに気付きながらも唯利亜のことを訊くことは止められなかった。

『唯利亜は？』

俺は、唯利亜を診ている医務部隊と思いき白衣を着た女性ではなく、九能に訊いた。わざわざ診断の邪魔をすることもないだろう。

それ以前に訊く手段がない。

九能は、俺から視線を外して唯利亜を見ながら答えた。

「ん……、一応、咲の応急処置のおかげで死ぬようなことはないけど……完治にはかなりかかりそう。お腹の真ん中がごっそりなくなつてたぐらいだから」

そんなことになれば、魔術師でなければ当然の如く即死だろう。

唯利亜が疵術師だから助かっただけのこと。それでも、致命傷に近い、あるいは致命傷そのものだったことに変わりはない。そうならば、

『唯利亜は、今回は外すか？』

「そうね、戦うのは無理だし……こんなことになれば、外さざるを得ないわ」

『命令無視の独断行動だし、な……』

「ええ。それに相手があの人じゃ、冷静な判断もまず無理でしょうし、そのせいでこうなつたんだもの。作戦に参加させるなんて言語道断ね」

九能とて人間であるから心配もするし、慕う人物を救えなかったことに関して同情することもあるだろうが、それでもそれは私人としての事情であり、もう一度チャンスを、などと言って作戦に参加させるなど軍人としてあつてはならない。

不謹慎かもしれないが、正直俺はこれでよかつたとも思っている。唯利亜が傷ついたことは確かに嘆くべきことだが、これで唯利亜を作戦から外す大義名分ができたことにもなるのだ。唯利亜の強情さ

を考えれば、会長が救出対象であるために冷静さが損なわれる、というだけでは作戦から外す理由としては弱い。だが、今回の件で唯利亜は戦いに耐えられるような身体ではなくなり、加えて軍規違反までした。唯利亜の負傷以外に実害はなかったものの、咲がいなかったらどうなっていたかわからない。唯利亜だけでなく、周辺に展開していた斥候部隊にも被害が及んでいた可能性もある。どう考えても唯利亜の今回の行動は許されるものではない。

「でも……唯一貢献したのは、ファントムの居場所を突き止めたことね。咲の迷宮で閉じ込めてあるから、移動することもそうはない。以降はこれを前提に作戦を組める」

九能の言ったことは俺も事前に聞いた。方法は不明だが、唯利亜がファントムの居場所を突き止め、咲がそれを迷宮の魔術で閉じ込めた、と。ちなみに、この迷宮の魔術は俺の使う魔術の応用らしい。今はどうでもいいが。

それから、唯利亜の病室から出て、九能からいくつか情報を聞いていると、

「……………奈都海さん、准将」

咲がこちらへ歩いてきた。

「早かったわね。……………それで、どうだった?」

「処分については准将に一任するそうです。作戦についても」

聞けば、咲は今までこの中国地方支部の部長へ報告に向かっていたらしい。そして、ついでにと言ってはあれだが、唯利亜の処分と今後の行動についても聞いてきたという。

そして、答えは両方とも九能に任せる、というもの。無責任なのではなく、九能を信頼しているのだらう。とはいえ、九能に任せっきりということもないはずだ。少なくともフロントムと相対するのだから、表向きは一任と言っても、将官とはいえ一人の軍人に過ぎない九能に本当にすべて任せるわけがない。今の状態では指揮系統の面から言っても、一度に動かせる戦力でもフロントムと戦うには力不足だらう。

「……………准将」

「なに？」

控えめに九能を呼ぶ咲に、九能は応じる。ここまで弱気な咲は珍しい。

「あの、唯利亜さんは…………？」

続ける咲の言葉にも、どこか力がない。

「ああ、もう大丈夫よ、咲のおかげで回復は早くなりそうね。安心なさいな」

そんな咲を元気づけようとしたのか、九能は努めて明るく答えた。声をかけることのできない俺も、できるだけ暗い表情はしないよう努力した。…………元々明るい表情が似合う顔ではないから、成功したかどうかはわからないが。

しかし、俺たちの懸念をよそに、気付けば咲の表情はいつも通り

のポーカーフェイスに戻っていた。しかし、直感ではあるが、無理をしているということが感じられる時点でポーカーフェイスとは言えないかもしれない。

それでも咲は、内に感情を押し込めてまで気丈に振る舞う。

「それで、これからまた会議ですか？」

「……………そうね、ファントムの居場所が分かっている以上、黙ってじっとしてる意味もないもの。これからみんなを招集しなきゃいけないけど」

「そう、ですか……………迷宮については？」

「どの程度持つのかで変わるんだけど、実際、持つのはどれぐらいなの？」

「規模がかなり大きいので、丸24時間も持てばいいほうだと思います。今回初めて使ったので、具体的な持続時間はわかりませんが……………ただ、少なくとも20時間は持つ魔力を込めてあります。そこから分解が始まるので、後はファントムの力次第で変わります。多分崩れただけで脱出してくるのか、ある程度分解が進まなければ出てこられないのか、で変わりますから」

「そう……………」

九能は手をあごに当てて考え込む。

少なくとも、その迷宮とやらが消えてファントムが放たれるまでにその迷宮を包囲するかなんたりしなければならないのは明白だ。それは九能もわかっているのか、決断は案外早かった。

「なら明朝、我々第一特殊遊隊を含めた12の部隊で現場を包囲します。それまであの迷宮は斥候大隊に監視させる。……咲」

「はい」

言葉の最後に呼びかけられた咲は、戦場に立つ表情で応えた。

「未永栖に部隊の選定を依頼、それと選定された部隊への作戦参加の通達を。奈都海は作戦会議の準備をお願い。できれば全部2時間以内にね」

俺と咲は頷き、行動に移る。

移ろうとした、その時だった。

医務室の扉が開き、医務隊の一人が出てきた。その顔は暗い。反射的に俺たちは、何があったのかと身構えてしまう。

「唯利亞さんが目を覚まされました。ですが………現在錯乱状態にあります。先ほどの戦闘で使い魔を使い切ったのか、その類の現象はありませんが、彼の場合いつ何が起こるか……いえ、何を起こすかわかりません。……どうされますか？」

それを聞いた九能は、迷う素振りも見せずに医務室へと入っていた。それに俺と咲も追従するが、九能はそれを咎めはしなかった。なぜなら、医務室に入った途端、そんなことをする余裕は消し飛んでしまったからだ。

その原因が

「うわあああああああああああ！！！！」

唯利亜の絶叫。

九能は「唯利亜！？」とカーテンで仕切られた医務室の奥へ走りだした。

俺と咲もそれについて奥へ向かう。しかし、なぜか立ち尽くしている様子の九能に追いついたところで、俺も咲も九能と同様に茫然とした。

「ジャン又さんを……ジャン又さんを、助け、ない、とッ！！早く、ボクが………ッ！！」

「ゆ、唯利亜さん、落ち着いて！」

唯利亜はベッドの上で暴れていた。医務隊の一人がそれを何度も抑え込もうとするが、それでも唯利亜はそれをはねのけてベッドから逃れようとしていた。

「やめ、行かせてよっ！！ボクが行かないと………ツカハッ！……ぐっ、うっ………！！」

その光景を半ば自失しながら俺たちは眺めていたが、唯利亜が口から鮮血をまき散らしたところでさすがに我に返った。唯利亜の吐いた血は布団だけでなく唯利亜の顔にも少なからず降り注いだ。それでも構うことなく唯利亜は暴れ続けた。

「唯利亚つ、やめて、そんなことしたら……！」

「動いたら傷が開きます！お願いですから……！」

その二人の懇願も空しく、唯利亚は自らの戒めを解いてベッドから出ることに成功する。しかし、身体を中心に大穴が開き、一度は治したとはいえまだ脊髄すらまともに機能していないために脚が言うことを聞かず、唯利亚は転倒した。

「かつ、あつうつ……！」

唯利亚は、ベッドの布団を汚した血で、今度は床に血だまりを作っていく。立ち上がるうとしてもできず、無様に床を這いずる唯利亚を、誰も止められずに眺めていた。医務隊ですら自分たちの仕事まで忘れて立ち尽くしていた。

錯乱どころではない。そんなものを通り越して、唯利亚は完全に狂乱している。

明らかに正常じゃない。今までにこんな唯利亚を見たことがあるか？少なくとも俺の記憶にはない。

「あつ、ああ、……ジャンヌ、さんを……ッ！」

口から血を滴らせながら会長の名をしきりに呟き、時に大声で叫ぶ唯利亚は、もう俺たちがどうこうできる状態ではない。

唯利亚の変化に気付けなかった俺も、こうなることを予想しながらも防げなかった九能も、防げる立場にあつたにも関わらず間に合わなかった咲も、この場で唯利亚に対して真っ向からやめるとは言えない。

もちろん、こうなつた責任は誰にあるのか、などと議論したところで意味はない。

俺が気付いていれば防げたかもしれないし、九能がもっと有効な対策を施していればここまでではならなかったかもしれないし、咲が違う方法で唯利亜の監視を行っていれば唯利亜がファントムと戦うこともなかったかもしれない。あるいは会長を攫ったファントムが元凶だとも言えるし、軍規を蔑ろにした唯利亜本人にこそ責任があるとも言える。もっと他の考え方もあるかもしれない。

だが、このまま放置していれば唯利亜は当然死んでしまう。

傷は塞いだはずの腹からは血がドクドクと流れ、唯利亜の着ている服の赤いしみをさらに広げていた。唯利亜はそれに気付いていないのか、あるいは気付いていて無視しているのかわからないが、必死に立とうとして手の平が床の血で滑り、言うことを聞かない脚はほとんど動かせていなかった。

唯利亜を止められない、とは言ったが、その唯利亜本人が死んでしまふのなら話は別だ。俺は唯利亜を止めるべく、その真つ赤な床に足を下ろそうとした。

が、

その前に咲が前に出て、すつと地に這いつくばる唯利亜を抱きしめた。いきなりすることに俺だけでなくここにいる全員が驚いた表情を浮かべる。そして

「……………すみません、唯利亜さん……………私のせい、です。私は、あなたが飛ばした蝶を見つけました。それなのに止められなかった。私には止められる力はなかった。……………それを言い訳にするつもりなんかありません。ただ……………私がつつと強ければ、もっと強くなるよう努力していればこんなことにはならなかった、唯利亜さんが傷つくこともなかったかもしれない、のに……………！私のせいで唯利亜さんが傷ついた、だから私には……………こんなこと言う資格なんてないかも、しれません。でも……………」

咲が喋る間にも、唯利亜の口は虚ろな目をしながらひたすら会長

の名前を紡いでいた。

それでも咲は続ける。

「でも、言わせてください。……唯利亚さん、もう、やめてください！ 私はもうあなたが傷つくところなんか見たくありません！ あなたがあの人の方が好きなのはわかります、でも！……同じように、あなたのことが好きな人が、ここにもいるんです……、だから……もっと、自分を大切にしてください、どうか、お願い、ですから……」

咲は唯利亚の血だらけの服に顔をこすりつけて泣き始めてしまった。唯利亚も動きを止めて、会長の名前を呼ぶこともなく黙っていた。

医務隊が唯利亚をベッドに戻し、もう一度一通りの処置を行ってから、唯利亚は俺と九能に向かって口を開いた。

「……兄さん、九能さん……咲ちゃんと……二人に、してくれないかな……」

それを聞いた九能は頷いて俺と医務隊を促した。咲は驚いて九能を見たが、九能は視線を送っただけで医務室を辞した。

『九能』

俺は医務室を出たところで九能に声をかけた。

「なに？」

『咲に任せていた仕事はどうする気だ？』

さつき咲が驚いたのもそれが原因のはずだ。咲は九能から未永栖さんへの部隊選定の依頼と選定された部隊への通達を任されていた。まあ、それぐらいならば俺がしてもいいのだが

「私がするわ。どうせ暇なもの」

九能はそう言って笑顔を向けてきた。……その笑顔が強張っていたのは指摘しないほうがいいだろう、お互いのために。

「だから、また後でね。……もう、こんなのはごめんだから」

そう呟いて九能は俺とは反対方向に去って行った。

その部屋には唯利亜と咲の二人だけが残った。

唯利亜は血を吸って固まっていた服を着替え、身体中に付いた血を咲に拭いてもらった。咲も顔に付いた血を拭き取った後でベッドの傍らに置いたイスに座った。ただ、着替えがないので服に付いた分はそのままだ。

しばしこの空間で二人は無言で過ごした。

と、おもむろに唯利亜が虚空を見つめながら口を開いた。

「……ねえ、咲ちゃん……」

「はい」

「……ごめん、ね？」

「……いえ、私の力不足ですから……気にしないでください」

「うん……ありがとう……」

「……はい」

「……」

「……」

しかし、いくつ言葉も交わしただけで、二人はまた無言になってしまう。

それからまたしばらく、口火を切ったのはまたも唯利亜からだっ

た。
「咲ちゃん……」

「はい」

なんとなく唯利亜の横顔を眺めていた咲は、不意を突かれたように顔を上げて応えた。

「……咲ちゃんさ、……………ボクのこと、好きなの……………？」

「は、……………え？」

あまりにも予想外かつこの雰囲気にかけていない質問に、咲は目を丸くする。

しかし、先ほどの自分の発言を思い出して意味を理解した。曰く

「 同じように、あなたのことが好きな人が、ここにもいるんです……………」

思い出して理解して、咲は顔を熟れたリンゴのように真っ赤に染めた。

「え、あ、い、いえ、す、好きとか、そういうのでは……………いえ、決して嫌いなわけでもないんですけど、あの、あ、えっと……………」

おそらく誰が見ても驚くであろう咲の狼狽ぶりに、しかし唯利亜はほとんど反応を見せず、「そう……………」とだけ言って、また口を閉ざした。

そんな、冷めたとも言える唯利亜の反応に、咲もつられて冷静さを取り戻した。そして、しばらく唯利亜の顔を眺めた後、逆に質問を返した。

「あの、唯利亞さんは……あの人のこと、好きなんですか？」

咲は私人として名前で呼ぶべきか軍人として禁断子と呼ぶべきか迷ったが、結局「あの人」で無難に済ませてしまった。そんな咲の質問に、唯利亞は少し考え込む素振りを見せ、少しして答える。

「……さあ、どうだろ………わかんない、かな………」

咲は沈黙でもって唯利亞に続きを促す。唯利亞もさほど間隔を開けずに続けた。

「もちろん好きなんだけど………そういうのとは違う気がする………
…なんだろ。友達、とも違う………でも、恋愛とは違う、かな………
…わかんないけど」

曖昧に濁して、結局唯利亞は結論を出さなかった。それを言えば、咲も答えたとはいいづらいのだが。

とはいえ、これでこの話題が終わり、唯利亞が今度は目を瞑ってしまったために、咲はまた唯利亞は黙りこむのか、と思った。それならそれでよかったのだが、予想に反して唯利亞は目を開けないままにそのまま喋り始めた。

「……ボクね、最初はジャンヌさんのこと、あまり好きじゃなかったんだよね………」

「え？じゃあ………」

ただ、その告白は、咲にとって驚きに値するものだった。ならばなぜここまで執着するほどになったのか、疑問は当然ある。

「ボクが好きになったのは、さ……………えっと、6月に、あったでしょ？知ってるかな……………」

「……………はい、“あれ”ですよね？」

唯利亜が言い淀んだのを、咲は知っていると示した。それに唯利亜は安堵したようにほうと息を吐いて、続ける。

「ん、それでね、ボク女の人嫌いになっただけ……………」

「……………はい」

「……………本当に酷かったんだよ、その、同情を誘うわけじゃないけど、母さんや愛燕や九能さん以外の女性を見ると本当に怖くなって、どうしようもなくなって、ずっと死ぬまでこのままじゃないかって思いまでしたし……………」

「……………」

咲もその頃のことには知っていた。咲にも魅戈にも未永栖にも未来小にも近づけず、まるで女性が生来の天敵であるかのように、女性を避けるようになった。どれほど酷いことをされたのか、咲には知る術はないが、それでもこの避け方は過剰だと思ってしまうほどだった。

「でもね、それを完全に　　とはいかないけど治してくれたのがジャンヌさんのの」

「……………？どうやって、ですか？」

失礼とは思いつつも咲は訊いていた。唯利亚も特に嫌がることもなく若干恥ずかしそうにしながら答えた。

「……………キス、されちゃったんだ」

「……………キス、ですか……………？」

「うん、女性恐怖症に陥ってたボクにいきなりね。何の前触れもなく、唐突に」

「……………はあ……………」

「それからかな？なぜか女の人あまり怖くなくなったのは」

それはレイプと何が違うんだろう、と思ったが、その方面の知識に疎い咲は口にはしなかった。実際にはやっていることにそう大差はないのだが。無理やりキスすれば性的暴行になり得るのだから。

しかし、その出来事が唯利亚にとって転換点になったのは事実で、それがなければ今の唯利亚はありえなかった。こうして会話することすらできなかつただろう。

「だからかな、ジャンヌさんは恩人だから、今度は逆に助けたいと思ったのかもしれない。　こんな答えでいい？」

「え？……………あ、はい！大丈夫です、ありがとうございました…」

…」

一瞬何のことかわからず呆けていた咲は、それでもすぐに自分の質問への答えだと気付いてなんとか応じた。

応じつつ、咲は安堵していた。咲との会話の間に、唯利亜も少しではあるが回復している。口調もしっかりとしてきて、話す時も咲のほうを見る余裕が出てきたらしい。咲にとってはそれだけでも十分嬉しいことである。

それからしばらく、ファントム征討の作戦会議に咲が呼ばれるまで、咲と唯利亜は他愛もない会話を続けた。

それでも咲は、唯利亜が後朱雀沙夢濡という人物をどれだけ想っているかを最後まで悟ることはできなかった。

第1章 誘惑の狂姫 #12 (後書き)

更新時には忘れてましたが、PV20000達成しました。

読んでくださった方、本当にありがとうございました。これからも
よろしく願います。

第1章 誘惑の狂姫 #13

俺たちは、ADEOIA中国地方支部から東に10kmほど離れた、既に使われていない巨大倉庫を包囲していた。

その倉庫は言うまでもなく咲が魔術によって迷宮化したものであり、その中にはファントムと会長が囚われている。

今その倉庫を包囲しているのは、中国地方支部に所属する10の部隊だ。1部隊の規模が大体小隊ほどなのだが、ADEOIAでの小隊というと1部隊10〜20人程度だ。つまり合計で200人近い疵術師が迷宮と化した倉庫を包囲しているというわけだ。傍から見れば異常極まりない光景だが、どうせこんな山奥で見る者などそうはいないし、見られたとしても記憶の改竄かいざんなどしようと思えばいくらでもできる。

当初は12部隊での作戦の予定だったが、選定された部隊のうち2部隊の主力が離れた小支部に派遣されていたために、その2部隊を除いた10部隊だけが作戦に参加することになった。慢性的な人材不足に悩まされるADEOIAの現状を考えれば仕方のないことだ。ファントムのために他のDMFBを疎おそかにはできない。むしろファントムのせいで周囲の魔力の結合能力が高まり、DMFBの発生頻度が通常の数十倍〜数百倍にもなるために、これに対する対処も必要になる。そのDMFBが移動して中国地方支部の管轄外に出してしまうと、他の小支部に頼るしかない。その時に戦力がないなどという事態にならないためにも、派遣された者を呼び戻すことはしなかった。

当然ファントムと戦う際の戦力そのものは落ちる。だが、元々参加させる部隊を多めに見積もっていたこともあり、九能はこれに関しては特に気にしている様子はなかった。むしろ主戦力のいない部隊があることは始めから予想していたのかもしれない。というか、支部の副部長なのだから把握していただろうが。

さて、俺たち第1特殊遊隊、通称 部隊は倉庫の北側に布陣している。南北で若干の標高差があるため、倉庫を見降ろす形だ。ここから見ればわかるが、あれはもう倉庫などではなく、ただ壁が密集しているだけのようには見えぬ。俺だけでなく、他の皆もそう思っているはずだ。

そして、現在前に出てきているのは、九能と咲、魅戈さん、索敵用に深夜、そして俺の5人だ。深夜（と唯利亚）の索敵能力を使いものにならなくなった、あの原因不明の現象は、ファントムが迷宮に囚われてから消えているらしい。どうやらファントムの細工と見て間違いないようだ。

そして、未永栖さんや未来小、久宮さんは包囲陣の外で各々武器の準備や点検を行っている。今回は未永栖さんも武器を使うつもりらしい。あの人はいつも戦闘スタイルを変えてくるからな………で、この場にいない他の二人、一方の天代は中国地方支部にいてもらっている。あいつはまだ戦闘はできないし、疵術師としてまだ2ヶ月も経っていない天代に一晚中起きている、というのは酷な話だ。必要なら起きてもらおうのだが、今回は必要でもない。一応唯利亚の監視も兼ねてもらっているが、今頃は寝てしまっているころだろう。

そして、もう一方の尊何さんは他の部隊の指揮に回っている。任せると言われた以上、この部隊が作戦の筆頭になる必要がある。その一環として尊何さんが他の部隊の指揮を執っているわけだが、実際は、尊何さん曰く、ただ立っているだけ、らしい。確かに自分の信頼する指揮官でもない人間に指示されるのは、あまり気分のいいものではないだろう。

特に考えることもないのに考え事をしていた俺は、それにも飽きて九能と咲の傍へ寄った。

「咲、今どれぐらい？」

「……7時間経とうとしてます。あと、13時間……ですね」

「そう、ん、奈都海？どうしたの？」

接近に気付いた二人は、会話を打ち切って俺のほうへと向いた。俺は特に用事があったわけではないので、手を軽く上げてそれを示してから九能の横に並んだ。

『九能』

「なに？」

俺が喋りかける前に、九能はその雰囲気を察知して俺のほうを見ていた。読唇術に見ることが必要とはいえ、これじゃ呼びかける意味がないな。……どうでもいいが。

『もう7時間経つって言うってたな？』

「ええ、咲がね。それがどうかした？」

『もうそろそろ天代も起きてくる頃じゃないか？』

「そうねー……もう朝だけど、でも、まだ寝てるでしょ。私たちが出てきたのが3時間前だし、それから寝てたとしても3時間だけじゃ天代には足りないわよ」

時刻は7時すぎ。空には厚い雲がかかっているが、それでももう

朝の明るさは木々に遮られたここにも届いている。だから天代も起きてくるかと思っただが………：そういえばまだ出てきてから3時間しか経っていなかった。俺や九能は先行してここに向かったのだが、他の部隊が辿りつき、陣を敷き終わろうというところで空は白み始めていた。

どうも浅慮だな。眠くて頭がぼけてるんだらうか。

「で、なんでそんなこと訊くの？」

『……いや、なんとなく。特に意味はない』

そう言うと、九能は「ふうん」とだけ言ってまた視線をファントムの閉じ込められている倉庫に戻した。

天代には、起きたら連絡するようにと言っただけはおいたのだが、わざわざこんな質問をするのはいささか不審だったか？まあ、別に疑うようなものでもないので、九能もそれ以上突っ込んでほなかつた。

しかし、この山奥の静けさのせいで忘れそうになるが、今はある意味ファントムと相對していると同じ状況なのだ。だが、それを忘れそうになってしまう。風によって優しくこすれ合う木の葉の音や時々聞こえてくる小鳥の囀りが、どうも気を安らげるといふか。普段なら別に構わないどころか心地良いのならいつまでもいたいほどだが、気を引き締めなければいけないこの状況でここまでリラックスするのはかなり危険だ。

……やばいな、本格的に眠いのかもしれん。

と、心の中で「寝るなー！」と自分自身を必死で叱咤していると、

「まずいわね……………」

と九能が呟いた。その表情が微妙に歪んでいたため、何かが起こ

るのかと身構えたが、九能自身は動こうとはしない。周囲を見渡すように首を巡らせるだけだ。

「 准将」

そうしていると、咲が九能の先ほどの発言に同意するように九能に話しかけた。

「咲も、わかった？」

「はい……、私が来た時は天代に抱えられて空からだだったので、気付かなかったのかもしれない。……正直今も危ないです」

「咲でも、か……。奈都海」

俺は驚いた。いきなり二人だけの会話だと思って、外野から傍観していたところで呼ばれば驚いても無理はないはずだ。

とりあえず驚いたことは、隠せたかどうかは自身はないが、隠したことにして九能のほうを見た。

「奈都海、どこがおかしいところはない？」

『……いや、特には』

「……やけにリラックスしてる、とか 本当じゃない？」

『……』

まさか言いあてられるとは思っていなかったがために無言で返した俺に、九能は「やっぱりね……」と呟き、

「……別に、奈都海は悪くないわ。安心して。いえ、安心できないわね。この状況は」

一体どういう状況なのか、それを知らせてほしいんだが。それを九能に言つと、九能は倉庫を見ながら答えた。

「今、あの倉庫を中心としたこの一帯に魔術がかかっている。しかも、結構な威力で作用してくるわ」

『魔術？ファントムのか？』

「ええ、多分ね」

俺のほうへと向き直った九能は頷く。

ちなみに、ファントムも含めたDMFBが自らの魔力を消費して行使する異能のことも便宜的に魔術と呼んでいる。DMFBは喉脳術性神経を持たないため、厳密には異なるのだが。

『で、その魔術と俺の気が緩んでいるのと何か関係がある、と？』

さっきまでの九能の口ぶりだと、そういうことになるんだが、どこがどう関係しているのかわからん。だが、答えは案外簡単なものだった。

「ええ、あるわ。なにせここら一帯の魔術は緊張感をなくす、という効果を持っているのだから。おそらく他の部隊を見てもそうでしょうね。緊張感のある表情をしている者はそうはいないはずよ」

若干軍人としての口調になりながら九能は話した。それだけ危機

感を抱いているということなのだろう。

しかし、となると他にも俺のようになっていく癖術師がいるということになる。それはかなり危険なはずだ。もし時間に比例して効果が上乘せされていくのだとしたら、あと13時間でどれだけの戦意、士気がなくなってしまうのか、そのままファントムと戦闘に入ればどうなるのかなど火を見るより明らかだ。

おそらく九能も同様の危惧を感じている。それに対してどうするのか、と思索しているはずの九能は、唐突に後ろを振り返った。その直後に、

「ただ」

と背後から声が聞こえた。聞き慣れた声なので俺も落ち着いて振り返ると、

「深夜……あなたも気付いた？」

「……ええ、やっぱりそうなのですか？ 私一人では自身がなかったのでもう訊きに来たわけですけど」

九能の質問に答えたのは深夜だ。今まで俺たちの近くにいたはずだが一体どこにいたんだろうか。視界にすら入ってこなかったよう
な。

などと思っているのは俺だけのようで、九能も咲も、深夜が同じ異変に気付いているということのみ注目していた。

「それで？ どうなの？」

「はい、さっき言おうとしたことなんですけど、構成は簡単なようです。ファントムも元々長居する予定ではなかったんでしょ、

単なる妨害目的で作られたみたいですね。この程度の小細工なら咲ちゃんも魔術で容易に干渉できますね」

「咲、聞いた？ できる？」

どうやら咲の領域支配魔術でフロントムの（深夜曰く）小細工を打ち消すつもりらしい。魔力のうんたらかなんな現象を応用したものらしいが、とりあえず魔術と魔術は互いに干渉しあうものだと思うっておけばいいだろう。どちらも魔力で発動、構成されるということに変わりはない。

「では、下がっててください」

そして咲は九能の言葉に頷くと、そう言っただけで何事か考え始めた。どの魔術を使うか迷っているのだろうか。別に消すことさえできればなんでもいいとは思っているのだが、まあこれも咲のこだわりかもしれない。ただし、どこにこだわっているかは俺にはわからない。

さて、俺も咲の魔術に巻き込まれたくないから離れておこうか。

「そつだ、奈都海」

俺が咲の言うとおりに少し離れたところに来ると、唐突に九能が話しかけてきた。

「奈都海、さっきの魔術云々は抜きにして、実際眠いでしょ？ 少しぐらいなら寝てきても構わないわよ？ 魅戈も寝てるし」

視線を追うと、本当に魅戈さんが地面に敷いたシートの上で丸くなっていて。魅戈さんがいるにしてはやけに静かだな、と思っただがこれが原因か。

しかし、それはかなり魅力的な提案だが、（魅戈さんを除く）他の皆が眠らずにいるというのに俺一人が寝るといふのはいささか良心が痛むというものだ。が、しかし、眠いのもまた事実。むしろここで寝ておかないといざという時に、眠くてやられてしまいました、では死ぬに死ねない。皆にも迷惑をかけるだろう。などと俺が優柔不断にむむむと悩んでいると、

「もう、悩むぐらいなら寝ちゃいなさい。場所はないけど、木に寄りかかってでも構わないでしょ。ほら」

そう言いながら、九能は俺を押して近くの巨木へと向かわせた。そして、無理やり座らせられた。

「これでいい？あ、それと、何かあったら叩き起こしてあげるからその辺は安心していいからね？」

全く安心できない有難迷惑どうもありがとう、と心の中だけで呟いていると、同時にふと疑問が浮かんできた。

『九能、お前は寝なくていいのか？』

「私？大丈夫よ、こういうのは慣れてるから」

俺の懸念も涼しい顔で吹き飛ばす九能。やはり基本的なスペックが違いすぎるのか……

「ほら、私の心配はもういいから、ね？時間が空けば私も仮眠ぐらいは取るもの、安心して……じゃ、おやすみ」

最後になぜか額に口づけして微笑む九能は、俺を背にして遠ざか

って行った。

その後すぐに、俺は襲い来るまどろみに身を預けて眠りに入った。

「　　こんな時にもいちゃつくんですね、准将は」

私が奈都海を寝かしつけてから戻ると、深夜が嫌味ったらしくそう言った。

「キスのこと？それならただのスキンシップじゃない。なんなら深夜にもしてあげるけど？」

深夜の嫌味に私が仕返し気味に返すと、深夜は首を振って拒否を示し、

「結構です。初めてがまだですので」

「そうなの？……ていうか、そういうば真実がいたわね。まだしてなかったの？」

私は金曜日のことを思い出してそう訊いてみた。月曜日の昼も一

緒にいたみたいだし、そういう関係だと言ってもいいだろう。
すると、深夜は案の定顔を赤くして言った。

「別に……………まだそこまでの関係じゃありませんし、たとえばそう
なったとしても准将みたいに公然といちやつくなんてしませんよ」

「あら、そう？　　ま、真実の性格じゃ確かにしないでしょうけ
ど」

私が納得したように頷くと、深夜が今度は訊ねてきた。

「准将こそ、奈都海さんと付き合うまでそんなことするような性格
には見えなかったんですけどね。それに、始めは奈都海さんにも結
構きつく当たってましたし、なんですか、この変わりよう」

「えーっと……………それはほら、ツンデレってやつよ。で、今はデレ期
なのよ」

「10年前に死語認定された単語が使われてもわかりません。具体
的にはどういうことぞ？」

「10年前につて、知ってんじゃないのよ……………」

いきなり立場が逆転したのを適当な言葉で誤魔化し、会話を打ち
切る。思った通り、深夜はそれ以上の追求はせず、「では、仮眠を
取ってきますね」と言って魅戈の寝ているシーートのほうへ歩いて行
った。

……………

「さて、と」

私は今後のプランでも立てておくかな。

ボクはあれからずっと医務室の白い天井を眺め続けていた。

あれから、というのは咲ちゃんがファントムに関する会議に呼び出されてこの医務室を出て行ってから、ということ。それからボクは、考えるようなこともなく、延々と天井をぼーっと見つめ続けていた。

何もすることがなかったというのもあるけど、どっちかといえば、他に何かすることが億劫だったというほうが大きい。まだ、下半身を動かそうとすると違和感があるし、動くこと自体が面倒になってくる。これだけ大きな怪我をしたらこんな風になるのかもしれない。

とはいえ、怪我人であるボクは寝るといふ選択肢を取ることもできなわけだ。というか、怪我人なら、そうするのがベストだろう。今のボクにはそれしかできないし。

それでも起きていたのには理由がある。……………まあ、眠くなかったというのにもあるにはあるけど。

とにかく、ボクが起きていたのは、ある人物、と隠す必要もなく中国地方支部に残った天代くんを待っているからだ。でもそれまで時間はある。そう思っ、備え付けのテレビのリモコンを取ろうとした時だった。

寝ている病人・怪我人に配慮して全く音を立てない仕様の医務室の扉が、スーっというボクの頭の中で補完された擬音とともに開かれた。

もしかしてもう来たのかな？と不思議に、そして意外に思っているボクの目の前に現れたのは

「んしょ……、もう、この扉、案外重いんですね。開けるのに苦労しますわ」

現れたのは、三頭身にデフォルメされた天使。

金系みたいな長い金髪、その頭上には光り輝く輪っか、背には純白の翼、と典型的なエンジェルスタイルだ。始めに言っておくと、つまるところシャトーやノックと同じファントムだ。

もちろん、この娘　ノエルも本当はこんな姿じゃない。シャトーたちと同じように普通の頭身に帰ることができる……はずだ。シャトーやノックは見たことがあるけど、ノエルだけは唯一見たことがないから断言はできない。

「ノエル、久しぶりだね！今までどこにいたの？」

そして、ボクがノエルを見るのは久しぶりだ。というか、ノエルが、ボクを含めたこの支部の誰かの目の前に現れること自体が久しぶりなことじゃないだろうか。

シャトーやノックは比較的よく見るし、ボクたちと会話すること

も多い。支部の中を歩いていると、飛んでいるのを見ることもある。でも、ノエルの目撃例はかなり少ない。ここの疵術師のみんなからは、実はほとんどここにはいないのではないか、とも言われている。それもシャトーたちの証言から否定されたわけだけだ。

ちなみに、顔はシャトーやノックと同じように欧風の顔立ちをしている。デフォルメされていてわかりにくいけど、少なくともモンゴロイドの顔の作りじゃない。

って、もう紹介はこれぐらいでいいよね？ボクは一刻も早くノエルを愛でたいから！

「ノエルー！」

「わふっ！？」

愚かにも近くにパタパタと飛んできたノエルを、ボクの腕の射程圏内に入ってきた瞬間に抱きしめた。そして両腕で捕縛したまま頬ずりする。

「ノエル、かわいいー！やわいー！」

「ち、ちよつと、ユリアさん？きゃっ、くすぐったいですわっ……ひゃっ！」

笑いながら拒絶するノエルに、なおもボクは頬ずりを敢行する。こうしてノエルを見るのも、ノエルを愛でるのも久しぶりで、ボクはテンションがおかしい方向へ上がってしまった。だって、もうかわいしい、やわらかいし、いつもは愛でられる側だからこんなことするのも愛燕相手にしかできないし。愛燕も十分かわいいけどね？

「も、もういいでしょうっ？そろそろ……」

「むー、ケチー……」

さすがにずっと頬ずりされるつもりはないのか、やがてノエルが無理やりボクから離れていく。ボクは惜しみながらも、ベッドから動くことができないためにそれをもう一度捕まえることはできない。ノエルは、ボクの手が届かないギリギリの距離を保ちながら話した。

「ケチ、じゃありません。久しぶりに会って早々こんなことをされるなんて思いませんでしたわ」

「だって………久しぶりなんだもん」

頬を膨らませて不満を表すノエルに、ボクが拗ねたように言うと、ノエルははあく、と長い溜息をついた。

「そんな場合ではないのでしょうか？今はかのファントムとの戦いの最中のはずです。戦場に出ていないとはいえ、そのような振る舞いは褒められたものではありませんわ」

説教をされてしまった。

しかし、ボクだって黙っているわけではない。そう、何か言わないと。

「……暇なんだからしょうがないじゃん」

「自業自得です」

「うっ……」

で、ボクの小学生並みの言い訳は、当然間髪いれずに反撃されて玉碎される。

「ユリアさん？あなたは独断で、かつ単独でファントムと戦ったそうですね？まあ、その勇氣自体は、個人的には認めますわ。誰もができることではありません。ですが、勇敢な行為と無謀な行為の違い、というものも弁えておいてください。今回のユリアさんの行動は明らかに無謀なものです。勇敢な行為というものは果敢に強敵に挑むというだけではないのですよ？あくまでも、そこにはなにかしらの勝算がなければ成り立ちません。勇敢な行為は勝てば勇敢だと称賛されますが、負ければ無謀な行為と捉えられてしまいます。言うなれば、勝てば官軍負ければ賊軍、ということですよわね。しかし、無謀な行為というものは、勝っても負けても無謀な行為のままなのです。負けて当然、勝ったとするならそれはただの奇跡ですわ。本当に追い詰められた状況で何も頼るものがない場合は、奇跡に縋るのもよいでしょう。しかし、今回は違いますわね？ともに戦ってくれる仲間はいたはずですよ。もつと十分に策を練ることもできたはずですよ。にもかかわらずあなたは無謀にも単身でファントムに立ち向かっていった。そんなバカな話がありますか？……………いいですか？大体ですよ、ユリアさんは

……………なんだろう、この光景。ちっちゃい天使に怒られて頂垂れているボク、というこの構図は。それにこのお説教、かなり面倒くさいんだけど。まあ、言ってることは確かに正しいし、ボク自身無謀なことをしたっていうのも十分わかっているつもりだし、だからこそこういうことはキチンと聞いておかないと駄目なんだろうけど、でも説教というものは得てして面倒なものであつて当然聞いてて気分がいいものでもない。かといって、落ち度はこっちにあるわけだか

ら反論するわけにもいかない。ただ、もう一度言おう、面倒くさい。

「ユリアさん？聞いてますか？」

「はいっ、聞いてます！」

「……………ならいいですわ。それで」

それからしばらく、ボクの耳はノエルの説教に晒され続けた。

「……………わかりました？」

「はいっ、よ……くわかりましたっ」

ノエルのありがたいお説教（もちろん皮肉）がようやく終わった。時計を見ると、30分ほどしか経っていないけど、ボクの体感時間では3時間は超えていた。長かったよ、ほんとに……
と、息をつく間もなく、ボクは次なる説教が始まらないよう話題を変えた。

「それで、何か用だったの？わざわざここまで来るなんて」

本命の用事をまだ聞いていない。まさか説教しに来た、なんてこ

とはないはず。もしそうならまた無理にでも抱きしめてより一層強く頼ずりしてやる。

「ユリアさんにお説教をしに来たんですわ。それ以外に何が？」

「……………」

ボクは無言でベッドから降りようとする。それを見たノエルは、何か危機感を抱いたのか、

「冗談ですわ。ちゃんと本題は別にあります」

と慌てて言い直した。また同じ目に遭うと思ったんだろうか。正解なんだけど。でもボクは、ノエルのあの感触をもう一度確かめたい。あの説教さえなければかわいいことに変わりはないんだから。

「別に恥ずかしがらなくてもいいんだよー？照れ隠しなんてらしくないんだから」

ノエルが後退しながら態度で拒否を示すも、ボクは強引に近づこうとする。だってその仕草もいちいちかわいいんだから、ここで愛でなくていつ愛でるのかってことだよ。

足が上手く動かせないので、ボクはベッドに腰掛けながらノエルに近づいていく。しかし

「ユリアさん、そろそろふざけるのも終わりにしましょうっ?」

周囲の空気が凍りついた。

いや、空気が、というのもおかしい。あえて言うなら空気中に漂う魔力が凍りついた。

ノエルの発するファントム独特の、理性と知性と同時に殺気と狂気をも孕んだ魔力がボクの肌を絶えず突き刺すように刺激し、そんな不純な魔力の充満するこの空間では体内の魔力の交換が上手くできず息苦しくなってきた。

これはファントムに限らないDMFBが臨戦態勢に入った時に起こる現象だ。特にファントムだとその規模は大きくなって、ある程度の干渉力のある魔力を使わないと魔術そのものが発動できなくなる。干渉力というのは、魔力の密度と純度で大体は決まるのだけど、ファントムが魔術で使う魔力は基本的に純粋なので、この現象でファントムの戦闘能力が阻害されることはない。

つまりらない講釈はここまでにしておこう。
ボクは微動だにすることなくノエルを見つめる。……いや、動きたくても動けなかった。

ノエルはいつも通り背の翼を羽ばたかせて飛んでいる。その姿そのものには、さつきから変化はない。

しかし、そこから感じられるのは重力以上の圧力。魔力の重さでも言えばいいのかもしれない。それがボクの両肩に押し掛かり、ボクの身体をベッドの上に縫い付けていた。

「ノクターンから話は聞きましたわ。ファントムの話　女王と、それを討つ王女のお話ですわね？」

動けずにノエルを凝視するしかないボクに、ノエルはあくまでに

こやかに話しかけてくる。でもそこにはさっきまでのような冗談を挟む余地はない。

「かの聖女の名を冠する女王に、百蟲を率いる王女……。確か。確かに面白い組み合わせですけど、その蛇使いは間違っていますわね。やはり蛇使いは蛇しか使えないということかしら？それとも、他にも何か上手く使えるものがありました？」

ボクは、ノエルの言葉が独り言なのか、あるいはボクへの問いかけなのか判断に困った。ボクが返答できずに黙っていると、ノエルはさらに笑みを深くして動けないボクに近づきながら喋り続ける。

「ふふ……。あなたならお分かりでしょう？彼の行為の意味、そしてその行為の虚しさも。だからあなたは“わざわざ”負けてきたのでしょうか？」

ボクの背後でいくつかの医療器具が、バチツ、という火花の散る音を鳴らしてショートした。ノエルの発する魔力にやられたのだろう。魔力は時としてこうした物理的な攻撃力を持つこともある。普通は魔術によつてでしか物理的な威力は持ち得ないのだけど、ファントムという規格外の存在だからこそできる芸当だ。

それでもボクは、後ろを振り向くことなんてできはしない。まるでゴーゴンに睨まれて石化してしまったように、ノエルに見つめられたボクはそのノエルの瞳を見つめ返すことしかできない。ノエルの言葉も耳に入ってくるだけで頭の中でも音声情報としか処理されない。理解するところには、ノエルも次の言葉に移っていた。

「一つ申し上げます。私は、あなたに戦う意思があるのなら助力すると言いました。それはノクターンから聞いているはずですが。しかし今、あなたにはその力がない。とても戦える状態ではありません。

せん。それは誰が見ても明らか。　　ですが、助力するのは、あなたに戦う意思があるかどうか、でしか判断はいたしませんわ。戦う能力があるかどうかは関係ありません。もし、ユリアさんにその意思があるというのなら、私は今すぐ戦場に出向いて戦ってきましょう。　　ご安心ください。ここからでもわかる、あの程度の力のファントムなら数分で片が付きますわ。……………どうなさいます？」

突然のノエルからの提案。確かに、ファントムの中でも最高峰の力を持つと言われるノエルならできるかもしれない。数分で片付くというのも嘘ではないはずだ。それでも

「…………だ、駄目、だよ。それだけは…………」

ボクはようやく、それだけを絞り出した。

ノエルは確かにボクたちの敵ではない。ノエルは他のDMFBとは違って人間を殺す対象とは見ていない。でもそれは、人間を殺さないこととイコールではない。

なぜなら、ノエルは人間のことを、わざわざ自分の手で殺すほどの価値を持った存在だとは思っていないだけだからだ。いうなれば、ボクたち人間が地面を這う蟻を見るようなもの。たとえ視界に入っただとしても大抵記憶には残らないし、視界に入らないこと自体も多い。加えて、蟻を踏まないように、殺さないように気を付けて歩く人間なんてほとんどいない。むしろ、気まぐれに踏みつぶして遊ぶ人だっている。

ノエルもそれと同じ。もしノエルが戦うことになれば、人間に危害が及ばないように、なんて考えることはない。勝つために必要なら、街一つを消しさることだってあるかもしれない。それによって何人の人間が死ぬかなんて考える必要はない。だって、ノエルにとって人間は害にも益にもならないし、何よりそんなことを気にしな

ければならないほど人間が自分にとって意味のある存在だとは思っていないからだ。

これは、かつてファントム同士の戦いによってある一つの都市が消えてしまったことからわかる。ノエル自身も、基本的にはフレンドリーな態度で接してくれるけど、ボクたちだって「少し変わったところがある」から興味があるだけで、ボクたちが死なないように配慮することだってないはずだ。

しかし、ボクの拒絶にも関わらず、ノエルは微笑んだまま首を振ってボクの懸念を否定した。

「考えていることはわかりますわ。私が戦うことによってどれだけの被害が出るか、が心配なのでしょう？ですが、今私は“あなた方のために”ファントムと戦うと申しているのですよ？その時点でその心配は無用だとは思いませんか？」

ノエルはボクの向かいのベッドに座って、なおも話し続ける。

「一応、私もこの街は気に入っておりますもの。わざわざ潰すことはしませんわ。……それでも？」

ボクは、今までのノエルに関する解釈を改めざるを得ない、そのノエルの発言に困惑していた。困惑して、黙り込むしかなかった。しかし、ノエルはそのボクの沈黙を拒否と取ったのか、突然パタパタと翼を忙しく羽ばたかせながら医務室の入り口のほうへ飛んで行った。

扉の前で、ノエルはまた手で開けようとして思いとどまり、結局魔術を使って扉を開けた。

「そうですね、ユリアさん。最後に一言、よろしいかしら？」

出ていく直前、ノエルはこちらに振り向いてそう言った。ボクには黙って続きを聞くしか選択肢はない。

「大したことではないんですけど　この世界に、女王は一人ではありませんのよ？」

最後に、ふふっ、と小さく笑って、ノエルは医務室を出て行った。

その後、ボクの待ち人である天代くんが入れ違いに入ってきて、ボクの看病をしてくれるのを見て、なんとか気持ちを落ち着かせることができた。

その日の夜。

一軍の中のある魔術師が、断末魔もなく頭を砕かれて絶命した。その場にいる誰もが、突然のことに反応も対応もできない。

頭部を失って音もなく崩れ落ちる同僚の姿を見つめたまま

彼らもまた、高速で襲い来る大蛇に身体を貫かれていった。

第1章 誘惑の狂姫 #13 (後書き)

本文にも書きましたが、ノエルは典型的な天使の姿を想像してもらえばいいかと。

ちなみに、シャトーは妖精、ノクターンは悪魔です。

ところでこの子たちの存在意義は、なんなのだろうか……

いつどんな時に使うか特に決めずに勢いで出したキャラなので……
……もちろん疵術師含めた人間たちには考えてあるんですが。それ
れにちよこちよこ絡むぐらいでいいかもしれませぬね（投げやり）

第1章 誘惑の狂姫 #14

まさか、もうバレてるなんて思わなかったなあ……

……はあ？あんだ、まさか、あれで隠し通せるとでも思ってたわけ？

そりゃあね、兄さんなんかには無理だろうけどさ、いつも一緒にいるんだから。……でも、さあ……

あー……あれ？……ありや、しょうがないでしょ。中身が何か、なんてのは特定されてないだろうけど、中に何かあるってのはわかるでしょうよ。あれを騙すにはさすがにチャチすぎたのね、仕掛けが。

別にいいんだけどさ、バレても。ただ、自信なくすよね、こつこつのこと。

いいんじゃないの？下手に自信持って自滅されるよりかマシだしね。

………何気に酷いね、それ。

あんたのこと心配して言ってやってんじゃない。感謝しなさい。

はいはい。………でさ、話は変わるんだけど。

ん？何さ、唐突に。

ボクたちの立場が逆だったらさ、どうする？この状況で。

んー……？逆に訊きたいね、あんたならどうする？

ボクは………わかんない。………ま、立場の交換なんて、いずれしなきゃいけないだろうけど。

そうだねえ。あいつの言葉、キチンと修正してやらないと
ならないし。

うん、………そうだね。………なにせ、この世界には

俺が起きた時には、事態は既に騒然といった様相を呈していた。

怒号や悲鳴があちこちから聞こえてくる。遠くからは、断末魔めいた声までかすかに耳に届いた。

「とりあえず、状況の確認をしますね」

俺を、九能の指示通りかつ文字通りに叩き起こした深夜は、俺の覚醒を確認した後、隣を歩きつつ喋り始めた。

「5分前の一斉報告によれば、既に過半の部隊が損害を受けています。ただ、ターゲットが分散しているのもあるのですが、今のところはその被害も大きくはありません」

走らずに歩いているのは、深夜に配慮してのことだ。多くの魔術師に見られる、魔力による身体能力の向上といったものが特に見られない深夜は、一般人から見ても並み以下の運動能力しかない。その深夜に、山奥の不安定な地形を走らせるわけにはいかない。また、状況の把握が必要な俺にとって、ここで歩くということは、時間の無駄というわけでもない。

「しかし問題は、ファントムがターゲットを絞り込んだ時です。現在、ファントムに集中攻撃を受けて耐えられそうな部隊は、この場において我が部隊を含めて3部隊。それでも被害ゼロ、というわけにはいきません」

この騒乱が、ファントムによるものだと説明した上で、深夜はそう言った。

俺は懐からメモ帳を取り出し、質問を書いてから破って深夜に手渡した。内容は、“ファントムの攻撃手段は？”というもの。

「あの倉庫から無数の蛇が襲いかかってきてます。おそらく、奈都

海さんと唯利亜さんの報告にあったように、腕の蛇を伸ばしているのでしょうか。……しかし、その威力が半端ではありません。本当に半端な魔術では簡単に破られてしまいます」

ファントムに限らないDMFBの特性だ。DMFBは、その肉体を構成しているものが魔力そのものであるため、ランクにもよるが生半可な魔術では当たっても干渉力が足りず、何の効果も発揮しないことがある。

しかし、今回ここに招集されたのは、生半可な魔術以上の魔術を使う者ばかりだ。被害がまだ“大きくない”というレベルにまで抑えられているのは、それが要因だろう。

「もちろん、半端ではない魔術で応戦しているわけですが、これがいつまでも続くとなればジリ貧です。何か打開策がなければ……」

そう言われて、俺はしばらく思索する。今まで聞いた情報、把握しうる状況、昨日の出来事も含めて、それらを分析して今俺のできることは

「……奈都海さん？何を

」

俺はまたメモ帳の1ページを破り深夜に渡して、彼女の声も聞かぬまま踵を返してその場を走り去った。

私は、自分にできる唯一とも言える遠距離攻撃手段である焰武（えんぶ）未来小命名。要は物理的な攻撃力を有する魔力の塊を飛ばしているだけで、実際のところ私の場合見た目が特殊なだけであって基本的には魔術師であれば誰でも可能）を次々に放ちながら襲い来る大蛇の頭を吹き飛ばしていた。

しかし、それによって守れるのは私の周辺程度。

今回は逃走経路を断つためにこの包囲陣を敷いた。空に逃げられてもいいよう、対空攻撃能力を持つ疵術師の部隊も組み込んである。しかし、それは結果として失敗だったということだ。

ファントムは、逃走という手段を取らなかった。姿は見せていないが、こうして攻撃を加えてくる以上、あくまで戦う意思があるということだ。つまりこれは、間違いなくファントムが活動期間に入っているということ。

これだけの力を持つということは、唯利亞の報告からもなかった。唯利亞との戦闘の際、手加減していた可能性も捨てきれないが、そもそも手加減する理由が見当たらないし、何より唯利亞は瀕死の重傷をファントム自身に負わされていたのだ。最初から殺すつもりなら、当然最初から本気でかかるはずだ。

そうなれば、今のファントムは潜伏期間を脱して活動期間に入っているということになる。潜伏期間の状態でこんなことができるなら活動期間になればなす術はない。状況から言ってありえないことだけだ。

相手が活動期間中のファントムということもあって、今の状態の私では太刀打ちできない。一对一の白兵戦なら、なんとか互角に近い戦いができそうだけど、それも今は無理だ。吹き飛ばしても吹き飛ばしても次々と湧いて出てくる蛇に、近づかせてくれるような隙はない。もつとも、隙があっても私がここから移動するわけにはいかないのが現状だ。

「……つく、咲！もつと壁、広げられないの!？」

私たちを守るために展開されている壁。それは咲の咄嗟の判断によつて張られた、蛇の侵入を阻む障害。でもそれは、咄嗟だったが故に限られた範囲しか囲むことはできず、隣に展開していた防御能力に乏しい対空戦用の部隊の防衛は、今や、偶然その恩恵を受けられなかった私の焰武によつてでしか為されていなかった。咲の能力の特性上、私と彼らが咲の壁の中に入ることもできない。

だから、私がここから移動することは許されない。それを可能にするためには、咲の展開した壁をここまで広げなければいけない。私はそれを咲に要望したが、

「ダメ、です……!これ以上広げたら、薄くなって破られます……!」

予想通りの否定。それを聞いた魅戈も、咲の後ろから叫んだ。

「咲ちゃん、私も、戦うから……!」

「無理です!魅戈さんが戦うと味方にも被害が出ます、それだけは私の魔術でも防げません!」

「で、でも……」

魅戈は食い下がろうとするが、咲の言うことは事実。魅戈のできる数少ない魔術のうち、この目の前の敵に対抗しうる魔術は、広範囲かつ無差別なものしかない。味方の被害を鑑みなければ有効だろうけど、今はそんなことができる状況ではない。これは魅戈がかつての部隊で忌まれていた理由の一つでもある。

しかし、だからといって、私自身はいそいそですかと引き下がるわけにはいかない。私はさらに、咲に向かって大声で訊ねた。

「なら、どれぐらいあれば、足りる！？……もっと、広い障壁を張り直すには！？」

咲はすぐには答えない。ややあって、答えが返ってきた。

「……………30秒、あれば！」

「30秒ね……………よしっ！！」

私は特別大きな魔力の塊を放っていくつかの蛇をまとめて吹っ飛ばした後、咲にできる限り駆け寄った。私の守るべき対空戦部隊もある程度の防御力はあるが、攻撃が超長距離用に特化しているために中途半端な距離だと威力を発揮しにくいのだ。それでも、今は離れざるをえない。一応短時間なら防げそうだけど……………、やはり頑張ってもらっしかない。

「咲、30秒、私が稼ぐわ。その間にできる限り広範囲に、できれば空間断裂に近いものを」

「……………わかりました。では、3カウントの後、この壁を消します。いいですか？」

「OK。じゃ、時間もないから早速お願い」

「はい。……………では、3」

咲の小さな言葉は、間に挟んだ壁のせいで私の耳には届かない。

「2」

ならなぜ咲の言うことがわかるのかと言えば、それはもちろん読唇術のおかげだ。

2回目のカウントをしたのを見て、私は身構える。目の前で、壁に遮られて暴れる大蛇を睨みながら。

そして

「1 ……デリート」

咲の短い命令で、今まで咲と魅戈とその周辺を守っていた恩恵は消え失せ、無数の大蛇が喜び勇んでその口を目いっぱい開いて襲いかかってきた。

私はそれを

「っはああああああああああ！！！！」

同時に放った複数の焰武で数十をまとめて吹き飛ばす。その余波も消えない内に、私は十八番である巨斧を手に握り、咲と対空戦用部隊を同時に守れるポジションへと向かう。

今まで二つに分散していたものが一つになって私に向かってくるのだから、苦戦するのは当然。それに私は元々、対複数戦闘よりも

一対一の戦いに向いた戦い方をする。つまり、一個の敵に集中し、それに全力を注ぐ。多数の敵に力を分散してぶつける、という器用なことは、苦手とは言わないけど決して得意とも言えない。

今私に向かつてくる大蛇の数は、幸いにもそんな私の処理能力でなんとか対処できる数だった。

私に咬みつかんとする蛇の頭を避けてその身体を中途でぶった切り、私の頭を砕かんとして迫る蛇の頭を逆に巨斧で砕く。私を無視して後方の咲たちに向かおうとする蛇を、焰武で何とか撃ち落とす。私は、今持てる最大限の力を駆使して後ろを守る。

咲は30秒あれば、と言った。しかし咲ほどの疵術師なら、10秒もあれば咲と対空戦用部隊を困う程度のものはできるはずだ。それなのに、あえて30秒をかける理由。それは、咲はこの戦場にいる仲間すべてを守り得る魔術を発動させようとしている、ということを示している。

だから私はそれを死守する。咲の魔術さえ発動できれば、体勢を立て直しと反撃の準備は可能だ。その程度ならできる部隊を集めてきたのだから。

しかし、こういう状況において全力を尽くしても、それが必ずしも報われるわけではない。

「っ！しまっ……っ！」

私に迫撃する蛇に気を取られている隙に、いくつかの撃ち漏らしたものが私をスルーして後方へと向かった。今、咲は大掛かりな魔術の準備で動くこともできず他の魔術を使うこともできない。魅戈も抗する術はなく立ち尽くすだけ。その咲と魅戈を守るように周囲を囲む疵術師も、これだけの近距離で使える魔術を満足に持つておらず、使えるとしても蛇を砕くには威力の足りないものしかなかった。

10以上の蛇が、彼らに迫る。私にはもう為す術はない。焰武を

飛ばすにしても万が一外して咲に当ててもすれば本末転倒。私は、その蛇が彼らの身体を砕くのを見届けるしかなかった。

なかった、はずだった。

ドドドドドーン！

という重く鈍い音とともに、咲たちを襲う蛇はすべて頭や身体を吹き飛ばされていた。

私はその音のした方向へと視線を巡らす。そこには、

「ひゅうつ、全中！ 久々にぶっ放すと気持ちいい〜」

両手にハンドガンを持って構える未来小あすかが立っていた。その手に握る銃口からは硝煙が立っているのがわかる。二挺拳銃は未来小の十八番。未来小は今日もそのスタイルで戦うつもりのようにだ。

未来小は、私に見られていることに気付くと笑顔を向けてきた。

未来小の銃を持つ姿を見るのは私も久々だったために、場違いにも私も頬を緩ませる。

が、未来小はその笑顔もすぐに焦燥に変えて、

「お姉ちゃん、後ろ！」

と叫んだ。

未来小の言葉に従って後ろを振り向けば、

「ッ!？」

そこには大蛇の大群。それが真紅の口腔を見せつけるようにして口を開いて、私に迫っていた。

既に迎撃できる距離ではない。ただでさえ対処に難儀した相手だ。油断を突いてのこの攻撃には対応できなかった。

反射で目を瞑る暇すら与えられず、その牙は私に届こうとしていく。

しかし、私は死ぬ覚悟などしない。するのは“死ぬほど痛い”目を見る覚悟。

だが、その覚悟も次の瞬間には無意味なものへと化した。

「オラオラア!!そこ退け邪魔だあ、クソヘビどもがあ!!」

そうやって私と蛇の間に割って入ってきたのは、久宮だ。彼はその身体に赤々と燃える炎を纏っている。

久宮は、自然現象の操作 特に“温度”の変化による操作を得意としている。それはもちろん、温度を溶解炉並みに上げることのできるし絶対零度という極限まで下げることまでできる。

今の久宮は、魔力そのものを燃焼させて身に纏っている状態だ。それは自分自身の管理下にある魔力であるから、当然その魔力、ひいては燃え盛る炎を操ることもできる。久宮は、その炎を使って私に迫る蛇を焼き払っていた。

「と、いうわけで、私たちも参戦しますね、准将」

そして、私の隣に並んだのは未永栖^{みえす}。その手には洋弓が握られている。見れば、焼け焦げた蛇の中には、鉄製と思しき矢の刺さったものが見て取れた。

「すみません、准将、遅くなりました。もうここは私に任せてくれても結構ですよ?」

「そつすよ。……つっても偉そうに言える立場でもないんすけど」

未永栖に続いて久宮も、身体の周囲に纏った火を消して言った。能力の使いようによっては何通りもの戦い方のできるこの二人なら、十分この蛇たちを相手にできるだろう。

私が二人の登場にわずかにではあるけれど安堵していると、未永栖の逆側に未来小が来た。

3人はそれぞれがそれぞれの得物を手に、私を囲むようにして立って私と咲を守るために戦ってくれていた。

その戦いの間にも、未来小が、参戦が遅れた理由を話してくれた。「ごめんね、お姉ちゃん。ちょっと気付くのが遅くなっちゃったからね。奈都海くんのおかげでやっと状況が掴めたぐらいだしうわ!？」

言葉の途中で未来小は突然声を上げた。

未来小が驚いたのは、敵の奇襲などではない。突如として周囲に現れた巨大な防護壁。未永栖や久宮も驚いた様子でそれを見ている。彼らは咲が何をしようとしていたのかを知らないから当然かもしれない。

しかし、後ろから歩いてきた咲を見て未来小たちも溜息を吐いた。

「御苦労さま、咲。上々の出来ね」

「ええ、これでいくらか持つかと。 皆さんも護衛、ありがとうございました」

私が労うと、咲は私だけでなく未来小たちにも軽く頭を下げて礼を言った。

「ふあ、驚いたあ……。咲、これの準備してたんだ？」

「ああ、確かに驚いた……。……が、これでなんとか立て直せるな。こっから反撃ってどこか」

未来小と久宮が納得の言葉を吐き、反撃の機を与えられたことに今度は口の端を吊り上げる。今まではまさにやられっぱなしという様相だったが、ここからは反撃に移ることができる、その喜び、戦いに際して湧き起こる興奮状態の表れだった。

しかし、そんな中、私はあることに気付いた。

「……？奈都海は？」

その疑問を、奈都海に現状を教えられたという3人に訊く。しかし、全員が首を傾げただけで答えはしなかった。

「誰か聞いてないの？奈都海が3人のところに行った後、どこに何をしに行ったか」

まさか唯利亜みたいに、単身フロントムに突っ込んだなんてあるわけないだろうし、何か魔術の仕掛けを施すにしても私に無断で行うはずがない。わざわざ私たちに隠れて行う必要もないのだから。

「……………」

と、私は一つ思いつくとともに、さらにもう一つのこと気付い

た。

「深夜もいない……………」

「…………あれ？ほんとだ。お姉ちゃん一緒じゃなかったの？」

深夜には奈都海を叩き起こして状況の説明をするようお願いしたはずなのに、その奈都海とともに姿が消えている。

まさか、二人の身に何かあった？この蛇の群れはダミーで、本命は彼ら？だとしたら、今向かうべきは奈都海の居場所。連絡すらない以上、既に何かしらに遭遇しているかもしれない。

私はそう思っただけで身体を翻し、まず深夜の向かった奈都海の寝ていたはずの木へ向かおうとした。しかし、その進軍は半分を解決された状態で出鼻を挫かれた。

「ね、深夜！？」

深夜が呑気にも歩いてこちらに向かっていた。

ほぼ全員が集まるこの光景を見た深夜は、少し目を見開いた後、常の表情に戻って私のもとへと駆け寄ってきた。少し息切れしており、辿りついてからしばらく息を整えていた。ここまでは走ってきて、到着する直前に疲れて徒歩に変更したのだろうか。深夜が山道を走れば当然かもしれない。私は深夜が息を整え終わるのを待つて声をかける。

「深夜、今までどうしてたの？奈都海起こしたら、すぐに戻れって言っただけでしょう？」

私に、深夜を責める気はない。ただ、今この状況で私の知らないことを深夜が知っているなら、教えてほしいと思っただけ。それで

も深夜は申し訳なさそうに答えた。

「はい、そうなんですが……状況報告を終えた途端に、こんなメモを渡して何処かへと去って行ってしまいました……」

深夜はそう言って服の胸ポケットからメモの切れ端らしきものを取り出し、私に差し出してきた。私は怪訝に思いながらもそれを受け取り、みんなにも聞こえるように読み上げる。

「咲に魔術を使わせるな………どういうこと？」

書かれているのはそれだけ。綺麗でもなく汚くもなく明朝体と行書体の中間みたいなこの字は、まさに奈都海の筆跡だ。

しかし、書かれているのは、さっき私が読み上げた、あの一文のみ。言いたいことはこれ以上ないほどにわかりやすい簡潔極まりない文章だが、その理由が書かれていないし、私個人が私人として知りたい奈都海についてのことは何一つ書かれていない。

思わず訊ねても、深夜は首を横に振るだけ。それ以外のみんなにわかるはずもない。しかし

「どう考えても無理な話よね、これ。咲の魔術がなければ、私たちに勝ち目がないもの」

勝ち目がない、というよりはそもそも攻勢に転じる機会そのものを作ることすら不可能だ。咲の魔術のおかげで、今こうして話し合いをすることができているわけだし、体勢の立て直しということも可能になっている。咲がいなければギリ貧のままいずれは全滅、なんて事態になることは想像に難くない。……私がいる時点で真の意味での全滅はありえないのだけだ。

とにかく、奈都海のこの忠告、いや、もっと深刻で命令かもしれ

ないけど、どちらにしたって聞ける内容じゃない。

咲と同等以上の防御能力を持つ疵術師は、この場にはいない。ここで咲が魔術を解いたら、それこそファントムの攻撃の雨に晒されるのがオチだ。

私たちだけなら守れるかもしれない。

しかし、他の部隊は？ 守れるわけがない。私たち第一特殊

遊隊の部隊員は、ほとんどが組織戦闘に向かない能力しか使えないのだから。その極め付けが魅戈であり、その中でも集団戦闘にも有用な能力を使える希少な存在が、咲だ。

他の部隊も守りながら戦えばいいのではないか、と言われそうだが、そんなことをすれば私自身も危険になる。自分自身以外の誰か何かを守りながら戦うのがどれだけ難しいかはこの場にいる誰もが知っている。深夜は普段は戦闘要員ではないからわからないかもしれないが、知識としては知っているだろう。

だから、誰もこの奈都海の言葉に賛同し、実行しようという者はいなかった。そもそも理由すら書かれていないのだから納得のしようがない。というか、納得云々以前に、みんなはどうしたらいいかわからず戸惑っている。私もその一人だ。

こんな状況で声を出す者は一人もおらず、この空間には沈黙が続いた。

その、異変に気付くまでは。

「咲ちゃん!？」

唐突に大声で咲の名前を呼んだのは魅戈。当然、みんなの視線は

そちらに向く。

私も同じように、咲が立っていたはずの方を向けば、そこには

「 ツ ツ！」

咲はもう2本の足で立ってはおらず、左手を地面に突き右手を左胸に当てて苦しそうに呻いていた。

「ちよっ……どういうことだよ、これっ……？」

久宮が思わず漏らした疑問に答え得る答えを持つ者は、ここにはいない。

いるとすれば、それは

その恐れ多くも倒すべき存在が、またしても俺の目の前に立っていた。

……………弁解くらいはさせてほしい。

俺は別にこいつに会うために皆から離れたわけではない。ただ、あることに気付いて、それを解決するために今朝発見されたファントムの仕事の範囲がどの程度なのかを探っていたただけだ。そもそもこいつはあの迷宮にいるはずだ。迷宮そのものがファントムによって破壊、ないしは他の手段で無力化されていたとしても、今疵術師たちに攻撃を加えているのはそのファントムのはずなのだ。からここにいるのはどう考えてもおかしい。理論的に成立しない。

しかし、俺の前に仁王立ちするファントムは、俺の疑問に満ちた表情を見てか、自身の顔に禍々しい笑みを浮かべた。

「どうした、2度目の邂逅だというのに挨拶もなしか？寂しいな、私は寂しいぞ？……………クッククク……………」

外見そのものは、以前会った時とほぼ同じ。目が隠れるぐらいの前髪も、その下に隠れる堀の深い顔立ちも、厳つい肩も、そこから足首まで伸びている神父の着るようなローブも、首に下げられた目玉のアクセも、2m近い身長も、ローブの袖から時折覗く蛇の頭も、以前と変わりはない。

ただ、変わったのは、その存在そのもの。

以前はなかった、存在感。重苦しいほどの威圧感。圧倒的な生命力。それらがすべて、俺程度の存在など弱小、矮小だと言わんばかりに、俺に降りかかってきていた。

本能が逃げると叫んでいる。ここに理性など必要ない。必要なのは、生きるための本能と戦うための力。しかし戦うためのその力がないがために、本能は逃走という選択肢を取った。自分よりも高次

の存在と相対したなら、誤魔化してやり過ぎるか、逃げるか。それが生物の本来持ちうる能力、本能。

しかし、逃げても無駄だ、という本能からくる直感もある。どうせ逃げてでも殺されるのは変わらない。彼我に圧倒的な戦力差がある場合、そこに逃走という行為は意味を為さない。それすらも俺は直感的に理解してしまっていた。

実際、このファントムが本気になってかかれば、俺程度など瞬殺すら可能だろう。それこそ、次の瞬きの後に目を開けたら、俺の視界が上下逆さまになっていたとしても俺は驚かない。それすら可能にするのがファントムの能力だ。あえて軽く言うなら、無理ゲー以外の何物でもない。初期のレベル上げで魔王とエンカウントしてしまった勇者の気分だ。……例えば古いな。やめておこう。

さて、安易な現実逃避も許さないその眼光に10分も晒されてそろそろ狂ったほうが楽なのではないか、と思ってしまうほどに追い詰められた俺は、次の瞬間に発せられた声に救われた。

「これほどの力を有している私を目の前にしているというのに、全く動じぬ……やはり騎士は同列、そういうことか？」

その声で俺を救ったのは、他でもない俺を狂わせかけたファントム自身。しかし、喋ることですらに威圧感が増している。声にもそこはかとなく、と言うのも憚られるぐらいの重厚感が滲み出していた。

「だがしかし。ここを突きとめるとは、やはり王女の騎士。王女の仇を討つために来たか、それもいいだろう。それこそ私の望む道だ。だが、討つべき対象は私ではあるまい？」

内心委縮する俺に対して、ファントムはいかにも愉快そうに話している。その顔に薄気味悪い嗤いまで浮かべて。言っていること自体はさっぱりだが、こいつが気持ち悪いものだということはわかる。

相変わらず人外の嗤い顔というのは精神を逆撫でする。生理的嫌悪というのがどういふものを全力で教えてくれる。

しかし、今の俺は喋ることもできないからファントムの言葉に伝えることもできず、その気色の悪い嗤いをやめさせることもできない。

以前は喋っていたわけだが、俺が喋るのは戦闘時の、しかも魔術を使う時だけ。さらに言えば普通の発声方法で喋ると喉が死ぬ、死んで本当の意味で喋れなくなる。それだけはどうしても避けたい。なら、あの時はと訊かれれば、魔術で喋っていたように見せかけていたわけだ。ただ、俺の場合は、どの方法を使ったとしても俺以外への影響にはなんら変わりはないのだが。

「だが、ここにいるということは、貴様、あれに勘付いたか？中々に上手く隠したと自負していたのだが、な。さすがは異邦者、“異なること”には敏感だなあ？」

……………

ファントムの言う「あれ」には、お互いにそれが共通認識であるなら、気付いていると言ってもいい。つまりはこいつの仕掛けた魔術のことだ。

緊張感をなくす魔術については咲によって消されている。しかし、それだけでファントムの仕掛けは終わっていないかった。

前にも言ったと思うが、俺はあらゆる事象、物質の差異を「差がある」「異なっている」と認識できる能力を持っている。

故に俺は、仮眠から起きた時からちよつとした違和感を抱いていた。その違和感とは、“俺が寝る前と差がなかった”ということ。つまり、咲が打ち消したはずのファントムの魔術に変化がなかったのだ。

確かに緊張感の喪失という効果は消えていた。今もファントムの攻撃に抵抗できているということから考えても、それはある程度推測できることだ。その意味では変化そのものはあった。

しかし、魔術が未だに存在しているという意味では、なんの変化も観測できなかった。

それは何を意味するのか？

効果の失った魔術を、わざわざ自身の魔力を消費してまで持続させる意味は？

俺の行きついた結論は、“緊張感の喪失”と“広範囲に効果を及ぼす魔術に対してなんらかの影響を与える”という二つの効果があったのではないか、ということだ。

もちろん、前者は、本来の目的である後者の効果を隠すためのダミーで、消させることが狙いだっただろう。魔術を一つ消したことによつて、その裏にある本命から目を逸らさせたのだ。

これは、かなり巧妙に隠蔽いんぺいされており、索敵に特化した深夜であってもそう易々とは見つけれなかったのだろう。個々の要素を単独で読み取れる深夜と違って、俺の場合は同じか違うかということしかわからない。だが逆に、それが今回は功を奏したというわけだ。

周囲のものに擬態したものを見分けることは難しくとも、それがそこにあるべきものかどうか分かるなら問題はない。あるべきでないものなら、それを排除するか、あるいは遠ざけるか、あるいはそれらが不可能なら触れないようにするか。前に述べたファントムの魔術の効果だが、二つ目は完全に俺の推測だ。何をどうすれば何が起こるかかわからない。だが、魔術の効果が広範囲に及んでいることを考慮すれば、同様の性質を持つ魔術に影響する可能性が高いと踏んだわけだ。

そして、それを得意とするのは咲。加えて、咲はファントムを迷宮に封じ込めた張本人でもある。疵術師なのだから、ある程度使う魔術の傾向がわかっていれば対策は容易だ。ファントムは、自分の障害となり、かつ魔術の傾向がわかっていて無力化できそうなもの

として、咲を選んだのだろう。加えて、同じような魔術を使う疵術師もついでに潰しておこう、という算段だったということだ。

だから、俺は咲に魔術を使わせないよう言伝を頼んだ。……………まあ、周囲の様子を見る限り、間に合わなかったようだ。これでは何が起こったのか、あるいは何も起こらなかったのかは、俺には知る由もないが、咲が作ったであろう周囲を囲う虹色に輝くシャボン玉のような壁が残っているのなら、無事なのだろう。死に瀕するような事態になっていない、という意味で。

さて、俺はここまでわかつているわけだが、それをファントムに話すこともできないし、それ故に俺の推測が正しいかどうかも確かめることはできない。というか、むしろ俺がこれからどうなるか、今この状況をどう乗り切るのかのほうがよくよっぽど深刻だ。

どう見ても勝てる相手ではない。

Cランク程度なら十分倒せる。B、Aランク相手でも勝てなくとも逃げ切る自身はある。

だが、こいつは違う。ADEOIAではDMFBをランク付けしているわけだが、その内のAとSの間には大きな差がある。数値に換算すれば、おそらく3つくらい桁が違う、それほどの差が。

だから、何としても戦わずにこの場を脱したい。前回のように見逃してはくれないだろうか？……………いや、さすがに世の中、そう上手くはできていない。

「そう、あるいは王女が存命ならばその命で遣わされて来たか？それならば……………いや、そうでなくとも長々と生かしておくわけにもいかぬか。ここで殺しておくのも、また一興。女王と王女、どちらの反応も楽しみでならんなあ、……………ククッ」

と、いつわけらしい。

どうやら、俺はファントムを楽しませるための余興として殺されるらしい。冗談じゃない。こちとらまだ17歳の高校生だ。まだま

だ若いのに、しかもまだやり残したことだって……この場では特に見当たらないが、それでも殺されるのだけは勘弁願いたい。一応、俺だって生物相応の生存本能くらいは持ち合わせている。

が、ファントムは、ローブの袖から辛うじて見える程度だった蛇の腕を少しずつ伸ばし始めた。これが戦闘態勢に入っているのだということは、ファントムから発せられる殺気や圧迫感からも察せられる。こんな戦場に身を置くようになってから、殺気やらというよなものに敏感になってきたが、ファントムのそれは、たまに悪ふざけで九能の発する殺気や他のDMFBの野性的な殺気など、到底比べ物にならない次元の殺気だ。理性的かつ狂氣的な、まさに殺す気。これだけで圧死しそうなほどだ。

「そういうわけだ、幣原奈都海。一応言っておくが、あまり抵抗しないでもらえると有難い。女王をあを中心に残してある故、あまり待たせるわけにはいかぬのだ。理解してくれるか？」

お断りする。一体どこの世界に、これから殺すと言われて、はいそうですか、と首を差し出すバカがいるのか。

結果的には殺されるかもしれないが、日本には窮鼠猫を噛むということわざもある。たとえ殺されたとしても、ファントムを手負いの状況にするくらい貢献はできる……と思う。

ファントムは、一切反応を返さない俺を見て否定の意を正しく汲み取ったのか、短い溜息の後にこう呟いた。

「苦痛を伴うほうが好みか……で、あるなら、望み通り潰してくれよう」

んなわけがあるか、勝手に人をマゾヒストに仕立て上げるな。と、俺は相も変わらず心の中で突っ込んだ。

そのはずだったというのに。

俺は知らない内に思考すら停止させていた。

その原因は、目の前のファントム。
姿そのものに大きな変化はない。

しかし、唐突に増した存在感、その存在感を禍々しいものへと変貌させる威圧感、そしてその威圧感によってさらに重く感じられる殺気、それらがすべて魔力に乗せて、物理的な重量を伴って、俺に押し掛かってきていた。

実際の重量そのものはさほどでもない。だが、それ以外の要素は俺の正気を着実に奪い取って行く。

禍々しくも圧倒的な存在感は、俺の戦意を奪っていく。

息苦しくなるまでに重苦しい威圧感、酸素を奪い同時に正常な判断をも奪っていく。

鋭く突き刺さる殺気は、本能を優先させ理性を封じ込めていく。

まるで、蛇に睨まれた蛙のように、

王座を前に跪く平民のように、

権力を前に目を眩ませる愚者のように、

自分ではどうしようもない存在を前にして恐怖し畏怖し狂気を顕わにするように、俺はそこから一步も動けず、ファントムの言うと

おりに、まさに殺してくださいと言わんばかりに首をさらけ出していた。

勝てるかどうかなど、考えるだけでもおこがましい。傷を負わせろ？ここまで来て、そんなことを考えられる奴などいるはずがない。どんなバカでも悟る。“これは無理だ”と。

そう、無理だ。理など無い。ファントムに勝てない、ということに理由を求めるなど不毛。強いて言うなら、ファントムだから。それ以外にどんな理由が必要なのだろうか？

理性も戦意も正気も摩耗していく中、恐怖と狂気だけが心の中で踊り狂い、その二つだけが俺を支配していた。

ファントムはゆっくりと歩み寄ってくる。文字通り、死がこちらに近づいてきている。

どうすればいいのだろうか？と考えることもない。ただ、受け入れようとしていた。抵抗しようという気も起らなかった。これがファントムなのか、とわずかに残った理性が妙な納得を残し、置き去りにして、やがて消えていった。

目を瞑ることも許されず、俺はただ、その執行を待つのみ。

前方わずかに2mもない距離を置いて、ファントムが立ち止る。

そして、無言のままにその大蛇を束ねた剛腕を振り上げる。

その腕は、俺の頭を砕くのか、腹を貫くのか、あるいは全身を木端微塵にするのか。ふとそんな疑問が浮かんだ。が、すぐに消えた。空っぽな頭の俺は、茫然としてその上げられた腕を見上げる。次の瞬間には振り下ろされるであろう、その腕を、俺は見て、ただ待っていた。

しかし

「　　おお？」

ファントムが奇矯な声を上げた。

そのせいで、ファントムの存在感も、発していた威圧感も殺気も一瞬で和らぎ、それと同時に俺も正気を取り戻した。

しかし、この状況ではどうしようもない。逃げようもないし、逃げようとしたところで振り上げられた腕に潰されるのがオチ。反撃など以ての外だ。

俺は再び死の覚悟をする羽目になった。しかも、今回は正気の中の覚悟だ。虚ろな状態でのものとは全く意味合いが異なってくる。なまじ正気が残っているが故に、今度はそれに先立つ恐怖が俺の身体の動きを鈍くする。どっちにしる、死ぬ、という結果に変わりはない。ファントムに何があったのかは知らないが、何があっても、俺を殺してから解決に向かえばいいだけの話であって、俺が助かると楽観はできない。

だが、それはファントムもわかっているはずなのに、ファントムは唐突に腕を下ろし、伸ばしていた蛇の腕を元の長さに戻し始めた。「ここで殺せないのは惜しいが、止むを得ん。どうやら残してきた女王に迫る魔女が現れたようだな、これで失礼させてもらおう」

そのセリフを言い終わるか、という時、ファントムの姿がまるで霧のように霞んできた。前回にも同じようなことがあったような気がするが、まさか、俺は……………？

「…………ククク、なに、機会はまだいくらでもある。次はこちらの用意する舞台で相見えることになるだろうが、その時は私に会うまで死ぬなよ？クククククク……………」

フロントムはそう言って、完全に消え去った。

まさかとは思いが、俺は……………助かったのだろうか？

いや、状況から見て確かにそうなのだろうが、実際に死ぬ思いをしたとなると実感が湧いてこない。

状況を完全に理解した途端、俺は全身に冷や汗をかいていることに気付きながらも、みっともなくその場へたり込むしかなかった。

第1章 誘惑の狂姫 #14 (後書き)

突然ですが、そろそろ試験まで大詰めといった時期になってきたので、執筆および更新をいったん中断しようかと思えます。

おそらく、次の更新はお盆あたりになると思えます。

勝手だとは思いますが、ご容赦ください。

第1章 誘惑の狂姫 #15 (前書き)

今回、過激な描写がございます。ご注意ください。

真正面から迫る蛇を避け、すれ違いざまに握力だけで握りつぶす。10もの数で一挙して押し寄せる蛇の頭を巨斧の一閃で薙ぎ払う。その陰から飛び出し、牙でもって襲いかからんとする蛇の頭を回し蹴りで吹き飛ばす。

そうして私は、怒涛とも言える勢いで、既に消えかかっている迷宮へと迫りつつあった。

こうして咲の防護壁の外に出ているのは私だけ。運悪く入れなかった者以外は、他の部隊も、私の部隊の他の部隊員もこちらに出てきてはいない。

なぜこんな無謀にも近いことをしているのかと言えば、単純に時間がないからだ。

その原因が、咲の衰弱。なぜかはわからない。もしかしたらフロントムの仕業かもしれないけれど、確かめようがないのだから結局は同じこと、何も変わらない。

もしこのまま咲が弱り続けるなら、防護壁の効果も比例して薄れていく。最悪、消えてしまったら絶望的だ。立て直しの最中だというのに、突然に守るものがなくなって攻撃が加えられたら反撃はほぼ不可能。一応、警戒するようにと言ってはあはれけれど、それで万全とは言えない。

だからこうして私が、直接フロントムを討つために突出している、と聞くと愚策だと思う人がいるだろう。というか、そう思うのが普通だ。指揮官が自ら積極的に前線に出ると、後方の部下は当然気を使わず、万が一にも殺られたら、あるいは連絡が取れなくなるだけで指揮系統は少なからず乱れるし、士気にもかかわる。もちろん、私が前線に出ることでその場の兵士の士気を上げることも可能だが、

この状況では何の意味もない。むしろ、あるのはデメリットだけ。しかし、その理論は私に限っては当てはまらない。

単純に強いから、というだけではない。そもそも私は、ファントムを討つためというよりは、時間稼ぎのために出てきているに過ぎない。それでも、こうして前線に出ている理由、それは

「……………」

見れば、高速で突進してきた蛇によって私の左肩が砕かれていた。斧を振るうのは右手だから武器を扱うだけなら問題は無いが、片手が使えないだけでもパフォーマンスは大きく落ちる。ファントムと直接相対する前のこの負傷は、大きなハンデとなる。

しかしそれでも、私は立ち止りなどしない。左肩を砕いた蛇が今度は顔面目がけて突っ込んできたので、その頭部を逆に噛み砕いてやった。ファントムが事前にそうなるよう組み込んでいたのか、口の周囲が火傷したように爛れたけれど、気にする必要もない。

なぜなら、口の周りの火傷は次の瞬間には治っていたからだ。何もせずとも、左肩も同様に既に治っていた。

そして

「……………あれは……………?」

さらに蛇を薙ぎ払いながら進んだところで目を凝らすと、かつての迷宮の中心に人影があった。

どうやら座り込んでいるようだが、腰までよりも長い長髪やその

座り方から女性だとわかる。つまり、

「ジャン又さん……！？やっぱりここに………」

そこにいたのは、やはり連れ去られたとされていたジャン又さん

後朱雀沙夢濡だった。

私の中では、まだ生きていたのかという安堵よりも、助けなければという義務感が先に立った。ジャン又さんさえ助ければ、こちらとしては断然戦いやすくなる。人質にされることもなくなるのだから。

私とジャン又さんの間には、距離にしてたったの50mほどしかない。蛇さえいなければ、一瞬で詰められるような距離だ。私は今まで以上に足に力を入れ、ジャン又さんの許へ向かおうとする。

しかし、世の中そう簡単に思い通りにいくようにはできていない。

「ッ!？」

私は危険を察知して、咄嗟に後方に飛び退った。

見れば、私がついさっきまで立っていたその場所の地面に、巨人のものとも見紛うほどの巨大な腕が突き刺さっていた。

私は、視線を左側へと巡らし、その巨腕の主を見遣る。

「ようこそ、魔女よ……大したもてなしもできぬが容赦願いたい…

…」

「ようこそって言う割には手荒い出迎えね。これは大したことのな
いもてなしなのかしら?」

やはり、ファントム。

着ているのは足首まである長いローブ、その袖から覗くのは蛇の

頭。さつき飛んできた腕は、無数の蛇を束ねたものらしかった。

「ククツ……素晴らしいな、すべて私の思い通りに進む。……………」
さあ、魔女よ、王から女王の救出を命じられたか、王女から女王の討伐を依頼されたのかは知らんが、こんなところまで出てきてよいのか?……死ぬぞ、貴様」

「御心配どうも。でも、安心なさいな。私は死ぬ気なんて毛頭程度もないわ」

「ククク……で、あろうな。 しかし、私も嫌な者と相対した。肩が砕かれようと一瞬で戻ってしまうような者に、どうして勝てようか?よもや心臓を抉りだしても、まだ生きているなどということはあるまい?」

「さあ……どうでしょうね?」

私はとぼけるような仕草とともに、ファントムの喜悦を含んだ問いに答える。

しかし、これはファントムの言うとおり。私は、どんな怪我を負っても、“戻ること”ができる。

ただのかすり傷や切り傷なら一瞬で治るし、腕が切り落とされても数秒で元通りになる。ファントムの言うように、心臓を抉りだされてもすぐに再生するし、頭部を吹き飛ばされても10秒もかからずに元に戻る。

だから、私には「死」という概念が当てはまらない。致命傷を受けても、死ぬ前に戻ってしまう。

それを実現しているのが、私の源血の“戻ること”という特性だ。源血とは、疵術師の純正魔力のことを指す。

疵術師は、魔術の使えない一般人や通常の魔術師と異なり、ある

一つの特性を持つ特殊な純正魔力を持っている。予め特性　　つ
まりどの魔術に使われるに適した魔力なのか、が定められているた
めに、詠唱がなくても高い威力の魔術を使用でき、かつ行使できる
魔術の種がある程度決まってしまうている。

その特性が、私の場合は“戻ること”。ちなみに、奈都海は“異
なること”、咲は“断つこと”、と、疵術師によつてその特性は異
なる。

私の場合、その特性の私自身への影響が強烈すぎるがためにこの
驚異的な再生能力を持ち得ているわけだけど、老化の遅延もまた、
この特性のせいだ。

ただ、この“戻ること”という特性がいかに強くても、“時間”
という他の事物にも作用する普遍的な事象には抵抗できない。それ
でも、影響が0になることはないから、私だけにかかる時間の進度
は遅れ、老化が遅くなっている、というわけだ。もし、まともに私
の源血の特性が適用されたら、私は常に若返ることになり、最終的
には受精卵まで戻ることになるかもしれない。

さて、これで疵術師の源血についての講義は終了。

今は私がどこまでこのファントムを足止めできるか、が重要だ。

咲には未来小をつけて、他のみんなにはそれぞれ他の部隊に、援
護とある命令を伝えるために向かつてもらった。これで、咲の創つ
た障害が破られてもある程度は耐えられる。でも、それもあくまで
も、ある程度、だから、過信はできない。

重要なのは、やはり私。私がどこまで時間を稼いで、みんなに準
備の時間をどれだけ与えられるか。それさえできれば、ファントム
の討伐も可能の域に達する。逆に言えば、私が十分な時間を確保で
きなければ勝ち目はない、ということだ。

でも、その時間を会話で稼ぐのは賢いやり方ではないはず。彼ら
の洞察力は人間のそれをはるかに超えているし、私がボ口を出さな
いと限らない。……………実は、こういう言葉の駆け引きは苦手だ
からね、私は。

「さて、と。……私は少しせつかちなところもあるから、早速始めてもいいかしら？」

「始める？ 始めるか？ ……ククツ、いいだろう、貴様に先手を許してやる」

「あら、優しいのね？」

「そうだな、私は弱者には寛容なのだよ……」

そう言っつて、さらに嗤うファントム。しかし、その身から発せられる魔力は、既に戦場のそれだ。まるで相手を喰い殺さんとでもするかのように重く、鋭い魔力。

注意すべきはファントムの未知数の攻撃力。私がいくら傷を治せるといつても、同時に四肢すべてが切り落とされでもしたら、再生にはかなりの時間を要する。それに近い状況だけは避けなければならない。

しかし、だからといって弱気にはなれない。あくまで強気に

「ッ！！」

私は脚に力を込め、一気にファントムへと詰め寄ると、その脳天目にかけて巨斧を振り下ろす。

しかし、

「ふ……」

斧の刃が打ったのは地面。

避けられたことを嘆く暇もなく、私は背後に気配を感じ、刃の半

分が埋まった斧を、その刃で地面の土を抉りながら背後へと振りぬく。

ズガンツ！！

と、確かな手応えとともに鈍い音が鳴り響いた。

それは確かに当たっていた。しかし、当たっていただけだった。

「非力だな、実に非力だ」

私の斧は、ファントムの腕 すなわち無数の蛇に絡め取られていた。

明らかかなダメージも見せず不満げに呟くファントムは、斧に絡みつくと蛇をさらに伸ばし、私の腕までそれを伸ばしてきた。

「つく！」

やむを得ずその斧を手放し、後方へ飛退く。次の瞬間には、私との繋がりを断たれた斧は、元のキーホルダーに戻っていた。

私は、次なる得物である双剣を持ってファントムに立ち向かう。

右手に幅の小さい両刃剣、左手に反りの大きい片刃剣。私の双剣は、昔からこれに固定されている。

斧に比べて威力自体はるかに劣るが、その分機動力は勝る。時間稼ぎだけならこちらの方が都合はいい。

「ッラア！」

短い裂帛れいひやくとともに、まずは利き手の右手から斬りかかる。

が、それもファントムは当然のように回避。間髪入れず、下方から左の剣を振るうが、それもまた、ファントムは後方に一步下がって避けた。

私はそれに追いつき、今度は左右から2本の剣でもってファン

トムを挟むようにして攻める。しかし、ファントムは、それを屈むことによって回避。そのまま、ガラ空きの私の腹部に、その蛇を束ねた腕を向けた。

「ふんっ！！」

「ッ！？」

私はそれを、地面を蹴って無理やり身体を左に跳ばすことによって避ける。しかし、無理やりだったせいか、上手く立ち上がる事ができず、意図せず余分な横転をしてしまった。

その隙を、ファントムが見逃すはずもない。すぐに私に迫撃し、その腕を振り下ろしてきた。

ゴオッ！！という空気を押しつぶすような音とともに落ちてきたそれは、見もせず直感で今度は意図的に転がった私のすぐ背後の地面を大きく陥没させた。

その威力に慄きつつも、今度は体勢を崩さずに済んだ。私は片膝を着いたままファントムを睨む。ファントムは私を睥睨しつつ、にやり、と嗤った。

「ほお……？意外にやるものだ。魔術ばかりに頼る軟弱者とばかり思っていたが」

「残念ね。私はこういう戦い方しかできないのよ」

どう見ても下位の存在を見る目で見降ろしてくるファントムに、私はある意味手の内を晒すような返答を返す。そして、それを聞いたファントムは、

「それはいいことを聞いた。では」

突然ボックスステップで距離を取り、

「これならいかがかな？」

無数の蛇を伸ばしてきた。

私のリーチ外からの攻撃。当然避けるしかないわけだけど、それでは意味がない。私は、その迫る蛇の群れに一直線に突っ込んだ。

「ほお……そう来るかあ！！」

ファントムは嬉々として叫び、蛇を操り私を襲う。
しかし、

「ふっ！」

この程度の密度なら、容易に掻い潜れる。それに、これは高威力だが、それ故に直線的。近接戦闘に熟練した私なら、避けることは容易だ。私は、両手の剣を幾度も振るい、時に逆手に持ちかえて、無数の蛇を、それ以上の無数の肉片にすべく切り刻む。

襲い来る蛇を斬り、無視できる蛇は適当にやり過ごし、数秒とかからずにファントムに肉薄する。

「ッハア！！」

「ッー！」

そして、中腰から身体全体をバネにして振り上げた刃。それは、ファントムの左腕を斬り飛ばしていた。

これで、ファントムの攻撃能力は半減した。有利とはいかないも

の、これで幾分かは楽に戦えるだろう。
そう思った矢先、

「ッ！？つくあ！」

突如、至近で起こった猛烈な大爆発に、私の身体は吹き飛ばされた。

「いかなあ、魔女よ、腕を切り落とした程度で喜んでもらっては
それに」

これは、ファントムの魔術？しかし、これだけの威力のものをほとんどラグもなしに発動するなんて、ファントムであっても、そう
できることじゃない。

しかも、

「そら、貴様の斬った私の腕は、もう治ってしまっているぞ？」

私がかつと斬り落としたその腕は、既にほとんど再生しきってしまっていた。

おそらく、私以上の再生能力。魔力の密度の比較的低い腕だからできたことだろうけど、それでもこれは異常だ。色々と規格外なファントムであっても、これはそれ以上に規格外。

どうあっても、勝てる存在じゃない……………

「それでも……………！」

消え切っていない痛みを押しして、再びファントムへと刃を向ける。しかし、それも涼しい顔で避けられる。それでも、私は左右の剣を振るって、時に蹴撃も挟みつつ、しかし一分の間隙も挟まずにフ

アントムに斬りかかり続ける。ファントムもそれを避け続け、時に大蛇を使った打撃を混ぜ、私の攻撃の頻度を少しずつ減らしていく。源血の特性のおかげで疲労を知らない私と、疲労と言う概念そのものが当てはまらないファントム。下手をすれば永遠に続くだろう、この剣と蛇の応酬は、しかし、しばらくして止まった。

ファントムの蛇を束ねた巨腕が、私の身体を見事に捉え、私は数十mも吹っ飛ばされた。

「……………ッがはっ、うっ……………ぐ」

受け身も取れずに私の身体は地面を二転、三転する。

内臓が破裂でもしたのか、身体に力が入らず動けない。10秒ほどしても回復しないから、内臓のほとんどが完全に破壊されてしまったと見ていいだろう。あばらも、粉々になっていてもおかしくない。

(これは……………回復に時間かかりそう……………でもっ)

どんな重傷でも元に戻るとはいえ、痛みばかりは消しようがない。いずれ消えるだろうが、それまでこの痛みは私の身体を苛むだろう。しかし、このまま放置されたら私のいる意味がない。

私は、脚を必死に叱咤し、無理やり立ち上がった。痛みで神経がやられているのか、膝が安定しないけれど、今は無視するより他ない。

ファントムは私が立ち上がるまで、律儀に待っていてくれた。空気が読めるようで、結構なこと。

「非力、かつ愚鈍。……………人間とは、どうしてこうも弱いのか……………」

突き詰めれば、あんたも元は人間だったくせに。私はそう思ったけれど、痛みのでいで声が出せず、言うのは諦めた。

しかし、ファントムの言うことは事実。というか、ファントムに比べれば、どんな生物もひ弱なのは仕方ない。魔術団の中樞を担うような魔術師ならわからないけれど。

とにかく、その後も、まるで愚痴るようにぶつぶつと呟くファントムのおかげで、ほぼ完全に回復できた。これで、今までと同じように戦えるはずだ。

「いや、それは使えるか。………貴様、まだ何か隠しているだろうか？ それを出せ。でなければ殺す意味がない」

「何のこと、かしら？今でも全力な、のだけど」

私は突然のファントムの言葉に、努めてとぼけるようにして答える。先ほどの攻撃によってまだ残る違和感のせいで、舌が上手く回らないけれど、とりあえず不自然には聞こえなかったはず。

「隠すな。それとも、追い詰められなければ出せぬか？」

ファントムはやはり私の口調には何も言わずに、それでもなお食い下がってくる。

でも、その“私の隠していること”については、できれば触れてほしくなかったんだけど、なぜこのファントムはそれを望むのだろうか？

「そうか……、では、追い詰めてくれる」

あくまで黙秘を貫く私にしびれを切らしたのか、ファントムはそう呟いた。

その瞬間。

ゴッ！！

と、私にすら反応できない速度で迫ってきたファントムの腕で、私は再び吹っ飛ばされていた。

「ツツ……っ！」

痛みと衝撃のせいで悲鳴すら出せずに宙を舞う私を、ファントムはさらに伸ばした蛇で絡め取った。

首と手首足首に、四肢の付け根近く、それぞれに筋骨隆々の男の腕ほどの太さの蛇が巻きつき、私を縛りあげて宙に磔はりつけにしていた。同時に、手首が締めあげられ、双剣は私の手を離れて地面に触れる直前にキーホルダーに戻った。

「……かッ、ふ」

首に巻きついた蛇のせいで込み上げてくる血を吐き出せず、喉に詰まって窒息しそうになるが、特性のせいで死ねずに窒息感だけが常に残る。

「さて、どうだ？まさに、絶体絶命、最大の危機というわけだが。貴様はどうあっても死ぬことはないようだが、拘束することそのものは可能だ。再生も時間を要するようであるし………ククク、このまま貴様を縛る蛇をここに置いて、私だけが離れることもできるぞ？」

ファントムは口を歪めて嗤う。

やはり、ファントムは今まで手を抜いていた。いくら私が強くても、“この状態”で短時間とはいえ互角に渡り合えるはずがない。

しかも、ファントムが私を置いて他のみんなのもとへと向かえば、

そこで終わってしまう。何としても脱出しなければいけない。しかし　できない。その唯一の方法は、ここで使うわけにはいかないのだから。

「……なんだ、それでもする気はないか………では、苦痛でも与えれば本能的にでも出さざるを得まい？」

そう言つて、ファントムは、さらに1匹の蛇を伸ばし、

「ッ！！　　がふっ、かつ………」

その蛇で私の鳩尾を貫いた。しかも、貫通した後、ごく丁寧に蛇を回転させて穴を広げてきた。その度に耐えがたい激痛が全身を駆け巡り、声にならない悲鳴が口から漏れそうになって、しかし息苦しさに妨げられて口に籠つて出なかった。

蛇はまだ突き刺さったまま。隙間からは血と、元は内臓だっただろう肉片が零れ落ちていた。

しかし、それでも死なない。それどころか、傷は塞がっていく。蛇のいるところはさすがに治りようがないけれど、他の部分は元に戻り、10秒もすれば激痛もある程度は収まってきた。

ただ、それが良い結果を生むとは限らない。特に、治ってもどうしようもない、今のような状況では。

ファントムは、私の腹の穴が塞がっていくのを見て、不機嫌そうに眉を顰めた。

「これでもか……これでも出さぬか、出さぬか、出さぬか！？それが貴様の矜持か！？クハツハア！おもしろい、ならば、砕こう、それが貴様の望みか、でもなければ、あえて！！」

不機嫌どころでは、なかった。狂っている。

何がそこまで彼を駆り立てるのはかは、私にはわからないが、このファントムが完全に狂乱しているのはわかった。しかし、強者と戦うのを望むのならまだしも、彼はそうは見えない。あくまで、私の隠しているものを望んでいるようにしか見えない。

まだ先ほどの激痛の余韻の残る私を見上げ、ファントムは怒りなのか悲しみなのかあるいはそれ以外の感情で染められたのか、よくわからない表情で睨みつけてきた。

「なぜだ……なぜ貴様はここまで耐えようとする……？わからぬ、死に達するほどの、意識を失うほどの苦痛だというのに、“それ”をしない。……なぜだ？」

しかし、ファントムは言葉の途中に俯き、再び何事かをぶつぶつと呟き始めた。

私は、激痛の余韻ではつきりとしめない頭で、それでも違和感を覚えていた。

ここまではつきりとした感情を表すファントムなど、ほとんどいないからだ。

ファントムが人間並みに感情を表せるようになるには、1000年単位で時がかかる。それこそ、シャトーのように10世紀近く生きている必要がある。200年も生きていくというノクターンでも、まだ上手く感情を扱えず、持て余している、という傾向のほうが強い。その原理については、いずれ話すことになるだろうけれど……

だから、つい昨日まで潜伏期間だった新参のファントムが、ここまで明確な感情をぶつけてくるのが、不自然でしようがない。今まで戦ったファントムだって、人間と比べればほとんど無感情とも言えただけだ。

そんな風に、私が、少しずつ明瞭になっていく頭で考えていると、ファントムがいきなり、その顔に嗤いを浮かべ、

「……そう、どうせ死なぬのなら、苦痛を与えても意味はない……。ならば、回復せぬ苦痛を与えれば良い、ということ……」

その嗤いを、私に向けた。

その瞬間、私の全身の肌という肌に、気持ち悪い鳥肌が立った。

「……………つく、気持ち、悪い、つてのよ……」

「ククク、それでいい。それが正常だ……」

私の罵倒にも、ファントムは動じることなく逆に嗤ってみせた。

「……………さあ、魔女よ」

その声を聞いた時、得も言われぬ寒気と同時に、背に節足動物が這いまわるような感触が走った。

ただ、気持ち悪いだけではない。まして、その嗤いから感じたのは、生物としての生命の危機ではなく、

「貴様も、辱めるのみで、辱められたことはなかるう……？」

単なる、“女”としての嫌悪感。

まるで、知らないなにかに全身をまさぐられているかのような不快感。

まるで、得体の知れないものに口を塞がれているかのような息苦しさ。

まるで、無理やり股を裂かれるかのような恐怖。

まるで、体内に欲望の塊を注ぎこまれるかのような嫌悪感と危機感。

“まだ”何もされていないのに、それらが一気に押し寄せ、私の

精神を苛む。

「何……………する気よ……………」

声が途切れてしまったのは、痛みのせいではなかった。ファントムの向けてくる明確な欲望が、明確なのに底知れない、それ故の恐怖が私の中に芽生えたからだった。

逃げなければ、と思っっているのに、身体は動かず、そもそもファントムの縛めによって動かしても意味はない。

そんな思考の中で恐怖と嫌悪に歪む私の表情を見てか、ファントムは一層嗤いを深めて、1匹の蛇を伸ばし

「人というものはいい……………苦痛を与える手段が、無数と言っていいほどにあるのだからなあ……………」

私を再び“貫いた”。

「つく、何を……………ひあ!？」

蛇は下着を破り、直接九能の“そこ”に入りこんでくる。

「や、やめな、さ……つく、ああ！」

それは決るように、九能の深部へと潜っていかうとする。深く、より深くへと。

「やめっ……くあ、ああああっ！」

普通なら入るはずのない、挿れてはならない太さのそれは、最大限とも言える嫌悪感と、あるいは鳩尾を貫かれた時以上に耐えがたい激痛と、九能自身決して認めたくはないがそれでも確かにあるわずかな快感を、同時に九能に与えていた。

それだけではない。すぐにその挿入口から卑猥な水音が聞こえてきて、それらは、例外なく九能の精神を壊していった。

「ふん……、どうした？ さっきから何も喋っておらんなあ？ 悲鳴だけではつまらん、私はつまらんぞ？」

「ッ ツ ツううううううッ！！！」

九能には、既に外界の音など聞こえていなかった。

九能をさらに抉り、最奥を指す蛇が与える感覚だけが、今の九能のすべてを支配していた。

感じてはならないのに、感じてはならないと思っっているのに、逃れ得ない快感は九能の中で徐々に大きくなっていく。同時に、蛇の鱗が内壁を擦り、時には引っかけり、時には刺さり、苦痛をも増していた。

さらに加えて、ある程度進むと、蛇はその口から下を伸ばし、九能の中を舐めまわし始めた。

「うっ、ああああああっ！！うぐっ、くひあ、ああ……っ、っ」

その瞬間、九能は、身体に電撃が走ったかのようにその身体を仰け反らせた。

九能は、なす術もなく犯され、その頭には我慢という発想すら浮かんでこず、だらしなく開けた口からは悲鳴と唾液しか零れない。ファントムはそれを見ながら下劣な笑みを浮かべていたが、しかし、それだけでは満足しなかった。当然だ。ファントムの望むものは、九能を犯すことでも、九能の喘ぎ声を聞くことでもないのだから。

「ああ、これでもか!?なぜだ、なぜ、なぜ……………“源破顕現”をその身において、せぬのか!?辱められても、せぬのか、なぜだ!?!」

「ツツ!?!、くあああああああああああああ!?!」

怒りのせいか、九能の中でファントムの蛇が身動きみじろ、“そこ”の裂ける感覚とともに、ただの負傷によるものとは違う激痛が九能の全身を貫くように走った。

ただでさえ、人間の腕を挿し入れられているような異常な状態だ。そこで動かれた痛みは、それこそ耐えられるようなものではなかった。

目には涙が浮かび、口からは唾液が垂れ、秘部からは愛液が漏れて、頬と顎と腿を濡らしていた。

明確に口にした、ファントムの目的、“源破顕現”。それは、疵術師の、戦いにおける最終手段であり、かつ単体でファントムに対抗しうる奥の手。だというのに、なぜそれを自分に強要するのか、九能にはわからなかった。

そんなことを疑問として考える前に、九能は激痛で意識が飛びそ

うになった。しかし、その度にさらなる激痛で無理やり意識を覚醒させられる。そのループが何度も続いた。

いつのまにか最奥へと到達していた蛇は、動く度にその奥を叩き、九能に、激痛と激痛の合間に快感を伝えていた。こんなものでも感じられる自分に嫌気がさすとともに、一刻も早くこの事態から逃れたい、とそう一心に九能は思い始めていた。

誰でもいい。今の自分にそうできる力があるなら、自分でもいい。この状況から救ってくれるなら、誰でも。

しかし、それに反して九能の中に真つ先に浮かんできたのは、

(……………な、つみ……………)

初めて、九能が自分自身の意思で自分自身の身体を許した、その唯一の存在のこと。一方で彼が助けてくれれば、と考え、しかし、もう片方ではこんな姿を彼には見られたくない、とも思っていた。そして、そんな相反した想いは

後者が実現した。

「……………砕いて、みようか」

その声の直後、九能を縛めていた蛇と、九能の秘部を貫いていた蛇の双方が、跡形もなく砕け散っていた。

「なぜかな、准将？未永栖さんや久宮にも助けられたっていうし、今回はちよつと不調気味？」

支えるものがなくなって落ちるばかりの九能を、危なげもなくキヤツチして意識の朦朧としている九能に喋りかけるのは、小鳥遊尊たかなしそんか何だった。

「それにしても酷いね。許可なしの“顕現”が禁じられているとはいえ、ここまでなるまで我慢することないのに。やむを得ない時は許してもらえはらずだよ？」

まるでファントムのことなど、いないかのように振る舞う尊何。しかし、ふと上げた視線にファントムが入り、芝居がかった驚き方をしてみせた。

「おや、うちの准将をこんなにしたのは、君かい？」

「……貴様あ………貴様も、私の邪魔を、するのなあ！？」

そのファントムは、無視されたことも加わってか、激昂した様子で両手の蛇を尊何に向かって伸ばした。

しかし、尊何は避けようともせず、ファントムから守る形になる位置に九能を横たえ、

「僕は、一対一は嫌いなんだけど………さすがに、そうも言っていられないね、この状況は」

指を目に当て、

「さあ、久々の仕事だよ。思う存分、砕いてみようか」

横仰な仕草でその眼を覆っていたコンタクトレンズを外した。
その途端、

ババババババババババババババババババン！！！！

と、数百もの蛇が音を立てて爆散した。

正確には、尊何の視界に入った蛇がすべて砕け散ったのだ。

この小鳥遊尊何の得意とする能力、それが、この視界に入ったものを砕く、という能力。しかし、この能力は尊何自身で制御できないため、平時は魔力を透過させない特殊なコンタクトレンズを着けている。また、この能力は自分の身体には作用しないため、コンタクトを取っても、瞬きの時に瞼が砕かれる、ということにはならない。

「……………なるほど、それが貴様の武器か？おもしろい……………！」

その尊何の能力を見せつけられたファントムは、冷静に尊何を分析しながらも顔を忌々しげに歪め、再生させた蛇でさらに尊何を襲う。

「へえ……………その再生能力だけなら准将にも負けないね。でも」

尊何は、閉じていた両目をカッ、と見開き、

バババババババババババババババン！！！！

蛇を砕いた。しかも、それだけでなく、同時に視界に入ったファントムの背後の木々も同じように砕けた。

正確に言えば、尊何の能力は視界に入り、かつ焦点を合わせたもの、範囲にしか発動しない。この時は、その木にも焦点が合ってしまったのだ。

「おっと、危ない。森林破壊までしてしまうところだった。環境団体がうるさいからねえ」

それに気付いた尊何は、慌てたように両目を閉じた。

しかし、ファントムは自分の背後の跡形もなくなった、元々木々のあった空間を見て、驚嘆の息を漏らした。

「素晴らしいな……。破壊に限れば、まさに万能、ということか……」

「ファントムに褒められるなんて恐悦だね。ま、そこまで買いかぶられても困るんだけど」

ファントムの言うように万能にも思える尊何の能力だが、尊何の言うとおり万能というには見過ごせない欠点がある。

それは、壊したくないものまで、焦点が合つてさえしまえば壊してしまう、ということである。

(……さて、どうしようかな。僕の能力がファントムに直接通用するはずもないし、タイムンで戦うとなれば周囲を見境なく破壊しそ
うだし)

さらには、その効果には制限がある。「視線で万物を壊す」と言

われる尊何でも、当然壊せないものはある。その代表例がファントム（の本体）であり、そのファントムが尊何にとつての最大の天敵でもある。ファントムが攻撃に用いていたあの蛇は、ファントムの本体ではなくファントムよりも魔力の密度の低い末端だったから壊せたのだらう。

事実、尊何も、

（あれがファントムの本体と同じなら、なす術なし、だったからね。そうじゃないから一応准将を守れはするけれど、打開策そのものはないんだよねえ……………）

と思っていた。

（ま、時間さえ稼げればみんなは逃げられるだらうけど）

とも思っていたが。

しかし、彼らに、現状における打開策がないことはファントムも承知済みのことだった。

「……………どうやら、お互い手詰まりのようだな？」

「へえ、君も、なのかい？君なら、僕を殺して准将も犯すついでに殺すこともできそうだけど？」

平然と言う尊何に、ファントムは、今まで誰も見なかった苦笑を浮かべ、

「ふん……………私が望むのは、魔女の死でも痴態でもない。ただ……………
…“顕現”が必要なのだよ、私には」

「……………」

尊何には、ファントムの言葉の真意はわからない。

“顕現”といえば、“源破顕現”のことだということは尊何もわかってる。しかし、彼も九能と同様、ファントムにとっては害でしかない“源破顕現”を、なぜ望むのか、はわからなかった。

しかし、自分たちを殺す意思はない、と解釈した。

「と、いうことは、僕たちは見逃してくれる、と?」

「……………」私に必要なのだから、そうせねばなるまい。不本意だが、な」

「……………」全く、ファントムというものはわからないね、何を考えているのか。ま、見逃してくれるっていうなら、そうさせてもらおうかな」

完全に、渋々といった様子のファントムには構わず、尊何はその眼にコンタクトを装着して、九能のもとへと歩み寄った。そして、上空を仰ぎ、

「天代くん!!頼むよ!!」

叫んだ。

しばらくして、上空に待機していたのだろう天代が、その翼を羽ばたかせながら降りてきた。彼は、尊何を見て律儀にも礼をし、九能を見てわずかに狼狽しながらもなんとか冷静に自分のすべきことを状況から理解し、最後にファントムを見て、

「ひっひゃあ!?!フ、ファントム!?!」

素直に驚いた。しかし、尊何はそれにも構わずに、

「今は気にしないでいいよ。とにかく、君は准将を本部まで運んでお願いできるね？」

「え、あ、いえ、でも……………」

尊何の命令にもすぐには答えない天代に、尊何はその懸念を断ち切るように天代の言葉を遮った。

「みんなの撤退準備はできてる？」

「え？…………あ、はい。大体は、もう」

「よし、なら問題はないかな。…………じゃあ頼んだよ」

尊何は相変わらずの笑顔で、無理やり天代の反論を抑えて九能を運ばせることに成功。尊何は、九能を抱いて一気に飛び去った天代を見送った。そして、彼もこの居心地の悪い場所から立ち去ろうとし、

「……………待て」

とフロントムに呼び止められた。尊何はゆっくりと首を背後へと巡らした。

「…………何かな？生きて帰れると思ったところなのに、それをぶち壊されるのだけは御免だよ？」

「……よく喋る奴め……。だが、残念ながら、違う。ここで得るべきものは既に得た。ただ、最後に魔女に伝えておく言葉を貴様に預ける、それだけだ」

「魔女って　　准将だね。それだけなら任せようかな」

あくまでも気楽に話す尊何に、内心呆れながらもファントムは伝えるべき言葉を話した。

そして、最後に、

「　　私も暇ではないのでな。お互い利害が一致した今なら、お互いに最善とは言わずとも良の結果は得られたであろう？」

「さあ、どうだろうね？うちの准将は、その良を最善まで持っていくような人だから覚悟しておいた方がいいんじゃないかな？」

「ククク……では、楽しみにしておこう。」

最後に、二人はそのやり取りを残して、お互いに去っていった。

10分後、この一帯に展開するADEOIAの部隊の撤退が開始された。

九能や咲が蛇の対処に悪戦苦闘している頃。

尊何は、九能の救助に向かうまで、雪川瀬井率いる斥候部隊にいた。

「いいのかい？ 伝えなくて」

尊何は、瀬井に対してこんな風な口調で話していた。

尊何は大尉。対して、瀬井は中佐。この二人の立場には、（准佐・少佐を挟んで）2つの階級の差があったが、尊何は基本的にどんな相手に対してもこんな口調である。

彼がA D E O I Aの元帥に、常と同じような口調を使って、不敬罪で殺されかけた、というのには中国地方支部では有名な噂だが、この場でそれを裏付ける光景を見せられた瀬井の部下たちは、尊何の口調に驚き呆れはすれど、咎めることはなかった。

それは瀬井も例外ではなかった。その考えに至った経緯が同じかどうかはわからないが。

「……………何が、だ？」

瀬井は、さきほどの目的語の省略された質問に、ややあって訊き返した。

「この魔術のことだよ。君の部下も既に感知しているんだろう？フ
アントムのもかもしれないし、この効果は確か」

「範囲魔術の使用者に、その魔術を媒体にして呪術的打撃を与える」

瀬井は、尊何の言葉を継いで答えた。

「そう、そういう観測結果が出ている。この部隊のみんなも危ない
わけだけど、それ以上に、もし、咲ちゃんが魔術を使ったら」

「なぜ、居川咲の名を出す？」

尊何が咲の名前を出した途端、瀬井は無関心に聞いていた姿勢を
崩し、尊何を睨んだ。

「っと、触れてはいけないところだったかな？」

両手を上げて降参を示しながら、おどけたように言う尊何に、瀬
井はすぐにまた興味なさげな表情に戻り、

「……………構わん。だが、知っているなら訊くな」

「……………ああ、そうだね。僕も浅慮だったよ」

尊何が謝り、話題が尽きたところで、この場には沈黙が訪れた。
瀬井の部隊は、迷宮を挟んで九能の部隊のほとんど向かい側に位
置している。その理由が、この部隊は、戦闘能力そのものは貧弱で
も、防御能力や離脱能力は秀でており、自衛だけに限るなら十分フ
アントムも相手にできる数少ない部隊だからである。

もし、この部隊にファントムが仕掛けてきたとしても、九能の部隊の救援は十分間に合う距離であり、九能の内心では、挟撃できるという利点からむしろ狙ってほしかった部隊でもある。

しかし、瀬井はほぼ正確に九能の意図を読んでいた。

この、ファントムのもものと思われる蛇の襲撃中も、彼女が何を考え、これからどう状況を運ぼうかということは、何の因果か生涯のほとんどを九能のもと（九能の指揮下という意味で）で過ごした彼にとっては、考えずともなんとなく頭に浮かんでくるほどのことだった。瀬井は、無意識の中で生まれたそれを、論理の中で組み立ててそして意味のある作戦に組み替えていた。

（……………ここまで被害が出れば、もう“あれ”しかないはずだが）

しかし、瀬井としては、今瀬井の頭にあ（り、おそらく九能も考えている）作戦は、望むものではなかった。その作戦は、勝率が大幅に上がる代わりに、かなりの犠牲を覚悟する必要があるからだ。

（だが、結果が出るなら必要とも言えるか。できれば、犠牲は1割以下に収めたいところだが……………無理だろうか……………）

彼は、基本的に無駄死にを嫌う。しかし、それは必要のない死という意味であり、反面、必要な犠牲ならば、それが冷徹と見えても払うことのできる、ある意味合理的な指揮官である。死者の出ない戦いが最も理想的だ、などという理想論を必死に叫ぶ青臭い時期はとうに過ぎている。

自軍の利や戦いの理を優先する考え方があるからこそ、彼は今まで多くの功績を上げてきた。しかも、その相手が、人間ならざるDMFBならば、その考えの影響は顕著とも言えよう。

(しかし、そうならば、また准将の悪名は広まるといっわけか……
……一人の部下として気分のいいものではないな)

味方を平気で囮にして、味方すらも騙し、味方を利用する以外のことをしない。これが他で語られる九能のおおまかな総評である。中国地方支部に半年も勤めれば、少なくともこの話はほとんど虚偽だということは悟るものだが、しかし瀬井はあながち間違っていないとも考えている。

平気で、とは言わないが、確かに彼女は戦術の一つとして味方を囮にすることはある。仲間に作戦を隠して戦場に出ることもある。さらに言えば、はっきり言って、彼女は自分以外の疵術師を純粹な戦力とは見ていない。だから、瀬井のような他の疵術師は、自分が戦いやすいように利用するだけなのだろう。

と、あながち、どころではないのではないか、とも思えるが、これはファントムと戦う際にしか当てはまらないものである。ただでさえ規格外なファントムとの戦いで悪評が広がってしまうなど、瀬井としては不本意極まりなく、正直腹立たしいことでもあった。

(……………ふ……………、考えても、無駄、か……………)

しかし、自分の思考の意味のなさに気付いた瀬井は、今までの思考を投げ捨てて、周囲の光景に目を巡らした。

ちよつど、その時。

「お?……………案の定、だね」

周囲に、虹色のマーブル模様を常に輝かせる膜が出現した。考えるまでもない、効果の劣化もほとんどなくここまで魔術を届かせるような疵術師など、ここには一人しかいない。

「……咲、か」

「そつだねえ、で、どうするの?」

瀬井の、咲に対する他人ならざる呼び方に気付いていながらも、気付かないふりをして、尊何は訊ねた。

「現状維持でいいだろう。この部隊が出張る必要も意味もない」

瀬井の言葉に頷いて、尊何も黙って瀬井の傍らに突っ立っていた。瀬井には知る由もないが、尊何はまさに奈都海らに宣言した通りに、ただ突っ立っているだけだった。

本当に、瀬井の部下が、なぜここにいるのだろうか、と考えてしまっただけに何もしていなかった。

今だけなら自分の指揮下にもおける彼らに指示を出すこともない。まして、自分が戦って蛇を迎撃することすらもしない。することと言えば、時たま、瀬井に適当な話題を振っては、お互いに2、3つの言葉で会話を終わらせるだけ。

もちろん、尊何自身にも、特に考えがあるわけではなかった。強いて言えば、この斥候部隊なら全体の戦況も把握しやすいため、その恩恵に与ろうとしていた程度である。

尊何は、自分には特に指揮官としての才があるわけでもなく、指揮官など分不相応だということも重々承知していた。

それに加えて、尊何は、第一特殊遊隊の大半の例にもれず、集団戦闘に不向きな能力が戦闘の主体となるため、よほどのことがなければ前線に出る気はなかったのだ。

しかし、ほどなくして、その「よほどのこと」が、

「中佐!」

起こってしまった。

「どうした？」

瀬井は、自らの部下に短く問うた。

瀬井は、ついに来たか、と身構えたが、部下の発した報告は、瀬井の予想したものとは大きく違っていた。

「観測班からの報告ですが、西園寺准将が、ファントムが潜む包囲陣の中心に単独で向かったそうです！」

「なに……？」

「へえ、准将も大胆だねえ」

その報告に二通りの反応を示す2人。尊何はいつも通りだが、瀬井の疑問と驚愕に満ちた表情は、長く勤めた部下にとっても珍しいものだった。

瀬井は、九能はここで撤退命令を下すものだとばかり思っていたのだ。なぜなら、それがこの状況における最も勝率の高い方法だからだ。

しかし、九能の取った行動は、瀬井の考えとはまるっきり正反対。九能の特性を知っていれば、九能の死を心配する者はいないだろうが、それを差し引いても戦場における最上官がたった一人で前線に出るなど、あまりにも荒唐無稽な話だ。瀬井を含めた部下も当然気を遣うし、もし万が一のことがあれば、と神経もすり減らす。

確かにファントムを放置するのは危険極まりないが、ここで無駄に踏み止まるよりも、一旦退いて勝てる条件を揃えてから出直した方が合理的だ。加えて、その勝てる条件を揃える手段は、もうこの状況で成立している。

だというのに、なぜ九能が自らファントムに直接向かったのか。瀬井には理解できなかった。

しかし、

「ふーん……なるほどねえ」

と、隣に立つ尊何は、得心したように呟いた。

「どついうことだ、大尉？なぜ准将はわざわざ……」

瀬井は思わず訊ねていた。正直、なぜ自分よりも付き合いの浅い尊何にわかったのか疑問ではあったが、今はそんな些事に構っている場合ではない。

そして、尊何は、

「ふむ……おそらく、だけどね。准将は本気で勝ちに来ている、ということだよ」

「……つまり？」

「つまり、今、この状況において、准将がファントムに負けた、という事実が欲しいわけさ」

「……バカな……」

尊何のその答えは、瀬井を戸惑わせるのに十分な破壊力を持っていた。

先ほどの尊何の言葉の意味がわからない者は、この場にはいない。九能が敗北を求めるということ。それが何を意味するかは、ほぼ瞬時にして全員が把握した。

「……………完全顕現、か」

「おそらく、ね」

「そうならば我々は……………この時点で戦力外ということになる、な」

完全顕現　　いわゆる“源破顕現”は、疵術師の奥の手にして最強の魔術。疵術師が宿す源血の特性によってその効果、威力は大きく変動するが、多くは、通常の魔術師の扱う魔術の中級魔術以上にも匹敵する威力を誇る。

その中でも九能の顕現は、中級どころか魔術の各分野における最大の魔術とされる最終魔術を超える効力を持ち、文字通りの一騎当千の力、さらにファントムと単体で渡り合うことすら可能とさえされている。

しかし、その強大さゆえ、九能の顕現の場には味方は誰ひとりとして同行できない。もし倒すべき対象がファントムだけなら、九能以外の疵術師は、いても無意味であるし、むしろ邪魔ですらある。

それに加え、九能の顕現には大きな制約が架せられている。具体的には、Sランク以上のDMFBが出現し、かつその戦闘において一度敗北する、という過程を踏み、そこから許可を得なければならぬ。実際、顕現でもしなればSランクのDMFBに勝つことなど到底不可能のだが、九能にとっての敗北とは、完全な拘束状態に陥るか、再生する度に行動不能な損傷を与えられる状況になるかである。そんな状況になることなど、そうあることではなく、しかも仮に条件が揃ったところでそこから上官に許可を仰げるような状況にはほとんどなりえない。勝つこともできず、負けることも容易にできない九能には、かなり厳しい条件といえる。

「だが、たとえそうだとしても、納得のいかないところもあるが……」

とはいえ、ADEOIAとしても九能の能力は貴重なものであり、強大で危険だとしても利用できる場面ならするに越したことはない。そのためか、実際には、九能の率いる部隊に一定以上の損害が出た時点で撤退すれば、顕現の許可が得られることになっている。

当然それは九能も知っている。だということに、なぜこの期に及んでファントムに挑む必要があるのか。それだけは尊何にもわからなかった。

「そう、准将が出る必要はないんだよねえ。部隊を1つか2つ圏に使えば他の部隊を撤退させることは可能だし………やっぱり咲ちゃんに何かあったんだろうね。何をするにしても、咲ちゃんのことじゃなければ話にならないし」

「撤退するための時間稼ぎか？」

「かもね。それが一番妥当だと思うよ」

そして、二人が会話の中で出した結論はこれだった。

つまり、ファントムに勝つためには源破顕現が必要。そして、その条件である“一度の敗北”はほぼ確実。あとは許可を得るために支部に戻る必要がある、つまりところは撤退しなければならないということだ。

この状況での撤退は敗北ではなく勝利のためのお膳立てとも言えるもの。九能もそういう認識なのだろう。二人はそう判断した。

しかし、そうだとするなら、一つ矛盾するところが出てくる。

「しかし、ならなぜ撤退命令が出ない？あるいはその準備の命だ、

なぜそれが出されていない？」

それが、瀬井の言った撤退命令についてのこと。今もファントムの攻撃に晒されているこの状況では、土壇場で命令を出しては手遅れということもある。ファントムに突撃する前に命令を全部隊に行き渡らせておくのが最善、というよりもそうしなければならぬのではないだろうか。

そんな風に考える瀬井に対して、尊何は表情も視線も変えずに呟いた。

「……それが准将の悪いところだよねえ……」

「どういうことだ？」

瀬井は、意味深げに呟く尊何に疑惑の視線を向ける。瀬井には尊何の考えが読めなかった。加えて九能の考えも。

「僕たちなら命令するまでもなくわかると思ったんだろうね。多分、他の部隊には特殊遊隊のみんなが命令を伝えに行っているはずだよ。……ま、僕たちを信頼しすぎている、ということかな」

瀬井は、それこそ絶句するしかなかった。

まったくもって、指揮する者としてありえない行為。撤退という部隊の存亡のかかった行動を、その発想そのものまで部下に一任するなど、あっていいはずがない。

しかし、瀬井がある意味で憤慨している半面、尊何は涼しい表情で、

「じゃ、僕も行ってくるとしようかな。あとは頼んだよ、中佐」

こんなことを口走った。

「な！？貴様……！」

当選、瀬井をはじめその場にいた者は止めようとする。しかし、尚も尊何は笑顔を崩さず、笑って言った。

「心配ないよ。准将に加勢してくるだけだから。君たちは撤退の準備でもしておいて」

撤退もなにも、それ以前にこの場にいる彼らは、尊何が九能に加勢することを止めようとしていたのだが、尊何の表情と緊張感の欠片も感じさせない口調に、止める気すら削がれて黙り込んでしまった。

それを見てフロントムのいる方角へ身体を向けた尊何だったが、瀬井に声をかけられて再び振り返った。

「……死んでくれるなよ」

「そうだねえ、僕もこんなところで死ぬつもりはないからね。みんなが離れてからすぐに逃げるとするよ。………あ、そうだ。これ出てから少しの間でいいから誰か壁か何か僕の周りに張っておいてくれないかな？」

尊何は要望通りに周囲に防壁を張ってもらい、何の迷いもなく咲の優秀な守り籠から出て行った。

数秒、この場に沈黙が降りる。
が、

「斥候大隊、これより撤退準備を開始する。それと並行して、

他の部隊にも撤退準備の命令が下されているのかどうかの事実確認、
されていないければその通達、それをすべての部隊に対して行え。急
げ！我々だけ逃げ遅れることになるぞ！」

沈黙を破った瀬井は、自らの部隊に命じ、自分自身ともに準備
にかかる。

そんな中で、瀬井は一人考えていた。

それは、かつて家族だった者たちのこと。

8年前までともに暮らし、ともに暮らすようになる前まで、子ど
もが宿ったとわかる前まではともに戦いもした彼女のこと。そして、
その彼女との最初の子のこと。

瀬井は、元々そこまで過去や個人に執着するような性格ではない
が、人間、一度幸福を知ってしまうと中々忘れられないものである。
かつて瀬井が過ごした“あれ”は、特に目的もなく生きてきた彼
にとつて唯一とも言える生きがいであり、同時に守るべき存在とし
て、戦う理由でもあった。夫、あるいは父としての役割を果たして
きたか、と問われれば自信はない。とはいえ、会えば、彼女らも幸
せそうな笑顔を向けてくれた。その笑顔は心の底からのものである
と当時の瀬井は信じていたし、今も信じている。

………しかし

一体どこで狂ってしまったのだろうか？

どこかで歯車が噛み合わなくなってしまったのか。
あるいは、どこかの歯車が止まってしまったのか。
あるいは、どこかで歯車が逆転してしまったのか。
彼に、知る手段はない。それ以前に、

(……………考えても、詮無きこと、か。今さら、知ってどうするといふこともない……………)

彼自身に知ろうという意志がないのだから、知ることができないわけがない。

瀬井は、意味のない思考を打ち切って撤退のための準備に集中し始めた。

第1章 誘惑の狂姫 #15 (後書き)

最初に謝っておきます。すみませんでした。

さて、久々の投稿ということもあって、今回は今までで最も長いものとなりました。具体的には、19700文字以上です。残念ながら、20000文字には至りませんでした。さすがに長すぎたかな、とも思ってます。

しかし、ようやく自由になったので、これからは普通のペースで更新していけるかと。これからもよろしく願います。
ではまた、1週間後に。

第1章 誘惑の狂姫 #16

A D E O I A 中国地方支部。

その一角にある副支部長室。俺はその前に立っていた。

この部屋にいるのは、当然中国地方支部の副部長。そいつは

我らが隊長、西園寺九能だ。

俺は先ほどの戦い 結果的には敗北となったファントムとの戦いにおける被害の報告に来ていた。同じく同じ部隊の上司である未永栖さんに行けと言われて来たわけだが………どうにも入りづらい。

理由は、これも同じくさっきの戦い。そこで九能がファントムと何をして、何をされたか。それをここに来る直前に尊何さんから聞かされ、俺は驚愕した。驚愕して、その後すぐに怒りが湧いてきた。もちろんファントムに対しての怒りもあるが、それ以上に俺自身に對しての怒りもあった。

時間とあの時のファントムの言葉から考えるに、九能がファントムと直接対峙したのは、俺がファントムと遭遇し別れた後のこと。

なら、九能がファントムと戦っている間、俺は何をしていたのか？ 簡単に言えば、へたれていた。

ファントムとの差を思い知らされ、死の恐怖に陥り、戦う以前にまともに立つこともできずにその場に座りっぱなしだった。

つまるところ、俺が九能とともに戦えなかったことを悔やんでいる、というわけだ。

今更、そんな後悔をしても意味も益もないのは重々承知だが、俺はそれだけで割り切れるほど大人ではないし、九能がされたことを考えれば、そのことを笑って慰められるほど経験があるわけでもない。強いて言えば、持ち前の薄い感情を生かして何も気にしていない振りをするにはできそうだが………あの九能に通じるかどうか

か。

と、いう風に、俺はどういう顔で九能と会えばいいのを思考錯誤していたが、結局いつも通りに接する、ということに落ち着いた。

コンコン

と、副支部長の部屋の扉をノックする。なんということもない、腹さえ決まっただけなら大抵楽なものである。

「どーぞー？」

扉の向こうからくぐもった九能の声が聞こえてきた。俺はその声に従って、扉を開けて部屋に入る。すると

「あ……、奈都海……」

部屋の中心にある机で何やら書類作業をしていた九能は、俺を見るなりその手を止めて気まずそうな表情で俺の名前を呼んだ。それだけでなんとなく胸のあたりが苦しくなってくるのだから、人体とこののは不思議なものだ。

しかし、俺はあくまで報告に来ただけなので、そちらを優先させることにする。冷たいと思わないでもないが、一応仕事でもあるので。

『あーっと……今回の戦いの被害報告に来たんだが』

「え……、ああ、そうね。……お願い」

九能はトーンを落としてそれだけを言った。表情がさらに寂しげになったようにも見えたが、気にすると俺のほうまで耐えられなくなるので、極力思考から排除することにする。

『負傷者は、まあ、参戦した部隊のほとんどの兵士だ。斥候部隊にはあまり被害が出ていないが、皆無つてわけでもない。………で、死者は、今のところ56人。多いのか少ないのかの判断は俺にはしかなるが　　どうなんだ?』

俺が最後にそう訊くと、九能は手をあごに当てて考える素振りを見せた。そして、しばらくして、

「ん……そうね。十分だわ」

『………?』

俺がなんとなく疑問の表情を向けると、九能は今までの表情を苦笑いに変えて答えた。

「これで十分なのよ。それだけの死者が出れば、顕現の許可は取れる。これで勝てるってこと」

『……………』

俺は今、おそらく複雑な表情をしていることだろう。

確かに、これで勝てるのというのなら喜ばしいことだ。だが、それが仲間の死を前提としたもの、というのがなんとなく気に入らない。

仲間の死を無駄にしない、という意味があるのもわかる。いや、実際にはそれ自体が目的ではないこともわかってはいるし、ここで

死んだ仲間に向け目を感じて躊躇うのも、言ってしまうえば仲間への侮辱に他ならない。

しかし、それでも。

「なーんか、気に喰わないって顔してるわよ、奈都海。こういうところで割り切っていかないと、いざって時に痛い目見ることになるんだから、きちんと慣れておきなさい」

九能の説教の通り、割り切らなければならないのはわかってはいるが、こういうことは理屈で片づけられるものでもない。まあ、九能もそれをわかった上で、俺に言ったとは思うのだが。まだ戦場に出るようになって半年も経っていない俺に、歴戦の戦士の心がけを強要するのは、俺自身から見ても無理な話だ。

とはいえ、いつまでもこのままでは、いずれ本当にやられてしまう。そろそろ、本格的に意識改革が必要なのかもしれない。

とは思うが、報告はこれで終わりではない。九能がこれ以上言うことがないと判断した俺は、次なる報告をするために口を開いた。本当に口を開くだけだが。

『で、もう一つあるんだが』

「ん……？なに？咲のこと？」

九能の言葉で、思いだした。いずれわかることだし特別言うことでもないから忘れていたが、一応言っておくに越したことはないだろう。

『咲については特に問題ないらしい。体内の魔力がほとんどないらしいが、生きるのに支障はない。ただ、戦闘にはもう出られないと言っていたが』

「そう……」

九能はそれだけを言った。

今回の戦いで第一特殊遊隊の唯一の負傷者とも言うべきなのが、
咲だ。

咲は、領域支配の魔術に特化し、領域支配魔術自体が多種に渡るとはいえ、基本それだけしか使えない疵術師だ。ファントムはそれを狙った。どういう原理かは知らないが、範囲型魔術の使用者の魔力を奪っていく（厳密に言えば、魔術を持続させるための魔力の消費を通常の数十倍にする）という魔術を張っていたのだ。しかも、緊張感を奪っていく、という魔術をカモフラージュとして用意するという念の入れようだ。

一体どこまで咲のことを危険視していたのかは知らないが、ファントムを迷宮に閉じ込めたり、広範囲の防護壁で徹底的な妨害を行ったりと、実際にファントムにとって鬱陶しいこと極まりない所業をしてきたのは咲なので、ある意味当然かもしれない。

しかし、これで唯利亚に加えて咲まで戦力として使えなくなってしまうわけだ。これからのことを考えると、中々痛い。

「それで？報告はそれで全部？」

しかし、九能はそれ以上落胆した様子も見せずに、俺にそう訊いてきた。俺は尊何さんからの報告、というよりも伝言の書かれた紙を取り出し、読み上げる

「尊何さんからだ。……」

ファントムから。私は待つ。場所

は言わずともそちらで把握できるだろう。我が同胞の牙を、爪を、剣を、その嵐から逃れることができるなら、私と相見えることも叶おう。もちろん、女王もお待ちかねだ。時はそちらで決めて構わな

いい。数も、千で来ようが万で来ようが億で来ようが、好きにするがいい。以上だ　　らしい』

「ふーん……宣戦布告ってわけね」

九能は、驚きもせず、その顔にわずかな笑みを湛えながらそう言った。

実際には、宣戦布告もなにも、既に戦闘状態には入っている。今は休戦状態だけで、ファントムの方から仕掛けてきてもおかしくない。むしろ、そちらのほうが勝率が高い。それはあのファントムもわかっているはずだ。

そんな状況で、戦いの開始をこちらに委ねる意味も理由もわからない。あるとするなら、“勝つ”という目的以上に重要な何かがあるということなのだろうが………あるいは罠という可能性もあるし、正直、のこのことファントムの土俵に上がる必要はないような気がする。

と、考えていたのだが、

「いいわ、その誘い、乗りましょう」

『……いいのか？』

俺は、驚愕と不安とわずかな恐怖を乗せて、問う。

「ええ、そうするしかないでしょう？ファントムの誘いを蹴るっていうのは、つまりファントムをこのまま放置する、ということ。そんなことしたら、好き勝手暴れられて取り返しつかないことになるかもしれないんだから」

確かにそうかもしれんが、だからといって正面切って正々堂々とつか

喊することもないだろう。率いていける人員数に制限はないが、今の状況を鑑みても、連れて行って戦力になりそうな疵術師といえ、せいぜい50人がいいところだ。周辺の小支部から連れていくにしても、現実的ではない。巨大組織ゆえの面倒な手続きのせいで時間がかかりすぎる。その間に、九能も懸念しているようにしびれを切らしたファントムが暴れるかもしれない。

しかし、九能はその直後、とんでもないことを言い放った。

「で、それ、私たちの部隊だけに行くから」

『……………は？』

「だから、第一特殊遊隊だけに行くの。みんなにも伝えておいてくれる？」

九能は死ににでも行くつもりなのだろうか？

第一特殊遊隊だけでファントムと戦う？この、唯利亜も咲も欠けた、10人にも満たない人数で？確かに、唯利亜や咲がいるからといってファントムと戦えるかといえ、そんなことはないが、ならば逆に言えば、俺たちだけで行くのはこの上なく無謀だということになる。一度勝ったことがあるとはいえ、無謀なことに変わりはない。九能は一体何を考えている？

と、その時の俺は大いに驚愕に満ちた表情をしていたのだろう、九能は少しだけ笑って俺に言ってくれた。

「そういえば、奈都海って私の顕現、見たことなかったんだっけ？」

問いに俺が頷くと、九能はさらなる満面の笑みで答えた。

「なら、憶えておいたほうがいいかもね、私の源破顕現は勝利だっ

てことを。あの程度のファントムならじゃれてても勝てるわ」

『……………』

その言葉の溢れんばかりの絶対的な自信は確かに心強いが、その牙の向けられるはずのない俺まで恐怖を感じてしまうのはなぜだろうか。なんとなく九能の笑みが、魂を刈り取っていく死神の不気味な笑みにも見えてくるから不思議である。

それに、なら今までのあのファントムとの戦いは何だったのか、とも言いたくなる。最初からそれをしていれば被害もなく勝てたのでは？ 顕現に何か制限でもあるのだろうか？

源破顕現の存在自体は知っていたが、それが使われるのを見るのは今回が初めてになる。そんな俺があーだこーだと言っても意味はないだろう。だが、顕現がどれほどの威力を持っているのかも、伝聞でしか知らないのだから頼もしくは思えても中々不安自体は拭えないものだ。…………… 本当に大丈夫なのだろうか？

「それで、まだ何かある？」

『…………… いや、これで全部だ。俺は戻るとする』

「ん、そ。なら、またあとでね」

俺の不安に満ちた心中などお構いなしに、九能は次を急かすが、残念ながらこれ以上俺から言うことはない。いくつかのやり取りの後、俺はこの部屋を辞そうとした。

そこで、

「…………… 奈都海」

と背後から九能に呼び止められた。

なんとなく嫌な予感がしながらも、俺は振り返って九能の座っている執務機のほうを見る。そこには、俺がこの部屋に入ってきた時と同じ表情　　つまるところ、とてつもなく申し訳なさそうな表情をした九能がいた。

「その……ごめん、なさい……」

なぜかいきなり謝られた。

『なぜ謝るんだ？』

なので、その疑問を率直に伝えてみる。すると、九能は今までに見たことがないような、泣きそうな表情をして、訊ねてきた。

「な、奈都海は、気にしていないの……？」

という風に。

何を、ということとは言わずともわかると思ったんだろう。俺も、訊かなくてもわかる。

やはり、あのことを気に掛けていたということか。尊何さんから聞いたこともある程度は推測を含んでいるのだが、少なくともレイブ、あるいはそれに近いことをされていたことは間違いないという。それだけのことをされればさすがに九能でも応えるか。というか、それでもケロッツとしていたら逆に引く。

だから俺は、九能を安心させるために、

『特に気にしてはいないが？』

という答えを返した。

確かに聞いた当初は怒りを憶えもしたが、九能に対して何かを思った、ということはない。罪悪感はずがに抱いたし、今も感じているが。

しかし、俺の返答を聞いた九能は、すぐに安堵したような表情をした。

「……………」

が、その直後に何事か考えるような表情になり、

「……………」

突然何かに気付いたように、若干俯き気味だった顔をはね上げた。というか、あれは……………怒っている？

と、俺が考える間もなく、

俺はいつのまにか天井を見つめていた。

いきなり人間にはありえない速度で振り回されたせいで、頭の処理速度が追い付かない。なんでこういう時に限って俺の高速処理能力は発揮されないのか。

で、そんな悪態は放置して俺の記憶を辿ったところ

一瞬で距離を詰めてきた九能に首根っこを掴まれ

恐ろしい速度で部屋の隅にある仮眠用のベッドに押し倒されてしまった

ということが起こっていたらしい。……なんで？

「……………なんで、よ……………？」

いや、それはこっちの疑問だったの。しかも、なんで俺の上に四つん這いになって覆いかぶさっているのですか、あなたは。ということ俺が言う前に、九能は、

「なんで！何も感じなかったの!？」

と、泣きそうな、と十分にわかるような声で叫んできた。

……………何のことだろう？本気でわからない。ここまでさせるようなことを、俺はしただろうか？少なくとも俺の記憶にはないが……………

「私は、あなたの彼女なのよ？その彼女が自分以外の、しかも人間じゃない化け物にレイプされたっていうのに、奈都海は何も感じなかったの？何も思わなかったの？……………なんでそんな、特に気にしていない、なんて言えるのよ？……………ねえ、私ってそんなに奈都海にとって軽い存在なの？どうなの？」

捲し立てるような九能の言葉に、俺はやっと納得した。

『そういつ、ことが……』

「ッ、そういつとか、じゃないでしょ！？奈都海、ほんとに私のこと」

『好きだよ、愛してる』

「っ……」

俺が九能の言葉を遮ってそう言うと、口を噤んで押し黙った。

本音を言えば顔から火が出るほど恥ずかしかったが、そんな理由で黙っているわけにはいかない。もし俺が間違っただというのなら、それを正すのも俺でなくてはならない。九能に誤解をさせたくはない。

「な、なら……！なんで、あんなこと……」

しかし、俺の思いに反して、九能はついに涙を流し始めてしまった。その滴が俺の頬にもかかる。

『言い訳をするつもりはないが……だから、だよ』

俺は内心焦っていた。それでもなんとか口を開けたのは、俺を焦らせた九能の泣き顔そのもの。

とはいえ、焦っていたからか、短く要領を得ない言葉しか出せなかった。

「なによ、それ……」

『だから、俺は、お前がレイプされたぐらいで愛想を尽かしたりは

しないし、それだけで捨ててしまうほどお前のことを軽く思っていない。そういう意味での、気にしてない、だったんだが………
…言葉が足らなかつたか?』

「……………足りないわよ、バカ……………もつと言葉にしてよ、不安になるんだから……………」

俺が訊ねると、九能はさらなる罵倒とダメ出しを重ねてきた。
しかし、それはさっきまでとは違ってマイナスの響きはなかった。
いつもの、ふざけて言い合う時のものに似ていた。

「奈都海のバカ……………」

『……………ああ、バカだよ、悪いか』

「……………ううん、悪くない。その方が奈都海らしいもの」

バカなのが俺らしいってずいぶん言いようだな。まあ、それもまたこいつらしいが。
で、だ。

九能さんや、そろそろ俺の上から退いてはくれませんか?このままだと、とても不穏な未来しか見えないのですが?

「?なに?」

俺の顔を見ながら問ってくる九能。俺はそれに答えようとしたが、

『いや、そろそろ退いてくれないかなー、なんて……………おわ!?』

俺が要望を言い終わる前に、九能は俺の上に倒れこんできた。そ

のまま俺に抱きついて顔を胸に押し付けている。やっぱりですか、そうですか、こういう展開になりますか。

しかし、九能はそれからいくら経っても動こうとはしなかった。俺が怪訝に思っていると、九能は顔を押し付けたまま話した。

「ん……、何もなくていいから……しばらく、このままで、いい？」

そうしてほしいと俺に請うように言う九能に、俺は何も言えず、結局成すがままになってしまった。

少しして、九能がさらに俺の胸に顔を埋めてきた。おそらく……泣いているのだろっな。まったく、この光景を亜美つぐみさんが見たら激昂すること間違いなしだ。泣かせんじゃねえ！とか言っつて殴ってくること必至。

だが、もし、その制裁が来ても、俺は俺の意思でそれを受けられる。これは、正真正銘、俺が泣かせたことだ、それに間違いはない。

俺は、九能の背に手を伸ばして抱きしめた。

ADEOIA 中国地方支部に2つあるカフェテリアの内の1つ、その一角に、彼らはいた。

「……だり」

「本当にダルそうだね、久宮」

「仮にも軍人なんですから、もう少し真面目ぶってみたらどうですか？」

「真面目ぶるだけじゃダメでしょ……」

「というか、こんな寛いでいいんですか？」

「いいつしよ、別に。他にすることもないし？」

「ZZZZZZ……」

発言したのは、上から浅木久宮、小鳥遊尊何、大原深夜、伊神未永栖、上杉天代、浄美未来小で、寝ているのは三井魅戈。つまりところ、第一特殊遊隊の面々である。幾人が欠けてはいるが。

今、彼らは戦いの後のほんの一時の平穩を過ごしている。各々軽食を摂ったり、コーヒーやジュースを飲んだり、睡眠を取ったりして大いに寛いでいる。傍から見れば、戦いの後だとは到底思えないほどに。

このカフェテリアは普段も、昼食時を除けば比較的静かなものだが、今日はいつにも増して静寂が目立つ。

それも当然、彼ら以外のこの中国地方支部の疵術師たちは、現在非常に多忙を極めており、普通ならこんなところで寛いでいる場合ではないからだ。彼らはただ単にやることがないから、という理由でここにたむろっている。

彼ら以外の者が忙しい、その原因は無論さきほどのファントムとの戦闘で、それによって負傷した者の治療や戦場となった現場とその周囲の事後処理を行っている。もちろん、そこにファントムが既に見えないことは確認済みで、そもそも、魔術師であれば視認できるほどの規模にまで膨れ上がったDMFBの群れが離れた高台に存在することもここでは既に確認できている。加えて、それが今のところ自分たちの直接的な脅威にはならないこともほとんどの者が知っている。ただ、その判断のソースがファントムの発言だけである、ということを知っているのは第一特殊遊隊のメンバーだけであるが、その中で唯一、そのファントムと対峙した尊何は、さきほどの会話からなぜか皆黙りこくってしまった中、いつもの笑顔を崩さず真っ先に口を開いた。

「それにしても寂しくなったね、この部隊も。2人も欠けてしまうなんて考えもしなかったよ」

「誰も死んでませんが……？」

まるで懐かしむような口調と表情で語る尊何に、冷静なつつこみを入れたのは深夜だった。しかし、それにも尊何はにこにことした顔を向けるだけで何も言い返さなかった。

その姿に違和感を覚えたのは、ここにいる尊何意外の全員。しかし、それを実際に口にしたのは未永栖だけだった。

「尊何………、まさか、怖い？」

「……………」

その質問にも尊何は無言。

未永栖の質問は、他の皆も頭に思い浮かべながらもありえないと否定してしまったものだった。

ある意味常に泰然自若としている尊何が恐怖など感じるはずがない、という思いこみに似た信頼がメンバーの中にはあった。実際、尊何は、それこそ笑顔で火の海やDMFBの群れに突っ込んでいくような豪胆の持ち主なので、恐怖を感じにくい、という評価はあってもいいかもしれない。

だが、

「ああ……、そうかもねえ。僕は怖いんだろうね。最近感じていなかったから忘れていたよ、これが恐怖、ね……」

ようやく開いた尊何の口から出たのは、そんな彼らの評価を、ある意味で肯定し、ある意味で完全に否定していた。

「言い訳するわけでもないけど……あのファントムかもね、恐怖の対象は。……………あれだけの存在を目の当たりにして何も感じない人がいたらそれこそ異常だよ」

尊何らしくないその発言に、この場の皆が言葉を失う。

しばらくして、この静寂を破ったのは久宮だった。

「なんなんだよ、今回の敵は……………勝てんのか…………？」

もちろん、この状況で出る言葉が前向きなものになりえるはずがない。

久宮の質問には、誰も答えられなかった。

九能の顕現とフロントム、その両方を知っているはずの尊何さえも、勝てる、と断言できなかつた。

「ミリア？いる？」

私は暗闇に声をかけた。

当然、暗闇そのものに声をかけたわけじゃない。ただ照明の点いていない部屋にいるだろう人を探して、という意味で、それ以上の理由はない。

しばらくして、その暗闇から、すつ……と、人影が浮かんできた。

「あ、准将じゃないですかあ。何かあったんですか？」

その影 名前をセツティミア・エックハルトという、この中国地方支部のDMFB監視施設の管制官を務める少女は、着けていたアイゴーグルを外してそんな質問とともに微笑んだ。それに、私も微笑んで逆に訊き返す。

「ミアア？ここで何してたの？」

「ふえ？ネトゲですけど、なに あいたっ!？」

最後まで聞く前にミアアの頭を拳骨で小突いた。

「い、痛いですよ……」

涙目の上目遣いでこちらを見上げてくる姿は、抱きしめたくなくなるほど可愛らしい。まるで猫のようにはつちりとした目に、低めで愛らしい鼻、小鳥の囀るような声の紡がれるその口は小さく桜色で今すぐにでも奪ってしまいたいくらいだ。

しかし、ここは心を鬼にする必要がある。別に、持ち帰って好き勝手愛でてから解放してもいいけど、そうするとなんとなく負けた気がするし。ついでに理性も負けると思う。部屋で何をしてしまいか、自分でもわからない。こういう可愛いものは隅々まで愛でたくなる性質だから。

まあ、そんな私の性的嗜好は置いておいて、なぜ、彼女は忙しい時にこの部屋でネットゲームなどをやっていたのだろうか？それを訊いてみると、

「だって……誰も構ってくれないんだもん……」

そついう問題だろうか？とりあえず私の理性が壊れかけたことは思考の範囲外に弾き出して、誰も構ってくれないからネトゲに走っ

たなんて、ミアはそんな言い訳が通るとでも思っているのだろうか？

とまで考えてから、私は一つの可能性に思い至る。

「……ミア、自分の仕事は？」

「みんなの戦闘記録からのファントムの魔力解析ですか……？もう終わっちゃいましたよお」

そう言って渡された書類は、確かにすべての項目が埋まっていた。ただし

「なに、これ……？」

そのほとんどが「不明」というありえない結果で埋まっていた。あれだけ戦っておいて、ほとんどが不明。そんなことがあるのだろうか？

普通に見れば手抜きと取られてもおかしくないこの書類を見て、私はミアに訊ねる。

「これは、どういうこと？」

「ひう……し、仕方ないじゃないですか……。何回やってもその結果しか出なかつたんですから、ミアにはどうしようもありませんし」

それは確かにそうだ。この解析を実際にやっているのは、ミアではなく機械なのだから。

誤解しないでほしいのは、この場で言う機械というのは、一般に言う電子機器などとは全く異なる。言うなれば、魔導機械、とでも

言えはいいだろうか。正式な分類名はないからそんな言い方になるけど、意味的には間違っではない。

それは、電力ではなく、魔力で稼働するからだ。つまり機械に、電導回路の代わりに魔導回路　魔術師で言うところの喉応術性神経　が組み込まれている、ということだ。その仕組みの詳細は専門家ではないから詳しくないけど、とりあえずそのおかげで電動機械にはできない魔力の解析と一定の指向性を持った魔力の観測ができる、というわけ。ちなみに、指向性を持たない、あるいは特定の指向性以外の指向性を持つ魔力の観測は未だにできていない。

だから、ミリアを責めてもしょうがない。機械を責めるのは、それ以上に虚しい。

入力ミス、という可能性もないわけではないけど、何回もやっているならその可能性はかなり低いはず。

しかし、普段ならこんな結果は出ない。対象のDMFBの純正魔力の素体まで不明なんて、今まで疵術師をしてきて見たこともない光景だ。あのファントムは絶対に人間以外の生物の純正魔力も取り込んでいると踏んでいたのだけど、これでは意味がない。そもそも、その項目の結果に「人間」と出ていてもおかしくないはずなのに、それすらもないなんてどう考えても不自然にすぎる。

「あ、あの……准将……」

「……、あ、ごめんなさい、なに？」

思わず考え込んでしまった。私の悪い癖、再発。

見ると、ミリアはとても申し訳なさそうに俯いていた。自分で言うのもあれだけど、さっきの私に似ているかも。

さっきミリアに訊ねる時、少し厳しい口調だったかな、なんて少し反省しながらミリアの頭を撫でて、

「大丈夫よ、あなたを責める気はないから」

「……ほんと、ですか？」

「ええ、あなたがミスしたわけじゃないもの。責めてもしょうがないでしょ？」

そう言うと、ミアは笑顔で返事をしてくれた。これくらいの歳の娘は本当に素直で可愛い。でも、まあ、さっきのネットゲと土曜日のあれは許されるものでもないけど、ね。実は、後朱雀沙夢濡救出の際のあの放送は彼女によるもの。できればここで、忙しくてできなかった制裁を加えておきたいんだけど

本題は、そんなことではない。

「で、本来の用を済ませたいんだけど、大丈夫よね？ゲームするほど暇なんだから」

「え？い、いえ、今ちようど手こずってたボスをみんなで倒すぞーって意気込んでたところで………」

「来なさい」

「ふえあつ！？ダメ、やらせて、あれ倒さないと入手できないレア武器が　！」

その悲鳴を無視して、私はミアを引きずっていった。

無理やり連れてきたミアは、やけに従順だった。

「ああ……もっかい最初からかなあ……新しいアカウント作って……あ、メアド偽造しないと……今のじゃ無理だもんね……いつそハッキングでもしちゃうかなあ……ふふっ……」

……まあ、なにかぶつぶつ呟いてるけど、これは無視するべきなので、完全に聞こえないふり。犯罪でもしかけたら当然止めるけど。

で、今ミアが何をしているかというところ、ある端末に向かって何かを入力している。何かはわからない。私は今までADEOIAでは戦闘しかしたことがないから、こういう事務系統の仕事については詳しくない。

ただ、一支部の副部長として、誰がどんな役職でどんな仕事を主にしているのか、ということは把握しておく必要がある。が、その中でも、特定の役職につく者にしか伝えられないものもある。

それが、今ミアの行っている、総司令本部との通信回路の暗号解読。

総司令本部は、その名の通り世界中の支部、小支部を統括する、ADEOIAの中心部だ。現在、そこから発信される命令は、インターネットを介したものがほとんどだ。魔術と科学は対立するなんてよくいうけど、そんなことはない。魔術師からすれば魔力も消費せずに遠方の人間と意思疎通できるなんて、これ以上ないほどに便利だし、熱を起こしたり温度を変化させたり、なんていうことを魔術なしでできるのだから使わない手はない。それに加えて、戦争だつて同じだ。確かに兵器を必要としない魔術師は経済的な戦争がで

きるだろう。でも、魔術師の優劣は生来の才能とセンス、それに環境に大きく依存している。武器さえ持てばほぼ対等な戦いができて数も多く調達できる科学を使った戦争のほうが、人数という一つの戦力の目安を完全に崩壊させる魔術師よりも勝敗も含めた結果的な効率はいい。故に、その考えが普及した第二次世界大戦以降の戦争では、魔術師はほとんど参加せず、参戦したとしても使う武器は銃火器が普通で、魔術を使うことはほとんどなかった。特に、世界最大の魔術師組織に所属する魔術師は、魔術師以外の人間が主要となる戦争、紛争に参加することを堅く禁じられている。

そして、その世界最大の魔術師の組織の一機関であるADEOIAは、その命令系統をほとんどインターネットに依存している。故に、そこに一般の(?)ハッカーが紛れ込む可能性がある。何の目的もなく、ただハッキングを繰り返すハッカーが急増する今現在、それに対するセキュリティは必須。そして、それを解くことができるのは、各支部の限られた者のみ。能力が認められ、かつ信頼に値すると判断された者のみが、その権限を有する。ちなみに私はできない。信頼されていないから。

しばらくして、画面に向いていたミアの顔が、こちらに向き直った。

「准将、終わりましたよぉ」

準備が終了したらしい。

「そう、じゃ、あとは私でやっておくから外してくれる?」

「はっい。それじゃ、またあとでー」

「ええ、ゲームなんてしないでね?」

「え……や、やだなあ、そんなことするわけないじゃないですかあ、あははは……」

一応ミアには釘を刺しておく。信用できるような返事ではないから、あとでもう一度見に行ってみるけど。なんて私の考えにはおそらく気付かず、そそくさと逃げるようにミアは去っていった。さて、ここからは、私の仕事。

あちらと繋がったなら、あとは私だけで十分。

私は、数字や記号が（私から見れば）雑多に並んでいるモニターを一瞥し、キーボードのEnterキーを一回押す。すると

グン……

という電子音とともに、画面が暗転した。

それから数分、何も知らない人が見たらフリーズしたのではないかとさえ思ってしまうほどに反応のない画面を見つめ続けていると、

『承認しました。解読者、セツティミア・エックハルト技術中尉 ADEOIAイタリア・ヴェネト支部より日本・中国地方支部に派遣、所属は解析部 よろしいですか？最終確認は本人の声紋、及び術紋での判断となります。本人の声をもって承認の意を示してください』

「OKです」

突如響いた機械的な女性の声に、どこからともなく聞こえてきたミアの声。当然、ミアはさっき出て行ったからこの場にはいない。

これがミアの得意とする魔術　音、光、臭いなど、人間の五感で感じ取ることのできるものをその場に“残すこと”ができる魔術だ。

例えば、さきほどのように、条件を指定した上で自分の声という音声情報をこの場に残すということもできるし、空間を指定してその空間に進入した者に幻覚を与えるという視覚情報を残しておくこともできる。他にも、痛みという情報を残しておくことで、相手に痛みだけを与えることもできる。何も知らない敵からすれば、困惑するしかないため、効果的ではある。が、戦闘に向けた能力とは言いづらく、実際戦いに使うにしても対人戦でしか通用しないものも多いため、彼女が戦場に出ることはごく稀だ。

ただ、こんなことにわざわざ魔術を使う必要はないと思うけど……

ま、それは置いておいて。

モニターからは、次の指示が出ていた。

『通信要請者の声紋、及び術紋の認証を行います。本人の声をもち、名前、所属、階級を教えてください』

「西園寺九能、A D E O I A 日本・中国地方支部副部長兼第一特殊遊隊隊長、階級は准将」

指示通り、名前と階級、長つたらしい所属を告げる。

『承認しました。次に、通信先を入力してください』

これは少し意外だった。制限されているということも少しは覚悟していたのだけだ。

とりあえず好都合ではあるので何も言わずに通信先を入力。

『了解しました。しばらくお待ちください』

ちなみに、術紋というのは魔力における指紋のようなもの。人が体内に魔力を保持している際、それに精神情報が付与されて指向性を持つわけだけど、それは人によってある程度の規則性を持つことになる。それは性格によるものだったり肉体によるものだったりするけど、当然人によって大きく違うし、時間や成長、老化によって変化することもない。実際に形にできるものではないけれど、特殊な魔術、あるいはそれを付加した機械によって区別、判別できるから、魔術師からすれば、声紋と同時に採取、判断できるこれは指紋よりも便利なものになっている。魔力は呼気にも含まれているから、魔力を出そう、と意識する必要もない。

もちろん、私も術紋によって機械に本人かどうかを区別されているわけ。

さらに数分経って、ようやく目の前のモニターに反応があった。

『準備は完了しました。接続状況は良好です。では』

ピ、という音ともに、画面には一人の女性が表示される。

見た目だけを見るなら、歳は20後半から30前半辺り。ウェーブのかかったブロンドヘアに、空よりも澄んだ碧眼。日本人からすれば羨ましい限りの細く、それでいて健康的な手足。一目で欧人とわかる彼女は、今まで寝ていたのか、寝ぼけ眼をこすりながらこちらへと口を開いた。

『……なんじゃあ？こんな朝早くに……』

日本からの通信だと言われたからだろう、それで日本語で応答するあたりはさすがと言っべきか、あるいはその日本語はその年齢の女性が使うものではないと突っ込むべきか。まあ、男性でも使わな

いけど。

それはさておき、こちらの素性はあちらには伝わっていないはずなら、まずは自己紹介からだろう。

「ADEOIA日本・中国地方支部副部長、西園寺九能准将、です。此度は緊急の要請がありまして」

『クノーじゃと!?!?』

いきなり響いた大声に、私は思わず顔を顰める。画面に映る女性は眼を見開いてこちらに身を乗り出していった。久しぶりだから仕方ないのかもしれないけど……ここまで驚かれるとは思わなかった。

『クノー?クノーなのか?本当に?……ああ、その姿はクノーに間違いないの……久しぶりじゃの、そうじゃろ?何年ぶりかの?あれから幾ほど経ったかの?』

「ええと……6年、かと……」

なぜこの人はこんなにテンションが高いのだろうか?対応に困るんだけど、これ。

『6年……6年か。それだけ経ってもやはりお主は変わらんの。まだ小娘だったわしに、戦い方と日本語を教えてくれていた頃と全く同じじゃ』

といっても、そんな日本語を教えた覚えはないんだけど、一体どこで間違えたんだろう?まさか時代劇でも見たとか? あり得ない話でもない。昔は時代劇が好きだった記憶があるから。

若干この人の対処に辟易としていると、彼女はおもむろに得意顔でふっふーんといった感じに胸を張ってきた。何？その無駄に大きい胸の自慢？

「あの、なんででしょうか？」

『なんででしょうか、じゃと？知ってはおるじゃろうが、わしは今やっとお主に宣言した通りになったのじゃぞ？そう、お主にこうして言っておきたくなるほどに嬉しいのじゃ。なにせ、わしは今

ADEOIAの元帥になったのじゃからな！』

……………うん、知ってる。なんでこんな娘がなっただらうって、今でも疑問に思ってるし。そろそろADEOIAも潮時かな……

っと、話がそれる前に紹介しておこうと思う。この、画面の中で年甲斐もなく豊満な胸を張っているのが、ADEOIAの元帥であるマリアンヌ・ジエーランクルト。つまり、私たちのトップだ。そして、それと同時にテンプル魔術団の諮問機関、枢密院の一人でもある。

魔術団についてはいずれ説明するとして、枢密院というのは魔術師を統率する魔術団の中でも、名目的に魔術団の頂点に立つ魔術団長や元老院とは異なり、魔術師たちを直接統べる、事実上の魔術師を統率する機関のことだ。加えて言っておくと、ADEOIAの元帥になるということは、必然的に枢密院に加わることを意味している。

「それは、知っておりますが……それが何か？」

元帥にどう返せばいいのかわからず訊いてみると、

『ダメじゃ、ダメじゃ。そんな他人行儀に話されたくすぐすぐたくて敵わんわ。普通に話してくれんかの？』

と、言われても。私は准将で、彼女は元帥。どちらが上かは明らかだし、それがわかっていながら失礼を働くわけにはいかない。でも、

『命令じゃぞ？元帥からの、な』

と言われたら、従わざるをえない。

私は、若干頭を下げた姿勢から顔を上げて、彼女を見ながら、

「なら、これでいいの、マリー？」

そう言つと、マリーはにやりと笑い、

『そうそう、それじゃ。それでこそクノーよ』

と、返してくれた。

彼女と私は、いわゆる師匠と弟子という関係にあつた。その関係もマリーが20歳になった時に解消されたけれど、マリーが枢密院の候補として有力視されていた6年前でも、私を師匠として見ていたから、今までそれが続いてもおかしくないかもしれない。ちなみに、マリーの今の年齢は37。私がマリーの面倒を見始めたのが10歳にも満たない頃だったから、実に30年近く彼女との師弟関係は続いているというわけだ。

『しっかし、本当に久しぶりじゃの。会うのは6年前の「壊滅戦」以来じゃろ?』

「そうね。それに、あの時はまともな会話もできなかったから、こうして話すのは」

『10年も前、偶然ナミユールで会った時が最後じゃな。あの時は楽しかったしの』

「そんなに前だった? 10年も経ってないように見えるわね」

『……それは、遠まわしなお世辞かの? 10年経ってもわしは老けておらん、という』

「そうかもねー?」

『ええい! 10年に一度しか歳を取らぬような奴に言われても、嫌味にしか聞こえんわ! ……まったく、本当に変わっておらんの、クノーは』

「あなたもね………ほんとよ?」

そうやって、時には冗談も挟みながら私たちはしばらく昔話に花を咲かせた。

私については、日本に戻ってきて何が変わったとか、そろそろ出世しないのかだとか(本来はデリケートな話題のはずなのに)。マリーについては、昔馴染の魔術師に子どもが生まれたとか、弟子が喧しいなんていう愚痴だとかをお互いに喋りあった。

そして、お互いにここで話すような話題も尽きてきた頃。

そろそろかな、と思う私の心中を察したのか、マリーもまた、その顔から笑顔を消した。

「で、そっちの方でこちらに味方してくれそうな人は、いる？」

これだけでわかる人はどれだけいるだろうか？ 極限まで情報を減らした質問。しかし、マリーはそれだけで今までの崩した態度を深刻な表情に切り替えて、答えた。

『そうじゃの　　枢密院にも、幾人かはおる。じゃが、まだ、敵にはならん、という段階じゃろつな』

「そつ……………それは、誰？」

この辺りは別に盗聴されていようが構わない。枢密院に所属する魔術師に手を出すことはすなわち魔術団を敵に回すも同義。それがたとえ、枢密院の上に立つ“賽の目”のメンバーであったとしても、むしろ、敵に回るだろう誰かが聞いていてくれたほうがいい牽制になる。

『ふむ、今のところは、インフィナレターナルの青二才と、ベルリオーズのババアくらいかの』

本人がいらないとはいえあんまりな呼び方はとりあえず無視して、私はラストネームしか言われなかった彼らのファーストネームの方を予想してみる。

「インフィナレターナルってことは……………もしかして、ソフィのこと？」

『そうじゃ。よくわかったの？』

マリー言うところの青二才　ソフィンエル・インフィナレターナルは、インフィナレターナル家の現在の当主。

インフィナレターナル家は、元々魔術団の中でも有名で、それなりの勢力を誇る魔術師一族だ。その歴史は古く、彼ら自身の言葉を信じるなら、西暦以前から続いているという。また、彼らが有名になった要因として、その特殊な体質がある。ここで言うと長くなりそうだから割愛するけど。

でも、ソフィは、私の記憶が正しければまだ28歳のはず。その若さで枢密院に就任なんて、少なくとも私の人生の中ではなかったことだ。枢密院は閉鎖的だから、私が知らなかっただけかもしれないけれど。

そして、次のベルリオーズというのは、

「…………フランチェスカ・ベルリオーズだったりしないわよね？まさか」

『その、まさか、じゃが？何かあったのか？』

というか、枢密院の中でベルリオーズといえば彼女しかありえないんだけど……………なんとなく現実逃避したくなった。

突然だけど説明。枢密院は、12の称号と13の役職に分けられ、称号は黄道12星座を元にしたものになっている。その内、双児（Gemini）には2つの役職と2人の魔術師が据えられているため、枢密院は常に13人の魔術師が所属していることになる。マリイは宝瓶（Aquarius）の称号を持ち、ADEOIA元帥の

役職に就いている、というわけ。後で訊いてみると、ソフィは天蠍（Scorpio）の称号で、総司令本部の防衛を任されているらしい。よくまあ、あんな若造にそんな大層な仕事を押しつけたものだと思う。彼とは面識があるから、確かに優秀だということは知っているけど、さすがにまだ若すぎる。他と比べて圧倒的に経験が足りない。やはり、傀儡として就任させられた、というところだろうか。

そして、フランチェスカ・ベルリオーズ、彼女は、磨羯（Capricornus）の称号で、北米の魔術師の統率を任されている。私が日本に戻ってくる前は、サンフランシスコにいたから………避ける理由は察してほしい。

「そ、それで、他には？ 枢密院ではそれだけなの？」

あの人については何も語りたくない。そう思っただけの話転換だったけれど、マリーはそれを察してくれたのか、一応乗ってくれた。

『今のところはその二人かの。あとは、どっちつかずというか優柔不断な奴ばかりじゃしのお………正直あのメンバーは疲れる………まあ、どうせ結果が出るのはだいぶ後になるじゃろうから、まだ余裕はあるんじゃないか………はあ』

適当な話題だったのに、思いもよらずマリーの枢密院での苦労が垣間見えた。マリーは枢密院の中でも中堅に位置しているから、下の面倒も見なければならぬし、上の機嫌も窺わなければならぬ。基本的に好き勝手させてもらっている私とは正反対だ。そう考えればマリーの愚痴もしょうがないかもしれない。

でも、その内容自体は見逃すわけにもいかない、ある意味一大事だ。

「……なら、他は？」

『他、の……………“賽の目”に少しだけ動きがあったかの』

「どんな？」

予期せず飛び出した魔術団の最高機関に、少し驚きながらも訊き返す。

“賽の目”とは、魔術団長とその決定事項の審査を行う元老院からなる機関の名だ。魔術団長1人と元老院5人で合わせて6人、だから“賽の目”。この“賽の目”というのは俗称なのだけど、彼ら自身も自称として使っているから、半ば公式名称となりつつある。地位としては枢密院の上、魔術団の中では最上級の権力を持つ機関だ。

その“賽の目”に何か動きがあったとなれば、聞いておく必要がある。

『どんな、と言われても困るがの……………元老院の一人が死んだ、という話じゃ。クノーも聞いておるじゃろ？』

「残念ながら聞いてないわ。上層部だけの秘匿事項だったってことね」

マリーは「あちゃー」といった具合に顔に手を当てていた。けれど、私はADEOIAの将官なのだから、明かしてもさほどの問題にはならないだろう。

しかし、一人の元老院の死。これは、その死因によって意味合いが大きく変わってくる。

『ちなみに、老衰などではないぞ？それを殺した魔術師も既に把握

しておる』

「いつ？」

『2年ほど前じゃの。それ以来FASCAの連中は元老院殺しの魔術師を追っているらしいが、尻尾すら見えてこんらしいがの』

いい気味だ、と言う風に鼻を鳴らすマリーは、しかし危機感も憶えているはずだ。元老院には当然魔術団の中でもずば抜けた実力を持った魔術師しか入ることは許されていない。その元老院を殺せるほどの魔術師が今でも野放しになっている、というのはどれだけ死地を潜り抜けたベテランでも恐怖を抱くには十分な理由だ。

ま、いいか。この話題はこれくらいにしておこう。あとはお互いに個々で調べておけばいい。

「で、マリー。そろそろ本題に入りたいんだけど」

『む？もう終わりが。シュベルテンベルグの家にもまた子どもが生まれたとか、まだ話題はあつたのじゃがの』

シュベルテンベルグというのは、今の魔術団長のクラウディオ・ヴェリア・シュベルテンベルグのことはずなんだけど、そんな軽々しく話題にしてもいいの？

『ちなみに娘だそうじゃ』

そんなこと誰も訊いてないから。

「で、本題なんだけど」

『むう……………』

なにが、むう、だ。こっちは真面目だっていうのに。

『で？なんじゃあ？』

いかにも面倒そうに頭をぼりぼり掻きながら、マリーはそう訊いてきた。不貞腐れるのはいいけど、その態度は大人としてどうなの。私は、その辺りも大人の対応として軽く受け流して、マリーの言葉に答えることにした。

「源破顕現の許可が欲しいのよ。今すぐ、ここで」

『……………』

一瞬の沈黙が流れる。

マリーはそれまでの格好を改めて表情も引き締めた。

『それが何を意味するかは、わかっておるのじゃろっな？』

「あと3回でしょう？今回使ってもあと2回よ。私の人生のタイムリミットにはちょうどいいわ」

投げやりにそう言うと、マリーの表情が歪んだ。それは、おそらく激昂。

『クノー、お主のその諦めのいいところは好きじゃったが

今さっき嫌いになったわ。そんな制限を作った魔術団など糞喰らえじゃ、確かにわしはそう思っておる。じゃが、それをいとも簡単に受け入れたお主も同じじゃ。なぜ、あの時拒絶しなかった？

お主、それがかつこいいとでも思っておるのか？」

心の中では怒りが燃え盛っているはずなのに、マリーの言葉はその炎を持て余して燻らせているかのようにやけに静かだった。

「自己犠牲がかつこいいなんて思う時期は、あなたが生まれる前に過ぎたわよ。これは私の決めたことだし、もう変えられない。それに、私とあなたの関係が形式上のものでしかない以上、あなたには一切迷惑をかけていない。そんなこと言われる筋合いもないと思うけど？」

そう言うと、マリーは黙って眼を瞑った。それは、諦念の表れか、失望の主張か。どちらにしる、私の言うことなど、既に決まっている。

「嫌いになるならどうぞ、存分に嫌いなさい。ただし、仕事に私情を挟まないでね？要請できる条件は揃っているのだから、あとはあなたの言葉次第。」

私は、源破顕現の許可を、申請するわ

マリーはそれでも眼を瞑ったまま沈黙していた。肯定も否定もせず、眠ったようにただ画面の中に彼女は在った。

しかし、それから数分、マリーは眼を開けずに喋り始めた。

『お主がそれでいいと言うならいいんじやろ。さつきとて、別に止めるつもりはなかった。ただ、確認がしたかっただけじゃ』

まるで言い訳のような口ぶりだが、マリーの言うことは事実なのだと思う。彼女は決して他人の意思を真っ向から否定することはない。

でも、私はそれを知っていてもなお、マリーには何も言わない。

もう言うべきことは言い終わったのだから。

『……………よかる。許可を出す。ファントムについての資料も既にこちらに来ておる。これなら相手のしがいがありそうじゃし、存分に暴れてくれればよい』

そこでマリーはようやく目を開いた。その目は、出来の悪い弟子をみるようでもあり、自分では対処しきれない面倒な師匠を見るようでもあった。

『わしからはもう何も言うことはないしの、好きにするがよかる』

「ええ、ありがとう。感謝するわ」

あえて嫌味っぽく言うと、笑いと困惑を混ぜたような表情でマリーは言った。

『ああ、せいぜい感謝せい。ただ、一言、あくまで独り言でも言わせてもらおうなら』

目的を達して通信を切ろうとした私は、マリーのその言葉で手を止めた。

『あなたはあなただけではない　　そう言ったのは、お主のはずじゃったがの。どうじゃったかのあ?』

意地悪く笑うマリーの顔は、すぐにモニターの暗闇に塗りつぶされた。

第1章 誘惑の狂姫 #17 (前書き)

前回、前々回ほど長くはありません。10000字程度におさまりました。

ただ、説明ばかりでもおもしろくないかもしれません……

まあ、重要な部分の説明なので、どうかご覧ください。

第1章 誘惑の狂姫 #17

ADEOIA 中国地方支部からバスで東に1時間弱行くと見るこ
とのできる江倉宮高台。

特に観光名所と言うほどでもなく、地元民ですらさほど気にも留
めないそこは、数少ないそこを知る者の記憶にある江倉宮高台とは
大きく違っていた。

そこを支配するのは、見渡す限りのDMFBの群れ。

それを見た魔術師たちは、10人が10人、その中心に立つファ
ントムの周囲の魔力の結合能力を強めるといふ特性によって生まれ
たものだと予想を立てるだろう。

そう、

その傍らに横たわる、一人の女性に原因があるなどとは到底思え
るはずがないのだから。

ファントムが騎士を自称し仕える彼女は、この光景を文字通り“
産んだ”、まさに女王というべき存在だった。通常ならば、魔力に
耐性のない者がこれだけの数のDMFBが密集する場にいれば、記
憶障害を起こしてもおかしくはない。しかし、その女性はそれを起
こしているような気配もなかった。

それどころか、

「ふふ、いい子ね……、いらっしやい」

彼女は、そのDMFBに触れていた。DMFBに襲われることなく、それが当然であるかのように、その犬に似たDMFBの下あごを撫でていた。

まるで子を慈しむ母のような表情で女性はそれを愛で、DMFBは親に甘える子犬のような仕草でそれに応えていた。

しかし、魔術師ならざる人間にはありえないその所業も、ファントムにとってはまさに望んでやまないものだった。

自らの主となるべき存在。

自らの同胞を産む、母となるべき存在。

こうして人間として破綻し、存在意義、存在理由がDMFBとほぼ同様になった今、ファントムの望む二つのその女性の姿は完成されたと言っている。

「……………」

と、彼女とDMFBの様子を無感情な表情で眺めていたファントムは、おもむろにその女性の傍へ歩み寄っていった。

女性はそれにも反応せず、ひたすらDMFBを見つめ、撫で続けていた。

しかし、ファントムが近づくと、そのDMFBは女王の傍らを譲るかのようにその場を離れて行く。それを一瞥し、ファントムは女性に手を伸ばしながら、

「まだ、足りぬな。もう少しだけでも産んでもらわねば、奴らを退屈させかねんからなあ?」

そう言って、彼女の

「……!?!?」

下腹部に、その腕を突っ込んだ。

「が、あああっ！うっ……………！」

女性は苦悶の表情を浮かべて身をよじる。が、それにも構わずファントムは女性の下腹部、ちょうど子宮のある辺りに腕を挿し入れたままだった。

しかし、女性の苦しむ姿とは裏腹に、そこからは一滴たりとも出血することはなかった。その腕が抜かれた後も、そこに腕を挿したような跡も残っていないかった。

「かはあっ！……………っん、はあ、はあ、はあ……………」

痛みから解放された女性は息を切らして、地面に四肢を投げ出すようにして力なく倒れた。

しかし、これで終わりではない。

「う、あっ！？」

突然、女性はさきほどファントムに腕を挿し入れられた部分を押しさえて、再びその身をくねらせながら悶えた。

「くあっ、あああああああああっ！」

目と口を限界まで開いて、悶え、叫ぶ女性。その光景を、ファン

トムは微かな笑みを浮かべながら眺めていた。そこに宿るのは、当然、喜悅。

「さあ……、狂気の中で産まれるがいい……。自らにあらざるその存在が胎内で蠢くその感触、まさに凌辱のそれに等しかろう！？ 自らの子宮が蹂躪される気分はどうだ、女王よ！？」

「うっ、くうあ、……く、ひあああっ！？」

ファントムの眺める中、女性はまるで絶頂に達したかのように身体を海老反りに曲げて、びくん、と一度痙攣した。

その瞬間、女性の押さえる下腹部の辺りの空間が、わずかに歪む。光が屈折してそう見えるのではなく、むしろその歪みは光そのものを呑みこんでいた。

一瞬だったその歪みはやがて恒常的なものになっていき、そして徐々に大きくなっていき

「
ッッ
ッ、
ッッ
ッー！」

という、女性の、声になっていない叫びとともに、

ぐじゅぐじゅぐじゅ、ぬちゃぬちゃぬちゃあ

という粘液のぶつかり合う音を立てながら、

毛がすべて抜けて肌色を晒した猫に似た異形と、

牙と舌がすべて蛇の尾に変わり、身体のそこかしこから蛇の頭をのぞかせる既に犬とも呼べない様相の異形と、
下あごのない狼の頭を3つ生やし、腐乱した馬の胴体をもつ異形が、

その歪みから、“産まれた”。

女性の顔は、愉悦と狂喜に歪んでいた。

「と、いつわけで、私たちだけに行くことになったから、みんなよろしく」

そこには、居川咲と幣原唯利亚を除いた第一特殊遊隊の面々が揃っていた。

「と、いうわけで、って、完全にお姉ちゃんの一存じゃん……」

そこで何が行われているかといえば、現状の最大の案件とも言えるファントム討伐についての話し合いである。とはいえ、実際には九能の決定を部隊員に告げるだけ。しかもその内容が、たった10人の部隊一つでファントムと戦おうというものだ。未来小のように不満も出ようというものである。

しかし、次の九能の言葉で、皆がその認識をある程度は改めざるを得なかった。

「大丈夫よ、源破顕現の許可も取ってあるし。あなたたちは他のDMFBの相手をしてくれればいいから」

それを聞いて喜んだのは、しかし誰一人としていなかった。

魔術団の中でそれこそ戦術核と同等の扱いを受けなければならぬほどの九能が、その主因である源破顕現をするというのである。それさえできればファントムを討つことは可能、と思われることが実現するということは、喜びこそすれ、拒む理由などない。

それが、西園寺九能でさえなければ。

基本的に、魔術団において戦術兵器並みの扱いを受ける魔術師は、厳重な管理の下で監禁されている。その理由の大きな理由は、通常戦術兵器ほどの威力を持つ魔術など普段使う必要はなく、使えるだけでも脅威になり得るから、というものである。それが万が一にも敵に回った場合、それと同等の魔術師でなければ対抗できず、その戦闘の際の被害は計り知れない。実際にその戦いが起こった際、一つの都市が消えかけたこともある。それを未然に防ぐために、魔術団では“強すぎる魔術師”に自由を許してはいない。

その例外が西園寺九能である。

彼女は、A D E O I Aどころか魔術団の中でも前線に出る者では最年長。しかも、現在の枢密院の中にも顔見知りが多く、その影響力は本人の思っている以上に大きい。

魔術団の中層部の幹部がそれを利用してしようとしなはずがない。魔術団が九能の自由を例外的に認めている理由はそれが大きい。

つまり、九能を操ることができれば、ある程度魔術団を自分の思い通りにできるのだ。

もちろん、九能も性格上、他人の言う通りに素直に行動するわけではない。間違っていると思えば、それが最高権力者からの命令であつても刃向うような性格だ。生半可な者では思い通りに操作することなどできようはずもない。

だが、九能はその出自ゆえの弱みがある。

幼いうちから尋常ならざる生活を強いられた九能は、その終焉として暴漢に殺されかけたところを、一人の魔術師にその魔術の才を見出されて救われた。その魔術師が、当時の魔術団長だったのである。つまり、魔術団に命を救われた、という弱みがあつた。

そして、“九能は”これを利用した。

九能は、これによって魔術団に大きな借りを作つたふりをし、その恩に一生報いるという適当なことを言つてこの自由を勝ち取つたのである。もちろん、上からの命令にも命令違反にならない程度に自分勝手に解釈しつつ従い、時には魔術団に恩を持っているということのアピールのために誰もが好まない任務を買つて出ることもある。その上で彼女は、他の魔術師とほとんど同じ権利を獲得した。だが、その自由にも制約があつた。それが、源破顕現の許可制とその回数の制限である。

許可制については前に述べたので省く。もう一つの回数制限とは、文字通り源破顕現の回数を制限する、というものだ。具体的には、九能のその脅威性が明らかになつた1992年以降、顕現できるのは5回まで。さらに、現在までに九能は2回を消費しているため、

今回使えばそれはあと2回のみ。これからの九能の一生の長さを考慮すれば、どう考えても少なすぎる。

それを、この場では奈都海と天代以外の者は知っていた。この場にはいない者、唯利亜と咲については、唯利亜は知らず、咲は知っていた。

それを知っていないながら九能の顕現を歓迎することなど、誰にもできるはずはなかった。

だが、それはあくまで私情。これから行うのは軍としての行動。そこに私情の入りこむ余地など到底あるはずもない。九能が決定したのなら、部下である彼らは従うほかなかった。

「で、ね。これから簡単な役割分担を決めたいと思うの」

九能もまた、彼らの心情は心得ている。今まで彼らとどれだけの件について衝突したかわからない、だからこそ、何を思い、想ってくれているのかわかってしまう。

「ま、分担って言うても、簡単に前衛か後衛かっていうだけなんだけど」

故に、

「なら

」

「僕は、まず前線でないといけないかな」

誰も、何も、“それ”について口にはすることはなかった。

だが、代わりに、

「うーっし、んじゃ、いつちよやったるかー!」

「戦力は限られているんだもの、私も前にでなきゃね」

「じゃ、私もー！」

「私は……………ま、たまには思いっきり暴れるのも悪くないかな？」

尊何の発言を皮切りに、久宮、未永栖、魅戈、未来小も、DMF Bとの直接対決を希望した。

それに対し、九能は一瞬驚きの表情を見せたものの、すぐに呆れた風が変わり、

「あなたたちね……………、それじゃ、誰がサポートするのよ……………」

九能は当然、前線に出てフロントムと戦うことになる。残りは奈都海と深夜、天代のみ。その中で、遠隔地からまともな精度で魔術を使えるのは深夜だけだ。つまり、後衛を普通にこなせるのは深夜だけ。それを考えると、深夜の負担も含めてバランスが悪い。が、

「大丈夫ですよ、准将」

深夜は苦笑しながらもそれを可能と言い切った。

「いいの？」

「はい、やろつと思えばできる人数です。気にしないでください」

九能は気遣わしげに訊ねるが、深夜はそれでもその気遣いを断った。九能も、「それならいいけど……………」と結局は折れた。深夜の能

力とやる気を信頼しての承諾だ。

しかし、もう一つ、重要な役割が残っている。それが、

「最後に、後朱雀沙夢濡の救出だけど

」

『俺が、行くか？』

九能の言葉を、奈都海が継いだ。

こうなれば、その役目は奈都海が負うしかない。事実上戦力にならない天代を排して考えての、当然の帰結だ。しかし、それに対する九能の反応は、またしても快諾には至らなかった。

「一人で大丈夫？」

『大丈夫だ。あれだけの数がいれば、なんとか突破できるレベルだろう。敵の少ないところに配置されても、むしろ困る』

「そう、だけど……」

奈都海の言葉はいつになく自信ありげだが、九能は煮え切らない様子。

特別な存在だから危険な場所に遣りたくないわけではない。奈都海にその任務を可能にする能力がない、というわけでもない。後朱雀沙夢濡を取り囲むDMFBを排除し、対象を救出する“だけ”なら、奈都海にでも十分可能な域だ。

だが、それはDMFBを排除し、救出する“だけ”なら、の話。九能はもつと他の事態を予想していた。

「……………」

「准将？なにかあるんですか？」

突然考え込む九能を皆が疑問に思う中、代表して未永栖が訊ねた。しかし、それに対する応答はすぐには来ず、ややあつてその応えはあつた。

「一つ、心当たりがあるんだけど」

「何の？」

「ファントムの言う、女王、について、よ」

未来小の質問に対する答えは、皆の予想を完全無欠に裏切つた。

「女王」というその単語は、奈都海がファントムから聞かされ、そして今までその意味が全くわからずに放置されてきたものだ。いつのまにか誰もが重要視しなくなり、なぜか皆の中では、ファントムの戯言、という認識で落ち着いてしまつていた。

故に、それに意味があると言われ、皆が驚いてしまつた、ということだ。

しかし、その意味がわかると言うのなら、それに越したことはない。なぜ沙夢濡が女王と呼ばれているのか、がわかれば、救出になんらかの助けになることもある。相手はファントムとはいえ、理性もあればある程度の倫理感も残つてはいる。そこにつけ入ることも可能なのである。

皆が期待する中、それに反して暗い表情の九能は、

「あまり当たつてほしい類の予想じゃ、ないんだけど……」

と不穏な前置きをして、その内容を語り始めた。

「簡単に言つと、DMFBの女王つてところかしら、ね」

当然、皆が首を傾げる。

しかし、九能は続ける。

「人は　いえ、人だけじゃない、すべての生物は固有の純性魔力を持っている。これはその生物だけが保有できるもので、それ以外の生物、個体には譲渡できないし、お互いに共有することもできない。ここまではいいい？」

真つ当な魔術師であれば誰もが知っている常識を告げられ、全員が頷く。

「でも、生物は自分のもの以外の純性魔力をその身体に宿すことのできる時期がある。いつだかわかる？」

まるで授業のような説明の中、された質問に、意外なことに天代が答えた。

「あの……赤ちゃん、ができた時ですか？」

「その通り。よくわかつたわね」

自信なさげに答えた天代に九能が笑いかける。が、それもすぐに元に戻り、再び説明が始まった。

「そう、妊娠中、この時生物は自分以外の生命を胎内に抱えることになる。なら、その子供はどうやってできたのか？いえ、その子供の純性魔力は、どこから生まれたのか？」

答えは、遺伝子と同じ、その両親から。生物の精細胞と卵細胞には、それを作った

個体の純性魔力の一部が含まれている。それが受精の際に融合して、子供の純性魔力は作られる。でも、純性魔力は指向性を持たない特殊な魔力。それぞれ性質の全く違う指向性を持たない魔力、つまり異なる個体の純性魔力は、本来融合させることはできない。人工的に合わせようとしても、反発しあって、結局両方ともが打ち消される。なら、どうやってその両親の純性魔力の融合は可能になっているのか？　　っていう疑問の答えは、つまりここ」

そう言って、九能は自身の下腹部を指差した。そこはちょうど、

「子宮……？」

未永栖のその言葉に、九能は頷いた。

「そう。生物のメスの子宮、あるいはそれに相当する部位は、異なる個体の純性魔力を融合させる能力を持っている。これは、今のところ生物のメスにしか確認されていない能力で、他の状況、環境では成功例もない。もちろん、その能力は人間の女性にもあるわ」

補足すると、DMFBの生まれる原理は、純性魔力と通常の魔力の“結合”である。融合とは別物であり、そこに数種類の純性魔力が結合されることもある。融け合うのではなく、結び合うため、条件そのものは結合のほうが融合よりも易しい。

さて、九能の説明も一段落したわけだが、これだけではまだ誰にも、九能の言いたいことは把握できない。ここで説明されたことといえば、生物の子供の純性魔力はいかにして生まれるのか、ということだけだ。それが、どう「女王」という単語に結びついていくのか、それは皆が疑問に思っていた。

「で、ここからが本題なんだけど、ここからは人間の女性に限定し

て説明していくわ。人間の女性の子宮は異なる純性魔力の融合を可能にするとは言ったけど、当然、人間以外の純性魔力は扱いきれない。だから、犬の精子を注がれても、犬も人間もましてやその中間生物だつて生まれることはない。けれど、何事にも例外は付き物。この、子宮の純性魔力融合能力についても、ね」

ここまで言つて理解したのは、尊何と未永栖、そして深夜。その3人は、理解した、と言う風に頷いていた。が、他の理解できていない5人のために、九能はさらに続ける。

「つまり、ごく稀に、人間以外の生物の純性魔力すら扱えるような子宮を持つ女性が現れる。ただ、それはかなり限定的で、しかも普通に暮らしていれば人間以外の精子なんて子宮に入ってくるはずがないから、気付かず的一生を終える人がほとんど。でも、そうはならず半獣人を産んでしまう人もいたの」

「今まで残っている半獣人の家系といえば、インフィナータール家とかオーディット家なんかが魔術団にはいるかな」

知らない者にとっては驚愕の真実を尊何の発言によって聞かされた奈都海と天代は、まさに驚愕した。空想の存在だと思っていた半獣人などというものが実在するというのだ、驚いてしかるべきだろう。とはいえ、魔術師の存在を知りしかも自分もそれだと知った時とどちらの驚きが大きいかと問われれば、当然後者だが。

だが、その驚愕もこれだけではおさまらなかつた。

「でも、人間以外の生殖細胞を扱える、ということとは、即ち、人間以外の生物まで産むことができる、ということになる。極端に言えば、犬の精と猫の卵をその性質を持つ人の子宮に入れて、受精、着床までいければ、その中間生物が産まれる、ということ。………

……ま、実際には、そう上手くはいかないんだけどね。そういう性質を持つ人は、人間と人間以外の1種類だけの生物の純性魔力を扱える、ということがほとんどだから。で、これまた例外があるわけ」

奈都海と久宮はなんとなくわかった様子だ。だが、それでも自分の見解に自信がないようで、目で続けてくれ、と九能に言っていた。九能もそれに従って続ける。

「その例外が、ほとんどあらゆる生物の純性魔力を、そして、それ以外の大気中の魔力までも子宮内で融合させられる能力を持つ人が、それこそ何十年に一度、という頻度で現れる。つまり、本当にごく稀に、つてこと。でも、5、60年に一度は魔術団でも確認されている。実際に存在するの。そんな人がいる、それをファントムが知ったらどうなるか？そんなこと、もうみんなにはわかるわよね？」

今度こそ、全員が一斉に頷いた。

が、確認のために九能は説明を止めなかった。最初から、中断するつもりなどなかったのだが。

「受精も、着床も、そもそも精と卵、その二つを必要とせずに生まれる生物が、この世界には存在する。つまり D M F B。さっき言ったような能力を持つ人がいれば、あとは魔力をある程度自在に操ることさえできれば、D M F Bの量産が可能になる。しかも、高ランクのD M F Bを、ね」

ファントムがいると、その周囲の魔力の結合能力は飛躍的に高まる。だが、それ故に、魔力が集約して密度が極限まで高まる前に純性魔力と結合してしまう、という高ランクD M F Bを発生させるためには欠点にもなる部分もある。

だが、もし九能の言うような能力を持つ者（この場合は沙夢濡だが）がファントムの傍にいる場合、魔力を操ることができれば、密度の操作も可能であるため、高ランクのDMFBを量産することさえ可能だ。下手をすれば、複数のファントムを作りだすことまでできるかもしれない。そうなれば、勝算は限りなくゼロに近くなる。それを防ぐ手段も、ファントムを倒すか、沙夢濡を奪い返す、あるいは殺すほか、ない。どれも、周囲に高ランクのDMFBがいるなら、その難易度はたった10人にも満たない部隊一つにとっては最大級と言ってもいいだろう。

加えて、その際に生まれるDMFBは通常と異なり、“融合”によって生まれたものである。結合以上に強度の高いDMFBが生まれることになるのである。

「その予想が当たっているとして……どうするつもりですか？」

それを打開する策はあるのか。未永栖は、九能にそう訊いた。

「今のところは、まだないわ。いつも通りにDMFBを倒す、そして、その先にいるファントムを討つ。加えて、後朱雀沙夢濡を止めて、救出しなきゃいけない」

皆が、九能の返答に落胆の色を見せる。が、その中で一人だけ、その返答の中に違和感を見つけた者がいた。

『九能』

「ん……なに？」

『会長を止める、ってのは、どういづことなんだ？』

会長、つまり後朱雀沙夢濡を止める、という九能の言葉には、その後朱雀沙夢濡とまで戦わなければならない、というニュアンスまで含まれていると、奈都海は感じ取った。

そして、

「ええ……………それが、女王っていうところと結びつくんだけど

」

『どづいことだ？』

「つまりね、DMFBを産む子宮を持つ女性のことを、ファントムは女王と呼ぶの。で、ファントムは、その女王を徹底的に、壊す」

その不穏なセリフに、奈都海は顔を顰めた。もちろん、その意味を計りかねた、ということもある。

しかし、九能は表情も変えずに奈都海のそれに答えた。

「ファントムの思い通りにできるように、ね。女王が自分に逆らわないように、その人間性を破綻させて、自分の好きなようにその人格を作り変える。だから、ほぼ間違いなく、彼女と戦うことになるわ」

それが、ファントムの騎士たるゆえん。女王が女王に相応しい姿になるために、騎士は女王にそのための助言を行う。それでも矯正できなければ、その女王の精神そのものを作りかえる。ファントムはそれを実行している、と九能は言っていた。

しかし、

『だが……………会長が戦う、とは言っても、彼女は魔術師でもない人間

だろう？俺なら魔術を使うまでもなく、勝てそうなんだが？」

「ジャンヌさんが、DMFBを操れるとしても？」

『……………』

驚いたのは奈都海だけではない。

ほんの数日前まで魔術師とはなんの関係もない一般人だった沙夢濡が、DMFBを操れるなどと、誰が思うだろうか？そんな発想が出てくるのは、それこそ、その経験が一度でもなければありえない。

九能のように。

「驚くことでもないでしょう？これから戦うことになるDMFBは後朱雀沙夢濡から生まれたとしたら、その母親に従うのは当然じゃない」

『それは、そうかもしれんが……………』

「だから、あのファントムにまともに戦う気があるのなら、当然、ジャンヌさんにも戦闘の意思は植え付けておくはず。しかも、ジャンヌさんと戦う、ということは、つまり数十体のDMFBと一人で同時に戦うということになるわ。それでも、奈都海は一人で向かうつもり？」

奈都海は押し黙った。

九能は、奈都海一人では無理だ、と言っている。そして、それは自分に任せろ、とも。実際、ファントムが沙夢濡の直接の護衛に付いている可能性が高いのだから、ファントムの討伐を請け負う九能が、同時に沙夢濡の救出も行ったほうが効率がいい。

だが、ファントムが、自身の戦いに沙夢濡を巻き込みたくない

したら、彼女を自分の近くに置くことはしない。むしろ、遠ざけておくだろう。そうになっている可能性もまた、高かった。故に、

『 いや、行かせてもらおう』

「そう………、ならいいわ、そうしましょう」

九能は、言った奈都海自身まで驚くほどあっさり許諾した。

今、フロントムと沙夢濡がどう配置されているか、については、先ほど述べた可能性の内の後者を前提にして話は進んでいる。奈都海が事実を知った上でその覚悟を決めたならば、九能にとってはそれ以上止める気など、ない。逆に、後者であればともに沙夢濡の救出に向かえるのだから、それに関してだけは安全ではある。その前に、フロントムとの戦いに巻き込まないか、が心配ではあるが。

だが、これで個々の役割は決まった。天代は、いつも通り上空からの偵察などを行った後、戦場と支部の間を結ぶ連絡役を任されることになった。

これだけ決まれば、あとは個人で好き放題やっていけばいい。本当に好き放題されても困るだけだが、各々任された役割さえ果たしてくれれば、その手段は基本的に厭わない。それが、この第一特殊遊隊のやり方だった。

だから、これ以上彼らがここにたむろっていてもしょうがない。4時間後の作戦開始に向けて、それぞれ自分のすべきことがある。そのため、彼らが誰からともなく動き出そうとした時、

「あれー？ここにいたんですかあ」

誰かが出ていく前に、その部屋の扉を開けたのは、ミアアことセツティミア・エックハルトだった。

「どしたよ、ミア？わざわざこんなところまで来て」

第一特殊遊隊は、全員が彼女のことを知っている。というか、イタリアから派遣されている疵術師は珍しいため、この支部では誰もが知る有名人である。彼女が現れただけで、作戦前の堅い空気がいい意味で若干和らいだ、と奈都海は感じた。

「えっと、ですね、准将に用事なんですけどもお」

「……？私？」

独特の間延びした口調で呼ばれた九能はそれに応じる。

「はい、居川咲さんから、お話があるそうですよー」

「咲から……？そう、ありがとう」

九能は疑問符を浮かべながらもミアに礼を言って笑いかけて、部屋を辞した。残った者たちも、それぞれミアに声をかけて続いてその部屋から出て行った。

最後に残ったのは奈都海とミアだけ。なんとなく二人の間に気まずい雰囲気の流れる。

特に準備も必要なく暇を持って余すだけの奈都海は何気なくこの部屋に残っただけだが、ミアは次の仕事をサボりたいがためにこの部屋に居座ることにした。

二人にはコミュニケーションを取る手段がない。筆談で話すにしても、わざわざそうしてまで話す必要はなく、そもそもイタリアから来た彼女は日本語が上手く読めない。日本語での会話は可能だが、

読み書きまではまだ習得していなかった。

もちろん、二人に面識がないわけではない。しかし、一対一でまともな会話などしたことはない。こうして一つの空間に二人だけが残ることも、今日が初めてである。

「あのー……………奈都海、さん？」

『？』

奈都海は呼びかけられてミアアを見る。
が、

「あ、えっと、なんでもありません……………」

ミアアは自分が呼んだにも関わらず、そう言っただけですぐに顔を背けた。奈都海はといえば、不思議そうに首を傾げただけで何も追求はしなかった。

全く喋ることができず、表情の変化もさほど目立たない奈都海は、その性格が他人からは把握しづらい。ミアアも同様で、奈都海にどう接すればいいかわからない。　　といつても、別にわざわざ会話する必要もないのだが、しかし、ミアアはその性格のせいで沈黙は苦痛にしか思えなかった。

その苦痛を押して、ミアアは沈黙の中で過ごしていた、その時、

「ひっ、ふぁい！？」

突然、ミアアは奇声を上げた。

その原因は、奈都海がミアアの肩を叩いたからだ。それと同時に、

“唯利亜のところへ行ってくる”

と書かれたメモ帳の破ったものを一枚渡された。
が、ミアはそんなものを渡されてもどうすればいいかわからな
い。結局、

「え、あの……、い、行つてらっしゃい……？」

そんな当たり障りのないことを言って乗り切った。すると、奈都
海はなにやら口を動かした。読唇術の使えないミアには正確には
わからないが、一応『ああ』と言っているのだけはわかった。

そして、奈都海がその部屋を出ていくと

「一人になっちゃった……」

その独白の後、すぐにミアはその部屋で寝入ってしまった。

「あれ、兄さん？どうしたの？」

俺が医務室に入ると、その唯一の住人である唯利亜はそう訊いてきた。手には携帯ゲーム機が握られており、さっきまでそれをしていたことは間違いなかった。

俺がファントム包囲戦へ向かう前に見た唯利亜は、会長を助けると言って聞かず、半ば狂乱していた。一応その後、咲から、落ち着いたから心配するな、という趣旨の報告は受けたが、それでも心配だったために来てみたわけだ。

が、その心配もどうやら無用だったようで。ゲームできるほど元気なら、気にかける必要もないだろう。俺はそう思いながら、唯利亜の質問に対して『特に用はないが』とだけ言うておいた。

「ふーん……じゃ、なんで来たの？」

聞き様によつては辛辣とも取れるセリフだが、唯利亜はゲームをしながらだったため、思った疑問を率直に口に出したただけだろう。俺も特に気にしなかった。

しかも、ゲームに集中してこちらを見る気配もない。俺が答えても、これでは唯利亜には何を言っているかわからない。

なので俺は、近くのイスを壁際に寄せて壁を背もたれ代わりにして座る。その状態でゲームをする唯利亜を、正確には唯利亜の表情を見ていた。

ゲームに没頭する唯利亜の表情は、コロコロ変わっていく。喜んだり悲しんだり苛立ったり、と喜怒哀楽を見事に表現してくれる。

見ていて飽きない。というか、それほどゲームとは一喜一憂するよ
うなものだっただろうか？俺が抱いてもどうしようもない疑問では
あるが、なんとなく思ってしまった。

そうして、唯利亚はゲームをし、俺はその唯利亚を見続けて30
分。ようやく唯利亚がゲームを止めて、それを脇に置いた。

そして、再び俺を見て、

「まだいたんだ……」

と、若干呆れ気味に言った。これは少しちくつと来たが、言うほ
どなことでもないのですぐに気にしないことにした。

「で？何か話でもあるの？」

続けて訊いてきたので、俺は答えようとする。が、俺が唯利亚に
できる話といえばこれから行うファントム討伐についてしかない。
しかし、そうなれば必然的に会長のことも話すことになる。それは
唯利亚の状態を鑑みると中々躊躇われることだ。今は落ち着いてい
るが、俺のせいで唯利亚を刺激することにもなりかねない。

結局、

『いや……これといって、特には……』

そんなことを言って、適当にお茶を濁すことにした。

なら、本格的にお前は何をしに来たんだ、と言われても仕方な
いこの状況、しかし、唯利亚は「ふーん」とだけ言って黙り、それ
以降何かを言う気配もなかった。

異様な沈黙の中、発言することもできず、かといって部屋を出て
いくこともできず、俺はまた、座ったまま唯利亚を見つめ続けるは
めになった。弟を見つめ続ける兄って、傍から見るとかなり気持ち

悪いんじゃないだろうか。今はどうでもいいが。
そんなことを考えていると、唯利亜が俺を呼んだ。

「ね、兄さん」

『ん？』

「あの……ジャンヌさん、さ、どうなったかな……」

唯利亜は俺を見ていた。話せ、ということだろう。

『九能の話からすると、無事らしいが。どの程度無事かはわからん』

「……？どの程度無事かって……？」

『無傷なのか、ただ死んでいないだけなのか、がわからないということだ』

実際のところは、九能の推測が正しければ会長は万全の状態で俺に刃向かってくることになる。無事かどうかはもちろんだが、それ以前に会長がどの程度の戦力なのかのほうが重要ではある。下手をすれば、会長によって作戦が失敗することさえあり得る。

だが、最終的には会長を救うということに変わりはない。唯利亜が気にかけているのもそこだろう。会長を救い、何事もなく日常に戻らせられるかどうか、これが唯利亜にとっての最大の案件。正直、ファントムがどうこうなどはどうでもいいと思っているはずだ。それほどに唯利亜の会長に対する心酔っぷりは激しい。

「そっか……、でも、無事ならそれでいいかな……」

唯利亚はほんの少しだけ安堵したように言った。しかし、唯利亚の気がかりはそれだけではなかった。

「で、会長はみんなで助けに行くの？」

やはり、自分が行けないとなると、それは気になることだろう。だが、俺が一人で行く、と言ってこいつは納得するだろうか？何を言われるかはわからないが、とはいえ嘘を言うわけにもいかず、俺は、自分一人で会長の救出に向かうということを書いておいた。が、唯利亚は予想したような反応は一切せず、逆に笑いかけてきた。

「なら、安心かな？兄さんなら、ジャン又さんのこと、ちゃんと助けてくれるもんね？」

信頼してくれるのは嬉しいが、それが逆にプレッシャーにもなるということを知っているのだろうか。しかも、この唯利亚の信頼は、もし万が一にも助けられなかったら今度は俺の命のほうに危ないということでもある。

「どうしたの、兄さん？」

『……………なんでもない』

まあ、さすがに命を取られるようなことにはならないだろう。唯利亚もフロントムと戦うことがどれだけ危険かはわかっているはずだ。いくらなんでもそこまでは

「あ、でも、わかっていると思うけど、ジャン又さんに一つでも傷ついたら　　わかるよね？」

そこまではしない……………はずだ。多分。
俺が命の危機に戦慄していると、さっきの笑顔のまま独り言のよ
うに

「でも、ほんとに兄さんなら大丈夫だね、うん。好都合だ」

そんなことを言った。

『……………？』

何をもって好都合と言っているのかわからないが、それは重圧に
しかない。それを理解しているのでしょうか、この弟さんは。
理解していようがまいが、唯利亜はこういう奴なのでしようがな
いということもあるが。つまり、理解しているなら冗談で言ってく
るだろうし、理解していなくても素でそう思っているということだ。
よくよく考えたらめんどくさいな、この弟は……

ということは置いておいて。唯利亜がもう正常だということは確
認できたし言いたいことも言い切った。もうここに留まる理由もな
い。そう思っただち上がった時、

「あ、そうだ、兄さん」

『んっ。』

唯利亜の声に、俺は動きを止めてその声の主を見る。

「兄さんさ、ノエル、見なかった？」

ノエル？あの毒舌似非天使か。そういえば夏休み辺りに見たつき

り一切目にしてないな。ノクターンの話に何度か出てはいるが実際に姿を見たのは8月が最後だ。

ということ、そのことを伝えると、

「毒舌かどうかはわからないけど……でも、そっか。見てないならいいや、ごめんね？」

『いや、俺こそ、な。しかし、何かあったのか？ノエルに関して何か』

と、そこまで言っただけだ。俺がフロントムと遭遇したことの報告を行っている時、ノクターン（とシャトー）もその場に居合わせ、去り際にノエルからの伝言を言っただけで去っていったはずだ。確か唯利亜に力を貸すだとかそんな内容だった気がするが、唯利亜がこの状態では会っても意味がないと思うが。

「そんなことないよ。可愛いじゃん。ぎゅーってしたいじゃん」

『ぎゅー？』

「うん、ぎゅー、って」

意味がわからず訊き返した俺に、唯利亜は膝にかかっていた布団を抱きしめて見せる。つまり、ノエルを抱きしめたい、と？

「そ。やわらかくて気持ちいいんだよー？兄さんもやってみれば？」

いや、俺がやったら確実に死かそれに近い仕打ちを受ける。自殺でも勧めてるんだらうか、この弟さまは。

「そんな冗談はいいとして………まあ、用があればあつちから来るかな。別にそれまで待ってもいいし　　うん、そうしよう」

またしても独り言。出現率のかなり低いあいつが、自分から来ることは考えにくいのだが　　だからといってそんなことを言う必要も特になく、俺は今度こそ立ち上がり、

『俺はそろそろ行くぞ。怪我也まだ完全じゃないはずだから、安静にしているよ?』

「うん。じゃあ、がんばってね、兄さん」

唯利亜の激励に頷いて踵を返す。そして、部屋の扉を開け

「あら、吹っ飛ばそうと思っていた扉が勝手に。さすがに身の危険を感じ取ったのかしら?ま、好都合ですし入るとしましょう」

件のノエルさんがそこにいた。

「あらあら、と、思ったら奈都海さんじゃありませんか。何をしています?もしかして唯利亜さんが怪我で弱ったところを狙って近親そ」

その先は俺の聴覚野が言語として受け取ることを拒否した。ノエルの声はあくまで雑音として排除。だから聞いていない。断じて、誓って。

頭上の光り輝くリングに純白の翼、といかにもな天使の姿をしているというのに、この口の悪さはなんだろうか。他の奴は、そうでもないと言うが、これは明らかに酷いだろう。口だけ悪魔なんじゃなからうか。

「はは……ノエルって、兄さんの前でだけそんなだよー」

「いいじゃありませんか。別に嫌っているわけでもありませんのよ？」

嫌ってないのにこの態度って、逆に酷いだろ。

「それでノエル。何か用でもあるの？」

「いいえ、ただの暇つぶしですわ。最近、ノクターンとシャトーがほとんど一緒にいるので中々からかいづらいですしね」

「いいことじゃない。二人仲いいんだ？」

「ええ、毎日喧嘩ばかりでこれ以上ないくらいに仲がいいですわ。正直、惚気られるよりも鬱陶しくて」

「わかるよ、その気持ち。身近にそういう人がいるとねー」

二人が世間話を始めたので、俺はお暇させてもらうことにした。元々すぐに出ていくつもりだったのになんとなく居座ってしまったが、唯利亜にも話相手ができたことだし、ちようどいいだろう。そう思って再び扉を開けた時、

「奈都海さん、少し待ってくださいる？」

まるで計ったようなタイミングでノエルが呼びとめてきた。俺はそれに応じて振り返る。

『なんだ？』

「大したことではありません。下界に墮とされた優秀な天使からの有難い助言ですわ」

ノエルは意味のわからない自称を使ってそんなことを言った。俺が、意味がわからずにどう反応しようかと途方に暮れていると、ノエルは最初から反応など期待していなかったらしくすぐに続けた。

「王子は、王女を娶らなければ、王にはなれない」

……………はい？

「逆に、王になりたくないのなら、王女は殺してしまえばいい。あるいは他の男に売ればいい。あるいは女王に玩具として譲ればいい」

……………

「それだけですわ。それではご自分の任務に励んでくださいな」

……………まったくもって、わからない。理解できる気がしない。

これが助言？何に対する？しかも、王だとか王女だとか女王だとか、あのファントムとまるで同じようなことを言っている。何を、あるいは誰を指して言っているのかもわからない。

ファントムは、どうしてこつも面倒な言い回しばかり使うの
だらうか……

久宮と未永栖みえすと未来小あすか。この3人は、再びADEOIAの食堂に
いた。

しかし、前回と違うところは、仕事を終えた者が何人かいること
である。そのためか、いくら騒がしく、前回のような静寂はな
かった。

その中で、彼らは戦いの前の短い休息を過ごしていた。しかし、
彼らも戦士。ただ休むのではなく、自身にできる戦いの準備、その
最後の仕上げを行っているところだった。

特に、攻撃手段のほとんどを武器に依存している未来小は、その
自らの得物の点検に余念がなかった。

「んー……どうしよっかな……」

未来小の前には、リボルバー式とセミオート式の拳銃が1丁ずつ。その内、リボルバーの方を見て未来小は唸っていた。

「どうしたの、未来小？どこか不具合でもあった？」

そんな未来小を見かねてか、未永栖が作業の手を止めて声をかけた。未来小は、未永栖のほうも見ずに銃を見つめたまま答えた。

「うん……つとね。この銃さ、実弾にするかどうかで悩んでるんだけど……」

「……？それ以外に何かあるの？空砲にでもするつもり？」

「そうじゃなくて。薬莢の中に火薬の代わりに魔力でも詰めてみようかなー、なんて考えてるんだけど。ダメかな？」

「あのねえ……」

未永栖は呆れた様子で溜息をついた。

未来小の言ったことは、ある意味では効果的である。物理的な攻撃力を付加した魔力を薬莢に込めれば、その分威力は上がる。その銃弾だけでDMFBに対抗することも可能だろう。

だが、それはほぼ不可能だと言っている。なぜなら、魔力になんらかの効果を付与するには、喉応術性神経を持つ人間が相応の作業をせねばならず、しかもそれを銃弾に使用するとなれば、効果を長時間維持する必要がある。維持するだけなら簡単だが、維持しながら戦うとすると、戦闘手段は大幅に限定される。

発射する時だけ付与することも可能ではあるが、それは難易度が高すぎる。なぜなら、自分の支配下にならない魔力に異なる性質を付加するということは、言うなれば、自分のものではない腕を動かすの

と同義であり、その手段も魔術しかない。つまり、銃弾を発射する度に魔術を使う必要がある、そうするなら素直に魔術で攻撃したほうが効率は断然いい、ということである。

未来小の案は、可能ならば効果的というだけであり、するとしても趣味の域、実戦で使うには危険すぎる。

「近接武器ならまだしも、遠距離で、しかも手数が必要な拳銃じゃ、ね……」

「そもそも拳銃なんて使うのがおかしいんじゃないの？魔術師なら魔術使え、魔術」

と、傍らで何やら書類にペンを走らせていた久宮が割って入ってきた。

ちなみに、未永栖の近接武器ならまだしも、という言は、近接武器なら常に自分の支配下に置けるから強度を増す魔術ならあるが、という意味である。それに反して、銃器などの武器は、敵を実際に攻撃するのは銃弾であり、それは敵に着弾する時点で既に自分の支配下から離れている。そして、それに魔術をかけようとすればまた他の魔術が必要になる。言ったように、魔術をかけるために魔術を使うのは非効率極まりない。

ただし、例外として、自分の肉体を離れても自分の支配を維持できる魔力もある。それが純性魔力であり、使い魔の行使、あるいは召喚術などは、少なからず自らの純性魔力を消費、犠牲にしている。元々総量の決まっているものであるため、時間が経てば補充されるものではあるが、それ故に一度の短期間の戦闘で何度も使えるものではない。

さて、それはともかく。久宮の本末転倒だが尤もな意見に、しかし未来小は反論した。

「なんでよー。かつこいいでしょ、二挺拳銃。二挺だよ？トウーハ
ンドだよ？ロマンあるじゃん。男なのにわかんないの？」

「わからんね。んな鉄屑になんのロマンがあるんだか」

久宮の有無を言わさぬ否定に、未来小は眉を吊り上げて久宮を睨む。が、久宮はそれを無視し、ペンケースからなにやら取り出した。それは、一見ペンのようにも見えるが、よくよく見ればペンにしては細すぎ、しかも先端が鋭すぎる。久宮がそれをペン回しのよう
に一回転させると、それは、次の瞬間には2mを超す長大な槍とな
って久宮の手中に納まっていた。

「こつという武器じゃねえとダメだろ。敵と直接殺り合ってこそ男。
遠距離からちまちま削ってんじゃ意味ねえし、んな女々しいこと
できるか」

「私たち、女なんだけどね……」

「つてか、久宮だって魔術で槍飛ばすじゃん。槍持って戦つとこ見
たことないんだけど？」

呆れたように言う二人に、久宮は逆に、やれやれ、といった感じ
に首を振りながら、

「俺は基本的には肉弾戦だろ。そりゃ、それで勝てないような相手
なら槍を飛ばすつーのも考慮する。戦略の一つだよ、それは」

そんなことを言った。

言った久宮本人は満足げだが、未永栖は納得のいかない様子で返
す。

「それもなんか言い訳がましいけど……でも、ま、それで戦果を上げてるならいいでしょ。未来小のほうで戦績自体は低いもんね？」

「う……」

思わぬ飛び火を被った未来小は、それでも凶星には違いない指摘を受けて言葉に詰まる。しかし、

「で、でも！ほら、奈都海くんとか唯利亜ちゃんとか、よりは、高い……よ……？」

「……自分で言ってみじめにならない？」

「うめん……」

戦場に出始めて5年になろうという未来小と、わずか半年前まで魔術師の存在すら知らなかった幣原のきょうだいでは、総合戦績に差が出るのは当然である。それを比べるのは、まさに自分の負けを認めたようなものだ。といっても、未来小自身、何に負けたのかはさっぱりわからないが。

「でもあの二人、かなり頑張ってるわよね。奈都海なんか初陣で10体以上もDMFBを倒したんだもの」

未来小が落ち込んでいる中、そんな未来小のためか、話の流れを変えるようにして未永栖はそんな話題を出した。

未永栖の言う通り、あの奈都海は、涼しい顔して初陣で10以上ものDMFBを討伐しているのである。疵術師の常識から見れば非

常識極まりない。初陣で6体のDMFBを倒した咲が、二つ名じみた称号で呼ばれていることを考えれば、その非常識さがうかがえるというものである。しかし、これにも、相応の理由はある。

「あいつの魔術は掃討に向いてるからな……………正直羨ましいぜ、ほんとに」

ただ、能力が対多数に向いていた、それだけのことだ。

「とはいえ、複数に対応できる疵術師はこの部隊じゃ貴重なものね。あの二人なら他の部隊でも十分やっていける力もあるし。特に唯利亜ちゃんはどこでも重用されそうね」

「む……………悔しいけど確かにそうかな。汎用性が高いんだよね、あの二人は」

「お前と比べりゃ、どんな疵術師も汎用性は高いほうだよ」

未永栖の言葉に同意する未来小は、その直後に言われた久宮の言葉に溜息をつく。

「だよねえ……………私、特殊過ぎるのかな……………」

「……………そうだろうな」

本当に特殊なのは魔術の特性ではなく、拳銃で戦うというそのスタイルである、と久宮も未永栖もわかっていたが口にはしなかった。実際に魔術が特殊であるということも間違ではない。

代わりに、久宮は槍をペンサイズに戻してから席を立ち、未来小に向けて言った

「ま、今回も俺とお前が組むことになるだろうし、よろしく頼むぜ」？

「あーはいはい、どうなっても知らないけどよろしくねー」

聞くからに棒読みなそのセリフに、しかし久宮は特に何も抗議せず、その場を離れようとした。
と、そこに、

「あ、ちょっと」

未永栖から呼び止められる。

「ん？なんだよ？」

「ちょっと気になったただけなんだけど。久宮、なに書いてたの？この戦いの前に書くようなものあったっけ？」

そう訊かれた久宮は、できればその質問はしてほしくなかったらしい。短い溜息をついて、こう答えた。

「……………始末書だよ」

「……………ああ」

「なんの？」などと訊く必要もなく、二人は納得した。

「……………ご愁傷様」

始末書を押し付けられた張本人に言われた久宮は、苦い顔をしてカフエを出ていった。

「はむ、ぐ。むぐむぐ……」

ところ変わって中国地方支部の一角のある部屋。特にこれといった用途はなく、必要に応じてイスや机を増減させて使う、いわゆる空き部屋である。

「あの、魅戈さん……?」

「ふぁにー?」

その中でパンを頬張る魅戈に、天代は控えめに話しかけた。

「それ、6つ目ですよね?大丈夫なんですか?」

天代のいうように、魅戈は今食べているパンで6つ目である。さきほどから止まる気配もなく食べ続けている。しかも、天代も目を見張る勢いで、である。

魅戈は口に含んだパンを呑みこんでから天代の質問に答える。

「うん、だいじょぶだよー。魔術師はね、基礎代謝が高いから、むしろこれぐらい食べなきゃダメなんだよー？」

「……はあ」

天代は曖昧に答える。

たとえそれが本当だとしても、これはさすがに食べ過ぎではないだろうか。しかも同じジャムパンばかりを6つも。

と、それを食べ終わるやいなや、魅戈は次なるパンを取りだした。それも、またしてもジャムパン。それに思わず天代が呆気に取られていると、横で眺めていた深夜が説明した。

「魅戈さんは、大きな戦いの前はいつもこうなんですよ。ジャムパンかクリームパンを10個ほど一気に食べるんです」

「じ、10個も？」

驚く天代に、深夜は頷く。それを受けた天代は、改めて魅戈を見つめる。

小学生である天代から見ても、魅戈はとても実年齢相応には見えない。容姿も言動も、せいぜい中学生がいいところだろう。

しかし、戦いに関して言えば、魅戈は高い能力と長い経験を持つ疵術師である。過去のトラウマが原因で暴走するという“事故”を起こしてしまったこともあるが、戦績自体は優秀。若干18にして

大尉の位置についた、いわゆるエースである。

天代も、そんな魅戈を尊敬し、慕っているわけだが……

「……はふう」

いかにも幸せそうな顔でパンを頬張るその姿は、まさに子どものそれである。とても戦場で果敢に戦う姿など想像できない。

と、そんな風に眺めていると、深夜が何やら意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「……で、天代くんはいつまで魅戈さんを眺めているんですか？」

「へ！？や、いえ、そんなつもりは……」

突然深夜よりかけられたあらぬ嫌疑によって、天代は異常なまでの驚きを見せる。それに乗ったのか、魅戈も両腕で自分の身体を抱き、

「天代くんのえっち」

「ふえ！？え、や、だからそんなつもりは……」

「あまり女性をじろじろ見るものではありませんね。天代くん、反省しましょう」

「そうだそうだ、視姦も立派なセクハラなんだよー？」

「あうう……」

年上の女性二人に攻められ、涙目になる天代。その趣味の人間に

とっては歓喜に踊る光景だが、趣味がノーマルな二人にとっても、涙ぐんで縮こまる天代はそられるものがあつた。

とはいえ、相手は小学生。あまり苛めすぎると本当に泣いてしまう恐れがあるので、深夜はいくらか天代の表情を楽しんでから助け舟を出すことにした。

「冗談ですよ。天代くんが可愛いからついからかっちゃいました」

「……………あの……………」

しかし、その助け舟自体が返答に困るものだったため、天代はさらに困惑することになった。一縷の望みをかけて魅戈を見るが、既に魅戈は次のパンに夢中になっている。

深夜を見ても、無言で笑みを浮かべるばかり。

天代は途方に暮れた。今度こそ本当に泣きそうである。

が、しかし、そこは深夜。自分の言葉で天代がどういう反応をするのかわかっていたのか、天代がそろそろ我慢できなくなってこよつという、ちようどその時、

「ところで、天代くんはこの戦いで何をするんですか？」

そんなことを訊ねた。

いきなり変わった話題に戸惑いつつも、天代はそれに答えた。

「えっと、まず先行して上空からの敵勢力の偵察。それから、ここと戦場の連絡係です」

言われたことをそのまま答えたかのような天代の返答に、深夜は頷く。その後、逆に天代が訊ねた。

「あの、深夜さんは何を……?」

深夜は戦場に出るとはいえ、深夜に戦闘能力があるわけではない。それは天代も知っている。唯利亜のような遠視能力があることはわかってはいるが、それが戦いにどう関わってくるかはわからなかった。それ故の疑問。

しかし、深夜の答えは、

「さあ、なんででしょう?」

というもの。それは相手に訊ねるような語調ではなく、自分でもわからない、という調子が含まれていた。しかし、続く深夜の言葉で、天代の疑問は解消された。

「その時になってみないとわかりません。私はできることが多いので、状況に応じてやらなければいけないことは変化しますから」

「はー……そうなんですか」

天代はそんな風に感心しつつ言った。

そんな天代に、深夜は疵術師の先輩として、微笑みながらも指南を施す。

「どんな疵術師も、ただ戦うだけじゃいけませんしね。今回前線で戦ってくださる皆さんも、必要があれば後ろに下がって援護に回ったりもするでしょうし。それに、疵術師といえど戦闘における選択肢が一つしかない、というわけでもありません。むしろ、自分で選択肢を多く作っておくのも大切ですよ。選択肢が少ないと、それを封じられただけで手詰まりになってしまいますから」

「……でも、僕の場合、翼を出すくらいしかできないんですけど……」

「それでもその翼でできることは一つではないでしょう？それが魔力で構成されているのですから、その翼で攻撃でも防御でもできるはずですよ。まあ、そうすると、翼がなくなったら何もできなくなりますよ」

「ですよね……」

改めて自分の無力さを実感する天代だが、しかし、深夜は天代にさらなる可能性を指摘する。

「でも、翼が創り出せるなら、他のものもできるんじゃないかもしれませんか？」

「他の？」

「ええ。爪や牙や、あるいは剣とか鎧とか。戦闘に使えるようなものは他にもまだたくさんありますよ。そういったものも、もしかしたら創れるかもしれない。魔術師であればそういった可能性は常にあるんです」

「僕が……剣を？」

天代は自らの手の平を見つめる。自分が剣などという物騒なものを振るう姿が想像できないのだろう。つい最近まで普通の小学生をしていたのだから、当然ではある。

しかし、疵術師である以上、いずれはそれも必要になってくるということは、天代も理解している。

「でも……」

今はまだ、天代はそこまでできる力はなく、また、そこまでを求められてはいない。

「だから……僕は、今できることをする、だけ……?」

「それでいいですよ。自信を持って」

深夜は微笑む。今まで自分の存在意義にすら疑問を抱いていた天代が、この戦いを期に自分のすべきことを見つけられるように。せめて、その手掛かりくらいは見つけられるように、と。

(つて、ちょっと世話焼きすぎですかね……)

とはいえ、結局は天代自身の気持ち次第であるため、深夜もあまり介入するのは自重することにした。

(それよりも、自分のことを心配しなきゃ、ですね)

深夜とて戦場に出る身、他人ばかりを気にかけていては自分がやられてしまう。

と、そんなことを考える深夜の横で、魅戈はようやく計11個のジャムパンを食べ終わっていた。魅戈は、そのパンの包み紙を集めてくしゃくしゃに丸めながら、天代に話しかけた。

「天代くん」

「あ、はい。なんででしょうか」

「今日も魅戈のこと、頼んだよ？」

「え……………あ、はい、わかりました」

天代が一瞬返答に窮したのは、魅戈の言葉の意味がわからなかったからではない。魅戈が、一人称において自らの名前を使うことに違和感を覚えたからだだった。魅戈自身の印象から考えると自然ではないが、いつもは“私”という自称を使っていたはずだ。そちらのほうが聞き慣れているため、天代にはどうも違和感しか残らなかった。

とはいえ、それに何か意味があるとも考えにくい。深夜も何も言っていないため、天代は考えるのをやめた。

それから数十分。

魅戈は食後ということもあってかうつらうつらとしながら、天代は懲りずにその魅戈を眺めながら、深夜はどこからか取りだした本を読みながら過ごしていた。

そして

ピピピピピピ……………という電子音が部屋に響いた。

「時間、ですね」

「はい」

「ふあう……………まだ眠い」

「魅戈さん、きちんと起きて。それじゃ戦えませんか?」

「うっ」

「魅戈さん……………」

3人は第一特殊遊隊の集合場所へと向かった。

「あれ? 僕の出番はないのかな? 部隊の他のみんなは出てるのに」

「私なんか 14以降まったく出番がありませんか?」

「……………私、メインヒロインよね……………」

第1章 誘惑の狂姫 #19

部屋には第一特殊遊隊のメンバーが揃っていた。

目的は、知つての通りファントムの征討。これから全員でファントムの下へと向かう予定なのである。

「さて、と……みんな揃ったわね」

部隊長の西園寺九能は、8人の隊員を前にしてそう訊いた。ちょうどついさつき、部屋に久宮が入ってきたところだ。

九能の言葉に改めて戦場に向かう覚悟を自覚したのか、全員の表情が硬くなる。特に、まだ戦いに慣れているとは言い難い奈都海や天代はそれが顕著だった。

しかし、

「行きましょう」

九能はそれだけを言った。

それに、皆は頷いて応える。奈都海や天代も、遅れはしたがしっかりと頷いた。

今この場において九能から皆にかける言葉などなかった。また逆に、皆から九能に対する言葉も同様にありはしなかった。

「これを最後に……終わらせましょう……」

九能のその独り言を部屋に残し、彼らは死地へと赴くべく歩みだした。

そこは既に異形の巢窟。

既存の生物に似たものもあれば、それらを融合させたものもあり、あるいは生物として完全に破綻したものもある。

高台の広場以外に茂っていた木々を含めた植物は、既に跡形もなく腐り融け、周囲一帯にあった緑は完全に消え失せていた。

残ったのは、緑の消えた後の荒れ地と、その上に立つDMFBの名を持つ無数の異形。そして、運悪く迷い込んでしまい、異形に殺された一般人の骸^{むくろ}。

見る者が見れば、発狂しかねないほどの光景が、そこには広がっていた。

そして

その中心に在る一人の女性。

異形は彼女を襲うこともなく、まるで母親に寄り添う子どものように、その周囲を取り囲んでいた。

彼女は、自身を“女王”と呼んだ。

「さて、気分はどうかね？女王よ」

黒衣に身を包むその男　　ファントムは、その女性に声をかける。

女性の姿は、優美なドレスに飾られており、異形の中にあつてさらに浮いた存在となっていた。しかし、女性自身はそれを気にした様子もなく、常ならば自分を殺しかねないその存在の質問に平然と返す。

「そうね……上々よ。完璧と言つてもいいわ」

「ククク……………そうか、それは良かった。女王の喜びは従う騎士の喜びでもある。私は今、素晴らしくいい気分だ……………」

ファントムは歪んだ嗤いをして顔に浮かべ、喜悦を露わにする。が、対する女性はそれを見て顔を嫌悪に歪め、

「やめなさい、気持ち悪い」

そんな辛辣な言葉を投げかけた。ファントムはそれに応じて笑みを表情から消し、無表情のまま女王に視線を向ける。

「……と」

それを待っていたかのように、女性はファントムのほうを見ずに、しかし歴としたファントムへの質問を口にした。

「私の伴侶になってくれる方はどこにいるのかしら？」

「……ほお？」

しかし、ファントムのそれに対する答えは、感嘆の声だった。女性はそれに怪訝な顔を向ける。それを受けたファントムは、嗤いその顔に浮かべ……かけて微かな笑みに切り替えて、今度こそ答えた。

「なに、女王がもうそこまでになっているのか、と思ったただけだ。もう“王”を欲する段階にまで達しているのか、とな」

「あら、失礼ね。私だって“そういうこと”には興味くらいあるわ。それとも、それは望んではいけないことだったかしら？」

「クク……、まさか。女王には少しでも早く王と結ばれてもらわねばならん。そうしてこそ、本当の女王になり得るのだからな」

ファントムはその顔に歪な笑みを浮かべる。しかし今度は、女性はそれを咎めることもなく、釣られたかのように笑みを浮かべた。だがしかし、その笑みは、決して喜びの笑顔ではなかった。かといって、ファントムのように狂気に満ちた嗤いでもなかった。

「そうね……、こんな私でもその腕に抱いてくれるような王子

様は……一体誰なのかしら……？」

まるで、一人の男の子に恋焦がれる年端もいかぬ少女のように、可愛らしく、無邪気で、そしてそれ故に異常な笑みが、その女性の顔を彩っていた。

「そろそろかな」

「あら、もう行きますの？」

中国地方支部の医務室の一室。そこで唯利亜の漏らした独白を耳聴く聞き取ったノエルに、唯利亜は苦笑いを返した。

「いや、そうじゃなくて。そろそろみんなあそこに着いたかな、と思っただけ」

「……………心配、ですか？」

「それはないかな。みんな強いもの」

質問に即答した唯利亜の顔には、戦場に出た彼らを気にかける色は見えない。それどころか、笑顔を浮かべてすらいた。不自然なほどに晴れやかな笑顔を。

「あらあら。そんな強い方々がいらっしやるのに、それでも唯利亜さんは…………？」

「うん、もう決めたことだしね」

「そうですか。…………では、中の方はなんとおっしゃっていらして？」

ノエルの質問に、唯利亜は再び苦笑を向ける。だが、それはさきほどのものとは異なり、まるで悪戯を見つけられた子どものような表情だった。

「やっぱり…………バレてた？」

「あら、あれで隠しているつもりでしたの？驚きですわ」

「むう…………ノエルは意地悪だ…………」

いじけたふりをする唯利亜に向かって、ノエルも勝ち誇ったような笑みを浮かべるふりをする。

しかし、やがて二人ともがそれをやめて、まるで表情を消したかのようにそれぞれの笑みは顔から去っていた。

「それで……………しばらくは、傍観ですわね」

「うん、そうだね」。ボクはそれでいいし

“姉さん”もそれでいいよね?」

1972年、ベトナムで、一人の少女の命が尽きた。

名は橋竜児。たちはなりこ年齢は14。ベトナムで起きたDMFBの大量発生

に対する処置として、日本のADUIAの部隊が派遣される際、彼らの切り札として彼女は同行した。

しかし、彼女は疵術師ではない。魔術師でもない。喉応術性神経を持たず、それ故に魔術も使えないごく普通の一般人である彼女がなぜ切り札などと呼ばれているのか。

その理由は、彼女の魔力にあった。

生物だけでなく、この世のありとあらゆる、およそ物体、物質として存在するものには、すべて魔力　つまり術性元素が含まれている。その中でも、特に生物、動物であろうと植物であろうと、単細胞多細胞、有脊椎無脊椎も関係なく、哺乳類であろうが鳥類であろうが爬虫類であろうが両生類であろうが節足動物であろうが、水生であろうと陸生であろうと、すべての生物には、純性魔力と呼ばれる交換不可能な魔力が備わっている。当然、譲渡や貸与も不可能、召喚術や生成術などの特殊な例を除いて魔術の行使にも使えない、魂とも言うべき魔力。それが純性魔力である。

この純性魔力は、個体ごとに総量が決まっており、それによってその純性魔力の特性も変化し、それがヒトでいう性格であったり、他の生物にもある個体差に影響する。

彼女は、その純性魔力の量が、異常なほどに多かった。一人の人間には到底扱いきれない量の魔力は、いずれその人間自身を滅ぼす。まだ幼いとも言える彼女には、まだ害が出ていないが、肉体が完成されていく10代後半には様々な弊害が生じるとされていた。

それだけではない。それだけなら、それは彼女に害を及ぼしかねない危険なものという認識しか生まれなかっただろう。しかし、彼女は違った。

通常、純性魔力は生物の根幹を成す部分（脳や心臓、脊椎など）

に集中して存在するものだが、彼女の場合、純性魔力が全身に拡散した状態になっていた。総量そのものが多いため、必然的にそうだったのだろうが、しかし、研究の結果、それだけではないこともわかってきた。

もし純性魔力を脳や心臓、その周辺にまとめられずに拡散してしまっただとするなら、脳や心臓付近では他の部位と比べて純性魔力の量は多いはずである。

しかし、彼女はそうではなかった。彼女の純性魔力は、全身にほぼ均等に拡散していた。

それが何を意味するのか、A D U I A の疵術師が気付かないはずもなかった。

つまり、今まで絶対に不可能だと言われてきた、“純性魔力の無変換での譲渡”が可能になるのである。

召喚術では、召喚した使い魔に微量の純性魔力を込めるため、その使い魔の所有権を放棄し、他人の所有権を認めれば、それは“変換済みの純性魔力の譲渡”となる。その意味での純性魔力の譲渡は可能であった。

しかし、純性魔力そのものの無変換での譲渡は、純性魔力の性質上、不可能であった。なぜなら、純性魔力はそのままの形で生物の体外に出てくることはない。あるとすれば、それは死の瞬間かあるいはもう一つの特異な状態のみであり、しかし、その際に放出される純性魔力は魔術師にさえ視認できないものだった。

生物は、基本的に体内にあるものはすべて自らに所有権があるものだと思いきんでおり、実際はそうであることが多い。その思いこみはどうやっても消えるものではなく、それは同じく体内にある純性魔力に対しても同様だった。

哲学的な所有権については様々な論争があるが、魔術的な意味での所有権には、かなりはつきりとした区別がある。

魔力は、自分の所有権の及ぶ範囲でしか魔術行使のために使用で

きず、しかも、その所有権は自らの肉体を離れた状態でなければ放棄は不可能、という制約があった。つまるところ、体外への放出が自由な通常の魔力は譲渡、交換が可能だが、体外に出せない純性魔力は譲渡も交換も不可能ということである。

しかし、その両方を可能にするのが、橘竜児の体質だった。

身体の一部分、例えば髪の毛一本でも抜いて、その所有権の放棄、及び他人の所有の容認を行えば、その時点でその髪の毛に含まれる純性魔力は、他人に所有権が移っているのだ。

純性魔力の譲渡が可能になることで、また、その純性魔力を魔術に使うことで、その魔術の威力は飛躍的に上がる。常に少なからず精神情報に汚染されている通常の魔力とは異なり、純性魔力はその名の通り純粹に魔力だけなので、その魔力をすべて魔術に変換できる。しかも、譲渡されたものであるため、喉応術性神経というフィルターを通ることなく魔術となる。もちろん、喉応術性神経を通っていない魔力を魔術にするには、自身にも相応の消費を強いることになるが、それでもその際の消費対効果は目を見張るものがある。橘竜児は疵術師でもないため、純性魔力の特性の制限も緩く、比較的多くの魔術の発動に使うことができた。

A D U I A は、彼女を戦場へ連れて行った。

戦士ではない。

後方支援を担当する専門家でもない。

それどころか、人間としての扱いでもなく。

ただの、“魔力の塊”として、彼女はベトナムに降り立った。

彼女が疑問に感じることはなかった。

彼女の周囲の疵術師は、特殊な体質であることと、それが人間を守るために必要なことであるということしか教えなかった。

彼女は、それに対して何の疑いも持たず、むしろ自分たちのために戦う彼らを英雄視してさえいた。

もちろん、そんな彼女にたいして引け目を抱く者はいただろう。

あるいは罪悪感か、それとも同情か、憐れみか。しかし、彼ら戦士は戦うことに疑問を抱くことは許されず、その手段として彼女が提示されたのなら、それが現状最も有効な手段であるなら、それに従う他なかった。

橘竜児には、二人の護衛がついていた。ほとんど兵器としてしか見られていないとしても、それが唯一無二の戦略兵器なら、それに護衛がつくのは当然である。魔術師の組織は魔術団だけではない。それ以外の魔術師の組織や、あるいは一人の野良の魔術師に強奪されないとも限らない。それを見越しての護衛だった。

一人は、如月九能^{きげつくくのう}。24歳の疵術師で、階級は中尉。実戦経験も豊富で、その能力の特徴が護衛に向いているということから選ばれた。性格は穏やかで、親しみやすい面も持つが、やや男らしさに欠けると周囲から言われることもある。

もう一人は、西園寺奈緒^{さいおんじなほ}。疵術師ではあるが、まだ11歳と幼く、戦闘の経験もほとんどない。能力に期待して、というよりは橘竜児の精神面を考慮して話し相手として選ばれたというほうがしっくりくるというものだ。だが実際は、戦力として役に立たない西園寺奈緒に一応の仕事を与えるためであった。兵器に対してそこまで気を回せるほど、ADUIAの高官は柔軟でもなければ並みの慈悲も持ち合わせてはいない。

一度に兄と妹のような存在を手にした橘竜児は、その反面知らないところで交わされる自分の能力について、また自分の処遇を最後まで知ることにはなかった。

本当の意味で、最期まで知ることはなかった。

彼女はベトナムに降り立った翌日、消えた。

そして、さらに数日後、彼女を失って騒然とするADUIAの日本部隊の前に現れた。

無数のDMFBを引き連れて。

騎士を自称するファントムを傍らに侍らせて。

自らは女王を名乗り、DMFBを操り、ファントムを従えて虐殺を繰り返した。

ADUIAは当然抗戦した。

東西の戦力が戦争を行う中で、疵術師とDMFBは人外の死闘を繰り広げた。

ADUIAは、日本、ベトナム、中国、アメリカと、東西の対立など関係なく手を取り合い、無数のDMFBと戦った。正確な数は不明だが、この時のDMFBの数はおよそ数万とも言われている。国家の半分を覆う広範囲とはいえ、これほどの数のDMFBが一度に現れたのは、2029年現在、この時が最後である。

この戦いが終結したのは、半年後の1972年末。ファントムと女王の橘竜児の死によって幕を閉じた。

終結へと導いたのは、奇しくも橘竜児の護衛を行っていた如月九能と西園寺奈緒だった。

如月九能はファントムと相討ちし、ともに朽ちた。

そして、西園寺奈緒は

「竜児……ちゃん」

「ふふ……なあ、に……？」

仰向けに倒れて口から鮮血を吐く竜児を、奈緒は見下ろした。

「死ぬ、よ？」

「そうだねー………血がいっぱい、だもん………」

「いいの？」

「はは………殺したの、奈緒ちゃん、じゃない………」

「今なら治療次第でなんとかできるかもしれない」

「治したら、もっと………いっぱいの人、が死ぬ、よ………？」

「……………」

「あー………痛い、なあ………けっこう、切れてる、ね………」

「痛いなら治してって言えばいいのに」

「痛い、けど……負けちゃった、んだし……ね」

「負けても死ぬ義務はないよ」

「はは……奈緒ちゃん、は……優しい、ね……」

「……………」

「知ってる人、ほとんど、死んじゃったし……あー……もう、
なにも、することない、かな……」

「どうして、そんな簡単に受け入れられるの？」

「あー………なんで、だろねー……」

その時、童児の目から涙が落ちた。奈緒は、しかしそれを見ても、
なぜか何も感じなかった。

「はは……、死にたく、なんかない、のに………これ以上、生き
たくも、ないなん、て………おかしいよね……」

「……………」

「死にたくない、死にたくないよ………でも、もう生きてちゃ、
いけない………死ななきゃ………」

「……………」

「だめ……死んじゃ、だめ……あの子たちが、困ってる……早く、撫でて、あげなきゃ……」

「……………」

「だめ……死ななきゃ……、これ以上、殺しちゃ、だめだから……みんなに、迷惑……かける、から……」

「……………」

「死に、たい……？生きたい、の……？どっち？わかんない……、わかんない、よ……なんで？……私の、ことなのに……」

「……………」

「わかんない、わかんないよ！死にたいの？生きたいの？私、どうすれば、どうして、なんで、生きるの！みんなに迷惑かけるの！だめ、死ななきゃ、死んで、死んだら、あの子たちも死んじゃう、だからだめ、生きないと、生きて、みんな殺して、わたしとあの子たちだけ生きて、死なないと、あの子たちも死んじゃうから、違う！生きないと、みんなに迷惑かけて、死んだら、みんな殺す？そうじゃなくて、みんな殺して生きて、あの子たちも殺す？みんな生きて、迷惑かけちゃうから、みんな殺して、殺せば迷惑かからないから、あの子たちも死んで、そうじゃない、私も生きて、あの子たちを迷惑かけて、殺してみんなをあの子たちに、私が死んで、みんなあの子たちに、みんな殺し」

「
いいかげん死んでよ
」

第1章 誘惑の狂姫 #19 (後書き)

いつのまにか、総アクセス数30000突破してました。心から感謝いたします。読んでくださった方々、本当にありがとうございました。

第1章 誘惑の狂姫 #20

「ありがとう、天代。もういいわ。危険だから下がってて」

「あ、はい。……いえ、でも、魅戈さんの“足”を任されていますから……」

「魅戈………あの子、また……」

その後いくらかのやり取りの後、天代は俺たちの下から飛び去っていった。

天代は、俺たちより先行し、上空から敵勢力の偵察を行っていた。九能はその報告を聞いていたわけだが、その内容が、天代曰く

- ・DMFBの数はおよそ100以上。
- ・ファントムは一帯を埋め尽くすDMFBによって確認できなかった。
- ・後朱雀沙夢濡についても同様。
- ・空戦能力を持つDMFBが多く、それ以上の調査は不可能 等々

……

と、特に偵察せずとも現状にはなんら影響を与えるものではなかった。ファントムや会長の居場所がわかれば、大きな成果だが、それもわからず、かといってDMFBの数が常識外れに多いことなど見れば一目瞭然である。俺個人の意見としては、正直このまま帰りたい気分だ。ここからでも十分に山のようなDMFBの群れが確認できるのに、そこに嬉々として突っ込む奴が一体どこにいるだろうか。帰らせてくれないのなら、せめて早く終わらせたい。……そう簡単に終わるものでもないが。

「しょうがないわね、適当に倒しながら捜すしかないか……
……奈都海、行きましょ」

思考をまとめ終わったのか、九能はそう言っただけで俺を促した。

ちなみに、既に俺たちは、他の部隊員とは別れて別行動を取っているところだ。本来は、俺と九能も任務そのものが違うために別行動になるはずだが、その任務の目標が現状行方不明であり、かつその2つの目標が同じ場所にいる可能性もある以上、安全面からも共に行動したほうがいい、という結論に至ったわけだ。

「ジャンヌさんと戦うまでは温存しておいてね。それまでは私が戦うから」

『いや、だが』

「いいから。ていうか、奈都海の援護があっても、ほとんど邪魔にしかないし」

そこまで言われたら引き下がるしかなくなる。確かに会長との戦いに必要な力は未知数だ。避けられる消耗は避けておいた方がいい。それを言うなら、九能にも当てはまるが、九能は一度フロントムと戦いを交えているという違いがある。

しかし、九能は一度自分をレイプした相手に自ら会いに行こうというのだろうか？ 相手をできるのが九能しかいないということもあるが、それにしても躊躇いというか怖れといったものが感じ取れない。あの時のしおらしい姿はどこへ行ったのか………まあ、ここでそんなものを出されても困るが。

などと、九能との不毛なやり取りと現実逃避気味な思考を繰り返している間に、俺たちはそろそろDMFBの索敵範囲内に入りそう

なところまで来ていた。というか、数体のDMFBは既にこちらを向いているような気がする。

「さあて……、前座の余興ね。準備運動にもなるかしら？」

俺の横で九能は臨戦態勢に入っていた。しかし、いつも何かしらの武器が握られているその手は素手のまま。ファントムとの戦いで落としたという武器も尊何さんが回収しておいたと聞いたが

「この程度なら、素手のほうがむしろ楽ね。数もさほどじゃないし……」

どうやら本当に素手でやるらしい。本当に大丈夫だろうか？

「んー？大丈夫よ、死にはしないわ」

それはお前だけが死なないのか、それとも二人とものを安全を保障しているのか。死にはしないが怪我はする、なんて才手は御免だぞ。

「さ、そろそろ始めるから奈都海、下がってて」

おーい、話を聞いてくれ。

「さーってえ………殺すわよお!!」

九能は物凄い勢いでDMFBの群れに突っ込んでいった。当然俺は、待機しておくしか選択肢はなかった。

久宮と未来小の二人は、奈都海や九能とは異なる方角からDMFBの群れを攻める予定だった。具体的には、九能らの攻める方角を0時とするなら、久宮らは大体8時の方角から攻め入ることになっていた。

「しっかし……………」

「なによ?」

DMFBの巣窟となった高台へ向かう途中、久宮の声に未来小は心ここにあらずといった感じで返した。

「いや、本当にまたお前と組まされるとは思ってなかったからな」

「あつそ」

「ああ」

それにわざわざ律儀に答える久宮も、淡白な返答しからない未来子も、その表情に余裕はなかった。

二人とも、これだけの規模のDMFBの群れと戦う経験がないわけではない。しかし、その経験があっても、それは少なくともDMFB以上の戦力を整えての殲滅戦だった。それとは異なり、今のこの戦いは第一特殊遊隊だけのもの。

基本的にDMFBは、敵勢力以上の戦力での討伐が当然、という認識が広まっている。Bランクまでなら単体で対応できる者もいくらか存在する。しかし、Aランクになるとそれは厳しく、ファントムでは複数でかかっても互角に戦うことすら難しい。これは、今まで散々言ってきたことではあるが、しかし、今の彼らはそれに反するスタイルで戦おうとしている。当然、この二人もこれだけ少数でファントムと相對することなど考えられることではなかった。

確かに今の中国地方支部の戦力はほとんどが先の戦闘で使いものにならなくなってしまうている。が、九能が源破顕現するというのなら、そこに“死という概念が意味を成さなくなる”ということは二人も知っている。なぜわざわざ自分たち第一特殊遊隊だけが戦場に出ているのか、二人は激しく疑問に感じていた。

「本当に多いな、DMFB。さっきので何匹目だ？」

「5」

燃え盛る炎に包まれた手に霧散しつつあるDMFBを掴む久宮に、未来小は相も変わらず一単語だけで構成された返答しか返さない。普段の彼女からはとても考えられない対応である。

DMFBは、どうやら群れているだけではなく、定期的にやや外れに出ては見回りをしているようだ。そのせいか、まだ群れまで到達していないはずのこの二人の前にも、さきほどからDMFBが散発的に現れるようになっていた。

「で、あとどれくらいだ？群れが見えるようになるのは」

「さあ？」

「……………まあ、もうすぐで見えてくるだろ」

適当に自己完結させて久宮はまた歩き出した。
しかし、

「……………？どうした？」

その直後、未来小がなんの前触れもなく、その歩みを止めた。

「おい、未来小？どうし」

「来たよ」

久宮の言葉を遮って未来小はそう言った。
途端、

オオオオオオオオオオオオオオオオ……………

「あーりゃりゃ、いつのまにかこんなところまで……………、参ったね、
じりゃ」

額を押さえる久宮の横で、未来小は腰のガンホルダーから二挺の拳銃を取り出し、突如周囲を取り囲むように現れたDMFBの群れを前にして構えていた。

「この数……勝てんのか？」

「何言ってるの？勝たなきゃいけないでしょ。負けたら殺すよ」

ようやくまともに戻ってきた返答の内容に苦笑して、久宮は、

「ハッ……んじゃあ、殺されないように頑張るとしますかね。」

「てめえら、俺の命のために協力しろよ？」

その身体に炎を纏わせた。

「ねえ、尊何……」

「なになかな?」

「これ、私たちでどうにかできるレベルの数なの……?」

「どうかな? 僕的能力でも2、3回は睨まないと碎けないね」

「……これ、Bランクくらいよね?」

「ランク云々以前に魔力が融合したDMFBだから、防御能力が高いんだよね。濃度じゃなく、結合強度が高いから実質ランクを一つ上げたものだと認識したほうがいいんじゃない?」

「……………そうね、そうするわ……………」

二人の会話で察することもできるかもしれないが、尊何と未永栖の二人は、既にDMFBの群れに突入済みである。

だが、その際に目にしたDMFBの数の規模に、未永栖は軽い絶望感を抱いている。その表れた会話が、今も繰り返されているというわけである。

「どっしよ……………」

「倒そうよ。せめて援護射撃くらいはできるでしょ?」

そう言いつつ、尊何はDMFBを睨み、その視界に入ったものを数体砕いていた。が、それを耐え、あるいはすり抜けたものが尊何を通り過ぎ、未永栖へと迫った。

「お、そっち行ったよ」

「はいはい……」

気楽に警告してくる尊何にいかにも面倒そうな返事を返す未永栖だが、そこは10年近い戦歴を持つ戦士、魔導回路を組み込んだ洋弓で数本の矢を同時に射り、その自身に迫るDMFBを結合前の魔力へと霧散させた。DMFBは魔力の塊であるため、死ぬ時はこうして魔力が拡散していく。

と、これだけを見ていれば、この二人、かなり余裕があるように見えるだろう。しかしその実、そうでもない。むしろ、余裕など一切挟む余地がないほどに彼らの心中は焦りと若干の恐怖とほんの僅かな興奮で満ちている。二人の軽口も、それを誤魔化すための虚勢に過ぎない。

「あー……、未永栖、わかってると思うけど」

「はいはい、わかってるわよ。あんたの前には立ちません。味方に殺られるなんて御免だもの」

「ならいいかな。頼んだよ」

尊何は固有の能力の都合上、一人での戦闘のほうが効率がいい。視界に入り焦点が合ってしまえば、敵味方の区別もなく碎いてしまふという魔術が集団戦に適しているはずがない。それ故、彼は常に単独での作戦が多かった。

今回もそうなると思うていたのだが、今回のみなぜか九能が未永栖と組むよう指示したのである。未永栖や尊何には、二人を疵術師として評価し信頼しているため、基本的に指示や口出しをしないのが九能であった。それらが今回は二重の意味で適用されなかった。

「ま、だからなんだって話だね。どうせ結局は何も変わらないんだから」

「……なに？」

「なんでもないよ。……さて、集中しないとね」

かといって、いつもと違うことを理由に実力を出せないほど二人は脆くはなく、経験がないわけでもない。そもそもこの数のDMFBに囲まれることこそ異常の極みだというのに、そんな些事に構っている余裕などあるはずもない。

「私は尊何の打ち漏らしを適当に殺しておくから」

「じゃ、任せるよ、背中は」

「勝手に任せないでよ、そんな重いもの」

二人は未だ軽口を叩きながらも、着実にその敵の数を減らしていた。

突如群れの中心に降り立ったのは、一人の少女だった。

さしものDMFBも驚いただろう。なにせその少女は上空から降ってきたのだ、消えかかった同胞の亡骸とともに。

それを見れば、彼らも少女が自らの敵であると瞬時に判断するのは当然。その証拠に、その場にいたすべてのDMFBは各々の方法で彼女に敵意を示していた。

「はわー、いつぱいいるね〜」

しかし、少女はまったく緊張感の欠片さえもなく、見たままの感想をその口に乘せる。

少女にはその身を守るための武器の類は何一つ備えられていない。少女は、DMFBという最高の脅威の前で極限に無防備だった。もちろん、その少女が武器を持ったところで役に立つかどうかは疑問だが。

しかし

ガアアアアアアアアアアアア！！

獣のような咆哮を上げながら、先兵として数体のDMFBが少女に襲いかかる。まさに絶体絶命。自衛の手段のない少女は、そのまま爪牙にかかって死ぬしかない。

普通ならば。

「わ、よっ……と」

少女は、その襲い来る爪や牙や、果ては灼熱の火炎を真横にステップして避けた。軽い足取りでこともなさに着地し、次もまた、笑顔でDMFBを見上げた。

「あはっ、遊んでほしいんだ？
さん、いっぱい、ね」

魅戈も遊びたいよ、たく

続けて迫る自らの身体の2倍はある顎も、バックステップで難なくかわす。

「うん、遊びたい。でもね」

「

前線に出る者の中では唯一一人となった魅戈は、言いつつ四方八方から繰り出されるDMFBのありとあらゆる攻撃を、まるで舞うように避けていた。それが舞踏の一部であるかのように、最初からそうなるように仕組まれているかのように、彼女の舞いは優美で、かつ不自然さが一切なかった。

「でもね」

魅戈は突如、立ち止る。DMFBは当然、我先にと的に成り下がった魅戈に各々の爪や牙を振るう。

「でも、今は遊んでられないんだ…… 今日はいったいどんな奴？

「

バチンッ!と、

まるでそこに壁ができたかのように、魅戈に迫撃するDMFBが弾き飛ばされた。

「今日はいつたいどんな奴?と、おばさんはいいました。兵隊さんと、わたしは答えました」

まるで、と形容する必要もなく、まさにそのまま、何の疑いようもなく魅戈は詠っていた。しかしそれは、ただ詠っているだけではない。その詠声が響く度に、周囲のDMFBは苦悶の咆哮を上げ、耐えられなくなったものは断末魔を上げて絶命した。

「兵隊さんはどうだった?とおばさんはいいました。ほんの少しだけ乱暴でしたと、わたしは答えました」

誰も、何もしていないのに、DMFBらはひとりでに身体が両断され、首が捻じれ落ち、肉片をまき散らしながら爆散し、何の変化もなくただ死んでいき、様々な形で死んでいった。

「次はどんな奴だろう?とおばさんはいいました。次は獵師さんかもと、わたしは答えました」

「前にも獵師はいた。どうだった?と、おばさんはいいました。臆病で、中に入ってきてませんでしたと、わたしは答えました」

「今度は満足させられる獵師がいいね?と、おばさんはわらいました。はいと、わたしもわらいました」

「でもと、わたしはつぶやきました。おばさんは何もいませんでした」

最後の数匹。自分の最期を悟ったのか、何かに苦しみながらもその腕にある無数の刃を振るい、背の翼膜を羽ばたかせて、魅戈へとその爪牙を向けた。

それは最期の悪あがきか、あるいは決死の呐喊か。どちらにしろ

「でも、死体とやるほうが気楽なのかしら？生きている男ではいろいろかんがえなくてはならないからと、わたしがいうと、おばさんは泣き出してしまいました、とき」

その舞台には、詠い手一人しか残っていなかった。

頂上ほど広くもないが一応広場ともいえなくもないこの空間に、
彼はいた。

私にとっては二度目の邂逅。正直二度目なんかはないほうがいいんだけど、この二度目で終わらせるつもりでもあるから我慢はしてお
く。

彼 ファントムは、気付いているはずなのにこちらを見
ようとせせず、無言で太陽の沈みかけている空を眺めていた。なん
で黄昏てるんだろうか？

そうはいつても、ファントムがこの期に及んで何を思っている
が私には関係ない。私は、会話に支障がない程度の距離までファン
トムへ歩み寄った。

が、それでもファントムはこちらをシカト。なんか腹立ったので、
私も何も言わずにファントムから少し離れた場所で立っていた。

「……………」

「……………」

どこからか、地を揺らすほどの爆音が響いた。こんな派手な戦い
方をするのは、未来小か久宮くらいしかないから、その二人のど
ちらかだろう。

「……………素晴らしいな」

ファントムがやっとその口から言葉を発する。

「素晴らしい。我々の同胞が次々に葬られていく……………我らが同
胞が、まるで塵芥のように散っていくではないか……………」

「そうね、まるでゴミのようだわ」

私が同意すると、ファントムは私を見て、その顔に嗤いを浮かべた。気持ち悪い。

「そこで同意されると、また寂しいものだな。できれば同情してほしかったのだが」

「素晴らしいと言ったのはあなたでしょう？仲間がやられるのを喜ぶなんて不謹慎にもほどがあるけれど」

「ククツ、それもそうだ。折角女王が腹を痛めて産んだ子どもたちだ、死んだのなら弔ってやらねば女王に怒られるなあ？」

ククク、と気味の悪い嗤い方をするファントムは、前回見た時とは少々違っていた。具体的には、以前の戦いでは腕のあるはずの部分には蛇の群体があったが、今は通常のヒトと同じような腕になっていた。奈都海の報告から考えるに、戦闘中だけ腕が蛇になるということでもなさそうだけど……………どのみち戦いにはさして影響してこないだろうから、私はすぐに考えるのをやめた。

「それで、お姫様はいつたどこにいるのかしら？」

「おやおや……………、魔女は、目の前に私がいるというのに、女王に『執心かな？』」

話題を変えると、ファントムは案の定それに喰いついてきた。自己顕示欲の強いファントムなら、この話題を無視するとは考えられなかった。私にとってもこの話題を追求することは無益にはならない。

しかし、

「そうねえ……できれば、今すぐ会いたいものね」

「ククク、安心しろ。貴様に仕える騎士の向かうその先に、女王はいる。貴様が会わずとも、騎士が会いに行く予定だったのだろう？」

「……ッ」

ファントムのこの言葉は予想外だった。

深夜の情報から、私たちはファントムと後朱雀沙夢濡の居場所にある程度の目星をつけた。それに加えて、適当な主観ではあるけれど、女王というからには頂上にいるものだろうと思い、奈都海をそこに向かわせたが、それは案の定だったというわけだ。

それは別にいい。予定通りだ。

でも、なぜそれをファントムが知っている？奈都海と別れたのは、それなりに近いことだ。ファントムがそれを直接見に行ったということなら、ここで会えるはずもないし、ファントムがわざわざ奈都海を見に行くということも考えにくい。なにより奈都海がどこに向かっているのかは、見ただけではわからないはずだ。

ということとは、それ以外の情報を得る手段があるということになる。

(こつちの様子は全部筒抜けに近いってことね……)

情報収集に長けたDMFBでもいるのかもしれない。あるいは隠密性の高いDMFBなら会話を盗み聞くことも可能なはず。ただ、ここに来る途中とは違って、ここにはファントムの他にDMFBの姿は見当たらないが……、

「ククク……まあ、騎士が女王に謁見するのは、またおかしなこと

ではあるまい？むしろ当然、礼儀のいい、できた騎士ではないか、なあ？」

「そんなこと言って……その女王様とやらが心配じゃないの？」

「その心配もまた、無用。雑兵ではあるが女王を守るには十分な数を揃えてある。どんな魔術を使うかわからんが、あの程度の魔術師では突破できまい。ククク……」

それを聞いて安心した。数はあるが質の低い敵なら、奈都海の十八番。突破するだけなら、ファントムの言う通り本当になんの心配もない。もちろん、それをファントムに漏らすなんてバカな真似をしない。

あとは私。私がこの目の前のファントムをどうできるか。倒すだけではダメだ。ファントムの目的を明かし、阻止し、完全に潰した上で倒さなければならぬ。

「ま、何があっても私の選んだ子たちだもの、きちんと自分の役目は果たしてくれるわ」

「ほお、これはまたずいぶんな信頼のしようだな。それが買い被りでなければ、いいがなあ？」

「人は買い被ってこそ、実力以上のものが出せる。過小評価して成長を抑え込んでしまうよりはマシよ」

「ククク……それで貴様の配下が壊れてしまわなければいいがな……
ククククククク……」

ファントムは気味の悪い嗤いをこの広場に響かせる。その嗤いで

この話題は途切れた。

ファントムの嗤いがおさまると、ここに再び静寂が訪れる。風はあってもそれに靡いて音を鳴らす木々の葉のようなものが果ててしまったこの場では、それすらもない。お互い向き合ったまま、無言のまま微動だにせず、その沈黙に身を沈める。

それを破ったのは、私だった。

「さて」

「今度は私たちか？」

私の言いたいことを察したのか、ファントムはそう言って足の形を直した。ファントムなりの構えなのだろう。

つまり、交戦の意思。

私はそれを見て、ポケットからキーホルダーを取り出す。

「気が早いのね？」

「私は、気は長いほうだが……、目的を達するために脅威となる者を放っておくような真似はせんよ。脅威というと、貴様は若干違うかな……」

「そう」

私は手の中にキーホルダーを握りこむ。次の瞬間には、私の手には4m近い長大な斧が現れていた。

前回使っていた斧とは違う、それ以上に巨大な鉄製の斧。重さは2t。柄の両端に刃がついており、その刃も柄もすべてが鋼鉄。それだけではなく、その柄は20cmもない。つまり片手で、その長さ4m、重量2tの両刃の斧を振るわなければならない。もちろん、

私でなければできない。

ファントムは私の手の斧を見て、体勢は崩さないままあご下に手を当てた。

「ふむ……、以前よりは大きいようだが、それが貴様の本気か？ 貴様の持ちうるすべてを捧げねば私には勝てぬ、と以前のあれで学んだと思っていたのだがな……、残念だ、非常に残念だぞ、魔女よ？」

私は、ファントムの言うことを無視して手の斧を地面に突き立てる。そして、その行動に対して頭に疑問符を浮かべるファントムに、私は宣言した。

「……残念がる必要なんかないわよ。これから私にできる極限の究極を見せてあげるから……、神ですら抗えない、絶対的な回帰を」

それを聞いた途端、ファントムの顔色が変わった。

時間は前後するが、九能と奈都海が別行動に入る、その時よりもまだ前の時間の話。

DMFBの群れるその高台を一望できる絶好のポジションに、大原深夜はいた。

彼女は、今回の戦闘で唯一後方支援を担当する。能力自体が前線に出られるようなものではないので、必然的にそうなるのだが、普段は咲と共同でやることを一人でやらねばならないため、その必要な労力は単純計算で2倍。普通に考えれば、並大抵なことではないが、例によって、深夜は普通ではなかった。基本的に個性的な魔術師の中でも、さらに飛びぬけている、という意味で。

「そろそろ皆さん、いいですかね」

深夜は、誰に言うともなくそう呟くと、手首に巻いていた赤い紐を引っ張って千切った。その途端、

ブオツ！！

と、魔力の波とでも表現すべきものが、深夜から江倉宮高台へ向かって放たれた。

これは、“紅線”^{ホンシアン}と呼ばれる、中国を起源とする通信魔術の一つである。携帯電話が発明され、一般に普及した現代においても、ホストと呼ばれる魔力の提供者の魔力が尽きない限りは通信途絶はありえないことから、魔術師たちは、特に戦闘中の意思疎通にこの魔術を重用している。携帯電話では戦闘中に破壊される可能性もあり、また、この魔術はさほど訓練も必要なく習得できる汎用魔術であるため、魔術先進国であるヨーロッパ諸国では、中世末期に中国から伝来してから現代まで広く多用されていたという。それから全世界に広がったのも、ヨーロッパが中心だった。

その魔術がここで使われる理由とは、当然第一特殊遊隊の隊員らがお互いの状況を確認するためである。この魔術に人数制限はなく、一度発動さえしてしまえば距離が開いても通信は可能という汎用性も持ち合わせている。

(なんと便利な魔術です……………ご都合主義ともいいいますか)

深夜は愚痴を垂れているが、便利なことには変わりはない。深夜がこうして後方に立つことになれば、ほとんど毎回使用する魔術である。これによって、隊員が救われたことも少なくない。

「さて、繋がりましたか。誰か、聞こえている方がいらっしやいましたらご返事ください」

「ん、深夜？またあれ？」

返ってきたのは、未来小の声だった。声色には特に切羽詰まったような色が見えないため、まだ交戦に入っていないのだろうと深夜は目星をつけた。

「はい、あれです。そちらの状況はどうですか？」

『どうもこうも…………あっちもこっちもDMFBばかりで萎えるね、ほんとに』

しかし、深夜は、未来小の愚痴から、自分の予想が外れていることを悟る。

「交戦中ですか…………？」

『まあねー。でき、そっちから何か変わったことはわかんないかな？』

「変わったこと、ですか……」

深夜は改めて現在戦場になっているであろう高台を見る。

うねうねと何かの影が蠢くのは見えるが、それは前から変化がない。あつたとしても、DMFBが多すぎて変わったことにすら気付かないだろう。

「正直言つて、わかりません。たとえあつたとしても、肉眼ではわかりにくいですし」

「だよねー………うわっ！？危なっ！」

向こうから軽い悲鳴が聞こえる。深夜は少し心配になったが、それよりもまず、自分の仕事に専念することにした。

「では、あれを始めたいと思います。そちらの現時点での座標を教えてください」

「あいよ。えーつとね………」

深夜は、教えられた座標を元に“魔力を読む”。

「そちらの敵勢は、数にして約30。戦闘に反応してか、まだ集まってきたそうですが」

「うへ………多くない？」

「どこもそんなものですよ。ついでに他の方の居場所も探して読んでみたんですが、尊何さんの周辺には50〜60のDMFBがいますから」

「……大変だね」

「そう思うなら、そちらを殲滅して援護に向かってください。まあ、可能であれば、でいいですけど」

「できればね……………じゃ、引き続きよろしく。全体読み取れたら教えて」

「はい。では、後ほど」

深夜の能力の根本は、魔力を“読むこと”。そこから派生して、遠距離からの精度の高い索敵や、簡単な魔術なら発動することができる。“紅線”も、それを利用したものだ。

また、魔力の記憶を“読むこと”で、その場とその周辺の過去の状況がどうだったのかある程度把握できる、という特殊な能力も持っている。

唯利亜の“識ること”と能力の内容は類似しているが、唯利亜の場合、その気になれば対象の内面、裏側まで把握できる半面、深夜の場合は表面上のことしか知ることはできない。逆に、唯利亜は現状しかわからないが、深夜は過去まで遡って状況の把握ができるというアドバンテージがある。ただ、深夜の“読むこと”という特性は、唯利亜の“識ること”とは異なり、読むことはできても理解できるとは限らない。知識として取得し、理解まで同時にこなす唯利亜の源血の特性には、総合的に見て一步譲る。

それでも、遠距離からの状況把握や魔術の発動は後方支援には重要なものだ。まともな戦闘能力を持ち合わせていないがゆえに、深

夜はこちらの方面の魔術に特化している。深夜は戦闘に参加できない分、支援の面に気合を入れていた。

「さて、と……できればもう一人」

『深夜さん、聞こえますか？』

できればもう一人くらい通信しておきたいのですが、などと言おうとした、その時、タイミング良く深夜の頭に響いたのは、天代の声だった。

「天代くんですか。魅戈さんは運び終えたんですか？」

『あ、いえ、今抱えています』

『深夜ちゃん、やつほー』

同時に、魅戈の相変わらず気楽な声も聞こえてきた。この部隊には戦闘に入ってもいつも通りな人ばかりであることに、今さらながらに若干の危惧を感じた。

が、深夜はそんなことなどおくびにも出さずに、自分の役目を果たすべく、会話のために通信強度を上げた。

「二人は今どこに？」

『んーっとね……、天代くん、ここどこ？』

『えっと……高台の北側です。もう少しで魅戈さんを下ろすポイントになると思います』

「そうですね。……………大丈夫ですね。魅戈さんなら十分相手できる数です」

深夜は言われた場所の魔力を読み、その情報を伝える。元々魅戈は、対多数戦闘において高い能力を発揮できるタイプなので、むしろ敵の数が多いほうが魅戈の力は相対的に高まる。とはいえ、一応の限界はある。それも踏まえて、魅戈が相手するにちょうどいい密度にDMFBが終結しているのが、天代の言うポイントだった。

『あ。天代くん、ここ、ここ』

『はい、わかりました』

そうこうしている内に、天代と魅戈は目的地にたどり着いたらしい。深夜からは空にも黒い影が見えるが、その牙は天代には向けられなかったらしい。なんとも運のいいことである。

数分後、また天代から通信が来た。

『無事、魅戈さんを下ろしました。僕は、あとは支部に戻りますけど……………』

「はい、そうしてください。“紅線”のほうは残しておきますから、何かあればそれを使ってくださいね」

『わかりました。それではまた』

『天代くん、ありがとねー』

天代と魅戈、それぞれそう言って、通信は完全に切れた。

(さて、他の方は)

なかなか通信が来ないところを見ると、どうやら戦うことで精いっぱいらしい。何かあればあちらから言ってくるはずだ。そう考えて、深夜は無理に会話をしようとは思わなかった。

代わりに、深夜は、この戦場となつて江倉宮高台の把握に努める。範囲が広いため、いくつか分割しての調査だが、精度はかなり高い。

(みなさん、既に戦闘に入られているようですね。ただ……………)

目標であるファントムと、それに拉致された後朱雀沙夢濡が見当たらない。後朱雀沙夢濡はともかく、存在するだけで高密度の魔力を放出するファントムの所在がわからないはずがない。深夜は、以前使われたなにかしらの細工を、また使われている可能性に至り、それ以外の手がかりの捜索にかかった。

と、

(……………？これは……………)

手がかりの捜索の中で、不自然な点を発見した。

それは、“DMFBが不自然なほどに集まっている場所”と“DMFBが不自然なほどにいない、空白の場所”の二つだった。

DMFBが大量に存在するのは、この戦場のいたるところに当てはまるが、その中でも他所以上に密集している場所があった。逆に例外的に全くと言っていいほどDMFBの姿が見られない場所まである。

前者はこの高台の頂上。そして、後者は高台の中腹に位置する広場だった。

(なにかあるのでしょうか？)

頂上のDMFBの密集地帯なら、おそらく守るべき何かがあるのだろう、と予想はできる。この場合は、それが後朱雀沙夢濡になるが、中腹の広場にDMFBが全く存在しない、その意味はわからない。そこに空白を作ることには何か意味があるとも思えない。

(もしかして、ファントムでしょうか……)

ファントムなら、特に自分の力に自身を持つファントムなら、一騎討ちを望むものもいるかもしれない。そこに他のDMFBは邪魔なだけだ。整った舞台上、何者にも邪魔されない戦場を作りたいのであれば、高台中腹の今の広場は絶好の場所とも言える。

(ま、最終的に判断するのはあちらです。伝えることは伝えておいて、判断を待ちましょう)

深夜は、あくまで情報を提供するだけ。もちろん、伝えるのは自分が確認できた事実でなければならぬ。しかし、それだけで方針が決まるというわけでもない。

深夜は、その事実から推測できる状況、情報も同時に伝えるが、それを採用し自らの行動に反映するかどうかは現場に出ている者次第。戦場の状況に合わせて取るべき行動も変わるのだから、それは当然である。

あるいは、現場の者が見ているものとは正反対の情報を与えることもある。この場合も、どちらが正しいとはいえない。なぜならどちらが敵に偽の情報を見せられているかの判断はしにくいからだ。だが逆に、虚偽があるならその中に事実もある。全くの作りものなど存在しない。与えられた情報を取捨選択し、自分にとっての真実とするかどうかは、最終的な行動を行う、戦場に出ている者たちで

ある。

(とはいえ、あの後朱雀沙夢濡の居場所はほぼ明白。それも含めて伝えておきますか)

深夜は、九能と連絡を取るために、もう一度込める魔力を増やして通信強度を高めた。

第1章 誘惑の狂姫 #21

江倉宮高台の頂上。

その中心には、高台の下からでも見ることのできる巨木がそびえ立っている。そこは、日曜日に俺と九能が彷徨った果てに辿りついた場所であり、今は、会長こと後朱雀沙夢濡が木にもたれて座っていた。

まあ……………、なんて場所を選んでくれたんだろっか、と言いた
い。

「いらっしやい、ナツ」

「ええ、ご無沙汰してます、会長」

今まで在り得なかった、俺が喋るといふ光景を見ても、会長は座ったまま笑顔を崩さなかった。俺の声を聞くことすら初めてののはずなのに、会長に驚いた様子は見えない。
それどころか、

「なかなかいい声ね？惚れちゃいそうだわ……………」

そんなことまで言いだす始末である。返答に困った俺は、「そりやどうも」とだけ返しておいた。

会長の周囲には、今まで俺が見てきたものよりも醜悪で、かつ禍々しい雰囲気を持つDMFBが無数侍っていた。その中で、悠然と微笑みを浮かべてそんなことを言うのだから、会長には既に正気はないのだろっ。おそらくファントムに壊されてしまっている。

やはり、戦わねばならないのか。

「それにしても」

会長は、傍らのDMFBの体躯を撫でながら、そう切りだしてきた。

「よくあれだけの数の子どもたちを突破できたわね？ ナツにできるとは思ってなかったから、正直驚いたわ」

子どもたち………DMFBのことだろうか。

「みんな殺されたのね………かわいそうだわ」

「………あなたを助けるには必要なことだったので」

会長は笑みのまま視線を鋭くして俺を睨んだ。

「あら、しょうがなかった、とでも言うつもり？ あの子たちだって生きているのに」

「それを言うなら、俺たちだって生きてますよ。お互い殺し合う存在なのですから、お互い様でしょう」

実際の話をするなら、今回の戦いにおいてDMFBによる被害はまだない。今朝の戦いでファントムによって50人以上が殺されてしまったが、それ以外に殺されたという報告は聞いていない。

だが、DMFBは人間を殺すもの、という認識はあって当然。ついさっき、俺がここに来る途中になかなか危ない目に会ってしまったが、それこそ人を殺す意思があることの表れだ。

「だからって無暗に殺すことないと思わない？この子たちも生物の一種。もちろん、人間に危害を与えるものもいるけれど、それが全てじゃない。人に味方する子だっているし、人間に無関心な子だっている。あなたたちがそういう子まで殺そうとするから、だから、この子たちは反撃せざるをえない状況に陥ってしまう。それなのに、あなたたちはDMFBをすべて敵だと勝手に決め付けて、自分たちのせいで戦わなければならない状況になってしまっているということにも気付かずに、気付いても気付いていない振りをして、殺し続けている。……ね？不条理だと思わない？」

「……………まあ、あなたから見れば納得できないでしょうね……………」

俺は特に人間至上主義というわけではないが、人間ではある。それ故に、思考はかなりの割合で人間に偏るし、その思考の中で擁護するのは人間でしかない。

とはいえ、シャトー、ノクターン、ノエルといった、DMFBでありながら俺たちに敵対しない例を知っているため、会長の言葉を真正面から否定することができない。もちろん、肯定もできないが。

「ただ、DMFBもDMFBを殺す存在である疵術師以外の人間も手に掛けているでしょう。DMFBの存在すら知らない一般人も何人も殺されているという事実があります。そういう意味でも、お互い様ですよ」

「あらあら　　なら、ここで殺されても文句はないのね？」

会長がそれを言い終わるかどうかという瞬間、俺は何かを感じ、直感だけで後方に跳び退った。

「あらら、避けられちゃった」

会長は深く、残虐な笑みを浮かべてそう言った。

ついさっきまで俺が立っていた場所には小さなクレーターができていた。何をされたのかはわからなかったが、あのまま突っ立っていれば間違いなく死んでいただろう。

「やるじゃない？せつかく不意を突いたと思ったのに」

クスクスと笑う会長を前に、俺は額に気持ちの悪い冷や汗を浮かべる。覚悟はしていたが、やはり会長は本気で俺を殺すつもりらしい。

「とはいっても、死ぬつもりも毛頭ないがね……！」

「ふふ………さ、始めましょう……？」

その言葉を最後に、周囲のDMFBは堰を切ったように、その牙を、爪を、腕を、翼を、脚を、眼を俺に向けて、振るい、怒涛の如く迫ってきた。

どれだけ避けても、走ってもその攻撃は俺を追いかけてくる。攻勢に加わるDMFBも時間に比例して多くなっていく。

「いつまで避けられるかしら？……楽しみだわ」

会長は俺をいたぶるつもりだろうか。その気になれば、ここにいるDMFBを総動員して俺を瞬殺することも可能なはずだ。それをしていないということは、俺を鬪るつもりなのか、あるいは俺を生かすことで達せられる何かしらの目的があるのか。

ついさっき殺す気満々な攻撃を受けた身としては、前者を思い浮

かべるのが当然だろう。が、それではどうも今の状況に納得できなかった。勝るにしても、どうにも攻撃がぬるすぎる。これだけの数がいるのに生身の俺で避けられるような攻撃で殺せると思っているのだろうか？

「……………もついいかしら。準備も整ったし……………」

会長がそう言ったのが聞こえてきて、俺は戦慄する。まずい、この状況で本気になられたら本格的に成す術がない。

そう思った矢先、スツ…………と、会長が立ちあがった。そして、何を思ったか、無様に逃げ回る俺のほうへ歩み寄ってきた。

まさかとは思うが、会長が戦うつもりなのか？武器の類を持っているようには見えないが、それだけが攻撃手段とは限らない。魔術でも使うのか、あるいはまだ俺の知らない方があるのかもしれない。どちらにしろ、厄介なことに変わりはない。会長は救出対象だ。唯利亜に言われていることもあるし、できれば無傷で助け出したい。

「私を見ながら考え事？ずいぶん余裕なのね？」

余裕がないから打開策を考えているのですがね、などとは、そんなことを言う余裕すらないから言えず、ただDMFBの攻撃を避けることに専念するしかなかった。

非常にまずい。

今まで、ここに来るまでのDMFBなら、なんの統率性もなく、ただ野性的に突っ込んでくるだけだった。

しかし、今は違う。会長という指揮官を得た奴らは、理性的かつ効率的に攻撃を仕掛けてくる。避ければ避けた先にまた攻撃がある。俺が適当な魔術を放つても、それが効かないものだとは判断すれば、

無視して攻勢に入る。ここに来る前なら、適当に魔術を撃つておけば、少々ではあるものの、動きを止めてくれていた。しかし、今はそれが通用しない。

これだけ効率的な戦い方をしながらも、しかし決して俺を殺すことはない。俺が潜り抜けられるギリギリの密度で攻撃を繰り返してくる。その間に俺が反撃をさせるような隙など、当然与えてはくれない。

「……………」

やむを得ないか。無理やりにもやるしかない。敵が雑魚ばかりであることを願おう。

「…………… 空間指定 …… 術者、主観概念に依存……………」

「?」

会長は、突然の俺の発言に疑問符を浮かべる。しかし、すぐに何かに思い至ったのか、若干DMFBの攻撃が激しくなる。が、今の俺には、それが俺の生命に直結しない限り構っている暇はない。

「共通定義及び排除定義 …… 同上……………」

簡単に言っってしまうおう。俺の魔術は、“声に宿る”。正確に言えば、俺の声には魔力が宿る。そして、その魔力が俺の声に応じて魔術に変化する。

俺の場合、喉応術性神経が声帯にも繋がっているがために、声に魔力が含まれてしまう。これが、俺が喋ることができない理由だ。下手に声を出せば、小規模ではあっても魔術が発動する恐れがあるし、俺の声に含まれる魔力の量は、あまり多く喋ると一般人が記憶

障害を起こすのに十分な魔力濃度になりかねない量である。そのためか、俺の身体は、自動的に戦闘中以外では声が出せない状態になっている。

「主観概念の特定を開始。終了後、即座に発動する……」

しかし、声を出したただけで魔術が発動できるわけではない。規模の大きい魔術を発動する場合は、声に含まれる魔力だけでは足りないため、他の方法、つまり普通に魔術を発動する時と同じ方法で魔力を体外に放出し、それを魔術の糧にする必要がある。

また、喉応術性神経が声帯に繋がっているのは疵術師の定義に反する、と一見そう見えるかもしれない。疵術師の定義といえば、“魔術師とは異なり、喉応術性神経が声帯ではなく脳から伸びている” というものである。

だが、俺の場合、喉応術性神経は声帯に繋がっているのであって、声帯から伸びている、というわけではない。通常の魔術師は喉応術性神経の中枢が声帯で、疵術師は脳を中枢としている。そして、その疵術師の中でも、俺は珍しいことに喉応術性神経が声帯にも繋がっているのである。これは、詠うことによって敵にダメージを与えられる魅戈さんにも当てはまる。しかし、魅戈さんは経験もあり、修練に徹したこともあって、早い段階で意識的に声の魔力の有無を操作できるようになったという。

俺は魅戈さんと違い、詠う必要はない。明確な意思とイメージを持って、魔術の内容、あるいは発動条件に相当する言葉を口にすることで、魔術は発動できる。

その中でも俺が得意としているのが

「過程、終了。 発動」

途端、

「な……………！」

会長は歩みを止めて、驚きをもってその光景に見入る。
その光景とは、俺と会長の頭上で起きた、

ギィアアアアアアアアアアア……………

世にもおぞましい断末魔を上げながら空から降り注ぐ無数の矢に貫かれるDMFB。その矢に貫かれたものは、例外なく消滅し、無数あつたDMFBは瞬く間にその数を減らしていった。

「そんな……………」

驚きと悲しみを交えた表情で、会長はその光景を眺めている。

1分も経たぬうちに、ここに残るDMFBは一体のみとなっていた。ネコ科の体躯に蛇の頭と前足にカマキリのカマを備えた異形が一体、ここに残っているだけだった。

「何を……………したの……………」

「答える必要がありますか？」

震える声で問う会長に、俺は冷たく返す。俺に訊く以外に知る手段がないのか、会長は悔しげに唇を噛んだ。

「ふざけないで……………こんな、酷いこと……………」

「これが、DMFBが今までやってきたことですよ。その仕返し、
というわけでもありませんが」

「それこそふざけないで！この子たちはまだ、何もしてないじゃないー！」

「あくまで、まだ、でしよう？放っておけば、いずれ当たり前のように虐殺を繰り返しますよ」

「……っ」

会長は既に俺の魔術について考えることを放棄してしまったらしいが、その目には隠しようのない怒りが込められ、俺に向けられていた。

俺がつい先ほど使った魔術は、“異なること”を許さない、という魔術である。

まず、基準となる共通の要素を指定する。そして、その共通の要素を持っているものの中で、少なくとも一個体が持っている要素を指定する。

それだけでいい。あとは発動するだけで、一回目に指定した要素を持つものの中で、二回目に指定した要素を持たないものを消滅させる。ついさつき使った時は、まずDMFBという複数体に共通する要素を指定し、そして、今残っている一体のDMFBと同じ外見という要素を二度目に指定した。こうすることで、DMFBの中で、指定した外見、つまりネコ科の体躯に蛇の頭部、前足にカマキリのカマのようなものを備えたもの以外は俺の魔術によって消滅するというわけだ。もちろん、範囲に限界はあるし、DMFBが強力すぎると効果がないこともある。幸い、今回は雑魚ばかりだったらしく、残った個体以外は全滅させることができた。

「……ふふ、でも」

「

しかし、会長は一転、不敵な笑みを浮かべる。

「この子を残してしまったのは失敗だったわね。そんな状態で勝てるのかしら？」

そう、この魔術には致命的な弱点がある。それは、少なくとも一体以上は敵が残り、真の意味での全滅は実現できない、ということである。こちらにもう一人でも味方がいるなら、これ以上ないほど有効な魔術だが、今は俺一人という状況である。

いくら十八番とはいえ、こんな大規模な魔術を使えば疲労は大きい。ここに来るまでも一度この魔術を使っている俺は、今、疲労感と脱力感に襲われている最中だ。こんな状態である化物と戦えと言われても無理な話である。

倒せるからといって倒されない道理はない。疵術師というのは、攻撃面と防御面に大きなギャップがあることが多く、特に俺はそれが顕著だ。複数の敵に対しては大きな攻撃力を発揮できるが、防御手段には乏しい。相手が単体になると、攻撃面すら怪しくなってくる。

万全の状態なら、Cランク程度のDMFB相手に有利に戦うことも可能はずだ。しかし、今は魔力がかなり消費されてしまっている。魔力が減ると、通常よりも精神情報に汚染されるスピードが速くなる。精神情報一単位に対する魔力の量が少なくなるのだから当然のことである。そうなると、自己治癒能力の促進機能が低下し、疲労は溜まったまま回復が遅くなる。

そして、代謝としての魔力の交換が頻繁になってくる。その時、純度の低い魔力では魔術に変換しにくく、その上、魔術に使える魔力そのものが少ないため、魔術の質は大きく落ちるのである。難度の高い魔術では発動すらできない。

結局、危機的状況であることに変わりはない。あのDMFBがどれだけのものかはわからないが、Cランクでもかなり危ない。Bラ

ンクだと絶望的だ。

しかし、俺が気にしなければならぬのは、それだけではない。

「でも、安心して？ ナツは殺さない。だって」

会長がそう言ったのを聞いて、俺が安心したと思っただか？

そんなわけがあるか。頭を両手でホールドされた状態で、かつ目の前でそんなことを言われて安心できる奴がいたら、その方法を教えてほしいものだ。それに加えて、何を使ったのか、俺の身体の自由は既に奪われている。気付けば、手も足も指一本すら動かすことができなくなっていた。が、口だけは動くようなので、そちらを使って最期の抵抗を試みる。

「……………一応訊いておきますが、何の真似ですか？」

「わかってるくせに……………ふふっ」

疲労と、なぜかそれ以外の何かの理由で動けない俺に、会長は、その笑みに歪んだ唇を近付けてきた。

九能は、嫌な予感を察し、ファントムと戦う手を止めた。

「……………？どうしたね？魔女よ」

それに続いて、相對していたファントムまで律儀に攻撃を中断した。ファントムは、周りに無数の大蛇を漂わせ、巨斧を握る九能と10mの距離を置いて向かい合う。

しかし、九能はファントムの問いかけにも応えず、すぐにその意識をファントムに戻した。

「なんでもないわ。続けましょう」

そう言うが、しかし九能は斧を構えたまま動かず、またファントムにも攻撃を仕掛ける気配は見えない。

お互いに隙を窺っているわけではない。むしろ、この状況にあって、どういふことか双方ともに隙だらけだった。隙を突こうというのであれば、いつでも突ける、この絶好の機会において、しかし二人はその機会を生かそうとはしなかった。

「……………来ないのね」

「ふ……………、言ったであろう？私は気が長いほうである、と」

その理由は、既にお互いにわかっていた。それは、今お互いが晒している隙は、意図的に作られているものだということである。

この二人は、驚異的なスピードの自己治癒能力を持っている。ファントムは、腕が吹き飛ばされても一秒足らずで治してしまうほどであり、今の九能ならば同等の能力を發揮できる。

ならば、これだけの再生能力があるなら、自分から仕掛ける必要などない。相手に仕掛けさせ、相手の攻撃をわざと受ける。そうすれば、その時、相手には決定的な隙が生まれる。自分は少なからず負傷するだろうが、そんなものはすぐに治るからどうでもいい。攻撃することによって生まれた相手の隙を討つことが目的である。まさに、肉を斬らせて骨を断つ、しかも、斬らせた肉はすぐに治ってしまう、普通の敵からすればとんでもない戦法だった。

が、それをお互いがしては意味がない。ただの根競べになってしまう。それに加えて、どちらにしろ与えた傷はすぐに回復してしまう。先ほど説明した戦法を使ったところで、お互いに攻撃し合っても、お互いにすぐに治してしまう。傍から見れば、この戦いには何の意味もない。九能も、それは十分わかった上で戦っている。それでも、戦わねばならない。

(……もう少し。多分もう少しで、こいつは本当の目的を晒す)

そう、ファントムの目的がわかるまで、それが表に顕在化するまで、九能はファントムと戦い続ける必要がある。

(それまでは　　勝てない)

勝てない。勝ってはならない。

疵術師の戦場において、勝利とは殲滅を意味する。しかし、今ファントムを殺してしまえば、目的が永遠にわからないかもしれない。水面下でことが進み、気付いた時にはもう手遅れかもしれない。それ故に、九能はファントムを殺せない。　　ファントムを確実に殺せる手段があるだけに、なおさら。

「ふっ！」

九能は、自らのすべきことを再確認した末、結局自分から仕掛けることにした。

短く息を吐くとともに、巨斧を振りかぶり、文字通り目にも止まらぬ速さでファントムに肉薄する。が、ファントムは斧の刃が自らに至る前に後方へと跳び、それと同時に周囲の蛇を九能へと伸ばした。

しかし、九能は避ける素振りすら見せず、無数の大蛇をその身に受ける。当然、蛇は九能の身体を容赦なく抉っていく。それでも、九能のスピードは落ちない。九能は、自らの肉体が蛇に碎かれる度に表情を苦痛に歪めるが、しかしすぐにそれは傷とともに跡形もなく消え去っていった。

そして、振るわれる斧。それは、ファントムを囲む蛇を碎き、断ち、斬り、散らせ、千切れさせて、徐々にファントムを九能の攻撃から逃れられない状況へと追い込んでいった。

「っはあ！素晴らしいな、その力！この私さえ凌駕する、人間にはありえない、あつてはならない、それ故に最強、圧倒的な力！まさしく “魔女” だ！」

「そんなに褒められるとっ！照れるじゃない!？」

会話する間にも、九能は巨斧による四撃を加えている。その度にファントムは耐えられない衝撃に身を仰け反らせ、反撃すら許されない。

九能が行ったのは、“源破顕現”。疵術師のみに許された、最強の魔術にして奥の手である。

その名が示す通り、“源破顕現”は源血を表に顕すこと。通常、身の内に在る純性魔力を体外へと解放し、それを直接、魔術の行使に使用する。

この時の魔術の威力は計り知れない。肉体と言うフィルターによって緩和されつつ表れていた源血の特性は直接、魔術に影響を及ぼし、また、100%魔術に変換できるため、単純に威力、規模は倍増する。

しかし、九能はその中でも特殊で、顕現した純性魔力は魔術には使わず、常に顕わし続けている。こうすることで、九能は源血の“戻ること”という特性を強く受けることになり、再生能力が段違いに向上するのである。

それ故に、今のようなたらめな戦い方でファントムを圧倒できている。逆に、魔術団は、これが敵に回ればどれだけ厄介かを知っているために、九能に許可なしの源破顕現を禁止しているのである。

「ぐっ……ぎあっ！」

九能の斧がファントムの肩を砕き、片腕を吹き飛ばした。次いで、九能は跳び上がり、その腕力と重力に任せて巨斧が振り下ろす。ファントムは避けようと横に跳ぶが、刃がかすめて先ほど飛ばされた腕とは逆の腕が今度は持つて行かれた。

さらに、九能はファントムを蹴り飛ばし、斧を振りかぶりながらそれを追う。

が、

「ッ!？」

横っ腹から受けた衝撃に、九能は数十mも吹っ飛ばされ、追撃は

ならなかった。

九能に攻撃を与えたのはファントムの操る大蛇。それが何十匹も束ねられ、巨腕となって九能に襲いかかったのだ。

「かつ……………、そういえば、蛇なんてのもいたわね……………」

言う間にお互いの傷は既に癒えている。それを見た九能は、再び自らファントムに突進していく。

「っはあー!!」

斧の一閃で蛇を薙ぎ払い、その勢いのまま刃をファントムに向ける。

「ちっ……………」

しかし、ファントムは舌打ちしただけで、それに応じようとはしなかった。

九能は怪訝な色を表情に浮かべる。それも当然だろう。お互いに負傷を考えずに戦えるというのに、逃げに徹する理由が九能にはわからない。

「ふん……………、さすが、さすがだ、さすがだな、魔女。最初に見た顕現が貴様のもので、私は幸運だ。私は生まれたばかりだが、ここまで私を圧倒する者と戦えるとは思わなかった、終ぞ思わなかったな……………」

九能は黙ったまま、ファントムの姿を冷静に観察する。

「だが、強いだけだ。それだけでは、“我々”には勝てんぞ……………?」

「……………言っておくけど、こちら私だけではないのよ？」

今度は応えるが、それでも変わらずにファントムの動き、一挙手一投足を見逃さぬように監視している。

そんな九能の返答に、ファントムは満足そうに嗤う。が、九能はそれを見て顔を顰めた。

「気持ち悪……………何、その笑い方……………」

「クツクツク……………女王にも同じようなことを言われたな……………、壊し方を間違えたか、とも思ったが」

そこまで言つて、ファントムは視線を九能から外した。戦闘中にあるまじき行為だが、そこで攻撃を加えるなどという“愚行”を、九能は犯さない。

戦闘中に似つかわしくない行動を取るということは、それ相応の理由がある。例えば、ファントムの本来の目的になんらかの動きがあつた、とか。

「どうやら、我々の茶番はここで終わりのようだ。あとは、本番

舞台の主役は女王と騎士に移ることになる。我々はお役御免というわけだ……………だが、」

ファントムは目を九能に向ける。九能は変わらず斧を構えてファントムの動きに備えている。

「だが、舞台裏で演ってはいけない、という決まりなどなかるう……………」

「……そうね。なら、どうするの？」

「……………クク」

九能の問いかけには答えず、ファントムは笑みだけを返した。それに含まれた意味を正しく理解し、九能は同じように笑みを浮かべる。ファントムのものにも似た、ある種残酷な笑みを。

そして、九能の変化を見たファントムは、さらに笑みを深くし、歓喜の声を上げる。

「では行こうか、魔女よ！舞台上に上がれず前座すら演じきれぬ我々は、まさに従者同士の戦いに相応しい、愚かな戦争を繰る！」

言う間、ファントムの姿が変化していった。顔面は歪み、腕の骨は肉を突き破って外界に晒され、指の爪は長く太く伸び、背は盛り上がり曲がり、脚は足が異様に伸びて脛が異様に縮んで獣のごとく変形した。

「……………そうね。所詮、力しか知らない愚者。力を振るえばすべてが思い通りになると思いこみ、実際に力を振るい、より大きな現実を求めてさらなる力を求める。愚かな戦争はそうやって生まれる。力の勝る者のほうが勝つ、そんな単純な原理だけに縛られた戦い。複雑なのは嫌いなもの、さっさと始めて、遅々として楽しみましょう？」

九能の目にも、既に理性の色は見えない。巨斧を握る細腕には限界まで膨らんだ血管が浮き上がり、その脈動が肉眼でも確認できるほどだった。

「さあ、殺り合おうではないか！この戦い、我が悲願達成の祝宴に

もなろう!!」

「ツツ!!」

本能を剥き出しにして、しかしそれ故にかえって理性的な思考を内に隠した二人は、その人智を超えた戦いに最初の一闪を加えた。

「
行こうか」

明確に示されたその意思は、ノエルに喜悦の笑みを浮かべさせた。

「ずいぶん唐突なこと。あちらの状況がどうなっているのかも、わからないというのに」

軽い非難を浴びせながらも、ノエルの表情は隠しようのない喜びに満ちている。その声にも表れていた喜びを聞いて取った唯利亜は、

しかしそれについて何も言わず、「よいしょっ……」という声とともにベッドから降りた。

唯利亜はもう、咲に救出された直後からかなり回復し、自力で歩くにも問題ないまでになっていた。

「……ま、姉さんにも、さっさと行け、なんて催促されてたしね。そろそろ行かないと、ほんとに怒らせちゃうから」

唯利亜は冗談交じりに、ベッドの向かいで滞空しているノエルに笑いかけた。

「あらあら、お姉さんには頭が上がりませんか？」

ノエルは、律儀にもベッドを迂回して唯利亜の傍までやってくる。近くにかけてあつた上着を羽織る唯利亜は、そんなノエルを横目で見ながら、

「それで、結局、ノエルも来るの？」

「ええ、何か問題でも？」

「ううん、ただの確認」

質問を質問で返されたノエルはそれを気にした様子もなく、平然と答える。一方、唯利亜もノエルの返答は予測していたのか、無感動に返した。

それからしばらくして、適当に身なりを整えた唯利亜は、目だけでノエルに出発を伝える。

「唯利亜さん、服装はそれでいいんですの？」

「んー？大丈夫でしょ。もう夜だし」

唯利亜の服装は、ベッドで療養していた時に来ていたパジャマの上にパーカーを羽織っただけ。他には、首と手首にアクセサリーを着けているが、逆にそれがシユールな印象を与えている。外出するには、どうも相応しくない。ノエルはそれを指摘したのだが、唯利亜は夜だから、という理由で片づけてしまった。

「はあ……唯利亜さんがいいのでしたら、それで構いませんが……
……あ、もう一つ、片づけておかなければならないことがあるのですが、よろしいですか？」

「うん、いいよ」

了承を得たノエルは、医務室の入り口に向かう。唯利亜が首を傾げる中、ノエルは入り口の扉の前で止まり、

「ノクターン？出てきたらどうです？」

「へ？ノック？」

ノエルの言葉に反応したのは、唯利亜。それも当然、唯利亜はこの医務室に二人以外にいるとは思っていなかったのだから。

驚く唯利亜の前で、ノエルは虚空を掴むような動作をして、その体勢のまま唯利亜の目の前まで飛んできた。ノエルが唯利亜の目の前で止まると、その手の先から何かが見え始めてきた。

「……………やはり、お前には隠しきれんか……………」

それは、ノエルの言う通りノクターンだった。大きな一つ目の描かれたアイマスクをして、三叉の矛を持ち、背中には蝙蝠の翼を持つ、悪魔のような姿をしたファントムである。

「ノック、なんでここにいるの?」

「そうですね、なぜここに?」

二人に問われるも、ノクターンは答えない。

「なぜ、ここにいるんですの? 教えてくださいませ?」

「……………知らない」

「殺しますわよ」

アイマスクのせいで表情はわからないが、唯利亜はノクターンがノエルを畏れているように思えた。実際、笑顔で物騒な一言を口走ったノエルに対し、ノクターンは先ほどとは違う沈黙を保っている。黙っているのではなく、ノエルのせいで喋れないように、唯利亜には思えた。

しかし、ノクターンもすぐに持ち直し、結局は答えることになった。

「……………、簡単なことだ。魔女に言われた。偽識者、お前を監視しろ、とな」

「ああ……………、なるほどね」

唯利亜は納得の声を漏らす。

魔女というのは、九能のこと。彼女が唯利亜の状態を鑑みて監視を付けることは、容易に予想できることだ。とはいえ、それにフアントムであるノクターンを使うなど、唯利亜どころかノエルにも予想外だった。

しかし、それならば好都合ではある。ノエルは再びノクターンに對して言葉を向けた。

「では、私たちは行きますから、黙っていてくださいますか？」

「……………なぜ、疑問形にする？」

訊かれたノクターンはそれには答えず、逆に問い返した。

「ふふっ、よろしい。では行きましょう、唯利亜さん」

その問いにも満足そうに笑うノエルは、唯利亜を促して医務室を出ていく。その時、唯利亜が医務室を辞する際、ノクターンに声をかけた。

「その……………まあ、がんばって」

「……………いい、かまうな」

哀愁漂うノクターンを置いて、唯利亜はノエルの後を追った。

“姉”とともに。

第1章 誘惑の狂姫 #22

「 、あれ……? 」

ぞぼっ

というおぞましい音ともに、未来小^{あすか}の腹部が、背から貫かれた。未来小の腹から生えているのは、背後にいる昆虫に似たDMFBの爪。元々は銀色の光沢を放っていたその爪は、未来小の血に塗れ^{まみ}、血の滴をポタポタと落としていた。

「 かつ……は 」

口からも血の塊を吐く未来小を、そのDMFBは爪を刺したまま上方に掲げる。まるで、自らの仕留めた獲物を仲間たちに誇示するかのよう。

「 未来小あ!! 」

久宮は未来小の名を叫び、彼女のもとへと向かおうとする。が、それを、他のDMFBが遮った。

「 ふざっけんな!! 雑魚どもがあ!! 」

前に立ちふさがるDMFBを燃える拳で殴り殺し、炎で焼き殺しながら、久宮は進む。しかし、次から次へとDMFBは増えていき、一向に前には進めない。

「……ひ、さ……、み」

「待つてる！すぐ行く！」

未来小の口が動くのが見えて、久宮は未来小に向かって叫ぶ。

未来小は腹部を貫かれている。内臓はほぼすべて損傷してなくなっていると見ていいだろう。魔術師でなければ、即死ものだ。しかし、そうであつても未来小自身の防御能力は、高い身体能力とは裏腹にかなり低い。ああしてまだ生きていることが不思議なぐらいだった。

それ故に、久宮は急ぐ。まだ生きているのなら、治療次第でなんとかなる。まだ死んでいないだけだ、などという戯言は却下する。

未来小が生きているのなら、最期まで足掻く。足掻いてみせる。

「うらああああああああああああああああ！！邪魔だつつつてんだよお、くそつたれがあ！！！」

絶叫し、地面を拳で打つ。その途端、久宮を中心に、炎の波が周囲に広がり、十数体のDMFBを焼き尽くした。

「つつしゃあ！次は、どいつだあ！！！」

氷で覆われた左手で、亀のようなDMFBの頭を握りつぶして殺し、燃え盛る右手を振るってムカデに似たDMFBを殴り殺す。

鬼神の如き勢いでDMFBを減らしていくが、未来小は既に戦えない。DMFBもそれをわかっているのか、今まで二つに分割されていたDMFBの戦力が久宮一人に集中している。そのせいで、久宮が攻撃に傾倒していることも伴って、久宮はほぼ常にDMFBの攻撃に晒されている状態だった。もちろん、最低限の防御や回避は

しているが、それで一度に数十の数でくるDMFBの攻撃をさばき切れるはずがなかった。

未来小も、薄れゆく意識の中でそんな久宮の姿を見ていた。自分が不甲斐ないばかりに、などと殊勝なこととは思わない。いつもは見られない必死な久宮の姿を見て、「なんであんなに必死なんだろう」と失笑を漏らすばかりである。

私のため？

だとしたら、なぜ？

もし仮に助け出せたとしても、こんなにDMFBがいては治療どころではないはず。そもそも、自分はもう助からない。確実に死ぬ。そんなことは久宮にもわかっていているはずだ。

だというのに、なぜ。

「久……み、や……」

聞こえるはずがないということを理解しつつ、未来小は彼の名を呼ぶ。

「……来ない、で……いい、から」

言われている久宮は、未来小の声を聞くこともなく戦い続けている。限りなく無駄な戦いを続けている。敵を倒すにも、過剰な力を使っている。5の力で倒せる敵に対して10の力で圧倒しようとしている。確実に倒せはするものの、消耗は必要以上に激しい。このままでは久宮も戦うことができなくなってしまう。

だから

「おい………、何してやがる……」

久宮は何かを感じ取ったのか、その意識を未来小に向けた。向けられた未来小は、ただ微笑んでいるだけだ。それを見た久宮は、苛立ちを露わにして怒鳴った。

「おい！何してんだ、てめえ！！」

しかし、未来小は“それ”を続ける。

未来小の源血の特性は“待つこと”。未来小はそれを解放しようとしているのである。

つまり、未来小は源破顕現を狙っている。

未来小の、顕現した源血の特性を最大限利用した魔術は、“待つこと”を極限まで派生させた効力を持つ魔術である。つまり、「すべてを受容し、そのすべてに対して反応する」という効果を持った魔術を使う。究極的には、死さえも受容し、それに対する反応を周囲に撒き散らかすという特攻戦術も甚だしい自滅して道連れを誘う魔術にもなる。

「ふざけんな！そんなでけえ魔術使うような余裕があんなら、生きて帰れるだろうが、おい！自分で死ぬなんて許さねえぞ！！」

怒りで渦巻く炎が、久宮に迫ろうとしていたDMFBを焼き殺した。しかし、久宮にとってそんなことは重要ではなく、ただ、今は未来小の愚かな自殺を止めなければならない。久宮にはもう未来小しか見えていない。もちろん、怒りのせいだ。

「ふざっけんなよ……………負けたら許さねえつつたのはどこのどいつだ、ああ！？」

(はは…………そんな大声出さなくても聞こえるってば)

と、突然、久宮の頭に未来小の声が響いた。深夜が張った紅線のおかげで、まだまともな意思疎通はできる。そのことに気付いた久宮は、さらに未来小に説得を積みかけようとする。
が、

(そんな必死になんなくてもさ、いいじゃん……別に)

諦めきつた未来小の言葉に、久宮は黙り込んでしまった。平静に戻った、と言い換えてもいい。

(……冷静になりな？まだなーんにも終わってないよ……？)

「うるせえ……仲間殺されて冷静になれる奴がどこにいんだよ……」

未来小は瀕死だというのに、諦めるなど説得しようとしていた久宮を、逆に諭している。

久宮にも、未来小の考えていることはわかっていた。顕現した状態の九能がいるなら、未来小の行動は決して間違っているわけではない。むしろ、無為に命を散らせるよりは、一体でも多くのDMFBを道連れにして死んでいったほうが、まだ貢献できる。加えて言えば、この状況で死自体にはなんの意味もない。

しかし、いくら戦いに身を置いた期間が長いとはいえ、彼も人の子、長く付き合った仲間の死というものはそう簡単に受け入れられるものではない。それが現状での最良の選択だとしても、いや、そうだとするなら、尚更。

(大丈夫だってば。……すぐに元通りになるしき。必死になるだけ、無駄だと思うよ)

「……必死になることになんの無駄があるってんだよ」

だが、受け入れざるを得ないということは久宮にもわかっている。未来小の言葉を否定する口調にも力はなく、既に未来小の死を止めようという気概は見えなくなっていた。

二人のやり取りの間にも、未来小は魔術の準備を進めている。魔術の発動には、大雑把に言えば、詠唱、魔術に使用する魔力量の計算、計算によって算出した量の魔力の排出、魔力の魔術への変換、という過程を踏む。疵術師である未来小に詠唱は必要ないが、未来小は久宮との会話の間に、魔力の魔術への変換という段階まで進めていた。

久宮にもそれが感知できた。魔術発動の最終段階まで来たら、もう止めることはできない。久宮は諦めて、せめて未来小の魔術に巻き込まれないよう、範囲外に逃げる。

（ありがとね、久宮）

「……………」

様々な意味に取れる感謝の言葉に、しかし久宮は黙して何も返さない。

未来小もそれ以上は何も言おうとはしなかった。

この部隊が結成されてまだ2年も経っていないが、その当初から未来小は久宮と組んできた。その能力の特殊性ゆえに、かつての部隊では半ば問題児扱いされていた未来小だが、この部隊に来てから九能に、銃を使って戦う、という魔術師にあるまじき戦法を勧められてから世界が変わった。部隊の中での戦果は確かに低い、A D E O I A 全体で見れば上位に入っている。

そうなるまでに久宮が貢献しているのは明白である。むしろ、九

能に勧められた銃戦法よりも、久宮から受けた影響のほうが大きいかもしれない。

“待つこと”という源血の特性は、未来小の性格にも大きく影響しており、未来小の本来の性格は積極性など絶無で、他人から言われ、されたことに反応して始めて行動できる、そうでなければ行動できない、消極的なものである。当然、そんな状態で普通の生活などできるはずもなく、この部隊に入って一般社会で生活をするにあたって、性格の矯正を余儀なくされた。“放つこと”という源血の特性を持つている久宮は、過剰なまでに積極的であり、未来小の性格のモデルにはちょうど良かった。逆に、久宮の性格を抑え込むにも、未来小の消極性は都合がよかったのである。

今でこそ、似た者同士の二人と言われるが、部隊結成当初は、それこそ凸凹コンビ（ぶつこ）と言って差し支えない二人だった。異常ともいえる積極的な接し方で迫る久宮と、それに淡泊すぎる反応しか示さない未来小は、傍から見てもシユールなものだったという。今の彼らは、その二人の性格が中和された状態だと言っていいだろう。

どちらが欠けても、どちらも存在し得なかった二人。

二人でいなければ、今の二人は到底在り得なかった。

まるで、光と影のように、未来小の深すぎる影を久宮の光が照らし、久宮の眩しすぎる光を未来小の影が和らげた。

月並みな表現になるかもしれない。しかし、彼らは真正正銘、二人で一つだった。

（　　）　　ってわけで、しばしのお別れだね）

その内の一人が今、欠けようとしている。仲間の死はそう簡単に受け入れられるものではない。しかし、ただの仲間ではない未来小の死は、“受け入れたくなかった”。

（……………そうだ。最期にさ、言っておきたいことがあるんだけど、

いい?)

「.....」

未来小から一条の光が発せられた。魔術発動の瞬間である。そして同時に 未来小の死の合図でもある。

(どうせ憶えてられないんだし、いいよね……)

未来小の魔術に今更ながらに気付いた周囲のDMFBは、逃げることにすら忘れて慌てふためき、ただ自らの死の瞬間を待っていた。

(私さ、この部隊に入った時、あんたのことすんごい適当にあしらってたよね)

久宮は狂乱状態に陥ったDMFBには手を出さず、近くに来たものを殴り飛ばすだけ。だが、何もしていないように見えて、未来小の言葉だけに集中していた。

(ま、正直、鬱陶しかったからなんだけどさ。でも)

未来小から発せられる光が徐々に多く、大きくなっていく。しかし、それは拡散することなく、円錐状に地面に向かって注がれていた。

(でも、嬉しかったよ、あれは。あんなにしつこく私に構ってくれ
る人、ほとんどいなかったから)

久宮は未来小に背を向けた。なぜかは、未来小にはわからない。泣いているのかもしれない。そうだとしたら面白いな、と場違いな

ことを思つて未来小は心の中でだけ笑つた。

と、そんなことを思っていると、久宮は歩き出した。当選、未来小から離れていく方角に。この一帯のDMFBは未来小が倒してしまふ、そう判断しての移動なのだろう。久宮はあくまで作戦を優先した。

しかしそれでも、いや、だからこそ、かもしれない。未来小は最期に、本当に言いたかつたことを、決して届かない言葉で、伝える。

(だから………だからさ、私)

ホンシアン
紅線ではなく、自らの口で、声で。

「……す、いだ、よ……いさみ、や」

背後で大きな魔力の動きによって起きた波動を感じ取り、しかし、久宮は振り向くこともなく、正面を見据える。

視線の先には、再び目にするDMFBの群れ。未来小によって多くの同胞が葬られたことに対して爪牙を剥いて怒りを示す彼らは、その怒りを向ける相手を久宮に定めたようである。向けるべき相手が既にいないのだから当然ではある。

「ハツ……、嫌になるねえ、まったく」

それを見て、久宮は苦笑とともに短い溜息を漏らす。DMFBは様子をうかがっているのか、すぐに襲いかかつてはこない。

「まあ………もうどうでもいいけどよ。とりあえず本気でためえらぶっ潰してやるよ」

そう言って久宮は身体に炎を纏う。同時に、殺気を露わにしてDMFBに向けた。その野性的な殺気に、DMFBが気付かないはずもない。すぐに久宮は彼らに囲まれ、DMFBは四面楚歌に陥った久宮に襲いかかった。

「……うぜえ、うぜえ、うぜえ！うぜえ！！いいかげんうぜえんだよ、ためえらはよお！ー！」

大原深夜おほはらいは、江倉宮高台から200mほど離れた、田んぼと畑に囲まれた場所、そこにそびえる樹齡何百年かという巨木の枝の一つに腰かけていた。人並みの運動神経しかない深夜は、上る時にはもちろん簡単な魔術を使っている。

戦いが始まっておよそ2時間。つい30分前に奈都海が沙夢濡と接触したのを最後に、戦場に大きな動きは見られない。DMFBは前線に出ている者のおかげで少しずつ減っているが、相手がこの大群では対極にさして影響を与えはしない。

（そろそろ何かしらの動きがありそうですが……………皆さん、なかなか頑張るんですね）

深夜は今、戦場の魔力を読み取ることによって戦況の把握を行っているわけだが、その戦場が広範囲に渡っているために、狭い範囲を深く読むことはできない。人の表情や会話の内容、細かい動作などは深夜には基本的に伝わってこない。

それ故に、深夜にとつての大きな動きの一つが、隊員の死である。死ねば、純性魔力が放出され、拡散するため、その周囲の魔力の構成は大きく変わる。そうなることによつて、深夜は遠方から生物の死を感じできる。

それに、2時間といえば、一般的な魔術師が戦闘に支障がない程度に魔力の消費を抑えながら戦つた際の限界時間とも言われている時間である。一種の永久機関とも言える九能は別として、九能や奈都海のために陽動を行っている久宮や未来小、未永栖、尊何、魅戈は、そろそろ限界だろう。

戦況の把握は、彼女の主要な役目の一つ。もし誰かが戦死、あるいはそれに近い状態に陥つた場合、一人が対応しなければならぬDMFBの数は大幅に増える。できればそれは避けたいが、おそらく無理だろう、と深夜は思っている。

(それに准将もその程度は覚悟の上でしょう。顕現したところで、みなさんの戦闘そのものをフォローできるわけでもありませんし)

同時に、皆も九能のフォローを期待しているわけではない。戦い自体は自分の力でやるしかないということは、戦う者の当たり前常識として知っている。

が、九能は“それ”ができなくなつてからなら、手が出せる。そのため、深夜はそれができなくなつた隊員が出た場合、そのことを九能に伝える必要がある。

と、

深夜がピクリ、と反応した。

視線は江倉宮高台に向けられている。表情は険しい。

そして、数十秒後、

「……ッ」

小山の中腹、九能の戦っている方角を0時とすると大体8時の方角で、何かが発光した。しかし、それは周囲に拡がらず、その場で収束して、やがて消えた。

深夜には、何が起こったかはすぐにはわからない。距離があるため、読み取るのに少々時間がかかるのだ。

しかし、これは、その謎の発光だけで終わりではなかった。

ゴオッ！！

と、深夜の視線の先で、赤々とした何本もの火柱が天を貫くかのごとく勢いで昇っていった。夜の暗闇を昼に塗り替えてしまうほどの圧倒的な光量が周囲を照らし、遅れて熱風が深夜の顔面を叩いた。その熱に、深夜は思わず目を瞑るが、それでも異変のあった範囲の魔力の読み取りは続けている。

先ほどの火柱が久宮のものであるということ、深夜は知っている。久宮の攻撃手段の中でも最大規模を誇り、魔術の階級に当てはめると、小規模な高級魔術に匹敵する。初級魔術、低級魔術、中級魔術、上級魔術、高級魔術、最終魔術とあり、高級魔術以上の魔術は戦略兵器にも劣らない威力を持つものも多いということからも、久宮の“あれ”がどれだけの規模かがうかがえるというものである。しかし、逆に言えば、それだけの魔術を使わなければならない状況に陥ってしまった、ということでもある。少々離れてはいるが、比較的近い場所で二つの現象は起きている。おそらく久宮と未来小が窮地に陥ってしまったがゆえに、最終手段として自分にできる最大の魔術を使ったのだろう、ということとは予想できる。

火柱が上がって10秒、深夜は読み取りを終えた。次いで、その結果を九能に伝える。

「准将、聞こえますか？」

「……………」

返答はない。が、戦闘に集中しているのだろう、と見切りをつけて報告を続行した。

「浄美未来小中尉、及び浅木久宮中尉が戦死いたしました。担当区域のDMFBは、40%は減らされていますが、残りの60%は他の区域に向かう可能性があります。負担は増加しますが、各自対処してください」

後半は九能以外の部隊員にも紅線を繋げている。無茶ぶりだということとは重々承知だが、それでも、無理にでも対処してもらわなければならない。そういう作戦なのだから。

しかし

「とはいえ……………、これは少々無理がすぎると思いますが、ね……………」

それに対処しなければならぬのは、彼女も同じである。

「なぜ、こんなところにまで出張してくる必要があるのか……………まったくもって不思議でなりません」

深夜は巨木の枝に腰かけているのだが、その樹の周囲には、いつのまにか10体ほどのDMFBが集まっていた。戦場はここから200mも離れているのだ。わざわざこんなところにまでやってくることは、深夜には予想できなかった。というか、だからこそ、ここを選んだのだから。

「私に戦う力がない、ということを知っての所業ですか、これは。だとしたら、かなり悪質ですよ」

誰に言うともなく、虚しい愚痴をこぼすが、深夜にはこれを突破する手段はない。もう半ば諦めていた。

深夜の本領は、支援にこそ発揮される。しかも、遠距離からの支援攻撃ではなく、偵察、索敵など本質が非戦闘に置かれた場合にのみ、その力は役立つのである。間違っても戦闘に使えるものではない。

「もうわかりました、抵抗はしません。殺すならさっさと殺してください。もちろん、なるべく苦痛のないようにお願いしたいところですが」

深夜はそう言って、枝から降りる。そして、最後になるであろう紅線の接続を、九能に向けた。

「准将、これから私も死ぬことになりそうです。すみませんが、“あれ”の時にはよろしくお願いします」

通信を切った、ちょうどその時、深夜はその頭をDMFBの顎に碎かれた。

「ごめんね、深夜ちゃん。ボクが行くには一番邪魔になりそうだったからさ。まあ、真っ先に脳を潰してあげたんだから、要望は満たしてるよね？」

「クスクス……酷い人。殺したことに変わりはありませんのに」

「いいじゃない、別に。どうせ生き返るんでしょ？」

「さあ？どうでしょう？」

「嘘だったら、ボク、ここで死ななきゃいけないんだけど……」

「冗談ですわ。ほら、行かないんですの？」

「……ほんと、ノエルって意地悪だよねー。ま、いいや。それじゃ行こっか」

「ええ、ようやくですわね」

「うん。……？ん、これって」

「……？なにか？」

「いや、これさ……」

「あら、これは……」

「咲ちゃん、かな？」

「そうですね。この街すら呑み込むほど広いですし」

「そっかあ………咲ちゃんも、ここに来る前に殺つとくべき
だったかな……」

「あらあら………酷い人……」

第1章 誘惑の狂姫 #22 (後書き)

自分でも超展開だったことは自覚しているのですよ……

まだ第1章なのでご勘弁を………

第1章 誘惑の狂姫 #23 (前書き)

冒頭より、過激な性描写がごぞいませす。その類が苦手な方はご注意ください

第1章 誘惑の狂姫 #23

俺は始め、自分が何をしているのかわからなかった。

目の前には、半裸で恍惚とした表情を浮かべた会長の姿がある。

………はて？俺は一体何をしているんだろうな？

………

いや、正直に言おう。俺が何をしているのか、など、既にわかっている。俺とてバカではない。

表現が悪かったな。正確に言うなら、なぜこんなことをしているのかわからなかった、ということだ。

こんなこと、なんて曖昧な表現もよくはないかもしれない。しかし、こればかりは口にしたくない。これを自覚してしまったら、俺がそれに耐えられるかどうかわからない。

なぜ、会長が俺にこんなことをしたのかはわからない。どんな手段を使ったのかわからないが俺の動きを封じ、いつでも殺せる状況にありながら、それをしない。ファントムに精神を侵されているなら、何の躊躇いもなく殺してもおかしくはないのである。そうでもない、この行動に理由を見つけることは俺にはできるはずもない。単なる欲望に従ってのことだろうか？可能性はあるが、会長が俺

にそれに類する感情を抱くことはありえないはず。

なら、何かがある？ファントムの言う目的に何かしら関連があるのか。そうだとして、俺を犯して何になる？俺に対する精神攻撃だとしたら確かに有効だが、そんなに俺が邪魔ならさっさと殺せばいい。死にたいわけではないが、こんなことをされるぐらいなら死んだほうがまだマシだと言いたい。

「っはあ……………ナツ……………う、ん……………」

仰向けで寝ている俺に跨っていた会長が、唐突にしなだれかかってきた。具体的にどこに跨っていたのかは言わないようにしておく。着ていたドレスは会長が自ら引き裂いていたため、上半身は完全に裸。俺は一応まだ服を着ているが、それでもその上から感じ取れる感触には、殺人的なほどの柔らかさがあった。九能よりも肉感的で、動きを封じられているにも関わらず、今は会長の性器に啜えられた俺の“それ”が硬さを増したのがわかった。死んでしまえ。

「ひあっ……………ナツの、が……………おつきく、なってる……………！」

会長がわずかに身動きみじぶしただけで、身体を中心に狂いたくなるような快感が流れた。腰を上下させる会長は、同時に俺の首に幾度も口づけし、その快感を増幅させる。

「ナツ……………んっ、はんう……………ナツの……………欲しい、の！あ、あっ、はやく……………っ」

会長は腰の動きを速めていく。嫌な兆候だ。これ以上進んだらもう戻れなくなる。

だが、俺は動きを封じられ、逃れることはできない。しかも、今の俺は、どう言い訳してもしきれないほどに、この快感を受け入れてしまっている。

男というものは得てして女より弱いものである、ということはある程度わかっていたが、その弱さをここまで憎く思ったのは初めてだ。

動きを封じられてしまっているのは仕方がないことと言えるだろう。俺の力が至らなかつたせいであり、それによって部隊にどれだけ迷惑をかけることになるかは計り知れないが、これは彼我の力量の違いによるものであり、そうそう覆せるものでもない。

だが、今行われているこの行為を受け入れるということは、俺にとって破滅を意味する。あるいは、裏切りか、崩壊か、墮落か。俺にとつて様々な意味を持っているが、どれもろくなものではない。

口は動かせるのである。言おうと思えば、「やめる」の一言くらいは言える。が、今の俺はその類の言葉を一切発していない。これこそ、この人の行為を肯定していることに他ならない。………絶対に否定しなければならぬのに。

死にたい。

もし生きて帰れたとして、こんな行為をした俺が、どういう顔をあいつに向ければいいのか。

あいつにこのことを知らせない、という選択肢は存在しない。くだらないかもしれないが、それは俺の守るべき矜持だ。

なら、これを知らせた時、あいつはどんな顔をするだろう？

悲しむのだろうか？

怒り狂うのだろうか？

失望するのだろうか？

それとも、何事もなかつたかのように笑顔で受け流してくれるのだろうか？

どれもあつてたまるか。

あいつが悲しむのは、俺が死んだときだけで十分だ。
あいつが怒るのは、俺があいつの気持ちに気付けなかったときだけで十分だ。

あいつが失望するのは、俺があいつの期待に応えられなかったときだけで十分だ。

あいつが無理して浮かべた笑顔など、見たくもない。

だが、現実には、無情である。

「ッ………あつ、んっあああああつ！！」

絶頂に達した。

会長は口を開けたまま背を反らせて一瞬固まり、直後にまた俺の上に倒れかかってきた。

「はあ、はあ……、んっうう……」

俺の胸元の上で頬を紅潮させ、荒げた息を整えようとする会長は、そのまま動かなくなってしまった。肩は呼吸の度に動いているが、それ以外の動作はなく、俺の上から退こうともしなかった。

俺のモノは力を失い、既に会長との連結は断たれている。が、俺もそうだが、会長は疲労から動けないのかもしれない。俺にできる全力の魔術を2回も使った後にこれは、体力を根こそぎ奪われるに等しい。というか、奪われた。イッた後の脱力感も手伝って、まっ

たく動ける気がしなかった。

が、

「　　ッ!？」

突然、肩口に鈍い痛みが走った。気付けば、会長は上体を起こし、俺の肩に手を突いていた。

否、会長の手は、俺の肩ではなく、肩に刺さったナイフの柄を握っていた。

「ふふ……………ごめんね。ナツ……………」

妖艶に笑う会長。そのまま手首を捻り、ナイフで肩の傷を抉る。

「いっ……………ぐっ……………」

痛みで声も出ず、腰に会長が跨っているためにまともに身体も動かせない俺は、ただ呻くことしかできなかった。

「本当は今すぐにでも殺しておきたいところだけど……………理由も知らずに死ぬなんてかわいそうじゃない?だから、殺す前に教えておこうと思って、ね」

「くっ……………ふっ、なら……………殺さないで、ほしっ……………いんです、がね」

痛みを堪えようとして堪え切れず、それでも俺は無駄な軽口を叩いてみる。しかし、案の定会長はますます楽しげな表情を浮かべ、

あろうことかナイフを根元まで沈めてきた。

「がっ……ッ」

「ダメよ。このまま放っておいて回復したら邪魔するでしょう？それだけは嫌だもの」

痛みのせいで冷や汗が止まらない。痛みを我慢する中で、腕が動かせることに気付いたが、それでどうにかできるわけでもない。疲労と苦痛の相乗効果で身体がもはや自分の思い通りに動かせる状態ではなかった。

「ほら、言うでしょう？カマキリやクモって、交尾の後、雌が雄を食べてしまうって。あれって、雌が産卵の時の体力を補うためらしいんだけど、それと似たようなものね」

俺の耳には、もう会長の声はほとんど入ってきていなかった。この状況をどう脱するか、それだけに頭が支配されていた。感覚のほうは肩から走る痛みだけを受容し、視覚も聴覚もほとんど働いていない。

「ナツからはたくさん精をもらっただし、正直、もう必要ないのよね。だから、あなたを殺して、あなたの純性魔力を食べる。女王になるとそんな芸当もできるのよ？」

だから、会長がもう一つのナイフを取り出すのが見えたのは、奇跡かもしれない。

「ナツを殺す理由はそんなところね。どう？わかった？……
……ま、わからなくても殺すけれど」

言い終わるや否や、会長はナイフを握った腕を上には振りかぶる。それを見た俺は、

「ッ」

反射的に、手の平の中に魔力の塊を作っていた。魔術師なら誰でもできる魔術。質量が限りなくゼロに近い状態で固形化した魔力を放つ魔術。俺は、それを行おうとしていた。

こうすれば、俺は死なずに済む。生きて帰れる。

しかし

会長はどうなる？

ファントムに精神を作りかえられたとはいえ、肉体そのものは人間のままだ。

この魔力の塊を当てたら、当然身体は吹っ飛ぶ。頭なら頭蓋骨は粉々になって脳漿があたりに散乱することになるだろう。肩に当てたら胸ごと抉り取って殺してしまう。腹なら上半身と下半身がサヨナラすることになる。それほど人間というものは脆い。

いいのか？

当たり前だ。俺が死ぬんだぞ？自分の命がかかっている状況でなりふり構ってられるか。生き残る可能性があるなら、それによって親しい人間が犠牲になるのだとしても、俺はその手段を使う。大いに使わせてもらう。自己犠牲などあってたまるか。俺は他人のために自分を殺せるほど人間ができてはいない。というか、この極限状態でそんな発想が出てくること自体、おかしい。目の前のこの人を殺すことで俺が助かるなら、喜んで殺そうじゃない

か。

このまま放てば、この人の右半身はほとんど吹き飛ぶだろう。フアントムならわからんが、人間なら確実に即死だ。そして、俺は助かる。

「もう一度言うけれど、ごめんね、ナツ。そして

」

なんということはない。もう人間を軽く殺せるくらいの魔力の塊はできている。あとはこれを放つだけで、この人は死に、俺は助かる。簡単なことだ。簡単すぎて笑いすら込み上げてくる。

しかも、だ。この人は、俺を犯したのだ。九能という相手のいる俺を。それは俺の侵してはいけない領域を侵してしまっていることに他ならない。もう、それだけでこの人は万死に値する、と言ってもいい。

さて、理由は固まった。もう殺していいだろう。早くしないと、殺す前に殺される。気付いていない今のうちにやっておかないと、本当に面倒くさいことになる。

というわけで、

「 さようなら、ナツ 」

ああ、さようなら、会長。

「 なにしてんのや、兄ちゃん? 」

後朱雀沙夢濡は吹っ飛んだ。まるで、強風に乗る落ち葉のように、軽々と吹き飛ばされた。

「あー……飛んだねえ、結構。……まさか死んでないよね？」

彼女を吹き飛ばした張本人は、なんでもないことのように笑ってそんなことを言う。

しかし、それに対する興味はそれだけで失ってしまったのか、あるいはさらに重要なことがあるのか、“彼”は、視線をすぐに、足元に寝転がる自らの兄に向けた。

「で、そんなことよりも、さ。兄さん？」

彼 幣原唯利亜は、しゃがみ込んで、兄である奈都海の顔を真上から覗き込む。その顔もまた、笑っていた。

「さっき、何しようとしたの？」

無邪気に、子どもが親に訊ねるようにして、唯利亜は小首を傾げて問う。しかし、奈都海は答えない。いや、答えられない、と言いつ換えるべきかもしれない。

「ジャン又さんのこと……殺そうとしたよね？」

だが、奈都海が答えるまでもなく唯利亜は言いあてた。

奈都海は応えるかわりに目をわずかに見開いた。そして、それを見た唯利亜は、

「なんでそんなことするのかなあ？」

笑みを消した。

「ねえ、ボクさ、兄さんに言ったよね？ジャン又さんを傷つけたらどうなるかわかってるよね？って。ボクは、兄さんがそれでわかったと思っただけだよ、ほんとにはわかってなかったのかな？」

唯利亜は、奈都海の前髪を無造作につかんで頭を持ち上げ、さらに顔を近づけて、言う。

「助ける過程で少し怪我しちゃうくらいなら、しょうがないと思うんだ。それくらいなら、ボクだって許すよ？結果的に助かるっていうなら、ボクも歓迎だもの。でもさ」

「

奈都海は、唯利亜の予想外の登場と行動に驚きを隠せず、ただただ目を瞬かせることしかできない。

「あれは絶対に死ぬよね？あんなものぶついたら、死ぬってわかるよね？死ぬって言う言葉の意味もわかるよね？死んだらもう会えなくなるんだよ？おしゃべりもできないし、今までみたいにデートもできなくなるんだよ？」

わかんないなんて言わせないよ？ボクの源血の特性を忘れたわけじゃないだろうし、兄さんが助かるためにジャン又さんを殺そうとしたことくらい、わかるんだからね？」

奈都海は、驚きとともに、怖れも感じていた。弟であるはずの唯利亜に対する恐怖。なにか、逆らえない絶対的な存在、そもそも次元の違う手の届かない存在に対する畏怖、あるいはそれらを知らないということに対する純粋な恐怖。それらが入り混じり、奈都海を精神を浸食した。

「ゆり、あ……」

「なにさ？何か言い訳でもあるの？」

こうして唯利亜の名前を呼ぶだけでも、大きな心労が奈都海に押し掛かる。言い訳などできるはずもなく、何かを考えることすらできる状態ではなかった。

「はあ……もういいよ」

一言も発さなくなった奈都海から離れながら、唯利亜は言った。

「そんなのじゃもう兄さんは動けないだろうし、喋れそう喋れな

「いみただし」

唯利亜は、先ほど沙夢濡が飛んで行った方向に身体を向けて、顔だけをこちらに向ける。そして、奈都海の全身を眺め、腰の下あたりで視線を一度止めてから、

「“それ”も見苦しいし、さ。………一応、やっておくかな」

言つて、腕を一振りした。

その瞬間、

「 ツ ツ ツー!!」

奈都海の頭頂部から股間まで一直線に、左右の半身を真っ二つにするように大きな裂傷が刻まれた。

肩をナイフで抉られた時とは比較にならない、それこそ死ぬのではないかというほどの痛みが奈都海を襲った。死んでいないのが不思議なくらいだった。

「これで当分回復も見込めないかな」

瀕死の重傷を負い、手足だけを痙攣させている奈都海を、唯利亜は見下ろす。それこそ、何の感情も含んでいない、死んだような眼で。

「あ、恨まないでね、兄さん。ジャンヌさんを殺そうとしたんだから、これで済んだだけ有難く思いなよ」

唯利亜はそれだけを言つて、ものも言わなくなった奈都海から離

れていく。

向かっているのは、沙夢濡が吹っ飛んだ場所。吹き飛ばしたのは唯利亜だが、当然殺すつもりもなければ、傷つけるつもりもない。むしろ、奈都海の魔術から助けるための措置である。沙夢濡が無事でなければ、唯利亜も困る。

「ジャン又さん？大丈夫？」

「……………痛いわね、唯利亜ちゃん。……………なんのつもりかしら？」

「ごめんごめん、ちょっと乱暴だったかな？」

立ち上がる沙夢濡を見て、唯利亜は立ち止まる。

いくら助けたいとは言っても、相手は敵である。こちらが助けたくても相手がこちらを敵視しているなら、それは敵になる。唯利亜もその程度は弁えている。無暗に近づいたりはしなかった。

「それにしても、生きていたのね、唯利亜ちゃん……………」

「おかげさまでね。咲ちゃんがいなかったらどうなるかわかんなかったけど、今はこの通り、元気そのものだよ」

「そう……………嬉しいわ、私も」

世間話をするように二人は会話を続ける。しかし、ここは戦場で二人は敵同士。内容まで世間話に似ているとしても、そこに戦いが含まれないことなどない。

「……………でも、感心はしないわ」

「……? どうして?」

「こんなところにあなたが来るなんて、ダメでしょう?」

残忍とも言える表情で問う沙夢濡に、しかし唯利亜は心底不思議そうにその首を傾げた。

「なんで? ジャン又さんを助けなきゃいけないのに、兄さんは役立たずだし、他に頼れる人もいないしさ。それじゃ、ボクが直接行くしかないじゃない?」

「……………」

ここに至ってようやく沙夢濡は気付いた。自分は確かにフロントムに壊されて性格が破綻しているが、唯利亜はそれ以上だ、と。壊されてもおらず、狂ってもいないが、唯利亜はただ純粹だった。破綻や狂気とは真逆で、正気を挟んで対極にある概念。つまり、無邪気や純粹に、唯利亜は当てはまる。言うなれば、唯利亜もある種狂っていた。

このことに気付いて、沙夢濡は説得を諦めた。同時に、唯利亜を殺さざるを得ない状況であることを理解した。

論理で言いくるめられる相手ではない。なら、それ以外の排除方法である殺害を選択すればいいだけのこと。沙夢濡は、そう結論付けた。

しかし、

「あ、そうだ、ジャン又さん」

「……………」

「その格好じゃ、恥ずかしいでしょ？服かなにか着ておかないと」

その沙夢濡の計画を簡単に覆す存在が現れる。

「ってわけで、お願い。……………ノエル」

「な……………!？」

突如、沙夢濡の背後に、頭上の輪と純白の翼を持つ天使が現れた。

「ふふ……………安心なさいな。服を作って差し上げるだけですわ」

“それ”はそう言って、沙夢濡の周囲を飛び回る。それだけでポロポロのドレスは消え、代わりに新しい、より華美なドレスが沙夢濡の身体を包んだ。

「……………これは……………」

「ふふ、プレゼントですわ。お返しはしていただけるなら、しても構いませんわよ？」

天使の姿をしたファントムであるノエルは、沙夢濡にそう言って唯利亞の下へ飛んで行った。

しかし、沙夢濡にとってドレスなどどうでもいい。重要なのはノエルという存在だ。沙夢濡はノエルを知らないが、同種に近いシャトーやノクターンについては知っている。彼らが同じ存在であるとするなら、ファントムというDMFBの中でも強大な力を持つ種であることに間違いはない。

唯利亞だけなら、DMFBを操って戦うことでどうにかなるはずだった。だが、そこにファントムが加わったらどうなるだろう？

……残念ながら、勝ち目など、ない。

「ノエル、ありがとう」

「あらあら、お礼なんてとんでもありませんわ。あの程度、お茶の子さいさいですもの」

「はは……さすがノエルだねえ」

「あら、褒めても何も出ませんわよ？」

一方、唯利亜は戦場には似つかわしくない会話をノエルと繰り広げていた。しかし、沙夢濡はそれだけで油断するようなことはない。そもそも、唯利亜が現れること自体予想外だった上に、そこにノエルまで加わったのである。油断する余地すらなかった。

ゆえに、ノエルとの会話を終えた後、すぐにその表情から笑みを消したことに、沙夢濡は気付いた。

「さてと、ジャンヌさん、さ……」

「な、なにかしら？」

こうして話しかけられることも予想はできたが、それでも動揺は抑えられなかった。奈都海に対する所業も併せて、今の唯利亜は無邪気ゆえにどんな残酷な行為も厭わない可能性があるからだ。

沙夢濡は密かに、DMFBにここに集まるように命じていたが、それがフロントムであるノエルにどこまで意味があるのかはわからない。

「ジャンヌさんもダメだよ、こんなことしちゃ」

「……なんのことがしら？」

「女王の真似事なんて許さないよ？ ジャン又さんはまだお姫様でいいんだしさ」

「真似事……ですって？ なにを言っているの？」

沙夢濡は怒りを露わにして唯利亜を睨む。自分が女王そのものであるというのに、それを真似事呼ばわりである。今までの警戒心を忘れて憤激しても当然であった。

しかし、それで唯利亜が揺らぐはずもない。言った一瞬後、沙夢濡はノエルの行動に警戒したが、彼女はただ唯利亜の傍らで滞空しているだけだった。

「あら、女王は世界に一人ではない、と言ったはずですよ？ いいじゃありませんの、女王同士の戦い、というのも」

「あー……そうかもね、女王は世界に一人じゃない。でもさ、二人も要らないんだよ、女王は」

「……あなたたちは、なにを……」

沙夢濡は平然と言う二人を思わず止めていた。まるで、ここに女王が二人いるとでもいうような口ぶりに、沙夢濡はそうせざるを得なかった。しかし唯利亜は、それに対しても当然というような顔で返した。

「だからさ、ボクはジャン又さんの間違いを訂正しに来たんだよ。ファントムのほうにも行きたかったけど、あっちに行ったら九能さ

んに消されそうだからやめておいたんだけど」

「間違い……？」

「さつきから言ってるじゃんか。ジャンヌさんは女王じゃないって。本当の女王はここにいるんだから」

だが、唯利亜の返答を聞いた途端、沙夢濡は笑っていた。

「ふ、ふふっ……なにを言っているのかしら？私が女王ではない？なら、唯利亜ちゃん、あなたが女王だとしても？」

そんなはずはない。沙夢濡のようにDMFBの女王に適した体質、つまり、子宮の汎用魔力融合能力を持つ者は、それこそ数十年に一度、世界に一人生まれるかどうかという確立でしか現れないのである。もしこれで、唯利亜が肯定の返答をしたなら、それこそ失笑と嘲笑しか湧いてこない。

しかし、

「そんなわけないじゃない。ボクが女王？そんなの、恐れ多くても名乗れないね」

その予想は大きく外れた。唯利亜は、沙夢濡の問いをあつさりとは否定しまったのである。

「あ、もちろん、ノエルも違うよ？ノエルはDMFBで、女王に従う立場なんだし」

「じゃあ」

一体、誰なのか。ここに女王になり得る者は二人しかいない。ノエルがDMFBの頂点であるという意味での女王ではないとするなら、それ以外に誰がいるのか。

「一体、誰がいるっていうの？私以外に、一体、誰が……！」

「……………知りたいの？誰が、本当の女王なのか、を」

「教えてもらなさい……………、できるものならね」

いるはずがない、と沙夢濡は確信していた。これは単なるハツタリ、唯利亜の仕掛けたブラフでしかない、と。もし他に女王がいるのなら、あのファントムが黙っているはずがない。消すなり、自分のように味方に引き込むなりするはずだ。

沙夢濡は、確信していた。

「ふーん……………じゃ、教えてあげるよ。誰が女王なのかを、ね……………」

しかし、人は、自身の確信が崩されると、これ以上ないほどに取り乱すものである。

「じゃ、よろしく。」

姉さん

それが、その確信を覆す要素が、自分の知っているものであったのなら、なおさら。

時間は少々遡る。

九能とファントムの、人では決してありえない戦いの最中、九能は再び動きを止めた。例の如く、ファントムも追従して戦いの手を止めた。

しかし、今回は嫌な予感がしたからではない。予感などというレベルではなく、それはもはや発現していた。

「クックク………ハッハーハッハッハッハッハッハッハッ！」

ファントムの高笑いも耳に入らないほどに、九能はただこの光景に見入っていた。

いや、正確に言うと、肉眼で見える景色そのものには何の変化も

ない。ただ、この空間が何かに包まれた。それがなんのかはわからないが、それでも脅威になり得る何かであることは明白だった。しかし、

「これは、なに？なんなの……………」

同時に、周囲を包む超常は、なぜか九能に安らぎを与えていた。脅威になることはわかっている。それでも、この戦場であつてなお、それは彼女に、何か上位の存在の庇護下にあるかのような安心感を与えていた。

だが、それは戦場の緊張感の中にあつては、ただ気味が悪いだけだ。敵を目の前にして矛盾する安心感を与えられても、それは危機感を和らげることにはならない。基本的に、人間の感じる安らぎというものは、大小の関係もなく負の感情に塗り潰される。常に与えられる安心感が、ファントムに相対することによつて消されていき、それが絶え間なく得体の知れない不快感を作り出していた。

「ハツハア！素晴らしい、素晴らしいな！ついに完成したか！」

九能とは裏腹に、ファントムは歓喜を露わにして叫んだ。既人間には在り得ないその口腔から漏れたのは、咆哮のように低く禍々しい声とも言えない声だった。

それを困惑の中にあつて何とか聞き取った九能は、ファントムの言葉にある「完成」という単語に引っかかりを覚えた。が、それを口にする前に、ファントムは答えるつもりもなく答えた。

「我々の女王……………！我々の悲願にして存在理由……………彼女が、女王として完成した！」

「女王が、完成した……………？どういう……………」

「ッ！？」

九能は気付いた。ファントムに女王と呼ばれている女性が、今、誰とともにいるのか、を。

「奈都海……！」

女王が完成した、という言葉の意味はわからないが、おそらくファントムの目的の半分以上は達成されたと見ていいだろう。ならば、奈都海は彼女を止められなかった、ということになる。苦戦しているのか、あるいは 考えたくもないが、既に殺されてしまっているのか。戦場ならば、あり得ない話ではない。

しかし、“そんなこと”で、ここを離れるわけにはいかない。ここを離れてファントムを放置するわけにはいかず、そもそも、そのファントムが逃がしてはくれないだろう。

「……………行かせてもらえる？」

「クツクク……………断る」

「でしょうね……………」

試しに訊いてみても、やはり、無駄。

ならば

「あなたを殺すしかないわね……………」

根源であるファントムを消してしまえば、何の問題もないだろう。しかし、ファントムはそれを聞いても、獰猛な牙を見せて嗤うだけだった。

「ほお……？貴様にできるのかね？仲間の力量すら把握できず、3つの生命を無為に散らせてしまった貴様に！」

「……ッ」

「買い被った結果がこれだ。生き残った者も、いずれ同胞に食い潰されるだろう。……クク、貴様だけ後を追えないのが残念だなあ？」

九能は悔しげに唇を噛む。

第一特殊遊隊は、既に3人の犠牲者を出している。久宮や未来小はもちろんだが、深夜まで失ってしまったのは大きな痛手である。戦場全体の把握はほとんど彼女に依存しており、隊員同士の意志疎通も同じく深夜に頼っている。できれば出てほしくないが、これからも高確率で犠牲者が出るだろうことを考えると、単純な戦力を失うのと同等の損害にもなる。

「既に、真の意味で戦えている者は貴様だけ……、もう諦めたらどうだね？」

ファントムの言うことはほとんど事実である。まともに戦えているのは、もう九能一人しかいなかった。

だが、

「……生憎だけど」

九能に諦める気など、毛頭ない。

「勝てる試合をみすみす逃すような趣味はないのよ」

「クハツ……、勝てるだと？この状況でよく言ったものだ。ついに狂ったか？」

ファントムは嘲笑うが、九能は笑みを崩さない。まるで勝利を確信しているかのように、その眼光はそのままファントムを睨み、足はしっかりと大地を踏みしめ、手は何があっても離すまいと斧を握っていた。

「狂った……そうね、その通りね……」

「なに……？」

ファントムは余裕をなくしていった。この絶対不利的状况で、笑っていたられる神経が理解できなかった。

九能の言う通り、狂っているなら理解はできるが、それではファントムは困る。

ファントムは自分の目的が達成できればそれでいい。その過程で邪魔が入れば排除するが、邪魔にさえならなければ放置する。目的を達成した後については、彼は頓着しない。

しかし、九能に関しては例外だった。彼にとって、九能の存在は必要不可欠であり、目的の達成にも、それ以外かつそれ以上の理由でも、彼女を失うわけにはいかなかった。

ファントムが危惧しているのは、九能の自滅。不死の肉体を持つ九能は、外的要因によって死ぬことはないが、もしかしたら、自ら命を絶つ手段を持っているかもしれない。それを使われてもある程度目的は達成されるが、それは完全ではない。それ以上に、ファントムは九能そのものを失うわけにはいかなかった。

それ故に、やけになって死んでもらっては困るのだ。今までの努力が水泡に帰してしまう結果だけは避けたかった。

「貴様……………、何を考えている……………？」

「……………あなたの言う通り、狂っていることよ。確かに……………、あなたにとっては、狂っているかもね。私から見ても、これが正常だとは思えないもの」

「“これ”……………だと？」

ファントムは、いよいよ九能の言動まで理解できなくなっていった。

それに対して、九能は不敵な笑みを浮かべてファントムと対峙する。

そして、ついに“それ”を明かす。

「これが、絶対的な回帰。世界の真理すら超えた、許されざる奇跡とくと見るがいいわ」

何かが、起きた。

はじめ、ファントムにはそれだけしかわからなかった。

しかし、この戦場のいたるところに配置してある諜報用のDMFBを通して目にした光景は、

「なん……………だと……………」

ファントムを大きく動揺させるに十分だった。

第1章 誘惑の狂姫 #24

「じゃ、よろしく。姉さん」

「ねえ、さん……?」

沙夢濡は唯利亞の言葉に当然の疑問を抱いた。唯利亞に兄はいても、姉の存在はない。それを知っていれば、当然の疑問である。

しかし、その疑問に答える者は誰一人としていなかった。唯利亞の姉に当たるであろう人物も現れない。それどころか、その疑問を抱いた沙夢濡自身ですら、次の瞬間には忘れていた。

「……!??」

唯利亞に、異変が起こった。

突如、唯利亞の髪が伸び始めたのだ。それは腰のあたりで止まったが、元の唯利亞の髪と比べると2倍近い長さである。

「ふふ……」

その横にいるノエルは、ただ沙夢濡に怪しい笑みを向けるばかりである。何が起こったのかを説明する気はないのだろう。

だが、

「ほうら、お姫様?唯利亞さんのお姉さま　　真なる女王の登場ですわ」

ノエルがそう言った途端、

「な……!？」

唯利亜の髪が白く染まっていった。

それだけではない。唯利亜の胸に膨らみが生じ、腰も女性的な丸みを帯びていった。元々男でありながら女性らしい身体であった唯利亜だが、今の身体はどう見ても女性のそれではかありえない。さらに、よく見れば、肌は色を失ってしまったかのような白色の輝きを放っていた。

「ふう……」

そして、開いた眼の虹彩は、淡い紅色。

夜闇の中にあつて淡い光を放っているかのような白一色の肌、それを広げる白金の髪、そして、その中に二点の紅い穴を穿つ眼。それが、今の唯利亜の姿だった。

……

いや、これを唯利亜と呼んでいいのだろうか？まるで別人に変じてしまった、この純白の人物を、本当に唯利亜と呼んでしまっているのだろうか？

そんな疑問に沙夢濡が苛まれる中、唯利亜だったその人物は、今の姿に変化しての第一声を発した。

「久しぶりだね、ジャンヌ。随分、元気そうじゃないか」

沙夢濡は、未だ処理しきれないこの状況と同時に、また、違和感を抱いた。

違和感といえば、唯利亜が沙夢濡のことを呼び捨てにすること自体が異常だが、それ以上に、唯利亜の口から唯利亜の声で発せられたこの言葉に、何か、懐かしさにも似た違和感があった。

懐かしい。なのに、思いだせない。

大事なことだったはずなのに、記憶の瓦礫の中に埋もれていて、取り出せない。

記憶の端は見えているのに、その全貌が見えず、違和感以上の不快感となって焦りを生む。なんの焦りかはわからない。これを早く思い出す必要があるからか、あるいは思いだしてはいけないことを思い出そうとしているからか、それとも、その両方か。

何も、わからなかった。

「しばらく見ない内に成長してるじゃないか。ああ、そうだな……とても可愛くなった」

「……っ」

よくわからない感情が心に流れ込んでくる。そんな場合ではないことはわかっているのに、フロントムのせいでそんな感情はなくなっているはずなのに、沙夢濡は知らず、その頬を赤く染めていた。

「くくく……、いいね、可愛いよ、ジャンヌ。そういうところは3年前と何も変わってないね。……くく」

「あなたは……！……ッ……、あなたは、誰……なの……」

沙夢濡は思わず叫んでいた。しかし、唯利亜はそれに答えること

もなく、今度は声を上げて笑った。

「……くくっはははは！最高だね！そういう照れ隠しもお前らしくて可愛いよ、ほんとにさ！」

「……ッ！」

凶星を突かれて、沙夢濡は唯利亜を睨んだ。恥ずかしくて敵に赤い顔は見せたくなかったが、それ以上に反抗する気持ちのほうがついていた。

しかし、唯利亜はそれに動じる様子もなく、さらに笑みを深めて沙夢濡を見据えた。

「いいねえ、そういう強気な顔もたまらないねえ。ぞくぞくする……」

「……あなたは、なんなの」

得体が知れない。唯利亜が言っているということもそうだが、それに対して心地良く感じている自分も気味が悪かった。

再び頭に湧いてくる疑問。この目の前にいる唯利亜の姿を取っている人物は、本当に唯利亜なのか？

いや、既に沙夢濡は、目の前の人物は唯利亜ではない、と確信していた。本当に唯利亜ならば、こんな言動は取らない。それ故の、先ほど口にした疑問。本当の正体が知りたかった。

「……覚えてると思ってたけど、さすがに忘れちゃったみたいだね……、いいさ、すぐに思い出させてやるよ」

沙夢濡は身構えた。唯利亜が、その足を動かしたからだ。ついに

は、足は歩みとなつて沙夢濡に迫ってくる。魔術を使う様子もなく、完全に無防備な状態で、既にその周囲にDMFBを侍らせていた沙夢濡に近づいていった。

「……そんなに怖がらなくてもいいよ、ジャンヌ。ほら、来な？」

「……………」

何を言つても動こうとしない沙夢濡を見て、唯利亜は溜息をつく。

「はあ……………、ファントムの調教は完璧だつてことか……………ま、なら、取るべき手は、強行突破つてやつさね」

その直後の唯利亜の動きに、沙夢濡は反応できなかった。いきなり、このDMFBの群れの真ん中に突っ込んでくるとは予想すらできなかったのだ。

しかし、唯利亜はやってのけた。

「ッ!？」

沙夢濡の唇を奪う、というおまけ付きで。

反射的に命じたDMFBの一撃によつて唯利亜は白金色の髪をなびかせながら飛び退り、沙夢濡から離れたが、その顔から余裕が消えることはなかった。

「くっくく……………」

「……………あ、……………」

しかし、笑う唯利亜とは対照的に、沙夢濡は唇を奪われた時の姿

勢のまま呆けていた。

「あ……、あ……」

そのキスの瞬間、沙夢濡に流れ込んできたもの。

一つはある光景。そこは、沙夢濡の自宅の部屋。そこでは、沙夢濡が数年前の姿でこちらに向かって微笑んでいた。

もう一つはある声。それは沙夢濡の声で、ある言葉が紡がれていた。その言葉は、とてもありきたりで、しかし、それ故に最も珍しいとも言える、言つなれば、愛の言葉。たった4文字の、短くも様々な意味を内包し、様々な感情を表し、様々な壁を否定しようとする、言葉。つまり、「好きです」という言葉、これが、沙夢濡自身の声で届いた。

「あ、ああ……あ……」

沙夢濡がその言葉を告げた人物は、18年間の人生の中で、一人しかいなかった。

鳳霊学園の中等部に入ってから出会い、それから2年間想いを寄せ、やっと告げた想いを受け入れてもらい、身体まで許したのに、一ヶ月も経たない内に消えてしまった女性^{ひつこ}。

そもそも、あの白い肌と白金髪を見た時点で気付くべきだったのだ。あの、すべての色素が抜けてしまったような身体を持つ人など、沙夢濡の記憶には一人しかいなかった。

「う、そ………、うそ、よ………」

先天性白皮症、いわゆるアルビノだったその人は、そのせいで日中の外出はほとんどすることはなく、会うのは専ら夜だった。ただ、女性同士の関係など親に明かせるはずもなく、沙夢濡としてはそち

らの方が都合はよかった。

それに、夜の闇の中でもわかるくらいに、あの人は白かった。

人間ではないのではないかと疑うくらいに白く、穢れを知らない肌。見たことがないほどに艶やかで、実際に初見では見惚れてしまった、輝くようなプラチナブロンド。そして、それらとは対照的に、野性的にすら見える、あの紅い眼。そのどれもが沙夢濡の心を潰さんばかりに握りとらえ、離さなかった。

沙夢濡は元からその趣味を持っているわけではなかった。小学校低学年のころの初恋相手はもちろん異性であったし、それ以降も興味を持つ相手は男子しかいなかった。

だが、何の因果か、沙夢濡は部活で遅くなった帰り道でその人と出会い、その一度だけで惚れてしまったのだ。それが5年前の初夏だった。

しかし

「……うそ、よ！うそようそよ！そんなわけ、あるはずがない！」

その人物は、今、存在するはずがなかった。存在を許されるわけがなかった。なぜなら

「あなたは “ナユタお姉ちゃん” は、死んだはずなのに

……！」

唯利亜は
みを見せた。

否、“ナユタ” は、唇を吊り上げるだけの笑

「ふー……ん、あたしが死んだ、ねえ………」

ナユタは、そう呟いた。

そう、ナユタは、死んでいる。3年前の3月末に、交通事故で亡くなっているはずだった。

しかし今、そのナユタが、唯利亜の姿を借りて、沙夢濡の目の前にいる。

「なんで……なんでなのよ………」

異常が続きすぎている。唯利亜が姿を変え、それはナユタの姿に酷似しており、そのナユタの人格が、唯利亜の中にあつた。

わけがわからない。

なぜ唯利亜はナユタの姿に変貌してしまったのか？なぜ死んだはずのナユタの人格が唯利亜の中にあるのか？今、唯利亜の人格はどこにあるのか？挙げればきりのない疑問に、沙夢濡は混乱していた。

ファントムも、こんな展開は予想していなかったはずだ。もし予想していたなら、唯利亞の中の他の人格について教えていたはずなのだから。

「ああ、そうだ、ジャンヌさ。思い出したついでに一つ、いいかな？」

そこへ、ナユタがそう訊いてきた。だが、沙夢濡は否定も肯定もできない。まともな反応をするには、頭が追いつかなかった。

ナユタは、返答がないことは承知していたのか、すぐに言葉を続けた。
「が、それは、沙夢濡の混乱をさらに大きくするものだった。」

「その“ナユタお姉ちゃん”って呼び方、やめてくれないかな？…
…実の弟がここに、二人ともいるからね」

「弟……？」

沙夢濡は思い出す。唯利亞は、今の姿になる前に、なんと叫び出したのか、を。

曰く、「姉さん」と。

つまり

「そこまで思い出してなかったのかい？あたしのフルネームは、幣して原奈唯他………ほら、漢字も見れば、この子たちと姉弟だつても頷けるだろ？」

「……………」

納得せざるを得ない証拠を提示された沙夢濡は、無言でもって肯定を表した。

しかし、

「そう……………」

その無言に含まれる意味は、一つではなかった。

「ふふ……………」

「……………」

奈唯他は、沙夢濡の薄ら笑いの意図がつかめず、知らず眉の根を寄せていた。

唯利亚は、このタイミングで奈唯他の存在を沙夢濡に知らしめることで、精神的なアドバンテージを得ようとしていた。かつて恋人であり、しかも既に故人となっている奈唯他が人格だけとはいえ現れたとなれば、たとえファントムの手が加えられていたとしても、大きな動揺を誘うことができる。そして、それはある程度達成されただけで済んだ。たはずだった。

この事態は、ファントムですら予期していないはず。ならば、なにかしらの妨害要素が埋まれる事があったとしても、それはほぼ確実に沙夢濡に起因するものでしかありえない。だとするなら、その沙夢濡自身を抑えておけばいいだけの話であり、奈唯他はそうするため言葉攻めを繰り返した。

だが、唯利亚も奈唯他も、ある一つの要素、真っ先に思いつく、だがそれ故に真っ先に思考から除外してしまう一つの妨害要素たりえる要素を忘れていた。

ファントムの介入は、ほぼありえない。

ファントムによって作られた沙夢濡の人格は、現在混乱の極み。

沙夢濡に侍るDMFBは沙夢濡の命令がなければ動けない。

なら、残るは

「あーあ……、やっぱりね……。ナツも唯利亞ちゃんも……奈唯他も、結局、私の敵になるのね……」

天を仰ぐ沙夢濡に、溜息混じりの諦念は窺えても、先ほどまでのような動揺は見えない。何をきっかけにしか、沙夢濡は冷静さを取り戻していた。

ファントムに与えられた狂気すら排除した、沙夢濡の元の人格。

「ジャンヌ……、あんた」

「ね、奈唯他」

「ッ……」

かつてのような気楽さでその名を呼ばれた奈唯他は、口を噤んで言おうとしていた言葉を飲み込んだ。

続く沙夢濡の言葉は、唯利亞も奈唯他も予想していたものだった。

「私……、あなたを殺すわ」

沙夢濡の宣言。それは、一度は愛し合ったはずの二人が、文字通りの殺し合いを始める、その狼煙でもあった。

しかし、それに相對する奈唯他は、それを理解しながらも、喜びの笑みを湛えた顔を、沙夢濡に向けていた。

「くく……………、いいじゃないか、その目。あたしがあんたを振った時と同じ目をしてる……………。それでこそ、ジャン又だよ」

「……………その日に、あなたは」

「そ、死んだ。死因はあえて言わないけどね」

平然と言つてのける奈唯他に、沙夢濡は鋭い視線を向けた。そこに狂気はなく、むしろ、純粹な憎しみ、恨みが現れていた。

「私はそれを知つて絶望したわ。振られたきり、あなたとは話せないんだもの。寄りを戻そうと思つてもできない。私はあなたに別れの言葉すらかけられなかった。私を一方的に振つた拳句、何も言わずに、何も言わずに消えるなんて、誰が許すと思うの？そんな相手に、最終的に抱く感情つて何だと思う？奈唯他」

「……………まさに可愛さ余つてなんとやら、だね。あんたを悲しませないようにつて、柄にもないことしようとしたのがまずかったのかね……………」

「……………まるでその日に自分が死ぬことをわかつていたみたいに言つたのね？未来予知の魔術でも使つたのかしら？」

「いやいや、本当は死ぬつもりなんかなかったんだけどね。ま、こうして死んでるわけだし、言い訳は無駄かね」

そこまで言つて、奈唯他は徐ゆるに、羽織うゑっていたパーカーを脱ぎ始めた。脱いだパーカーは地面に放り投げられ、奈唯他はこの場には不釣り合いなパジャマ姿となった。

「ほら、ジャンヌ、あたしを殺すんだろ？武器も持ってないし、今ならすぐに殺せるけど？」

標準以上の膨らみを持つ自身の胸を親指で指しながら挑発する奈唯他を、沙夢濡は警戒心を露わにして睨みつけた。

「抵抗はするんでしょう？」

「ハッ……当たり前だよ。この身体は唯利亜からの借り物だし、借り物を勝手に壊しちゃダメだろ？……だから、最大限、抵抗させてもらおうよ」

「……………」

黙り込んだ沙夢濡の周りのDMFBが威嚇するように、唸り声や、翅や爪を打ち鳴らして音を立てていた。沙夢濡は、そんなDMFBを落ち着かせるようにして、ある一体の異形の背を撫でた。

「こうして手段も手に入れた。もう悩む必要もない………………。奈唯他、覚悟はできてる？」

「生憎、する必要のないことは極力避ける性質たちでね」

二人の間に、決定的な空気が流れる。

臨界点は、寸前だった。

既に午後10時になるうかという時間。

空は闇に満ち、いつもはそこに幾つもの点を穿つ輝きも一つたりと存在せず、月光さえも闇に呑み込まれてしまったかのように、地上には天からの一切の光が届いていなかった。

ほとんどが平地となっているここ一帯で最も天に近いここ、江倉宮高台の頂上でもそれは例外ではなく、周囲に人工灯の類が一切ないため、その闇は一層深かった。

その中で、まるで光源であるかのように淡い輝きを放つのが、幣原奈唯他。彼女の髪はプラチナの輝きを纏ったが如く、肌は白磁の光沢を放つが如く、眼は野性の獰猛さを宿したが如く、それぞれがこの闇にあってなお、否、それ故に、その存在感を増し、そこに“在ること”を最大限主張していた。

対して、この闇に溶け込むようにして立っているのが、後朱雀沙夢濡。彼女は、漆黒の黒髪と無限に深い眼窩のように暗い双眸を持ち、身体は純黒のドレスに包まれており、僅かに見える白い肌すら

も暗闇に隠していた。夜闇に溶け込んで存在感を失い、しかし、その“黒”から発せられる威圧感、それ故にそれ以外の情報を一切含まずに相手に届き、問答無用に圧倒した。

奈唯他は沙夢濡を動揺させるためだけにわざわざ出てきたわけではない。むしろ、それは手段であって目的ではない。

それに加えて、奈唯他にもしなければならぬことがある。奈唯他は、王女でありながら女王を演じる滑稽な道化を舞台から引き摺り下ろさなければならぬ。

沙夢濡に植え付けられたファントムによる人格は、半分は消えたが、まだ沙夢濡の元の人格を浸食する程度には残っている。でなければ、沙夢濡が奈唯他を殺す、などと言うはずがないのだ。そもそも、正常な精神状態の人間が、憎いから殺す、という思考に行きつき、実際に行動に移すことはない。誰しもが殺すという思考に辿りつきはしても、実行に移す者はいない。実行に移せば、それは人間ではなく、殺人“鬼”となる。

それ故に、沙夢濡の元の人格を取り戻すことが、この事態の直接的な解決方法となる。

だが、そのためには、沙夢濡の戦闘能力をすべて削がなければならぬ。その手段も当然、持ってはいるが。

沙夢濡は、なぜ自分がここまで奈唯他に対して憎しみを抱いているのか、理解できなかった。

自分のことだからといって、そのすべてが理解できるとは思っていない。だが、自分の抱く感情に理由が見つからないというのは、正直、気分のいいものではない。ましてや、その感情が他人に抱い

て褒められるものではないものであり、しかもその相手がかつて恋人だった人であれば、より一層気持ち悪い違和感となって心に残ることになる。

しかし、憎悪を抱いているのは事実。自分を突き放し、その理由すら話さずになくなってしまったのである。沙夢濡と奈唯他が知り合いであるということを知っている者はいなかったために葬儀に呼ばれることもなく、当時の沙夢濡に、呼ばれてもいない葬式に行こうという行動力はなかった。沙夢濡の亡骸に声をかけることすら沙夢濡には許されなかったのである。

納得できなかった。

納得できるはずがなかった。

自分は彼女の恋人だったはずなのに。その最期を看取することも、最期の言葉を聞くことも、別れを言うことすらできず、沙夢濡はただ、その話を聞いて泣くしかなかった。泣いて、ベクトルの定まらないその悲しみを全方位に発散させるしかなかった。

そんな風にしたのは誰だろう？

そんな惨めなことをしなければならなくなったのは誰のせいだろうか？

奈唯他に決まっている。

なら、どうすればいいだろう？

殺せばいい。

だから、殺す。

それだけだった。

「 ジャンヌ」

奈唯他は敵の名を呼んだ。返事はないが、攻撃の気配もなく、続けると言っているのだと解釈して、奈唯他は言葉を続けた。

「ジャンヌ、あんたを守る兵は、その有象無象どもなんだね？」

「……………ええ、この子たちが私を守ってくれる、私の唯一の味方。…………だから、有象無象だなんて言わないで」

若干の怒気を含んだ声に、奈唯他は反応せず、期待通りの答えに満足そうに頷くだけだった。

「はんつ…………、そんな醜い化物でよく我慢できたね？女王なら、もっと造形にも気を配りな。たとえそれが、取るに足らない雑兵だとしてもね」

「 ツー!!」

一瞬で形相を豹変させた沙夢濡の背後から、数十のDMFBが奈唯他に向かってその爪牙を伸ばした。微動だにしない奈唯他は、それが目前に迫るまでただ見ているだけで、成す術もなく貫かれるように思えた。

しかし、

「仲間外れはあまり好きではありませんわ。私も混ぜてくださいな」

それまで無言を貫いていたノエルが振るった力によって、奈唯他に降りかかるはずだった爪牙の嵐は、すべて寸前で止まっていた。ノエルはこれといって特に大きな動きはしていなかった。だというのに、ゆうに30体は超えるDMFBの一斉攻撃を止めて見せたのだ。

「……っ」

沙夢濡は唇を噛むしかない。ファントムであるノエルがこの戦闘に絡めば、沙夢濡の勝算はほぼ無きに等しい。ノエルは傍観に徹すると予想していたが、その沙夢濡の予想は甘かった、ということである。

が、救いの手は思わぬところからもたらされた。

「……ノエル。悪いけど、手出しはしないでもらいたいんだけどね」
「あら………?」

その言葉に疑問を持ったのは、声を上げたノエルだけではなく、沙夢濡も同様だった。

しかし、それを見ても、奈唯他は億劫そうな表情で、

「これはあんたが出しゃばることじゃないからね。できれば、あた

しと唯利亚だけで片付けたい」

と付け加えた。

ノエルは言われた通り、あっさりと力を引つ込め、飛んで奈唯他の横に並んだ。

「……………あなたに言われては仕方ありませんわね。引きましよう」

「案外、簡単に引くんだね？ノクターンですら少しは食い下がるつてのに」

「フフ……………女王に命じられては聞くしかありませんでしょう？」

まあ、なぜノクターンのことを知っているのかは、聞かないでおきますけども」

「クク……………、有難いね。それじゃ

」

ノエルをその場に残し、奈唯他は前へと進み出た。そして、右手を下に振り下ろし、

「本番、始めようか、ジャンヌ」

下ろし切った瞬間、奈唯他のその両手に、身長をゆうに超える大鎌が納まっていた。

「あなたが……………戦うつつもり？」

「ああ。しかし、今が夜で助かったね。昼だと外に出た途端、大火傷だもんねえ……………、で、唯利亚、あんたの身体、尋常じゃないくらい酷使するけどいいよね？」

沙夢濡の質問に答えた後、奈唯他は唐突に眼を閉じた。そして、数秒経って目を開けた時、奈唯他のその目は淡い紅ではなく、より深い光を放つ真紅の輝きを持っていた。

「　　クク、いい返事だ。じゃ、いこうか」

「　　ッ!!」

一斉に自らの武器を広げる異形たちと、大鎌を持つ奈唯他が、極限の戦場で対峙した。

奈唯他の振るった鎌が異形の首を刈り、その異形が崩れ落ちる。続けて背後から迫る腐乱した馬のようなDMFBは、振りかえり様に難いだ鎌によって、その胴体を両断された。

再び沙夢濡に向かって鎌を構える奈唯他。しかし、沙夢濡までは

かなりの距離があり、間にDMFBがいることもあって、すぐに近づくことはできない。

どれだけ倒しても減る気配のないDMFBの軍勢。獸的に直線的な攻撃を繰り返すだけではなく、負傷すれば沙夢濡の下へと戻って癒しを請う。奈唯他はそれを防ぐために追撃しようとするが、それを他のDMFBに邪魔され、やむを得ず他のDMFBを相手にする。こんなことが、幾度となく繰り返されていた。

だが、それでもなお、沙夢濡にその手を届かせようと、奈唯他は鎌を振るって異形を切り刻む。DMFBは決して減っていないわけではない。その証拠に、さっきまで一分の隙もなかった彼らの布陣に、微かな綻びが見え始めた。

奈唯他の動きは、常人離れしている。自分の身長を超える鎌を抱えながら数十秒の距離をほぼ一瞬で駆け、時には常人には不可能な高さを涼しい顔で跳躍し、時には片足を軸にして片手だけで大鎌を振り回しながら一回転し、数十体のDMFBをたった一人で翻弄していた。

その中で見えてきた、沙夢濡へと続く一つの道。奈唯他はそれを見つけると、迷う素振りすら見せずに突進した。幾重にも続くDMFBの攻撃を掻い潜り、それらを脇目に、立ち塞がる異形は一瞬にして斬り伏せ、ついに、

「チエック」

鎌を振りかぶり、

「メイトだあ！！」

横に一闪、薙いだ。
が、

「ふふ……残念ね？かすりもしなかったわ」

「……………はんっ、あんたに本気で当てるわけないだろ。あんたは救うべき存在だ。そうして逃れるのは予想していたさ」

翼を持ったDMFBにつかまって上空から見下ろす沙夢濡を、対する奈唯他は見上げる。その顔に浮かぶのは、上は憎しみに歪み、下は余裕の笑みだけが見える。

「……………負け惜しみは見苦しいだけよ。こうなったらもう、あなたには手出しできないでしょう？この子を撃ち落とせるほどまともな遠距離攻撃魔術を使えるとは思えない。あなたにできるのは、せいぜい身体強化くらい。……………ふふ、惨めね？」

しかし、見下ろす立場にあるからか、沙夢濡のその顔は、蔑むような嘲笑に変わり、

「さあ、みんな！あの憐れな飛べない鶏を食い千切りなさい！」

腕を掲げ、DMFBに命じた。

途端、DMFBはそれまでとは打って変わり、ただ本能的に自身の武器を掲げて奈唯他を襲った。勝利を確信したが故の、直線的な攻撃。実際、沙夢濡に肉薄するためにDMFBの軍勢のど真ん中に入ってしまったのだから、その攻撃は四方八方から奈唯他に襲いかかる。

しかし

「残念だねえ……………もう終わりか」

奈唯他が決定打を与えられなかったのは、DMFBが沙夢濡の指揮下にあつたからであつて、こうして、ただ「殺せ」という命令しか受けていない、獣にも等しい知能しか持たないDMFBを相手にすれば、

「よっ……と」

「な……！」

奈唯他の手にかかれば、たった一撃で十体近いDMFBを葬ることも可能だつた。

「相変わらずジャンヌは詰めが甘いねえ。将棋にしてもチェスにしても、あたしを追い詰めることはできても勝てた試しはないもんねえ？ククク……」

「くっ……、でも、まだ私の子はこんなにいるのよ？あなた一人で本当に勝てるのかしら？」

だが、沙夢濡の負け惜しみとしか取れない言葉も、この状況では事実でしかなかった。

DMFBはまだ、沙夢濡の背後だけではない、奈唯他の周囲にも存在する。このまま戦いを続けて奈唯他の体力が持つかは、疑問符を付けざるを得ない。

しかし、奈唯他はやはり、絶望に陥ることもなく、深刻に思索に耽ることもなく、ただただ口を弧に歪めるだけの、異様な余裕の笑みを浮かべるだけだつた。

「あたし一人で勝てる、と、言いたいところだが、さすがに唯利亜の身体が限界みたいだしねえ。あたしの身体じゃないから

なんか違和感あるし……………だから負けるってわけでもないけど？」

「くっ…………、私は！…………あなたの、そういう余裕そうな表情が大嫌いだったのよ！」

「へえ、そりゃ光栄だね。人に嫌われたくて身に付けたからね、この笑い方」

「…………っ、この…………！」

「ククク…………、昔に比べて怒りっぽくなっただんじやないか、ジャン又？」

今にも咬みつかんと激昂する沙夢濡に反して、それをからかうかのように話す奈唯他は鎌の構えすら解いて、片足に重心を預けるようにリラックスした状態で立っていた。

沙夢濡は、そんな奈唯他の様子にさらに怒りを増し、この場にいるすべてのDMFBに命じて彼女を殺させようとした。

殺させようとした、その直前、

「さて、そろそろ終わらせようか、ジャン又」

「っ！！」

奈唯他の言葉に何かを感じ取ったのか、沙夢濡は反射的にDMFBに命じて、奈唯他を襲わせていた。今度は、さっき奈唯他に迎撃

された時とは違い、DMFBたちの攻撃に隙をなくし、時間差を作
って奈唯他にすら逃れられないよう絶妙に計算されたものだった。
今度こそ、勝てる。

避けられるわけが、ない。

DMFBの爪や牙に切り裂かれ、挟られ、成す術もなく凌辱され、
肉体を攪拌されて、今度こそ自分の目の前から消えてくれる。

そう、“願っていた”

沙夢濡は、自身の目を疑った。

奈唯他の右側から仕掛けたDMFBは剣の一閃によって霧散した。
奈唯他の左側から仕掛けたDMFBは見えない壁に弾き返されて、
身に纏わりつく不可解な帯によって締め潰されて絶えた。

奈唯他の背後から仕掛けたDMFBは無数の槍に貫かれて一瞬に
して葬られていた。

奈唯他の前方から仕掛けたDMFBは双つの斬撃ふたによって無数の
肉片に切り刻まれ、散った。

これは当然、奈唯他が一人でやったものではない。

「な……なんで……」

奈唯他の四方に、4人の人間がいた。

「なによ……これ……」

否、正確には、4体のDMFB。

「なんで………なんで、あなたにそんなことができるの!？」

さらに正確に言うなら、4体の“ファントム”が、奈唯他を守るようにして、四方を囲んでいた。

「言ったる？女王は自分を守る兵の外見も洗練しろ、ってね」

やはり、奈唯他は笑っているだけだった。

第1章 誘惑の狂姫 #24 (後書き)

今まで散々唯利亞に言わせてきた「姉さん」にご登場いただきました。

外見について結構具体的な描写を書いてみました。唯利亞と明確な違いを出すためにアルビノにしたので、書かざるを得なかったわけですが。

第1章 誘惑の狂姫 #25

「なんだ……？これは……」

絶句するファントム。遠隔地からの視覚の接続を可能にする特殊なDMFBを介して見るその光景には、彼にとって信じがたいものが映っていた。
その先には

「あつれー……？何してたんだっけ、私たち？」

「あー……っと、化物どもと殺り合って、だ………お前、死んだんじゃないっけか？」

「ああ、もしかして、私たち、生き返った？」

「みてえだな。その前の恥ずかしいやり取りまで憶えてやがる……、准将も正確に巻き戻すよなあ、オイ」

「恥ずかしい……？何それ？」

「お前は覚えてねえんだよな……………まあいいや。どうやって殺されたかは覚えてねえが、とにかく徹底的に報復してやるから覚悟してろよ、クソツタレ」

「……………なぜだ……………、ありえん……………！」

彼の配下によって確実に殺したはずの二人、浅木久宮と浄美未来小が、平然としてそこに立ち、しかも会話までもいつも通りと言った感じでしていた。

それだけではない。

「……………ああ、死んでいたのですか、私。やはり、この感覚は慣れませんか。それはともかく、紅線がないのは困りますね。誰かが引き継ごうとして失敗したんでしょうか……………、いい迷惑なんです……………、まあいいです、愚痴はこのくらいにして、自分の役目に戻るとしましょう」

頭を跡形もなく吹き飛ばされたはずの大原深夜までが、その頭を完全に持った状態で、元いた場所に座っていた。

「な、なんだ、これは……」

ファントムは枯れた声で、それだけを言った。

「見えているんでしょう？なら、わからないの？」

「バカな……」

なんでもないことのように九能は言うが、ファントムにとって、この光景は異常の極みだった。

ありえない。

死んだ者が生き返ることなど、あつてはならない。

死ねば生き返らない。この世界開闢以来普遍の原則は人間だけではなく、DMFBにも通じるものである。DMFBは死んだ際、その肉体を構成している魔力を拡散させるが、それは純性魔力と通常の魔力が結合している状態である。時間が経てば分離して通常の魔力に戻るが、それ以前の状態では、生物の糧になることも、再度DMFBを構成する源になることもない。

実際の魔術の中には、蘇生術も存在はする。しかし、生物を蘇生させるということは、すなわち他人の純性魔力に干渉するということである。それは人の深層領域に踏み込むことであり、さらに言えば、神の域を侵し、その権威を害する最大級の大罪とも言える。

魔術団では結成当初から蘇生術の使用だけでなく、研究自体も禁

止している。それを破った者は団員であろうとなかろうと、特級禁断子に指定し、F A S C Aは全力をもつてそれを消そうとする。

故に、現在蘇生術を知る者は、表向きは存在しないとされている。研究すら禁じられてしまったため、それを後世に継承する者がいなくなってしまうのだ。もちろん、魔術団から逃れた例外も存在するが。

しかし、魔術団に仕える真つ当な魔術師なら蘇生術を使えるはずもなく、使った場合無条件で自分の生命に危険が及ぶ蘇生術を報告が必要な任務の中で使おうという者はいない。そもそも、蘇生術を使える魔術師を、魔術団が放置しておくはずがない。

もし、九能が蘇生術を使えるというなら、この戦場に存在するはずがないのである。

ファントムはそれを知っていたが故のこの驚愕だった。が、それを知らずとも死人が生き返った光景を見れば、それは究極の異常として認識するだろう。超常を可能とする魔術の世界にいたとしても、である。

しかし、

「待て……」

ファントムは、ある可能性に思い至る。

九能には、異常とも言える再生能力がある。それは、九能の“戻ること”という源血の特性ゆえであり、それによって、負傷した箇所を負傷する前の状態に戻すことで、実現されていた。

ならば、それが他人にも作用したとしたら、どうだろうか？死者を死ぬ前の状態まで戻したら、それは

「バカな……」

死者を死ぬ前の状態まで戻せば、それは蘇生と同じではないだろうか？

「ク…… 八八、絶対的な、回帰…… だと？」

しかし、それでもファントムは信じられなかった。いや、信じたくなかったのかもしれない。

自らの同胞が、自身の肉体と存在そのものを懸けて戦い、奪った敵の生命。それが、呆気なく、相応の犠牲すらなく復活してしまっただのだ。

「世界の真理すら、超えた…… だと？　　クク、く……」

それを実現させるような力など、あつてはならない。

殺せば死ぬ。死ねば生き返らない。その絶対かつ不変の原理を根本から覆ってしまうような存在が、あつていいはずがない。たとえあつたとして、今自分の目の前にいると信じたくはない。

「許されざる、奇跡……？クク……、まさにその通りだ……」

失われた生命の復活。

古来より、不老不死と同様に万人が求め、しかし、叶わなかった。叶いはしてもその方法の存在が許されなかった、絶対に起こり得ない、存在しえない奇跡。

その奇跡を手中にし、自由に振るうことの許される存在は、この世界に唯一つのみ。

それは

「……………死者、蘇生だと！？そんなもの、貴様ら人間ごときに許されたものではない！それが許されるのは、この世界で唯一神だけだ！それを侵すなど、言語道断、神罰に値する大罪、生命そのものを侮辱した単なる凌辱に他ならない！その力は貴様ごときが振るつていいものではない、神のみに与えられた、不可侵かつ絶対の神の領域なのだ！」

「そう。なら、私が、神よ」

「ッ……………！お、のれ……………！」

圧倒的な絶望に打ちひしがれるファントム。

しかし、九能はこの状況で、さらなる追い打ちをファントムにかけた。

「さて、と。深夜が起きてくれたから、この妙な気持ち悪い空間の正体も掴めまし、そのおかげであなたたちの目的も、ある程度はわかった。だから、あなたを生かしておく理由も大半はなくなつた。

もうあなたは殺すわ」

「く……………！」

ファントムは意図せずして後ずさっていた。今までファントムに何の痛手も負わせていない九能だが、それはあくまで今までの話。蘇生まで実現させる九能の源血に、ファントムは知らず恐怖を抱いていた。

その恐怖が、ファントムを後ずらせた。身体だけではなく、精神すらその恐怖に蝕まれ、まともな闘争心を保ってはいなかった。

「ク……、クク……、いいのか？私を殺しても。貴様らの知らないところで何かが進行しているやも知れぬぞ？」

ただできることといえば、それは、適当なハツタリとともにない見栄を張る程度だった。

が、それも一瞬で無駄に終わる。

「そう………、なら、それがわかる人に聞いてみましょう？」

「なに？」

「………深夜、お願い」

ファントムに不敵な笑みを向けた後、九能は深夜の名を呼んだ。その数秒後、

『ええ、わかりました。ちょうど読み終わったところですし、合っているかどうか、答え合わせもしておきたいですからね』

深夜の声がファントムの頭の中に響いた。それは、正真正銘さっきまで死んでいた者の声であり、ファントムにとっては未だに信じがたいこの現実を、否が応にも、事実として見せつけていた。それはファントムにとって苦痛以外の何物でもなかったが、それにも構わず、深夜の声はファントムの脳内で聞こえ続けている。

『現在、その戦場を覆っているのは、後朱雀沙夢濡の子宮内部の拡大概念です。簡単に言えば、その戦場は後朱雀沙夢濡の子宮の中にあるということです。そして、その中にあるということは即ち、魔力を操る能力さえあればDMFBの生成ができるということ。ファントムであれば魔力を自在に操ることも可能でしょうし、疵術師

とはいえ魔術師の端くれである私たちが戦っているのですから、DMFBを創るための魔力も十分にある。DMFBの量産が実現されるというわけです』

深夜の言うことに反論できないのか、ファントムは無言だった。九能との戦いすら忘れて、自らの計画が崩れていく音をただ静かに聞くしかなかった。

『ただ、それ　つまりDMFBの量産　が目的で

はなかったはずです。本当の目的は、もっと大規模なもの。実現すれば、手がつけられなくなるほどのものだったはずです。つまりところは　ファントムの量産。それが真の狙いだったはず。

作り方はいたって簡単。私たちを殺し、死んだ際に放出される純性魔力を源にしてDMFBを作る時と同じ要領で他の魔力と融合させればいい。一般人では純性魔力がすぐに拡散してしまうし、そうならないためには体内の魔力の多い人間が必要。そんな人間、滅多にいるものではないし、探すのも面倒。だから、魔術師であり、しかもここに来ることがほぼ確定している私たちをその標的に選んだ、というわけです。魔術師の純性魔力を使えば、結果としてできるファントムの力もかなり大きなものとなりますから、手段さえあれば実行する意味は大いにあります。そして、後朱雀沙夢濡の子宮の拡大概念でここを覆った理由は、恐らくそのファントムを創るため。魔術師一人の魔力丸々を胎内に入れる、というのは、いくら彼女であつても、かなりのリスクを伴うはず。下手をすれば生殖能力そのものを失いますし、最悪、死ぬことさえあるかもしれません。ファントムにとって、その両方は避けるべきことだった。だから、わざわざ手間をかけてまでこの空間を創り上げ、その中で私たちを殺し、ファントム生成の糧にするつもりだったというわけです。……まあ、わからないことはまだ多く残っていますけどね。拡大概念をこれだけの広範囲まで広げた手段なんかは特に、見

当もつきませんし、ファントムをそんなに作ってどうするつもりだったのかもわかりません。ま、ここまでわかれば十分ですが」

深夜はここで言葉を一度切った。そして、一息置いた後、

『これで終わりです。何か反論等は？』

ファントムに投げかけたであろう質問に、ファントムは無言でもって否定を示した。つまり、深夜の魔力読解にはなんの間違いもなかった、ということになる。同時に、深夜がわからなかったことについても教える気がない、ということでもあるが。

『ファントムが行おうとしていたのはこれだけでしよう。それ以外の狙いは恐らくありません。彼の魔力はとも丁寧で読みやすいものですから、量そのものは膨大ですが読み間違いも読み飛ばしもほとんどないかと。……………ここまで綺麗な構成の魔力も珍しいですが』

「……………ク……………、クク。ここまで、か……………」

ファントムの独白は、同時に敗北宣言でもあった。

構えていた爪を下ろし、周囲を漂う大蛇も総じて項垂れている。覇気はなく、殺気も発さず、手足を投げ出すようにして脱力しきったその姿は、まさに敗者のそれだった。

「……………それで？」

しばらくそのファントムを静観していた九能だが、やや経ってからそう問いかけた。

「……………この期に及んで貴様は何を求める？私が情けなく命乞いをする姿を見たいか？それとも私が自ら命を絶つのを望んでいるのか？」

「自分で死んでくれるのなら、それはそれで楽でいいけれど。でも、あなたはそんなこと、するつもりないでしょう？だから、もう抵抗も何もしないのか、って訊いているのよ」

「……………」

ファントムは押し黙った。が、しばらくしてから俯いていた顔を上げ、九能の目を見据えつつ、言った。

「クク……………、愚問だな。私はまだ、生きているぞ……………」

ファントムの周りの大蛇が、その口腔を開けて、九能にそれを向けた。そこから発せられるのは、まるで鮮血のように紅い糸を束ねた紐のようなもの。それが、九能目がけて数百と飛んできた。

「ふ……………、同じことよ。そんなものが、効くとも！」

しかし、九能は今までと同様に、その紅い雨の中を果敢に突っ込んでいく。それがどんな攻撃であろうと、九能には通用しない。それは、今までの戦闘の中でファントムもわかっているはずだった。お互いに殺すわけにはいかなかったために、それをお互いにわかっ
ていながら今までは戦っていたが、今は状況が違う。

敵の目的が判明した今、九能にファントムを生かす必要はなくなった。同様に、ファントムもこの状況ではなりふり構っている場合ではなかった。

「あーあ……、そろそろ終わりだね……」

小鳥遊尊何は、戦いながら独白した。

「はいはい。わかったから、手なんか抜かないでね。この期に及んで死ぬなんて御免だから」

その背後で洋弓を引き絞る伊神未永栖は、見るからに力を抜いた尊何を叱咤した。

「ははは、大丈夫だよ。死んでも准将が生き返らせてくれるから」

「……………そういう問題じゃないでしょ。准将に手間をかけさせるのがダメなんじゃない」

「ああ……………そうだねー……………」

何一つ納得しているようには見えない尊何だが、一応まともな迎撃を再開した。

尊何が睨んだDMFBは断末魔を上げる間もなく爆発していく。それを逃れたものも、未永栖の鉄矢によって接近を牽制される。決して近寄らせず、近寄らせる前に倒すという戦術を実現した完璧な連携が、この二人によって取られていた。

二人に疲労は見られるが、にも関わらず、彼らはこの戦闘の中で、一度として窮地に追いつめられることがなかった。

単純な戦闘能力なら、この二人より高い者は特殊遊隊の中にも多い。特に瞬間火力なら久宮のほうが遥かに高く、対多数戦においては奈都海や魅戈のほうが有利に戦える。戦闘における選択肢では唯利亜に劣り、身体能力は未来小ほど高くない。九能とは、比べるだけ無駄である。

だが、彼らには、それにも勝る経験がある。今も戦況を悪化させることなく戦えているのは、偏にその経験によるものだと言っている。

そして、紅線によって得られた情報によって、ファントムの無力化を確認した彼らは、戻るべき場所を失くしたDMFBに猛攻をかけるつもりだった。

「尊何、そろそろ片付けるわよ」

「お、早速かい？」

「さっさとしないとみんなに迷惑かけることになるでしょ」

「そうだね、了解」

尊何は魔力を遮断する特殊なコンタクトレンズを目に装着して、未永栖の下へ下がった。

未永栖はそれを確認してから弓に矢をつがえた。そして、その矢

を限界まで引き絞り、

「　　つぶ！！」

その矢を、真上に放った。

放たれた矢は、一瞬で雲を突き抜け、すぐに見えなくなった。そのまま、矢は落ちてくる様子も見せず、かといって他に何か起こる気配もなく、その場には軽い沈黙が流れた。

「……………」

「……………」

「何も起きないけど？」

「……………黙って見てなさいよ」

沈黙を破った二人の声を聞き、DMFBが咆哮を上げた。

その咆哮が、断末魔に変わった。

上空から降り注ぐ幾本もの矢がDMFBを残らず貫いたのだ。

「おおー、すごいね。さすが少佐」

「そんな棒読みで言われても……………。ま、これで楽できるで

しょうし、移動するわよ。これから残党狩りに移るから」

「残党狩りね。いい響きだ」

何気に物騒なことを言い放った尊何を呆れたジト目で一瞥した末永栖は、「……あつそ」とだけ言って、歩き始めた。

「……ところで」

「……？なに？」

「最初から、あれを使っておけば良かったんじゃないかな、と僕は思っただけども」

「消費が半端ないのよ、あれ。だから、追い詰められてからか、仕上げくらいにしか使えないの」

「へー……」

「……興味ないなら訊かないでよ……」

二人は揃って、そこから去った。

『 というわけで、もう持久戦は終わりです。全力で掃討してください』

「……う？いいのー？」

深夜によってファントム討伐の報を受けた魅戈は、異形の爪牙の中を踊りながら、首を傾げた。

『 ええ、どうぞ。思う存分、やってしまってください』

「いやーし！やってしまおー！」

投げやりとも取れる深夜の言葉に、魅戈は嬉々としてさらに大振りな踊りを踊り始めた。

それに翻弄されるDMFBは、その大きすぎる変化に攻撃を一瞬躊躇し、結果的に、魅戈に大きな隙を晒すことになった。

「それじゃ、詠うよ、みんな！」

憐れな双子。魔女に

囚われ、非道の王に売られて殺された。鞭に打たれて刃に穿たれ、顎に噛まれて爪痕を刻まれ、二目と見れない姿になって。 で
も死んだのは、お兄さんだけ ！」

数体のDMFBが、見えない何かに上から押し潰されて死んだ。

「鐘に打たれて魔法が解けた。醜い彼女はハシバミ打って、鳩に目ん玉打たせて魔法を呼んだ。呼ばれてきたのは王子様。でも、魔法使いじゃないから彼女は彼を食べちゃった！」

十体近いDMFBが寸分に刻まれて消えた。

「人間になりたいお魚さん。人に恋して陸に上がって、痛みに耐えて踊りに踊った。泡になって人を守って、でも嫉妬は隠さず、王子様を引きずりこんだ。怒った人は、お魚さんを人に変えて奴隷にしちゃった！」

十数体のDMFBが、お互いがお互いに各々の武器を向け、勝手に相討ちした。

その光景を背に、魅戈は跳んだ。

「じゃ、仕上げだよ」

まるで、舞いを仕上げる最後の詩を詠う踊り子のように、彼女は宙で優雅な舞踏を見せた。DMFBも、それに見惚れたわけではないだろうが、動きを止めて魅戈を見つめるばかりだった。

そして、魅戈は彼らの最期となる“詩”を紡ぐ。

「　　どんな物語も、勸善懲悪？　　　　　ダウト！人はみんな、
偽悪に憧れてる！だからみんな、君たちを殺してしまうの！いやだ
？いやだ！しにたくない？しにたくない！じゃあ
殺してしまおう、みんなを、みんなで！　　！！」

魅戈が着地した時、その場は再び踊り子だけが残る舞台に戻って
いた。

「　　はつかねずみがやってきた。はなしは、おしまい　　！」

第1章 誘惑の狂姫 #26

奈唯他の四方を囲むのは、紛れもなくファントムだった。

奈唯他の前方で両手の短剣を逆手に構えるのは、見た目軽めの鎧を着込んだ十代と思しき少女、の外見を持つファントム。

奈唯他の後方で長槍を従えるのは、戦国時代にも見られそうな兜鎧に身を包んだ壮年の男、の姿のファントム。

奈唯他の左で鉄扇を両手に持つのは、赤や黒、紫を基調とした派手な着物を着ている妖艶な雰囲気を持つ花魁、に似たファントム。

奈唯他の右で両刃剣の刃を地に突いて柄尻に両手を置くのは、西洋鎧で全身を隠した中世欧の騎士、のようなファントム。

「なんなのよ、それ……」

沙夢濡は枯れ枯れの声でそれだけを言うだけで精いっぱいだった。目の前に、戦闘の意志を見せないノエルを除いても、ファントムが4体。これで絶望するな、というほうが無理な話だった。

「あなたのそれよりはマシだろ？こいつら」

奈唯他の気楽に過ぎる問いかけに答える余裕すら失って、沙夢濡は4体のファントムを見て呆けていた。

「な……、なんで……?」

「んあ?」

「なんで、そんなものを創れるの!? あなたは!」

代わりに発した、叫びにも似た問いに、しかし奈唯他は対照的な落ち着いた様子で、

「簡単じゃないか。ファントムは人間の純性魔力と魔力の塊さえあればできるんだから。女王である私たちにとっては、簡単な仕事だろう?」

そう答えた。

しかし、その答えは沙夢濡の望んだ答えでは、当然なかった。

「そう、じゃない……。どうやって、そんな完全な人間の純性魔力を……!?!」

人間に限らず、生物は死んだ際に純性魔力を排出するが、それは短時間で拡散し、いずれ通常の魔力に混ざって純性魔力の性質を完全に失ってしまう。

奈唯他の創ったファントムは、いずれも現代の人間の純性魔力を源にしているとは思えない。ファントムの外見はある程度自由が効くとはいえ、基本的には生前の姿、特に人生の絶頂期の姿に依存することが多い。

つまり、奈唯他のついさっき創ったファントムは、普通なら創ることができないことになる。既に生まれていたファントムを予め潜伏させていたのなら話は別だが、ならば最初から出しておけばいいし、何より沙夢濡はそのDMFBが生まれたばかりかどうかという

のが一目でわかるようになっていく。女王故の能力である。そのため、彼らが生まれたばかりのファントムだということもわかっていくのだ。

だが、それでは矛盾が生じてしまう。こんなファントムは、存在するはずがないのだから。

「……なに言ってるの？」

しかし、

「だからさ、そんなの簡単だって、言ってるだろ？」

奈唯他は、沙夢濡には到底信じられない事実を、口にした。

「世界中に散らばった魔力の中から純性魔力だったものを集めれば、これくらい容易いもんじゃないか。なんなら、もう一体創ってみせようか？」

「な……、あ……」

沙夢濡には想像できない規模。沙夢濡には不可能であるが故に、理解できない。理解できないから、そこに生まれるのは、底知れない恐怖。沙夢濡はその時、隠しようもなく奈唯他を恐怖の対象として見ていた。

「あなたはできないはずだ。まだ女王になる資格を持っていないん

だから」

「し……、資格……？」

「ああ。……ま、あんたは知る必要もないし、あんたにはそんな資格、持ってほしくないからね、教えないけど」

「……っ」

沙夢濡は半分諦めていた。諦めていたが、だが、まだ信じたいものもあつたのは事実だ。それこそが奈唯他の自分に対する想いであり、自分の奈唯他に対する想いだつた。

それすらも今では揺らいでいるような状態だが、まだ決定的な段階までには達していなかつた。まだ、自分の中にはその想いが残っていたし、奈唯他の中にも残っていると信じていた。

そのおかげで、沙夢濡の中での奈唯他は、まだ単なる恋人だつた。あくまで同列だつた。それ以前に、その概念そのものを考える必要がなかつた。

それが、今はどうだろう。

同じ女王という立場であるのに、そのはずなのに、沙夢濡は奈唯他を遙か上の存在として見てしまっている。

まるでスズメバチの女王に抵抗できないミツバチの女王蜂のように。

まるで大国の女王に平伏す小国の女王のように。

存在の定義自体は今まで通り同列のままのはずなのに、二人の間には大きな落差が生じていた。

決して埋めようのない差だつた。生来から決められてしまったかのような覆しようのない力量差があつた。

「さて、そろそろ頃合いだし、やっちまいますかね、皆様方？」

奈唯他は、芝居がかった大仰な仕草で、四方を固める4体のファントムにそう言った。

促された4人は、言葉と同時に手の得物を構え、その身体からファントム特有の威圧感を伴う魔力を放出した。それを間近で受けた奈唯他は、しかし、動じる様子もなかった。

「準備はいいかい？騎士ども」

「はい。あの程度の雑兵なら、私にも十分」

「この身体には、まだ慣れませぬが、一つ、やってみるとしましよ
う」

「美しくないものばかりね。せめて死に様くらいは美しくしてあげないと」

「主の命に従わない騎士がどこにおりましょつか」

それぞれが答え、奈唯他は彼らに、再び命じる。

「殺すのは、あの雑魚どもだけでいい。お姫様はあたしに任せりゃ、それで万全。」

「行け」

「ッ！」

それを合図に、4人のファントムは一斉に奈唯他の傍らから消えた。

と、同時に響き渡るDMFBの断末魔。

悲鳴とも咆哮ともつかない雄叫びを上げながら戦うDMFBは、しかし、たった4人のファントムによって無差別かつ無慈悲に葬られていく。

「あとは、あたしたちだけだね。ジャンヌ」

阿鼻叫喚と言うも生温い光景を背に奈唯他は無表情だった。

「自分の子どもが殺されていく気分はどうだい？……………ま、いいもんじゃないだろうけど」

「そうね……………、最悪だわ」

沙夢濡は虚空を見つめたまま、諦念を隠そうともしない声色で答えた。人は本当に諦めると、表情すら消えてしまつらしいと、沙夢濡はその時初めて知った。その様子に、奈唯他は場に似合わぬ苦笑を浮かべ、さらに沙夢濡に歩み寄った。

奈唯他が目の前に立ち止った時、沙夢濡が口を開いた。

「それで、殺すの？私を……………」

「どうかね。そりゃ、あんた次第だ」

「ふふ……………、抵抗しなければ殺さないっ、て？」

「抵抗しなかったら殺すつても、変な話だしね。あたしは敵しか殺さないから」

「あなたの言葉は変に信用できるから困るわ……。もっと不誠実な言葉を聞きたいのに、ね……………」

目線自体は沙夢濡のほうが10cm以上も高く奈唯他のほうが見上げている格好だが、沙夢濡はそれを見下ろしてはいない。何かに耐えるようにして奈唯他に視線を決して合わせず、目に映るのは何も無い空ばかり。それでも沙夢濡は奈唯他との会話をやめはしなかった。

「ジャンヌ。一つ、訊きたいことがある」

「なに……………かしら？」

「奈都海とやったことについて、だ。大体、予想は付くがね」

「あなたの予想している通りのはずよ。彼の純性魔力が拡大概念の肥大化に必要らしいから」

「そうかい……………。つまり、あいつの精子そのものに関しては何も知らないんだね」

「ナツの、精子……………？」

疑問につられて思わず奈唯他を見る沙夢濡。その瞬間に沙夢濡はなぜか怯んだように後ずさったが、この場に至っては好奇心のほうに勝ったのか、再び視線を外すことはなかった。

「そう。生物の精子や卵には微量の生殖用に変質した純性魔力があるもんだけど、あいつの精子には通常の数十倍の純性魔力が含まれている。だから、あいつは一度の射精でかなりの消耗を強いられる。精子の純性魔力は常に交換され続けるもんでもあるしね。」

で、もちろん、精子を注がれた人間にもそれは影響する」

「……………？私に？」

「元から魔術師なら、さほどの影響もないけどね。あんたみたいに、素体そのものはただの人間な奴には肉体への影響が大きい。つまり、魔力に対する耐性が付いてしまっただよ」

「それなら……………、ファントムのおかげでもう付いているけれど？」

「そりゃ、一時的なものだ。セックスで受けた純性魔力はほとんど吸収されて、しかも定着しちゃうから、耐性は半永久的に残る」

「それで……………、どうなるの？」

魔術に関する知識に乏しい沙夢濡は、そう訊ねた。耐性が残るかどうなるのか、それが悪影響なのかそうでないのかの判別も、沙夢濡にはできない。

その問いに、奈唯他は即答せず、ややあつてから答えた。

「あの外道のせいで隠されてた本来の人格は、もう大丈夫だ。戻りかけてる。でも、あんたの記憶については、どうにもならない」

「……………」

「耐性が付いちまったせいで、記憶を消すことも、改変させることもできない。攫われてから今まで、何があつて、何をされたのかは知らないけど、あんたはそれを一生忘れることもできずに生きていくことになる。」
もちろん、禁断子云々の件が終わつた後も生きていられれば、の話だけどね」

突きつけられた現実。既に奈唯他に対して負けを認めたとはいえ、死のうというわけではない。その上での宣告である。

沙夢濡は覚えている。唯利亜が血だまりの中に倒れていく光景も、女王の人格を作るためにファントムから受けた所業も、ファントムの腕が子宮を犯すおぞましい感触も、DMFBを生みだす時の甘美な快感に満ちた異常な痛みも、奈都海を犯した時の絶頂に達した感覚も、唐突な奈唯他のキスも、すべて鮮明な記憶として、奈唯他の脳に焼き付いている。

それらをすべて、これからは抱えて生きていかなければならない。

考えただけで苦痛だった。

親しい者が血の海に伏すという光景は、悪夢以外の何物でもないトラウマとして残る。

ファントムの感触は、肉体の表面だけでなく、体内にまで残っていて、思い出す度に吐き気を催す。

快感とともに感じるあの痛みは、いつかまた、自ら欲してしまいそうで怖い。

同じ学校に通っていて、しかも同じく生徒会に所属する彼とは、これから一体どう接していけばいいのだろうか？

もう二度と会えないと思っていた奈唯他の存在は、日常に戻ることを許してはくれないだろう。

普通には、もう、戻れない。

「ファントムはもうやられちゃったみたいだし、あなたの負けは確
実だ。 あなたはどうになりたい？」

「どっつて……？」

「これを聞いて、もしかしたら死にたいとか思ったんじゃないかと
思ってたね。死にたいって言うなら、あたしがこの場で殺してやるけ
どっ。」

「……………」

奈唯他の提案を聞いて、沙夢濡は悩む素振りを見せた。といつて
も、無言で顔を俯かせただけだったが。

その後、顔を上げた時、沙夢濡はなぜか笑っていた。

「奈唯他、あなたの好きにして」

「……………？いいのかい？あたしに委ねても」

「勝者はあなたよ。敗者は勝者の言いなりになるのが常でしょう？」

「……………自分で決める度胸がないってか？」

「そうね……………。今の私は、自分の生死すら決められないほど弱い
かもね。ついさっきまで、あんな万能感に浸っていたのに……………ね」

「 わかったよ」

言って、奈唯他は沙夢濡にさらに近づいた。

奈唯他が立ち止った時、二人の距離はお互いの吐息がかりそうなほどに近かった。

「……なあに？最期のキスでもしてくれるの？」

「あたしは、そんなに甘くないよ。たとえ望んだってしてやるかっての」

「ふふつ、天邪鬼なところは変わってないのね」

「あんたも………、性格こそ変わってないけど、背だけは無駄に伸びたんだね。これじゃ、キスもしたくてもできないじゃないか」

「私がしゃがめば大丈夫でしょう？それぐらいならしてあげるけれど」

「だから、しないって言ってるだろ」

「まったく……、やな性格ね」

4人のファントムと100に近いDMFBが死闘を繰り広げる中、それぞれの主は戦場には決してそぐわない言葉を交わし合っていた。しかし、彼らはそれに不満を言うこともなく、ただ淡々と戦いを続けるだけ。それをいいことに、二人もまた、まるで普通の恋人が睦言を交わすかのような光景をそこで演じていた。

「最期のお願いななのよ？キスくらい、してくれてもいいじゃない。ダメなの？」

「あんたが死んでから、骨壺にでもしてやるよ」

「酷いこと考えるのね」

「それがあたしだよ。忘れたのかい？」

「いいえ……、あれだけ一緒にいると、忘れたくても忘れられないもの」

「……………」

「……………」

無言で見つめ合っていた二人だが、しばらくして、二人は同時に吹き出した。睦言以上に戦場では異常と言える、二人の快活な笑い声が、響いた。

ひとしきり笑いあって、その後、収まったのも同時だった。

「ふう……、こうやって笑い合うのも久しぶりだね。そんな場合じゃないってのもわかってんだけど、やっぱり、あんたと一緒にいると緊張感がなくなるよ」

「そう……、ね」

しかし、笑いの余韻を残す奈唯他とは対照的に、沙夢濡は表情を消し、生返事だけを返した。

一瞬、？マークを浮かべた奈唯他だったが、すぐに理由に得心がいったようで、その余韻を苦笑に変えた。

「……………あたしのこと、やっぱり恨んでんの？」

「あんな消え方をして、恨まないとも思ってるの？」

「でなきゃ、ここまでにはならないか……。恨まれるつもりはなかったんだけどね」

「……わかってるわ、それくらいのこと」

沙夢濡は何かを思い出すような顔で答えた。

「どうやってかは知らないけど、あなたは自分が死ぬかもしれないことを知っていた。それで、あなたは、私を振ったんでしょう？」

「ああ」

「言い訳とかしないのね」

「どこをどう言い訳すりゃいいのかわからないからね。間違っているわけでもないし」

「ただ、『悲しませなくなかった』って言えばいいだけじゃない」

「それで納得してくれんの？」

「………本当に不器用なのね、あなた」

奈唯他の質問には答えず、呆れたように言う沙夢濡だが、そこに気楽さはない。死を目前にした、緊張感とわずかな諦念が見えた。それを見て取った奈唯他も、真顔で沙夢濡を見つめていた。

「そろそろ、お願い」

奈唯他は無言で沙夢濡に頷いた。

沙夢濡にとっただけではなく、奈唯他にとっても沙夢濡は、他の人間とは違う、特別な立場にある人間だった。

具体的には、恋人。

基本的に日没後以外は外出ができなかった奈唯他は、当然の如く沙夢濡が最初の恋人だった。

家族と担当医以外では、ほとんど初めての理解者だった。

その存在を失うことを一度は覚悟したはずなのに、それをまた、覚悟しなければならぬ。

人は、一度手段を手に入れると、それを意識的無意識的に関わらず、使いたくなってしまうものである。それを、唯利亜が沙夢濡と出会ってから今までずっと耐えてきて、やっと会えた時には敵同士しかも、すぐに会えなくなってしまうことがわかっている。

名残惜しさは、当然残る。

もっと早く会っていれば、と後悔もする。

しかし、どうすることもできない。沙夢濡を救うためには、一つしか奈唯他にできることはなかった。

「じゃあ 本当にもう、いいのかい？」

「ええ」

「言い残すことは？」

「最期なんだからキスくらいほしいわね」

「……………つまり、ないってことだね」

会話の内容に反して、気楽さはなく、かといって悲劇のクライマックスのような悲壮感もなく。冷静に、ただひたすらに無感動に、二人は向かい合う。

もしかしたら、それはお互いに湧きあがる感情を無理やり抑え込んだ結果かもしれないが、その是非は、二人以外にはわからない。あるいは、二人自身にもそれはわからなかったのかもしれない。

「ありがとう……、奈唯他」

「ふん……、そりゃ、こっちのセリフだよ。あんたがいるから、あたしは寄生虫みたいに唯利亜にくっついてても、存在意義を見出せた。あたしと付き合ってくれてたことも含めて、感謝するのは、あたしのほうだ」

「ん……………、あなたらしいわ、そういうのも」

二人の間に流れるのは、恋人同士の甘い空気、ではなく、別れを前にした寂寥感、でもなく、昼とは真逆の夜の涼風だけだった。

沙夢濡は、数秒だけ目を瞑った後、ゆっくりと目を開け、静かにその口から最後の言葉を紡いだ。

「じゃ、お願い」

「ああ、じゃあ、またいつか、ここじゃないどこかで会おう」

奈唯他はそう言って、沙夢濡に手をかざした。

その手から発する小さな光が、沙夢濡が意識を失う前に見た最後の光景。何かに耐えて歪んだ奈唯他の表情を照らしていた。

手や足の指先などの身体の末端から霧に変じて徐々に消えていくファントムを、九能は無感動に見つめていた。

空には、星も月も、輝くものは何もない。光源は一切なく、あつてもここを照らすには弱すぎるか遠すぎるかで、どちらにしても、この暗闇をかき消すには至っていなかった。

その夜闇の中、二人は対峙する。

否、ただ、向かい合う。対峙すると言えるほどの戦う意志は、お互いに既に皆無だった。

勝者は、九能。ファントムは、九能の源血の特性たる「回帰」の影響を直接受け、今はただ、元の魔力に戻っていくのを待つばかりだった。

ファントムには、それに抗う術はなく、自らの身体が消えていく痛みとは全く異なる一種心地良いとも言える感覚に身を委ねていた。

「もう……、諦めたの？」

「……………」

見ればわかることをわざわざ訊いた九能にファントムは応じず、ただ底なしの闇で地上を見下ろす夜空を見上げていた。

「寂しいな、この空は」

つられて見るものもない空を見渡していた九能は、唐突なファントムの声に、視線を戻した。ただ、戻した理由としては、いきなりの声に反応して、というよりは似合わぬセンチメンタルな発言に驚いて、というほうが強かったが。

「あなたも、そんなことを言うのね」

「クク……、私とて、元は人間。おかしくはなからう？」

「恋心を抱くのも、ファントムとしておかしくないのね」

ファントムよりも唐突な九能の発した単語に、ファントムはわずかに目を見開いた。が、それもすぐに笑いに変わった。嗤いではなく、笑いだった。

「くく……、それすらもお見通しか。どんな魔術を使ったのだ？」

「そうね……、強いて言えば、“経験”って魔術ね。必ずしも確実な魔術ではないけれど」

冗談めかした九能の返答に、ファントムは笑みを変えずに再び問うた。

「くっくく……、いつ気付いた？」

「いつ、というほど明確な区切りはないけれど……、気付いたら気付いていた、という感じがしらね。ま、私を犯すなんて、ファントムではあなたが初めてだし、ね」

「それがわからぬように貴様は解放したのだがな。やはり殺さぬように手を抜いたのがまずかったか？」

「そーいうことには敏感なのよ、女は」

「……やはりわからぬな。“経験”か……、私には決して使えぬ魔術だな……」

「生前の記憶は、ないの？」

九能の、生前の経験は、という意図の問いに、ファントムはそれまでの笑みを消して、遙か昔の記憶に想いを馳せるかのような、寂しいような、しかし憤っているかのような表情で空を仰いだ。

「あるさ、あるとも。だが 生まれる前から決められていた運命を歩むだけの人生だった私に、こんな記憶は不要でしかない。この存在を望みながら、望んだ結果は得られなかった……」

「……あなた、まさか……」

ファントムの口ぶりに、九能は一つ、可能性に思い至った

運命が生まれる前から決められていた。つまり、ある伝統を代々受け継いできた家に生まれた、ということである。

そして、もう一つ。

「この存在を望んでいた」。これは、生前、既にファントムの存在を知っていた、ということになる。

「あなた、死ぬ前は魔術師だったの……？」

魔術師ならば、ファントムの存在を知っていてもおかしくはなく、また、魔術師の体質は高確率で遺伝するため魔術団に所属するものは特に魔術を家業にする者も多い。

しかし、魔術師の純性魔力を元にしたファントムなど聞いたこともない九能は、その問いも自信なげなものになっていた。
しかし、

「その通りだとも。貴様も名を知っているかもしれんな」

予想しないおまけ付きで、九能の予想は肯定された。

「あなたの、名は……？」

付け加えられていた不穏なおまけに、知っている魔術師の名前を思い出しながら九能は訊ねた。既に、どうして魔術師の純性魔力がファントムに、という疑問は思考領域の彼方に追いやられていた。

「ギー・オーギュスト」

「……………え？」

「私の名だ。ギー・オーギュストが、私の名だ」

訊き返して二度聞いたその名前を、九能は頭の中で反芻するよう

にして幾度も復唱した。

その結果、

「な……！」

驚愕とともに、その名を持つ者が魔術師の中でなんと呼ばれているのかを思い出した。

「処刑人ギー……！」

「処刑人」。それは、魔術師の中で、特に畏怖を持って語られる名の一つである。

処刑人とは、その名の通り、罪人を狩る者のことである。そして、魔術師、特に魔術団の中で罪人と呼ばれる者は、必然的に禁断子となる。つまり、「処刑人」とは、魔術団の中でも禁断子の処分を一手に担うFASCAに所属する、禁断子を狩る実働部隊のことなのである。

また、処刑人をつけて名前を呼ばれる者は、FASCAの中でも高い戦闘能力と多くの禁断子を屠った実績を持つ者のことを言う。その中でも「処刑人ギー」は、元帥を除いてFASCA最強とも呼ばれており、最高ランクの禁断子である特級禁断子を二桁も葬ったとさえ言われていた。

そう“言われていた”。だが、今は違う。らしい。

らしい、というのは、九能は魔術団の所属だが、ADEOIAとFASCAでは、管轄は全く別だからだ。しかも、FASCAでは、ある程度以上の力を持つようになると個人で任務を請け負ってそれを遂行する、という形になる。生きている姿かあるいは死体か、どちらかを見るまでは生死が確認できないのだ。そもそも、九能は彼

の人相を知らない。

それに加えて彼の名は魔術団に限らず有名であるため、このファントムの言っていることは、魔術師であるということは事実だとしても、ギー・オーギュストであるということは虚偽である可能性もないわけではない。とはいえ、調べればいずれわかるだろう嘘をつく必要性はどこにもないし、この死に際につく嘘にしては陳腐にすぎる。

九能は、結果的に、彼の言うことをあらかた信じることにした。しかし、

「あなたほどの魔術師が、どうして……！」

そう、F A S C Aの中で最強と呼ばれる魔術師が、そう簡単に殺られるはずがないのである。

F A S C Aは、主とする任務の性質上、戦闘能力の高い魔術師が、魔術団の他の部署に比べて圧倒的に多い。強すぎて禁断子に指定される魔術師も存在するため、それ以上、あるいは同等の実力を持つ魔術師がF A S C Aに所属している。

こう言うと矛盾しているが、九能という例外が存在するように、ギー・オーギュストだけでなくF A S C Aのトップに近い魔術師はほとんどが制約付きの自由を許されている者ばかりである。禁断子の制度を考えると、それを討つため（あるいは捕獲するため）とはいえ難しいことのように思えるが、これが実現された背景には、現在のF A S C Aの元帥の尽力があったため、と言われている。

それが本当に正しいことかどうかは九能にもわからないが、とにかくそういうこともあって、F A S C Aのトップエースが禁断子を追っていて命を落とした、という話は非常に珍しいのである。当然、中堅あたりの魔術師であれば、死亡報告など数えきれないほど頻繁に聞くことではある。

「私の力が及ばなかったというだけのこと……、とはいえ、予想外ではあったがな」

「それは……、そうでしょうけど」

「第二種の禁断子に殺られるとは、誰も予想はできまい？」

「……！」

禁断子には危険度の指標として第一種から第四種まで、さらに最上級の特級がある。特級と第一種は例外なく討伐、あるいは第一種だけなら捕獲もありうる。

しかし、第二種以下は、殺さなければならぬほどの危険度はなく、捕獲や連行、監禁である程度対応できると認定された者が指定されるものである。

つまり、戦闘能力自体はさほど高くないのがほとんど。高くても処刑人の号を持つ魔術師に勝る者がそもそも第二種などで収まるわけがない。

「まだ、魔術団ですら把握しきれていない力を持つ魔術師もいるということだ」

「……………でも、それは」

「くく……、気付いたか？ そうだ、“実は把握していた”ということともあり得るのだよ。それをなぜ私に知らせなかったのか、も貴様にはわかるはずだ」

「あなたを、消すため……？」

「その通り……くくく」

ギー・オーギュストは確かに特級禁断子に相当する力を持っている。しかし、制約を付けて操っている間はこれ以上ない戦力になる。それができていたから、今まで彼はFASCAでその力を振るっていた。

それができなくなったということは、つまり制約の意味が弱くなったのか、あるいは消えてしまったのか、それともそれ以外の何かか。どちらにしろ、何かしら魔術団にとって都合の悪いことが起こってしまったが故に、任務の内容を偽ってまでも彼を消したのだろう。九能は、そう推測づけた。もちろん、本当の理由などいかな九能といえど知る由はない。

しかし、それ以上に恐ろしいのは、ギーを殺せる实力を持つ魔術師が、少なくともそう遠くない場所にいる、ということである。フアントムは人の純性魔力が拡散する前に結合する必要があるため、その元になった人間の死に場所の近くに現れることが多い。九能はそれを鑑みて、大きな危惧を感じていた。

九能が発した疑問も、それ故だった。

「あなたを殺したのは、何者なの？」

「残念ながら知らんな。これから殺そうという者の名など、覚えてもどうしようもなかるう？」

その殺そうという相手に殺されてしまったのが彼なのだが、そんな些事で話の腰を折るほど九能は頭が悪くなく、代わりに出たのは別の問いだった。

「第二種なのに殺すの……？」

「殺せ、と言われたのだよ。ほど人間らしくはないがな」

どちらにしろ、名に興味を示す

そう言われてしまえば、これ以上何も聞けないと諦めざるを得ない。九能は黙るしかなかった。

「だが 絶望する必要もない。奴は、危害を加えなければ害はない。もちろん、貴様が手を出せば、軍規違反となるのだろうが、な」

「……………忠告には、感謝しておくわ」

「くく……………、そうかね。」

さて」

気付けば、ファントムの身体は既に半分近くが消えていた。腕は完全に消え、脚も腿の辺りしか残っていなかった。

「もうそろそろ、私は本当に死ねるのだな……………」

「まだあなたにはいくつか訊きたいことがあるんだけど」

「言えばよかるう？ 答えられるかどうかはわからんが、な」

ファントムの提案に、九能はわずかに悩むそぶりを見せた。が、すぐに「いいわ」と言ってそれを拒否した。

「どうせ、あなたが彼女を攫ってからのことは彼女が憶えているでしょうから。それ以外のことは、私が知ってもどうしようもないわ」

「そうか……………、では、次は私の質問をしたいのだが、構わんか

ね？」

「……ええ、どうぞ」

ファントムは、九能の承諾に、間も置かずにその問いを向けた。

「貴様はなぜ、魔術団に従っている？」

しかし、その問いは、九能が答えに窮して黙り込んでしまうには十分すぎた。

二人の立場はよく似ていた。

禁断子に指定されてもおかしくないほどの能力ちからを持ちながら、制約はあっても自由が許されている。もちろん期待されているのは、その持つている能力のみ。人格は問題にされない。だから、不要になれば廃棄も検討するし、都合が悪くなればすぐさま処分する。

武器は、用途があり、かつそれが自らの手中にある間は安全かつ強力なものだが、それらを失った途端、危険極まりない兵器になり変わる。

それが、この二人にも当てはまる。

ギーとて、好きで魔術団に従っているわけではなかった。

元々魔術団に所属していた彼は、その力を禁断子に値すると認定され、一度は監禁された。

そして、F A S C Aに入るために、というより入れるために封印魔術を施されたのが、その2年後だった。

それから死ぬまで、彼は魔術団のために働かされたのである。九能には知る由もないが、彼がそこから逃れられた時、つまり死んだ時、彼は死の喪失感以上に逃れることのできた安心感のほうが大きかった。

それらの感情も含めた、ギーの問いだった。

それに対する九能の答えは、数十秒の沈黙の後だった。

「それが、私の生きる手段だから、よ」

どんな意味にも取れるその答えに、ギーは訊いた張本人であるにも関わらず、何も言わなかった。むしろ、何も言う必要はない、と判断したのかもしれない。

だから、ギーが、頭部が消える直前に言い捨てた最期の言葉は、

「せいぜい、理由を与えぬよう、注意することだ」

「……………」

そんな、曖昧なものだった。

しかし、その言葉の意味は、九能もわかっていた。わかっていたから、九能はその顔を悲痛に歪めた。

その後、日の出とほぼ同時に、DMFBの最後の一匹が九能の巨斧によって両断され、この戦いはあっけなく幕を閉じた。

第1章 エピローグ 魔女、女王、狂姫は臣に泪を見せる

俺は、自宅の居間にいた。

といつても、いつもと同じようにそこに立っているわけではなく、なぜか居間全体を俯瞰しているかのような視界だった。

しかし、不思議と困惑はなかった。これが現実とは違うとわかっているからかもしれない。これが世に言う明晰夢か、と思う余裕すらあったのだから、なんとも夢のない話である。今、現在進行形で夢の中だが。

と、俺の眺める居間に、けだるそうな表情で頭をぼりぼりと掻きながら入ってきたのは、母親である亜美つぐみさんだった。

「うーい、起きたぞ〜……。奈唯他、飯作って〜……」

いつもの朝の亜美さんの姿だが、あの人にとっては今や禁句に近い人物の名前を含んでいるその発言は、不自然極まりないものだった。

奈唯他

俺と唯利亞の姉。

3年前に、何の因果か俺が声を失ったのと同じ日に、交通事故で死んでしまった、俺が唯一、家族の中で名前ではなく“姉貴”と呼ぶ人物。

生まれつき色素が少なく、成長するにつれてそれは顕著になっていった。髪はプラチナブロンド、肌は白色人種よりも白く、目は淡い赤で輝いていた。それが異常なことだと気付いたのは、俺が小学

校に入ってからだった。

髪の毛の白い子どもなど、その学校にはいなかった。いるのは、わずかに残る黒髪が白髪の中に混じっているような校長くらいのもだった。もちろん、他にも白髪のある教師は何人かいた。

肌が姉貴ほど白い人も、いなかった。目の赤い子どもなど、いるはずもない。俺の姉が、どれほど異常なのかを思い知らされた。

だから、嫌悪した。

姉が何かしらの病にかかっているのだらうということとは、小学校に上がったばかりの俺にもなんとなくわかったことだった。

だが、だからといって、嫌悪感が消えるわけではない。

姉が好き好んであんな病気を受け入れているわけではない、という発想に辿りつけるほど、俺は聡明ではなかった。仮に辿りつけたとして、だから好きになれるというほど、大人でもなかった。

姉を避け、姉の言うことを無視し、次第にそのころ使っていた二人称（俺の場合“姉ちゃん”だった）も、使わなくなっていった。

世の摂理（という大袈裟かもしれないが、当時の俺にとってはそれくらいあの人は異常に見えていた）に反する姉の存在が、嫌悪しなければならぬほどに、怖かった。

その考えを改めたのは

「もう作ってテーブルに置いてあるよ。冷めてるかもしれないから、嫌なら自分で温めて」

姉貴が居間でテレビを見ながら亜美さんに向かってそんなことを言った。見れば、家族で食事をする時に使うキッチンの目の前のテ

「ブルには、ご飯や味噌汁を始めとした典型的な和風の朝食が、一人分並んでいた。」

しかし、それを見た亜美さんは、その寝起きのはっきりしない顔を不満に歪めて、

「え……、パンのほうがよかったのに……」

そんな不満を漏らした。その声は決して大きくなく、おそらく、亜美さんにしては珍しく姉貴に気を遣って聞かせないようにしたのだろうが、姉貴はそれを耳聡く聞き取った。

「なら、自分で焼きなよ。それは下げるからさ」

「いや、いって！食べる、食べますから！」

非常に冷めた目でそんな冷たいことを言われた亜美さんは、慌てて弁解を始めた。そういえば、この人が唯一苦手になっているのが姉貴だったか。

だが、そんな情けない弁解もすぐに止んだ。視線が姉貴から外れて、その傍らに向いた。

「ん？奈唯他、それ……」

「それって……、実の息子に向かって“それ”はないだろ」

亜美さんの言う“それ”、亜美さんの指が指す先には、俺がいた。

姉貴の服の裾を思いつき握りしめている、俺が。

俺と姉貴の当時の関係を亜美さんは知っているはずだから、当然その光景は疑問の対象となる。確か、俺はその時10歳ちょうど。小4ということになる。小学校に入ってからそれまで、姉のことを避け続けていた俺が、その姉にぴったりとくっついていたのである。それを見て見過ごすほうがおかしい。

「なんだい、これ。珍しいこともあるもんだね」

「一応、この子も弟なんだけど……？」

「でもあんた………、いや、こんなにくっつくことなんかなかったろ？」

「まあ、そうだけどさ……」

亜美さんの問いに、姉貴は曖昧な答えを返す。

それを不審に思ったのが、亜美さんはさらに問いを重ねた。

「なんでナツはこんなことしてんの？」

「なんであたしに訊くのさ……。奈都海、かーさんが訊いてるよ。なんで？」

「……………」

俺（小4）は相変わらず姉貴の服を掴んだまま、そっぽを向いた。それを見た姉貴は、苦笑しつつも深く溜息をついた。

「やっぱダメか……」

「いつからのさ、これは」

「あたしが起きたらベッドに潜り込んでた。しかも手握ったまま寝てたし」

「おおぅ……、大胆だね……」

「全然離してくんないから着替えるのも大変だったよ、ほんとに」

辟易とした表情で、姉貴は未だにあさつての方向を向いている俺（小4）を見た。それに釣られてか、亜美さんもしゃがんで俺と視線の高さを合わせてから俺の頭を撫でた。

「なんか理由あるんだろ？おかーさんに教えてみ？」

「亜美さん、いって。無理に訊きだすようなことじゃないしさ」

「ええー。だって、いきなりあんたに懐きだすってのもおかしいじゃないさ。なんか理由あるって」

「だからいって言ってんでしょーが……」

理由を聞き出そうとする側とそれを止める側、普通立場は逆なんじゃないかろうか、と気付いたのは今さっき。だが、当時の俺はそんなことに考えは及ばず、亜美さんにしつこく問いただされた結果、姉貴にひつついている理由を漏らしてしまった。

「……………夢」

「ん？なに？」

「夢……………見た」

「夢？どんな？」

それまで亜美さんを止めようとしていた姉貴すらそう訊いてきた俺は、すぐには答えられず、少し間を置いてからその答えを口にした。

「……………姉ちゃんが……………その……………、いなくなる……………夢」

「……………」

それを聞いた途端、二人は沈黙した。

いなくなる、というのが死ぬという言葉の代わりに思いついた表現であることに気付いたのかもしれない。とはいえ、普通の家庭なら微笑ましい理由として笑い飛ばすこともできた。

しかし、姉貴は病人。しかも、治る見込みはない。いつその命を蝕むほどに進行するかもわからない。

冗談として済ませられるほど、軽い話ではなかった。

「なるほど、ね……………」

亜美さんが、いつもとは違う真剣な表情でそう小さく漏らした。

姉貴は無言。その姉貴に、俺（小4）はさっきよりもしっかりとしがみついていた。今にして思うと、当時の俺はかなり女々しかったらしい。

だが、姉貴はそんな俺を、軽くではあるが抱き寄せてくれた。

その時、

「うっし！写真撮るぞ！」

亜美さんが唐突にそんなことを言いだした。
当然、当時の俺と姉貴は呆気に取られた。

「……………一応訊いとくけど、なんで？」

「珍しいからに決まってんだろ？今のうちに撮っとかないと」

姉貴の呆れの混じった質問に答えてから、何かを言う間もなく亜美さんは「カメラ取ってくる」と言って、居間を出ていった。姉貴はそれを追うことはない。というか、追えるほどの体力はない。

だから、姉貴にくっついていて俺も含めて、数分後に亜美さんが戻ってくるまで、それを止める術はなかった。思い返せば、その時の俺は状況を把握していなかったような気もするが。

とにかく、戻ってきた亜美さんはやはりその手にカメラを持っていた。その時、姉貴が溜息をついた、かどうかは覚えていない。

「いや、参った参った。カメラしまったとこ忘れてたよ」

「そのまま忘れてりゃよかったのに……………」

「なんか言った？」

「なんでも……………。で、撮るんだろ？さっさとすれば？」

「おお。んじや、そこにいろよー」

「あーっ！おにーちゃんだけずるいー！」

「げ……、唯利亚……」

「おっしや、唯利亚も奈都海も離すなよ！撮るぞー！」

「あのねえ……あたしや、逃げたりしないよ……」

「なあ、姉ちゃん」

「ん……？なにさ」

「姉ちゃんさ……」

「なに……？」

「姉ちゃん……、俺のこと、好きか？」

「え……」

「よーし、撮るぞー！」

「とるぞーっ！」

俺は、前触れもなく目を覚ました。

半身を起して、枕元にある目覚まし時計（目覚ましとして使ったことはないが）を見ると、時間は午前3時。最期に時計を見た時から2時間しか経っていない。

同じベッドでは、横で九能が寝ている。俺が目を覚ましたことに気付いた様子もなく、聞こえるのは静かな寝息の音だけ。俺は寝顔や寝起きの姿を見ると興奮する性質らしいが、深夜まで起きていたのは、つまりは“そういうこと”をしていたからであって、今はそういう感情が湧きあがってくることもなかった。

そうになると、次に考えが及ぶのは、なぜ目が覚めてしまったのか、ということ。何か夢を見ていたような気もするが、どんな夢だったのかはいまいち判然としない。しかし、なぜか目が冴えてしまって、今すぐ寝ようという気分にもならなかった。

俺は脱ぎ捨てた（正確には九能に脱がされた）寝間着を着直して、部屋を出た。これといって目的はなかったが、そんなものは後付けでなんとかなるだろうと思って、居間に向かうべく階段を下りた。

居間に着いたのは、1分も経たない後。17年間住んだ家なのだから、暗闇でも迷うことはなかった。

着いてから数秒、することが見つからずには1つとしてしまったが、ふと喉の渇きを覚え、すぐにキッチンへ向かった。

冷蔵庫から麦茶を取りだしてガラスコップに注いだ。

気配を感じたのは、背後。

特に何も考えずに俺が振り向くと、そこには唯利亜が、壁に背を預け、手を組んで立っていた。

いや、そうじゃない。この人は唯利亜じゃない。

この人は

「や、元気そうだね、奈都海」

『……………あんたか』

俺が口だけでそう言うのと、唯利亜の姿をした“そいつ”は、くつくと含みのある笑いをした。

「実の姉に向かってあんた、か……………、ほんと、あんたは変わらないねえ」

あんたも俺に向かってあんたと言っているだろう、と言いかけて、やめた。無限ループは、問うまでもなく怖い。

だが、姉という発言で俺は確信した。この人は、姉である幣原奈唯他である、と。

「しっかし、もうちっと驚いてくれると思ってただけだね。もしかしてあたしのこと、知ってた？」

『会長と戦ったのはあんだだろうが。意識がなかったとも思ってたのか？』

「会長……………？……………ああ、ジャンヌのことね。あいつもそんな偉くな

ったのか。　　まあいいや、とにかくあんたがあの状態でも起きてたってのは驚きだね」

姉貴は、大袈裟な仕草で驚きを表した。大袈裟すぎて、わざとらしい。

俺は無言だった。この期に及んで、俺が姉貴に言いたいことなど何もない。だが、姉貴は饒舌なその舌を使って、さらに話を続けた。

「知ってるかい？あたしは回りくどいのが嫌いだ、ってさ」

『……………ああ』

「そりゃ、万全。なら早速、本題に入ろうか」

そうやって、姉貴は壁から背を離し、真面目な顔を作って俺を見た。俺はそれに身構えたが、すぐに意味がないことだと思いついて力を抜いた。

が、俺はそれを後悔した。

「　　奈都海、あの女と付き合うのはやめな。“あれ”は……………
…、いずれ、あんたを滅ぼすことになる」

時間は多少、前後する。

時は、沙夢濡と奈唯他の戦いが終わった直後。奈唯他に従う4人のファントムも、ちょうどDMFBを駆逐したところだった。

「御苦労だったね、みんな。感謝するよ」

劣う奈唯他の前に4人のファントムは跪き、頭を垂れる。当然、ファントムである彼らに勝利の愉悦に浸っているような様子はない。ただ、無感情に奈唯他の言葉に答えた。

「いえ、主の命に従うは従者の必然。この程度ならば、いつでも」

まだ幼さの残る少女の声が、謙遜した。

「その感謝のお言葉、有難く受け取りましょう。それこそが愚生にとって最大級の報奨であります」

壮年のしゃがれた声が、喜びを事務的に伝えた。

「あんな醜いものを残しておきたくはないものね。当然でありんす………なんてね」

聞くだけで酔ってしまいそうな妖艶な声が、照れ隠しにおどけた。

「……………騎士故に」

鎧越しのくぐもった声が、言葉少なに応じた。

「ふ……………面倒な奴らをファントムにしちまったね、あたしは。

ま、感謝してんのは本当だ。ありがとうね、4人とも」

4人の慇懃にすぎる返答に苦笑する奈唯他は、そう言って腕を振り、その軌跡に小さな輝きが追従した。

その瞬間、4人のファントムから同種の輝きが立ち上った。

奈唯他には比べる術はないが、それは、ギーが魔力に還元されていく時と同じ現象だった。

「じゃあね……………、どうかで会えたら、その時はまた、その粹な因果に感謝しよう」

沙夢濡との戦いの際には、ああ言ったが、実のところ、ファントムを創り出すのはそう容易いことではない。たとえ創れたとしても、さきほどの戦いの奈唯他ほど余裕のない状態では、脆弱なものしか創れない。単純な構成のDMFBならばまだしも、高い知能を持つファントムはその構成が、自律動作を行う使い魔を創り出す召喚術並みに難しい。ちなみに、その類の魔術の難易度は高等魔術に相当する。

それをほぼ一瞬で行うとなると、そう長期間持続させるのは不可能である。それ故、奈唯他は今まで彼らを持続させるだけで精いっぱいだったのだ。

当然、そんな危うい条件の上で存在を許されていた彼ら4人は、奈唯他が魔力の供給を断ち切れば、すぐさま消えてしまうことになる。

「さて、と」

(あ　っ！終わった！)

4人のファントムが完全に消え去った後、一息つこうとした奈唯他の頭の中に響いたのは、いきなり上がった唯利亜の声だった。頭にそのまま響くため、奈唯他は顔を顰めた。

「うるさいね。一体なんなのさ」

(だって、やっと終わったんだよ？ちゃんとジャンヌさんも助けられたしさ)

「まあ……ね。その辺りに関してはあたしも安堵してるよ」

奈唯他は、近くにある、かつて大木だったであろう切り株に目を向けた。正確には、その根を枕にして横たわる人物に、その視線は向いていた。

その人物こそ、つい先ほど奈唯他に敗北した、後朱雀沙夢濡。死んでは、いない。その証として、彼女の胸は呼吸の度に上下していた。

奈唯他は、あの時の沙夢濡はおそらく死を覚悟していたのだろうと考えていた。あの雰囲気と会話では、そう思うのも無理はない。しかし、奈唯他は、最初から沙夢濡を殺す気など、毛頭なかった。

奈唯他は、奈都海と沙夢濡が戦うということを知りながら、こうなることは予想していた。

そもそも、“識ること”のできる唯利亜は、一度ファントムと交戦してからその目的を把握していた。つまり、沙夢濡の子宮の拡大概念の肥大化によって、複数のファントムを創り出す、という目的である。

唯利亜がこのことを知らせなかったのは、それ以上に沙夢濡の優先度を引き上げたためだった。沙夢濡の存在が前提となる目的だとわかれば、沙夢濡の救出とそれに伴う戦闘に投入される戦力は多くなる。とはいっても、第一特殊遊隊の戦力では、せいぜい一人増

やすぐらいが限界だろうが、それでもその一人の差は大きい。特に、奈唯他の姿を見せるのが身内だけかそうでないかは、唯利亜がここにいるという事実を知られるかどうか以上に重要だ。

奈都海が対多数戦に適しているということは、特殊遊隊の中では誰もが知っていることである。もし一人だけを沙夢濡救出に向かわせるなら、奈都海が最適なのだ。

その結果、奈都海と沙夢濡は交わり、ファントムの目的は半ばまで達成し、代償として沙夢濡は失うべき記憶を残すことになった。

奈唯他は、そこまで予想した。そして、ある程度の誤算はあったものの、結果自体は予想通りになった。

しかし

「とはいっても、世の中はほんと、ままならないよねえ……………」

予想できたとはいえ、奈唯他は沙夢濡の記憶を消す術を持っていなかった。

使える魔術に制限のない魔術師ならば（もちろん技術的な制限はあるが）、あるいはなんとかできたかもしれない。

しかし、奈唯他は、そしてその意識を表出させる肉体の本来の持ち主である唯利亜は、疵術師だ。使う魔術に制限の生じる疵術師では、縦の限界はまだしも、横の限界は魔術師に比べてはるかに狭まる。奈唯他は女王としての能力と疵術師としての能力を組み合わせることで、真に救いになることはないと、彼女は身を持って知っている。奈唯他は、沙夢濡を助けることはできても、救うことはできないと、始めから諦めていた。

かといって、殺せるわけもなかった。単なる死が、真に救いになることはない、彼女は身を持って知っているから。

奈唯他は、沙夢濡を助けることはできても、救うことはできないと、始めから諦めていた。

奈都海が沙夢濡と接触する前に片を付けることも考えたが、居場所がわからない以上、沙夢濡とともにいる奈都海を追ったほうが確実だった。奈都海らは、索敵を専門とする深夜がいるため、居場所をすぐに突き止められると、奈唯他は思っていた。そういう意味では、事前にわざわざDMFBを誘導して殺させたことも含めて、奈唯他は深夜の能力を過大評価していたと言える。

ちなみに、唯利亞の使い魔はファントムとの戦闘終了時点で一匹として残っておらず、新たに作り直すにしても、結局は時間がかかって同じ結果になるため、最初から選択肢から外していた。

(ごめんね、姉さん。ボク、全然役に立たなかったね……)

「いいさ。あんたはあんたの仕事をした。あたしはあんたにできない仕事をしたただけだよ。できないことを、しろ、なんて言いたくないしね」

唯利亞の謝罪を軽く笑った奈唯他は、横になっている沙夢濡の傍らに腰を下ろし、「ほう」と疲れた溜息を吐いた。

座ったまま数分、くつろぐ奈唯他に、唯利亞が話しかけた。

(姉さん)

「ん?」

(後ろ)

「知ってるよ」

言葉とは裏腹に、奈唯他は背後を振り向こうとすらしなかった。それでもわかったのは、“それ”が発する、隠し切れていない、も

しくは隠す気のない強烈な殺気のせいだった。

“それ”とはつまり、ファントムとの戦いを終えた西園寺九能。彼女は、歩いて奈唯他の前に回り込んで、正面に立った。

「……………」

「……………」

片や、臨戦態勢で殺気を撒き散らす九能。片や、その殺気をもととせずに、何事か思索に耽る奈唯他。対照的な二人は沈黙を続けたが、それを破ったのは、やはり九能だった。

「何をしているの？」

「案外、我慢強いんだね」

「…………ツ、質問に答えなさい」

思いがけず凶星を突かれた九能は、ほんの一瞬取り乱したものの、すぐに持ち直して、今度はいくらか語調も強く訊き直したが、それもあっさり回避された。

「あんだこそ何してんのさ。まだ残党は残ってるだろ？」

「……………質問を変えるわ。あなたは誰？」

「幣原奈唯他」

九能の質問に即答した奈唯他は、唐突に、沙夢濡と並ぶような格好で寝転がった。

九能は、奈都海と唯利亚をADEOIAに入れる際、彼らの過去については調べてある。その中に、幣原奈唯他という名前は出てきていた。

曰く、彼らの姉。

曰く、3年前に交通事故で亡くなった。

曰く、先天性色素欠乏症であった。

主要な情報を大まかに纏めると、こんなものである。しかし、九能の期待した情報　つまり、疵術師かどうか、という情報は何一つ得られなかった。ADEOIAどころか、魔術団のどこを探しても、幣原奈唯他という名前はなかった。

それ故、彼女は、九能が密かに興味を抱いていた人物の一人なのであった。

その人物が、今、目の前にいる。

しかし、やっと真実がわかる、という好奇心よりも、得体の知れないものに会ってしまった時の嫌悪や恐怖のほうが、先に立った。

だが、だから何だということもない。九能は、すべきことを既に決めていた。

「そう。では、残念だけれど　あなたを殺すわ」

既に死んでいるはずの人間を殺すと宣言するのも、不思議な気分だったが、この状況で奈唯他を見逃すわけにはいかなかった。

沙夢濡と交戦し、それを鎮圧したのが、状況から見て奈唯他であることは確実。つまり、沙夢濡に従うDMFBを殲滅するほどの能力があるということである。

それを野放しにできるほど、九能は楽天主ではなかった。

たとえ、その相手が恋人の姉であっても。

そもそも、死んだはずの人間がいるという異常な状況を作り上げているのに、見逃すはずがなかった。九能自身が蘇生を実現させられる故に、なおさらその危険性は自覚していた。

それに

ちら、と九能が視線を向けたのは、血だまりの中に倒れる一人の人物。彼をあの状態に陥らせたのも、十中八九この女だろうと推測していた。

しかし、

「へー……、あんたに殺せんのかい？あたしを」

意識のない沙夢濡の髪を一房弄びながら、九能を見ようとせせずに奈唯他は答えた。

とはいえ、九能もその程度で腹を立てるほど子どもではない。

「なら逆に訊くけれど、私に勝てると思っっているの？」

「かの“巨斧の魔女”に勝てるとはさすがに思ってないさ。ただ、あんたに、あたしを殺せるとも思えないがね」

「ずいぶん自信があるのね」

「この肉体、唯利亞のもんだからね。あたしは人格だけなんだよ」

「……は？」

九能は素っ頓狂な声を上げ、やっとこちらを見た奈唯他の目を、知らず見つめていた。

その九能を、なぜか呆れたようなジト目で見返す奈唯他の身体は、九能が、それが唯利亞のものだと理解するには違いすぎた。

髪は背の中ほどまで伸び、色は抜けて白金に。肌は白く、目は赤い。胸は膨らんでおり、唯利亞とは似ても似つかない身体であることは確かだ。

しかし、顔は確かに唯利亞の面影を残していた。やや釣り目であることを除けば、それは確かに唯利亞の顔だった。九能は調べた際に顔写真を見ているが、ここまで唯利亞に似てはいなかった。どちらかといえば、奈都海に似ている顔のつくりだったのだ。

よくよく見れば、身長も記録以上に小さく、唯利亞に似通っている。

「つつーわけだ。あんたは唯利亞を殺すのは本意じゃないだろ？重要な戦力でもあるしさ」

九能が理解したのを見計らってか、奈唯他は起き上がりながら言った。

「ま、今は戦うために、人格の他にも色々出ちまつてるけどね。唯利亞はちゃんと中にいるから安心しな」

「……ということは、唯利亞が表に出てくれば、身体も元に戻るのね？」

当然肯定の返事が聞けるものだと思っただけで発した九能の問いに、しかし奈唯他はすぐには答えなかった。

答えは、数秒後。しかも、それは肯定とは程遠かった。

「完全に元には戻らないだろうね。結構長時間この状態でいたから、肉体が錯覚しちまつてる。それに、今の状態が半ば定着してるから、胸やら性器ならまだしも、髪とか肌とか、あとは………：……：目か。そういうもんの色はこのままかもね」

「それは……、つまり……」

「あたしの白皮症がそのまま継承されるってことになるね。紫外線に弱くなるし、視力もかなり悪くなる」

平然と言い放った奈唯他に、九能は怒りを露わにして詰め寄った。

「あなた……！」

「おっと。これは唯利亚も承知済みだよ。もちろん、後遺症についても、ね」

「……ッ、唯利亚を、出しなさい」

諭された九能は、負け惜しみ気味にそんなことを言った。

すると、奈唯他は目を閉じ、

「魔女さんが出てこい、だとさ。どうする？」

「……何をしているの？」

「唯利亚と話してんだよ。半端ない集中力があるんだから邪魔しないでくれるかい？」

「……………」

なぜか怒られた九能は、奈唯他の言う通り、二人（？）の会話が終わるまで待つことにした。俗に言う多重人格者は確か人格同士の会話ができないのではなかっただろうかと九能は思ったが、そもそも彼女は別人の人格である。規格外にすぎることなど考えるだけ無駄だ、と九能は思考を打ち切った。

しばらくして、奈唯他が目を開けた。

「出てもいいとき。あたしも、あまり長くは出しておきたくないしね。そろそろ引っ込むことにするよ」

「そう……」

「くつくく、まだ話し足りないって顔だね。でも安心しなよ。あたしはいつでも唯利亜の中にいる。呼んでくれりゃ、いつでも出てこられるぞ」

「……………唯利亜に負担がかかるんでしょう？」

「今回はこの子と戦うためにここまで表出させたのさ。人格だけを表に出すこともできるし、その時の唯利亜への影響はほとんどない。便利だろ？」

「ええ、そうね。だから、さっさと消えなさい」

「くつくくく、清々しいくらいな殺気だね。こわいこわい」

大袈裟な挙措でおどけてみせた奈唯他は、また寝転がった。対して九能は、手にしていた巨斧を消し、血に塗れて倒れる奈都海に歩み寄っていった。奈唯他に対する殺気は、未だに消えていないが。

「あらら、あたしにはもう興味なし、か。ま、いいさ。あたしはまだしばらく唯利亜の中で眠っておく。それまでは、そうだね、奈都海と沙夢濡を、よろしく頼むよ」

九能の殺気に対し、そんなことを返した奈唯他は、その言葉を最後に唯利亜の中に消えた。

「性格の悪い女ね」

一方的な依頼を押し付けて去った人間に、届かない愚痴を言い放ったのは、九能にとってせめてもの抵抗だった。

「奈都海、あの女と付き合うのはやめな。“あれ”は……
…、いずれ、あんたを滅ぼすことになる」

俺は、何も言えなかった。

姉貴の言っていることが理解できなかったからだ。

俺が付き合っているのは、九能しかいない。それは、わかる。

だが、逆に言えば、それしかわからない。

九能が俺を滅ぼす、とはどういうことなのか？言葉通りの意味なのか、あるいは何かの比喻なのか………

「今のあなたにはわからないだろうね。いや、わからなくていい。わかる時にわからないと、わからない時にわかってても意味はないからね」

『……何を言っているんだ、あんたは？』

「だから言ってるだろ？今はわからなくていい」

いよいよもってわからなくなった。

なんとなく腹が立つ。わからない、ということに対してもそうだが、意図せずに姉貴の言う通りになっているということに、無性に腹が立つのだ。

子どもっぽいと自覚してはいても、姉貴の前だと、なぜか理性よりも感情が先行してしまう。

(チツ……)

心の中で舌打ちして落ち着こうとしても、あまり効果はなかった。だから、俺は一刻も早くここを離れたくなった。正確には、姉貴から距離を置きたかった。

『そろそろ、戻ってもいいか?』

「ん?……ああ、構わないよ。あたしもそろそろ眠くなってきたしね」

だが、こんな風にあっさりと解放してくれると思っていなかったのは、事実。俺はそう聞いてすぐに、コップの中の麦茶を飲み干すために、姉貴に背を向けた。

そこに、姉貴は声をかけた。

「最後に、奈都海」

俺は、振り返らなかった。理由は……、俺にもわからない。

「あたしは、あんたのこと、好きだよ?」

だが、今度こそ、俺は振り返らなかつた自分を褒めてやりたくなつた。

今、俺の浮かべている表情が、自分にも理解できたから。

「ん……、奈都海？」

部屋に戻ると、ベッドの中からそんな声が聞こえてきた。

当然、それは九能の声で、その九能はまだ眠いらしく、半眼状態の目を俺に向けていた。焦点は合っていなかつたが。

「……どうしたの？」

『喉が渴いたんだ』

「ん、そう……」

俺が布団に入ると、半分夢の中なのか、目を閉じたままの九能がすり寄ってきた。猫か、お前は。

『九能、暑苦しいんだが』

「ん……」

抗議してみても、相手が目を閉じていてはそれも届かない。それどころか、

「……………ね、奈都海」

『ん？』

「……………しない？」

『俺を殺す気か』

さつきしたばかりだろう、と言おうともしたが、九能は目を閉じて俺の肩に額をくっつけていた。言っても意味がない。

というか、九能は先ほどの発言の後、すぐに寝てしまっていた。

しかし、これはやはりしょうがない。先日のファントムとの戦いの後、DMFBの殲滅戦の指揮を執り、終わった後も、その事後処理を中心に立って行った。

特殊遊隊の隊長で、かつ中国地方支部の副部長、そして准将という階級を持つ立場では、それも当然かもしれないが、それらに加えて、今日　0時を回っているから正確には昨日か　の朝まで日本を離れていたのだ。

目的は、会長　つまり後朱雀沙夢濡の、禁断子に関わる事項の処理について。向かったのは、アメリカ・フィラデルフィアだ。

ファントムの味方をし、しかもDMFBを従えていたという事実は、禁断子に値する所業である。それを行った会長は、禁断子第二種に指定され、FASCAへの出頭を命じられたのである。

そして、九能もそれに同行した、というわけである。

細かいことはわからない。禁断子という単語自体、最近知ったことであるし、第二種という区分の危険性が高いのかどうかということも判断ができない（辛うじて、低くはないということだけはわかるが）。

しかし、九能と会長が、道中、そして到着後、何をして、何をさ

れたのかは知らないが、会長が無事であるということは九能から聞いたため、その点に関しては安堵した。無事である、というだけでなく、これからも今まで通りの生活を許されたというのも、その安堵を補強してくれる話だった。
しかし

(いったい、どうすればいいのか………………。誰か教えてくれる奴はいないのかね…………)

会長と“あんなこと”をした記憶は、消えずに残っている。会長も、恐らく覚えている。

お互いに学校に通うようになった時、一体どんな態度で接すればいいのか、俺にはわからない。

九能には既に話し、解決したことなので心配はない(解決に至った経緯については訊かないでほしい)。

だが、まともに会話をしたのは戦場が最後で、ADEOIAの中国地方支部で何度か顔を合わせたことはあるが会話は一度とすることをなかった。

(……………はあ)

俺は、天井に向かって溜息をついた後、少しずつまどろみに沈んでいった。

私は、門の前で立ち尽くした。

一週間も家に帰らず、あの戦いが終わってから消息自体は伝えておいたけれど、それで安心させられるとは思っていない。

後になっても、後悔も怨恨も許さないあの出来事は、私にとってなんだったのだろうか、と思い始めていた。

色々なことがあった。

思い出したくないことも、今になってみれば思い出して嬉しくなるようなことも、あった。

その結果、私は魔術師の中での犯罪者となり、フィラデルフィアに行くことになってしまった。そこから帰ってきたのが、今さつき。傍らには旅行鞆。とはいっても、観光する時間なんて一秒たりとも与えられず、すぐに日本に帰れと言われてしまった。

一応、自由は保障されたけれど、それも監視が前提になったもの。あつちでは護衛という遠まわしな表現を使われたけれど、それをそのまま受け止めるわけではないし、多分言った本人もそうは思っていないだろう。

そんなことがあって、やっと帰ってこられた。

でも、なぜか気が引けてしまう。

自分の家のはずなのに、なぜか躊躇ってしまった。門に設けられたインターフォンに、手が伸びなかった。

相変わらずの意気地のなさに、我ながら嫌気がさす。学校ではなぜか、私は有能だという認識が広がっているようだけど、それは単に私が臆病だからだ。

あらゆる可能性に対して、出来得る限りの方策を講じる。そうした結果、私は失敗しなくなって、それが有能という評価に繋がったのだろう。

今まではそれでよかったけれど、複数の可能性への対策を講じている間、私は前に進むことができなくなる。対策を講じることができていない状態で問題に当たった時も、私はそれに立ち向かうことができない。

実際、私は何も持っていない状態では、自分の家にすら入れなくなっている。こんな私が、本当に有能と言えるのだろうか？

有能と言うべきは、それこそ直面する事態がどの方向に転がっても、それに臨機応変に対応できる能力を持つ人なのではないだろうか。そんなものは一朝一夕で身につくものではないけれど。

「はあ……」

深呼吸のつもりで吸った息は、憂鬱な溜息となって吐き出された。何に躊躇しているのか。何を怖がっているのか、何を拒絶しているのか、私にもわからないまま時間が経った。どれくらいかは、私にもわからない。もしかしたらたった数分かもしれないし、あるいは数十分も経っていたのかもしれない。

私は、立ち尽くしていた。

それを救い出してくれたのは、やはりこの人だった。

「お嬢様……？」

「っ……」

突然、横からかけられた声に、私は身体を固くした。

見たい、でも、見たくなかった。

理由のわからない意味のない葛藤。そう思うと、迷いを捨てるのは簡単だった。

「蜜華……さん……」

「お嬢様、おかえ」

私は、意識することなく、専属のお手伝いさんである千恵蜜華さんの胸に飛び込んでいた。蜜華さんの手にはビニール袋が提げられていたけれど、私はそれに頓着することもなく、蜜華さんが何かを言おうとしていたことにも構わずに、ただ、やっとの思いで母親を見つけた小さな迷子のように、抱きついていた。

「蜜華、さん……、ごめん、なさい……」

私は、湧きあがる嗚咽をこらえながら、謝った。でも、それは堪えようとして堪え切れていない嗚咽に阻まれて、多分、言葉になっていなかった。

それでも私は、ごめんなさい、を何度も繰り返した。
何度も何度も、謝った。

まるで謝罪の方法をそれだけしか知らない子どものように。
何度も。何度も。

「お嬢様」

それを遮ったのは、紛れもない蜜華さんだった。

「お嬢様、それよりもまず、始めに言うことがございますでしょう？」

私は、蜜華さんから離れて、涙を拭いて、改めて蜜華さんの顔を見つめた。

その顔には、優しい微笑みが湛えられていた。妹を見る姉の、娘を見守る母親のような、笑みだった。

私は、そんな優しすぎる蜜華さんに、おそらく笑顔になっていない笑顔を返して、本来言うべきその言葉を、言った。

「　　ただいま、蜜華さん」

溢れてくる涙は、拭かなかった。拭きたくなかった。

第1章 エピローグ 魔女、女王、狂姫は臣に泪を見せる（後書き）

最後に急ぎ足、かつ中途半端な終わり方……

私の技術では、これが限界でした。

第1章をここまで引っ張っておいて、結局終わりはこんなもの。とにかく、第1章はこれで終了です。

次からは第2章………とりたいところですが、その前に日常パートをほんの少しだけ。

今までこの作品を読んでくださった方々に、最上の感謝を送りたいと思います。これからも、Silent Lyricをよろしく願います。

次からは、もっとテンポよく進みます。

………たぶん

サブタイトル通り、登場人物紹介です。魔術に関する話は一切なく、学園パートに出てくるキャラクターばかりです。魔術パートに出てくるキャラは後でまた。

キャラが増えてきて、自分の中でもいったん整理しなかったので書きました。自己満足な部分も多分にあります。

キャラのプロフィールには、以下の項目があります。

名前 なまえ /

年齢 (2029年時点での数え年) 身長 体重

血液型

誕生日

一人称

その他特徴、説明など

以下、注意です。読むのが面倒な方はネタバレに注意しつつ本文へ飛んでってください。

ここには存在自体がネタバレになりかねないキャラクターも書かれています。閲覧には注意が必要です。ここを読む方には、いったん本編にざっと目を通されることをお勧めします。

登場回数に限られることが予想されるキャラについては、空欄の部分もあります。また、特定の部分がネタばれになる場合も、その該当部分は空白にしてあります。

未登場のキャラ（主に生徒会）も、名前だけを記載しています。登場し次第、書いていきますのでご安心ください。彼らに関して何かご要望（性格など）がありましたら、感想にでも。

最後の項目、「その他特徴、説明」には、ネタばれ防止のため小限の情報しか載せていません。物足りないと感じる方は、是非本編へ。ただし、本編では書く機会がないであろう裏設定を書くこともあります。また、本編が進むにつれて人物、および説明の内容は増える可能性があります。

章間Noisy Lyric以降の登場人物も随時増えていくので、上記諸々含めて、閲覧は自己責任で。

注意はこれで以上です。長々と申し訳ありませんでした。

4月30日 御几川涼右、水橋彼方、坂宮梓、鈴平慶司の4人を追加

鳳霊学園

幣原奈都海 (しではらなつみ)

17歳 身長：174cm 体重：64kg

血液型：A

誕生日：2012年6月14日

一人称：俺

主人公。鳳霊学園2-Bの生徒で、生徒会・会計委員の委員長。

幣原家の長男で、幣原唯利亜の兄。

ある時から声を出すことができなくなり、現在は読唇術の使える恋人や家族に通訳してもらったり、筆談で他人と会話を行う。

あまり動かない表情と喋ることができないということから、冷静沈着とか泰然自若とかいう評価をよく受けるが、実際はそんなことは決していない。

弟と恋人のせいで、自覚はないが学内では名前か顔のどちらかは何かと知られている。

西園寺九能 (さいおんじくのう)

68歳 身長：164cm 体重：51kg

血液型：AB

誕生日：1961年1月2日

一人称：私

第二主人公。鳳霊学園2・Bの生徒。演劇部の部長も務める。1歳までは普通に成長していたが、ある理由から、12歳からは成長がほぼ十分の一のスピードになってしまっている。

読唇術を使うことができ、恋人である奈都海の通訳を行うこともある。

才色兼備として学内では有名。しかし、演劇部では脚本を担当し、舞台に立つことはない。

出自の異常性故、学校に通ったことがなく、最近になってようやく学校に通い始めたという事実がある。

幣原唯利亚（しではらゆりあ）

16歳 身長：153cm 体重：41kg

血液型：A

誕生日：2013年8月31日

一人称：ボク

第三主人公。鳳霊学園の1・Dの生徒だが、生徒会第三副会長でもある。また、幣原奈都海の弟でもちろん男のだが、女子用制服の着用が学校から認められており、学生名簿にも女子として記載されている。周囲からも男としての扱いはほとんどされない。それほどに外見は男からかけ離れている。

鳳霊の生徒を対象にしたファンクラブが存在し、学園の生徒の約1割が所属している。しかし、その存在を知らない、あるいは入る方法を知らないという者も多く、潜在的なファンはそれ以上。

ある事件で女性恐怖症になった。今はほとんど改善されたが、完全に治ったわけではない。

神田愛燕（かんだえの）

16歳 身長：147cm 体重：38kg

血液型：O

誕生日：2013年11月9日

一人称：あたし（たまに自分の名前を一人称に使うことも）

唯利亜の親友。唯利亜と同じく、1-Dの生徒。特に委員に所属しているわけでもなく、部活動にも参加していない。

唯利亜のファンクラブの創設者で、会則によってファンの暴走を抑えようとした。創設した時点で唯利亜の異常なアイドル気質は看破していたが、結果的には唯利亜を守るには不十分で、唯利亜は女性恐怖症になってしまった。それ以来、会則を強化し、彼女自身、今では唯利亜の傍を離れようとしない。

浄美未来小（きよみあすか）

16歳 身長：161cm 体重：50kg

血液型：B

誕生日：2013年1月7日

一人称：私

鳳霊学園2-Eの生徒。射的部に所属しているが、部活動にはあまり出られていない。

彼女の実家には九能が居候しており、戸籍上では未来小が九能の後見人になっている。が、実際の立場では上下が逆で、九能のことを「お姉ちゃん」と呼ぶ。

3種類ある鳳霊の女子制服をすべて揃えており、それらの上下を

入れ替えて着ることもある。

大原深夜（おおはらねよ）

16歳 身長：156cm

体重：48kg

血液型：A

誕生日：2013年8月13日

一人称：私

鳳霊学園の一年。奈都海や九能、未来小の友人で、彼らは共通の秘密を持っている。

奈都海曰く、平均を形にしたような女性、らしいが、実のところ運動神経は悪く、学業においてもムラのある成績で、すべてが平均とは言い難い。

しかし、特徴という特徴がないのは事実で、クラスでもあまり目立つほうではない。

南坂宇類（みなみざかうるい）

17歳 身長：181cm

体重：68kg

血液型：B

誕生日：2012年4月12日

一人称：俺 オレ

奈都海の友人。彼曰く、悪友とも。クラスも同じで2・B。中等部ではハンドボールをしていたが、高等部になってからは部活を何もしなくなった。

海老原真実とはよく行動をともし、彼を弟のように可愛がって

いる（学年は同じだが）。

実はある大企業のトップの息子。宇類は次男だが、兄は面倒くさがって逃げたため、彼はいわゆる御曹司という立場にある。

鈴平鳴姫（すずひらなるひめ）

16歳 身長：162cm 体重：47kg

血液型：A

誕生日：2013年5月5日

一人称：私

唯利亜のクラスメイト。外見自体は大和撫子然とした美人だが、一度口を開けば、猛毒を含んだきつい言葉しか出てこない。少なくとも他人に対しては。

授業はサボるのにテストの成績だけはいいという、教師にとって性質の悪い生徒で、当然、教師からの印象は最悪に近い。

父親が法に触れかねないグレーな会社の頭をやっており、その父親や周囲の社員に甘やかされて育ったせいか、金銭感覚や倫理観が非常に危ないことになっている。

海老原真実（えびはらまこと）

16歳 身長：157cm 体重：47kg

血液型：A

誕生日：2013年2月26日

一人称：僕

奈都海のクラスメイトで友人。宇類とは親友で、むしろ宇類を慕

ついていると言ってもいいほどに仲がいい。男としては少々小柄で童顔でもあるため、周囲の女子から可愛がられてはいるものの、本人は若干コンプレックスに感じている。

所属している部活は九能と同じ演劇部。

槻野那束 (つきのなづか)

17歳 身長：173cm

体重：52kg

血液型：A

誕生日：2012年8月13日

一人称：私

奈都海らのクラスメイト。弓道部で、先輩らの引退後、部長になることが決まっている。

基本的にシヨートヘアで、長身、かつ中性的な顔立ちをしているので、男に間違われることが多い。本人はそれについては気にしていないが、そのせいで同性から告白されることに関しては常に辟易としている。

綾羅木みちか (あやらぎ)

17歳 身長： 体重：

血液型：O

誕生日：

一人称：私

九能と同じ演劇部に所属し、副部長を務める。演劇部において九能をよくサポートしているが、それ以外の接点はあまりない。

生徒会役員

後朱雀沙夢濡 (ごすざくじゃんぬ)

18歳 身長：158cm 体重：49kg

血液型：AB

誕生日：2011年10月3日

一人称：私

鳳霊学園の3-Aの生徒で、生徒会長。才学非凡、容姿端麗、生徒の支持は強く、教師の期待も大きい、絵に描いたような理想の生徒会長。

生徒自治の保障という、裏を返せばすべての責任を生徒が負うことにもなる鳳霊学園において、生徒会長着任から今まで、理想的とも言える学校運営を行ってきた。

実家は、平安期に天皇家から分化した貴族の末裔という、本物のお嬢様でもある。

後朱雀竜樹 (ごすざくりゅうき)

18歳 身長：176cm 体重：62kg

血液型：A

誕生日：2011年6月23日

一人称：俺

鳳霊学園の生徒会第一副会長。クラスは3-C。周囲から常に完璧を求められ、それに応えてきた沙夢濡を、影から支える名脇役。

生真面目でやや融通の効かない部分もあるが、細かいところにも気を利かせることのできる世話上手な面も。沙夢濡とは従姉であるということもあってか、公私に渡って彼女に助言することが多い。

御几川涼右（みきがわりようゆう）

17歳 身長：173cm 体重：62kg

血液型：A

誕生日：2012年2月21日

一人称：俺

鳳霊学園生徒会の第二副会長。クラスは3-D。割と常識人で、よく彼方などに対する突っ込み役を任される。奈都海や由宇也などの世話役のような立場でもあり、同性ということもあってか二人には頼りにされている。

学力は平凡。現在は受験勉強の真っただ中である。

幣原唯利亞（しではらゆりあ）

16歳 身長： 体重：

血液型：

誕生日：

一人称：

第三副会長

各項目に関しては上記参照

片桐亜美（かたぎりあみ）

18歳 身長：160cm 体重：47kg

血液型：B

誕生日：2011年9月11日

一人称：私

生徒会の第一書記で、クラスは沙夢濡と同じ3-A。鳳霊学園における書記というのは生徒会長の雑務の手伝いが主な仕事なのだが、彼女は前代にも生徒会にいたということもあって、その経験を生徒会の後輩に教えるという立場にある。少なくとも、沙夢濡はそれを期待して書記に彼女を指名した。

快活な性格と生来の人懐っこさが周囲に好印象を与え、生徒会でもムードメーカーの一人。奈都海にそれとなく想いを伝えてはいるものの、それが本当の気持ちかどうかは不明。

水橋彼方（みずばしかなた）

18歳 身長：159cm 体重：55kg

血液型：AB

誕生日：2011年11月13日

一人称：私

鳳霊学園生徒会の第二書記で、クラスは涼右と同じく3-D。さばさばした性格で、物事をあまり深く考えない。髪も丁寧に手入れしているとは言い難く、制服さえも男子生徒が目のやり場に困る程度に着崩している。もちろん、彼女自身に自覚はない。

男女に交友関係が広いのだが、彼女は同性愛者で女性しか恋愛対

象として見る事ができない。美少女揃いの生徒会ではいつも苦惱している。

棗新 (なつめあらた)

18歳 身長：178cm 体重：68kg

血液型：O

誕生日：2011年7月3日

一人称：俺

鳳霊学園3 - Bの生徒で、生徒会の運動部統率委員会委員長。生徒会では部活との両立ができないため今は部活動を行っていないが、生徒会に入るまではテニス部で活躍していた。2年の夏に足を負傷したことで、テニス部を辞め、生徒会に入ることになる。

生徒会での書類処理など、地味な作業の連続に向いているとは言い難いが、実際に部活動を行っていた経験がある彼の立場は貴重なもので、生徒会と運動部の橋渡し役として学園に貢献している。

小野原礼華 (おのはられいか)

17歳 身長：154cm 体重：42kg

血液型：B

誕生日：2012年3月8日

一人称：私

鳳霊学園の文化部統率委員会委員長で、新と同じ3 - Bのクラス。彼女も生徒会に入る前は美術部の一員だったが、「絵ならいつでも描ける」と、躊躇なく辞めて生徒会に入った。

普段から大抵のことには動じず、決断力もあってリーダーには向いており、文化部を上手くまとめている。だが、唯一、新の行動に關しては過剰なくらいの反応を見せる。

山科由宇也（やましなゆうや）

17歳 身長：172cm 体重：58kg

血液型：A

誕生日：2012年5月30日

一人称：俺

生徒会の外交委員会委員長。当代生徒会の創立当時からいる唯一の2年で、後から入った奈都海にとつても唯一残された救いの綱。昨年度は、当時の外交委員長直々に副委員長に任命され、今年度になってそのまま昇格した。傍から見ると、これといった特徴はないが欠点もないという、平凡に見えて非凡な人物。

幣原奈都海（しではらなつみ）

17歳 身長： 体重：

血液型：

誕生日：

一人称：

会計委員会委員長

各項目に關しては上記参照

坂倉志希 (さかくらしき)

18歳 身長： 体重：

血液型：

誕生日：

一人称：

中等部統率委員会委員長

稲葉直継 (いなばなおつぐ)

18歳 身長： 体重：

血液型：

誕生日：

一人称：

高等部統率委員会委員長

常盤柄鈴音 (ときわづかすずのね)

18歳 身長：157cm 体重：52kg

血液型：AB

誕生日：2011年7月14日

一人称：私

3-Cの生徒で、治安委員会委員長でもある。いわゆる風紀委員をまとめる彼女の外見は見るからに弱弱しいお嬢様のようだが、実

際はあらゆる武道を段まで収めており、素人が正面から刃向って勝てる相手ではない。彼女が本気で相手をしなければいけないほど素行の悪い生徒は鳳霊にはいないが、稀に来る外部からのお客様をもてなすことはある。

普段は名前の如く鈴の音のような声で話し、楚々とした挙措で振る舞うお嬢様である。

鳳霊学園・教員

坂宮梓（さかみやあずさ）

44歳 身長：156cm

体重：47kg

血液型：O

誕生日：1985年8月4日

一人称：私

鳳霊学園の理事長。普段から生徒との隔たりをあまり作らず接するため、生徒の中には彼女が理事長であると知らないものもいる。容姿がいいことも相俟って、一般教師以上に生徒との距離が近かったりする。

さまざまな分野に交友関係を持ち、それは政界、経済界から裏社会にまで及ぶ。

真聖蝶学園（総合嬢子育学院）

謝花謙仁（しゃばなけんじ）

18歳 身長： 体重：

血液型：

誕生日：

一人称：俺

三万人の生徒を抱える真聖蝶学園の生徒会長。とはいっても、真聖蝶の生徒会は各委員会の橋渡しが主な役目であり、鳳霊のような生徒会集権制度にはなっていない。彼も一委員会の委員長にすぎない。

もちろん、一人物としては優秀で、沙夢濡も認める一人である。

逢海稜介（おうみりょうか）

17歳

身長：

体重：

血液型：

誕生日：

一人称：俺

真聖蝶の生徒。真聖蝶に入る前は鳳霊の中等部に通っており、奈都海と付き合いがあった。しかし、現在、奈都海は稜介には、できれば会いたくないと望んでいる。理由はいずれ……

その他

幣原亜美（しではらつぐみ）

42歳

身長：160cm

体重：53kg

血液型：AB

誕生日：1987年10月27日

一人称：私

幣原奈都海、唯利亞の母親。今は故人だが、長女の奈唯他もいた。職業は小説家で、時たま近所の出版者に赴いたり、自室にこもって執筆作業を行ったりしている。が、奈都海も唯利亞も、彼女がどんなジャンルの小説を書いているかは知らず、ペンネームすら把握していないため、調べようもなく、今に至っても何を書いているのかは本人しかわからない。

家事炊事能力はあるのだが、それを発揮することは少なく、現在ではほとんどを唯利亞と九能に任せている。

幣原奈唯他（しではらなゆた）

16歳（享年） 身長： 体重：

血液型：

誕生日：

一人称：

故人。幣原家の長女で、奈都海、唯利亞の姉。生前、重い病にかかっていたが、死因は交通事故とされている。

幣原奈都（しではらなおと）

42歳 身長： 体重：

血液型：

誕生日：

一人称：

幣原家の家主で、亜美の夫、かつ奈唯他、奈都海、唯利亞の父親。

現在は海外へ単身赴任中。彼の仕事についても、子どもたちは把握しきれていない。

千恵蜜華（ちえみつか）

25歳 身長：159cm

体重：52kg

血液型：B

誕生日：2004年11月5日

一人称：私わたくし

後朱雀家で家事手伝いをする、いわゆるメイド。現在は沙夢濡の専属として働いている。後朱雀家の台所を預かる身でもあり、その腕は高級料亭にも劣らない。そもそも、彼女はある料亭の板前の娘だった。

わずかではあるものの人生の先輩として、沙夢濡の相談に乗ることも多い。

マリア・希早・アルベール（・きさ・）

19歳 身長：160cm 体重：50cm

血液型：O

誕生日：2010年5月19日

一人称：私

後朱雀家の家事手伝いをする、いわゆるメイド。今は、居候する竜樹の世話を主に行う。まだ一年目であること以上に生来のドジっ子気質のせいで失敗が多い。

それでも、周囲のフォローと経験のおかげで、最近なんとかまと

もになってきたようだ。

鈴平慶司（すずひらけいじ）

47歳 身長：171cm

体重：68kg

血液型：A

誕生日：1982年3月16日

一人称：わたし

鈴平鳴姫の父親。鈴平組のトップでもあり、その勢力は中国地方一帯に及ぶ。いわゆる暴力団の組長であり、娘も少なからずその影響を受けている。

親としてはいささか子煩悩で、娘のためにならないものはすべて排除しようとする。稀に年甲斐もなく暴走して関係のない周囲に被害をもたらすことも。

南坂虹丞（みなみざかこうすけ）

24歳 身長：178cm

体重：65kg

血液型：AB

誕生日：2005年11月27日

一人称：俺

南坂宇類の兄。中学卒業とともに親に黙って上京し、17で芸能界入り、19で映画の主役を任されて以来、若手俳優としての地位を確立してきた。音楽活動もしているようだが、それはあくまで副業で、本人もあまり力を入れていない。

中学卒業後、家を出たことで勘当されたような状態で、親どころ

か弟とすらほとんど連絡を取ることがない。

藤堂力ナタという芸名は、そこそこテレビを見ている日本人なら、一度は聞いたことがあるだろう、と言われるほど。

サブタイトル通り、登場人物紹介です。前回に続いて魔術サイドの登場人物についての紹介です。日常編以上にネタばれ感の強い内容になっていますので、ご注意ください。

というか、まだ出ていないキャラについてまで書かれています。が、物語の根幹に影響があるかと言われるばそうでもない内容しか書かれていないので「こんな人もいるんだな」くらいの気持ちで見ただけければ。

キャラのプロフィールには、以下の項目があります。

名前 なまえ /
年齢 身長 体重
血液型
誕生日
一人称
その他特徴、説明など

以下、注意です。読むのが面倒な方はネタばれに注意しつつ本文へ飛んでってください。

ここには存在自体がネタばれになりかねないキャラクターも書かれているため、閲覧には注意が必要です。ここを読む方には、いっ

たん本編にざつと目を通されることをお勧めします。

登場回数に限られることが予想されるキャラについては、空欄の部分もあります。また、特定の部分がネタばれになる場合も、その該当部分は空白にしてあります。

未登場のキャラも、記載しています。書いていないキャラについても登場し次第、書いていきますのでご安心ください。彼らに関して何かご要望（性格など）がありましたら、感想にでも。

最後の項目、「その他特徴、説明」には、ネタばれ防止のため最小限の情報しか載せていません。物足りないと感じる方は、是非本編へ。また、本編が進むにつれて人物、および説明の内容は増える可能性があります。

注意はこれで以上です。長々と申し訳ありませんでした。

10/24 梓弓音射、憂月夜暁、烏羽玉夢月、3名追加。一部、
修正

1・テンブル魔術団・ADEOIA（疵術師公式国際魔術協会）

1-1・ADEOIA日本中国地方支部

八剣兼平（やつるぎかねひら）

57歳 身長：185cm 体重：82kg

血液型：O

誕生日：1972年3月7日

一人称：わたし

ADEOIA中国地方支部の支部長。ADEOIA内での階級は中将。慢性的な人材不足に悩まされる中国地方支部を長年に渡って統率し、2027年のDMFB大量発生、通称“Purgatory Week”の際も指揮した。

しかし彼自身は10年前に右半身を丸ごと失う重傷を負い、今は身体の半分を魔導機械で補っているため、戦うことはできない。

彼の指揮能力は魔術団全体でも指折りで、わざわざ魔導機械を作つてまで延命させたのはそれが大きな要因となっている。

源血の特性は“刻むこと”だが、それを知る者はもはやほとんど残っていない。

西園寺九能（さいおんじくのう）

67歳 身長：164cm 体重：51kg

血液型：A B

誕生日：1961年1月2日

一人称：私

ADEOIA中国地方支部の副支部長で、准将。第一特殊遊撃小隊の隊長でもある。“Purgatory Week”を乗り切ったものの戦力を大幅に減らした中国地方支部に派遣された。

外見は10代後半だが、それは源血の“戻ること”という特性によるもの。時間という普遍の事象には完全には逆らうことができないため、成長・老化が遅れるという現象になって現れている。

身体能力が異常に高く、鉄の塊にも等しい巨斧を片手で振り回し、源血による自己治癒能力はあらゆる傷を瞬く間に塞いでしまう。その戦闘スタイルから、魔術団の中では「巨斧の魔女」の名で有名である。本来は「巨斧の魔鬼」だったが、それを聞いた本人が怒り狂ったために「魔女」となった。

源破顕現が禁断子に値するとされ、その回数に制限が設けられている。その制限を破った時、どうなるかは本人にも知らされていない。

雪川瀬井（ゆきかわせい）

38歳

身長：176cm

体重：70kg

血液型：A B

誕生日：1991年5月28日

一人称：私

ADEOIA中国地方支部の斥候大隊の隊長。階級は中佐。“Purgatory Week”には参戦していたが、中国地方支部に正式に所属したのはそれが終結した後。生涯のほとんどを九能の部下として暮らし、彼女の能力と人柄に絶大な信頼を寄せている。

彼自身も、高い指揮能力と戦闘以外での部下へのケアを欠かさない。

いことから、部下からの信頼は厚い。

源血の特性は“奪うこと”。彼はそれを索敵・斥候に使うだけでなく、戦闘での武器にも使う。

咲とはなんらかの因縁がある模様。

伊神未永栖（いがみみえす）

21歳 身長：158cm 体重：48kg

血液型：B

誕生日：2008年9月16日

一人称：私

ADEOIA中国地方支部第一特殊遊撃小隊に所属する。階級は少佐。特殊遊撃の中で九能に次いで階級が高く、九能の補佐を行うことも多い。

“使うこと”という特性の源血を持ち、あらゆる武器・兵器を使いこなす。ただ、近接戦闘は好まず、主に銃火器などを使用する。目の前にありさえすればどんなものでもすぐに使いこなせるが、人や動物はどうやっても使いこなせないと常に愚痴をこぼす。

既婚者。

小鳥遊尊何（たかなしそんか）

27歳 身長：177cm 体重：62kg

血液型：A

誕生日：2002年10月27日

一人称：僕

ADEOIA中国地方支部第一特殊遊撃小隊に所属し、階級は大尉。“Purgatory Week”を戦い抜いた実力者。

彼の主力となる魔術は、一定時間以上焦点を合わせたものをすべ
て砕くというもの。味方にとつても非常に危険であるため、九能に
部隊へ誘われるまで単独任務しか与えられなかった。普段は魔力を
透過させない特殊なコンタクトレンズを着けている。

常に笑顔を崩さず、どんな立場の人間にも自然体で接するため、
しばしばトラブルを引き起こすことも。

彼の源血の特性は、九能でさえ知らないという。

三井魅戈（みついまか）

19歳 身長：154cm 体重：45kg

血液型：B

誕生日：2010年

一人称：私/魅戈

ADEOIA中国地方支部第一特殊遊撃小隊所属。大尉の階級を
持っている。尊何とともに“Purgatory Week”に参
戦し、生き残った疵術師。

彼女の能力も敵味方関係なく影響を与えるタイプのものであつた
ため、九能と出会うまでは任務は一人でこなすものだった。具体的
には、詠うことによつて敵を狂わせるといったもの。味方にそれを聞
かせて阿鼻叫喚の光景を創り出したこともあり、多くから危険視さ
れ、一部から憎悪されている。

19歳とは思えない幼い外見と精神年齢を持つ。

尊何の源血の特性を知っていると推測されるが、自らのものも含
めて、それを明かそうとはしない。

浅木久宮（あさぎひさみや）

19歳 身長：176m 体重：64kg

血液型：O

誕生日：2010年10月22日

一人称：俺

ADEOIA中国地方支部第一特殊遊撃小隊に所属している。中尉。九能のスカウトを受けて九州の小支部から中国地方支部に移った。

源血の特性は“放つこと”。炎や冷気を身に纏い、接近戦を主体として戦う。また、魔力を推進剤として槍を飛ばすという戦法を取ることもある。

本来は源血の影響で非常に積極的な性格をしており、現在は未来小の源血によって和らげられた状態である。そのため、二人は本能的には行動をともにする。

浄美未来小（きよみあすか）

16歳 身長：161cm 体重：50kg

血液型：B

誕生日：2013年1月7日

一人称：私

ADEOIA中国地方支部第一特殊遊撃小隊所属で、久宮と同じ中尉。“Purgatory Week”の経験者。

九能によって久宮と出会うまでは、“待つこと”という源血の特性によって積極性皆無の性格となっていたが、彼の近くにいることで徐々に人並みの積極性を持つようになった。

九能ほどではないものの、身体能力が非常に高く、主に二挺の拳銃を両手に持って戦う。もちろん、それらは魔術によって加工が施されており、時に対戦車砲すらはじくDMFBの身体を易々と吹き飛ばす。

久宮と未来小のコンビは中国地方支部でも評判。二人が相思相愛であることはもはや公認の事実だが、本人たちには“戦友”以上の関係に進む気はないようだ。

大原深夜（おおはらねよ）

16歳 身長：156cm

体重：48kg

血液型：A

誕生日：2013年8月13日

一人称：私

ADEOIA中国地方支部第一特殊遊撃小隊に所属しているが、階級はない。九能の誘いによって、派遣されていた台湾の支部から帰国した。

源血の特性は“読むこと”。魔力の構成、指向性などのあらゆる情報を、まるで紙に書かれた文字の如く読むことのできる能力を持つ。離れていても使えるため、彼女の能力は索敵に大きな力を発揮する。しかし、彼女自身は攻撃手段をほとんど持つておらず身体能力も人並み以下、防御手段に至っては皆無で、後方支援以外の役割を担うことはほとんどない。

居川咲（いがわさき）

14歳 身長：155cm

体重：45kg

血液型：B

誕生日：2015年1月17日

一人称：私

ADEOIA中国地方支部第一特殊遊撃小隊に所属し、深夜と同様階級を持っていない。九能の誘いを受けて関東支部から移籍した。

8歳の時に、6体のDMFBを討伐するという快挙で初陣を飾るが、そのことよって魔術団から危険視され、関東支部では監視つきの生活を送っていた。

“断つこと”という特性の源血を持つ。空間から物体・物質、情報まで断ち切ることのできる能力で、その応用による万能性は九能でさえ舌を巻くほど。戦闘はもちろん、建造物の修復や傷の治療など、様々な場面で咲の能力は重宝される。

尊何とともに暮らしている。

幣原奈都海（しではらなつみ）

17歳

身長：174cm

体重：64kg

血液型：A

誕生日：2012年6月14日

一人称：俺

ADEOIA中国地方支部第一特殊遊撃小隊に所属。階級に相当するものはない。半年前に九能に出会い、そのまま特殊遊撃に。

源血は“異なること”で、その影響で「差」に敏感になっている。得意としているのは「異なること」を許さない」という魔術。複数の敵には無類の強さを誇る魔術だが、相手の数が少なくなるほどその威力は相対的に落ち、単体では使うことすらできない、扱いの難しい魔術でもある。

喉応術性神経が脳を中枢とし、声帯には繋がっていないのが疵術師の特徴だが、奈都海は例外で、声帯を喉応術性神経が通っている。そのため、喋ると意図せずとも魔力が排出される。それを防ぐために奈都海の肉体は自動的に喋るといふ行為を戦闘時以外は封印してしまっている。これは魅戈にも当てはまる特徴だが、彼女は長年の修練によって魔力を出さずに喋ることを可能にした。

幣原唯利亞（しではらゆりあ）

16歳 身長：153cm 体重：41kg

血液型：A

誕生日：2013年8月31日

一人称：ボク

ADEOIA中国地方支部第一特殊遊撃小隊の所属で、兄同様階級がない。また同じく、半年前に九能によって特殊遊撃に入ることとなった。

源血に“識ること”という特性を持ち、見たものならば、その構成要素をすべて把握できるという能力を持つ。人間ならば、考えていることすらある程度は見通せる。とはいえ、その程度も操作でき、見た人すべての心が必ず読めてしまうというわけではない。

また、“識ること”によって、自然物にどう魔力を作用させれば操れるかということまでわかるため、小動物の使役や石を槍のように変形させて戦うこともできる。

上杉天代（うえすぎあまよ）

11歳 身長：148cm 体重：42kg

血液型：A

誕生日：2018年8月19日

一人称：僕

ADEOIA中国地方支部第一特殊遊撃小隊に所属しており、伍長の階級があるが部隊に入る際に便宜的に与えられたもので、実質的な伍長としての権限はない。

彼は、自分自身が疵術師であると知ってまだ2ヶ月しか経っておらず、初級魔術すら、未だに学んでいる最中である。源血によるも

なのであろう。飛翔能力は魔術師の中でも非常に珍しいものだが、それ以外がほとんど未熟なため、源血の特性はまだ不明。

部隊の中では、その能力を使って機動力に乏しい深夜や魅戈の足として、また物資の運搬などを行っている。

セツティミア・エックハルト (Settimia Eckhart)

15歳

身長：156cm

体重：43kg

血液型：B

誕生日：2014年7月7日

一人称：私

ADEOIAイタリア・ヴェネト支部から中国地方支部に派遣されている疵術師。普段はDMFB監視施設の管制官をしているが、本業はDMFBを構成する魔力の解析。

源血の特性が“残すこと”で、五感に作用する刺激を自分のいた場に“残すこと”ができる。彼女はこれを使いこなすことで対人戦に大きな役割を果たすことができる。地元では魔術犯罪者の拘束に大いに貢献したが、魔術師による犯罪が少ない日本では出番もなかなか来ない。

愛称は「ミリア」

1-2・ADEOIAニューヨーク本部

マリアンヌ・ジェーランクルト (Mrieanne Geranclt)

37歳 身長： 体重：

血液型：

誕生日：1992年12月14日

一人称：（日本語では）わし

ADEOIAの最高権力者、元帥。

九能とは昔、師弟関係にあり、今でも親交は続いている。

疵術師としての実力は高く、また上に立つ者としての素質も、彼女を知る者は皆、認めている。

1 - 3 . ADEOIA吾妻山小支部

梓弓音射 （あずさゆみねう）

29歳 身長：155cm 体重：48kg

血液型：A

誕生日：2000年3月19日

一人称：あたし

ADEOIA吾妻山小支部の小支部長。階級は上級大尉で、辺境の小支部長の階級としては高いと言える。

かつての実力は高いらしいが、今は同じ小支部の部下が戦闘のほとんどを任されている。彼女の主な仕事は、事務や小支部のカモフラージュとして経営しているペンションの経営。戦闘要員としての絶頂期は、10代の頃に終わっている。終わらせた原因は、本人も語ろうとしない。

基本的にはおっとりとした性格で、気配り上手。美人であるということもあって、一部の登山客に評判だという。

憂月夜暁（ゆうづくよあかつき）

22歳

身長：171cm

体重：57kg

血液型：A

誕生日：2007年10月10日

一人称：僕

ADEOIA吾妻山小支部に所属する疵術師。階級は少尉。

源血の特性は“隠すこと”。自分だけではなく、武器も隠すことができ、悟られることなく接敵し、攻撃を加えるという戦法を得意とする。普段から匕首やクナイなどの暗器を大量に隠し持っており、さながら暗殺者である。

性格は少々弱気だが、自分の正義を貫き通すという芯の強さもあつる。その正義のために、DMFBの討伐と言うADEOIAの最大の使命すら放棄したことがある。

烏羽玉夢月（うばたまむつき）

21歳

身長：176cm

体重：64kg

血液型：O

誕生日：2008年11月3日

一人称：俺

ADEOIA吾妻山小支部所属の疵術師。階級は暁と同じく少尉。暁とほぼ同じ時期に親に捨てられ、同じ疵術師に拾われた。二人の名前は、その疵術師がつけた名前であり、二人は恩人につけられたその名前を何よりも大事にしている。

戦闘スタイルは暁とは違って、大規模かつ豪快。夢月が敵の気を引いて、暁が不意打ちする、というコンビネーションで戦うことが多い。

根は真面目だが、それを他人に悟られることを嫌って、わざと偽悪的な振る舞いをすることが多い。

2・テンプル魔術団

2-1・賽の目（魔術団最高機関）

2-2・枢密院

マリアンヌ・ジエーランクルト

37歳 身長： 体重：

血液型：

誕生日：

一人称：

ADEOIA元帥。称号はAquadrius（宝瓶）。

ソフィンエル・インフィナレターナル（Sofinel・Infinaletternal）

28歳 身長： 体重：

血液型：

誕生日：2001年

一人称：

テンプル魔術団本部防衛軍指揮。称号はScorpio（天蠍）

フランチェスカ・ベルリオーズ (Francesca・Berlioz)
66歳 身長： 体重：
血液型：
誕生日：1963年
一人称：
北アメリカ統括。称号はCapricornus (磨羯)

2 - 3 . F A S C A (禁断子討伐軍)

ギー・オーギュスト (Gui・Auguste)
32歳 身長：188cm 体重：79kg
血液型：
誕生日：1997年

一人称：私

F A S C Aの中でも上位の力を持つ者に付けられる処刑人の号を持つ。

ある禁断子を追って日本に来たが……………

3 . 霞翹家

日本最大の魔術師一族。日本の魔術界におけるいわゆる政府で、日本と魔術団との隔離を行っている。本家のほかに九つの分家があり、それぞれの地域を統括している。

霞翹家は関東を統括する。

3 - 1 . 一華翼

九州・沖縄。分家の中では最も古い。

3 - 2 . 二渦羽根

北陸

3 - 3 . 三架翹

北海道道北及び道東

3 - 4 . 四迦羽

東北。当主は50歳にして子どもがおらず、跡取りの問題が深刻。

3 - 5 . 五歌翼

四国。近畿の一部も任される。

3 - 6 . 六苛羽

北海道道央及び道南

3 - 7 . 七禍翹

北陸以外の中部

3 - 8 . 八嘉羽

中国地方を統括。遺伝による体質のせいで、攻撃的な魔術を得意としない。

八嘉翹一寡（やかばねいちか）

30歳 身長：171cm 体重：64kg

血液型：B

誕生日：1999年4月16日

一人称：私

霞翹家の八つ目の分家である八嘉翹家の当主。基本的には穏やかな性格で争いを好まず、その反面、相対した相手の敵意や殺意には敏感。二児の父でもあり、広大な自宅の庭で家族で団欒することも。霞翹の分家の中では比較的A D E O I Aに協力的で、両者のパイプ役としての役割を担うことが多い。

性格と同様、得意とする魔術も攻撃的なものが少ない。得意な魔術は主に治療、強化、防御といった、他者を補助するものが多い。

3 - 9 . 九戈羽根

近畿。分家の中では最も影響力が強い。

4 . その他

橘竜児（たちばなりこ）

14歳(享年)

身長：

体重：

血液型：

誕生日：

一人称：

1972年、ベトナム戦争の最中に大量発生したDMFBを討つための最終兵器として当時のADUIAが戦線に投入することを計画していた少女。彼女自身に戦闘能力はないが、その身の内に大量の魔力を保有する。だが、ADUIAの思惑とは裏腹に、彼女はそのDMFBの女王となり、疵術師たちと敵対した。

記録によれば、彼女はその時に後の「巨斧の魔女」西園寺奈緒によって殺されている。

如月九能 (きさらぎのう)

歳

身長：

体重：

血液型：

誕生日：

一人称：

1972年のベトナムで発生したDMFB大量発生現象を解決するため、竜児らとともにベトナムへ向かったADUIAの疵術師。西園寺奈緒とともに竜児の護衛を任され、彼女らの兄のような存在となっていた。

竜児がDMFBの女王となった時もその元凶であるフロントムに一人で立ち向かい、壮絶な一騎討ちを繰り広げた。しかし、それ以降、彼に関する記録は全く残っていない。

現在の九能の名は、彼の名前を継いだもの。

約一カ月ぶりの投稿、申し訳ありません

いろいろやる事が多くてですね、はい。具体的には……………ゲ
ームとか)おい

とにかく、第2章までのつながりである日常編ですのでほのぼのと
進んでいきます。作者もほのぼのしますので、気長にお待ちくださ
い。

『ほんに御苦労じゃったの、九能。……………いや、お主だけではない、その支部全体の功績じゃの』

モニターの中のマリアンヌ・ジエーランクルトが、部下である西園寺九能を労った。

場所は、ADEOIA日本中国地方支部の総合通信室。といっても、実際に使われることは少ない。ADEOIA総本部からの命令であっても、あるいは他の支部、小支部からの通信であっても、基本的にはメインフロアに駐在するオペレーター同士で事足りるからだ。

使われるのは、機密性の高い情報をやり取りする時か、高官同士の会話ぐらいのもの。そのため、アディアの一般社員はもちろん、ADEOIAの兵士であっても一部を除いて無暗に入ることは許されていない。というか、入る用事自体が存在しない。

「功績……………ね。実を言うと、勝った気が全然しないんだけど」

准将故に自由に通信室に入ること許されており、かつこの部屋を使う必要のある九能は、苦笑い気味にそんなことを言った。

しかしマリアンヌは、難しい顔になって、肘について手の上に自身の頭を乗せた。マリアンヌが何かを考える時の癖である。

『幣原奈唯他……………弟の中に人格を隠す女、か。そんなことができる人間も、魔術も、わしは見たことがない』

「当たり前よ。知ってたらむしろ異常だわ」

「じゃろうの……、はあ、どうしたもんか……」

マリアン又は、ADEOIAの元帥、つまり、トップ。その肩にかかる荷は非常に大きく、彼女は、一組織を束ねているだけではなく、魔術団の重要機関である枢密院の一員でもある。そんな重要なポストに居座り続けるのは、やはり相当なストレスになるのだろう。と、九能は他人事のように（実際その通りだが）、気楽に思った。

もちろん、そんなことを思う間にも、訊かねばならないことは忘れない。

「で、調べてみた？」

「ん？ああ、調べたぞ。じゃが……、やはり、と言うべきか、どこを漁っても出てこなかった。ADEOIAにも、魔術団のデータベースにすらその名前はなかった。まったくもって驚きじゃよ」

九能の問いに、マリアン又は肘突きの格好を解いて腕を組みつつ答えた。対して、今度は九能が考え込むそぶりを見せる。

マリアン又の言う“名前”とは、当然、幣原奈唯他のことだ。

彼女は、DMFBの女王となり得る体質を持っていた。戦いの後に、対峙した後朱雀沙夢濡の話聞けば、魔術までも使ったという。唯利亜からも、彼女は疵術師であるという証言は得られている。

表向きは、彼女は16歳でこの世を去っている。実際には、生きているとも言い難いが、決して死んでいるとも言えない。

生死如何はともかく、ADEOIAが16年間もの間、そして死んでからの3年間も含めて、疵術師一人の存在を把握できていなかったということになる。

もちろん、その弟である幣原奈都海と唯利亜がADEOIAに加

入する際、九能は、姉である奈唯他についても可能な限り調べた。

しかし、それらしい情報は何一つ得られなかった。

日本のこの地域において、幣原奈唯他と思しき人物が戦闘を行ったという記録もなければ、DMFBの女王としてファントムの傀儡になってADEOIAを脅かした、という過去もない。

九能はそれについて、特に不思議がったりはしなかった。第二次世界大戦後、表の歴史と同じく、魔術師同士での戦争にも惨敗を喫した日本では、こうして魔術師であることを隠して、あるいは忘れて暮らしている者は多い。だから、見過ごしてしまったのである。

責任と言えば、その重要性を見誤った九能にあると言える。あるいは、報告を受けたにも関わらず、その時点での確認を怠ったマリアンヌにもあるかもしれない。

驚く以前に、疵術師一人の存在を見過ごしていた、という事実には何かしらの責任を感じるのが普通なのだが、残念ながら（？）彼女らは普通から極限にかけ離れた存在である。世界全体から見てもそうであるし、魔術師の世界でも、特に九能は一種の異端として扱われている。それ以前に身内で解決できることに關して責任を感じるほど、彼女らは殊勝ではない。

「まあ、あれじゃ。関東のほうでも疵術師の存在が判明したという例もあることじゃし、そもそもあのきょうだい自体、こちらでは把握しておらんかったのじゃ。そう珍しいことでもない。それに、日本じゃしな」

「そうね……。もう少し柔軟な対応をしてほしいんだけどね、霞翹かばね家には」

「しょうがなかる。あれはそういう家じゃ。ADEOIAの支部を置けているだけでも十分じゃよ」

日本の疵術師を含めたほとんどの魔術師が思っているだろう愚痴を吐いた九能に、マリアンヌもまた、諦めの形をした愚痴を返した。彼女らの愚痴の理由は後述するが、魔術の世界において日本は複雑な立場にあるのだ。

しかし、二人はそれ以上それについて語ることはなく、

「で、」

と、マリアンヌによって話題の転換が行われ、先ほどの愚痴は二人の思考対象から外れた。

「フィラデルフィアはどうじゃった？例の姫を連れていったらしいが」

「ああ……、もう、訊かなくてもわかるでしょ？」

心底疲れたような表情になる九能を見て、マリアンヌはくっくと含み笑いを漏らした。他人の軽い不幸はこうして遠慮なく笑うのがマリアンヌである。九能も、特に咎めたりはしなかった。

しかし、九能がフィラデルフィアに向かったというその事実は、笑えることではない。F A S C Aの司令本部の一つ（という言い方はおかしいが、司令本部が保険としていくつか設けられるのはA D E O I Aも同様で、魔術団の中ではよくあることだ）があるのがフィラデルフィアであり、そこにA D E O I Aの将官が赴くという異例の事態は、魔術団の中でも注目されていたことでもある。

たとえ同じ魔術団の中の組織であったとしても、それらはほぼすべて相互干渉を暗黙の了解としている。特にA D E O I AとF A S C Aは、お互いに干渉しないというだけでなく、半ば敵対関係にあると言ってもいいほどにお互いを忌み嫌っている。

元々、疵術師は魔術師の劣等種として扱われていた。使える魔術

に大きな制約があるというのが、主な理由だが、それだけではない。魔術の発動に詠唱を必要としないのも、蔑まれる大きな要因となっている。

詠唱をどれだけ短く、簡略化できるかは、魔術師にとって重要なステータスだが、そこに詠唱の破棄と言う段階は存在しない。子どもでもできるような初級魔術や低級魔術の一部ならいざ知らず、中級以上の魔術の詠唱を破棄できる魔術など、それこそ枢密院や賽の目の一人に選ばれるような者か、禁断子に指定されるほどの者かのどちらかである。彼らは大半の魔術師から畏怖の念を抱かれ、その存在はまさしく雲の上にあると言ってもいい。

だが、疵術師は大した実力もなく、また大した修練もなく詠唱の破棄を行える。むしろ、詠唱を行っても魔術を発動できない。

それ故に、疵術師の概念が確立していない時代において、どれだけ詠唱を行っても汎用魔術すら発動できない疵術師は蔑まれ、そのくせに詠唱を行わずに誰も見たことのない独自の魔術を平然と発動できる疵術師は不気味がられたのだ。

疵術師と魔術師の違いが明らかになり、疵術師という存在が魔術師から分離した今になっても、魔術師の中には疵術師を蔑む声は多い。

その顕著な例がFASCAである。力がなければ入ることすら叶わず、入ったとしても完全な実力主義で、しかも相手をする敵の性質上、戦死など日常茶飯事。これらの特徴はADEOIAにも当てはまるが、しかし、FASCAの場合、相手は絶対に人間であるという大きな違いがある。禁断子はほとんどが魔術師であるため、戦死することもなく昇格していった者たちは、自分は魔術師の中でも優秀な部類にある、と思いつく。戦闘に限れば当然、優秀だが、それは他の魔術師、特に劣っていることが明らか（という考え方はFASCAを除けばかなり減ってきたが）疵術師に対する大きな優越感に変わる。それはやがて侮蔑になり、それを嫌悪する疵術師との対立関係という構図になってしまうのだ。

そんな現状でADEOIAの将官である九能がFASCAに向かった場合どうなるのか、楽観的な予想をする者はほとんどいないだろう。

実際、フィラデルフィアの司令本部では、九能たちを疎む声はあれど、歓迎する声は全くなかった。やもすれば禁断子に指定されかねない疵術師である九能では、どの機関も歓迎することなどあるはずもないが。

とはいえ、沙夢濡の自由は保障され、護衛、もとい監視もADEOIAに一任されるとあれば、もうFASCAの世話になることもないだろう。九能が最も懸念していた（というか、面倒くさがっていた）源破顕現についても、これといった指摘はなく、これ以上ないほどに平和的に、ことは済んだ。

だが、今回の戦いは、これだけでは終わらない。

FASCAの魔術師がファントムになり、ADEOIAの日本支部の一つを襲った。この事実、魔術団の、そして、日本の魔術界を大きく揺るがす一大事件になりかねない。

重要なのは、魔術師がファントムになった、という部分ではない。今まで例はなかったが、可能性自体は論じられてきた話ではある。

ファントムが日本支部を襲った、という事実でもない。そんなものの、過去にいくつがあった。珍しくはない。

FASCAの魔術師がADEOIAを襲った、というところでもない。ファントムになった時点で、魔術師の称号は失われており、FASCAの魔術師としては扱われない。

FASCAの　　ひいては、魔術団の魔術師が日本にいた、という事実である。

日本は、魔術団とは隔離されている。日本の魔術師は魔術団に入ること許されず、魔術団の魔術師は日本への入国を大きく制限される。

日本の魔術界を支えている、あるいは支配しているのは、“霞翹かばね家”。戦国時代、神道の一つの宗派として“華羽根”が勃興し、江

戸間に東北の一部で発展。明治になると朝廷に取り入って保護され、霞翹の姓を受けて霞翹家は生まれた。

霞翹家以外の日本の主要な魔術師一族は、第二次世界大戦でほとんど絶えてしまい、終戦80年以上を数える今では、完全に途絶えてしまったか、あるいは魔術師であることを忘れて暮らしているか、魔術師として霞翹家に従っているかのどれかである。

また、霞翹家は本家と九つの分家に分かれており、それぞれが各地方の魔術師を治めている。もちろん、北海道から沖縄まで、すべてを。

結果、日本の唯一の巨大魔術一族となった霞翹家は、終戦後、次々と魔術団に参加していく枢軸諸国の魔術師を尻目に、魔術団と日本の隔離を行った。

内容は、先ほども言ったように、日本の魔術師が魔術団に入ること、及び魔術団の魔術師が日本に入ること禁じる、というものだった。

理由は、今も公式には説明されていないが、霞翹家は魔術団に敵対する魔術組織に所属している、だとか、日本では魔術団をも凌ぐ先進的な魔術の研究が行われており、それが流出するのを防ぐためとか言われているが、どれも噂の域を出ず、真相は定かではない。

実際のところ、魔術団との関わりを断ち切っても、魔術団からの心証を害する以上のメリットはなく、潜在的なものも含めて世界の8割以上の魔術師が所属すると言われる魔術団と敵対するなど、正気の沙汰ではないと思われるでもない。

だが、現に、霞翹家は日本の魔術師を統率し、魔術団との関係を拒絶しているのだ。魔術団も、日本の霞翹家自体を、一つの魔術組織として認めるようになってきている。霞翹家を危険視するというよりは、むしろ日本の魔術師の統治を肩代わりしてもらっているという認識にしたほうがいいのではないか、という結論を見出したのである。実際に日本の魔術師による犯罪率が、諸外国に比べて非常に低いことを鑑みると、霞翹家は魔術団に害を及ぼすような要素に

はなりえないと考えた方が妥当だろう。

ただ、得られるはずの益を得られない、あるいは排除できるはずの害を野放しにしてしまう、という事態に陥ることはある。

前者の主な例が、日本の神道に基づく独特な魔術体系が日本国外に出られず、魔術団の魔術師がそれらを学ぶ機会を失っているということ。後者の主な例が、DMFBと禁断子に関して、である。

前者はともかく、後者の二つは、日本の魔術師以外の一般人にも害が及びかねない、非常に危険な存在である。

DMFBに関しては、ADUIAの時代に既に、「日本に駐留するADUIA（今のADEOIA）の魔術師の8割以上を日本国籍所有者にすること」という条件の下、ADUIA、ADEOIAは日本に軍を置くことが許可され、一応の解決を見た。

しかし、問題は禁断子である。魔術団の影響が最も及びにくい国として知られている日本は、同時に禁断子の逃げ込む絶好の逃げ場所としても知られている。もちろん、霞翹家は日本だけでなく世界各地の国際空港に人員を配備し、日本に禁断子も含めた日本国籍以外の魔術師が入らないよう監視しているが、その監視を抜ける者も当然存在する。そもそも、強すぎて禁断子に指定される者なら、霞翹家の末端にあるような魔術師の監視など、いとも簡単に抜けられるのだ。

この禁断子の問題は現在に至っても解決の兆しすら見えてはこない。禁断子は、魔術団に捕らえられない環境を作り出してくれる霞翹家には攻撃することはなく、霞翹家は実力的に特級に指定されるような禁断子には手出しができない。そのくせ、FASCAの末端の魔術師が日本に入っただけでも、霞翹家は魔術団に対して猛抗議するのだ。

それ故、日本にFASCAの処刑人つきが入ってきた、という事実は、魔術団と霞翹家の関係を一気に悪化させかねない大事なのである。

「で、話は変わるけど、今はどこに？」

「会議に向かうところじゃよ。例の如く、どこに向かうのかはさっぱりじゃがな」

その一大事に、魔術団が何もしないはずがない。具体的には、枢密院の臨時会議があるのだ。

内容は、おそらく霞翹家に対する対応。戦うという選択肢はないが、日本に魔術団の魔術師が入ったという事実を認めるかどうかという問題もある。

日本に侵入した処刑人は、既に亡くなっている。そんなものは存在しなかったとも言え、死体が出てこない限り、十分押し通せる。

「会議、ね。御苦労さま」

「ふん……、気楽なもんじゃな。こっちは胃に穴が開きそうだといいのに」

おそらく、謝罪という行動には移らない。仮にも世界を統べるテンプル魔術団が、たかが一つの魔術一族に頭を下げるなど、あつてはならない。巨大組織ゆえの面子とプライドがあるのだ。それを自ら潰すようなことはしないし、することは許されない。

だから、魔術団のすべきは、「戦わずして、どう霞翹家に対する優位性を示せるか」である。その議論に参加せねばならないのだから、マリアンヌがストレスに感じるのも当然だと言える。

枢密院の会議場は毎回変わる。その場所も会議に参加する枢密院にすら知らされず、向かう過程も完全に外界と隔離された状態で護送されるため、完全に場所がわからなくなっているのだ。

マリアンヌは、その護送車に乗る前に九能と通信しているのだっ

た。護送車は、電波はもちろん魔力すら遮断するため、会議場に到着するまでの間、通信手段は一切なくなる。会議場ですら、魔術の使用は禁じられている。議論に、鬭争は交えないのが鉄則だった。

「そろそろ時間じゃない？」

「そうじゃの。もう10分もない」

九能は通信機の操作パネルに近づいた。マリアンヌも、画面の向こうで何やら操作を行っていた。通信を切る準備をしているのだろう。

「じゃ、こつちでも霞翹家とコンタクト、取れそうなら取ってみるわ」

「うむ。その辺りは確か」

「八嘉羽家ね。当主は八嘉羽一寡。なんとか話にはなりそうだけど」

「ADEOIAが、魔術団と日本の唯一の繋がりじゃからな。慎重に頼むぞ」

霞翹家は、本家とは別に、異なる家名を持つ九つの分家を持つ。具体的には、一華翼、二渦羽根、三架翹、四迦羽、五歌翼、六苛羽、七禍翹、八嘉羽、九戈羽根、の九つである。

その内、ADEOIAの中国地方支部のある地域は、八嘉羽家が統率している。

九能は、その八嘉羽家を通して、霞翹家に働きかけようと考えている。魔術団でも一定の影響力を持つ九能なら、話し合い程度には持っていけるかもしれない。マリアンヌもそんな期待はしていた。

ただ、九能はその期待に反して、謙虚だった。

「あまり期待はしないでね。交渉事は苦手だから」

「知っておるよ。しかし、“巨斧の魔女”の名は大きかろう？いざとなればそれを使えばよかろう。西園寺九能「巨斧の魔女」と知っておる者は少ないじゃろうしな」

「……………霞翹家がその少数派に入っていないことを祈るわ」

二人は笑えなかった。霞翹家は、闇に隠れている部分が多すぎる。日本に住んでいても、霞翹家の情報はほとんど入ってこないのだ。辟易とする九能に反して、マリアンはなぜか微笑して、「画面を人差し指で撫でた。

その行動の意味を察した九能は、苦笑ではない笑みを浮かべた。

「……………ありがとう」

「よいよい。ファントムと戦ったのじゃ。しばらくは軽い仕事だけにして英気を養うとよかる」

「ふふっ……………、それって、すぐにまた大きな戦いが来るってことなのかしら？」

「そうかもしれないのぉ？どうじゃ、嬉しかる？」

「はいはい、そうね……………」

お互いが軽口を交わした後、九能とマリアン又は同時に画面の下部に手を伸ばした。

「じゃあの、クノー。理由だけは、与えるでないぞ?」

画面が暗転する直前のマリアンヌのセリフは、ギーの遣したそれと似ていた。

俺は、医務室にいた。

だが、そのベッドの世話になっているのは俺ではなかった。

唯利亚と咲だ。

二人は並んだベッドに仲良く座り、談笑していた。

二人だけではない。ここには、俺を含め、第一特殊遊隊のメンバーがほとんど揃っている。いないのは、九能と天代だけ。九能は用があると言ってどこかに行ってしまった。天代は俺たちより一足早く学校に通うことを再開させた。さすがに、小学生に一週間も休めというのは酷だということだろう。

咲はファントムとの戦いで魔力をほとんど吸われてしまったらし

いが、その後の、言うのも恥ずかしいがつまるところの「最終決戦」で、さらに魔術を使ったせいで回復が遅れているのだ。

咲は、あの戦いの途中、ただ寝ていただけではなかった。

九能は、“戻ること”という源血によって事実上の蘇生を実現させられるのだが、それも離れていては不可能だ。そこで、咲の“断つこと”という源血を活かした魔術が利用された。

九能と蘇生させる対象の間の空間を断ち切り、その間の物理的距離をゼロにすることで、九能の遠隔蘇生を可能としたのだ。

魔力がないのに、なぜそんなことができたのか、という疑問はあるだろう。俺だって、最初はその疑問を抱いた。

だが、咲は、ファントムの搜索の際に街に広げた魔術を、ずっと残っていたのだ。つまり、その魔術に使われた魔力は咲の支配下にある状態で、街の至る所に散りばめられていた、ということになる。

咲は、ADEOIAに残っていた自分の魔力を通して、その魔力の構成を空間断裂に使えるように変えてしまったのだ。並みの労力ではないはずだが、経験の長い咲だからこそできた芸当だろう。

咲のおかげで、未来子も久宮さんも深夜も、死なずに済んだ。いや、一度は死んだのだが、それを蘇生させることができたのだ。

ちなみに唯利亜に付けられた俺のあの大怪我は、九能によって治された。戻したのだから、記憶もなくなるかと思っただが、記憶がなくなるのは蘇生の際に純性魔力ごと戻してしまうことによる弊害であって、傷のある部分だけを戻すなら、記憶には影響はないという。俺は忘れたかったのだが。

記憶の操作の効かなくなった会長も、忘れたいと思っていることだろう。九能の能力に期待もしたが、生きている人間の純性魔力を“戻す”とどうなるか、九能にも予想できないという危惧から、記憶をなくすための「回帰」はできなかった。純性魔力そのものには時間という概念が作用しないという説を信じるとすると、生まれる前の胎児にもなっていない受精卵にまで戻ってしまうらしい。純性魔力には、受精卵、人間、死人という段階しか存在しないというこ

とだろうか。

難しいことはわからないので、思考をやめる。

弟である唯利亚を見る。

唯利亚は、戦いの前とはすっかりその姿が変わっていた。

髪は、蛍光灯の光すら反射するほどに、白い。いや、純白ではなく、白金色というべきだろうか。

肌も白い。内側の血管が見えてしまいそうなほど、その肌は白く透き通るようにも見えた。

目の虹彩は、淡い赤色。それだけで、印象は大きく変わる。

どう見ても、その姿は姉である奈唯他に酷似していた。

九能と本人から話は聞いた。姉の姿で長時間戦いすぎたために、その姿が残ってしまったのだ、と。魔術関係の話については新参もいいところな俺では、「ああそういうものなのか」としか思えず、それで納得もした。

だが、唯利亚のその姿は、俺の精神を決る。

いつからだったのかは忘れたが俺が姉を避けなくなってから、姉が亡くなるまで、俺にとってその姉がどういう存在だったのかを考えると、平静ではいられない。

こいつは唯利亚だ、と自分に言い聞かせても、効果はなかった。

姉に似ている？だからどうした、と強がることもできない。

それほどに、あの人の存在は俺の中で大きいものだったのかと、今さらながらに実感した。

勘違いしなくてもいいが、別に俺は、あの人に恋情を抱いているわけではない。もちろん、家族としての愛しさはあるし、姉という存在に対する尊敬の念も、一応はある。長年、難病と闘っていたのだから、人としての強さも、認める。

だが、家族愛や姉弟愛では言い表せない感情があるのも、また事実。ならんなのかと問われても、困る。俺には、それに答えられるような語彙はない。

負の感情では、決してない。

だから、俺自身も戸惑っている。家族愛でも姉弟愛でも恋愛でもない、家族に抱く好意。それは、一体なんなのか。

それは、抱いていてもいいものなのか、許されるものなのか。不意に、昨晚のことを思い出す。

唯利亜の身体を借りて俺と話す、姉。あの時、姉は最後になんと言ったか。

『あたしは、あんたのこと、好きだよ？』

この言葉が、不安を余計に駆り立てる。

『あたしは』？なら、俺が姉のことが好きかどうかを、姉は知っているのだろうか。俺は、姉のことが好きなのだろうか。

そもそも、その『好き』という言葉は何を指しているのだろうか。それに、なぜ今になって姉はそんなことを言ってきたのか。わざわざ唯利亜の身体を使ってまで。

疑問が、尽きない。

むしろ、疑問しかないと言ってもいい。

その疑問の解が導かれることも、俺は本当に望んでいるのか

「なーっみっ！」

突如、上から乗りかかってきた重みに、俺の思考は中断させられた。

後ろを向くと、すぐそこには九能の顔。俺が迷惑そうな顔をしてみせると、九能は表情を消し、

「えいつ」

という声とともに、俺の耳たぶを噛んできた。しかも、結構な力で。

普通の人間なら痛がるどころだろう。実際、俺も痛い。だが、俺には痛み以外の感覚も、そこにはあった。

「……………ッ」

いわゆる、快感である。

歯を食いしばって耐えてみても、噛んだまま口をわずかにモグモグされると、身体の芯を貫くような得も言われぬ快感が……………

『って、もういいからやめろ!』

これ以上やられると我慢の限界が来そうだった。

思いつきり九能を振り払うと、不満そうな表情で舌打ちした。俺のほうがしたい気分だ。

しかし九能は、俺が抗議する暇も与えず、すぐに唯利亞と咲の下へ歩いていった。周囲の白けた視線を物ともせず。

で、今度はその視線が俺に向くのである。もうこの場から離れたい。

「二人とももういいの?」

その言葉で、皆の注目は九能らにシフトする。が、俺は感謝などしない、したくない。

「私はもう大丈夫です。あとは少し休めば」

「ボクはまだ。やっぱり姉さんの防護術のせいで魔術が効かないんだって。これから専用の部屋に行くことになってる」

そう。言い忘れていたが、戦いが終わって皆が集まったところで、姉は再び唯利亞の口を借りて、こんなことを言ったのだ。

『や、初めての人ははじめまして。そうじゃないのはまた会ったね。

つと、そう身構えなくていいよ。ただ伝えておきたいことがあってね、出てきただけさ。ほら、この子、このままじゃもうお日様を拝むこともできなくなっただろ？それはあたしのせいなんだけどもさ、その罪滅ぼしってわけでもないんだけど、この子に害を与える要素をシャットする防護術をかけておいたんだよ。まあ、つまり今は太陽の下を歩いても平気ってことだね。そのままじゃあ、あまりにも不便だしねえ。自宅でさえ、もう普通の蛍光灯に戻してみたいだし。ま、特別なのは高いからね、しょうがないんだけど。つてわけで。今の唯利亞には防護術がかかっているから、この子に魔術をかける時や術具を付ける時は、その辺留意してもらおうと助かるね。んじゃ』

つまり、唯利亞は今まで通り、通常の生活ができるということだ。その防護術を維持するのは、当然、姉。どうやら本人らによると、唯利亞と姉では管理している魔力が異なり、それぞれ使える魔力は独立しているらしい。姉は生命維持に魔力を使う必要性がないため、魔術をほぼ永続的に維持できるといっわけ、らしい。

だが、そのおかげで唯利亞は魔術を使った検診を受けられなくなっているのだ。結局、普通の病院と同じように行われることになった。

「……………」

と、唯利亞が自分の白くなった髪をその手で弄んでいることに気付いた。

それを見ているのは俺だけではなかった。

皆は、何を思いながら唯利亜を見ているのだろう。

唯利亜は、その変わってしまった自らを、どんな気持ちで迎えたのだろう。あるいは、今、何を考えているのだろう。

「……………ね、」

誰もそれに答えはしなかったが、その沈黙が唯利亜を促していた。皆が聞く中、唯利亜はその心中を口にした。

「これさ……………、ボクに似合ってるかな？」

「……………」

「……………」

誰かが、溜息をついた。俺だったのかもしれない。

また、沈黙が降りた。ただ、今度は全く別種の沈黙だった。誰も
が呆れ、何かを言う気を削がれた結果の沈黙だった。

その中で、

「……………ものすごく前向きだね、唯利亜ちゃんは」

尊何さんのその言葉で、全員が堰を切ったように笑いだした。あの
仏頂面で有名な咲ですら、控えめながらも笑っている。

だが俺は、呆れて笑うどころではなかった。こちらが深刻に考え
ているのに、こいつは一体何を呑気に考えているんだ。

皆が笑い終わった後、最初に口を開いたのは九能だった。

「でも唯利亜、あなたはそれでいいの？」

それは俺も、知りたかいが訊けなかった質問だった。恐らく皆も、唯利亜の今の心境はわからないはずだ。さっきの発言も、ただの強がりかもしれない。

「どうなんだろうね……、ボクにもわかんない」

わからないと来た。

こうなったことは自業自得。受け入れるのは当然だが、それに感情が付いていくかどうかは別問題だ。唯利亜にとって今の状態が本当になるべき姿だったのか、こうなる原因となった選択が本当に正しかったのかのどうか、今はまだ判断すべき時ではない。唯利亜に關しては言わずもがな、その存在の是非を問う必要もない。

だが、人によってはやはり考えてしまうものである。今回はそれが、唯利亜自身だった。

「わかんないけど……、でも、こんなになっちゃったらさ、もう学校なんか」

「唯利亜」

遮ったのは、九能だった。

「唯利亜がどう変わっても、あなたが望まない限り私たちは何も変わらないわよ。もちろん、学校のみんなもそうなんじゃない？」

「でも……」

「でも、じゃなくて。あなたがそんな風だから、みんなが本当に心配しちゃうんじゃない」

唯利亜は「うん……」と、力なく頷いた。

唯利亜が今、何を思い出しているかはわかった。また苛められるのではないかと危惧している。ここまで変わってしまったら、苛めでは済まないかもしれない。飛躍しているかもしれないが、6月の件と同じことになるかもしれない。そうあることではないとわかっていはいても、一度作られたトラウマはそう簡単に消えるものではない。頭に、いつまでも残るものだ。

だが俺は、そこまでわかっていながら唯利亜に声をかけることすらできなかった。喋れないから、という理由ではなく、口を動かすことも、筆談でも、俺には意志を伝える手段はいくらでもあるというのに、唯利亜に伝えることはなかった。

こういう時こそ、兄の出番ではないのかと、自己嫌悪すら覚えるが、唯利亜にかける言葉が見つからない。取るべき行動も、すべてが裏目に出そうな気がして、実行に移せなかった。

「んっ、うし！わかった、もう悩まないことにする！」

と、俺が意味もなく葛藤している間に、唯利亜は復活していた。心配するまでもなく、唯利亜は強くなっている。弟というのは、どうも兄の思う以上に早熟であると実感する。

「おーおー、それでこそ唯利亜だぜ。今回の戦いで隊長の次に活躍したんだから胸張ってもいいんだぜ？」

「たしかにねえ。唯利亜ちゃんがいないと、あのお姫様も殺されてたかもしれないだろう？……奈都海に」

尊何さんの発言で一斉に俺に向けられる視線。

なんなんですか。殺されかけてたんですから正当防衛にはなりま

すよね？

と心中で可能性に縋って見たが、

「正当防衛になるなんて考えないほうがいいわよ。魔術団の法じゃ、一般人の持つ銃や刃物は脅威として認識されないから」

未永栖さんのこの言葉で唯一の正当性も消え失せた。あの

状態の会長を一般人と言うのなら、の話だが。

「まあ、いいじゃないですか。結果的にはみんな無事でしたし、後朱雀沙夢濡さんも事実上の自由を得られましたし。めでたし、でいいんじゃないですか？」

みんな無事だった。九能は、ファントム包囲戦で死傷した疵術師もすべて、治療あるいは蘇生させた。故に、結果的には死者も負傷者も存在していないことになっている。

九能の源破顕現が禁じられている理由がわかった。九能の能力は、本来一方通行である法則を逆行させられる究極の能力だ。

どんな傷も癒し、あらゆる死者を蘇らせる。源血の特性であるが故に、魔力の消費もない。たとえ消費があつたとしても、それすらも一瞬で“戻る”。

その気になれば、九能一人で魔術団すべてを相手にできるような能力だ。脅威に思うのも無理はない。

ただ、顕現の制限をどういう手段で強要したのかは疑問だ。問うたところで知る方法も知る必要もない疑問ではあるが。

まあ、それはともかく閑話休題。

かばってくれた深夜に感謝の意味を込めて目を向けると、微笑みを返された。言葉に変換すると「いいですよ」ということだろうか。さすがは深夜だ、気が効く。

「ねーねー九能ちゃん。ほんとに明日からガッコに行っちゃおうの?」

皆の話題が途切れてところで、咲の隣のベッドでぐるぐるしていた魅戈さんが、唐突にそんなことを訊いてきた。

「ええ。仕事の一環だもの」

「むむ、ならあたしも行くっ」

「別に行ってもいいけど……、魅戈の歳だと大学になるわよ?」

魅戈さんは19歳。確かに行くなら大学になる。高校に行くなら戸籍でも偽造しなければならぬ。魔術団なら可能らしいが、正式に高校を卒業していると任務だとかの理由がないとしてくれないらしい。

それを聞いた魅戈さんは、拗ねて布団を頭からかぶり、そのまま微動だにしなくなった。

一同は苦笑いでそれを見ていたが、咲が「あの」と九能に話しかけたところで、注目はそちらに移った。

「なに?咲」

「私は……、学校に行つては、ダメでしょうか?」

「……………え?」

予想外すぎたのか、九能の反応はそんな間の抜けた声を出した。

だが、予想外だったのは九能だけではない。俺はもちろん、ここにいる皆がそれぞれの形で驚きを表している。魅戈さんは布団の中で不貞腐れたままだが。

「え、えーと……、咲は小学校にも行ってないから、申請さえすれば行けるようになると思うけど………」

「でしたら申請の方法を教えてください。快復したら自分で行いませから」

「ええ、わかったわ………」

積極的な咲というのは違和感があるな。何があっただらうか。と、この場にいる誰もが思っているはずなのに、口にする人はいなかった。

代わりに激怒する人はいた。

「なーんーでーっ！咲ちゃんはいいのっ？魅戈も行きたいのに！」

激怒というか、駄々をこねているだけだった。本当にこの人は来年に成人してもいいのだろうか。

「あのね、魅戈……、あなたもう行ったでしょ？」

「もっかい行きたい！」

九能が溜息をついた。諦めの溜息だ。

「わかったわよ………、申請しておくから待ってて」

わーいっ、と子どものように喜ぶ魅戈さんを、九能は苦笑を浮かべつつ見ていた。おそらく申請が通ることはないと思っているからだろう。

他の人たちは我関せずで雑談に興じている。飛び火を避けるためだろうか。確かに面倒だが、この人たち、時たまかなり冷たいような気がする。

「あ、そうだ。少佐と大尉にさ、教術関係でちょいとお話があるんだけど」

九能がここに来てから今までなぜか沈黙を貫いていた未来小が、未永栖さんと尊何さんに声をかけた。ちなみに、「教術」というのは魔術教育のことである。基本的に2、3年は教術を受けるらしいが、俺や唯利亞、天代はこの部隊に入るにあたってそれを免除された。といっても、俺はできれば受けておきたかったが。

ともかく、二人は未来小に促されてともに部屋を辞した。

「深夜ちゃん！ごはん食べにいこー！」

「つい2時間前に食べたような……………、……………わかりました、今行きますよ」

魅戈さんと深夜も、最後に深夜の「失礼します」という言葉とともに部屋を出ていった。

「お……………、いづれえなあ、ここ。てわけで隊長、俺もこれで失礼しますわ」

続いて久宮さんも取ってつけたような理由で部屋を去った。

あつという間に、部屋に残るのは俺と九能と唯利亞と咲の4人になった。

久宮さんも言ったが、確かにこれは居づらい。ベッドに横たわる二人と、腕を組んで仁王立ちする九能。この三人に、一体どうい

態度で応じるのが正解なのか。というかそれ以前に部屋にいたくない。早く立ち去りたい。もしかしたら出ていくというのが正解なんじゃないだろうか。

「奈都海ー？」

『おっ、おっ、なんだ？』

「なに慌ててんの？ まあいいや。明日から学校行くけど、問題ないわよね？」

問題といえば、会長と会わねばならないという重大かつ全力で避けたい問題があるが、

『ああ、特にないな』

とりあえずはこう答えておく。墓穴は掘りたくない。

九能は納得している表情はしていなかったが、一応「そう」と言っ
つて今度は唯利亚へ顔を向けた。

「で、唯利亚は、本当に明日、学校に行くつもりなの？」

「うん。どうせ行くなら早く見せておきたいからね、この姿は」

九能の言う通り、学校に行くことに弱気になっていた割には、唯利亚は明日にでも学校に行こうと言っていたのだ。

検査は今日で終了する。明日の午前にはほぼ万全の状態に戻るということ、特に問題はないが……、さすがに学校に行った時の周囲の反応は怖い。当事者でない俺ですらこうなのだから、唯利亚本人にとっては推して知るべしだろう。

『本当に大丈夫なんだろうな？』

「あれ、兄さん心配してくれるんだ？嬉しいな」

『……………そうやってふざけられるなら大丈夫だな』

今更ながらに心配して損したと思う。こいつは浮き沈みが激しすぎる。浮く時は精いっぱい浮かれるし、沈む時はどん底まで沈む。正直ついていけない。

「それにしても」

早速、唯利亜は話題を変えてきた。

「咲ちゃん、学校に行きたいって言ってたけど」

「はい。それがなにか？」

聞きようによっては素っ気ない返答だが、これが咲のデフォルトだ。

「なんで？……………って訊くのはダメかな？」

「いえ、構いませんが……………」

なんだろうか。咲にしては歯切れの悪い返答だ。同じことを思ったのか、九能がそれを訊ねた。

「どうしたの？別にどんな理由でも責めたりはしないけど」

「いえ、むしろこれといった理由はないんですが……、強いて言えば、尊何大尉を安心させたいというのが一番でしょうか……」

はて、なぜここで尊何さんが出てきたのだろうか。

俺が首を傾げていると、訊ねる前に九能が教えてくれた。

「奈都海は知らなかった？ 咲が尊何と一緒に住んでる、って」

『それは初耳だが……、それ以前に、咲はここに住んでいるんじゃないか？』

「ここというのは医務室というわけではなく、このADEOIA中国地方支部のことだ。その居住区には、多くの疵術師が住んでいる。咲も同じだと思っていたのだが。」

「確かに部屋は持つてるけど、実際に住んでるのは尊何の家なのだから……、親子……、歳からすると兄妹かな、そんな関係よね？」

「一緒に住み始めて一年も経ってませんが、自惚れてもいいのでしたら、家族、と言ってもいいかもしれませぬ」

咲のまさかの発言。尊何さんとはさほど友好的には見えなかったのだが、それは家族故の照れ臭さが出たからなのかもしれない。

『唯利亜は知ってたのか？』

「兄さんが知らなかったことのほうが驚きだよ」

知らなかったのは俺だけか。

どうやら知らなかったのは本当に俺だけのようで、九能も唯利亜も特別な反応も見せず、逆に咲をからかっていた。

「で、尊何さんを安心させたいっていうのはどーいうことなのかな
」？」

「言葉通りですけど……………」

「あら、健気じゃない？好きな人を安心させたいだなんて」

「そっ、そっいうのじゃありませんっ」

「え。なら尊何さんのこと嫌いなの？」

「嫌いではありませんけど……………」

「じゃあ好きなんだ？」

「で、ですから！そっいう好きとか嫌いとか、関係ありませんから
」！」

「へえ、尊何と咲はもう好き嫌いで計れるような関係じゃない、
っつてことね」

「~~~~~っ~~~~~っ~~~~~っ」

おお、咲の顔が真っ赤だ。これは珍しい。

「見ないでくださいっ！気持ち悪い！」

なぜか罵倒された。理不尽だ。

玄関に入ると、竜樹とお父様が、仁王立ちしていた。この二人が並ぶと威圧感が物凄い。

「え、えーっと……」

「おかえり」

「あ、うん……ただいま……」

「まずは上がね。話がある」

「ここは私の家なのに……と思ったけれど、お父様が隣にいることもあって、言えなかった。というか、お父様が喋らない。」

「あの、お父様？」

「蜜華、何か軽い食事でも頼む」

「かしこまりました」

露骨に無視された。蜜華さんも、それに平然と答えた。味方だと思っていたのに。

「どうしたジャンヌ。早く上がれ」

「はい……」

蜜華さんは会釈して台所のほうへ向かった。

私は竜樹とお父様の後ろについていく。

着いたのは、いくつかある客間の一つだった。なぜ居間じゃないのかは疑問だけれど、私にそれを言う権利はないことは自覚しているので黙って追従する。

「あ、お嬢様。お荷物、お部屋に運んでおきますね」

「ん、ありがとう」

お手伝いさんに荷物を預けて部屋に入ると、二人は難しい顔で正座していた。その正面には座布団が一つ。座れということだと思うけど……

「どうした。座れ」

お父様に言われて、できるだけ昔に習った礼儀作法をたどって座る。こういうところで意識しないといけない辺り、私はまだ“お嬢様”になりきれてないのだと実感する。

それはともかく、私が座っても二人は話を始めなかった。

どんな話をしたいのかはわかる。先週の月曜日の午後の授業をサボって、その上今まで行方をくらましていたのだから、心配もさせただろうし、無事がわかってからは怒るのもわかる。

でも、この無言の威圧はなんだろう。怒鳴られるより、よっぽど怖い。

かといって、私から話し始めるのも気が引ける。このプレッシャーの中で言葉を発せられる人がいたら教えてほしい。

無言の対峙が続くこと数十分。多分三十分は経ったと思う。

「御主人さま、お持ちしました」

背後から蜜華さんのくぐもった声が聞こえた。

お父様が許可を出すと襖が開き、蜜華さんがお盆を持って入ってきた。お盆には、フレンチトーストとコーヒーが人数分載っている。純和室に洋風の朝食という光景は本当にシュールだ。大好物だから、私にとっては見慣れたものだけだ。

「さて、ジャンヌ」

いきなり名前を呼ばれて、飲んでいたコーヒーをこぼしそうになった。

カップを置いて、呼んだ竜樹を見る。

「まず、どこに行っていた？」

「ええーと……、伝えたはずだけど……？」

竜樹が眉間にしわを寄せた。

「……アメリカ、です」

「アメリカのどこだ？」

「……フィラデルフィア」

嘘は言っていない。まだ、嘘ではない。

でも、結局は嘘をつかなくてはいけなくなる。

「そこで、何をしていた？」

「……ナツの……、幣原奈都海くんの家族の知人の葬儀に参加していました」

これこそ、真っ赤なウソになる。これはナツや西園寺さんの休校理由でもある。

でも……

「それに、なぜお前が参加する必要がある？」

「え、えっと、その……生徒会長だし、ナツは生徒会の一員でもあるし……」

「亡くなられた方と、あるいはその家族と、お前は何か関係があるのか？」

「一応、顔見知りでは、あります……」

葬儀自体がなかった以上、これも嘘になる。

そもそも、海外に行く理由としては、単なる顔見知りの葬儀というのはあまり強い理由とは言えない。家族や長い付き合いのある友人ならわかるけれど、そうなると竜樹やお父様が知らないはずはないし、そもそも何も言わずに消えたのだから、あまり断言するような理由は言いたくない。

竜樹のメガネを通した視線は、私の目を直視していた。私も、目は逸らさなかった。

逸らしたら負ける、というわけでもないけれど、ここで逃げたら今度こそ信じてもらえないような気がした。

「……………」

「……………」

私はあまり、沈黙は好きじゃない。でも、竜樹が訊かない限り、私は答えられない。

竜樹は

「……………はあ」

溜息をついた。今までの重い雰囲気とは違って、「しょうがないな」と聞こえてきそうな溜息だった。

「わかった。もう何も訊かん。お前ももう子どもではないし、自己管理くらいはできるだろう」

「え、あ、ありがとう……………」

「礼を言われるようなことをした覚えはない」

素っ気ない言葉だけど、竜樹と話す時は、字面だけで判断してはいけないということは既に学んだことだ。

許してくれたというより、見逃してくれたというほうが正しいの
だろうけど、やっぱり感謝の気持ちは変わらない。

「ありがとう、竜樹」

「……ああ、そうだな。どういたしまして」

背けた竜樹の顔が少し赤くなっているのは気のせいだろうか。意外な形で可愛らしい反応を久しぶりに見られた。
でも

「お父様……」

お父様は、竜樹と違ってこれまで何も言葉を発していない。腕を組んで正座のまま、目を瞑って黙り込んでいた。

本格的に怒ってしまっているのかもしれない。だとしたら、謝ったほうがいいのだろうか。

蜜華さんに視線を向けても、微笑んで頷くだけ。どんな意味が込められているのか察することができない。蜜華さんの行動の意図を読めないのは初めてだ。

竜樹は、フレンチトーストを食べ始めていて、私の力になろうという気もないらしい。

他力本願は望めない。なら、私だけで解決するしかない。元々そうするつもりだったのだから躊躇いはない。

「お父様、私　　ひゃっ!?!」

「ジャンヌ！」

突然、視界が遮られた。お父様の胸板に。

「あ、あの、お父様……？」

「良かった……！本当に良かった……」

意外すぎて、言葉が出なかった。お父様のこんな姿は、こんな声は、見たことも聞いたこともなかった。

良かった良かったときりに繰り返すお父様は、まるで門の前で蜜華さんに泣きついた私のように、そう思うととても愛おしくなった。

「大丈夫です。ジャンヌは無事です。だから、そんなに泣かないでください」

安心させるために言った言葉で、お父様は私を抱く力をさらに強くした。私もそれを感じて、背中にまわした腕に力を込める。

「あらあら、羨ましいこと。わたくしも加わらせてくださいな」

「え、ちょ、お母様っ？」

そこにお母様までいつのまにか加わって、状況はカオスな感じになっただけだった。

何かなんだかわからないままに、私はお母様とお父様に挟まれていた。とても息苦しい。

でもなんだか……代わりにとても温かった。

Noisy Lyric - 2 - できた……んです(前書き)

一つ目の から二つ目の の話は、時系列的には第1章

#7の昼食後からのものになります。

鈴平鳴姫も、そこで初登場するキャラクターです。

9月も終わりに近づいているというのに自重する気配も見せない太陽は、しかし今日は秋雨に勝てなかったようで、窓の向こうでは傘をさす人々が行き交っていた。

あの戦いが終わってから学校に通い始めたのは火曜日。今日はその週末の土曜日。

昨日まで鬱陶しいくらいに晴れていたのに、今日起きてみれば外は雨。天気予報によればあと一週間は続くと言っていた。それはそれで面倒くさい。

これを機に涼しくなっていくといいのだが、と割と本気で考えていると、喫茶店の来客を知らせるチャイムが鳴った。

入口に目を向けると、目当ての人間ではない。

呼んだ本人に待たされるという面倒な事態に若干辟易としつつも、紅茶に口をつけて気を落ち着かせる。……俺はコーヒーが飲めるのだ。悪いか。

店内には控えめなBGMがかけられてはいるが、客の声にかき消され、曲の判別もできない。他人の会話を盗み聞く趣味はないので、必然的に聞くのは理解させる気もない主観だらけの駄曲になってしまふ。といっても、駄曲と評価するのも主観だし、俺の場合、音楽というものが全般的に嫌いだから曲という駄がつく。

そういえば、と思いつく。

いつだったか、九能があるアイドルのCDを買ってきて俺の部屋に置いていったことがあった。あれは一体どこに置いたのだろう。聞くつもりがなかったから全くもって思い出せない。

他にすることもないために、はてさて、と記憶を探っていると、

カツ……

と、ヒールが床を打つ硬質な音が、近くで聞こえた。顔を上げると、それは俺をここに呼んだその本人。漆黒の長髪、白磁色の肌、暗い奈落を思わせる瞳。九能や会長とはまた違った、作り物めいた美しさを持つ少女。彼女は俺の座る傍らに立ち、普段は人形のように動かないその表情をわずかに崩して桜色の唇を開いた。

「すみません。待たせましたか？」

約束より20分も遅れて来ておいて、そんなことを平然と訊いてくる彼女こそ、理由すら告げずに俺をここに呼びつけた張本人すずひらなるひめ鈴平鳴姫である。

嫌な予感しか、しない。

ある場所において異能を持つ者たちと異形の戦いが始まる、まさにその直前の話。

中国地方の某県の平野部に位置する久賀市の私立校である鳳霊学園の高等部。

その食堂にいる一人の男子生徒が、二人の女子生徒を見送った。

とはいえ、見送られた女子生徒が食堂を辞したのは授業が始まるまでに時間がないからであり、彼も生徒である以上その授業に出る必要がある。

だが彼は、食堂の一つの席に座ったまま、動こうとしなかった。机の上にはスープも飲み干した空のどんぶりが載っている。

彼は腕を組んだまま、イスの背もたれに背を預け、食堂の天井を仰いだ。そのまま動かず、数分経ったころ、

ピクリ、と

彼は何かに反応した。

彼が向かいの席に目を遣るとそこには

「……姫、か」

「鳴姫よ」

いつのまにか、見送ったものとは違う女子生徒が座っていた。

「授業はどうした」

「あんだこそどうしたのよ、宇類」

宇類と呼ばれた男子生徒

南坂宇類は、鳴姫

鈴平鳴姫

に訊き返されると、鼻を鳴らすような笑いを返した。鳴姫は不快に眉を顰めた。

「俺が授業に出る意味があんのか？」

「そんなこと言ったら私も授業なんて時間の無駄にしかないわよ」

ここで二人は同時に笑いだす………とでもなれば、微笑ましい恋人同士の逢瀬にしか見えないだろうが、

「……………」

「……………」

二人は睨みあったまま。その空間だけに、恋人同士とは思えない殺伐とした空気が流れる。

鳳霊学園のシステム上、3年生にもなれば三時限目や四時限目の時間が空くこともあるため、食堂にはまだちらほらと生徒が残っている。

だが、彼らは2年と1年の組み合わせ。例外はあるものの、基本的には一日フルで授業があるのだから、ここに残っていていいはずがない。

それをわかっていながら、二人は授業開始のチャイムが鳴っても慌てる素振りすら見せず、むしろ、それをきっかけとして緊張を解いた。

まず口を開いたのは、宇類だった。

「……………お前だろ」

「何がよ」

「唯利亚と愛燕に突っかかったっつー奴は」

鳴姫は片眉を寄せて怪訝な表情を作る。

「なんでその二人のこと知ってるのよ」

「唯利亜は奈都海の弟、愛燕はその親友だよ。お前、奈都海とどれだけの付き合いになると思ってたんだ。知らないとは思ってなかったぞ」

「あれの名字って幣原だったのね。初めて知ったわ」

「……なんで名前だけは知ってたんだ」

「あの二人が名前呼び合ってるからよ。隣で何度も言われたら覚えたくなくても覚えるわよ」

鳴姫は苛立ちを表情全体で主張し、宇類を睨む。何も知らない者が見れば思わず怯んでしまいそんな威圧感だったが、宇類は慣れているのか、動じた様子も見せなかった。

「しかしお前、どういう風の吹きまわしだよ？他人とほとんど口利かないお前があいつらと喧嘩なんて」

「……………腹が立ったのよ」

宇類にとっては何気ない質問に、鳴姫は顔を背けつつ言った。この不自然な拳措を、長年の付き合いになる宇類が見逃さなはずがない。

「へえー……………気になるのか」

「っ……………そんなわけないでしょ」

平静を装ってはいるが、装いは、宇類の前では簡単に暴かれる。

「友達になりてえんだろ？なら素直になれよ、ツンデレもツンだけじゃいずれ捨てられっぞ？」

「黙りなさいよ、殺すわよ」

おお怖い怖い、と大袈裟に怖がる素振りを見せるが、立場が悪くなる鳴姫がすぐに使う常套句を知っている宇類は、意地悪く笑ってもいた。

機嫌が悪いことを全身で表しつつ舌打ちした鳴姫は、徐にスカートポケットに手を突っ込んだ。そこから取り出したものを見て、今度は宇類が顔を顰める。

「まだ吸ってたのか、姫」

「だから鳴姫だって言ってるでしょ」

「んなこたどうでもいいんだよ。やめろっつたる」

鳴姫の手には煙草の箱が握られていた。宇類に止められたにも関わらず何の躊躇いもなく煙草を一本取り出し、鳴姫は自身の口でそれを啜えた。

当然、周囲には生徒もいる。それさえも意に介さず、鳴姫は煙草を啜っていた。

「さっさとしまえ。見つかったらどうするつもりだ」

「火は点けてないんだからいいでしょ。るっさいわね」

宣言通りライターも取り出す気配も煙草をしまつ様子も見せない鳴姫に、宇類は溜息をついた。

「わかったよ……。で、何の用だ」

「用？」

「あんだろ？何の用もなしにわざわざお前が来るわけねーんだし」

口に啜えた煙草を上下に揺らしていた鳴姫は、宇類に指摘されてそれを止め、目を閉じた。

それから数秒、宇類は待った。

「……………別に。ないわよ」

答えを聞いた宇類は鳴姫の目を一瞥し、直後に立ち上がった。

「そーかい。んじゃ俺は授業に行くぞ」

立ち上がった宇類を鳴姫が止めた。

「授業、出ても意味ないんじゃないの？」

「出て損するもんでもねーだろ。姫だってサボってばっかじゃ留年しても仕方ねーぞ？」

鳴姫は、頭を撫でようとした宇類の手を払いのけ、最後に「姫じゃない」と言い残して食堂をあとにした。

それを苦笑いで見送った宇類は、どんぶりを返却するため、カウンターへ向かった。

目が覚めて、俺は驚愕した。

いや、驚愕したというより、呆気にとられたというほうが正しいかもしれない。

いやいや、もっと正しい表現があるはずなのだが、こういう時に限って頭は上手く働いてくれない。寝起きでは当然かもしれないし、頭を使うべきはそこではないとわかってもいるが、だがこの状況は現実逃避したくなるには十分だった。十分すぎた。

しかし、下半身から伝わるその感覚は、俺を強制的に現実に戻してくる。とはいえ、むしろこの感覚は現実味が無いという類かもしれない。だが、元凶である“そいつ”は真正正銘、目の前にいるし、その頭が動く度に神経が痺れるような感覚は脳を刺激し、より増していく。

朝から何をしているのかと抗議することもできず、覚醒したばかりの脳は抗いようのない快感に支配されていく。レイプされる感覚とはこういうものかと、わずかに残った頭の冷静な部分があった。が、それもすぐに塗り潰された。

ぴちゃぴちゃと舌をしきりに動かす音が聞こえ、その合間に女の喉を鳴らす音が俺の耳朶を叩く。

このままではまずいことになるかと自覚はあるが、抵抗ができなかった。

結局、

『 つ、や、やめる……！』

果てる直前になってやっと口が動いたが、既に手遅れだった。

「んんっ……、来　　ッ！」

一瞬、頭が真っ白に染まる。

……

出してしまった。

朝から。

全身の力が抜けてしまったようだ。

脱力感が酷い。もうこれ以上動きたくなかった。

「はぁ……、ふ。奈都海……」

この非常識極まりない所業を行なった女　　九能は、俺の名前
を呼びながら少しずつ這いあがってきた。

見れば、口からは白い粘性のある筋が垂れている。その顔や髪に
は白濁した液体がかかっており、汚れることを避けたのか制服を脱
いで裸になった上半身も俺の出した“それ”に濡れていた。……
……っというか精液って言っちゃってもいいですか、面倒くさい。

「ん、……おはよ、奈都海……」

そう言って口づけをして、九能は俺の胸に顔を押し付けてきた。

あ

あ

あ

あー……、

可愛い。

こういう時、俺が男であることを呪いたくなる。

だが、衝動というものは抑えられないから衝動というのであって、そもそも抑える必要もないのである。と、苦しい正当性を訴えてみる。

「奈都　　、きゃっ!?!」

九能の手首を掴み、俺の下に仰向けで組み伏せる。

始めは意外そうに目を見開いていた九能だったが、すぐに頬を赤らめながらも微笑み、

「ん」

と、俺を誘ってきた。

据え膳食わぬはなんとやら。男の欲望を正当化する使い古された常套句だが、それこそ便利故の常套句であり、便利なものを使ったところで非難される謂われはないのである。

さつきまで腑抜けていた俺の　　も準備万端。

さあ、いざ

「九能さん。兄さん、まだ起きな　　」

.....

「……い、の……」

「『ゆ、唯利亜』」

「
ツ！！」

甲高い悲鳴が、響き渡った。

階段を駆け上がってくる騒がしい音が、続いて耳に飛び込んだ。

今日は金曜日である。翌日に休日を控えた今日、俺はあまりいい気分登校しているとは言い難かった。

「大丈夫ですか？ナツ先輩」

横に並ぶ愛燕えのが、俺を気遣って心配そうな声を出す。亜美つぐみさんに殴られた鼻に、まだ違和感が残っていた。

「ごめんね、奈都海。ちょっと調子に乗っちゃって……」

九能が謝罪を表す。まったくだ、と全力で非難したいが、九能の誘惑に乗ってしまったのは結局は俺なので、黙って頷くしかなかった。

そして

「……………」

俺と愛燕を挟む形でともに登校する唯利亜は、さっきからむすつと拗ねていた。

いや、拗ねているというより、大いに怒っていた。

あれから唯利亜は、俺と全く目を合わせようとしない。どころか、声すら交わしてくれない。

気持ちわかる。朝から“あんなもの”を見せられては、不機嫌になるのも怒ってしまうのも当然だろう。

だから、気持ちはわかる。わかるんだが……………

「唯利亜、大丈夫？」

愛燕まで敵に回ったのかと不安になったが、違った。

周囲を見ればわかる。

皆一様に、その目は珍妙なものを見るかのようで、誰もが視線を固定していた。

その視線が注がれているのは、当然、唯利亜だ。

遠目では、肌や目の色の違いはわかりにくい。だが、髪の色は、一番目立つ。

日本人には全くと言っていいほど見られない、プラチナブロンド。唯利亜の場合、ほとんど白、あるいは銀髪にしか見えないため、黒髪が主流な日本では、異常なまでに目立つ。

学校では、火曜日に、会長という意外な人物の意外な手法で教師、

理事からの許可を得たが、生徒からの奇異の目は消えず、学外では言うまでもない。

ほぼ全校に交友関係を浸透させている愛燕が近くにいるためか、苛めやその類はまだ見られないが、これからも全くないとは言い切れない。

朝のあれこれ云々より、俺にとってはそちらのほうに心配だ。

「大丈夫。これくらい、なんてことはないよ」

「そう？ならいいけど……」

本音なのか強がっているだけなのか。俺には中々判断できない。だが九能は、笑って唯利亜に言った。

「唯利亜が可愛いから見惚れてるんでしょ？みんな。今までと何も変わらないじゃない」

「そだねー。むしろボクを見て驚いてるのは、なんか気持ちいいかも」

なんて気楽な。たとえ、多少のダメージになっていたとしても、これだけ言えるのなら大したことはないかもしれない。

安心はできないが、心配の必要はないだろう。

「でもねー……」

と、今日初めて、唯利亜は俺の目を見た。なんだろう。

「ボクね、驚かされるのは、好きじゃないんだよねー」

『……………』

蒸し返すか、それを。ついさっきのことではあるが、忘れてもよかったのに。

「奈都海が積極的なことなんてほとんどないもの。私も驚いて正常な判断ができなかったのよ」

九能も唐突に言い訳を開始した。脈絡のなさすぎる弁明は見苦しいだけだが、なぜか愛燕も唯利亚も、それに同意を示した。

「たしかに。朝からそんなことをされたら、慌てるのも致し方ないかと」

「そーそー。やるなら夜のうちにやっておいてよ」

なぜ俺が非難されてるんだろう。元はと言えば九能のフェ……………なとかのせいじゃないか。俺に落ち度がないのかと言われればそんなことはないが、しかしその割合はどう考えても九能のほうが大きいだろう。

しかし、こういう時の男の立場は決して高くないことは学習しているので、反論できなかつた。したところで、俺の予想もつかない理屈と言い回しで理不尽に論破されるだけだ。

『悪かつた』

納得できるはずのない謝罪を、俺は言う他なかつた。

って、なんでお前ら笑ってやがる。

この微笑ましい光景を、影から窺う女子生徒がいた。
彼女は、しばらく彼らのうちの一人に視線を合わせ
何かを決めたように頷いて、学校に向けて歩き出した。

「うい つ、やーっと終わった！」

わけのわからない奇声を上げて授業終了の喜びを表現した宇類は、他人の振りをしたい俺の内心をすっぱり無視して、俺の肩に慣れ慣れしくその手を置いた。

「奈都海、今日、なんか用あんのか？」

ここで即座に「帰ろう」と言わないのはさすが宇類だ。こういう細かい気遣いができるから女にもてるんだろうか。

何も無い、と言いたいところだったが、生憎、今日は生徒会の仕事があるのだった。

伝えると、宇類は残念そうな表情で、しかし笑いながら俺の肩を叩いた。

「そーかい。生徒会の方々が忙しそうで何よりだ。俺なんか暇すぎ

「て死にそう」

“女遊びに忙しいんじゃないのか？”

俺の書いた文を読んで、宇類は顔を顰めた。割と本気だ。意外な反応だった。いつも通り笑って返してくれるものとはかり思っていたのだが。

俺の意外そうな表情に気付いたのか、宇類は少々慌てていた。

“悪い。不快だったか？”

「いや、そういうんじゃないよ。ただ」

宇類が言い淀む。俺は、宇類が続けるのを待った。言わないのなら、それでも良かった。

「そろそろけじめつけねえと、と思ってな」

けじめ。

宇類がその言葉を使った時、何を意味するか、長年の付き合いになる俺にはわかった。

「宇類！一緒に帰ろう！」

宇類に無邪気に話す^{まこと}真実も、聞けばわかるはずだった。

だが、宇類は俺に話したことを真実には言わず、ただ「おう！」と、真実の誘いに答えただけだった。

「あれ、奈都海は？」

「生徒会の仕事があるんだとよ」

俺が書いて示すよりも前に、宇類が代弁してくれた。

「そつか。じゃ、奈都海、また明日　　じゃなくて月曜日ね！」

子どものように勢いよく手を振る真実と、それを見て苦笑する宇類に別れを告げて、俺は九能の下へ向かった。

九能は既に、身支度を整えていた。

『今日は帰るのか？』

「ああ、奈都海。まあね。今日は体育館もホールも使えないから。演者に体力づくりやっとくように言って終わりなの」

そう言いつつ若干急ぐ素振りを九能は見せていた。

「っていつても、これからみちかと打ち合わせとかあるから今夜は奈都海のとこ行けないかも。ごめんね？」

『それは構わんが……、あまり無理はするなよ？』

「だいじょーぶ！そもそも無理しても大丈夫な身体なんだから。でも」

九能の顔が、一瞬、鼻が当たるくらいにまで接近してきた。

「心配してくれてありがと！じゃ、また明日！」

放課後とはいえ授業終了直後という衆人環視の中でキスしたこと

に抗議する暇もなく、九能は教室から走り去っていった。

その後、恥ずかしさを押し、なんとか生徒会の根城である第二会議室に向かった。

コーヒートの飲めない奈都海の前で堂々とブラックコーヒートを頼んだ鳴姫は、しかしそれが来ても口をつけることもなく、スプーンを弄りながら窓の外の雨の中を行き交う人々を見ていた。あるいは、人ではなく背景の建造物だったかもしれないが。

しかし、黒髪美人が冴えない表情で窓の外を眺めているというこの光景は、傍から見れば非常に画になるものであり、その対面に座って無言かつ無表情を貫く男という図も、併せて見ると沈黙を以て語り合うクールなカップルという風に見えた。

しかし、実際はまるつきり異なる。

自ら誘ったにも関わらずコーヒートを頼んでから一言も発さない鳴姫。

誘われたが故に話題を持っておらず、かつ沈黙を苦痛に思うタイプではないために話題を探す努力すらせずに鳴姫が喋り出すのを黙して待ち続ける奈都海。

二人が揃ってから、既に30分が経とうとしている。鳴姫のコーヒートから上がっていた湯気も、もうなくなっていた。

鳴姫は窓の外を、奈都海はその鳴姫の横顔を、そしてその二人を怪訝な顔をした店員が、見ていた。

それから10分。奈都海は待ち、鳴姫は考えていた。

「奈都海さん」

鳴姫が、呼ぶ。奈都海は、頷くことで促した。

「最近の宇類、どうですか？」

抽象的すぎる質問に、奈都海は首を傾げ、筆を取る。

“どう、とは？”

「……………えつと、」

鳴姫の言い淀む姿を見て、奈都海は少々驚いていた。宇類同様、長く交流のある奈都海も、言葉に詰まる鳴姫という姿は、ほとんど見たことがなかったのだ。

しかし、鳴姫にも奈都海の質問に答えられる言葉は持っていないかった。元より本題に入る前の布石のような形で訊いたものだ。そこまで深く考えていなかった。

昨日、つまり金曜日の放課後、鳴姫は奈都海にメールを送った。理由も何も書かれていない、ただ日時と場所の指定されたメールを。奈都海は鳴姫からのメールに大いに驚いたが、それ以上にメールの内容に困惑した。

奈都海は、このメールが本当に鳴姫から送られたものなのかを真剣に考えた。もしかしたら鳴姫の身に何かあったのではないかと危惧したのだ。

飛躍しすぎた考えにも見えるが、鳴姫の立場を考えると可能性はないとはいえない。

なぜなら

「ねえねえねえねえ」

と、突然、何かが寄ってきた。

「ねえ、君さあ、なんでそんなくらくい顔してるわけえ？彼に振られたのお？」

奈都海は、予想通りで、かつ面倒なことになったと深く溜息をついた。

いわゆるチャラいと分類されるだろう男の二人組が、奈都海と鳴姫のテーブルの前に立っていた。

「じゃあさ、俺たちと遊ばない？」

「遊ぶっつかむしろやらね？俺ら、結構上手いって評判だからさ」

だが、彼らが話しかける鳴姫は一切目を向けず、言葉も返さなかった。

奈都海は少々彼らに同情した。鳴姫には既に決めた男がいるということに、ではなく、今現在、鳴姫に無視され続けているということでもなく、彼らの頭がかわいそうなことに、でもない。

彼らが、鳴姫に興味を持ってしまったことに、である。

「ねえねえ、さっきから君、話聞いてる？」

聞いているわけがない。相変わらず鳴姫はティースプーンでコーヒーをひたすらかき混ぜ続けていた。

その様子に、ついに二人はキレた。

「おい、あんま調子に乗」

シュツ、と

男の顔面に伸びた鳴姫の手を、奈都海は止めていた。

鳴姫の手にはスプーンが、そしてそのスプーンは、男の眼球に触れそうな寸前で止まっていた。あと一瞬でも遅ければ、そのスプーンは男の目を抉っていただろう。

“何しようとしてた”

奈都海が簡潔に書くと、鳴姫は、

「言い寄る男は目を割り抜け、と言われているもので」

と、物騒なことをこともなさに答えた。

ここに至ってようやく、男は自分が何をされそうになっていたのかを理解し、「ひっ」と情けない声を出しつつ尻餅をついた。だが、

「この女　、へっ？」

彼らに降りかかる悪夢は、こんなものではなかった。

二人の背後に、大柄なスーツ姿の男が数人、立っていた。

「少し、お時間よろしいですか？」

字面だけは丁寧に、しかし乱暴にその首根っこを掴まれた男たちは、

「え、あ、や、なに」

状況を理解する前に、店の外へと連行されていった。

店の客も、店員も、連行する男と連行される男を呆気にとられながら見ていた。

見る者が見ればわかるだろう。スーツを纏った男たちは、いわゆるヤクザと呼ばれる職業の人物である。

そして、そんな人がなぜここにいるのかと言えば、

“いたんだな”

「すみません。来るな、とは言っておいたんですけど」

鳴姫は、ヤクザ、あるいは暴力団と呼ばれる一つの組織の頭、その一人娘であった。

“監視されてるのはあまりいい気分じゃないな。まあ、仕方ないかもしれないが”

「大丈夫ですよ。奈都海さんはうちではVIP扱いですから」

そういう問題ではない、と奈都海は口を動かしたが、それは鳴姫に届くことはなかった。

「でも」

と、鳴姫は唐突に持ってきたセカンドバッグを探りだした。

「これで確信できました。この中に、必ず」

奈都海が見守る中、鳴姫が鞆から取り出したのは、小さなボタンのようなもの。だが、奈都海にはなぜか予想ができた。

“盗聴器か？”

「そうです。父親に命じられて誰かが入れたんでしょうけど」

そう言っつて鳴姫は盗聴器をスプーンで押しつぶした。その残骸を掬ってコーヒーの中に入れていく。最初から飲む気はなかったらしい。

盗聴器という日常では見ることのないものを見ても、奈都海は驚かなかつた。彼自身が魔術師という非日常の具現であるからではなく、鳴姫との付き合いがあれば刃物や銃器すら目にするのであつたからである。

「今日の話は、あまり聞かれたくないことなので」

言い訳にも聞こえる鳴姫の言葉に、奈都海は『そうか』と言つた。一言くらいなら、書かずともある程度はわかるものである。だが、直後に奈都海はペンを取つた。

“それで”

と書き始め、

“何か話があるんだな？”

と続けた。

「はい。話というか、相談に近いんですけど……………」

再び詰まる鳴姫のその顔を、奈都海はやはり怪訝な顔で見遣る。それほどに言いにくいことなのか、と奈都海は思つたが、口にも

文字にもせず、ただ待ち続けた。
奈都海の思っほど待たずに、鳴姫は口を開いた。

「できた……んです」

と。

『……………』

奈都海は固まった。

頭が理解を拒んでいるかのように、奈都海はその言葉の意味をし
ばらく考え続けた。

「できた」

つまり、何ができたのだろう、と。

だが、奈都海の脳はすぐに結論を出してしまった。女性が、単純
に「できた」と言った時、それが何を示すのか、を。

奈都海は、それがわからないほどバカではなかった。

だが、それを口にすることはできなかった。文字にして、確認す
ることもできなかった。

わかっているのに、奈都海は訊いてしまった。

『できた……、って』

「はい。子どもが」

予想通りだが望んでいなかった答えに、奈都海は、逃げ出したく

なる衝動を必死に抑え込んだ。

Noisy Lyric . 3 . 3つの変容(前書き)

いつも以上の出来の悪さは勘弁してください……

日曜日。

俺は朝食を食べた後、部屋に戻った。

唯利亜はどこかに出かけており、亜美さんはまた執筆のためか部屋に籠ってしまった。

自主的に外出する習慣はなく、そもそも雨の降る中を好んで歩く趣味を持たない俺は、結局部屋で時間を潰すしかなかった。

いつもの如く今日も九能はここにいる。雑誌を読んでいるその隣に座り、さて、と昨日のことを思い出す。

とある喫茶店で俺に相談を持ちかけたのは、鈴平鳴姫。その内容は、妊娠したがどうすればいいのか、というものだった。

妊娠、である。

まさか後輩からその単語を聞くとは露とも思っていなかった俺は、耳がそれだと認識した瞬間、比喻ではなく本当に頭が真っ白になって思考が止まった。

脳が復活しても、思考力はさほど変わらなかった。

とにかくわかる事実を確認した。

まず、子どもの父親は宇類であるということ。最悪の可能性も危惧したが、それは本人によって否定されたため、それに関してはひとまず安堵した。

そして、それは産婦人科での検査の結果でもあるということ。鳴姫の早とちりという可能性はなくなった。既に五週目、つまり二月目であるということも聞いた。

次に、この事実をどれだけ人間が認識しているのか、ということ。これに関しては俺も予想していなかったが、鳴姫がこのことを話したのは俺が最初だという。真っ先に伝えるべきはずの宇類、あるいは両親にも言っていないらしい。戸惑っていたのはわかるが、

これはさすがに俺も驚いた。

最後が、鳴姫本人の意思。つまり、産むのか産まないのか。訊いたのは俺だが、こう言うだろう、と予想はしていた。

俺の予想通り、鳴姫は、「産む」と言った。

ならなんで俺に相談したのか、とは言わなかった。

俺は妊娠させたことも、男だから当然だが妊娠したこともない。だから鳴姫が何を考えているかは、残念ながら推し量ることもできない。

だが、自分の手に余る事態に自分が陥った時、誰かにそれを知ってもらいたい、一緒に考えてもらいたいという気持ちは理解できる。直接訊いたわけではないが、鳴姫もそれに近い思いを抱いていたはずだ。

しかし、と、俺は鳴姫の話を一通り聞いた上で言った。

俺は、話を聞くことはできる。だが、そのことに関して共に考え、何かの結論を見出すことはできない、と。

何か結果が、結論が欲しいなら、当事者同士で話せ、と。

妊娠というあまりにも重すぎる責任を負いたくないというのも本音の一つだが、それ以上に、宇類と鳴姫の二人には間違っただけでなかった。反省の材料にはなっても、後悔するようなことにはなっていない。

二人は幼いころからの親友でもある。この二人が親の都合で会わされ、その思惑通りになったことも知っている。そのことで悩み、一度は気持ちが悪くなったことも知っている。

だが今は、二人がお互いに想い合っている。それが二人の幸せなら俺は応援したいし、続くことを二人が望んでいるのなら、俺にできることなら全力で手伝いたい。二人の親に関して言えば、おそらく二人は全く問題にはしないだろう。むしろ、二人の親は諸手を挙げて喜びそうだ。

だから、俺が気にするのは二人の気持ち。

鳴姫は産みたいと言った。

だが、宇類はどうだろうか。あいつは普段は見た目相応に軽薄な性格をしているが、いざとなれば真面目な一面が出てくる。

鳴姫は一日考えて、月曜日の学校で宇類に伝えるところだったが、果たしてそこで宇類は何を考え、何を想い、それをどう鳴姫に言うのか。

二人で考えろと言った以上、俺は傍観者に徹するしかないが、二人とはもう10年近くの付き合いになる。完全に放っておくなど、できるはずもない。どうしても思考は二人のことになってしまうのだ。

あの後帰って来てから今まで、ずっと同じことばかりを何百回と繰り返し考え続けた。

疲れた頭を休めようと天井を仰ぐ。

そこへ

「奈都海」

九能に呼ばれてそちらを見る。

九能の顔が、眼前にあった。

『どうした』

若干怯えつつ訊く。まさか考えていることを悟られたとは考えていないが、それでも何かに悩んでいると思われたのかもしれない。

しかし、

「奈都海さ」

『……………』

「テレビ電話機能のついた携帯、買わない？」

『…………は？』

それは予想外というか、そもそも思考の要素の一つたりと関係しているわけではなかったため、俺は呆気にとられてしまった。

「ほら、奈都海の携帯、テレビ電話できないじゃない？だから、その機能のついたやつ……、じゃなくてもSkypeのできる携帯でもいいから持っておいた方がいいかなーなんて思ったり」

『なんでそんなことをいきなり』

「だって、奈都海との電話って一方的になるじゃない。メールだと話すより時間がかかるし。顔さえ見えれば私とは離れてても会話できるんだし、いいじゃない」

『まあ、ああ……そうかもな』

俺の訊きたいこととはずれた答えをしてくれた九能に、俺はそれだけしか言うことができず、結局買うことになってしまった。

まあ、そろそろ携帯も旧くなってきたかと思いきや始めてきた頃だし、ADEOIAで働いているようなものだから金もないわけではない。問題はない。

「で」

と、安心しきった俺に、九能は言った。

「なにに悩んでるの？」

『……………』

しまったと思った時にはもう遅かった。ここで黙ったら、肯定しているも同然だ。

「何かあったの？昨日、帰って来てからずっとだよな？それ」

俺の鼻先を突っつきながら九能は言う。「それ」とはつまり、俺の様子を指しているのだろう。自分では隠しているつもりだったが、いかんせんこいつに隠し事はできない。

だが、だからといって鳴姫のことを言うわけにはいかなかった。それがたとえ、九能であっても。

『……………察してくれ。言えないんだ』

九能は俺を見つめる。というかむしろ見透かす。心の奥底まで見通されているような錯覚に陥るくらい、深く、まっすぐな視線だった。

一方的、なのかどうか分からないアイコンタクトを続けること30秒。唐突に、九能は読んでいた雑誌に顔を戻した。

「そ。じゃ、いいわ」

『……………え』

「なによ、その顔は？訊いてほしいの？」

思わず九能の横顔を見つめしまった俺に九能は言い、俺はそれに首を振る。もちろん横に。

そうして九能は、雑誌を見ながら、まるで独り言を呟くように言

った。

「別に訊いてほしくないなら無理には訊かないわよ。奈都海本人の問題じゃないみたいだし。私が聞いても仕方のないことなら知っちやっても面倒なだけだしね」

『……悪いな。といつても、もしかしたらいつか、お前にも相談するかもしれないが』

目だけを向けて、九能は俺の唇を読んだ。

「その時はちゃんと聞いてあげるわよ。伊達にあんたの三倍も生きてないからね」

最後に冗談ぽく付け足されたその言葉に、俺は少しだけ救われた。

「そうは言っても、妊娠とか出産とか、そんな話になるとお手上げだけだね。経験一切ないし」

そして、九能には相談しないことが今まさにここで決定した。

「宇類」

朝。

SHR前の教室で、いつものメンバー　つまり、俺、九能、宇類、真実まじと、那束なづかの5人で雑談をしていた時、そこに一人の女子生徒が乱入してきた。

彼女は宇類の傍らに立ち、イスに座っている宇類を見下ろしていた。近すぎるゆえに、その接近に気付いたのは宇類が最後だった。といっても、

「鳴姫……?」

その名前は、九能と那束にはわからなかったが。

「話があるの。来なさい」

「は?」

怪訝な表情で見返す宇類の腕を、鳴姫は掴んだ。

「いや、おい。ちょ、なんだよ……!?!?」

抵抗もせず、宇類はそのまま引かれていった。

「……………何あれ」

『さあな』

九能の疑問には、曖昧に答えておいた。

「おい！なんだよ、いきなり！いい加減離せつての！」

非常階段の踊り場に来たところで、鳴姫の手は宇類の腕を解放していた。非常階段は、基本的に生徒が使うことはなく、たまに行われる避難訓練に使われるくらいである。そのため、人はほとんどおらず、よく男女の密会に使われる場所だった。

SHR前ならばなおさら、人はいない。

「あー、いつてえ……。本気で掴むんじゃねえよ。お前、自分の握力どれだけあると思ってんだ」

宇類は自分の腕をさすりながら鳴姫を睨んでいた。

が、鳴姫はそれを涼しい顔で受け流し、宇類の言葉も無視した。

「話があるのよ」

「さっき聞いたよ。で？こんなところに連れて来てどんな話しようってんだ？」

「……………」

鳴姫は黙った。黙ったまま、宇類を見ていた。しかしそれは、睨むというより、決意を固める寸前の勇気と怖れのないまぜになった目で彼を見据えていた。

それに気付いた宇類も、表情を固める。少なくとも、軽く話せる

話題でないことはわかった。

「話せよ。何言っても逃げねえから」

鳴姫の目から怖れの色を拭わせるように、宇類はなるべく優しい
声で言った。

それでも鳴姫はなかなか口を開かなかった。あまり時間をかけるとSHRに遅れることになるが、元より二人はそんな些事に気を懸けるような性格ではない。鳴姫は自分の中の覚悟を固め、宇類はそれを待った。

しばらくして、ようやく鳴姫はその口を開いた。

「これは……、先に奈都海さんに相談したんだけど」

「奈都海に……？ああ、それで？」

鳴姫は、なぜ奈都海に、と訊ねなかった宇類に内心で感謝しつつ、
続けた。

「妊娠、した」

「……………」

宇類は、言葉を失った。少なくとも、鳴姫にはそう見えた。
想像以上に重いその言葉に、宇類は戸惑いを必死に隠して、まず
訊かなければならぬだろうことを、訊いた。

「誰の」

「もちろん、あなたの」

「そうか……」

予想通りだが、認めたくない事実にはシヨックを受けた。かといって、他の男の子どもだったら、と望んでいたわけではなかった。むしろそうだったらこの場で発狂してもおかしくないが、しかしそもそも、望まず女を孕ませたという事実は衝撃を受けるのに十分すぎた。

そして、そんな大事を自分以外の男に先に相談していたということもまた、シヨックを受ける要因の一つだった。その相手が長年の友人であったとしても。

「……いつわかった？」

「先週の火曜日よ。産婦人科に行って……」

「奈都海に相談したのは？」

「……っ、土曜日、よ」

がらにもなく申し訳なさそうに言う鳴姫に、宇類は思わず舌打ちしかけた。

「なんでそんなこと、一週間も黙ってたんだよ……!?!」

「そ、それは……!……、それは……怖かった、のよ」

「怖かった……?なにがだ」

訊かれた鳴姫はしばし視線を彷徨させた。が、睨む宇類に圧され、

10秒も経たず答えた。

「産むな、って言われるのが」

「ッ！？お前、産む気なのか！？」

宇類の驚愕は鳴姫にとっても尤もだった。

「やっぱりあなたは賛成しないのね」

「……だから奈都海に先に相談したのか？」

「ならあなたは、あなたに先に相談すれば産ませてくれたの？」

「そういう問題じゃねえだろ！？ ああもっ……！」

すれ違う話に宇類は頭を抱える。

宇類は、まさか産むかどうかという話になるとは思っていなかったのだ。それを真っ向から覆された宇類は、それだけで言葉に窮してしまった。

「私は産みたい………それだけじゃダメなの？」

鳴姫のその縋るような声にも、宇類は戸惑いを覚える。

とにかく、頷いてしまいそうになる自分を叱咤して、鳴姫に説得を試みる。

「鳴姫」

「……………」

だが、宇類は鳴姫を見て、言葉が出てこなかった。宇類は、その表情を見て鳴姫に意志を変えるつもりのないことを悟った。

宇類は、

「……わかった。お前の好きにすればいい」

鳴姫も意外に思うほどに、あっさりと許容した。

「俺も父親としてできる限りのことはしていく。まだ高校生だからそれもかなり限界があるだろうけどな」

しかも、手助けまで約束する。

鳴姫は妊娠が分かった時点で葛藤の余地もなく出産を決意した。それが女性故の思い切りの良さによるものなのか、鳴姫の本来の性格によるものなのかは本人にもわからないが、男である宇類がこのことを受け入れるのは難しいと、鳴姫は勝手に思い込んでいた。

鳴姫以外の女性に分け隔てなく軽薄な態度で接する宇類は、しかし、いざとなれば奥底に眠る生真面目さと正義感を表出させる。

いじめには果敢に挑み、教師のセクハラに悩む女子生徒を救い、箱入りだった女の子に外界を教えた。

自分の夢を追って家を出た兄に代わって父親の企業を継ぐことを受け入れ、そのために高校に通いながら経営学と裏の世界との付き合いを学び、他にも候補のいた鳴姫の想いを受け止め、彼女の幸福を誓った。

なら 出産は、どうだろう？

産むのが正しいのか、それとも産まないのが正しいのか。

16歳という微妙な年齢と高校生という不完全な立場が、その判断を難しくしていた。

正しかろうが正しくなかりうが鳴姫は産むつもりだったのだが、

宇類がどう判断するかが、彼女にとっての最大の懸念だった。

まずは反対するだろうとは思っていた。だが、ここまで早く賛成を得られるとは、想像もしていなかったのだ。

鳴姫はそれについて疑問に思うよりもまず、心から湧きあがる歓喜の声を抑え込むのに必死になった。

「本当に、いいの？」

「産みたいだったのお前だろうが。土壇場になって、やっぱり…、なんて聞かねえぞ」

改めての確認に是と答えた宇類に、鳴姫は今度こそ抑えることができなかった。

「……っ」

「お、おい！？なんでそこで泣くんだよ!？」

言われて始めて、鳴姫は自らの頬を伝う涙に気付いた。

「う、うるさいわね……、好きに泣かせてよ……」

「そこで泣いてないって言わないのがお前らしいよな、ほんっと…」

…」

そう言って、宇類は苦笑のように微笑んで鳴姫を抱擁した。

鳴姫は抵抗しない。抵抗する力も、意志もなかった。

S H Rが終わって生徒が教室から出てくるようになるまで、鳴姫はずっと宇類の胸の中にいた。

だから、遅刻を教師に見咎められないために非常階段を使って、偶然二人の話を立ち聞きしていた生徒がいたことに、二人は気付けなかった。

かのファントムとの戦いが終わって一週間後の土曜日。

昨日までの晴天とは打って変わって、外では雨粒が地面を打つ音ばかりが車の走行音すらかき消して響いていた。

8月が終わって久しく、もう幾許もしないうちに10月に入る。

最近、9月も夏のうちに入れてもいいのではないかと割とどうでもいいことを考えているA D E O I A 准将・西園寺九能は、60年前はどうだったかななどと考えながら、太くごわごわした白髪にハサミを入れた。

「……こうして准将に髪を切ってもらうのは何年ぶりになるかな」

九能の前にテルテル坊主になって座る50代と思しき男性は、彫の深いその顔にしわを作って笑った。

「さあ……………、ただ、こっちに来てからは切ってませんし」

「そうすると15年は経っていることになるか……。懐かしいな」

男は感慨深げに目を閉じ、回想に浸る。その男の頭の上で、九能はハサミと櫛を慣れた手つきで動かし、少々短めの、本人にとって長い白髪を切っていく。

彼の名は、八剣兼平^{やっぺるぎかねひら}。A D E O I A の中将にして、日本中国地方支部の支部長である。

年齢は57。既に前線からは退いているが、それまでの彼は非常に高い指揮能力を発揮し、彼の指揮する部隊は最も戦死者の少ない部隊として知られていた。もちろん、戦果に関しても精鋭と呼ばれるレベルにあった。

彼が部隊を指揮しなくなったのは10年前、魔術団に敵対する組織との戦闘の際、その右半身を大きく損傷したことによる。今は魔導機械によつて失った身体を補っているが、それだけで元通りにできるほど魔導機械に関する技術は進んでおらず、今では立ち上がることもすらままならない。

2年前のD M F B大量発生現象、通称P u r g a t o r y W e e k までではそれでも戦場に出て配下の指揮を行っていたが、九能が副支部長に就任してからは実質引退した形で、中国地方支部の指揮権をほぼすべて九能に預けている。彼が未だにここの支部長に居座る理由としては、西園寺九能という危険人物を監視し、抑制できる（実力的にはなく、権力的に）存在が必要だからである。つまり上層部の都合である。

八剣は既に半ば隠居の身。今では、形だけの任務報告か私事ですか、こうして九能ら他の部下と会うこともない。

自身の半身とともに妻も亡くした彼は、子も自立した今、ともに暮らす者もない。基本的には支部に赴いてはいるものの、ほとんど支部長室で過ごしている。

二人のいる理容室もこの支部の中にあるのだが、八剣が訪れることは今までなかった。

回想を終えた八剣は、ふと思い出したような口調で、九能に訊ねた。

「そういえば報告書を読んだのだが……、”ああいうこと”は別に書かずともよいのでは、と思ってしまうたのだが？」

はじめ、“ああいうこと”が何を指しているのかわからなかった九能だが、自分の書いた報告書を思い出し、同時に推測した。

「ファントムにされたこと、ですか？」

「ああ。辛かろう？」

九能は、困ったように笑った。

「それでもありませんよ。幼少の頃に慣れましたから」

「……………」

伝聞ではあるものの九能の過去を知る八剣は、答えることができなかった。

代わりに浮かんだのは、別の質問だった。

「では、幣原奈都海はどう言っていた？」

「……………それを聞いてどうするといふんです？」

八剣は鏡を通して九能の顔が呆れに満ちていることに気付いたが、これ幸いにと口を笑みに歪めた。

「恋人がレイプされたのだ。憤りや嫉妬はなかったのかね？」

「どうでしょう……………。奈都海が嫉妬、というのはイメージできませんが」

「くつく…………、男は女が思うよりも嫉妬深いものだぞ？腹底では独占欲が渦巻いていたのではないか？」

八剣のからかいをまともに受け止めた九能は、小声で呟く。

「…………たしかに、あれからちょっと激しくなった、かも……………」

「ん？何か言ったか？」

「な、なんでもありません！」

誤魔化す九能に、豪快に笑う八剣。

こうして、少々押され気味の九能は、それでも手元を狂わせることもなく順調に八剣の髪を刈っていった。

そして、九能がそろそろ仕上げにかかろうかという時。八剣が「准将」と、九能を呼んだ。

「もうすぐ学園祭らしいが…………、学校のほうはどうかね？」

九能は八剣の曖昧な質問に、微笑んで答えた。

「楽しいですよ。この歳で学校に行くというのも変ですけどね」

「今まで行けなかったのだからよかろう。遊びに行っているわけでもなし……。准将は任務に従順すぎる」

「私がここにいるには仕方ありません。でなければ牢獄行きか実験器具ですよ」

諦念を大いに含んだ九能の言葉を、しかし、八剣は軽く鼻で笑い飛ばした。

「だから従順すぎると言っている。准将の能力なら、一人で魔術団を相手にできるはずだ」

「……………」

九能は意図せずその手を止めていた。八剣はそれを指摘することなく、言葉が続ける。

「顕現もあと2回残っているのだろう？2回分の時間で魔術団の中樞は十分壊滅させられる。魔術団に従う理由が、貴様にはない」

「……………私は」

「平穏を望んでいるとも言つつもりか？　いくつもの紛争のきっかけをつくった貴様が」

八剣の言うことは極端だが間違っではないなかった。

九能の源血の“戻ること”という特性は死ぬことを許さず、放たれた魔術は魔力に戻される。攻撃は届かず、届いても意味を成さない。

つまり、顕現さえすれば、九能は無敵だった。だから、相手の規模も強さも無関係に九能は敵であれば倒すことができる。

だがそれは、九能が“一人”であれば、という前提がなければならぬ。

「私には、守りたい人と失くしたくない想いがあります」

「ほう？」

「中将は私を過大評価しています。人は、守るべきものがあると弱くなるものなんです。それを失う恐怖とも戦わなければなりませんから」

「なるほど」

「私が反逆の意志を見せれば、魔術団は間違いなく彼らを一質に取ります。そうなれば私は、剣を置かざるを得ない」

「ふん……」

八剣は、不敵に笑っていた。九能はそれに気付けない。

「私には彼らが大事な存在ではないと演じる器用さありません。だから私は、彼らを守りさえできれば、最悪、“彼”と“彼女”だけでも守ることができれば、それでいい」

言いきった九能に、八剣はその笑みのまま問うた。

「なら、死ななければ奴らを殺すと言われれば、言った相手が貴様には勝てない相手ならば、貴様は死ぬのか？」

「ええ。どんな方法を使つてでも、死んでみせます」

九能の言葉には、諦念に満ち満ちた決意があつた。聞いた八剣は、笑みを深めた。

「ならいい」

「……いいんですか」

「わたしにはどうせ理解できん。准将の生き方はわたしとは違ひすぎる」

腑に落ちない様子の九能だったが、八剣に「続けてくれ」と言われ、再びハサミを動かし始めた。

「耳かきもお願いしたいのだが」

「それは残念ながら奈都海の特権です」

項垂れた八剣は、髪を切りにくい、と九能に無理やり頭を起こされた。

会ってしまった。

誰に、と言えば会長に。どこで、と言えば教室棟と特別教室棟を繋ぐ渡り廊下で。

実質的な生徒会室になっている第二会議室に到着するまでに覚悟を決めればいいと、ある意味樂觀していた俺は、会長の姿を見た途端、思わず歩みを止めてしまった。

かの戦いで俺と会長がしたことを考えると仕方のないことかもしれない。ADEOIAのほうでも姿は見たが会話もせず、今まで学校に来て也會うことはなかった。

生徒会の仕事をサボっていたわけではない。今週の火曜日から学校に来て、ほぼ毎日第二会議室にも通っていたが、会長と会うことはなかった。学外に行く仕事をしているか学園の中を歩き回らなければならぬ仕事をしているか、である。それが、俺と会いたくないがためであるということは聞かずともわかることだった。

「え、つと……」

戸惑っているのは会長も同じらしい。周囲を見渡しているが、渡り廊下には二人以外誰もいない。

そして、ついにはその捨て猫のような目を俺に向けてくる。俺も同じ境遇だというのにそんな目をされても困るだけだ。

「い、一緒に行こっか？」

口だけが笑みを作る会長に、俺は頷くことしかできなかった。必然的に、そうなるのだが。

会長と隣り合って廊下を歩く。

会話はなく、あるのは気まずい沈黙だけ。

何を言えばいいのかわからない。どんな態度でいればいいのかわからない。

明日は土曜日だから学園祭関係で学園には来なければならぬ。

その時には必然的に顔を合わせることになるのだから、今のうちにこの雰囲気は克服しておきたい。

だが、その方法が俺にはわからない。

方法があるかどうかすら、わからない。

完全な手詰まりだった。

第二会議室に行くのは憂鬱だったが、今では一秒でも早く第二会議室に辿りつきたいと望んでいる。他の生徒会役員の助けが欲しかった。

助けてくれるかどうかというところには、その時考えが及ばなかった。

会長はどのようなかと横目で見てみるが、一見したところ普段と変わりはない。だが、心中まではわからない。唯利亜なら一目でわかっってしまうのだろうが、俺には目に見えることを比較することしかできない。確かに表情自体は若干強張っているが、その原因まではわからない。俺の能力など、所詮その程度しか役に立たない。

一階に下りる階段に差し掛かった時、会長が口を開いた。

「ごめんね、ナツ」

突然の謝罪に俺は反応できなかった。だが、その謝罪が何を指しているのかはすぐにわかった。心当たりは一つしかないのだから。俺は首を振って気にしないでくれという意志表示をしたが、会長はそれでは収まらないらしく引き下がることはなかった。

「そんなわけには……、ナツには彼女だっているし、謝罪に意味があるかどうか……。本当にごめんなさい」

いきなり立ち止まって腰を折る会長。俺は、戸惑う。とりあえず、メモ帳を取りだしてペンを走らせた。

「会長の方こそ大丈夫なんですか」

「私は……、大丈夫よ。初めてってわけでもなかったもの」

メモを読んだ会長が笑う。当然、その笑みが本気のものであるはずがないのだが。

しかし俺は、その笑顔に甘えることにした。これ以上俺が食い下がっても、なにも生産的なことはない。

何もせずに解決するなら、それが一番いい。

再び沈黙が降りたが、さほど経たずに第二会議室には到着した。特別教室棟は元々そこまで広くはない校舎だ。階段からの距離も長くはない。

扉を開けると、そこには5人の生徒会役員がいた。

第一書記の片桐亜美さん、治安委員長の常盤柄鈴音さん、第一副会長の後朱雀竜樹さん、そして、第二書記の水橋彼方みずはしかなたさんと第二副会長の御几川涼右みきがわりようゆうさんの5人だ。

「おー、ジャンちゃん。はよー」

「亜美……。もう夕方よ」

真つ先にこちらに気付いた亜美さんに、会長が突っ込む。二人は同じクラスだが、3年は、今は出席の義務のない受験対策用の授業をやっているため、同じクラスといえども必ず会えるわけではない。

「片桐はそもそも今日、一切授業に出てないからな」

「そついえば見なかったわね……。何してたのよ」

「鳳秋祭のスポンサー探し。この時期は詐欺も出てくるから自分で出向いていった方が信用されやすいんだよ」

会長は「それで見つかったの？」と亜美さんに訊ねる。その質問に期待はほとんどなかった。

「いやー……。ちょっと懐かしい友達と会っちゃってね……。全然」

会長を含めて全員が溜息をついた。

というか、この期に及んでスポンサーを増やされても俺の仕事が増えるだけなんですけどね。

「ああそつだ、奈都海、ちょっと来てくれないかな」

俺を呼んだのは水橋彼方さん。さっきも言ったが第二書記だ。伸びるに任せた髪といい適当に気崩した制服といい、さばさばした印

象を受けるが、実際その通りだ。姉御肌、とでも言えばいいのだろうか。制服はまだ夏服だからボタンを留めてくれないと胸元が大変なことになってしまっただが（彼方さんの来ているのはセーラータイプの一つ。夏はブラウスになる）、俺はそこには目を向けられないようにしている。本人は気にしないが周囲の視線が痛いことになる。

「3年のいくつかのクラスから予算の配分に関して不満が出ていてね。最後の学園祭なんだからもつと増やすべきだとかなんとか。どうにかならない？」

『はあ………』

ならない？と言われても。予算の配分に関しては規則で決まっているし、俺の一存でそれを変えるわけにはいかない。生徒会の役員一人一人にある程度の裁量が任されているとしても、だ。金が絡むと、どうしても難しい。なんで俺は会計委員長なんてメンドクさい役職に就いてしまったんだろう。

とりあえず難しいという旨を告げると、彼方さんは「そうか。ならしい」と言っただけで書類に何かを書き始めた。ここまで諦めがいいと逆に不安になる。俺個人としては楽だからいいんだけども。

「会計委員長は全く取り合ってくれなかったと言っておこう」

『うっおい！っ』

思わず反応してしまった。

『なぜ！？』

と書いたメモ帳を彼方さんに突きつける。しかし、彼方さんの反

応は薄かった。

「事実じゃないか」

確かにそうかもしれないけど！規則だから、とか言い方はいくらでもあるでしょうに。なんで個人が攻撃されるような言い方を取るのか。頼むからやめてほしい。

「むう……、いちいち面倒な男だな、君は。無理だ、という主旨が伝われば問題ないだろう？なぜそこまで言い方にこだわるんだ？」

『俺だけが恨まれるような言い方でしょう、それ！』

「何事にも犠牲は必要だよ。要請の通らなかつた彼らは、その怒りを一体どこに向ければいいと言っただい？」

『少なくとも俺に向けさせるのはやめてくれませんかね！？』

俺の必死の抵抗が功を奏し、彼方さんは「しょうがないな……」と、諦めてくれた。

だが、しかし。

よくよく考えれば、彼方さんは「会計委員長は云々」ということをわざわざ口にする必要はなかつた。本当にそう言いたいなら俺の前では黙っていれば良かったのだ。

「……………ふ」

からかわれた。そう気付いたのは、彼方さんの不敵な笑みを見た時だった。

俺が心中で落ち込んでいると、近づいてくる人影があつた。

「あまり下級生を苛めるもんじゃないぞ、彼方？」

御几川涼右さん、第二副会長だ。生徒会では涼、あるいは涼さんで通っている。

「何を言うか、涼。下級生苛めこそ最上級生の醍醐味だろう」

「そんなもんが醍醐味であつてたまるか。ほれ、生徒会企画の企画書だ。今日が期限だつたよな？」

「まあね。あつてないような期限だけど」

ある意味助けしてくれた涼さんから書類を受け取った彼方さんは、それを見た途端、顔を顰めた。

そこに書かれているのは生徒会企画、つまり鳳秋祭で生徒会が主催するイベントの案のはずだ。生徒会主催だからといってあまり固いイベントは今までもほとんどなかったらしく、聞いただけでも高校の学園祭としてはどうなんだと思ってしまうものが多かった。釣り堀とか全校かくれんぼとか。後者はともかく、釣り堀なんてどこでするんだろうか。というか客は来たのか。

まあ、そんな過去の話よりも今の話だ。実は、この時期に決まっていけないというのは少々まずい。もう鳳秋祭まで一カ月と少し。準備に時間のかかるものはもうできなくなってしまっている。

ちなみに、慣習に倣ってこの企画を考えるのは3年の役員だけだ。俺や由宇也や唯利亜は決まった企画の準備に従事すればいい。

彼方さんが、顔を顰めたその理由を、口にした。

「ミスコン……、だと？」

「ああ。準備に時間はかからんし参加者を募ってホールで並べるだけでも形にはなるだろ？」

「いや、だが……。そんなに集まるか？」

彼方さんは顰めた顔のまま訊いた。どうやらミスコンというものには懐疑的らしい。

「まあ、最悪、生徒会の女性陣だけでやってもいい。レベルは高いんだから様にはなるだろ」

「わ、私も出るのか!？」

「生徒会なんだから当然だろーが」

「な……!」

なぜか彼方さんはその身体をふるふると振るわせていた。俺をからかっていた時の余裕はどこかへ飛んで行ってしまっている。

「ミ、ミスコンなどと……!そういうものは高校生がするもんじゃないだろう!？」

「年中谷間出してるお前がなに言ってやがる」

涼さんの言葉（と視線）に、彼方さんは腕を交差させて胸を隠した。ちよつと可愛い。

しかし涼さんの言うことにも一理ある。別に胸がどうこうというわけではなく、いつもは思い切りがよく、大抵のことに寛容な彼方さんらしくなかった。ミスコン、と言っても軽く流すような印象だ

ったのだが。

「じ、ジャンヌだって！ミスコンには反対だろう！？」

ついには会長に助けを求め始めた。どこまで必死なんだ、この人。だが、会長はその首を横に振った。

「私は別に構わないけど？ミスコンなんて中等部からの5年間で一度もやってなかったもの。面白そうじゃない」

あっさり賛成した会長。うあー！と頭を抱える彼方さん。

ちら、と、さっきから本を読んでいる鈴音さんとそれを眺めている亜美さんにも視線を向けて

「……………なんでしょう？」

「どつたのー？」

二人がその視線に気付いた途端、彼方さんは再び頭を抱えた。何この人、面白い。

そんな彼方さんの隣にパイプイスを運んで、涼さんはそこに座った。

「なんだ、彼方。ミスコンになんかトラウマでもあるのか？」

「そうじゃない。そうじゃないんだ、涼……。ただ……ただ、な」

「ん？なんだ？」

涼さんが気遣わしげな言葉を言い終わるかどうかというタイミン

グで、ガバア！と、彼方さんはいきなり頭を上げた。それに、涼さんも会長も鈴音さんも亜美さんも、俺も呆気にとられて

「私は！ミスコンに出て、自制心を保っていられる自信がないんだよ……！」

あー……………

恐らく全員が、同時に納得した。

「ミスコンだぞ？ミスコンに出るほどに可愛い女の子がそんなたくさんいるところに行ってみる、私の理性の箍は外れ、数人は私の毒牙の犠牲になるぞ」

いきなりテンションの上がった彼方さんに対して、涼さんは非常に醒めた目で彼方さんを見ていた。

「ああわかったわかった。やるとしてもお前は出さない。ってか関わらせもしないから安心しろ」

「そ、そうか。ならいいんだ……」

言葉とは裏腹に、彼方さんは名残惜しそうな顔をする。

思い出す。この人は、同性愛者だった。レズビアンとか百合とか、まあ呼び方はいろいろあるが、つまりそういうことである。

しかも恋愛に関してだけはなぜかかなり積極的。だから自分を抑制できるかどうかという心配と、出てみたいという願望が葛藤して

いるのだろう。
付き合いきれん。

「まあ、これは一つの案だろう。これで決まるわけではない」

竜樹さんが気休めを言うが、所詮、気休めは気休め。そもそも現状では涼さんの案が最も実現可能なのだから、これで決まりになるだろう。

……………この人ら、本当に有能なんだろうか？

俺が言えることではないか。

「奈都海」

涼さんに呼ばれる。涼さんは、部屋の入り口に立っていた。

「ちよいと手伝ってほしいことがあるんだ。教員室まで付いてきてくれるか？」

俺は是非もなく涼さんのほうへ向かう。こんなところにいつまでも残りたくない。

部屋から出る時、竜樹さんの鋭い視線と、会長の苦笑が見えた。

結局、生徒会企画はミスコンに決まった。

Noisy Lyric - 3 - 3つの変容(後書き)

妊娠という非常にデリケートな話題を取り扱うということ、あの二人の扱いには大分悩みました。

これが一番、というのは自分にはわからないので、例によって「都合主義な展開になるかも、です

もう少し勉強してから書けばよかったかな……と、後悔する日々。

鳴姫が入った途端、教室の空気が一変した。

教室中の生徒たちは皆、入ってきたのが誰なのかを確認すると、数人に固まった者は何事かを囁き合い、そうでないものはすぐに目を逸らした。

昼休み終了間近のこの時間、鳴姫はほとんどギリギリに入ってくるか授業が始まった段階で入るかのどちらかである。こうして視線を集めることは珍しいことではなかったが、この反応は鳴姫を怪訝な表情にさせた。

だが、だからといって鳴姫は深く考えるようなことはしない。そもそも鳴姫は他人の行動にもその理由にも、それが自分に何かしら面倒な影響を及ぼすと判断しない限り、関心を持たない。それが日中の大半を共に過ごすクラスメイトであっても例外ではない。

向けられる視線を無視して、鳴姫は自分の席へ向かった。

次の授業は別室で行われるため、教室に残っている生徒はもう少ない。隣の席である幣原唯利亜とその友人である神田愛燕も教室にはいなかった。

「……………」

なぜあの二人のことを気にしなければならないのか、と、鳴姫はわけのわからない怒りを覚えた。

怒りに任せて机の横にかけた鞆から筆箱を取りだすと、勢いが強すぎたのか、筆箱は手から離れて床を滑った。

異常な面倒くささを覚えた鳴姫は、深い溜息をついて筆箱を取りに行こうと立ち上がる。

「鈴平さん」

そこへかけられたのは、聞き覚えのない声。元々、鳴姫は親しくない人間の声はすぐに忘れる性質だが、その性格のおかげ（？）か、親しくない人間に声をかけられることは少ない。それはそれで鳴姫個人としては気楽でよかった。

そうでなくても大抵は無視するのだが、今回だけはその声に応じてしまった。朝の一件で態度が軟化しているのかもしれない、と、適当に自己分析しつつ、声のしたほうへ顔を向けた。

「……？」

その顔もまた、見覚えのない顔。

誰なのか訊ねるべきか、と悩む鳴姫に、その女子生徒は機先を制すように言葉を続けた。

「話があるんだけど」

「話……？」

鳴姫は首を傾げる。もう授業が始まるうかというこの時間にわざわざ話を持ちかけるのは、少々気になった。今朝のSHR間近に久宮を連れ出した自分のことは、無意識に棚上げにした。

「もうすぐ授業が始まるんだけど」

「どうせ気にしないでしょ？鈴平さんは」

言うことは尤もなので鳴姫は抵抗をやめた。

ちなみに、相手のために言ったわけではないということは鳴姫の

性格を考えれば明瞭である。鳴姫も相手も、それは承知している。ならば、と鳴姫は相手を促した。

「で、なに？できれば手短にお願いしたいんだけど」

他人との関わりは最小限にするのが鳴姫の常だった。それは声にも態度にも滲み出ており、相対する女子生徒はピクリと眉を動かした。それが不快の現れだということは鳴姫にもわかったが無視した。その態度に、怒りの笑みを顔に貼り付けた女子生徒は、

「なら、お望み通り単刀直入に言うけど」

鳴姫の予想だにしなかった言葉を、口にした。

「鈴平さん　　妊娠してるんだってねえ？」

「っ!?!?」

啞然とする鳴姫に、その女子生徒はさらに畳みかける。

「しかも相手は、“あの”南坂先輩だって？気の毒よね、鈴平さんも。あんな遊び人の子どもを孕んじゃうなんて」

嘲笑を向ける女子生徒は、

「高校で妊娠って、ちょっとまずいんじゃない？いくらこの学校で

も妊娠は 「

「 あんた 「

女性とは思えないその低い声に、続けるべき言葉を飲み込んだ。

「それ、どこから聞いた？」

「どっつて……」

「答える」

「……っ」

女子生徒の怯えの色が濃くなる。

堅気の人間にはできない鳴姫の据わった目を見ながら、女子生徒は震えた声で答えた。

「べ、別に……。ただ学校中で噂になってるし……」

聞いた途端、鳴姫は教室を飛び出した。当然、教科書の類も筆箱も置いたまま。

詰め寄られていた女子生徒は、その後数分ほど動くことができなかった。

「宇類っ！！」

昼休み。

突如、鳳霊学園2 - Bの教室に槻野那東の音が響き渡った。

彼女はどちらかと言えば活発な方だが、こうして大声を出すことはほとんどない。彼女を知るクラスメイトは皆、一様に驚いていた。突然胸倉を掴まれた宇類も、加えて二つの意味で驚いていた。

「ど、どうした？つてか苦しいんだけど」

「お前、いつかやるんじゃないかとは思ってたけど、まさかこんな早くに……！」

「おい無視すんな。手を離せ」

宇類の抗議にも関わらず那東はさらに無理やり引き寄せ、声を潜めつつ言った。

「宇類、女を妊娠させたって本当なのか！？」

宇類の顔から、表情が消えた。

「おい……」

常に何かしらの表情を浮かべている宇類の顔が、能面のように表

情を消していた。その様相に、那束は思わず握力を弱めていた。その隙に宇類は那束の拘束から逃れた。

「どういうことだ、それ」

「いや、その……」

「どういうことだっつってんだよ!!」

一転して弱気になる那束に、今度は宇類がその肩を掴んだ。宇類の荒げた声に那束の肩がビクリと跳ねる。同時に、授業開始直前の教室のざわめきが一瞬で収まった。

「なんでお前が知ってたんだよ!?!そのことを!」

宇類の尋常ならざる必死さに那束も事態の重大さを察したのだから、彼女も真剣な表情で宇類を見た。

「部活の後輩から聞いたんだ。多分、もう学校中に広まってる」

「な……!!」

宇類の顔が驚愕に染まる。

やがて宇類は肩をわなわなと震わせ、その顔も怒りに変わっていった。

那束止める間もなく宇類の口が開き

「宇類っ!!」

朝以上に時間の迫ったタイミングで、鈴平鳴姫が乱入してきた。

宇類だけではなく教室中の生徒が注視する中、堂々と視線の真ん中を突っ切って、鳴姫は宇類に歩み寄った。
その形相は思わず宇類が後ずさるほどだった。

「あんだ、一体誰に喋ったの!？」

「は、あ………?」

反応に遅れた宇類の呆けた顔に鳴姫はさらに怒りを増幅させたように詰め寄った。

「とぼけんじやないわよ!あんなこと言っておいて、あんたは……!
!これがあんたの言う『できる限りのこと』だって言うわけ!？」

「おいちよ、お前、何言ってる」

「うっさい!たしかにいつまでも隠し切れるものでもないしいずれは知られるんでしょうけど、でも!まだ何も決まってる状況でペラペラ言うことじゃないでしょう!？」　こ、これから色々決めるよつとしてたところじゃない……!それを……!あ、あんたは……
っ!……!」

「鳴姫っ!落ち着け!！」

「っ!」

半ば以上にヒステリックになった鳴姫を、宇類は一喝した。それにビクリと肩をすくめた鳴姫は、その目に今にも零れそうなほどの涙を溜めていた。傍から見ていた奈都海は驚愕に目を見開く。

しかし宇類にとっては何度も見てきた光景なのだろう、今度は冷

静な表情となつて語りかけるように鳴姫を宥めた。

「まずは落ち着け。な？俺は誰にも、何も言っちゃいない。お前も何も喋つてねえんだろ？なら今起こつてゐることは俺らのせいじゃない」

「な、なら、どうして……！」

「それを調べるためにも、まずは落ち着け。お前が錯乱してちゃ何もできないだろ？」

鳴姫は宇類の肩に顔を埋めながら、こくこくと頷いた。その背中を宇類はぽんぽんと叩いて落ち着かせる。

宇類の戸惑いと怒りは、もう既に不思議なほどに収まっていた。鳴姫の取り乱しように見て、逆に醒めたのかもしれない。

だが、今の事態を放っておくわけにもいかない。噂に疎いはずの那束にまで浸透してしまつてゐる噂だ。しかも、実名。こんなことを繰り返してしまつた時点で虚偽だと言ひ張ることもできなくなつた。

宇類自身は、知られたら知られたできちんと説明するつもりだったが、今回はタイミングが早すぎた。自分たちですらまだ纏め切れていない状況で知られてしまつたのだ。どう対応するのが正解か、皆目見当がつかない。

宇類が人生史上最速で頭を回転させて打開策を練つてゐると、鳴姫が自ら宇類から離れた。

「落ち着いたか？」

「ええ……。ごめんなさい、迷惑をかけて」

鳴姫は本来、特に宇類に対しては謝罪という殊勝な行動をとることが稀だ。母親になると人格まで変わるものなのかと感慨まで覚えしたが、宇類はこの状況でそれを口にできるほど軽くもなく薄くもなかった。

とにかく、鳴姫も冷静さを取り戻した今、皆の視線のある場所に居続けるのは得策ではない。

「よし鳴姫。まずはここを移動し」

宇類が鳴姫を促して教室を出ようとした、その時。

「南坂、いるか」

「っ!」

宇類の、つまり2 - Bの担任が、出口に立っていた。

「鈴平もいるか。ちょうどいい。二人ともついて来い」

しばし呆然としていた宇類だったが、

「……………」

不安げな顔を向けてくる鳴姫を見て、覚悟を決めた。
教室を出て、担任教師の背中を追った。

その女子生徒は、相も変わらず遅刻ギリギリの時間に家を出た。彼女はある意味遅刻の常習犯。教師からも生徒からも、既にそういうレッテルを貼られていることを、彼女自身も自覚していた。

しかし、今日はまだ「遅刻ギリギリ」。まだ遅刻が確定したわけではない。

部屋が低い階にあることに感謝しつつ階段を駆け下り、駐輪場の自分の自転車のロックを出来る限り迅速に外し、飛び乗る。

スカートが捲れるということには気が回らず、全速力の立ちこぎで学校へと向かった。

彼女が駐輪場に奇跡的なドリフトで自転車を入れるのと、SHR開始のチャイムが鳴るのはほぼ同時だった。

今日は間に合うかも、という希望があっただけに、彼女の落胆は大きかった。だが、彼女も予想していなかったわけではなかった。

やたらと信号に引っかけたのだ。

何度も無視しようと思ったが、彼女の通学路は自動車の交通量が比較的多い。無視しようにもした途端に学校に行けなくなってしまうことはわかっていたので、実行できなかった。下手をしたら天国に行くことになる。

と、まあ様々な偶然（と彼女自身の怠惰）が重なって、彼女は再び遅刻してしまった。

だが、彼女には最後の秘策があった。

非常階段である。

教室棟の最奥にあるこの階段は、どの棟のどの部屋からも見ええない。誰にも見つからずに忍び入るには絶好のルートだった。

「よしっ」と誰に言うでもなく決意すると、彼女はこそこそと不

審者のように非常階段へと向かう。

幸い、彼女と同じタイミングで遅刻してきた生徒も通勤してきた教員もいなかったため、彼女は誰にみつかることもなく非常階段へと辿りついた。

あとはこれを昇って2階へ向かい、教室へ直行するだけ。彼女の担任はかなり時間にルーズであり、SHRもチャイムから4、5分は遅れて始める。最速で向かえば十分間に合う。

はずだった。

階段を昇り始めてすぐ、彼女の耳に人の話し声が聞こえた。反射的に身と息を潜めた彼女だったが、すぐにそれが自分に近づいてくる気配のないことに気付く。

慎重に、物音を立てないよう最大限の注意を払いつつ、彼女は階段を昇っていく。いつのまにか彼女の教室のある2階も通り過ぎて、2階と3階の間の踊り場に差し掛かりつつあった。

ここまで来ると声も鮮明に聞こえてくる。

そ……つと顔だけをのぞかせて様子を盗み見る。

バツ、とすぐにその顔を引っ込めた。

見つかりそうになつたわけではない。そうだとしたら彼女は全力で逃げだしている。

そこにいた人物が、問題だった。

南坂宇類

彼女の学年でも何かと悪名高い男子生徒だ。話によれば、彼は様々な女性と関係を持っているとか云々……。彼女も詳しくは知らないが、要は節操のないプレイボーイであるということである。

だが、彼女は彼のことを慕っていた。想っていた。

鼓動が早まるのがわかった。見ただけなのに、声を聞いているだけなのに、顔が熱くなる。

靴を握る手に、必要以上の力がこもる。

その逆の手が股に向かいかけて、はっと正気に戻った。今度は違う意味で顔が熱くなる。

とにかくこんなところで油を打っている場合ではないと思いなおし、密かに想い人に別れを告げ

ようとしてその耳にある単語が飛び込んできた。

最初は聞き間違いかとも思った。自分が彼を想い過ぎているがゆえの、幻聴だと。

だが、記憶は嘘をつかなかった。

真実だった。

「妊娠」という言葉は、彼女の想い人と隣のクラスのはずの女子生徒の間で話されていた。

彼女はそのクラスにも友人がいた。その友人曰く、クールを気取ったコミュ障女だと言っていたが、それが彼女のはずだった。名前は………そう、鈴平鳴姫。

彼女は、妙に醒めた頭で彼らの密談を盗み見ていた。しかし、それはまさに嵐の前の静けさ、あるいは蒼く小さく燃える火種だった。

二人の抱擁が、彼女の感情を静かに爆発させた。

3時限目の終わった鳳霊学園は、少々色めきだっていた。というより、鳳霊学園の女子生徒が、と言うべきだろうか。

とはいえ、男子生徒もそれに無関心だったわけではない。羨望か嫉妬かという違いはあれど、多くは無関心ではいらなかった。

現在話題の芸能人が来るといえば、その類に興味がないと気取っている者か本当に興味がない者以外は、興奮ないしはそれに近い感情を抱くだろう。気取っている者でも、ある種冷静にはなれていないだろう。

その彼の名は、藤堂カナタ。主に俳優、片手間に歌手、というよくな割合で活躍する彼は、そのルックスと今までにない自然体すぎる演技で注目を集めた。しかし、バラエティには全くと言っていいほど姿を出さない。代わりに、同クールに複数のドラマの役を演じてみたり、10本以上のCMに出演したりと、本業には非常に積極的である。ただ、やはりバラエティの類に出演しないという点で、彼はミステリアスという印象を視聴者に与えていた。

私生活も素顔も公には晒さない彼が自分の目の前に現れるとなれば、興味を抱くのも無理らしからぬことと言える。

スーツ姿の藤堂カナタは何十人という女子生徒を引き連れて廊下を闊歩していた。

「と、藤堂さん、あの、サインを……」

「藤堂さん！サインくださいー！」

「ちょ、あたしが先でしょ!？」

「あの、なんでカナタさん、この学校に？」

「もしかしてこの学校に家族がいるとか!？」

「うそ!なら私たちめちゃくちゃラッキーじゃん!？」

「藤堂さん、写メ、いいですか!？」

「ファンなんですー!握手してくださいっ」

「……………」

「……………」

ある意味予想通りな光景が、そこでは繰り広げられていた。

だが、藤堂カナタは女子生徒の要望には一切応じず、ただ廊下を黙って歩いていた。その表情はわずかに怒りさえも内包していたが、興奮していた女子生徒たちは一人として気付けなかった。

彼が始めて笑顔を見せたのは、理事長室の目の前に来てからだっ
た。

「ごめんね、みんな。あとできちんと埋め合わせはするから」

その言葉を最後に、彼は理事長室に消えた。

残された女子生徒たちは、歓喜の奇声を上げた。

突如上がった歓声に驚き、次いで部屋に入ってきた人物の顔を認識した途端、宇類はぎよっとした。

「あ、兄貴……？なんでここに……」

「久しぶり……になるのか……。宇類、それに鳴姫」

「……………」

その人物に、宇類は疑問の声を上げ、鳴姫は名前を呼ばれるのも嫌悪するかのような鋭い視線を向けた。二人は理事長室の中央にあるイスに、対面する形で座っている。

「悪い。鳴姫にとっては俺とのいい思い出なんかあるわけないか。ちよつと配慮が足りなかったかな」

「おい兄貴。俺の質問無視すんじゃないやねっての」

「ああ、悪い」

鳴姫が全く反応を示さないのに苦笑し、藤堂カナタ みなみだかこうすけ 本名、南坂虹丞は宇類の質問に答えた。

「親父から言われてね。忙しいから代わりに行ってってくれって」

「ちつ、んなこつたるうと思つたよ。ってか、兄貴はいいのか、仕事は」

「近くでロケがあつたからね。親父も多分、それを知ってたから俺に言つたんじゃないかな」

虹丞は言つて、宇類の隣に腰かけた。

彼は、宇類を見てこれ以上の会話を望めないと悟つた。そして、

鳴姫を見て一言。

「足」

「は？」

「組んでるとスカートの中見えるよ」

「死ね」

指摘されたが故の意地なのか鳴姫は組んだ足を崩そうとはしない。一方、率直すぎるほどの暴言を吐かれた虹丞は慣れているようで、小さく表情だけで笑った。

虹丞は、ある大企業の代表である南坂龍蔵みなみざかたつくらの長男である。当初は彼の跡を継ぐ予定だったが、虹丞は中学卒業とともに両親に隠れて上京した。

虹丞自身にとっては一大決心だったが、両親はその多忙さゆえに、気付いたのは彼が家を出てから一週間も後という有様だった。気付いたところで、両親は取り乱しもせず、虹丞に帰れと説得するでもなく、勝手な行動に怒り狂うということもなく、勘当することもなく、放置した。そして、跡継ぎをその時小学生だった宇類に決めたのだった。

幸い、経済界での後盾を得るための道具たる鳴姫は虹丞ではなく同年代の宇類のほうがお気に入りらしく、鳴姫の父親にとっても好都合だった。龍蔵のほうは基本的に業種拡大のための繋がりがあれば十分であり、異論はなかった。

特に誰が損をしたということもなくこれは収束したが、虹丞は実家とも鈴平家とも疎遠になった。こうして彼らが会うのも、実に数年ぶりである。

かといってお互いに懐かしむこともなく、彼らは非常に重い沈黙の中に身を置いていた。

それが破られたのは、沈黙が10分ほど続いた頃だった。

「やー、ごめんごめん。ちよびいつと待たせちゃったかなー」

場にそぐわない軽い口調とともに入ってきたのは、パンツスーツ姿の女性。彼女は虹丞の姿を認めると、軽く手を振った。

「お、虹丞くん！おひさだねー。すっかり有名になっちゃって大変でしょー？」

「ははは、恐縮です。でも、俺もまだまだですよ、理事長先生」

「あっははははは！理事長先生だなんてそんなー。ま、ほんのこ
とだけど」

そう、この30前後にしか見えない女性こそ、この鳳霊学園の理
事長、坂宮梓^{さかみや あずな}である。実際は40代だが、それでも理事長としては
若すぎる。

しかし、歳と立場に見合わないフランクな性格は、生徒たちには
受けがよく、美人であるということも手伝って人気は高い。……

…彼女の管理能力を疑問視する声も少なからずあるが。

梓はこの学園の理事長。それまで楽な体勢を取っていた宇類と鳴
姫は学園のトップを前にして姿勢を正した。それでも彼らはいくら
か気楽な気分だったが、次の瞬間、梓に次いで入ってきた人物を見
てその背中を緊張が走ることになる。

「……………」

「あ……」

鳴姫も宇類も、虹丞でさえその姿に驚きを見せる。梓だけが、笑っていた。

「ふむ……、わたしが最後か。どうやら待たせてしまったようだ」

スーツ姿に坊主頭。サングラスを外して、その壮年の男性は部屋にいる男女4人をそれぞれ順番に見渡した。

その口から漏れる声は低く、重い。

「では……、皆揃っているようだし始めようか」

彼は、

「お……、お父様……?」

鳴姫の父親 すずひらけいじ 鈴平慶司。中国地方一帯の裏社会を牛耳る りんへい 鈴平組の首領である。

宇類も彼には何度か会ったことはある。だが、彼の威圧感は何度会っても慣れ得るものではなかった。身長は170cmほどでかなり高いと言いくらい。宇類から見れば低くもある。

だが、その質量さえ持っているかの如き威圧感、体格など関係なく相手を圧倒するに十分だった。彼が理事長室に入っただけで、空気は一変した。

彼は3人の視線を無視して鳴姫の隣に腰かけた。

「……………」

宇類は言葉が出ない。彼がここに呼ばれる理由はわかる。まだ16歳の娘が妊娠したと聞けば来るのは当然だろう。

しかし、鈴平慶司はこうも簡単に姿を現していい人間ではない。裏社会を仕切っているとはいえ、すべてが彼に従っているわけではない。当然、反抗する敵は数多い。いつ襲われてもおかしくない立場にあるのである。そんな中で護衛の一人も連れずに行動していることが、宇類には信じられなかった。宇類の知る限り、鈴平慶司という人間は時に大胆な行動に出ることはあっても、意味なく大胆にはならない、基本的には慎重な人間だった。

「さて」

切り出したのは慶司。

「事実の確認から行う。いいな？」

この場にいる全員が、是非もなく頷いた。それを見た慶司は、しかし無感情に自分の知る情報を述べた。

「まず、鳴姫と南坂の次男坊との間に子ができた。そして、それがこの学園に広まった。混乱収束のために、我々が呼ばれたと、そういう解釈で構わないな？」

「慶ちゃんや虹丞くんを呼んだのは、別に必要でもないから形式的なものだけだねー。ま、それで間違いはないよ」

「………………。では、当人たちの話を聞きましょう。鳴姫」

呼ばれた鳴姫は、わずかに肩を震わせた。が、すぐに「はい」と答え、続けた。

「私は……………、産みたいと、思っています」

「ほう……………？なぜだ？」

慶司は目を細める。それが、慶司の機嫌の悪さの表れだと知っている宇類と鳴姫は緊張を強くした。

「宇類との子どもなら、産まない理由がないから、です……………」

鳴姫の言葉には覇気がない。語尾もいつもとは異なり、弱かった。しかし、その目はまっすぐに慶司を捉えていた。冗談などでは決してないと、必死に主張していた。

しばし、親娘の対峙が続く。その末に慶司が出した結論は

「 墮ろせ。それですべて片が付く」

「っ！？なぜですか、お父様！？」

これで話は終わりだと立ち上がった慶司に、鳴姫が叫ぶ。

予想外だった。鳴姫も宇類も、慶司は賛成するものだと思っていた。賛成はせずとも、こうも明確に反対するとは毛頭も思っていなかったのだ。判断は自分たちに任せてくれるものだと思っていた。

だが、慶司が放ったのは、問答無用の“否”。

慶司は、自分の娘であるはずの鳴姫を、まるで卑しい乞食を見るかのような目で見下していた。

「なら貴様は、一人で子を育てられるとでも言つつもりか」

「 育てます。可能かどうかは、問題ではありません」

慶司の恫喝するような声にも屈せず、鳴姫は毅然と言葉を紡ぐ。

「それに、一人ではありません。この子には、父親もいます」

「……………」

慶司の目が自分に向いたのを見て宇類は頭を下げた。

「お願いします。俺も、鳴姫の気持ちを応援したい」

「……………」

「俺はまだ高校生だし、親の脛をかじってるような青二才です。い
ずれ就職するとはいえ、それも親父の会社だし、結局は親父の残し
た席に座るしかない。全部親父にお膳立てしてもらって、俺はそれ
を何の苦勞もなく受け継ぐしかない。……でも」

宇類は頭を上げて、慶司を見据えた。二人の男の視線が交錯する。

「俺と鳴姫だけで作った唯一のものが、子どもが、いるんです！親
父にも、誰にも用意できないし作れない、たった一つの生命が……
！」

「宇類……………」

慶司は表情を動かさない。だが、宇類は諦めなかった。鳴姫に言
ったのだ。できることならなんでもする、と。言ったからには、全
力で成し遂げたかった。

「俺には母親になる鳴姫の気持ちが正確にはわからない。だから、それを語る資格もない。でも、一つだけ。一つだけ、鳴姫と共有してる気持ちがある」

宇類の顔の覚悟の色が深くなる。まるで、次に発する言葉によって後戻りできなくなることが分かっているかのように。

だが、元より宇類には戻るつもりなどない。進むことしか考えていなかった。

「子どもを愛する気持ちは、二人とも変わらない……！これだけは、誰にも奪わせはしない。たとえそれが、あんたであったとしても……！」

宇類は、人差し指を慶司に突きつける。自らの決意を宣言するように、自分たちの想いを精いっぱいぶつけるように、その指先は全く揺らぐことがなかった。

だが、慶司はそれに冷たい視線を送った。

「感情論などいらん。貴様らに子どもを育てるだけの能力と環境が用意できるのか」

無感情に、慶司は言い放った。

「貴様らにはまだ早い」

宇類も鳴姫もまだ高校生。そんな立場でまともな子育てなどできるはずがない。二人ともそれはわかっていた。その上で二人は、産むことを決めた。

二人は若い故の過ちとは思っていなかった。彼らの子どもは、決して過ちの結果ではない。自分たちの子どもを肯定することは若

さ故の暴走ではなく、彼らが親である以上、当然のことだった。それを否定することは、そのまま宇類と鳴姫の互いに抱く想いの否定でしかない。

彼らは恋人という曖昧な関係から、両親、あるいは夫婦という確固たる繋がりを持った存在になるうとしてしている。それは彼らの絆をより深める一方で、裏を返せば後戻りできなくなるということでもある。その関係を解消しようとするなら、戻るのではなく壊すしかなくなる。

それらすべてをひっくるめて、宇類は覚悟していた。
さらに、

「……………俺たちにはまだ早いつていうなら」

宇類の覚悟は、彼ら二人だけに止まらない。

「俺たちだけの力じゃ無理だっていうなら、他の力を借りればいい。俺たち二人だけでやらなければならいなんてことはないんだ」

「ふん…………。他力本願も甚だしい。他人に頼ろうというのか」

「その何が悪いですか」

慶司の目がさらに細くなる。だが、宇類は怯まなかった。

「使えるものは何でも利用する。それは、親父とあなたから学んだことです。利用できるものなら知識でも人でも、それが俺たちの幸せに繋がるなら、俺は全力で利用する」

「利用することと頼ることは違う。その区別のできていない貴様が何を利用し、誰を幸せにできると？世迷言も大概にしろ」

「そりゃ、今は頼ることになるかもしれない。でも、俺はそのまままで終わるつもりはありません。いずれは、あなたも俺たちの幸せのために利用させてもらいます」

「……………」

宇類と慶司の攻防。それを、他の3人はそれぞれ違う感情で見ている。鳴姫は固唾をのんでそれを見守り、虹丞は無表情にそれを傍観し、梓は楽しそうにそれを眺めていた。

ただ、その3人も慶司が黙った時だけは一様に、強い緊張を抱いていた。

だが、今回だけはその緊張はすぐに解けることになる。

「……………くく」

「？」

顔を俯けた慶司に、4人は疑問符を浮かべる。
その直後に、

「くっはははははは……………」

慶司は大きく笑い声を上げた。これには家族である鳴姫でさえ啞然とした。

「くっくく……………、さすが奴の子どもだ。口だけは際限なくでかい」

「口だけって……………」

「だが、それを実現させるに足る器もあるのかもしれんな。奴が、そうだった」

「えー、と……」

何が慶司の態度を軟化させたのかわからず、宇類は戸惑う。鳴姫も同様だった。

だが、梓は何かしら得心が行ったようで、満足げな表情で笑っていた。

「いやー、まるで昔のたっくんを見るみたいだねー。懐かしいよー」

「まさにその通りだな。それで梓、お前は構わんな？」

梓はそれまで座っていた机から降りて答える。

「おっけーですとも。今時学生出産なんて珍しくもなんともないしね。学園の風評を気にしてくれてるなら、心配はいらないよ」

「なら、あとはお前たちに任せよう。わたしは忙しい」

「え……！？ちょ……」

何の説明もなく部屋を出ようとする慶司を鳴姫が止める。慶司は、扉の前で止まった。

「なんだ」

「あの……。いい、のですか」

「お前らしくないな、鳴姫。次男坊にも言われなかったか？」

「え……？」

鳴姫は、慶司の背中を見る。今まで何度となく見てきた父親の背中。頼もしくもあり、それが大きな壁となって彼女の前に立ち塞がることもあった。

今はそれが、張る必要のない見栄を張っているように見えた。

「一度決めたことを変えるなど、お前らしくないということだ。覚悟は、貫いてこそ覚悟だ」

「……！」

ほんの少し振り返った慶司の口には、笑みが浮かんでいるように見えた。

「わたしは、お前が幸せであればそれで十分なのだよ。………ふむ、今日はどうも慣れないことをした。帰って休むことにする」

それだけを言い残して、慶司は部屋を辞した。

それを見送った鳴姫は脱力したようにソファに座りこむ。宇類もそれに続いて、長い溜息をつきながら頭を抱えた。

「うあ~~~~…、すっげえ恥ずかしいこと言ってた気がする……」

「心配しなくても、宇類らしかったよ。『あなたも俺たちの幸せのために利用させてもらいます』ってね。そんな齒の浮くようなセリフ、普通は言えないよ？」

「わあってるよ、んなことは！！なんで兄貴はそう傷を抉るようなことしか言わねえんだよ！？」

心底愉快そうに虹丞は笑うが、宇類は再び頭を抱えて俯いてしまった。「うう〜」という呻き声がそこから聞こえる。鳴姫はそんな宇類に声をかけられるほど余裕は戻っていないかった。

そんな、当事者の二人が疲れきっている状況で、

「あ、そういえば」

と、梓は笑顔で皆が忘れかけていた爆弾を投下した。

「学校中に広まっちゃった鳴姫ちゃんのことはどうしようか？」

「あ……」

笑っていた虹丞まで、黙り込んでしまった。

「あっははははは！慶ちゃんは上手く逃げたね！。それともこれぐらいの危機はクリアしないと認めないぞってことかな？」

学校中に今や事実として広まっている、鳴姫の妊娠の話。慶司との、出産するかしないかの問答があったために忘れてしまっていたが、何一つ解決していないのだった。

既に否定する手段はない。

肯定するにしても、その方法が問題だ。問題なのだが、宇類はなるべく鳴姫が傷つかないように、鳴姫は宇類になるべく迷惑をかけないように、と考えていた。お互いがお互いを思い合っているが故に、それがすれ違ってしまっていた。

梓は最初から考える気がないのか、執務机に座って携帯ゲームを弄っていた。それに反して虹丞は、

「……………お」

何かを思いついたように自らの膝を叩いた。

「理事長先生」

「んー？」

中等部に通っていた時に世話になった虹丞の元担任は、心ここに在らずといった感じで答えた。しかし、虹丞はそれでも彼女はちゃんと聞いていることを知っている。構わず続けた。

「今日の放課後、体育館か講堂か、貸してもらえませんか。この俺に」

「うん、いいよー」

梓の生返事に、虹丞は不敵に笑った。

疲弊しきつた鳴姫は、緩慢な動作で下駄箱からローファーを取り出し、地面に投げ出した。転がって横になったそれを足だけで直し、

なんとか履き終わる。

この一日で一週間分の疲労を重ねたような気分だった。今すぐにも帰って、ベッドに飛び込みたかった。

しかし、その前に風呂に入るのを忘れてはいけない、などと考えていた鳴姫の前に、人影があった。

「よっ」

今や夫になることが確定した、南坂宇類だった。

「大変だったな」

「……なんであんたはそんなに元気なわけ？」

「人前に出ることは慣れてっからなあ。それでも疲れてないわけじゃないぞ？」

なんともタフな宇類に鳴姫は溜息をつく。

放課後、虹丞は体育館を貸し切り、ちょっとしたフアンイベントのようなものを開催した。せっかく来たのだからと、希望する生徒に（一部教師も含む）サインを書き、握手や記念撮影にも応じた。

その中で、彼は宇類と鳴姫について紹介したのだ。彼らは、自分の弟と妹である、と。

当然、生徒は皆、驚いた。だが、驚いたのは紹介された生徒だけではない。宇類と鳴姫も同様だった。

一歩間違えれば今まで以上に孤立しかねない方法だった。ただでさえ演技している姿しかほとんど見せない虹丞である。その肉親と聞けば、近寄りがたく思う者がいてもおかしくはない。

しかし、虹丞の立案でこのイベントが行われたということ自体が功を奏した。今までの反動もあつてか、生徒たちは“藤堂カナタ”の評価を親しみやすい方向へと修正し、同時に宇類にも鳴姫にもそれは及んだ。とはいえ、宇類はそれを大いに楽しんだが、対人行為に慣れていない鳴姫はただただ疲れるばかりだった。

広めた犯人云々についてはまだだが、結果的に問題は半ば解決されたと見ていいだろう。あとは当人たちがどこまで頑張れるかである。

終わってみれば外は既に太陽が沈んだ後だった。虹丞は生徒が全員帰つたのを確認して慌てて学園を辞した。携帯を見ていたから何か用事を残していたのだろう。

そういえばロケがあつたとか言っていたような、と宇類が思い出していると、鳴姫が唐突に立ち止まった。

「どしたよ？」

「あなたの自転車、これじゃないの？」

「あ」

宇類は自分の失態にわずかに恥ずかしさを覚える。

「ほんとに疲れてたのね、あなた……」

「だから言ったじゃねえか……。俺だつて疲れるんだよ」

宇類は大企業の御曹司という立場だが、迎いの車があるわけではない。今は実家を離れて一人暮らしをしている。………といても、それも親に用意された家であるし、数人のメイドまでいるのだが。

宇類は自転車の鍵を外し、駐輪場から出す。そのまま引いて歩こうとした時、鳴姫がそれを止めた。

「乗せて行きなさいよ」

「……？引いていくつもりだったんだけど。そんなに遠くないだろ？」

「いいから」

そう言っつて、鳴姫は無言を言わず自転車の荷台に腰かけた。が、その座り方を見て宇類は眉を顰める。

「それ、落ちるぞ」

鳴姫の乗り方は、跨らず身体を左に向けて両足も左側にあるようなものだった。創作物でよく見る格好だが、実際にやってみるとなかなか危なかったりする。そもそも、二人乗りは法律違反である。

だが鳴姫は、降りようとはしなかった。

「私のバランス感覚舐めんじやないわよ」

「別に舐めてねえよ……。まあいいや。んじや、落ちるなよ、っと」

宇類はいつもよりも重いペダルを踏んで、自転車を走らせた。

宇類は走り出してしばらくは背後が心配で仕方がなかったが、鳳

霊学園一帯の地域は高低差がほとんどない平野である。重さも、落ちるのではという心配も、すぐに慣れて忘れてしまった。

自転車は川に沿って作られた土手に差し掛かった。この川は久賀市唯一の一級河川で、この辺りは下流であるため、特に幅が広い。上流に行くと比較的水が綺麗で、宇類や鳴姫も幼いころはよく遊んだ記憶があった。

土手の周辺は街灯がなく、ほとんど真っ暗闇。逆に、空は星が瞬き、月がここぞとばかりに主張していた。満月とは言い難いその月の懸命な姿に、なんとなくおかしみを覚えて鳴姫は月を眺め続ける。

「あんまり重心傾けんな。転ぶから」

「ん」

言われても鳴姫は月を見続ける。

土手を降りたところで月が雲に隠れ、首を元に戻した。

「どつだ、空」

「え?」

「星とか見えるか?」

自転車を操縦しているから空が見れないらしいと鳴姫は勝手に思い、もう一度空を見上げる。今度は何も言ってこなかった。

「星は見えるけど、月は雲に隠れてる」

「そっか……。朝は雨降ってたのにな」

「そついえばあんた、雨なのに自転車で来たの？」

「わりいかよ」

「……悪くはないけど」

「けど？」

「……なんでもない」

宇類は嘆息して操縦に集中する。といつても、自転車にもこの辺りの道にも慣れていてからそこまで神経を使うようなものでもないのだが。

その証拠に、鳴姫が前触れもなく背中に寄りかかってきた時も、ある程度余裕を持って対応できた。

「どうした？ やっぱ疲れたか？」

「まあね。今日は色々ありすぎたもの……」

疲労の塊を吐き出すような鳴姫の声に、宇類は笑った。

「俺も疲れたよ。おっさんにあんな口利いたの初めてだしな。おっさん、また迫力増したんじゃないかねえか？」

「機嫌が悪かったただけでしょ」

「機嫌が悪いだけであんなになんのか………おお怖」

宇類はわざとらしく肩をすくめて怖がっていることを強調した。

黙ってしまった鳴姫に宇類が笑いかける。

「ま、一応は一件落着……とまではいかななくても兄貴のおかげで楽にはなつたろ。おっさんにお墨付きももらったしな。あとは、俺の両親とお前のお袋さん、か。……………強敵ばっか。泣きそう……」

「情けないこと言わないでよ。あんただけで戦うわけじゃないんだから」

「ああ、わかってる。頼りにしてるよ」

「だから。私だけじゃないでしょ」

「え？」

鳴姫の真意がわからず、宇類は思わず呆けた声を出してしまう。

鳴姫はそんな宇類の背中を頭で一回小突いて、言った。

「私のお父さんも、忌々しいけど虹丞さんも、味方でしょう？使えるものは何でも使っていくんじゃないの？」

「……………」

宇類は何も言わなかった。鳴姫には宇類の顔が見えない。だから、今どんな表情を浮かべているのかはわかるはずがない。宇類もまた、同様だった。

だが、この時の二人はなぜかわかっていた。なぜか、などという理由はどうでもよかった。それが二人の勘違いでもよかった。たとえ自分の気持ちを相手の気持ちだと錯覚していたとしても、それは

間違っていないかった。

二人とも、抱く想いは同じだったのだから。

「だから、私たちが負けるはずがない。そうでしょ？」

「ああ……そうだな」

Noisy Lyric - 4 - ああ……そうだな(後書き)

新キャラ3人登場

登場人物紹介への反映完了。

その日は、かの戦いが終わって彼らが初めて登校する日だった。

その日の最も懸念しなければならぬことは、唯利亜の姿である。一週間以上ぶりに学園に来たと思えばその髪の毛が白く変色しているのである。髪も伸びているし、肌の白さにも気付く者は多いだろう。赤い瞳も遠目ではわかりにくいものの、近づけばすぐにわかる生徒の反応はもちろんだが、それ以上に教師が唯利亜を見てどう判断するかが問題だった。

いくら自由度の高い学園とはいえ、これだけの変化を許してくれるかどうかは危うい。今まで髪色が問題になったことはないが、それは生徒が自重していた結果であり、事実、染髪を禁止する校則がないにもかかわらず髪を派手に染める生徒は見られない。染める者はいても茶髪レベルである。

そこで唯利亜の白金髪となれば、果たして対処はどうなるのか。誰にも予想はできなかった。

本当に誰も、予想できなかった。

誰もが啞然とした。

唯利亜の姿に、ではない。であるなら、そもそも奈都海や九能どころか唯利亜自身すら呆然としているはずがない。

なぜ、とか何のために、とかいう疑問以前に、その光景を目にし

た者はまず、自らの目を疑った。その変化は、ある種、唯利亞以上に異常だった。

“彼女”と唯利亞が並んだ光景は、まさに異常の極み。その人物を知る者であればなおさら、その異常性はより強く感じられるだろう。

誰もが言葉を失った。

つまるどころ

生徒会長である後朱雀沙夢濡が金髪に変貌していたということである。

「……………」

「おはよう、みんな」

「え、あ、うん。おはよ……………」

言われて初めて唯利亞は反応した。逆に何も言われなかったら永遠に呆けたままだったかもしれないかった。

「唯利亞ちゃん、大丈夫？来る途中、変なことされなかった？」

「う、うん。大丈夫、だけど……………」

「よかった……………。ま、ナツや九能さんがいるから大丈夫よね」

沙夢濡は安堵の息を吐く。だが、その場にいる誰もがその安堵に

同意できるほどの余裕を持ち合わせてはいなかった。全員の視線が沙夢濡の頭部に注がれる中、本人は反応が薄いことに首を傾げている。

さて、と皆は悩む。沙夢濡の金髪について、追求するか否かについてである。しかし答えは悩むべくもなく決まっていた。訊かねば話は進まない。

だがしかし。その大役を誰が務めるかという問題がそこにあった。唯利亜か奈都海か九能か。例の戦いの件で九能と沙夢濡の仲はただの知り合い以上の関係になっている。九能が訊いてもおかしくはなかった。唯利亜は今日、唯一沙夢濡と会話を交わしている。最も自然に訊こうとするなら、唯利亜が適任だった。そんな二人に反して奈都海はおそらく訊くことにはならないだろうと高を括っていた。なぜなら、この二人はともに読唇術が使える。ということは、彼が言ったことはこの二人のどちらかが翻訳してくれることになる。なら、この二人が直接言ったほうがより自然ではあった。しかし当然、不用意な安心は良くないことへのフラグにしかならない。今回もその例外ではない。

「ナツ？どうかした？」

奈都海は内心、戦慄した。まさか自分が、しかも名指しで。包囲網は完璧。逃げ場はない。奈都海が諦めるのは早かった。すぐさまメモ帳を取り出して訊かなければならないことを書くため、ペンを走らせる。だが、いつもはさらさらと初めて見た者は誰もが驚くであろうスピードで動くペンの動きが、今日は鈍かった。そのことにもまた、沙夢濡は頭に浮かぶクエスチョンマークを増やした。

「ナツ……？」

奈都海は意を決して、そのメモ帳を沙夢濡の眼前に突きつけた。

書いてあるのは、

『なぜ、金髪なのですか』

という一文。どんな反応が来るのかと内心で密かに恐れる奈都海
の予想に反し、沙夢濡はばつの悪そうな表情で自分の金色に変じて
しまった髪を一房、右手に握って、言った。

「やっぱりわかる？」

見ても気付かない者がいるなら教えてほしいと、この場にいる全
員が思った。

「我ながら違和感のない仕上がりだと思ったんだけどな。メイク
派手にすればわからなくなるかしら？」

誰なのかわからなくなることは明らかだろうと奈都海は心中で突
っ込んだ。

あまり不用意に派手な色に髪を染めると、下手をすれば不自然を
通り越して人外になることすらあるが、沙夢濡の金髪に限って言え
ば、似合っていた。奈都海から見ても、女の九能から見ても、よく
もまあ日本人の沙夢濡がここまで金髪に馴染むものだと感心してし
まうほどである。

だが。しかし。

「いや、あの、それはさすがにどうかかなー……なんて……」

唯利亜は自分も沙夢濡と同種の視線を受けていることを忘れて、
それはありえない、という言葉を極力控えめな表現に変換して言っ
た。

だが、沙夢濡の解釈は全く異なった。

「じゃ、どうすれば不自然さが消えると思う？ カラーコンタクトなんかいいかもしれないけど」

「え、えー……」

会話のキャッチボールが成立していない。沙夢濡は投げられたボールの意味を完全にはき違えていた。

そこへ九能が助け舟を出した。

「いえ、そのことではなくてですね、金髪というのはさすがにまずいのでは、ということですよ」

これ以上ないほどの直球だった。奈都海は、お前が始めからそう言う風に言っていれば、と九能を睨んだが、睨まれた九能は気付いていない振りをした。

真正面から自分の髪を否定された沙夢濡は、しかし、笑って九能に答えた。九能はその笑顔に、なぜか薄ら寒さを覚えた。

「大丈夫よ。校則では禁じられていないし、なにより唯利亜ちゃんのためだよ」

だが、唯利亜のため、という言葉に九能は唐突に走った背筋の寒気を忘れた。

「唯利亜の……？」

「ボク……？」

九能と唯利亞、二人で揃って首を傾げる。その様子を沙夢濡は笑って眺め、

「ええ、だって ……………あ」

何かを言おうとしたその口を、開け放して呆けた。対面に立つ三人は、当然その視線を追う。

「……………」

「え」

「あ……………」

奈都海は無言で、九能と唯利亞は各々間の抜けた表情で背後の人物を見上げていた。

「……………」

彼らの間に沈黙が降りる。そこにいたのは、比較的寛容な教師の多い鳳霊学園の中で唯一、厳しいと言われている男性教師。それを知っているが故の沈黙だった。

しかし、その教師も言葉を発することができていなかった。彼の目の前に広がっている光景は、白金色の髪をしたアイドルだと有名な女子生徒にしか見えない男子生徒と、金髪となり果てた生徒会長である。

「……………」

戸惑っていた。が、結局は教師の職務を果たすべく、

「……二人とも、生徒指導室に来てもらおう」

そう言っつて先導するように歩き去っていった。教師の言う二人、沙夢濡と唯利亞は予想通りの展開故に落ち着き払った様子でそれを追った。唯利亞に関しては、沙夢濡が自分と同じ立場で同行することとは予想していなかったが。

意外なことに、説教はさほど長くなかった。

唯利亞は病の影響であるから仕方のないことと言えた。

沙夢濡自身もこの金髪をいつまでも維持する気は全くなかった。

単に、生徒が唯利亞を見た際のインパクトを軽減するための茶番だったのである。生徒会長である自分の顔なら全校生徒に知られている。その自分が異常とも言える行動を取れば、唯利亞の負担も軽減できるかもしれないと考えた。

染髪を禁止する校則がないことは周知の事実。沙夢濡の行動を見て、いまさら髪を染めようという者は出ないだろうと踏んだのだ。

それらの意見を沙夢濡の屁理屈も交えながら説明したところ、教師は言いたいことを言えずに判然としないようではあったが、沙夢濡の髪はすぐに染め直すようにと言っただけで終わった。

身体の中の魔力の量が非常に高くなったことで、髪質の劣化については心配する必要もなかった。

そもそも、私服で登校しても何も言われないようなこの学園で染

髪が問題になるのかと言われれば、それは否であるとしか言えなかった。

沙夢濡は事実上の生徒会室となっている第二会議室の窓際で頼杖をつき、そこから見える中庭の光景を眺めつつ溜息をついた。今は授業中だが、3年である沙夢濡は出る必要がない。途中から入るというのも面倒だった。

しかし、と沙夢濡は朝の出来事を思い出す。

思い出すのは唯利亜のことではなく、奈都海のこと。今朝は自分の金髪騒動で色々誤魔化せたが、次はないかもしれないと、ある意味恐れていた。

戦いの最中、自分の取った行動。奈都海と交わった記憶。奈唯他との会話。これらすべてが、奈都海と会うことへの恐怖を創り出し、加えて助長していた。

恐怖と言うと少し違うかもしれない。だが、酔った勢いでやってしまった、というような軽い（かどうかは人によるが今は相対的に見て重くはない）表現で片付けられるものでもなかった。

彼に彼女がいる故の罪悪感ではなかった。

初めてのセックスの余韻を引きずった結果の気恥かしさでもない。そこまで初心ではないと沙夢濡は自覚している。

汚されたという被害感による嫌悪でも、当然ない。

ではなんなのかと問われれば、彼女には答えるに値する語彙がなかった。

無理やり表現するなら、恋人の仇に対する憎悪をそのまま反転させたかのような感情、とでもいったところか。だからといって恋人に対する恋情ではない。それは何か、根本的などころで違っている気がした。

違う、違う、と、自分の知り得る限りの表現を頭に浮かべては否定していく。

それは、傍から見れば恋に悩む一人の少女そのものだった。

「何か思いつめているところ申し訳ありませんけれど。少しお時間、よろしいかしら？」

「ッ!？」

足音も気配もない背後から話しかけられ、沙夢濡は反射的に振り返りながら身構えた。

振り返って、すぐに足音がないことへの納得がいった。“それ”は、飛んでいたのだ。“それ”は声をかけたまま沙夢濡に飛んで寄り、通り過ぎるかと思えば窓のサッシにちょこんと座った。

「あなた……」

「憶えてらっしゃいます?……いいえ、憶えていなければ私を知覚することはできませんものね。愚問でしたわ、さっきの質問は忘れてくださいな」

“それ”は愉快そうに背の翼をパタパタと羽ばたかせる。沙夢濡のものとは違う、自然な輝きを放つ金髪が風になびいて“それ”は咄嗟に髪を押さえた。

“それ”の名は、ノエル。小さな三頭身の体躯の通り、人間ではない。DMFBの最上位種、ファントムである。ファントムは人の姿に似るものだが、ノエルの姿は頭上の輪っかや背中の中純白の翼な

ど、天使のそれにそっくりだった。

それが、ノエルが、沙夢濡の目の前にいた。一週間前の戦いでほんの僅かではあるものの戦火を交えた相手が、今、目の前に。

「どうして、ここに……」

「どうして、と申されましても。生きるだけなら何の制約もない私たちにその質問は意味がありませんわ。でも、そう……強いて言うなら、暇つぶし、ですわね」

心底楽しそうな表情で答えるノエルの前で、沙夢濡は判然としな
い顔を向けた。同時に、心を掴むわずかな恐怖。なまじ魔力に対す
る感度が高まっているせいで、ノエルから感じる威圧感は一シャトー
やノクターンと初めて会った時とは比べ物にもならなかった。戦う
際は、あの独特の高揚感で恐怖は忘れることもできたが、今はそう
もいかない。その笑顔に取りこまれる自分を無意識に想像してしま
い、すぐに頭かぶりを振ってそれを頭の中から追放した。

「それで、この学校に来たら驚くほど似ているんですもの、思わず
声をかけてしまいましたわ」

「似て、いる……？」

何が、何に。主語と目的語の欠けたノエルの言葉に、沙夢濡は首
を傾げざるを得なかった。

「あなたが、生前の私に、ですわ」

「あなたが私に……」

ノエルの生前など沙夢濡が知るはずもなく、そんな風に呟くしかない。実際は、ノエルが自らの過去を語ることは九能ら疵術師にもなかったのだが、それもまた知る由もなかった。だが、沙夢濡は個人的にもその話に興味を抱いた。続きを話してくれることを期待して、待つ。

ノエルは目を閉じて記憶を探りながら話し始めた。

「もう15世紀も前の話ですから記憶もおぼろげなんですけれど」

「15世紀……！？そんなに前に……」

純粹な驚きを見せる沙夢濡に、ノエルは微笑む。

「DMFBは本来、魔力さえあれば生きていけますもの。人間を喰らうのは大気中から取りこむよりも効率がいいからですわ」

「なら、あなたも……」

「ええ、食べましたわよ、数えきれないくらいの人間を」

沙夢濡は恐怖によるものか身体を震わせ、自らの肩を抱いた。それでもノエルの無邪気な笑顔と仕草が変わらなかった。

「もちろん魔術師の攻撃はありませんでしたわ。幸い、私には力がありましたから刃向う魔術師は皆殺しにできましたけれど……、」

「？」

言葉を途切れさせたノエルに、沙夢濡は怪訝な目を向ける。ノエルはまだ懐かしい記憶の旅に耽っているようで、沙夢濡のことには

気付かなかった。

「私、生前はある国のお姫様でしたの。でも、婿を迎えてしばらくして子を産むこともなく病死。この姿になってしまったんですのよ。こうなつてすぐは私、天国の使いに任せられたのかと喜びもしましたわ」

中庭を挟んで向かいの校舎の3階にある音楽室から生徒たちの歌声が聞こえてきた。歌声の方向を見てノエルは何かを呟いたように沙夢濡には見えたが、聞こえはしなかった。

沙夢濡に向き直ったノエルは懐かしげに話を再開した。

「でもすぐに自分は怪物だとわかりましたわ。やけになつて人間を本能に任せて喰らい続けた。彼と再会するまでは、ずっと」

「彼？」

「ええ……………私の夫だった人、ですわ」

ノエルの表情は、優しかった。まだその人を愛しているのだと、その表情だけで沙夢濡はわかつてしまった。

「あの人は、魔術師だった。だから私が見え、私がかつての妻の変わり果てた姿だとわかつてしまった。……………彼は私に人を喰らうのをやめるよう言いましたわ。何度も、必死に」

「それで、あなたは人喰いをやめたのね？」

「いいえ、その場で彼を殺しましたわ」

「ッー!!」

驚愕と落胆で沙夢濡は声を詰まらせる。だが同時に、自分の思うようなハッピーエンドなど現実にも都合よくあるものではないと、冷たく悟って見えた。今の自分がいい例だ。

「でも、結果的には彼が私を止めてくれたも同然ですわ。彼を手にかけたことで、私は正気に戻った。……ファントムでありながら正気というのもおかしな話ですけど」

冗談めかして言うノエルに、沙夢濡は何を言うか迷った。ノエルの話を自分たち人間の尺度で解釈してもいいものなのか、悩んでしまった。ノエルは沙夢濡が何かを言うのを待たなかった。

「生前もそうでしたわ。世間知らずでやんちゃだった私を抑制してくれていたのも彼でしたし、ね」

「あなたが、お姫様だった頃……」

「そうですね。……今はただ、懐かしいだけの話ですけど、ね」

ノエルはそう言って飛び上がり、ちょうど沙夢濡の顔と同じ高さで止まった。その顔には取っておきの悪戯を執行しようとしている少年のような笑みが浮かんでいる。

「さて、私のお話はこれでおしまい」

沙夢濡の中に、確信に近い悪い予感が浮かぶ。

「今度はあなたの、お姫様としてのお話を聞かせていただきますわ」

「え……私、の……？」

沙夢濡は戸惑う。何を話せばいいのか、検討がつかないからだ。自分は確かに平均よりは遙かに上の家で生まれ育ったお嬢様だが、さすがに一国の姫にはなったことはない。ノエルの訊きたいことがわからなかった。

「そんなに深く考えなくても、あなたがファントムに攫われた理由を訊いているだけですのに」

「え、でもそれは……」

それは既に九能から聞いていた。沙夢濡は専門用語を交えた説明をすべて憶えているわけではないが、要するに自分の持つ特異な能力を使ってファントムを生みだすためだということだったはずである。しかしその時、沙夢濡が呼ばれていたのは、

「女王、だったはずなのだけど」

「呼ばれていただけでしょう？あなたは本当に自分が女王足る資格があるとでも思っていたんですの？」

「っ……？」

今度は言っている意味がわからない。そもそも、自分が女王かどうかということがそこまで重要なかが疑問だった。DMFBの女王といえば過去にもいたらしいが、それはファントムがそう呼んでいただけで、本当に彼女らが女王であるはるはずがない。呼称に何の意味があるのか。それが沙夢濡の疑問だった。

「ファントムたちが人を呼ぶ時、それは何かしら特別な存在であるということですね。ファントムもDMFBですもの、ただの人ならそれはただの食べ物に過ぎない。でもあなたには、そうではない、少なくとも“彼”にとっては女王と呼ぶに足る要素があった、ということになりますね」

「なら、あなたにとっては……？」

「私、というよりは彼以外のファントムの共通認識だと思いますけれど。あなたは女王というには未熟すぎますね。せいぜいお姫様ですわね」

思い出したのは奈唯他の言葉。曰く、沙夢濡には女王となる資格がない、と。彼女も同じ能力を持っており、それを魔術で補助していたようだが、それにしても沙夢濡と比べてもその力は大きすぎた。それを思い出して、もしかしたらあれが本当の女王の力なのかもしれない、と沙夢濡は気付いた。

「ん、思い出したようですね。彼女こそが我々にとっての女王。あなたはまだ、女王にはなれない」

ノエルは満足そうに翼の動きを速める。その翼から、舞い散る羽根の代わりなのか可視化された魔力の粒子が舞った。

「ならなぜ、彼は私を女王だと？」

「そう、そうですね。なぜ彼はあなたを女王として選んだのか？少なくともファントムであればもつと優秀な女王である幣原奈唯他という存在が近くにいることに気付くはずなのに、なぜ、わざわざ。」

それは私にも、偽識者　唯利亞さんですらわからなかったこと
なのですよ」

まさかこの天使の姿をした小さくも巨大な存在にも知らないことがあるのかと沙夢濡は驚く。だが、それも当然かもしれない。相手もまた、同じファントムなのだから。それに沙夢濡の知る限り、ノエルはあのファントムと一度も会っていない。考えて見ればやはり当然だった。

「可能性で言えば、彼の生前の記憶によるもの。私と同じように、彼も生前にあなた、もしくははあなたに似た女性に大きな影響を受けたのかもしれないわね。だから、彼はあなたを女王と崇めた」

崇めるといふほど丁重な扱いはされなかったような、と沙夢濡は記憶を探りつつ思ったが、口にはしなかった。

「ねえ、お姫さま？」

「え……私？」

どうやら自分はお姫さまで固定らしい。沙夢濡は少々気恥ずかしかったが悪い気分はしなかった。知らず、そんな自分に沙夢濡は苦笑する。ノエルはそれを見て冗談めいた邪悪さで笑った。

「あなたはお姫さま。そんなお姫さまに訊きたいことがございますの」

「えと、なにかしら？」

今までと比べていくらか気楽な雰囲気になったため、沙夢濡の気

も多少ならず緩む。

かといってノエルは、容赦などしない。

「ギー・オーギュスト、という男に会ったことは？」

「え……？会ったことはない、と　　っ」

ギー・オーギュスト。ノエルの質問に否定で答えながらその名前を頭の中で唱えた沙夢濡は、妙な違和感を覚えて思わずこめかみを押さえた。

「え、……え？」

知っているのだろうか。しかし記憶にはない。外国人に会った回数などそう多くはない。名前を聞いていればおそらくは記憶の中に残っているはずだ。だが、ない。

名前を聞いていないだけかもしれない。しかし心当たりはなかった。

なのに、なぜか記憶が疼いた。

「ギー・オーギュストは、かのファントムの生前の名。心当たりがあれば、とも思いましたけれど……」

ファントムの禍々しい嗤い顔が浮かぶ。だがそこに、誰かの優しい微笑が重なった。

知っている。でも、憶えていない。

同一人物かどうかはわからない。なぜ憶えていないのに頭に浮かんできたのかもわからない。無意識の所業だとしても、それが本当かどうかを確かめることもできない。

自分は、あの人の優しい部分を知っている。なのに憶えているの

は残酷な部分だけだった。

「わたつ、わた、し、は……っい……」

それを伝えようとするが、これも不思議なことに口が上手く動かせなかった。舌が回らず、喉からもかすれた声しか出なかった。沙夢濡は突然喋ることのできなくなった自分に戸惑う。口を押さえて何度も喋ろうとしたが、何度試しても、喋ろうとすればするほど自分から聞こえる声は小さくなっていった。

軽いパニックになりかけている沙夢濡を見て、ノエルは納得したように首肯してから飛び立った。窓から出て行こうとするノエルに、沙夢濡は手を伸ばす。

「まつ……」

「廻り廻ってここに落ち着いたんですわね。……私もまた、知っているが故の存在。今の世は、とても矛盾していて、それでいて合理的。究極なまでに洗練された未来と過去。憶えていないあなたこそ、世界の選んだ未来。さて、過去と未来、未来と過去、どちらが先だったかしら？」

「いつ……あ」

止める間もなくノエルは飛び去り、向かいの校舎の向こう側へと消えていった。

再び沙夢濡一人となった部屋。

窓からは秋の涼風が微かに吹き込んでくる。靡くカーテンに向かって、沙夢濡は叫んだ。

「私はつ、知っている、のに……っ！」

叫ぶつもりで発したその声は、しかし沙夢濡以外の誰にも聞こえなかった。

「ただいま」

無駄に幅の広い扉を開けた先の玄関には、一人の女性が立っていた。

「あ、おかえり、遅かったね」

この南坂家が宇類のためだけに建てた家でメイドとして働く女性は、メイド服を身に纏い、玄関の掃除を行っていた。それを見て、宇類は靴を脱ぎながら、投げやりとも取れる適当な質問をした。

「なんでこんな時間に掃除なんかしてんだ？」

「することないから。……あ、他のメイドの人はもう休んでるからね。夕飯もできてるから勝手に食べて」

「へいへい」

本来は従う立場であるはずのメイドらしからぬ口調に宇類は抗議することもなく部屋のある二階へ向かう。

二階には廊下の左右に二部屋ずつ、突き当りに一部屋、計五部屋がある。だが、その中で使われている部屋は宇類の寝室である一部屋だけである。一階はリビング、ダイニング、キッチン、バスルームに、メイドの寝泊まりする部屋があり、空間は満遍なく使われているのだが、二階はまさに空虚の極み。宇類も、なぜ自分しか住まないという前提で建てたのにこんな構造になったのか不思議でならなかった。

だが今は、この無駄が非常に有難かった。鳴姫をこの家に迎えても十分余裕はあるし、子どもの部屋まで用意できる。

もちろん、いつまでもここに居座るわけではない。しかるべき時が来ればここを出て、自分たちだけの家を持ちたいとも考えている。しかし、今はこの状況に甘んじる。利用できるなら、それが鳴姫の幸せに繋がるなら、宇類は何の迷いもなく利用する。自分の立場も、親の財力も、すべて。そう宣言した以上、宇類はそれを貫く。それが今は頼るという形になったとしても、だ。

「……」

着替えてダイニングルームに入った宇類は、料理を準備するメイドの姿を見た。疑問をぶつけるまでもなく、温めなおしたものを再び配膳しているということはわかった。勝手に食べと言ったのはお前だったはずだろう、とは言わずにおいた。訊いてどうなるものでもない。

だが、それがなぜか二人分あった。

皿を並べ終えたメイドに、宇類は抱いて当然の疑問を投げかけた。

「なんで二人分……？」

「あたしの分に決まってるでしょ。ほら、座って。食べよ」

自分が帰ってくるまで待っていたのか、と言うべきかと無駄に悩んでいると、メイドはそれに先んじて笑った。

「ご主人様に一人で食事させるなんてメイドとして失格でしょ。一緒に食べてやんなきゃ、と思ってるね」

「ケツ、よく言っぜ。雇い主にタメ口きくメイドがどこにいるかってんだ」

「あーら。あたしはあなたに給料もらったことはないけどあ？雇い主はあなたじゃなくて、あなたの父親でしょ？」

正論を言われて言葉に詰まる宇類。だがすぐに、二人は笑ってやや遅い夕飯を食べ始めた。

二人に会話はなく、箸と皿、皿とテーブルの鳴らす音だけが部屋に満ちる。普段は宇類と3人のメイドとで夕食を取る。宇類自身が口数の多い性格であり会話もそれなりにあった。

高校に入ってから一年半、ほぼ毎日会って話をした。仕事に没頭してほとんど会うことのなかった両親よりもはるかに、彼女らのほうが家族としての実感は強かった。

その内の一人に、宇類は残酷かもしれない事実を告げるために、

「……サンキューな、華音^{かのん}」

まずは、感謝した。

「ん、なに？いきなり。言葉に出ちゃうほどあたしの料理、美味しかった？」

冗談めかして笑う華音に、宇類はしかし笑わず、今日、鳴姫と別れる直前に確認し合ったその事実を、そのまま告げた。

「鳴姫と、結婚することにした」

「ッ!!」

華音は口に運ぼうとしていた肉片を取りこぼした。宇類はそれを冷たい視線で見ている。

「あ、そう……そうなんだ……」

箸を持つ手が震えている。視線は固定せず、唇も戦慄かせていた。

「良かった、じゃない？おめでと」

祝福の言葉にも、動揺が溢れていた。食事の手も止まっている。

「ま、まあ、二人、結構いい感じだったし。ほら、二人のお父さんだってそうするように言ってたんでしょ？なら当然よね」

まるで自分に言い聞かせるように言葉を並べる華音を、宇類は止めた。

「無理すんな、華音」

「は、あ……？無理、って……別にそんなの」

動揺を隠し切れていないにもかかわらず尚も華音は強がる。だが、

宇類は気付いていた。一年半も一つ屋根の下で暮らしていて気付かないわけがなかった。

始めは自惚れでは、と思った。だが、毎日会って話すに従って、それが確信に変わった。

華音の方も、その気はなかったのかもしれない。しかし長くともに暮らすことで多少なりとも愛着は湧く。それが次第に恋愛に発展したのかもしれない。それが本当の想いとなるのかなど、本人には問題でならない。問題は、その想いが成就するかどうかということだけである。宇類に鳴姫という存在を知っている以上、華音も覚悟はしていたはずだが、それが予想以上に早すぎたがためにその衝撃も大きかったのかもしれない。

だが、宇類にはそれを華音に対して指摘するつもりはなかった。

「……辞めてもいいんだぞ」

「えっ……」

華音の表情はまさに落胆。宇類のその言葉は、華音にとって最大の拒絶に他ならなかった。宇類との唯一の接点を失うことになるのだから。

「そ、それは……っ」

「辛かっただろ、今までだって。俺も知ってて鳴姫をこの家に呼んでたんだ。恨むなり憎むなりしてくれてもいい。ただ」

華音は今にも泣きだしそうだった。が、そこは年長者の意地が、際で押し止まっていた。宇類はその華音から目は逸らさない。

「結婚したら俺と鳴姫は一緒に住むことになる。それを見るのは、

お前にとっては苦痛だろ。……俺だって、お前が苦しむのを見るのは辛い」

「っ……」

「だから、辞めてもいい」

華音は宇類を恨みたかった。自分の気持ちを知りながらの今までの所業を知らされれば、それは当然ではある。しかも、その上で宇類は選択肢を与えた。辞めてもいいということは即ち辞めなくてもいいと言っているのと変わらない。宇類は優しさのつもりで言ったのだろうが、その選択を華音に委ねるのは、華音にとって残酷にすぎた。華音が辞めたいなどと思うはずもなく、この家に留まれば今までの苦痛をさらに増して味わうことになる。いつそ辞めると言われればどれだけ楽だったか。宇類に明確な拒絶の意志がないことが、逆に華音にとっては残酷だった。

宇類は華音に選択肢を委ね、あとは何も言わなかった。それは優しさなのかはたまた遠慮なのか。どちらにしろ、華音はその真面目くさった面を引っ叩いてやりたかった。宇類の自覚のない拒絶で悲嘆に暮れていた華音の中には、いつのまにか腸の煮えくり返るような怒りが渦巻いていた。渦巻いて、竜巻になって暴走していた。

「だ、誰、が……」

「……？」

宇類の怪訝な顔が心地良かった。そのまま驚愕に慄けばいいと華音のダークな部分が笑った。

「誰がつ、辞めてやるもんですかっ!」

「うおっ」

突然立ち上がった華音に、宇類は驚いて軽く仰け反った。華音はしてやったり、と宇類を見下している。

「あたしはね、自分の幸せのためなら何だってしてやるつもりなのよ！」

さすがにそれはどうなんだ、と宇類は思った。が、

「そのためなら、何だって利用する。あんたのメイドっていうこの立場もね！あんたに言われたぐらいで捨てて堪りますかってのよ！」

「！！！」

何だっけ利用する。自分の今の立場でさえも。それがたとえ、他人に与えられたものであっても、与えた本人に言われても捨てるつもりはない。それは、宇類と同じだった。自分の今の立場を利用して鳴姫を幸せにしようとしている宇類に、華音は似ていた。

「はっ……、なるほど……」

「なによ」

「いや、なんでもない。辞めてもいいなんて言って悪かったな」

「ふん、わかればいいのよ」

華音は腕を組んで再びイスに座る。テーブルで宇類には見えなか

つたが、脚を組んでいれば踏ん返り返っていると言ってもよかった。そんな華音に宇類は苦笑して、少し冷めてしまった料理を再び食べ始めた。

「ま、あの娘、料理できないからあたしが教えてあげなきゃいけないしね」

「お前にゃほんと、世話んなるな」

「あ、でも子どもができたなら楓さんに任せることになっちゃうのかな？あの人、子育ての経験あったもんね」

「……………」

「……………？どしたの？」

宇類は結局、悪夢を見た。

Noisy Lyric . 5 . アサルト オブ ブロンド (後書き)

キャラがどどど、増えていく……

章前 あるはずのない記憶

そこは、戦場だった。

しかし、見る者によってはその光景もまた違う解釈になるかもしれない。

例えば踊り子の舞う舞台。あるいは猛獣使いが己が技術を披露するショー。もしくは花弁の舞い散る中の賑やかな宴会。

もちろん実際は、そんな平和なものでは決してない。

踊り子とは疵術師であり、猛獣とはDMFBであり、花弁とは戦いの中で飛び散る鮮血だった。

舞台とは疵術師がDMFBを屠る戦場であり、ショーとはDMFBが疵術師を喰い殺す戦場であり、宴会とは疵術師、DMFB双方の上げる咆哮と断末魔の響く戦場の光景だった。

その場にいた誰もが傍観者になることを許されず、例外なく巻き込まれた。切り刻み引き千切り喰い殺し、できないものは切り刻まれ引き千切られ喰い殺された。

時は、2027年11月5日。場所は日本、中国地方某所。後に“Purgatory Week”と呼ばれる、DMFBの大量発生した場所、そしてその五日間の最後の日である。

この結末が疵術師たちの勝利で飾られるのか、DMFBの勝利に終わってしまうのか、それ以外の何かで終わるのか、その時はまだ誰も知るはずがなかった。それどころか、この日にこの戦いが終わることすら、知る者はいなかったはずだった。

しかし、その戦場にいた一人の少女は思う。“自分以外にも”この結末を知る人間がいるのかもしれない、と。

一人の少女が地を駆ける。

“地を”という表現は正しくないかもしれない。彼女は、地面だけでなく家屋の屋根や樹木の枝や電柱、果ては敵である異形の身体すら足場にして、一直線に目的地へと向かっていた。

向かうのは、ある丘。地図に載っている名称は、江倉宮高台。昔江倉という豪商が居を構えたことからその名が付けられた江倉宮高台は、実際はそれほどの高さもないが、しかしほとんど平地のこの地域を見渡すには十分な高さがあった。

彼女はそれを目指す。正確には、そこに座す女王の下を目指していた。

いつの時代も、どの地にも存在する女王。騎士を従え、民を統べ、国を治める女王。永久に朽ちることのないその称号、その存在は、見上げねば天を見ることのできない者たちにとって、まさにその“天”そのもの。彼らは、自らを庇護し、自ららに恵みを与える天を崇め、敬い、愛し、また畏れ、時に恨む。

しかしいずれにせよ、女王は彼らにとっては絶対に手の届かない存在。いや、それ以前に手を伸ばすことも目にするこすらす許されない地位。不用意に伸ばせば、その腕は切り落とされる。

騎士にとっての主君。民にとっての神。国にとっての自身そのものの。

女王とは、絶対不可侵の領域。決して侵されない、あるいは侵してもらえない孤独の領域で、ただひたすらに主君を演じ、神を気取

り、国であると嘯く。

少女は一人、女王を目指した。

女王の領域を侵す、その一人目になるべく。

『じ、准将！右の戦力が崩されました！このままでは突破も時間の問題です……！他にこちらに回せる戦力は………』

少女は通信魔術“紅線”を通して聞こえる、悲痛な叫びにも近い報告を受け、それまで異形に対して振るっていた巨斧を止めた。その後、「ちよつと待ってて」と伝え、斧を地面に突き刺し、

「っは！！！」

裂帛の一瞬後、刃と化した魔力がDMFBを襲った。得意分野の魔術ではないため威力は低く、DMFBを倒し切ることはできなかったが、隙は生まれる。少女はその隙をくぐって異形の包囲網を抜けた。余裕のできた少女は再び紅線を繋げる。

「小鳥遊中尉！」

『はいはい、なにな』

その通信相手は、中国地方支部所属の小鳥遊尊何中尉。得意とす

る魔術に問題があり、前線にはあまり出ない（というよりも出して
もらえない）が、今回は少女の命令で投入された。

「右翼の援護に行つてちょうだい。あなたの位置なら近いでしょう
？」

『いいのかな？ここは僕だけだけど』

「いいから行きなさい。どうせ私の仕事が増えるだけよ。絶対、味
方を殺したりはしないでね！いい？わかった？」

『了解ですよ、准将』

承諾の声を聞いて、次は他の疵術師へ通信を繋ぐ。相手は、三井
魅戈少尉だった。

「で、三井少尉！」

『ふあ〜い？』

「……、あなたは最前線に立つて敵を喰いとめる！私はここを離れ
るからあとはお願いな！」

『は〜い、わかりました〜』

通信を繋ぎっぱなしにしていた、助けを求めた疵術師が安堵する
雰囲気を感じ取る。溜息をついて少女はさらにスピードを速めた。

彼女はこの中国地方支部の所属ではない。それ故に直属の部下は
連れてきた一大隊のみ。それ以外の疵術師は、彼女の姿が少女にし
か見えないこともあつて彼女の命令をあまり重く捉えてはいない。

A D E O I Aは軍ではあるが、魔術の関係ない軍ほど厳格ではなく、ほぼ完全な実力主義でもある。それは個人の能力を尊重することにも繋がるが、戦果さえ上げれば若い者でも尉官、佐官まで昇進できるため、戦闘の際の意志の統一が難しいという弊害もある。経験の豊富な部下と経験の少ない上司の対立という話は、A D E O I Aでは頻繁に聞くものなのだ。

特に少女は飛び入り参加のような形でこの戦いに参戦した。まともな説明もなく、また実力を見せる機会もなく少女の姿をした「准将」に従えと言われても、従うことに慣れていない中堅の多く集う中国地方支部の疵術師は中々素直には聞いてくれない。

もう一度溜息をついて、少女は唯一の味方の長に通信を繋ぐ。

「瀬井、そつち大丈夫？」

『准将ですか。心配はいりません、気にかけていただき恐悦至極にございます。……………と、強がりたるところですが』

「……………」

少女は嫌な予感に口を閉ざす。

『どうにも数が多すぎます。こちらで戦力の半分を他に回しているとはいえ、ここまで押されるのは初めてですな……………。持ち堪えるだけで精いっぱいという状況です』

「……………つ、わかったわ。あと30分だけ持つ？」

少女は防衛線に長けているはずの部下たちが押されていることに歯噛みする。が、少女もその部下も、諦めるはずはなかった。

『はい、それぐらいならなんとか』

「本丸はもう目の前、すぐに片を付けるわ。それまで耐えて。ただし、絶対に無駄に命を捨てるようなことはしないで。いい？」

『了解しました。我が源血にかけて誓いましょう。准将もご武運を』

「ええ、お互いにね」

少女はそれを最後に、完全に通信を絶つ。

その少女の前に、それまでとは違う異形が現れた。

「っはあー！き・さ・まがあー！猿どもの頂点かあー！」

それは背に3対の蟲の脚を持った人間　　否、ファントムである。

少女はDMFB中最強とも言われるその存在を前にしても、動じることがなかった。しかしそれは慢心故の無謀でもなく、無知故の愚行でもなかった。事実を踏まえた上での的確な分析の結果である。

「邪魔よ、退きなさい。私は女王に用がある」

「はあッはは！！猿はよくほざくなあ！？女王に会いたくば騎士たる俺を倒してから行くのが道理ではないかあ！？」

「そうね……、なら」

ゆら……と、少女の身体が揺れ、

「うお！？」

掻き消えた。

しかしそれはファントムの主観。背後に回り込んだ少女は巨斧を振るい、ファントムの背に生えた脚を切り落とした。すぐさま反撃を警戒し、少女は後ろに跳び退った。

「きつさまああああ!!」

激昂したファントムが残る脚を少女へ向けて伸ばす。それは槍のごとき鋭さを持って迫る。が、少女はそれに臆することもなくファントムに向かって疾駆する。

「はっはははあ!! 碎かれるお、猿があ!!」

ファントムの言う通り、その脚は少女の左腕をもぎ取り、左脇腹を抉った。

が、少女の足は止まらない。むしろ、加速させていく。

「特攻作戦かあ!! 嫌いではないぞお!?!」

ファントムは叫び、伸ばした脚をリターンさせ、少女の背後から襲わせる。ファントム自身も腕の鋭い爪を掲げ、少女を喰らわんと待ち構える。

少女がファントムの目前に迫る。

「死つつつねえええ!! 猿があああああ!!」

ファントムの爪が少女の顔の左半分を削ぎ落とす。背後の爪が少女の背中を貫き、腹まで貫通する。

少女の頭から脳漿が飛び散る。左の眼球が視神経の尾を引きなが

ら飛んで行く。挟まれた脇腹から内臓が這い出る。中途でもがれた左腕から血潮が噴出する。貫かれた腹から夥しい血が滲む。

ファントムが勝利の笑みを浮かべる。

少女の、右だけ残った口が、弧を描く。

「あんだ、いい加減、喧しいのよ」

半分肉塊と化した少女が、右半身を捻る。ファントムの攻撃から死守した右腕に握る巨斧は、

「ッ !？」

ファントムの身体を上下真っ二つにしていた。

断末魔は、なかった。

少女はどこから持ってきたのか、やたらと豪華なイスに座っている。

服装は、通っている鳳霊学園高等部の制服。いつもは結んでいるはずの髪も今は下ろしたまま。下ろすとあんなにも長かったのかと

場違いな感想を抱く。

周囲に待るのはDMFBの軍勢。人間を襲うのが本能として記録されているはずの彼らは、しかし中心にいる一人の少女を襲おうとはしない。

「……あれ？来てくれたんだ、奈緒さん。……あんまり嬉しくないけど」

彼女は、如月竜緒^{おんづか}。私たちと同じ疵術師だった。

以前は。今は、DMFBを統べる女王だ。

私はなぜかこの光景に既視感を覚えて頭を抑える。55年もこんな仕事をしていれば見ているもおかしくはないけど、一度見たなら忘れるはずはない。脳の錯覚だろうか。

「それにしても酷い格好。ほとんど裸じゃない」

目の前に堂々と座す竜緒は笑う。

ファントムとの戦いで速攻を意識しすぎたせいで攻撃を受けすぎた。私の身体は治るから大丈夫だけど、服だけはどうにもならない。中途半端に着ているも邪魔なだけだから脱いできた。今は奇跡的に残ったスカートと拾ったポロポロのカーディガンだけを着ている。……誰がこんなところに落としたのかは知らないけど。

「ほんとにもう。どんな時でも女の子らしくなきゃいけないって言ったのは奈緒さんじゃない。なのにその格好……、ふふっ」

堪え切れないという風に笑う竜緒。その姿はつい数日前まで同じカリフォルニア支部で過ごしていた仲間である如月竜緒のものと同じだった。

だからこそ余計に、腹が立つ。

「それにしても、さあ……。よくファントムまで突破できたよね？」

「活動期間に入ってさえいなければ私の敵じゃないわ。カリフォルニアで学ばなかったの？」

「ふふっ、さすが奈緒さん。ほんつとに強いよね」

そう言いながら、竜緒は顔を俯ける。前髪が遮って表情は見えないけれど、肩を上下させて笑っていることだけはわかる。何がおかしいのかはわからないけど、それは当然。女王になった人間に正気を求めてはいけないし、そんな人間を理解しようとしてもいけないだけだ。

「ああ、腹の立つ！そんなに自分の力をひけらかして何が面白いわけえ！？」

「ッ！？」

竜緒は立ち上がり、こちらに歩み寄ってくる。ただ、その姿だけは私の知る竜緒とは違った。手足を投げ出すような歩き方、首が据わっていないようにそれは左右に揺れる。顔は当然、狂気に歪んでいた。

「わかんないかなあ、わかんないよねえ、あんたみたいに最初っから強い奴にはさあー！」

それまで私たちを静観していたDMFBが私に襲いかかってくる。しかし、それはたったの一体だけ。私は焦ることもなく斧でそのツチノコみたいな巨躯を両断する。

それを見た竜緒はさらに叫ぶ。

「ほら、さあ、そうやってあんたはいつも強さを振るう！あたしたちに見せつける！力のないあたしたちを従えるにはそれが一番早いってわかってるからあんたはいつも必要以上の力であたしたちを畏怖させる！」

叫ぶ間にもDMFBは次々に私を襲うけど、それはすべてクラクやBランク程度。私からすれば到底敵じゃない。

でも、それは竜緒の怒りを増幅させることになる。

「力のないあたしたちを嘲笑うようなそんな力を使って面白いのお！？ああ面白いでしょうねえ、それがあれば好き勝手できるんだから！！」

竜緒を狂気に導いたのは、この劣等感なのかもしれない。竜緒は決して優秀な疵術師とは言えなかった。それでも努力はしていたし、スピードは遅かったけれど目に見える成長もあった。

ただ、私の近くにいることによって無力感が目立つことになる。規格外とも呼ばれる私の能力と比べること自体ナンセンスだけど、竜緒はそれをナンセンスだといって見過ごすことができなかった、ということなのかもしれない。

……………こんな風に激昂する相手の前で冷静に分析できる辺り、私はやはり他人を自分よりも下にしか見ていないということなんだと思う。竜緒の指摘は間違っていない。

「今まで力のないあたしがどれだけ惨めな気分を味わってきたか……、あなたの近くにいたからあたしは本来の力よりも過小に評価された！いつもいつもあなたが妬ましかった……！」

でも、

「力が欲しかった！あなたさえも下せるほどの力が！あなたを足蹴にできるくらい圧倒的な力が欲しかった！その余裕綽々の顔を絶望に染められるような禁忌が欲しかった！」

でも、だとして、

「結局力を手に入れてもあなたはそうやってあたしを見下す！ああ、気に食わない、殺したい、今すぐここで、あたしの手で！」

でも、だとして、それが、

「そうやって余裕に構えてるのが！いつちばんうぜえんだよお！！！」

「それがどうした、雑魚」

異様な既視感は、私の理性を握りつぶした。

私の斧には、今まで何人の人間の血が付いたのだろうか。

初めて殺したのは誰だったろうか。

力を手に入れたと喜び勇んで殺した、私の純潔を奪ったあの薄汚いくそじじい？偶然会ったからついでに殺した、私を売春宿に売った両親？力を試すために殺した、処女じゃなくなった私を商品の点検だと言って毎日犯し続けた売春宿の経営者？一番あっさり死んでつまらなかつた記憶のある、犯される私をいつも笑って見ていた経営者の娘？他にも候補はいるけれど、今はそんなことどうでもいい。あの時の私は力を持って余っていて、使いたくてしょうがなかった。一度でも恨んだ人間は誰彼構わず殺していたはずだったから、どちらにしろ皆、殺している。

なら、最後に殺した人間は誰だろうか。

問うまでもなく、今まさに、私の前で倒れゆく如月竜緒だ。ついさっき、殺した。誰にも覗けない私の斧の記憶に、また一つ新たな血が刻まれた。

竜緒は、白と赤を基調とした制服を真っ赤に染めて、私の足元に倒れている。腹部からは内臓が血かもわからない鮮やかな紅が止めどなく流れ出てくる。身体を一度震わせて、血の塊を吐いた。

「あ、……あ、あ……、あ」

血で気道が塞がっているのかもしれない。竜緒はヒューヒューと細い呼吸を繰り返していた。

「あう、あ。ち、から……、あたし、の、お……」

「竜緒」

私は彼女の名前を呼ぶ。血塗れの竜緒を見て、なぜか再び既視感に囚われた。

「は、あ……、ちから、あ」

「あなたが求めていた力は、こんなものじゃないでしょう……？」

「う、ああ……」

竜緒の腕が痙攣し始める。もう長くはない。同時に、彼女はもう何も聞こえないかもしれないと悟る。それでも私は、竜緒に問いかける。

「あなたは他人からの力なんて望んでいなかったはずよ。あなたはあくまで自分で自分の力を育てることで強くなれると、そう信じていたでしょう？」

「……あ……、あ」

「私が言っても嫌味にしか聞こえないでしょうけど、でもあえて言うっておくわ。あなたは強いって。強い私が、保証する」

「……」

竜緒の口から漏れる声とも呼気ともつかない音が途切れる。でもまだ胸は上下している。まだ死んではない。私は竜緒にもう一度声をかける。

「……」

かけようとして、声が出なかった。

竜緒が、笑っていた。痛みなのか筋肉が動かないだけなのか、それはぎこちなかったけれど、それでもそれは紛れもない笑顔だった。

「、な、お……さ、……」

途切れ途切れだけど、呼ばれているのはわかった。その口は確かに、私の名前を紡いでいた。

「じ……、んど、は……し、じて……」

「……………」

「お、じい……、ちや、」

「……竜緒」

竜緒の呼吸が、完全に止まった。眼も口も腕も、もう動かなかった。

でも、竜緒の言いたいことはわかった。私の予想通りなら自分の身体を巡る魔力を感じ取って、確信する。

「やっぱり……。神様は私のことがよっぽど嫌いみたいね」

存在の核にある純性魔力　源血を顕現させる。これは、源破顕現。疵術師の持ちこたえる最終手段。禁じられていたけれど、もうどうでもいい。どうせ誰も追っては来れない。

「一体何がトリガーなのかはわからなかったけれど、これでなんと

か片鱗ぐらいいは見えてきたわ」

顕現は完全に終了する。私の源血は“戻ること”という特性を持っている。これを顕現させることによって、私は人の蘇生すら可能になる。

かといって、その能力を竜緒に使うわけではない。何度も試して失敗しているのに、そんなことを繰り返すバカはいない。

「さて、と」

斧を掲げる。刃についていた竜緒のまだ固まっていない血が柄まです流れ落ちてきた。激励でもしてくれているのだろうか。

「ふふ、ありがとう」

一応感謝はしておく。ついさっきまで敵だったけれど、彼女はただ、そういう役割を演じていただけなのだから、彼女自身に責はない。あるとすれば、神かなにかに、だろう。

未練はない。そもそも未練を残さないために行うようなもの。少なくとも、私の主観では。

「じゃあね、みんな。……………さよなら」

別れの言葉を口にするのはこれで何回目だろうか。どの“みんな”なのか、誰に対する“さよなら”なのかわからないまま、私は私のためだけのわがままを繰り返すために、とりあえずは“ここ”への別れを告げる。

斧の刃を地面に突き立てる。それを中心にして魔方陣が周囲に広がり、私から流れ出る魔力は奔流となって地面を抉る。やがて物理

現象に異常を来すほどの濃度になり、重力は意味を成さなくなつて瓦礫も死体も宙に浮き上がり、渦を巻く魔力に飲み込まれた。

渦の中心にいる私は、その魔力の筒の道が空へ到達するのを感じ取り、瞳を開けて唱えた。

「
」
回帰せよ
」

第2章 プロローグ 邂逅の記憶、解放する想い（前書き）

第2章開始。

第2章 プロローグ 邂逅の記憶、解放する想い

『んっ……う』

「……………」

学校から帰ってきた俺は、自分の部屋の前で立ち尽くしていた。扉越しに聞こえる声は小さく震えていて、悩ましげだった。

ここまで自分の部屋の扉を開けるのを躊躇ったのは初めてだ。開けて確かめたいのは山々だが、予想した光景がそのまま広がっているのを見るのが怖くて中々ノブに手が伸びなかった。

ここが俺の部屋じゃなかったら何の迷いもなく回れ右しているところだ。だが、ここが俺の部屋である以上、それは叶わない。

部屋に誰がいて、何をしているかはある程度予想がついている。だからこそ、躊躇ってしまう。

さて、どうしよう。

できれば止めたい。なぜ人の部屋でそんなことをしているのかと小一時間問いただしたい。というか部屋から追い出したい。しかし、俺にはそんな力はない。言ってみようかな奴ではないし、力づくで聞かせられるような相手でもない。馬鹿正直に止めに行っても、俺まで巻き込まれるのがオチだ。それだけは、なんとしても避けなければならぬ。

ならどうする。やけに機嫌の悪そうな亜美さんのいる居間に向かうか？自殺行為も甚だしいな。そんな提案をする奴は俺に恨みのある奴に違いない。そんな提案は即刻却下させてもらおう。

なら、どうすればいい。どこかに出かけてしまおうか。いや、当てがない。唯利亜はどうだ。まだ帰ってきていない。そもそもいた

として、あいつに頼ってどうする気だ。あいつのことだ、どうせ俺のことなど見捨てる。愛燕だと？現状を悪化させる未来しか見えな
い。

(俺に一体どうしろと……!?)

思考も行き詰って、蹲りそうにもなった俺の耳に、

『んっ、あああああああつ……! んう……』

押し殺そうとしてしきれない声が、入ってきた。

結局、俺は部屋に入ってしまった。絶頂に達してまだ間もない九能のいる部屋に。

「あー……、おかえり、奈都海……」

俺のベッドに仰向けに横たわったまま、九能は言った。頬は紅潮
していて、息は荒い。ブラウスのボタンはすべて外れていて、下着
は膝の辺りに引っかかっている。スカートもほとんど捲れていて…
…、まあ、なんというか、とりあえず見えそうだった。ちなみに、
上のほうは完全に見えている。

『人の部屋でなにしてた、お前は』

鞆を机に置いてから九能にこの行動の理由を問いただす。九能は

「んー」と唸りながら寝返りをうつて身体を俺のほうへと向けてきた。

「オナニー」

『……、そんなもんは見りゃわかる』

もう少し柔らかい表現はなかったのか、とは言わなかった。言うても無駄だ。

『なんで俺の部屋でそんなことをやっていたのかと訊いている』

「んー……だって、奈都海の臭い嗅ぎながらできるし……オカズ必要じゃない？」

布団の臭いでも嗅ぎながらやってたのか。そう訊くと、してほしくなかった肯定が返ってくる。こいつ、もしかしなくても変態である。それ以外の表現になにか相応しいものがあるだろうか？

まあ、そんなことは今さらだし、と俺は諦念の溜息を吐いた。どうでもよくなつてイスに座ろうと机に向かおうとした時、

「ん」

と、九能が両手を突き出してきた。それだけで俺は察した。九能が何をしてほしくて、何がしたいのかを。俺が九能の望み通りにしたらどうなるかも、ある程度は読めてしまった。それは俺にとって最悪の結果だ。

だがしかし。九能が俺の拒否の意を飲んでくれるはずもなく。

「んー！」

眉が少々吊り上がってきた。このままだと怒らせることになる。もう怒っているかもしれない。

九能の怒りと俺の疲労。この二つを天秤にかけた結果、それは前者のほうが傾いた。

もうどうにでもなれ、と俺は九能に右手を伸ばす。

案の定、九能は俺の右腕の手首を掴んで引つ張ってくる。俺は成す術もなくベッドに引き込まれ、気付けば仰向けになった俺の上には九能が乗っかっていた。いつかと同じ構図である。

しかし、あの時のように問答する余裕はなかった。

『お前な、さつき　む！？』

俺の口は九能の唇で塞がれた。

キスくらいは別に不思議なことではない。だが、今日のそれは今までにないくらいに乱暴だった。

相手の事情をまったく考慮せず自分の欲望に任せて貪るようなキスだった。

舌が口内で小動物のように蠢き、九能は俺の上唇を何度も食む。

口が離れる度に荒く息が漏れ、唾液が口元から零れて俺の頬を伝う。たっぷり30秒、長すぎるキスは続いた。

「……………っはぁ」

九能は口を離して、同時に上体を起こす。二人同時に息を吐いて、大きく吸った。

「ふふ……………」

艶めかしく笑う九能の頬は紅潮していて、それを見る俺の欲望を

助長する。

抵抗と言える抵抗をしない俺の制服を、九能は妖しい手つきで徐々に脱がしていく。露わになった俺の胸を九能は指で撫でる。指が肌の上を這う度にぞくぞくと痺れるような感覚が身体中を走り、快感が脳を支配しようと脳神経を駆け巡った。

『はあ……さつき一人でやってただろ。まだやるのか』

「あら。ここ、こんなにして……。満更でもないんじゃない？」

「……っ」

こつこつという時ばかりは男のほうが不利だ。すぐに、わかってしまう。九能は俺の“それ”をストラックスの上から撫でていた。そりゃ、撫でてりゃ大きくもなる。

だが九能はそれだけでは飽き足らず、俺の下半身で蠢かせる手はそのままに、顔を近づかせて、

「は、む」

「……いつ、あ……！」

俺の耳を甘噛みした。

俺の弱点を知っているがための行為。俺はこれで、抵抗する気力すら吹っ飛んだ。押しつけられる胸の感触以上に、耳から伝わる快感のほうが遥かに勝っていた。全身の筋肉から力が抜けて、ベッドに身体を沈めた。

「ふふ……。さくて、どんな風にしようかな……」

俺の腰の上に跨ったまま、九能は妖艶に笑った。

静鈴町近郊^{しずずちちやう}。

10月も半ばを過ぎた時期。駅前繁华街で、二人の男女が歩いてた。一方は足取りも軽そうに、もう一方は面倒そうにポケットに手をつっ込んだまま、人々の行き交う歩道を並んで歩いていた。

静鈴町は町でありながら市並みの規模を持つ。繁华街には多くの飲食店、服飾店、家電量販店等、様々な店舗が並んでいる。代わりに、スーパーや百貨店の類は見られない。もっと住宅街に近づけば見ることできるが。

平日でもやはり多くの人と車の見られる中、二人は対照的な雰囲気纏いつつ歩いていた。

「あー……だりい」

「気持ちわかるけどそーいのは表に出さないでよ。こっちまで鬱^{ふさ}るから」

本心を吐露した男に、女は不機嫌な表情で抗議する。

疵術師である男 浅木久宮と女 浄美未来小は、現在、いわゆる見回りを行っているところだった。

「そもそもDMFBが出ても支部のほうでわかるだろ。なんでわざわざ直接出ないとなんねーんだ」

「愚痴言いたいのもわかるけどっ、わかりきったこと訊かないでくれるかな？」

「へいへい」

言葉に棘の出始めた未来小に、久宮はおざなりに了解を示した。

確かにDMFBの出現自体は支部の監視システムである程度索敵は可能である。だが、細かい出現場所はそれだけではわからず、それを迎撃する戦力をすぐに現場へ向かわせる必要もある。そのため、緊急時以外は戦力を管轄地域内に分散させておくのが常となる。

久宮もそれは承知している。が、だからといって今の面倒くささが軽減されるはずもなかった。

「准将は楽だよな、ほんと……学校に行ってられて」

「しょうがないじゃん、任務なんだし。っていうか今日、学校休みだよ？」

「だから羨ましいんだよ。別件の任務やってるってだけで俺らのやつてるような任務も免除されるしな」

尚も愚痴る久宮を見て未来小は抗議するのも諦めて歩みを速めた。抗議する代わりに、少しだけからかってみようと思いつく。振り返って、少し上目遣いを意識しつつ久宮の目を見つめた。

「ね、じゃあさ、久宮は私とこうやって歩くの、嫌いな？」

突然の質問に、久宮は疑念を抱く。

「あ？なんだよ、いきなり」

「嫌いななの？」

久宮の疑問をすっぱり無視して未来小は質問を繰り返す。

久宮はそっぽを向いて答えた。

「嫌いじゃねえよ……、別に」

「ふうん……？」

「っ、お前はどうなんだよ？」

否定できなかった自分が舌打ちするついでに、逆に訊き返す。それが照れ隠しだということには気付いていなかった。あくまでからかわれたことへの仕返しだったのだ。

対照的に未来小は悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

「好きだよ？久宮と一緒にいるの」

「……あ？」

呆けた久宮を置いて、未来小は再び歩き出す。久宮もそれを追うが、その足に力は入っていないかった。

今まで未来小とその類の会話をしてこなかったこともあって、久宮は軽くではあるものの動揺していた。そもそも生まれた時から疵術師として生きてきた久宮は、その人生の大半を戦いとそれに備えた訓練に費やしていた。色恋沙汰など経験する暇も余裕もなく、相手もいなかった。

「なにしてんのー！早く来なよー！」

少し離れて手を振る未来小を見る。今は人並み以上に活発な彼女だが、出会った当初は今の姿からは想像もできないほど塞ぎこんでいた。他人から何かをされて、それに反応することではしか行動ができなかった。

それに惚れてしまったのが、久宮だった。

「ほら、行こ。早く終わらせたいんでしょ」

とにかく感情を“放つこと”しかできなかった久宮にとって、未来小は消極性という自分にはないものを持っている人間だった。自分ないものを持つ者に惹かれるのが人間の性さがというものだが、久宮と未来小はその点において非常に極端だった。

眠ることも知らず誰彼構わず自分の感情をぶつけまくる久宮と、自分の行動、感情を外面に表す術も知らず他人がいなければ起き上がることをできない未来小。

二人は自分にはないものに惹かれ、今はそれを持つ人間そのものに惹かれていた。

お互いにわかっていた。

相手がそうでないなら、と恐れる必要もなく、確信していた。

自分も相手と同じだから。相手も自分と同じだから。

繁華街を抜け、住宅街に入りかけたところで、未来小はまた足を止めて久宮と向き合った。

「ねえ」

「……んだよ」

「好きだよって言うてもいい？」

久宮は動揺しない自分を不思議に思った。むしろ、その遠まわしなのか直球なのか判断に困る告白に笑いさえ込み上げてくる。

「なんで、今さら」

問うと、未来小は近くにあつた扉に背を預け、「んー……」と唸りながら考えた。久宮も立ち止まって、未来小の答えを待つ。

「一回死んだから、かな」

「死んだって……。結局こうして生き返ってるじゃねえか」

あの戦いの最中、未来小と交わした会話を思い出し、久宮は心中で赤面する。未来小は憶えていないのだと自分に言い聞かせて、なんとか静めた。

「でも、さ。お姉ちゃんがいなかったら私たち死んでるわけだし。……お姉ちゃんがいなかったり、顕現できなかったら他の作戦を取ってたかもしれないけど、……でも」

言いたいことは、久宮にもわかった。

「もしかしたら死ぬかもしれないなかったんだよ。そもそも私たちの仕事っていつ死んでもおかしくないでしょ？だから……、こういうことと曖昧にしたままだと後悔するかも、って思っ、さ」

「……曖昧なままのほうがいいことってあるかしんねーぜ？」

「そうかしんない。でも、それは今じゃない。私の気持ちは、そ

なんじゃない」

少し考えるような間があって、未来小は首を振った。

「うつん。曖昧なままにしても、私が満足できない。たとえどんな結果になっても、今のままだと結局は後悔するから。だからこれは、私の自己満足、かな？」

今まで見たことのないような表情だった。

決意に満ちている。少なくとも、この2年間で久宮が見たことのない類の表情だ。

「こんなこと言えるようになったのも、久宮のおかげだよ？久宮が、近くにいてくれたから」

それを言うなら、俺も同じだ。

そう言いたかったが、開けた口は知らない内に違う言葉を紡いでいた。

「……俺は、あの時、苦しかった」

突然の、そして漠然とした久宮の言葉に、未来小は怪訝そうに首を傾げる。

「お前が死ぬ時、だよ。……生き返るとわかっていても、許せなかった。……苦しかったんだよ」

「うつん」

だから後悔しないようにこれから未来小は告白することを決めた

のだ。死んだ、という事実に変わりはないのだから。
だが、未来小はただ久宮の言葉に頷くだけだった。
久宮は続ける。

「だから、その……、お前にも苦しんでほしくない」

どちらか片方が死んでも、二人ともが苦しむ。未来小は久宮の言いたいことを正しく酌んだ。酌んで、それ故に何も言わなかった。久宮にはそんな未来小の心中を察するような余裕はなかったが、それ故に言いたいことを言いきることができた。

「なんつーか、あれだ。だから、死んだらどうか言うな。俺たちは死なない、今はそれでいいだろ」

言うてから、今度は明確に照れ隠しだと自覚した上で顔を背けた。そんな久宮を未来小は愛しく思いつつ、再び先導して歩き始める。出会って2年近く。その間、抱き続け育て続けてきた想い。それが無駄に終わりそうにはないとわかって、未来小の心は少々躍っていた。

疵術師とて、一人の人間。思えば、彼らの周りには恋をする者は多く、それを成就させた者もいる。抱く想いを隠し、だというのに近くに居続けるといふある種歪んだ関係が続けていたのは彼らだけだった。

二人はほとんど同時に、同じことを思っていた。

「じゃあ、これからも一緒だね」

「ああ。お前の顔見ても飽きそうにはないしな」

冗談めかして言う久宮に、「なあにそれ」と未来小も怒る振りを

する。その後、二人はお互いに笑いあつてから、また並んで歩きだした。

二人は無意識の内に信じていた。この世界が、二人のいる世界がずっと続くものだ。二人のいる世界が当然だと、意識の深層でそう認識してしまっていた。

それが、若いからなのか経験が少ないからなのかそれともこの二人だからなのかは彼ら自身にもわからない。ただ、根拠のない世界を彼らは望み、それは今や信じるという危うい段階まで発展してしまっていた。

彼らは気付くべきだった。しかし、気付けなかった。死んでも、九能という蘇生を実現する存在が近くにいるがために。あるいは、仲間の死というものを実体験として体験したことがないがために。あるいは、ファントムに打ち勝ったという自信の故か。それでも彼らの信じる世界は、ひどく脆かった。

根拠のない世界は、それを信じる誰かが一人でも欠けてしまっただけで簡単に瓦解する。

二人の任務用の携帯が、同時に着信音を鳴らした。

10月7日。10月最初の日曜日。

雨の多い秋空が久しぶりに顔をのぞかせたその日、九能はある家を訪ねていた。

外観は、一言で言えば西洋建築。しかし、現代の価値観で見るとどこことなく違和感が残る。明治期に欧米を模倣して建てられたものだと言われると、すんなり納得できそうな雰囲気である。

つまるところ、和を捨てきれない洋。悪い意味での和洋折衷だった。

どうせなら和か洋かどっちかにしてほしい、などと、九能は、そんな取りとめもないことを考えながら、案内役と自己紹介された燕尾服を身に纏う男の後ろについて歩いていた。

九能の思考とは裏腹に、歩いている庭自体は完全に洋風だった。日本のように自然に任せ、人間の手は最低限にしか入れない、そんな庭ではない。

徹底的に美を追求し、その基準にそって木を、草花を調整する。その中には、大小の噴水もいくつも見られた。

九能は美術に対する審美眼に乏しいため、どちらがいいとか好きとかは言いにくいのが、少なくともこの庭は好きではなかった。和洋以前に、この家の庭が。

人工的なものが嫌いだというわけではない。むしろ好きだ。人間によって洗練された形と一定でない不安定さ。どちらも、完璧を求めながらも必ずしもそれを実現できない人間を表しているようで、実に微笑ましい。人工物とはそういうものだ、と、九能の視点からはそう見えていた。

前を歩く男が立ち止まる。どうやら玄関に到着したらしい。男は無言で会釈して、九能に入るよう促す。扉も自分で開けるといふことなのだろう。

と、九能が思った矢先。

扉がひとりでい　いや、二人の従者によって内側から開けられ

た。

九能は、玄関前から見えるその家の中の光景に、辟易とした重い息を吐く。

二度目の八嘉翹家やかばねへの訪問は、非常に憂鬱やふふだった。

八嘉翹家は、中国地方を統括する霞翹家の八つ目の分家である。

第二次大戦後、霞翹家が日本の魔術師を取りまとめるようになる前から分家は存在しており、八嘉翹家は明治後期の当時の当主の姪夫婦が中国地方に移り住んだのがそのまま分家となったものである。分家としては、九戈羽根家くかほね、四迦羽家しかほねに次いで新しい（現在の四迦羽家は一度絶えたものの戦後になって復興されたもの）。

他の分家と比べて規模は小さく、統括するのも中国地方5県のみ。公然と上下の差をつけているわけではないが、実質、分家の中では最も発言力が弱い。

また、遺伝的な影響から、攻撃的な魔術を使うと喉応術性神経を痛める危険があり、その分、防御や治療などの魔術に特化しているが、戦闘能力の低さに変わりはなく、純粹に魔術だけで戦うと、やはり分家の中では最弱となる。意味のない比較ではあるが。

とりあえず、そんな、有り体に言ってしまうえば弱い魔術師を、九能は訪れていた。

螺旋階段をいくらか昇ったところで、案内役は立ち止った。

あるのは、壁だけである。傍から見れば階段の途中で止まっているという構図以外に見えない。だが、九能はここに何かがあるかは知っていた。

以前はもつと高いところにあつたはずなのに、などと思い出しつ、九能は螺旋に従つて円筒状に天に伸びる壁に小さく魔力を流す。すると、

ガキンッ

と、何かの噛み合うような金属音が耳に響いた。

数瞬あつて壁に亀裂が入る。それは次々と伸び、枝を生やすように増えていく。それが2 mほどの高さの長方形を形作つた時、壁は崩れるように消えていった。

消えた壁の先にあつたのは、一つの大きな部屋。空間は広く、ある家具といえばベッド、執務机、幅の広いクローゼット、来客用のソファとテーブルだけ。壁も塗装もカーテンもすべてが洋風だったが、そこにいる一人の男だけが、部屋の中にあつて異質だった。

男が着ているのは、作務衣だった。中世の欧州を思わせる洋風の家具と内装を背景にして見るとミスマツチなことこの上ない。

そんな、背景に全力で反逆する男の名を、九能は知っていた。

「やかばね 八嘉翹、いちか 一寡」

「……来ましたか」

男 八嘉翹家の当主・八嘉羽一寡は、座っていた執務机の前のイスから立ち上がり、九能に歩み寄つた。

「改めて、八嘉羽一寡です。どうぞお入りください」

九能は促されるまま、部屋へと入る。九能の身体が完全に部屋に入った瞬間、背後に音もなく壁が出現した。つまり、元に戻つた。九能はそれに驚くこともなく戸惑うこともなく、後ろを振り返るこ

ともしなかった。気付かなかったわけではない。そうなると思っていたのだ。

「どうぞこちらへおかけください。大したもてなしもできませんが……」

「いいわ。わざわざそこまでしてもらわなくても」

座ることを拒絶した九能は、腕を組んだまま一寡と対峙した。といっても、お互いに敵意はない。

一寡は不意に微笑んだ。

「お茶を入れましょう。最近、自分で入れるのが趣味になってましてね」

「それは従者の仕事でしょう？」

「その通りなんですけどね。たまに仕事を取るなど怒られてしまうのが、この趣味の欠点です」

何か思い出したのか、一寡はお茶を入れながら笑う。

会話の間にお茶は二人分のカップに注がれており、それは来客用のテーブルに置かれた。一寡だけがソファに座って、自分の入れたお茶に口をつける。満足そうに頷いただけで感想は言わず、代わりに言ったのは九能への質問だった。

「さて。あまり冗長なのは好きではないと見える。本題は？」

「……」

九能は性急を避け、質問には答えずにお茶をすする。こうして見ると、九能には余裕がなく、一寡が有利だと見える。が、実のところ、そうではない。全くの真逆だった。

「というか、そうやって無言の圧力をかけられるのは私が好きではないのですよ。せめて感情のある魔力であれば少しはマシなのですが」

感情のある魔力とは、つまり喋る際の呼気に含まれる魔力のことを言う。無感情な魔力は、汚染されていないという意味では肉体に有用だが、精神的にはあまりよろしいものではない。特に、格の高い魔術師の排出する魔力ならば、尚更。

九能は、緊張を解いた。

「そうね……………、久しぶりね、一寡」

「ふう。久しぶりと言われましても、あまり記憶がないのですよ」

九能と一寡は、懐かしさに声音を弾ませる。

「あの時のあなたはまだ4歳だったかしら？ほんと、成長したわね」

「それを言うならあなたこそ。ちょうど、会っていない期間が大きくな成長期だったのですかね。私の記憶にあるあなたより大人っぽく見えます」

「そう？ありがと」

幼少の記憶と今の感覚が一致するはずがないのだが、お世辞だとわかっている九能は、あえてわかりやすいお世辞を選んだ一寡に微

笑んだ。しかし一寡は、否定する。

「世辞ではありませんよ？」

「はいはい、わかってるわよ」

一寡にとつてはほとんど初対面に近いというのに、ここまで馴染めるのは一寡の生来の気質ゆえか。以前会った時も人懐っこい子だったな、などと九能は思い出していた。

談笑して、やがて、お互いに言葉が尽きた。共通の話題など、ほとんどないに等しい。

空気は、すぐに固くなった。それに気付いてか、一寡は相も変わらず軽口をたたく。

「こつこつという真面目な雰囲気は、あまり得意ではないんですけどね…

…」

「私は真面目な話をしに来たの。わかるでしょ？」

一寡を見下ろしながら、問う。

一寡の答えは、反応に困った時に浮かべるような笑みを伴っていた。

「ええ。かの処刑人が日本にいた可能性がある、と。それがファントムとなっていた、と。こちらにも情報は入ってきていますよ」

「魔術団が言いたいことも？」

「察しはつきますね」

「なら、話は早いわね」

九能は一寡の正面に回る。真正面から視線を交叉させ、九能は言った。

「ギー・オーギュストに関してはこちらで処理する。霞翹、その分家の方々には手間は取らせない。と、そういうことよ」

一方的な提案　それどころか、命令にも近い。

九能はこれが受け入れられないことを覚悟していた。そうなるのが当然だと予想していたのだ。
だが。

「ええ。彼の日本への侵入にはあまり大きな抗議もないでしょうね。ギー・オーギュストそのものに関してはそちらにお任せすることになると思いますよ？」

その予想はあっさりと裏切られた。

文字通り予想外の展開に、九能は呆気にとられて「あー……、なんで？」と言うしかなかった。

「彼を殺した存在のほうが、今は危険だと認識したからでしょう。……ご老人の中には彼の侵入も許すまじ、という声もありますね。今は、過ぎたことに目を向けていられるほど余裕はない、という方のほうが多いですね」

なるほど、と九能は納得した。確かに今は、“危険だったかもしれない”が今は存在しない人間より、それを殺しただろう“今この時危険”な人間に対する対応を考えるほうが妥当ではある。多少の

抗議はあるだろうが、魔術団が懸念するほど両者の関係に大きな決裂を残すものにはならないだろう。

霞翹家が並みの柔軟性を持っていることに九能は安堵した。

「それで、検討はついでなの？」

「ええ。言えませんがね」

「でしょうね……」

日本に来て2年足らずの九能には、検討がつかない。これがアメリカで起こったことならば、候補を10ほど挙げることもできるのだが。

とはいえ、日本は禁断子に指定されてしまった者たちの最後の逃げ場所。ギーが入れたのは例外であって、今後はFASCIAの末端にすら霞翹家の厳しい目が向けられることになるだろう。禁断子にとってはより一層、入ることさえできれば安息の地という認識が強まる。

しかし、抗議自体は弱いものになるといふ。九能は確認の意味も込めて、再び一寡に訊ねた。

「彼を殺した存在も重要でしょうけど、本当に魔術団には何も望まないの？あなたたちの存在意義が揺らぐことになるかもしれないのに……」

確認のつもりが、それは意図せぬ核心をついてしまっていた。

「そんなもの、今更でしょう。賽の目とその取り巻きまで関東地方への侵入を容認しているというのに」

「っ!？」

茶をすすりながら平然と聞き流せない驚愕の事実を口走った一寡に、九能は思わず詰め寄った。

その様子に、一寡も焦りを表情に浮かべる。

「あれ……、これは言っではいけないことでしたか……?」

「ええそうねそれは一体どういうことなの教えなさい」

「なんでもないので忘れてください。私は何も言っけません」

立ち上がって九能の視線から逃れるようにソファを離れる。が、すぐに九能に回り込まれた。

「どういうことなの?」

「……っ、怖いですね」

一寡はわざと冗談っぽく言うが、阿修羅の如き形相の九能は本気そのものだった。

賽の目が日本に入っているという事実は、看過できるものではない。それは、霞翹家にとっては当然だが、魔術団にとっても同様だ。霞翹家との関係を崩壊させるものになり得るのだから。

しかし、疑問なのは、それが容認されているという一寡の言葉。それが本当なら、霞翹家の存在意義は一体どういうことになるのか揺らぐどころではない。それこそ、霞翹家の魔術団に対する鎖国体制の意義が消滅することになるのだ。

それは霞翹家が最も恐れる事態の一つのはず。だというのに、なぜ。

「わかりました。あなたに言うだけなら影響は少ないという判断なので、口外はしないでくださいね」

「内容によるわね。とにかく知ってること、洗いざらい喋りなさい」

一寡の懇願を九能は一蹴する。観念したように苦笑して、一寡は喋り始めた。

「関東地方には、少々面倒な地域がありましたね。というか、そこに住む一人の魔術師が、と言うべきですか。それを追って、ある組織が日本に来る可能性があったのですよ。その対処を、賽の目の一人に任せることになったわけです」

「どの地域に、なんて魔術師がいて、どんな組織がそれを追っていたの？」

「私にもわからないのでそういう表現を使わせていただいたんですけどね。本家は我々分家にも隠しことが多いのですよ。これが真実かどうか、さっぱりです」

九能は考える。一寡の話が本当だとするなら、その魔術師は非常に面倒な境遇を抱えており、それを追う組織も霞翹家が手に負えないと判断するほど厄介、あるいは脅威となり得るということになる。しかし、だからといって魔術団を頼るだろうか？しかも、魔術団のトップである賽の目を。6人の賽の目のほとんどが、隠居の身とはいえ、魔術団の人間に変わりはないのだ。それをわざわざ頼る理由がわからない。

その理由こそが、霞翹家が分家に詳細を隠す理由にそのままなっているのかもしれない。九能はそう結論づけたが、それで納得でき

るかと言えばそうはならない。件の魔術師と組織の情報をどうやって入手したかという疑問も残る。言ってしまうえば、疑問しかない。信憑性が低すぎる。正直に言って、信じるには値しない。

「……調べる予定は？」

「本家のことをですか？二渦羽根の方ならまだしも、我々では無理です。バレれば最悪、取り潰しですよ？もちろん、直接訊くなんて以ての外ですし」

「情報さえ手に入ればどうとでも」

「ここにいる者を全員殺す気ですか」

弱みさえ握れば力押しでもできるかと九能は考えたが、どうやらそこまで甘くはないらしい。語調を強めた一寡に、九能は肩を竦めて自らの意見の却下を示した。

「本当に知りたいなら、二渦羽根家のほうへ向かったらどうですか？彼らならもしかしたら知っているかもしれないし」

「そうね……そうするわ」

九能は一寡の提案を一応は受ける態度をとっておいた。実際、行って確かめたい気持ちはあった。理由は虚偽だとしても賽の目が一人日本にいるという話は事実だろう。その賽の目に、九能は心当たりがあったのだ。といっても、憶測でしかないが。

と、九能は不意に思い出す。

「って、だいぶ脱線したわね、話が」

「そうですね。……………」

「なによ?」

「いえ、なんでも」

日本に侵入したという処刑人の話から、賽の目の話へとシフトしてしまっていた。完全に無関係とは言えないが、ここで論じるべき話ではない。…………無視もしがたいが。

とりあえず、日本にいるという賽の目の一人が自分の知人である可能性もある以上、今の段階では、魔術団への報告という選択肢は九能にはなかった。自分だけで調べて、自分だけで完結させるのが最善。この場で一寡と話すなら、マリアン又に話すことになるだろう件のほうが優先度は高かった。

「この件 処刑人の件に関しては、枢密院でも会議したらしいわ。…………その結果はまだ私には伝えられてないけど」

その会議から既に2週間は過ぎているが、マリアン又からの話もまだ、ない。心配はしないが、早く教えると焦りはする。普通なら魔術団の一組織の将官ごときに最高機関の会議の内容が漏れること自体ありえないのだが、その常識は九能には適用されなかった。

その常識を知らない一寡は、九能の発言の異常性には気付かない。

「また議論が脱線でもしたのかしらね……………」

「まるで枢密院に一時期いたことのあるような発言ですね?」

「うちの元帥サマがよく愚痴をこぼすのよ。議論が全然まとまらない

いってね。……だとしても音沙汰もないのは変だけど」

再び雑談じみてきたことに二人は気付かず、会話は続く。

魔術団と霞翹家が繋がる貴重な時間にするには無駄話とも言えるこの後繰り広げられる会話は、しかし、九能にとって、無駄ではなかった。

その理由はまだ、九能自身も知らない。

帰り道。歩きたい気分だった。

話があらかた終わり、八嘉翹の家を出てみれば、外は既に夕暮れ。遙か向こうの山に隠れる寸前の夕日は、空も、建物も、車も、人も、歩道を歩く私も、等しく赤く染めていた。

私は、魔術師の中でも特殊な存在である疵術師。その中でも異常と言える力を持つバケモノ。腕力は身体強化術を使った魔術師よりもはるかに強い。負った傷はすぐに塞がる。時間の流れは世界よりも遅い。あまつさえ、死人の蘇生まで可能。ここまで世界にとって“普通ではない”存在が、世界に“普通にある”ものと平等に陽光を受けられる。そんな世界の不条理と有難さに、ふと笑みがこぼれる。傍から見れば、苦笑にしか見えなかったかもしれない。

私の住む地域から八嘉翹の家までは、電車で1時間、さらに徒歩で30分ほどかかった。その行程をすべて徒歩に費やすと、一体どれだけかかるかと考える。考えて、計算がメンドくさくてやめた。メンドくさくなるほどかかるのに、私は遠回りをしていた。

目的は、ある。ある病院に寄っついていこうかと思っていた。正確には、その病院に入院している女の子のお見舞いに行くつもりだった。ふと、思い出す。

あの時も、こんな風景だった。季節が違うから、もう少し早い時間だったけれど、記憶の中では確かに景色は夕日に染まっていた。そして、彼女のお見舞いに向かう途中だった。……いや、お見舞いを終えた後だったかもしれない。そうだ、お見舞いには行った後だった。お見舞いから帰る途中に、私は

左に首を廻らす。そこは、この辺りでは大きめの公園。遊具の密集した部分と、開けた芝生のエリアに別れた公園だった。

小さな子どもが、親に手を引かれて帰途につこうとしている。そこに、その背景に、彼に手を差し伸べる私の姿が重なる。

そう。

私はここで、彼と出会った。

第2章 #1 邂逅の記憶

数秒の黙祷を終え、俺は目を開ける。俺の目の前には2人、少女がまだ数秒前の俺と同じように目を閉じ、祈りを捧げていた。……片方は少女ではないが、今は置いておく。

俺たちがいるのは、自宅より電車で一時間ほどかかる教会。
俺たちの姉は、そこに眠っていた。

3年前の今日、姉は事故で死んだ。病を患ってはいたが、死因は病ではなく事故だった。そして、日本では珍しいかもしれないが、姉の埋葬方法はキリスト教方式だった。つまり、土葬だった。墓石には、姉の名である『幣原奈唯他』という名が刻まれている。

だから、祈りも、手は合わせない。死んで3年目だが、三回忌という概念もない。かといって、この日、何もしないわけにはいかなかった。ちょうど春休みに入ったところだったし、電車で一時間かかったところで特に苦にはならない。こうやって墓参りに来るのも姉の命日か誕生日くらい。さすがに年一回しか来ないのは寂しいものだろう。命日と誕生日には、毎年、俺を含めたこの3人でここに来ていた。

そう。ここにいるのは、俺たち3人だけだ。俺こと幣原奈都海、弟である幣原唯利亜、その友人である神田愛燕。これだけだ。

両親は健在だ。しかし、葬儀の時以来、あの二人は姉の墓の前には立ったことがないはずだった。

母は、俺たちが墓参りに行く日になると、自室に閉じこもる。締切が差し迫っているとか、そんなもつともらしい理由をつけて。

父に至っては基本的に日本にいない。どんな仕事をしているのかもわからない。連絡は定期的にくるが、母と同じように例の日が近づくと、決まって仕事を理由にして墓参りを辞退する。

祖父母も、他の親戚もおそらくいない。いたとしても、どこにい

るかわからない。姉は病のせいで学校に行くことはおろか、外出すらままならなかったから、俺の知る限り友人もいなかった。

つまり、母である亜美つぐみさんに、ここに来る気がないのなら、今のこの3人だけがここに来ることになるのは必然だった。

だからといって、あの姉が寂しがることはないだろうが。

しばらくして、前に立つ2人は目を開けた。

色素の薄めな茶色がかった髪を後頭部で結んでいるのは、弟である唯利亜。見た目は少女そのものだが、真正正銘の男だ。唯利亜は「……ふう」と小さく息を吐いて、俺の方へと振り返った。顔は、墓地という場所にあつて、淡く微笑みを湛えていた。

「今日も無事、お墓参りできたね」

「うん。……邪魔が入るのも珍しいと思うけど」

唯利亜の言葉に尤もな突っ込みを入れたのは、唯利亜の親友である神田愛燕かんだえの。唯利亜に羨ましいと言われることのある純黒の髪を長く伸ばし、日本人形のように整った、一見して幼い顔立ち。背も150cmにも届かないから、私服だとよく小学生にすら間違われることもある。俺とは30cm近くも身長差があるから、愛燕が俺に話しかける時は、必然的に見上げる形になる。

「ナツ先輩。まだ何かあるんですか？」

そう言って、愛燕はちら、と姉の墓を見る。愛燕は姉とは唯利亜を介しての単なる友人に過ぎなかった。だが、可愛がつてもらったから、と毎年俺たちについてきてくれている。早く帰ろうという意志表示ではない。まだここにいるつもりなら自分も付き合おうと言ってくれているのだ。唯利亜も同じく俺を見上げている。その表情

は、どこか不安げだった。

一瞬考えて、帰ることにした。

『いや、何も無い。行こう』

言つて いや、口だけを動かしてから、俺は姉の墓に背を向けて足を踏み出した。

俺は、喋ることができない。何の因果か、姉の死んだまさにその日に、俺は唐突に、何の前兆もなく、言葉を失った。医者にも行つたが、原因はわからずじまい。今も俺は、筆談か、あるいは

「行こうつてさ。愛燕」

「ん」

こうして、唇の動きだけで相手の言わんとしていることのわかる技術、読唇術を持つ唯利亚に通訳してもらつことが多い。

背後から二人のついてくる足音が聞こえてくる。歩きながら、帰る前に教会の神父にあいさつしていこうと思ひ至る。姉の葬儀の時も世話になったから、こうして墓参りの度に、よくいくつか話をしてから帰るのが、いつからか通例になっていた。

教会の裏へ回り込み、関係者用の通用口の前に立つ。2人がついてきていることを確認してから、扉をノックした。「どうぞ」と、硬く厳格そうな声が扉越しにくぐもって聞こえる。ノブに手を伸ばし、扉を開けた。

部屋で立っていたローブを着た男性が、こちらを見てわずかに目を見開いた。

「ああ、君たちか。そういえば今日はそんな日だったか」

厳格な声の中に、親しみがこもる。座れ、と言われ、唯利亜と愛燕は適当に手近にあったイスに座る。俺は立ったまま、壁に寄りかかる。いつものことなので、リックさんも自分の提案を無視されたことを気にしたりはしない。

「お久しぶりです、リックさん」

愛燕が言う。俺たちはこの人をリックと呼んでいる。そう呼べと言われたからだが、本名は知らない。彫の深い顔は、確かに日本人離れているから、本名の一部であることはあるかもしれない。

愛燕に続いて俺と唯利亜がいさつし、リックさんもそれに応じる。

「ああ。君たちは奈都海以外、初めて見る服装だな？」

「あ、はい。ボクと愛燕、今年から高校生になるので」

答えたのは、唯利亜。同級生である唯利亜と愛燕は、4月から俺たちの通う鳳霊学園の高等部に進学する。それに伴って制服も変わったから、墓参りに着てくるものも変えたのだ。

「なるほど、もうそんな年齢か……早いものだ」

感慨深げに頷くりックさんだったが、次の瞬間に唯利亜の愛燕の制服を見比べて、首を傾げた。

「しかし、君たちは違う学校に行くのか？ てっきり同じ高校に行くものだとばかり思っていたが」

その疑問はもつともだ。唯利亜はセーラータイプの制服だが、愛燕の制服はブレザー。しかし、これは同じ学校の制服である。唯利亜と愛燕は一瞬だけ顔を見合わせた。真相を教えるのは唯利亜の役目になった。

「うちの学校、制服が何種類かあるんです。その中から好きなものを選ぶって方式で。だからボクと愛燕も違うんです」

「ほう……。それは珍しい。しかしそれでも、君たちは同じものを選んでもおかしくないくらいなのだがね。……いや、これは俺の主観だ、忘れてくれ」

頷いて、かつての俺のようなことを言う。俺も、この二人が違う制服を選んだ時は、わずかではあるが驚いたものだ。同じものを選ぶように言い合わせることもしなかったのも驚く要因だった。

俺が一月も経たない過去を思い出していると、愛燕が「制服といえは……」と呟いた。

「高等部の制服着て外出するの、初めてかも」

「そういえばそうだね。初めて制服着るのがお墓参りっていうのも変な話だけど」

二人、唯利亜の冗談に笑い合う。リックさんを見ると、彼もほんの薄くだが笑っていた。

「君たちのお姉さんも、真っ先に妹の制服姿を見て嬉しいだろう。変というわけでもない」

「そう、ですね。……姉さん、喜んでくれたかな」

唯利亜は制服の襟をつまんで咳く。

姉は16で死んだ。その前に制服は買っておいただが、結局それを着ることもなく死んでしまった。……死んだのは3月だから誕生日は迎えていないし、当時は15歳だったか。とにかくあの人は中学の制服も着たことはなかったから、唯利亜や愛燕の姿を見れば喜ぶか嫉妬するかのどちらかだろう。嫉妬と言っても、軽い冗談の混じったものだろうが。

「ナツ先輩、どうですか？」

『……………』

愛燕が、家でも散々訊いてきたことを再び唐突に訊いてくる。腐るほど褒めてやったはずだが、あれでは満足できなかったのだろうか？

『似合ってるぞ？』

「……………似合ってるってさ」

唯利亜が伝えると、愛燕は「そうですか」とさほど嬉しそうでもない表情で言う。が、こいつは俺に似て表情があまり動く方ではないから、胸中はどうなのか分かりにくい。どう反応すべきかと考えていると、俺に先じてリックさんが口を開いた。

「愛燕くん。本当に嬉しい時は、それを行動に表すものだよ」

「えっ？」

リックさんが真意の読めないことを言い始める。名前を呼ばれた愛燕もそうだが、唯利亚も首を傾げている。だが俺は、疑問以上に危惧を感じていた。まるで、地雷原を目の前にしてそれに歩み寄る人を目にした時のように。

リックさんは、俺たちの表す疑問と俺だけの危惧には気付かない。

「前から思っていたのだが……、愛燕くんはどうも自分の感情を自己完結させようというきらいがある。遠慮はいらないのだ、嬉しいのなら思う存分、表情や行動に表してもいい。でなければ伝わりにくいことも多いのだからね」

「……あ……っ」

……

これは……、なんだ。予想通り、見事に地雷を踏んだな、という感想しか出てこない。唯利亚も理解したらしく、極限まで焦りを含んだ表情で愛燕を見る。もう解決済みだし、そこまで焦るのは大袈裟だと思いが、心配しているのは俺も同じだ。

リックさんとは私生活を話すほど親しくもないから知らないのも無理はない。愛燕にそこまで深刻な地雷があるとまでも予想はできないだろう。だから、リックさんに非はない。

愛燕を見る。愛燕は俯いていた。その表情は前髪に隠れて窺えない。唯利亚はそんな愛燕に焦り、さっきからおろしている。愛燕が絡むと行動に冷静さがなくなるのが唯利亚だが、ここまで来ると過剰だと言えない。俺の現状での懸念対象がもう一つ増えってしまった。

しかし、喜ばしいことに、その懸念も長くは続かなかった。

唐突に、

「……あ」

愛燕が俺に抱きついてきた。不意に俺は、よくふざけて俺に抱きついてきていた昔の愛燕を思い出す。

「……嬉しかったです。似合っつて言ってくれて」

背中に回り切っていない腕に力を入れながら、愛燕は言う。こうして口にするのならわざわざ抱きつかなくても……、と思わんでもなかったが、言わなかった。別に、悪い気分でもない。

俺は意識もせず、愛燕の頭に手を置く。制服の胸の辺りが湿っていることに気付いたが、これも特に指摘するようなことはしなかった。

俺たちは教会を出て、帰路についていた。

あの後、愛燕の行動で何かを察したのか、リックさんはするべきかもわからない謝罪で不用意に場をかき乱すこともなく、大人の対応で場をまとめた。あの状況でリックさんがいてよかったと心から思う。俺だけでは流れに任せるしかなかったし、そうならどうなるかわからない。雰囲気を先導できる人間は重要だ。帰り際に感謝の言葉を言っておいたが、果たして伝わっただろうか。

さて、墓参りが終わると、いつもならこのまま帰るか、どこかで昼食をとってからやはり一緒に帰るか、あるいは愛燕が俺たちの家

に来るかのどれかなのだが、今日は何も決まっていな。どれにしても帰ることはない。

俺の前を並んで二人は歩いている。たまに二、三言、言葉を交わしているが、長くは続かない。墓参りの後にテンションの高い会話をしろと言われても無理な話だが、今回に関しては、静かなのはそれだけではないような気がした。

耐えられなくなったわけではないが、なんとなく声をかけてみることにした。

……が、こちらを見てくれないことには話しかけることすらできないため、結局、唯利亜の肩を叩くといういつも通りの手段でこちらに気付けさせる。

「……なに？」

『ん、ああ……。どこかでなにか食べないか、と思ってな』

「んー？……愛燕、なにか食べたいものある？」

唯利亜は俺の言葉をそのまま愛燕に伝える。愛燕は立ち止まって、

「んー……」と考え、

「……なんでもいいです。ナツ先輩が奢ってくれるなら」

俺が奢るのかよ。

「兄さん、奢ってくれるの？」

唯利亜までそんなことを言う始末である。二人の見つめる中、どうにも断れる雰囲気ではなかった。

『……わかった、奢る。ただし、あんまり高いところはダメだぞ？』

「やたつ。奢ってくれるってさ、愛燕」

結局、奢ることになった。まあ、行くとしてもファミレスだろうし、この二人は小食だから金のかかるようなことにはならないだろう。今月の小遣いもまだ余裕はある。

なにより、喜んでくれるなら多少高くてもいいかという気分になる。普段、二人に奢るといことがないから、尚更。

「ありがとうございます、ナツ先輩」

「じゃ、行こっか！　って、どこ行こっか？」

決まっていななら俺の手を引っ張るな。そう言ったが、唯利亜はそれを見ても笑うだけで愛燕に伝えることもしなかった。愛燕は愛燕で、俺の着ているブレザーの袖を掴んで先へ歩こうとする。

途端に元気になった現金な二人に内心で苦笑しつつ、俺はおとなしく二人に引っ張られていった。

奈都海らが墓参りをした教会にほど近い県立病院。周辺地域では唯一、大病院と言ってもいい程度の規模を持つ病院であるため、この地域で入院するとなれば、まずはここが選択肢に上がる。奈都海と唯利亜の姉である奈唯他の生前の主治医も、この病院に勤務して

いた。

その一室に、一人の少女が入院している。純白の壁に上下左右を囲まれた空間で、同じく真っ白の布団の敷かれたベッドの上で上体だけを起こしている彼女は、本とノートを広げてその上にペンを走らせていた。時にペンの尻を額に当てて「うーん」と唸り、時に何かを書いたと思えばすぐに消しゴムで消し、また、時には広げていた本の他のページをばらばらとめくって目当ての情報が見当たらずにさらに悩んで

「おー。病人だつてのに精が出るねえ、竜緒りゅうおさんや」

「……」

声に、心底厭そうな目を向けた。

陽気な声とともに入ってきたのも、少女。竜緒と呼ばれたベッドの上の少女は、入ってきた少女を半眼で睨んだ。

「なにしに来たの？未来小あすか」

「なにつてことないでしょ。お見舞いだよ、お見舞い」

辛辣な言葉にもこともなさに返して、未来小と呼ばれた少女は右手に持っていた花を生ける花瓶を探している。そんな未来小を横目に、再び本に目を落とした竜緒は、しかし、未来小の逆の右手に提げられた小さな白い箱に注目した。

「あ、それ……！」

「んあ？」

手頃な花瓶を見つけて用意していた未来小は、疑問の声を上げて振り向いた。と同時に、竜緒が何を見ているのかに気付いて苦笑する。

「ん、なに？」

しかし未来小は気付かない振りをする。それに対して竜緒は、ベッドに縫い付けられているかの如くベッドの上で必死に腕を伸ばした。その拍子にペンが床に落ちるが、竜緒はそれに気付かない。

「ちょ、それ、『シユバルツシルク』のやつでしょ！？だよね！？」

「んー？さーで、どーだろーねー？欲しーのー？」

未来小のその仕草はいかにもわざとらしかったが、好物を前にして竜緒は冷静さを失っていた。愚直に、その好物を欲して手を伸ばしていた。だが、未来小はそれから遠ざけるように手を竜緒とは逆の方向へ伸ばす。それを見て竜緒は狼狽した。

「や、ちょっと、意地悪しないでよ！ちょうだいってば！」

それでもなお、未来小は手に持った箱を竜緒に渡すつもりなどないようにくるくるとその場で回るだけだった。完全に面白がっている未来小に、竜緒は変わらず手を伸ばして「ちょうだいちょうだい」と繰り返していた。

が、しばらくして竜緒が唐突に静かになった。動くこともやめ、何もしゃべらなくなった。

「……？」

未来小が訝しげに竜緒を見守る。

やがて。

「格なる上は……！」

言うが同時、竜緒のその手に淡い光が収束する。今度は、慌てるのは未来小のほうだった。

「わーっ！わかった！わかったから！！あげるからそれだけはやめて……！」

そう叫んで箱を竜緒の眼前に置く。その瞬間、竜緒の手に集まっていた光は霧散し、代わりにその顔がぱあっと光り輝くかのごとく華やいだ。

「ありがとうーっ！やつぱ未来小、大好き！」

「えー……」

そして、近づいた未来小の首に抱きついた。態度を見事に180度変えた竜緒に、未来小は呆れたような納得できないような、そんな声を漏らす。そのまま表情の変わらない未来小を解放した竜緒は、箱を開けて中身を取り出した。

中身は、シュークリーム。竜緒はそれを両手で掴んで子どものようにかぶりついた。笑顔で咀嚼し、飲み込む。そして幸せそうな表情で「はぁぁ……」と息を吐いた。

「やっぱおいしいねえ……。未来小も食べる？」

「いいよ、私は。竜緒が全部食べていいから」

未来小が遠慮すると、それを期待していたのか「ほんと!？」と喜色を隠そうともせずには笑った。それを見て苦笑しつつ、未来小は床に落ちていたペンを拾ってテーブルに置いた。

「あひがふお」

「はいはい。口から零れたのがノートに落ちないようにね」

「ふぁーい」

言った傍からノートの上にはぼろぼろと落としている。まるで小さな子どものような竜緒にもう一度苦笑して、未来小は部屋の隅にあったイスをベッドに寄せてから座った。

未来小は、横から竜緒の食事風景を眺める。この顔を見て、彼女が病人だとは一体誰が思うだろうか。満面の笑みを浮かべて大きく口を開けて自分の好物にかぶりつくその顔は、それこそ本当に病気など吹き飛ばしてしまいたいそうなのだ。

竜緒　フルネームは如月竜緒。彼女は、本当ならこんなところでシユークリームを頬張っていていい存在ではない。今頃、彼女自身の様々な業績を称えられていてもおかしくはないのである。同時に、彼女はあらゆる方面から命を狙われる存在でもある。この場所を看破されれば、間違いなく命の危険に晒される。本来ならば、厳重な警備の下で守られているなければならないのである。

たとえ、彼女の患っているのが、不治で、かついずれ死に至るだろう病であったとしても、だ。

まだその病は、目に見える形で影響は現れていないが、今も確実

に竜緒の身体を蝕んでいる。今の医学では進行を遅らせることができず、彼女や未来小のいる世界の技術でも、それを治すことはできない。

そんな中でこんな笑顔を浮かべることのできる竜緒の性格を羨ましく思いながら、未来小は彼女がシュークリームを食べ終わるまでその光景を眺めていた。

3つを見事に完食した竜緒は手をティッシュで拭きながら、感謝の言葉を言った。

「ごちそうさま。ありがとね、未来小」

「3つもよく食べたね……っと」

気付いて、未来小は竜緒の顔に手を伸ばす。反射的に片目を瞑る竜緒に構わず、口元についていたクリームを指で拭いて、

「……」

少し考えてから、そのまま自分で舐めた。

「え、ちょ、それ舐める、普通!?!」

途端に顔を真っ赤にして抗議する。そんな竜緒に、未来小は意地の悪い笑みを浮かべる。竜緒からシュークリームを遠ざけている時と同じ顔だった。

「あれえ？女の子同士なんだからいいじゃんさ。なんでそんなに慌てるのかな？」

「だっ、だって……!そういうのって……」

「それとも竜緒つてもしかしてあれかな？女の子にそういうこと考えちゃう人なのかなー？」

「　　っ、~~~~ツ！」

未来小がさらに追い打ちをかけると竜緒は耳まで真っ赤にして俯いてしまった。少々やり過ぎてしまったかな、と考えて、未来小は謝ろうと竜緒の肩に手を置こうとして

ポタ……と

竜緒の膝にかけていた掛け布団に、水滴が落ちてしみを作った。

「……え？」

軽めな感じで謝ればいかと高をくくっていた未来小は、中途半端な笑顔のまま固まってしまった。そんな未来小の耳に、やがて竜緒の嗚咽が聞こえてきた。

「ひぐっ……っ……」

「ちょ……え？」

同時に涙が量を増す。竜緒の目からは涙がこぼれて頬と布団を濡らしていた。

「え、うえええええ？」

未来小はうろたえる。また同じパターンじゃないか、と反省する余裕すらなかった。からかっただけなのに。もしかして凶星だったのだろうか。いやいや、しかしそんなはずは。潔癖症っぽいところ

もあつたからそのせい？でも泣くほどでもないような、云々かんぬん、かくかくしかじか。考えても答えは出ない。声を押し殺して泣く竜緒に、未来小はいよいよどうすればいいかわからなくなった。

「あ、えつと……、あ、そんな泣かなくても……」

「……だ、って、未来小が……っ」

宥めようとしても効果はない。

「う、あう……どづ……」

本格的にどうしようもなくなって未来小はおろおろと何も無い病室を見回す。

そこへ、

「ごめん、竜緒。遅れちゃった」

声が聞こえて、同時に病室の扉の開く音がした。未来小にとってはまさに救世主にも等しい存在が現れたと思った。

そう、思い込んでしまった。

「お姉ちゃ　！」

「……」

振り返って、見たその顔は、無表情だった。その視線は、俯いて涙を流す竜緒に注がれている。

救世主ではなく、泣きっ面に追撃を喰らわせる蜂だった。……泣

いているのは竜緒だが。

「あ、あの……これは…… 痛っ！」

言い訳しようとした未来小の額に何か硬いものが高速でぶつかった。

床に転がったのは、蜂ではなく一本のペンだった。

「それじゃ、私はこれで帰るわ。また来るからね」

未来小に原因のわからない制裁を加え、見事に竜緒を宥めたその人物は、一時間ほどもして帰る支度を始めた。

「うん、ありがとう。おかげで元気になった！」

竜緒の混じりけのない笑顔に同じ笑顔を返した彼女は、踵を返して病室を出る。その前に、扉の前で立ち止まって、「未来小」と、呼んだ。突然呼ばれた本人はびくりと肩を震わせる。

「な、なに？」

「そんな怖がらなくていいじゃない……。未来小はまだ帰らない？ 私、今日は支部に泊まるつもりなんだけど」

呆れた風な言葉に続いた質問に、未来小は若干の安堵も交えて答えた。

「私はもうちょっとここにいてから帰るね。あ、あと、明日も仕事あるから私も支部に泊まるかも」

「そう。じゃ、私は先に帰ってるわね」

言って、扉を開けて病室を出る。その間に、

「　　竜緒。未来小に苛められたら言っただけ？ちゃんとお仕置きしておくから」

未来小を震え上がらせ、竜緒を笑わせる言葉を置き土産にして帰っていった。

幣原奈都海は嘆いた。必ず、かの邪知暴虐の弟とその親友を除かねばならぬと決意した。

どこかで見たとような文章だが、つまるところ奈都海の心境はそんなものだった。理不尽な暴力に激怒できるほど、奈都海の気概は強くない。

今回、その理不尽な暴力に当たるのが、彼の弟である唯利亜とその親友、愛燕の所業であった。細かい説明は省こう。単に、この二人が奈都海の予想に反して高いものを選んだ。ただそれだけだった。故に、嘆きはしたが、別に後々まで引きずるようなことでもなく、わざわざ二人を除こうとするほど嫌悪したわけでもない。

奈都海は予想外の出費とこの事態を想定できなかった自分の愚かさ溜息をついた。

今、奈都海は一人だ。二人は、この辺りに友人宅があるらしく、訪れる機会も少ないだろうから、という理由でそちらに向かつてしまった。

それから、かれこれ3時間。いつ帰ってくるかもわからないから、終わったらここに来るようになっておいた公園から離れることもできない。特に帰るなとも言われていないため、律儀に待つことなどなく、帰っておく旨をメールで伝えて一人で帰ればいいのか、なぜかこの時の奈都海にはその発想が出てこなかった。実際、制服姿で公園のベンチに一人で長時間座っているという光景はある種奇妙だった。奈都海自身も自覚はしていたが、彼は他人からの評価をあまり気にしない。怪訝な目で見られても、軽く流せてしまっていた。

彼がいるのは、公園の中でも芝生の敷き詰められたエリアだった。遊具のあるエリアでは幼稚園児から小学生までが遊びに来るため、その中で一人でベンチに座っているのは少々危険だと判断したからだ。他人の目云々以前に通報などされればたまったものではない。今の日本ではあり得る話であるだけに、その危惧はなかなか本気の色が濃かった。

芝生エリアでも子どもは多いが、夕方だからだろうか、どちらかといえば犬を連れていたりカップルだったりのほうが多い。犬は別にどうでもいいがカップルという存在に、奈都海は妬ましさを覚える。

奈都海はクラスメイトには「クールでそういうことに興味なさそう」などという評価をされるが、そんなことは決してない。それは奈都海があまり表情を動かすことがなく、かつ喋ることができないために生まれた誤解である。興味というなら、きっちりある。大い

に、ある。

とはいえ、妬ましさがあるだけで、奈都海に何か理想があるわけではなかった。相手に關しても、環境についても、将来にもこれといった理想などなかった。

彼はある意味楽観的だった。しかるべき時が来ればわかるだろう。その時に、自分の理想の相手も、環境も、将来も、わかるだろう。と。自分の理想を、時に託してしまっていた。

彼が“その時”を望んでいたのか、それとも来るなど願っていたのかはわからないが

“その時”は、思いの外、早く来た。

まず感じたのは、息苦しさだった。まるでいきなり空気の薄い山頂に場所を移されたかのような、そんな唐突さでもって、奈都海の身体は酸素を欲した。もしくは、酸素ではない何かかもしれないが、そんなことはどちらでもよかった。この息苦しさを“そんなこと”にしてしまう事態が、起こってしまった。

まだ、陽は沈んでいない。だというのに、気付けば周りは暗くなっていた。しかし、奈都海以外の人間はそれに気付いた様子もなく、さっきまでと変わらず遊び続けている。

何が起こったのか、と立ち上がるうとした。その時

空気が、振動した。

よような気がした。今度こそ立ち上がり、周囲を見回す。いきなり

立ち上がった奈都海を周囲は訝しげに見るが、奈都海はそれどころではない。

唐突な息苦しきも、暗くなってしまったことも、奈都海にしかそれらは感知できていない。そのことに気付く余裕すら、奈都海は失っていた。今、この状況以外に、別の何かが奈都海の危機感と焦燥感を煽っていた。

息はできるが、空気を吸っているという実感は少しずつ薄れていく。何かの近づいてくる気配がした。これは何かの前触れだと奈都海の中の何かが言った。何の前触れなのかは言わず、ただ、これは変化の前触れだと、無責任に告げて引っ込んだ。

なんだ

なにかくる

待ち構えたが、本音は何も来てほしくなかった。

だが現実には、無情だった。

ゴオツ

と、周囲を強風が叩き、奈都海の目の前に黒い巨体が現れた。

今度は、唐突に、とは言い難かった。空から降りてくるのが見えただからだ。ただ、空から降りてくる巨体、というものに心当たりがなかった。

なんだこれは、と問うが、声が届かなくては答えるはずもない。

声が届いても、答えるかどうかは激しく疑問だが。

“それ”は、とりあえず今ある日本語で表現するなら、『腐りかけの犬』だった。しかし、当然ながら犬は、人間が見上げるほど大きいはずがないし、背骨に沿って並ぶ目玉などないし、首からぬめった触手が生えているわけではないし、どこから見てもにんまりと笑っているように見えるはずもない。もちろん、腐りかけと言ったよ

うに、ところどころが腐りかけているどころか腐ってしまった。下あごはほとんど骨が見えている。肋骨も何本か露わになっていて、穴の開いたそこからばたばたと赤黒い何かが落ちていた。それがなんなのかは確かめたくなかった。

状況を理解する。この化物は明らかに奈都海に何かをする意図があるようだが、それは明らかに友好的なそれでは決していない。友好的にされたら、それはそれで最悪だったが、どうせありえないので奈都海はその可能性を無視することにした。

奈都海は理解し、まずは焦る。次に、恐怖する。それは世界の真理であるかのように当然の反応だった。

なんだこれは。どうぶつか？ いや、ありえない。なにかのさつえいか？ かめらが無い。ならなんだ。ばけものか？ ようかいか？ そんなものがそんざいするのか？ いままでみたことがないのに？ だとしたらこれはなんだ？ せつめいできるやつがいるのか？ 無知への恐怖。そもそもおれはたすかるのか？ いきてかえられるのか？ このじょうきょうで？ しぬのか？ おれが？ こんどはおれか？ あねきはじこでしんで。おれはばけものにくいころされる？ 死への恐怖。おいおい。じょうだんじゃない。まだ16だぞ？ あねきのめいにちに？ おれも？ しぬ？ よくわからないなにかに？ くわれて？

おれがしぬ？

ふざけるなよ 恐怖への、怒り

そんな

「 そんな、俺が死んで“異な”ってしまつた世界なんて、認め
るか」

「……そう」

俺の、前に

「それがあなたの、本質ね？」

一人の女性が、一振りの日本刀を持って、

「なら私が、“戻”してあげるわ」

左だけ結つた髪が揺れ、スカートが風にたなびいて、

「世界が異なってしまうその前に、“戻すこと”ができるのは、私

ただなもの」

俺のほうへ少し振り返って、小さく笑んですぐに化物を見据えて、
「だから、あなたを殺す世界は、私が殺す。蹂躪して、攪拌して、
元の形を忘れるまで殺し続けてから 生まれるその瞬間まで“戻
”してやるわ……！」

その身体は、化物の懐に消えた。

そう。

俺はこの時、彼女と出会った。

第2章 #1 邂逅の記憶（後書き）

奈都海と九能が出会ってからのお話。

第2章は春休みから新学期初めあたりまでの予定です（あくまで
予定です）

第2章 #2 真実を知る者

目が覚めたのは、自室だった。

「……」

いつもの習慣として時計を見る。時間は8時半近く。外は明るいから午前だろう。そう寝ぼけた頭で考えて、やけに重い身体を布団から脱出させる。

そこで気付いた。

服が、制服のままだ。記憶は判然としないが、家に帰って来てから制服のまま寝てしまったということだろうか。しかし、そんな疲れのようなことをした記憶はない。そもそもいつ、どうやって帰ったのかも憶えていない。

記憶を辿ってみる。まずは姉貴の墓参りからだ。その後、リックさんと話をした。愛燕絡みで色々あったが、なんとか無事に終わって、今度は唯利亜と愛燕の二人と昼食をとった。二人が予想に反して高いものを頼んだせいで俺の財布が一気に軽くなってしまった。食事をとったファミレスで適当に雑談をして、その後、二人はその周辺に住む友人がいるということでもちらに向かった。俺は行くあてもないから近くの公園で時間を潰していた

？

なんだろう？ その時点から、ぶつとりと記憶が途切れてしまっている。その時から俺がいつさつき起きるまで、まるで脳が働いていなかったかのようだ。帰った方法も、いつ寝たのかも、記憶にはない。

俺の記憶には、ない。

なら、知っているだろう他の人間に訊けばいい。そういうことで俺は部屋を出て居間に向かった。この時間なら、あいつがいるはずだ。

居間の扉を開けると、予想通りそいつ　つまり俺の弟である唯利亜は、ソファに座ってテレビの情報番組を見ていた。なんでこいつが選ばれたんだろうというような明らかに常識の欠けていそうなコメンテーターが冗談を言っても、テレビから聞こえてくる笑い声に反して表情をピクリとも動かさない唯利亜は、ある意味異様な光景だった。こいつはなぜかテレビを見ていて笑うことがほとんどない。

俺がどう見ても女の子にしか見えない弟の唯利亜を見ると、さすがに唯利亜本人も気付いてこちらに顔を向けた。その顔に初めて笑みが浮かぶ。

「兄さんおはよ。昨日、早く寝た割にはかなり遅い起床だね？」

いつも通り一言多いあいさつをしてきた唯利亜に俺もいつも通り返そうとして、唯利亜の言葉に引っかかりを覚えた。

『昨日……？俺は昨日、いつ寝たんだ？』

俺がそう訊くと、唯利亜は小首を傾げた。その仕草は見る者が見れば、あるいはみる状況が違えば可愛らしくもあつたかもしれないが、今の俺にとっては不吉の予兆でしかなかった。

「憶えてないの？兄さん、先に帰ってて、ボクが帰ってきた時にはもう寝てたよ？」

『それは何時頃だ？』

「ん、と……、ボクが帰ってきたのは6時くらい、だったかな？全然起きてこないから晩御飯も食べてないんだよ？兄さん」

つまり、少なくとも14時間は寝ていた、と？まさか、そんなはずは。と、否定したいが、俺自身、憶えていないため、できなかった。

「一応、昨日の晩御飯、兄さんの分は置いてあるけど。あ、あと、兄さん、お風呂入ってないからシャワーだけでも浴びといたほうがいいかも」

唯利亜の言葉は聞き流していた。思考領域はとにかく、ない記憶の搜索と困惑の抑制に必死だった。

記憶の欠落というものはここまで不安になるものなのか、と実感する。とはいえ、いつまでも頭を抱えて唸っていられるわけもなく、俺はダイニングも兼ねたキッチンへ向かう。この状況で朝食を食べようという切り替えの速さに我ながら呆れる。

キッチンの鍋の中にはちょうど一人分くらいのシチューがあった。テーブルにバターロールがあるのを確認して、鍋を火にかけてシチューを温める。朝からシチューというのも乙なものだ。

「……」

少し考えて、火を止めた。

やはり、唯利亜に言われたことが気になってしまった。俺は、部屋から着替えを持って、バスルームへ向かった。

風呂場から出ると、そこに亜美つくみさんがいた。

「……なんだ。あんだ、ここにいたんだ」

母親を前にして裸を見られることを恥ずかしがることはないのだが、なんとなく前を隠してしまった。

亜美さんはこっちも見ずに言った。

「そついやポストにあんだ宛の封筒があったからね、後で取りに行きなよ？」

見たのならそのついでに取っておいてくれても、と、当然その時は思ったが、言うのも無駄だと思いなおして言わなかった。どうせ「あんたのもんなんだから自分で取りにいくのが筋だろ」と、わけのわからない曲がりくねった筋を説かれるのがオチだ。なら、言う通り俺が行ったほうがいい。この人は俺の親だ。いい加減、対処方法もわかってきた。

「んじゃあね。今日も集中したいから部屋に籠るよ」

最後に「邪魔はするなよ」とだけ言って、亜美さんは脱衣所を出た。……今日“も”、ね。

着替えている途中にいきなり空腹感に襲われた俺は、亜美さんに言われたことは後回しにしようと思っして、キッチンへ向かった。

シチューは、もうなかった。

いつのまにかなくなっていたシチューの代わりに、食パンを焼いて凌いだ俺は、その一時間半後、なぜかよく知らない会社のビルの前に立っていた。

なぜかというか、ここまで来たのは俺の足でなのだが、言われた通りにここまで来てしまった俺の素直さに呆れた。最近、自己嫌悪してばかりな気がする。

俺をここに呼んだのは、亜美さんに取ってこいと言われた封筒だった。理不尽な命令に従って取りに行ったその中に入っていたのは、このビルの住所とここに来いという内容の書かれた紙切れ一枚だった。

だが、俺もバカではない。それだけでわざわざここまで赴くわけがない。怪しすぎるし。

俺が来たのは、そこに「昨日のことが知りたければ」と書かれていたからだ。それでも十分怪しいことには怪しいのだが、俺は俺の不安を取り除いてくれるだろうその誘いに乗ってしまった。昨日のことと書いている以上、何かしら事情は知っているはずだ。
なにより

「……」

会ったこともないはずの人間の顔が記憶にあるのも、関係あるかもしれないと期待していた。

意を決して、この辺りではあまりにも大きすぎるそのビルに、足を踏み入れた。

アディア

それは世界を股にかける大企業として世界にその名を知られている、巨大な複合企業である。業種としては、航空産業を中心に、船舶の製造や学校の運営など。日本ではむしろ、衣服や家具のブランドとして一部で知られている。しかし、欧米では航空、船舶に関連して、戦闘機や軍艦、それらに搭載する兵器の開発・製造のほうが比重は大きい。それもそのはず、アディアという企業の実態とは、『疵術師』と呼ばれる人間がその能力を活かして戦うために所属する、いわゆる“軍”なのだから。

疵術師とは、『魔術師』の亜種とも言える存在で、魔術の発動を可能とする魔術師特有の器官『喉応術性神経』が通常の魔術師は声帯を中枢としているのに対して、脳を中枢としている特殊な魔術師である。そのため、魔術の発動には詠唱を必要とせず、魔術師よりもスピーディな戦闘が可能である。

逆に、疵術師には指向性の定まっている純性魔力『源血』があり、そのせいで使用できる魔術の幅は極端に狭まってしまっている。得手不得手以前に、使えないのだ。しかし、純性魔力の指向性が定まっているということはその操作も容易であるということでもあり、そのおかげで『源破顕現』と呼ばれる疵術師における奥の手も持っている。源破顕現とは、源血を外界に顕現させることである。そのことによって、それを通じて体内の魔力も体内にある状態のまま外界に出てくる。それを魔術に使用することで、喉応術性神経というフィルターを通して行われていた『魔力の魔術への変換』がフィル

ターなしで直接行えるため、発動できる魔術の威力が数倍に跳ね上がるのだ。源血による本人への影響も大きくなるが、それは個々人でメリットになるかデメリットになるかは異なる。また、純性魔力という『魂』にも等しい人間の要素が外界に触れるため、消耗も激しい。奥の手とは得てして諸刃であることが多いのである。

さて、そんな疵術師が所属するアディア ADEOIA（疵術師公式国際魔術協会 Affected Deference Encompass - Official International Magic Fusion Being）の討伐や研究などを行う組織である。そしてここは、その日本の中国地方支部。

そう呼ばれるらしいビルの最上階の部屋に、俺はいた。

「……」

にこにこ笑顔を向けてくる、正体不明の女を前にして。

まず俺は、このビルに入ってからエントランスの受付に手紙を見せた。来たらそうしろと言われていたからだが、そうした途端、受付をしていた女性の顔色が変わり、その後、なぜかその受付の女性直々にここまで案内されたのである。

そして、部屋にいたのは、今も俺の目の前でソファに座って、明らかに愛想笑いとわかる貼り付けたような笑みを絶やさないう女性だった。……いや、女性、というには少々少女っぽい部分も残っているようなそんな印象と同時に、どこかで見たような、という曖昧な疑問も浮かんできたが、それも女性の捲し立てるような、なんの説明なのかもわからない長々と続いた講釈によって忘れ去られた。

ここに至った経緯を整理すると現状を考える余裕が出てきた。まず、あの長つたらしい説明について考えてみよう。

「あ、無理に考える必要はないのよ？いきなりたくさん説明しちゃうたし、これは聞くだけじゃダメで、実戦で初めて理解できるものだから」

俺の心を読んだかのように言う。ならなぜ説明したのかと言いたかったが、筆談道具を取り出す前に女性は立ち上がって手を差し出してきた。

「紹介が遅れたわね。私の名前は西園寺九能。さつき説明したように、私も疵術師よ。ここで働いているの」

紹介は構わないが、さつきの説明を理解できていない人間にいきなり……なんだっけ？マジユツシ？シジュツシ？そんなリアルで公言するには一瞬躊躇しそうな専門用語を言われても、どう返せばいいのかわからない。九能さんとやはら変わらずにこにこと微笑んでいる。

俺の自己紹介は多分要らない。この部屋に入ってきた時に名前は呼ばれたし、そもそも住所がわかっているなら名前以上のことも知らないはずがない。

……昨日のことも、含めて。会ったことがないはずなのに記憶にある人。それは、目の前の女性に酷似していた。日本人らしい柔らかく、整った顔つきも、左目の下にある泣きぼくろも、左側だけが結ってあるサイドテールの黒髪も、すべてが記憶の人と一致していた。

「さて、訊きたいことはある？」

この人なら知っているだろうと思いい、俺は頷く。すると、西園寺さんは頬杖をつき、今度は自然な、そして残酷さを楽しむような笑

みを浮かべた。

「そう……。なら言っでごらんなさい？あなたの訊きたいことならなんでも答えられると思うわ」

その笑みに底知れない違和を感じ取る。が、俺は、それを無視して、言われた通り俺は遠慮なくメモ帳を取り出し、そこに訊きたいことを書き殴った。

つまり、『昨日のことを教えてくれ』と。それを見た西園寺さんは一瞬、眉を顰めた。

「あなた、喋れないの？」

この反応はある意味想定内だった。だから俺は、慌てることもなく頷く。

ここで、大抵の人間は奇異か同情の目で見てくる。それらを隠した無関心を装った目であることもあるし、あからさまに蔑んでくる人さえいる。

しかし

「ふうん……。まあいいわ。いちいち筆談するのも面倒だし、口パクで喋れる？私、読唇ができるから」

まるで、目の悪い人にメガネをかけるというような、そんなトーンで言う。

これは予想外にすぎた。まるで喋ることのできない人間など珍しくもないと言わんばかりに平静、冷静だった。読唇術を会得しているという話以上に、そのことに驚いていた。

「？なに？口パク、できないの？」

『……い、いや。でき、ます』

「そう、よかった。□そのものが動かないわけじゃないのね。……
つてことは魅戈と同じかしら？」

思わず唯利亜や母親にするように□だけで喋ってしまったが、それがいい証拠となって西園寺さんも納得してくれた。最後に付け加えられた呟きの意味はわからなかったが。

とりあえず俺の喋れないことに関する話題は一段落し、「それにしても」と西園寺さんは切りだした。

「さっきの質問、えらく漠然としてるわね。もうちょっと具体的にできないの？」

そう言われる。

だが、憶えていないから俺はここに来たわけで、何をどう具体的に訊けばいいのかわかるはずがない。俺が戸惑っているのに気付いたのか、西園寺さんは、

「もしかして……憶えてない？」

訝しげな顔でそう言った。

だから呼んだのではなかったのか？記憶のない理由を教えてください
るだろうと思ってここに来たのに、その期待は見当違いだったとい
うことだろうか？

「記憶が……もしかして魔力のせい？……いえ、だって彼はDM
FBを視認できていたし……。疵術師なんだから魔力の影響を受け
るはずが」

ぶつぶつとよくわからないことを言っているが、それは俺の不安を増幅させるだけだ。本当にこの人は事情を知っているのかと不安になった。

しかし、すぐに考える仕草は納得の表情に変わった。

「なるほどね……、ショックで記憶が飛んだってことかしら、ね」

その記憶が飛ぶほどのショックの原因を知っているかのように……いや、知っているとその表情は主張していた。

「そりゃあそうよね。あんな化け物を初めてみたら、ねえ？」

化け物……？俺は一体、何を見たんだ？彼女の言葉に不穏な単語が混じり、俺は平静ではいられない。

問えば、その答えは無表情を伴っていた。

「腐った、犬。首からは触手、背には目玉。骨はところどころが露出していて、体高は……そうね、2.5mつてところかしら？あなたはそんな化け物 D M F Bに襲われていた。それを、私が助けた」

『は……あ？』

「憶えてない？いいえ、思い出せるはずよ。魔術師の遺伝子は記憶を蔑ろにしない。絶対に、必ず、あなたは、自らの存在と力の覚醒のために、その忌々しい記憶を掘り起こし、記憶の部屋に飾って、直視することになる」

……意味がわからない。逆にわかってしまったら終わりだという

直感があつたが、思考は彼女の言葉を理解するためにフル稼働していた。

「そう。考えてしまうでしょう？それこそあなたが本当の自分を理解しようとしていることの顕れよ。あなたの奥底に潜在している本質を、自分自身で探索している」

いつのまにか立ち上がって目前まで彼女のその顔は接近していた。俺は後ずさることも許されず、ただ立ち尽くす。

「もうわかっているでしょう？自分が何者なのか、見当は付いているはずよ」

やめる、と、唇だけが拒絶を紡ぐ。それを読めるはずの西園寺さんは、やめるわけがなかった。

「あなたは、私たちと同じ。魔術師であり 疵術師」

手が、頬に添えられる。慈しむように、その手は頬からあごへ移動する。

まるで睦言を囁くように、それは俺の耳元で唱えられた。

「追憶に狂うは逃れ得ぬ道程。醒めない運命なんて、美しくないでしょう？」
《思い出さない》

それは、魔術。

魔の力に依る異能の術は、奈都海の忌わしい記憶を無理やり引き摺り出した。

「え？来れない？」

幣原唯利亜は、自分の住む住宅街の最寄り駅の前にいた。

その駅の前はどこのものとも知れない女神を象った像を中心に据えた噴水があり、その周辺は簡単ながらも公園のような体を取っていた。

唯利亜はそこで、親友である神田愛燕と待ち合わせていたのだ。

しかし、約束の時間の10分前になって愛燕から電話が来た。その内容が、

『うん。お母さんがまた風邪をこじらせちゃって。看病、しなきゃいけないから』

というものだった。

愛燕の母親が病弱であるということは唯利亜も知っている。それが、最近、特に悪化したらしいということも。だから、父親が看られない時は愛燕が看病することがあった。

『ごめんね、唯利亜。約束してたのに……』

「ううん、いいよ。それより、ボクも行こっか？一人だと大変じゃない？」

『ん、ありがとう。でも唯利亚にうつしちゃうかもしれないし、いいよ。ありがとう』

「そっか……。わかった。じゃ、メグさんにお大事になって。愛燕まで風邪ひいたりしないでね？」

『うん。ほんとにありがとう。……じゃあね、唯利亚』

「うん、じゃあまた」

別れの言葉を交わして電話を切る。愛燕の声は途切れ、唯利亚の耳に入るのは周囲の喧騒だけ。急に虚しさが去来し、すぐにこの場から離れたい衝動に駆られた。

ただ、家に帰っても兄は出かけているし、母親は部屋に籠っている。その事実には歩きながら溜息をついたが、静かな住宅街まで行けばある程度はマシになるだろうと思いなおして、唯利亚は歩く速さを速めた。

「……………」

唯利亚の歩みが止まった。ちょうど白い壁の連なる住宅地に入ったところだった。

唯利亚にとって見慣れた光景。通学路でもあり、最寄り駅への道でもあるため、平日も休日も使う道だ。慣れ過ぎて、いつのまにかこの光景を意識することすらなくなっていた。

改めて意識すると、この光景が突然うそ寒いものに感じられた。

もうどの学校も春休みに入っているはずなのに、子どもの姿すら見えない。閑静な、というよりも閑散としているという表現のほうが正しいこの空間に、閉じ込められた。唯利亜はそんな嫌な想像に囚われて、暖かいはずの春の陽光の下で身震いした。

どこまでも続く純白の壁がおぞましいものに見えて、唯利亜は速足に歩き出した。この空間から逃れるように、その足は徐々に速まって、やがて走るようになった。

しかしどこまで走っても、それは続く。どこまで行っても、視界はすべて、白と時たま見える植木の緑色に支配されている。

びた、

と、さほど走ってもいないのに、唯利亜は唐突に立ち止まった。違和感の正体。いきなり息苦しくなった。が、それは走り疲れて酸素を欲してのことではないと、唯利亜はなぜかわかっていた。

その代わりに何を求めているのかはわからない。が、息苦しいというその事実は唯利亜を苦しめ続ける。

同時に、空気が重くなる。何かの近づく気配がする。それが近づいてくる度に、空気は唯利亜を押しつぶさんが如く重くなる。

まるで、それが物理的な重量を持って唯利亜をその場に縫い付けているかのように、危機感を抱きながらも唯利亜はその場から動けなかった。

ただ、何かの接近を待つだけ。恐怖の到来を、唯利亜は待ち続ける。

ありえない 唯利亜の知る世界には到底存在しえないその“何か”は、唯利亜の知らないところで、しかし着実に唯利亜に近づきつつある。

地面が震えていることに気付いたのは、その時だった。

アスファルトを砕く轟音とともに、それは地下から現れた。

身体は幾つもの節に分かれ、それぞれからおぞましいほどに擦じれた一対の肢が生えている。頭部には三対の複眼があり、横に開く牙とその奥に開閉を繰り返す口があつて粘性の強い唾液を垂らしていた。尾部は、まだ地下にあつて見えない。

端的に言えば、巨大なムカデ。身体を震わせて、周囲にあつた住宅の塀や庭木を薙ぎ倒した。

「……………」

見上げる唯利亜は、放心している。逃げることもできず、六つのガラス玉のような目玉に睨まれ、身体は硬直していた。

「あ……………」

助けを求めて口を開いても、言葉にならずに口腔から息が漏れるだけ。

あり得ない状況に思考が停止する。小さいムカデでさえおぞましいのに、自分より大きいそれは、おぞましいを通り越して恐怖の対象でしかなかった。状況に疑問を抱く余裕もない。

今さらながらに、逃げなければと、生存本能が唯利亜の脳を急かした。しかし、身体は脳からの命令を一切合切無視する。

脳に自分でない何かが入り込んでくる。それが恐怖なのかどうかはわからないが、唯利亜はそれに抵抗することもできず、自我の浸食されていくまどろみのような感覚に身を任せてしまう。

やがてそれは、薄く唯利亜の意識に膜を張った

(唯利亚!!)

呼ばれた。

(唯利亚!聞こえるかい!?)

もう一度。どこか遠いところから、でも、とても近くから。

そう。まるで、自分の中、から……??

(あー、聞こえてる?聞こえてるね?よかった……やっと繋がったね)

それは、いつかどこかで聞いたことのある声だった。とても懐かしい声と口調だった。

(そりやそうさ。あんたの姉貴だよ?あたしは)

……姉?姉さんは、3年前に死んだのに。そんなはずはない。

昨日だって墓参りに行ったばかりなのに。

(一度は死んだよ。でもそれは肉体だけだ。人格はあんたの中に逃れた。人格記録だけがあんたのものとは別に自我経路を構築して、その記録を元にしてあたしの人格ができてる。理解できる?……いや、できなくてもいい。とにかくあたしがここにいてるってことを意識しな)

……??

どこ？姉さんはどこにいるの？

見えない。

触れない。

声がどこから聞こえているのか、わからない。

姉さんは……どこ？

（あたしはここだよ、唯利亜。

五感に頼るな。自分を見る。あ

たしは、あなたの中にいる）

なか………中？

ボクの………中。

（あたしは、あなただ。同一化しろ。あなたは、あなただけじゃない）

ボクと、姉さんが、同じ。一緒。

ボクは、姉さん。姉さんは、ボク。

（そうだ。……あたしとあなたは灰色の中に混じる黒と白のマーブル模様。混じり合って融け合って、その上それぞれの自我を確立させた、歪な存在だ。だからあなたが考えなきゃいけないのは、たったの一つ）

ボクが融ける。ボクがボクでなくなる。

兄さん。母さん。愛燕。南坂先輩。海老原先輩。……。知っている人たちが、すべてボクと混ざっていく。すべてを理解できずまうから、それを呑み込んで、ボクの一部にしてしまおう。

境界が　なくなる。

（あんたがしなきゃいけないのは　）

(自他の境界を、“識ること”だ)

何かが、ボクの中で弾けた。

「わかったよ、姉さん」

唯利亜の意識は、そこで途切れた。

「……っふう」

唯利亜は、小さく息を吐く。

目を開いて、動かし心地を確かめるように手を開閉し、脚をぶらぶらさせる。自分の頬に触れ、結っている髪を撫でて、すぐにリボンを解いた。

頭を振って、髪を大雑把に整える。

「まだ不安定だから人格しか出られないってこと、か。……ま、やっとなられたんだから贅沢はなしだね」

巨大なムカデを前にして独り言を続ける。その落ち着き方は、さっきまでの唯利亜とは大きく変貌していた。

唯利亞は腕を水平に構え、手の平に光を集める。それが一定の光量を超えると、キンツ、という軽い金属音とともに手の中に身長を越す大鎌が現れた。

それを見て、怪物は唯利亞を敵と認識したのか、耳障りな甲高い雄叫びを上げる。

「うん。やる気になってくれてあたしも嬉しいよ?」

唯利亞は、血管の浮き上がった鎌の柄を強く握りこみ、その口を大きく歪めて嗤う。

両手で鎌を構えて、陰惨な笑みとともに、唯利亞は言った。

「今でも結構ヤバいんだ。限界も近いから短期決戦で行くよ。

っは!」

言つて、裂帛とともに双方の距離を一瞬で詰めた唯利亞は、鎌を横一閃に振り抜く。反応できないムカデは身体を切り裂かれ、傷からは緑色の体液が噴出した。

生理的な嫌悪を呼び起こす返り血を浴びながら、唯利亞はさらに身体を反転させてその勢いでもう一度切りかかった。

キィアアアアアア……

常人なら耳を塞ぎたくなるような悲鳴と大量の血液を撒き散らしながら、ムカデの巨体は倒れた。

しかし、まだムカデは生きている。無数の肢はまだ蠢き、身体を起こそうともがいている。

唯利亞は、そのムカデの眼前に立って、見下ろしていた。それに気付いたムカデは暴れ出し、周囲の塀や住宅の壁を砕き、破片を散乱させた。

それを意にも介さず、唯利亜は鎌の刃を下段に構える。

「……」

無言で鎌を振り上げた。

ギイツ!? という金属を硬い物で引っ掻いたような断末魔をもつて、巨大なムカデは絶命した。と、同時に、唯利亜もまた、その場にくずおれた。

鎌とムカデは、幾粒もの光の粒子となって消えた。

数分経って、ADEOIAに所属する一人の疵術師が、現場に到着した。

第2章 #3 二人のサダメ

A D E O I A 中国地方支部、第二医務室。第一特殊遊撃小隊に所属する居川咲は、そのベッドに横たえられた少女の傍らに立っていた。

咲は、つい一時間前に D M F B 出現の報告を受けて出撃していた。場所は多根木町の住宅街。それ以外の情報はなく、それでも咲は持ち前の源血の汎用性を利用して10分とかならず現場に到着していた。

そして、咲を待っていたのは、明らかに戦闘が行われたとは思えない光景と、その場に倒れている一人の少女だった。

周囲の住宅、それを囲む塀や植木は大小の裂傷、さらにアスファルトには巨大な穴があり、地面から現れた D M F B と戦闘を行ったのでは、と咲はあたりをつけた。それは実際、間違っていないかったが、咲に予想できなかったことが一つあった。

それは、その場に倒れていた少女が、D M F B と戦闘を繰り広げた、まさにその人であった、ということである。故に、

「あれ……。その疵術師さん、この支部の方ですか？」

同部隊に所属する大原深夜にそう訊かれた時、咲は普段表すことのない驚愕をもってこの少女を見てしまったのである。深夜はその源血の特性によって魔力を“読むこと”ができる。つまり、他人から排出される魔力も読むことができ、相手が魔術師かそうでないかなどがわかるのだ。深夜が言う以上は、十中八九は事実のほずである。咲はこの時、ようやくこの少女が戦闘を行ったのではないかという発想に思い至ったのである。

しかし同時に、咲は小さな違和感を抱いていた。そしてそれは、
ならなぜ、この魔術師であるはずの少女はDMFBに襲われたのだ
ろうか、という疑問に昇華された。

DMFBは基本的には魔術師を襲わない。もちろん、魔術師と敵
対した場合は己の全力でもって抵抗するが、そうでもなければDM
FBは魔術師と戦おうとはしないのである。実際、疵術師がランク
の低いDMFBの討伐に向かすと、そのDMFBが逃げようとした
という報告は無数に存在する。咲自身、その光景を目にしたことが
あるほどだ。

その理由は、DMFBにとって食料でしかない人間も、己が糧に
できるはずの魔力が多すぎると毒にしかならないからだ。実際は喰
らっても問題はないと言われているが、DMFBにとって魔力の多
い人間、つまり魔術師は食糧などでは決してなく、敵、あるいは天
敵でしかないのである。少なくともDMFBは、魔術師を自ら積極
的に襲おうとすることはない。

加えて、咲がこの少女を発見した地域、あの住宅街の一角には人
払いの結界が張られていた。偶然近くに居合わせたADEOIAの
疵術師にさせたのだ。その疵術師は戦闘ができないため、戦闘要員
である咲の到着まで待っていた。その間にこの少女以外に人間が入
ってきたというのなら、それを守るために戦ったという理由で納得
はできるが、結界を張った疵術師は、同時に人間の感知はできな
かったという。結界が張れるのになぜ侵入者の感知くらいできないの
かと怒鳴りたかったが、それを当たり前のように言える自分のよう
な存在は特殊な存在だと思い出し、咲は、結局この少女を連れ帰っ
て事情を聞くという選択を取ったのだ。魔力に対する耐性が強
いのかとは思ったが、深夜に言われるまでは疵術師であるという発
想はなかった。

とはいえ、結果的には咲の選択は正解だったとも言える。戦力に
なる見込みが少しでもあるのなら、咲の行動を非難することはでき
ない。

たとえそれが、この少女にとって、修羅の道を往く結果になったとしても。

疵術師であるなら、選択肢はない。戦って死ぬか、戦わずに殺されるか。個々の能力によつて役割は変わるために一概には言えないが、一人でDMFBを一体倒せる能力があるなら、この少女はまず間違いなく前線に送りだされることになるだろう。

咲は、内心でこの少女に同情した。生まれた時から疵術師としての運命を背負っていた自分はまだいいが、今まで普通の人間として普通の生活を送ってきた人間に、戦いと死の世界を受け入れられるとは思えない。

しかし、受け入れる他ないのが、この世界の定めた道である。力があるのなら戦わなければならぬ。力のない者の代わりに。受け入れねば、力のない者がその分多く命を落とすことになる。その現実には、いつも疵術師たちの肩に重くのしかかっている。その重圧を背負うために、自分の運命を受け入れる。疵術師は皆、その過程を踏んで戦いに身を投じる。

受け入れ方にも個人差はある。才能として受け入れるのか、欠陥として受け入れるのか、はたまた異常として受け入れるのか。どれにしても咲には共感できないが、避けられない運命であるというだけで幸福では決してあり得ない。他人への興味が薄い咲であっても、自分と同じ境遇になろうという人間がいれば、同情は禁じえなかった。

それにしても、と、陰鬱な気分にしかならない思考を打ち切つて、咲は思う。

とても、整った顔だな……

少女の顔は、非常に綺麗だった。とても自然に生まれてきたものとは思えないほどに。

見た瞬間に、見た者から現実感を奪う儂さ。目を奪う美しさ。心を奪う可愛らしさ。すべてが、普段、自他の比較をしない咲にとっても人並み外れているとわかった。

容姿の整った人間なら、日常的な光景としていくらでも見ている。そもそも、魔術師という種族は整った容姿になるのが基本なのである。魔力の持つ自己治癒能力の促進という効力は、生きていくのに理想的な状態を保つという能力の一端である。それは種の保存に適した、つまり生殖に都合のいい容姿になるということにも繋がっている。魔術師は、特に客観的に見て美しく見える容姿に育つことが多いのだ。個人の主観で美しいと思っただけになることはない。もちろん、遺伝子や育った環境といった要素によって個人差は生じるが。しかし、この少女はその中でも抜きん出ていた。芸術鑑賞など全く経験のない咲にさえ、これが芸術なのかという感想まで抱いてしまった。

……人間に芸術みたいという感想を抱くのは失礼だろうか、と小さな疑問を持ってしまい、なんとなく咲は少女から目を逸らした。

その先に、

「あら、咲。また誰か負傷者？」

同部隊に所属する少佐、伊神未永栖が、医務室の扉を開けて立っていた。彼女は部隊の中でも副隊長の立場にある。報告書はさすがにまだだが、簡単な報告は既に終えている。未永栖がこの状況を理解していないはずはなかった。

「ふうん、本当に可愛い娘ね。まるでお人形みたい」

近づいて少女の顔を覗き込み、未永栖も咲と同じような感想を言う。……いかにもわざとらしい。他人の感情の機微には疎い咲にも、わかってしまった。

「あの……、なんででしょうか？」

しかし、相手は上司。上下関係にあまりうるさくないA D E O I Aだが、ここで敬語を使わないのは、咲の性格が許さなかった。そもそも、上司であることを差し引いても、未永栖は年長者だ。敬語は必須である。

とはいえ、声音に少々呆れが混じっていても、それは仕方のないことだった。未永栖もそれを正しく酌み取って、苦笑いを浮かべながら答えた。

「この娘以外にもね、疵術師が見つかったのよ」

「……昨日、准将が会ったという？」

咲の予想外の確認に、未永栖は嬉しそうに驚く。

「そうよ。でね、ほとんど同じタイミングで見つかったから、何かしら関係があるんじゃないかって話になって　連れてきたの」

未永栖が身体ごと視線を医務室の入り口へ向ける。咲もそれを追って、そこに立つ一人の男を見とめた。

背はそこそこ高いが、それ以外は平凡な、どうも疵術師には見えない、まだ十代後半くらいだろう男。他人への興味の薄い咲は、それ以上の分析はしなかったし、興味もなかった。

しかし、疵術師として今後、共に戦っていくというのなら、興味の有無にかかわらずお互いに知っておかなければならないことも多

い。

咲は男に軽く会釈してから、名乗った。

「ADEOIA日本中国地方支部、特設独立部隊・第一特殊遊撃小隊所属、居川咲です。どうぞよろしく」

上げた視線に入ってきたのは、男の釈然としない表情だった。

奈都海は、混乱の極みにあった。

突如、思い出された記憶。無理やり引っ張り出された、二度と見なくなかった過去。

昨日の出来事。おぞましい形状をした、巨大な犬。それを前にして感じた死の恐怖は本物で、あり得ないモノを前にした現実感の喪失もなく、ただ、生命の脅威を前にした理解不能の怒りが、自分の中に残っていた。

生命の喪失は、確かに怖かった。存在の否定は、ひたすらに腹立たしかった。

しかし、それだけだった。奈都海の意識を混濁させる要因は、もっと他にあった。

あった。あった、のに。

とても大切なことのはずなのに。忘れてはいけなはずなのに。忘れていた。忘れていて、思い出したのに、また、離れた。

だから、どうでもよくなった。

「あら、起きた？」

最初に五感が捉えたのは、女性の声だった。

奈都海は自分のいる部屋を見回し、残っている最後の記憶にある部屋と同一だと認識すると、深く溜息をついた。それは安堵故か、諦めのせいか。奈都海にもわからなかったが、別にどちらでもよかった。

だが、変わらず部屋にいる女性　西園寺九能は、その溜息を別の意味で捉えた。

「悪いわね。ちょっと刺激の強いものを使ってしまったから。まだ痛む？」

刺激の強い、痛む、などと言われて、何か薬でも使われたのかと慄き、奈都海は九能に視線を向けた。九能はそれに苦笑で返し、首を振って否定する。

「私が使ったのは魔術よ。その中でも特に簡単なものだけだ。どう？　思い出したでしょ？」

言われてやっと、奈都海は思い出したことを思い出した。

昨日のことだ。怪物が現れ、襲われそうになった奈都海を助けたのが、九能だった。それをようやく、思い出したのだ。

しかし、魔術などという得体の知れないモノを使われたと言われ、ても、安心できるはずがない。むしろ、魔術によって記憶を捏造されたのでは、と、不安にすらなる。かといって、魔術の存在を信

じているわけでもない。信じるに値する要素がなさすぎるのだ。

相変わらず疑いの目を向け続ける奈都海に、しかし、九能は慣れているとばかりに微笑んでいる。先に耐えかねたのは、奈都海だった。

『確かに思い出しはしましたが……、信じられない。何かしら証拠はないんですか？』

「証拠が見られればいいの？ なら」

わざとらしくも意外そうにそう言った九能は、どこからか小振りのナイフを取り出し、

「えいつ」

何をするのかと訝しむ奈都海の前で、自分の腕に、思いつきりそのナイフを刃の根元まで突き刺した。

奈都海は驚愕、というより狼狽した。証拠を見せるとは言ったが、その手段があまりにも予想外だった。

ナイフを抜いた痕からは血がドクドクと流れ出て、九能の腕を伝って床に落ちていく。しかし、九能は痛がる様子も見せず、自分の腕の傷痕を指で指し示す。奈都海がそれを見ていると

『な………！』

傷口が見る間に塞がっていった。人間には自己治癒能力はあるが、それ以上の、いや、それとは次元を画した再生能力。九能が血を拭き取ると、そこには傷痕も、その痕跡も残っていなかった。文字通り、跡形もなく消えていた。

「これでどうかしら？ 厳密には魔術で治したわけじゃないんだけど……。でも普通じゃない現象だってことはわかったでしょう？」

奈都海は答える言葉を失っていた。しかし、言葉が出ないだけで、思考領域だけは冷静だった。

なんとも不思議な現象。刃がほとんどすべて埋まりながら、それが次の瞬間には塞がっていた。

ありえない。だが、一般的に魔術というものはありえないことを実現させるための手段である。魔術が実在し、九能が魔術を使えるとするなら、ありえないことが当然であるということになる。

それがどれだけ異常かはわかる。だが、奈都海にはなぜかその実感がなかった。九能の再生能力を見たとき驚きはしたが、それはその現象の異常性に驚いたのではなく、何か別の 無理やり例えるなら、見せてもらえるはずのもの以上のものを見せられた時のような、意外感。

奈都海はそんな自分に対して気持ち悪い違和感を抱く。異常なものを異常として感じられない自分そのものを異常だと思えないことも、それを助長した。

「あら、あまり驚いてないわね。ま、魔術師ならそんなものだけど」

つい先刻の会話を思い出して、奈都海は訊ねる。

『やっぱり……俺は、人間じゃないんですか』

「人間よ？ ただ、魔術が使えるっただけで。あなたは、私たちと同じ、疵術師なの」

『しじゅつし？』

「そ、疵術師。魔術師の亜種。魔術師のように多彩な魔術が使えず、魔術に詠唱が必要ない。だから、日本では、“疵けっかんだらけの魔術師”と呼ばれているの」

“傷”ではなく、“疵”。つまり、欠陥。

魔術師にとつて、どれだけの数の魔術を習得しているかは大きなステータスとなる。また、詠唱の短縮とその美しさは魔術師の技術の証明になる。よって、難度の低い初級魔術ならともかく、低級魔術以上の魔術の詠唱を破棄することは基本的には考えられないのである。

その常識が普及しきつた中、疵術師という存在は明らかになった。魔術師の優劣の基準となる詠唱を行うことなく魔術の発動ができ、そもそも詠唱が意味を成さない疵術師は、魔術師にとつて劣等種でしかなかった。発見当初の疵術師は、魔術師に蔑視を伴って見下される立場だった。

「でも、今や疵術師は確固とした存在意義を手に入れた。DMFBの研究、管理、討伐を任されているの。……ま、面倒な化け物狩りを押し付けられたつて捉え方もできるけどね」

DMFBとは、魔力によって形作られた生物のことを言う。魔力が細胞の代わりになっていると言え、最も近いだろう。肉体そのものが魔力でできているがために、魔力による干渉力を持ったもの以外の物理的な攻撃がほぼ通用しない。DMFBは人間を喰らうため、大きな被害を生む前に討伐する必要がある。よって、その役目は魔術師が負うことになっているのだ。

「ADEOIAはそのために疵術師を統率する機関。本部はニューヨーク。各国に数ヶ所の支部があって、さらに小支部がその下にある。ここは、日本中国地方支部。日本には他に3つの支部があ

るわ」

奈都海は九能が淡々と語る説明を、ただ聞いているだけ。理解も納得もできないが、なんとか記憶しておくことだけは脳が最低限の仕事として行っていた。

そして、一通り大まかな説明を終えたのか、九能はそれまでの作業じみた冷めた口調から一転、真剣味を帯びた表情と語調で、

「あなたには、このADEOIAに入ってもらおうことになるわ」

そう、言った。

言われることをどこかで予想していた奈都海は、驚くこともなく、かといって受け入れるわけでもなく、ただそこに立ち尽くした。

拒否権がないことも、わかっていたのかもしれない。

そして、その数十分後。

俺は、伊神末永栖と名乗る女性の後ろを歩いていた。ストーキングしているわけではなく、こうしろと言われたからだ。どこに向かっているかはわからない。

西園寺さんから、色々信じがたい事実を聞かされた。この世界の裏に蔓延る、事実を。

信じたくはない。だが、信じなければならぬ状況なのだとは思いう。俺の知りたかったこととは大きく逸脱しているが、それでも昨日起きたことを説明できる人間は他にいないはずだ。ここで俺が耳

を閉ざすことは、状況が許してくれない。

それに、俺自身も。俺は魔術師であつて、ただの人間ではないらしい。聞いた話がすべて本当なら、俺はこれから、ここに所属して化け物と戦うことになる。

それは、今までの日常を捨てるということだ。

俺は戦いというものを知らない。軍隊のない日本に住んでいるのだから当然だ。銃や規定に反する刃物を持ち歩くこともできないから、武器と呼ばれるものを使ったこともない。

人を殴ったことすら、ほとんどない。記憶にあるだけでも数回だけ。

つまり何が言いたいかということ、実感が持てないということだ。戦いと言われてもイメージが湧かない。なければいけないだろう緊張感なんてものも、当然ない。

だから、今のところは俺が自分の意思で何かを決めるのは、怖かった。なら他人に決められるのはどうなんだと言われると微妙なところだが、少なくとも、知識としてしか知らない俺より実感として知っている他人のほうが信頼できる。言うとは大半から変だと言われるが、俺はあまり自分を信用していなかった。

ともかく、今の俺は、西園寺さんと同じ疵術師だろう伊神未永栖という女性に、ただついていくしかなかった。

時々すれ違う私服姿の人たちは、その度に伊神さんに敬礼を行つていく。すれ違う人の中には、なぜか年老いた、と言えるような人の姿は見えなかった。高くても30代前後。最も多いのは20代。俺の主観だから実年齢はわからないが、少なくとも40以上はいないように見えた。

そもそも、この伊神未永栖という人物こそ、何歳なのかわからない。階級は少佐だと紹介されたが、どう見ても20代前半にしか見えない。もしかしたら10代後半かもしれない。こんなに若くて佐

官になれるのだろうか？……まあ、米軍や自衛隊を基準に考えるのも見当違いかもしれないが。

エレベーターの前で伊神さんは止まった。下からエレベーターが上がってくるのを待っている。

「……………どう？ 落ちついた？」

待っている間、空気が気まぜくなる前に、伊神さんは話しかけてきてくれた。会話もなく待つのはさすがに少々厳しい。逆に、知り合ったばかりの他人ととりあえずでも話すのは、俺にとっては別に苦痛でもなんでもない。

俺は答える代わりに頷いて応えた。

「そう。なら良かった。あなたなら大丈夫そうだし杞憂だったかしら」

そんなことを言ってくれるが、何のことが俺にはわからない。書いて問うと、

「えっと、たまにいるのよ。自分はおかしいんじゃないかって思い込んで、本当におかしくなっちゃう子が。自殺しちゃったり、暴走して手に負えなくなってやむなく殺されちゃったり、ね」

確かに魔術を実際に見せられても、自分がおかしくなったと考えると魔術の存在は否定できる。ただ、そう思い込み過ぎると本当に狂ってしまうということだろうか。一種の自己暗示なのかもしれない。

「まあ、その点で言えば、君は心配なさそうだから安心ね。でも…」

そこまで言って、音もなくその口を開けたエレベーターに乗り込む。俺もそれを追った。ドアが閉まってから、伊神さんは続けた。

「でも、君が戦力になるかどうかは別問題よ。疵術師の運命を受け入れて、その上でどこまで頑張れるか。どこまで覚悟できるか。それで色々変わってくるわ」

何も返事をしていないのに俺がここで戦うことを前提に喋っていることは、とりあえず気にしないことにした。思考に深い諦念が混じっていることを自覚しつつ、それも無視した。

俺が何の反応もしないのを見ると、「少し重かったかな」と伊神さんは苦笑した。重い話題に言葉をなくしたと思ったらしい。勘違いなのだが、別にわざわざ伝えるようなことでもないか、と考える言わなかった。

すると、会話が途切れるのは必然。しかし、それを見計らったかのように、伊神さんは別の話題を振ってきた。

「そうだ。君、きょうだいとか、いる？」

『なぜです？』

意図のわからないいきなりの質問に、答えずに質問で返してしまっただ。

なんのつもりだろうかと少し警戒する俺とは対照的に、楽しそうに笑いながら伊神さんは言った。

「君以外にも新しく疵術師が見つかったの」

……？『それで？』

続ける言葉があるのかと思って訊くのが遅れた。俺以外の新しい疵術師？ だからなんなのだろうか？

「あ、そっか。君はまだ知らないんだっけ？ 魔術師っていうのはね、大抵が遺伝するのよ。突然変異や隔世遺伝なんてものもなく、代々受け継がれていく。だから君が疵術師で、君が拾い子や養子なんかでもないとするなら、きょうだいも疵術師である可能性が高い……いえ、ほぼ100%そうなるのよ」

俺は愕然とする。つまり、唯利亜もそうであるということになる。俺と同じ、疵術師だということに。

しかし、伊神さんは平然としている。肉親が普通の人間ではないということを知らされればショックを受けるといふそのことを、一切発想として持っていないということだ。

この人は、かなり幼いころから、あるいは生まれた時から疵術師であるということがわかっていたのかもしれない。

疵術師という存在を、ごく当たり前のものとして見ている。あるいは、疵術師であるという要素を、個性として捉えている。でなければ、こんな反応はありえない。

俺の周囲が、そうだったように。

俺と親しい友達は、喋ることができなかつたり、目が見えなかつたり、身体的な障害を持つ人間を見ても、これといって特別な反応を示さない。それは、喋れないという障害を持つ俺と、日常的に接しているからだ。

メガネをかけた人間を生まれて初めて見た時、それはおそらく特異なものに映ったに違いない。しかし、そんな人間が身近にいたり、

周囲に多くいることに気付いたりすると、それは特別なものではなくなる。あつて当たり前、存在に疑問を持つたりはしないし、その有無で何かの優劣が決まるわけではない。

それと、同じだ。疵術師だから不幸だとか、そんな発想そのものがない。

……諦めるしかないのだろうか。

「えーっと……、どうかした？」

エレベーターの外から、伊神さんが怪訝な表情で訊いてきていた。俺は我に返って、慌ててエレベーターから降りる。

歩きながら、再び伊神さんが訊いてきた。

「それで、きょうだいはいるの？」

『弟が一人』

「そう。なら違つわね」

その言葉を聞いても、安心できるはずがなかった。

「今度見つかった疵術師、可愛い女の子らしいから」

嫌な予感しかなかった。

かくして、予感は的中した。

連れてこられた部屋　ドアの上に『医務室』と書かれた部屋に入る前に、疵術師だと名乗る一人の少女に自己紹介された。しかし、その少女が明らかに中学生にしか見えないということよりも、彼女の前のベッドに横たわる人間に、俺の目は奪われた。

無造作にかけられた純白の布団から覗く顔は、俺が毎日見ている顔だった。

無意識のうちに駆け寄って、名前を呼んでいた。

『唯利亜……』

「？」

しかし、それを見ていた二人は当然、読唇術などできないから俺と唯利亜の関係性はわからない。

訊いてきたのは、伊神さんだった。

「あの、君、この娘の知り合いなの？」

シヨックはあったが、半ば予想の範疇だっただけに質問に答える余裕があった。メモ帳を取り出し、書いた。

『弟です』

「はっ………？」

二人してそんな反応。これも想定内だ。慣れている。

「この子……どう見ても女の子よね？」

『そうですね』

これは口だけで言った。しかし肯定の意は正しく酌んでくれたようだ。そのせいで困惑は深まったただけだったが。

「君の、弟……？」

頷く。

「この子が？」

『はい』

再び頷く。

「女の子にしか見えないの？」

三度頷く。

打って変わってあまりにも平然としている俺のせいでもあるのかもしれないが、二人は俺と唯利亜を見比べ、俺の主張の真偽を確かめようとしていた。

正直、こういったやり取りは何十、何百と繰り返してきた、もうとうの昔に慣れていた。だから二人の困惑に冷静に対処できるわけだが、唯利亜がここにいること自体に冷静になれているかと言えば、そんなことは決してなかった。

というわけで、ここに、今の状況を冷静に客観できる人間は、一人も存在しない。そんな状況下で、

「ん……」

唯利亜が、目を覚ましてしまった。

覚醒しきっていない意識のまま、寝ぼけ眼を彷徨わせて、周囲を眺める。そして最後に焦点を俺に合わせ、呟いた。

「あ、兄さん……どうしたの？」

訊かれた俺どころか、後ろの二人も、応えることができなかった。黙る俺と、見知らぬ二人の女性に訝しむ顔をして、唯利亜が上体を起こすのを見ても、まだ俺を含めた三人はその口から最低限取り繕う言葉すら、出せなかった。

西園寺九能。

彼女はA D E O I A日本中国地方支部の副支部長と第一特殊遊撃小隊の隊長を兼任する、世界に名を知られる疵術師である。

元々、アメリカ合衆国、カリフォルニアの支部で、ある旅団を率いていた。当時から既に、彼女の高い戦闘能力はA D E O I Aだけでなく魔術団の中にも、名声と悪名入り混じって轟いた。評価する者は彼女の純粹な力（と一部は容姿）を評価し、侮り嘲る者は彼女の禁断子だったという経歴と疵術師であることを侮蔑嘲弄の理由にした。彼女には味方もいたが、敵もそれ以上に多かったのだ。

九能が日本に戻ってきたのは、2027年のことだ。当時、日本では原因不明のD M F B大量発生現象が起きていた。九能は、その援軍として、率いていた旅団の中の斥候大隊とともに呼ばれたのだ。そして、戦いが終わった後、著しい戦力不足に悩む中国地方支部に留まり、戦死した前副支部長に代わって、副支部長となった。そ

の戦いの後、支部長がほぼすべての権限を九能に委譲したことで、中国地方支部の実質的な総指揮官は九能となった。その時点で九能は准将に昇級した（A D E O I Aでは、中佐以上で実力さえあれば旅団を率いることができ、将官で師団を率いることが可能となる）。が、九能は人員不足に悩むこの支部でもう一度旅団レベルの部隊を作ろうとはせず、かつて自分の率いたカリフォルニアの部隊を呼ぶことも、様々な理由からできなかった。

そこで九能は、自らを部隊長とする小規模の特殊部隊の設立を行った。それが、第一特殊遊撃小隊である。

日本全国どこるかアジアに限って海外からも、一癖も二癖もあって上司の手に余っている疵術師を連れてきて、その部隊の一員とした。九能の選んだどの疵術師も、元いた場所では疎まれ、あるいは扱いに困っていた者ばかりだった。

第一特殊遊撃小隊は、そんな、ある意味危険人物とされていた疵術師たちの寄せ集めである。そもそも隊長からして元禁断子だ。当初は期待どころか危険視すらされて、解散すべきという声すらあった。

しかし、今現在は、そんな声とは裏腹に、これといった問題もなく、それなりの戦果を残している。この部隊に対する批判の声も、随分減ってきた。第一特殊遊撃小隊だけに関して言えば、成功と言える結果を残しているのだ。

ここ数年の自分の行動とその結果を思い出して、九能は苦笑と憂いの混じった　つまり疲労を含んだ笑みをこぼした。

それを、ここで唯一の上司に見咎められた。

「准将。業務中に笑うとは何事かね。緊張感に欠けるな」

とはいえ、その声には、半分以上の冗談が混じっていたが。

いたのは、中国地方支部の支部長、八剣兼平中将だった。九能よりも頭二つ分高い目線に、着ているスーツの上からでもわかる筋肉質の体格。そして　右半身を丸ごと覆う肩がけの布。その合わせ目から覗くのは、金属質の光沢。彼は、身体の半分が機械だった。一度は生命の危機に陥る怪我を負ったものの、兼平という優秀な人材の喪失を怖れたA D E O I Aが、半身の機械化という無茶な延命を行った。その結果だ。

ともかく、半ば隠居状態の兼平が九能を用もなく訪ねることは、ほとんどない。どこかの小支部から派遣要請でもあったのだろうか。しかしそれなら自分に直接連絡が来るはず。なら　。などと考えながら、九能は一瞬だけ目配せするだけで作業に戻るという態度で、要件を訊ねた。

果たして、その声なき質問は兼平に正しく届いた。

「かの少年に、思うところはないかね？」

「……！」

しかし、兼平の放ったその言葉は、九能の作業の手を止めさせた。が、それでも九能は顔を上げない。その様子は、親の詰問を怖れる子どものようにも見えた。

兼平は続ける。

「似ていてはないか、彼に。顔や仕草だけではない。言うなれば
そう、魂の在り様、そのものが」

「……………遠目から少し見ただけで、そこまで深く人を見れますか」
「似ていることは否定せんのだな？」

「……」

兼平の指摘に九能は押し黙る。

凶星だった。

昨日遭遇し、助け、今日、再会した少年は、九能の記憶の中のある人物に似ていた。

とても似ていた。生まれ変わりかと思うくらいに。

だから迷った。彼を自分と同じ道に招くことを。また、同じことになるのではないかと、怖れたから。

結局、選択は彼に任せた。本心は、来てほしくなかった。しかし、来た。

だからやめた。彼を、過去の彼と重ねるのを。全く知らない赤の他人なら、頭の中でどうしようが勝手だ。でも、そうでなくなったら、違う。死地に踏み込んでしまったら、その上でまだ彼らを重ねて見ていたら、また同じ哀しみを味わうことになるから。

だから、見ないようにしていたのに。

「わたしは彼を知らない。実際に会ったことがないからな」

何も言わない九能に、兼平は尚も話す。

「だが、今日会った彼は、准将から聞いた彼の人物像そのものだった。……そのことに准将自身が気付いていないはずがなかるう？」

「……違い、ます」

ようやく振り絞って出したのが、それだった。ここで肯定したら、九能の決意は瓦解する。それは恐怖そのものだった。

「何が違う」

「彼は、彼じゃない……。そんなの、当然の真理よ」

その言葉は、自分に言い聞かせているようにしか聞こえなかった。少なくとも、兼平には。

気持ちの迷いを振り切れない部下を放っておくほど、兼平は冷たい人間ではない。かといって、無理に人の深層に踏み込むほど、無遠慮でもないつもりだった。

だからこそ、今回は悩んだ。言うべきか、言わざるべきか。この、老練ながらも若い部下に、本当に言ってしまうてもいいのかどうか。悩んだ末の結論が、

「わたしも、妻を亡くした身だ。准将の気持ちはよくわかる。愛する者を失う悲しみを知ってしまったと、人を愛することを怖れるようになる。我々のような人間だと、特に。いつ死ぬかもわからんからな」

同情。

九能が求めているはずもないのに、兼平にはそれしかできなかった。

それだけしかできないが故にその同情は、無理解による虚飾ではなく、同列に立ったふりをした睥睨でもなかった。単に自分の過去の境遇を思い出した結果だった。

だが、兼平のその同情は、どれにしても筋違いとしか言えなかった。

ただの思い人が妻かという違いはあれど、愛する者を失うという体験をしたのは、九能が先だった。それに、兼平には、亡くした人の生き写しかと思うほどに似た人間に会ったという経験はない。九能の今の内心を、兼平が本質的に理解できるはずがなかった。

「……中将にはわかりません」

九能の言うことは正しかった。
兼平も気付いていた。

「そうかもしれないな。出すぎた真似をした」

「いえ……、そんなことは」

そんな、無理やり話題を終わらせようという魂胆の見えるやり取りで、二人の会話は終わった。兼平はそれ以上何も言わず、部屋を辞した。

残された九能は、静かに決意する。

「失くす恐怖に怯えるくらいなら、徹底的に守ってやる。　繰り返してたまるか……」

第2章 #4 運命の順路

「改めて自己紹介を。私は、第一特殊遊撃小隊の副隊長、伊神未永栖少佐よ。よろしくね、二人とも」

「同じく、居川咲です。階級はある事情で与えられていませんが、一応、曹長と同等の権限があります。どうぞよろしく」

医務室より場所を変えてブリーフィングルーム。幣原奈都海とその弟、唯利亜は、二人の疵術師の紹介を受けていた。

唯利亜への説明は、その後、行われた。しかし、予想に反して、手間取るかと思われた魔術関連の説明も、あっさりとした反応で、飲み込みも奈都海よりも遥かに速かった。最終的には、二度の説明を聞かされた奈都海よりも、唯利亜のほうが理解度は高くなっていた。

「それで、ADEOIAに入ってからはず、何をすればいいんですか？」

「そ、そうね……、まずは、能力測定から、かしらね……？」

唯利亜の異様とも言える理解速度は、未永栖をわずかではあっても狼狽させた。

だが、能力測定という単語を聞いた途端、奈都海は、状況を忘れて自らの安否のほうを気にかけ始めた。何をやらされるかは、大概、見当がつくからだ。

しかし唯利亜は意に介する様子も一切なかった。

「わかりました。それじゃ、入るのに何か手続きは？」

「いいわ。二人の名前とか住所とか経歴は全部、こっちで調べられるし。それより、あなたたちがどんな魔術が使えて、どこまで戦力になるか、のほうが必要なのよ」

未永栖も、唯利亞の、つい数時間前まで一般人だったとは思えない様子と言動には慣れてしまった。そもそも、普段は魔術を当たり前に行っている人間と行動をとりにしているのだから、こちらのほうが話しやすいのは当然だった。さっき狼狽してしまったのは、予想外に答えやすい質問が、まだ魔術の世界に片足も踏み込んでいないはずの唯利亞からでてきたためである。

とにかく、予定していたよりも速く事が進みそうなことに感謝しつつ、未永栖は部下である咲に二人の能力測定に付き合うよう命じて、

「それと、訓練室まで行く途中で深夜とミーアを拾っておいて。その二人がいれば測定も楽でしょ？」

「わかりました。少佐はどちらへ？」

「人事部のほうに向かうわ。測定のほう、結果が出たら送って。配属する部隊の判断材料にするから」

最後の、咲の「了解しました」という言葉に送られて、未永栖はブリーフィングルームを辞した。

それを見送った咲は、奈都海と唯利亞を振り返って、言った。

「では、行きましょう。案内します」

ところ変わって、訓練室。

壁面と床に耐魔加工を施した広大な面積を持つ実戦訓練室と、魔力の解析を行う機器の設けられた解析室が隣接しているトレーニングルームは、ワンフロアのほとんどを占めている、ADEOIA中国地方支部最大の施設である。

奈都海、唯利亞、そして咲の3人は、その中の実戦室のほうで、解析室の大原深夜、セツティミア・エックハルトの指示を待っていた。

深夜とセツティミア 愛称、ミア は、3人がここに来るまでに咲の連絡で集まった。深夜とミアの二人は魔力の解析に非常に有用だからだ。深夜は源血の特性によって魔力を“読むこと”ができ、ミアはその類の知識が豊富だ。実際のところ、どちらか一人でもよかったのだが、能力の把握と訓練は早いほど戦線への投入も早くなる。そうすれば彼らの熟練もまた、早まるというわけである。それを見越して、未永栖は二人を能力測定に駆り出させたのだ。

奈都海と唯利亞には、ついでに魔術に慣れてもらうことも狙っている。そのためには実践あるのみ。咲と、奈都海、唯利亞は実戦室の中央で相對していた。

解析室では、深夜とミアが機器の準備をしながら雑談していた。

「そつえば深夜さん、あの人たちの源血、読めないんですかー？」

これはミアの言葉。ところどころアクセントのおかしい部分もあるが、日本語として通じないほどではなかった。

「読めますよ。でもわからないんですよ」

答えたのは、当然、深夜。ミアのような年下、同輩にも敬語を使うのは、彼女の特徴だった。

「読めても理解ができないんですよ。源血における特性は、非常に抽象性の高い表現で書かれていますから」

「……なるほど」

「本当にわかったんですか？」

ジトつとした目でミアを見る深夜。ミアは顔を逸らしてその視線から逃れた。

「ニホンゴハムズカシーデスヨー」

「わざと片言にならないください。わからないならそれでいいですから。………感覚的なものなので説明は難しいんですけど………、簡単に言うと、魔力の中に書かれたいくつもの隠された伏線を繋げていくと源血に辿りつけるというか。つまり、私だけでは、推測はできても真実はわからないということなんですけど」

深夜の説明を聞いて、ミアは「ふむ」と歳不相応に神妙な表情で唸った。

「推測はできるってことは、ある程度の傾向はわかるんですよね？」

「そうですね。でなきゃ測定の仕事なんてできませんし。……って、理解できてるじゃないですか」

ミアは、にしし、と笑い、深夜も、仕方ない、といった風の溜息と苦笑を漏らした。

その後も他愛のない会話をしつつ、二人は機器のセッティングを行う。

能力測定に使う機器とは、魔術の干渉力や魔力に含まれる精神情報などの測定を行う魔導機械のことを言う。疵術師だと、この二つがわかればその時点での実力がある程度わかる。ちなみに、深夜の能力は、壁などの物理的な障害があっても問題なく発揮できるため、いてもむしろ危険なだけの実戦室には入る必要がない。

最後に機器の動作確認を終えたミアの合図をもらって、深夜はヘッドセットのスイッチを入れた。

耐魔加工とともに遮音効果も完璧な壁に囲まれている実戦室には、5 m離れていても息の音すら聞こえてきそうな静寂があった。外部からの音が完全にシャットアウトされるのだから、中にいる人間が会話でもしていなければ音は生まれない。

来てから、数十分。奈都海と唯利亜の二人をここに連れてきた張本人である居川咲は、しかし、二人に説明の一つもなく、ただ二人の正面で仁王立ちしているだけだった。

状況を完全に理解しているとは言い難い二人は、最低限の説明くらいはしてほしいというのが正直なところで、こうしてただ黙っていても、心中には状況への戸惑いしかなかった。

故に、それを無理にでも払拭するために、唯利亜は必死で話題を探した。

「あの……」

「？ 何か？」

「え……、あー、えっと」

しかし、話題を探しながら話しかけたがために、唯利亜はしどろもどろになって先を続けることができなかった。咲の怪訝な目に晒されながら、十秒ほど。

「あっ
」

やっと見つけることができた。

「あの、咲さんって、ボクたちと同じくらいの歳ですよ？ 疵術師ってというのは、そんなに若くても戦わなきゃいけないんですか？」

「そうですね。それが何か？」

まるでこの世の真理であるかのように、咲は答える。その様子に、唯利亜は思わず口を噤んだ。

「戦わなければならないというのもおかしな表現ですね。私たちの力は、戦うためのものですよ？」

咲の口ぶりは、まさに戦いが当たり前になった人間のものだ。戦うという行為に疑問を持っていない。食事や入浴のように、日常の中に戦いが融け込んでしまっている。

唯利亜にとって、それは放っておけるものではなかった。

「……そ、そういうのって、変じゃ、ないでしょうか」

「何がでしょう?」

心なしか語気が強くなっているような気がしたが、唯利亜は何とか勢いを失わずに済んだ。理由はわからない。

「咲さんって、まだボクたちと同じ、15歳とかですよね?」

「今年で14です」

咲の遮るようなその訂正も、唯利亜を勢いづけた。否定するための材料が見つからなかった末の、無理な話題の転換であることには、自分でも気付けていない。

「な、ならなおさら! 戦いなんて大人に任せておけばいいものだよね? 子どもがやっていいものなんかじゃないよ! そんな、咲さんにだって戦い以外にもしたいことだって色々あるはずなのに、どうしてっ……!」

そこまで言って、唯利亜は咲の表情に気付いた。

今にも零れんとする怒りを、必死で押し殺す、その表情に。気付いて、頭が冷めた。

「あ……、あの……」

「もう黙ってください。それ以上何か喋ったら消してしまいそうです」

口調だけは穏やかだが、その言葉と表情が、咲の隠しきれない怒りを表していた。

「知らないことが多いのですから、そういうことを言ってしまったも仕方ありません。ただ、魔術の世界は、それを知らない世界とは倫理観も常識も、大きくかけ離れています。それだけは憶えておいてください。あなた方がいた世界の常識をこちらに持ちこむのはやめてください。当然、逆も然りだということは私もわかっていますが、あなた方はもう、こちら側の世界の人間です。これは自覚や覚悟、力の有無は、全く関係ありません。“そういうことである”と、深く認識してください」

喋ることで自分の怒りを鎮めようとするかのように、咲は長々とそんなことを言う。

咲にとって、疵術師であるということ、それ自体が、彼女のすべでだった。唯利亜の言ったことは、それを真つ向から否定する言葉だ。彼女自身は無自覚だが、周囲の近い者は皆、わかっている。彼女は自分を疵術師以外の何者にもならないようにと、厳しく律している。咲に、疵術師以外の自分など、あり得ないのだ。

故に、否定されると怒りが湧く。自分の存在そのものを否定されることと同義だからだ。しかし、その怒りの理由がわからないから、それをどこに向けていいかわからない。そして、わからないから、自分の中だけで完結させようとする。今が、その状態だった。

自分らしくないと自覚できる感情の揺らぎをなんとか抑え込んで、咲は改めて居住まいを正した。

「少し感情的になりすぎたようです。申し訳ありませんでした」

突然、頭を下げた咲に、唯利亜は慌てて謝罪を返した。

「え、いえ、こちらこそ、考えが浅薄で……ごめんなさい」

咲は頷いただけで、何も言わなかった。唯利亜の謝罪を拒絶することも、自分の謝意を押し通そうとすることも、しなかった。

再びの沈黙。に、なるかと思われた時、

『咲さん。準備が整いました。こちらはいつでも大丈夫です』

咲の着けているインカムから聞こえたのは、深夜の声。どうやら機器のセットが終わったらしい。咲は「わかりました」とだけ告げて、視線と意識を二人に向けた。

「では、二人には、これから魔術を使っていたいただきます。方法は私が教えますので、言う通りにしてください」

「あ、はいっ」

返事したのは唯利亜だけ。奈都海は頷いただけだ。

咲は、14歳にして年長者に教授するというおかしな状況にも臆することなく、淡々と続けた。

「これから二人に使っていたただく魔術は………特に名前もありませんが、魔力を固形化して銃弾のように敵に撃ち込む、最も単純な攻性魔術です」

「攻性魔術？」

聞いたことのない単語に唯利亜が思わずオウム返しに訊いて、咲はそれに頷いた。

「はい。魔術には攻性と護性、そのどちらでもないその他、があります。攻性魔術は、自分の放った魔力によつて、他者になんらかの作用をもたらすもの。護性魔術は、自分の魔力で自分自身になんらかの作用をもたらすもの。そして、そのどちらでもないもの。例えば、召喚術などは、使うだけでは使い魔を呼び出すだけで誰にも影響を与えないので、どちらにも該当しないと云えます」

「他者が自分か、って違いなんだ……。ってことは、もし他人の傷を治すような魔術があつたとしたら、それも攻性魔術になるの？」

「……そうですね。字面だけを見ると違和感があるかもしれませんが、定義としてはそういうことになります。……まあ、この区別は魔術を使う上ではあまり関係ないので、知識として頭の片隅に残しておく程度で構いません」

ふんふん、と熱心に聞く唯利亞に、咲はさらに説明を続けようとしたが、寸でのところで脱線していることに気付いた。「さて」と仕切り直して、咲は、魔術を使う、という本題を再開させた。

しかし、二人には当然の如く方法がわからない。そんなことはさすがの咲にもわかつているため、予定通りに進めることに変わりはない。なかつた。

「とはいえ、いきなり使えと言われても無理でしょうし、まずは私が実際にやってみます。よく見ていてください」

そう言つて、咲は手の平を前方にかざした。その先にあるのは、どこからか現れた、簡単に人型を象つた“的”。それが突然、

パン！！

という甲高い音とともに、頭部だけが消し飛んだ。

奈都海と唯利亞は、頭のなくなった的と、的から10m以上の距離を置いて立っている咲を何度も見比べる。もちろん、咲は銃などの飛び道具の類は持っていない。この部屋の無機質な壁と床に、銃を隠しておけるような仕掛けがあるとは思えない。

で、あれば、やはり魔術。

当然の帰結として浮かぶ予想は、咲の言葉によって確信に変わることになった。

「これが、魔術の中で最も簡単とされる魔術です」

「これが……魔術？」

「最も簡単ですから、威力もそれに比例して非常に弱いものですが、逆に、すべての基本であるこれができないと、他の魔術も使えません。特に、詠唱に意味のない疵術師だと重要度も高いので、習得は絶対です」

絶対、と言われて、唯利亞の表情も引き締まる。奈都海も、神妙に頷いた。

今さらだが二人の順応性に内心で首を傾げながら、それでも咲は自らの職務を全うするべく、奈都海と唯利亞に魔術の方法を教えるべく、いく。

慣れない他人への説明という行為に戸惑いながらも、順調に……

ADEOIA日本中国地方支部。そこに徒歩で近づくと、一組の男女がいた。

どちらも小さめの旅行鞆を持っている。傍から見れば、短い旅行から帰ってきたカップルという風に見える。彼らの若干疲れたような表情と歩き方も、その印象を強くしていた。

そしてそれは、彼らの自覚の有無さえ除けば、さほど間違っていないかった。

「あゝ……、ひつさしぶりに帰ってきた」

その二人の内の男のほうが、軽く空を仰いで気だるげに呻いた。少女のほうは、それに対して苦笑を返した。

「久しぶりって言うほど離れてなかったでしょ。ただか一週間だよ?」

「あー、そーいやそーうだっけ?　なんか2、3週間はあっちにいたよーな気がするな」

「そーうだねえ……。充実したっていうか、充実しすぎて疲れた一週間だったかな。そのせいで長く感じたのかも」

二人は、DMFBの発生に対応しきれない小支部に、中国地方支部から派遣された疵術師である。その小支部で起こった、DMFBとの戦いだけではない充実しすぎた要因を思い出して、二人はともに笑った。

笑って、話している間に目的地は目前まで迫っていた。

「はあー……。ま、こっからは切り替えてっ。お姉ちゃんによると

新しい仲間が増えるみたいだしさ！」

「テンション高えな、おい。でも、ま、新入りには興味あるな。どんな奴なのかねえ……」

「男の子らしいよ？」

「ヤローかよ、つまんね」

「久宮ひさみやは女の子のほづがよかった？」

少女の声はどこか探るようだった。しかし、男はそれに気付かず、だというのに笑って否定した。

「いや、別に。正直、今の支部じゃ、男のほづが少ないだろ？ 話題の合う奴が少ないから、男が増えるのは普通に嬉しいよ」

「……ふーん」

だが、それは少女の求めていた答えとは大きくずれていた。無自覚に不機嫌になって、男に対する相槌もおざなりになってしまう。それすら意に介することなく、男は一週間ぶりの支部のビルのエントランスをくぐるうとする。

「さーて……、俺らのいない支部は大丈夫だったのかね」

「あのねえ、別に私たちがいなくても あれ？ 私たち？」

男の言葉の主語が、“俺”ではなく“俺ら”だったことに気付いて、少女は続けるはずの言葉を飲み込んだ。男の私の強い性格を知

っている少女は、彼が自分も含めて物事を考えてくれていることに、大きな違和感を覚えたのだ。

「どしたよ？ 未来小？」

言葉を不自然に切った少女に、男は訝しげな視線を向ける。

「あーっと……、なんでもない。気にしないで」

訊こうかどうか迷ったが、脳内の超高速シミュレーションの結果、何をどう訊けばいいかわからないという結論に達し、結局は定番の誤魔化し方で場を濁した。納得している風にも見えなかったが、男は必要以上に問い詰めることなく、エントランスホールを進む。少女もそれを追った。

一週間ぶりに顔を合わせる仲間たちからの、派遣後定番の土産はないのかなどといった労い代わりの野次をいつも通りに受け流しつつ、二人はまたいつも通りにエレベーターへ向かっていた。

少女が不意打ちを受けたのはその時だった。

「あ？ 誰が渡すかってんだ。こいつは俺のもんだ、諦める！」

「っ！？」

思わず、なぜか、ある疵術師に向かって中指を立てている男の顔を、少女は見上げてしまった。それほどに、男の放った言葉は少女にとって衝撃的すぎた。

実際は、単に、相手の疵術師が少女を戦力として欲し、それを男が断っただけだった。お互いに顔には笑みが浮かんでいることから、冗談として少女を誘い、それを冗談と知った上で、わざわざ大袈裟な表現で断ったのだろうことは、傍から見ても容易に推測

できる。

だが、今の少女には、幸いにも（？）そこまでの処理能力は残っていないかった。脳はすべて、男の言葉の解読に費やされていたのだ。

「おい？ どうした？ 顔、真っ赤だぞ？」

「え！？……あ、な、なんでもない！ や、ほんとうにっ」

「んあ？ そうか？ ならいいけどよ……」

そのやり取りを見てすべてを看破したらしい疵術師も、何人かいた。その内の一人が、からかい混じりに男へ忠告した。

「そういう相棒は貴重だよ。大切にしなよ？」

「お？ おお、まあ、言われるまでもなくそのつもりだけど」

「っ！」

少女はついに顔を真っ赤に染め上げ、忠告した疵術師は笑いを堪えながらその場を立ち去り、男は何が何だかわからずに首を傾げた。そして男は、手近にいた少女に訊ねることにした。

「ありゃ一体、どういうことだ？」

「……………」

「……………おい？」

「知らないっ、なんでもない！ 私に訊かないでくれるっ！？」

鬼の如き形相でそれだけを言い残して走り去っていく少女に、男は「なんだありゃ……」と呟くしかなかった。

少女はこの後、未来永劫に渡って、この時の出来事は誤解したままであった。

第2章 #4 運命の順路 (後書き)

今回は展開を少し急ぎました。

奈都海と唯利亜には、一晩ほど考える時間を与えるのが話の流れとしてはよかったです。それだけで一話まるごと使いそうだったので、そうなるかと冗長になるかなと思いついて。

唯利亜の能力のこともあるので、彼(女)の物分かりのよさによる展開の速さには理由もつけられますし。

奈都海に関しては、状況に流されやすいので、NO!と強く言えない性格なのです。いつのまにか外堀埋められて逃げられなくなるタイプです。逃げようと思いません。

この展開、無理があるかな、と思っても、得意の後付け設定でなんとかします。……いえ、冗談ですけど。それは最終奥義として秘蔵しておきたいので。

……ここまで書くと言い訳じみてきますね。今回はこの辺りで。

久しぶりのあとがきでした。

今日も、読んでいただいた方々に最上の感謝をしつつ……

第2章 #5 派遣要請

目が覚めた。

快晴だった。

「……」

かゆくもないのに意味もなく頭をがしがしとかきながら起き上がる。ふらつく足を叱咤しながら、制服に着替え ようとして、春休みに入っていることを思い出して寝間着のまま部屋を出た。

最悪の目覚めだった。

目覚めて真っ先に思い出したのは、昨日のこと。突然、俺の知っている常識が崩されて、それから怒涛の勢いで進んだ話についていけず、ただただ言われるがままにやっていたらどうしようもない段階にまで進んでいた。

昨日という一日は夢だと思い込みたい。だが、今の俺の身体に流れるものへの実感が、それを許してくれなかった。

明らかに、今まではなかったものが俺の中にあった。今まで知らなかった器官が身体に生えてきたような感覚が、こんな感じかもしれない。いや、正確には、あることに気付かなかったものに気付いた、ということになるのだが。

とにかく、この状況から逃れる術がないのなら、この状況で今の俺にできることをするしかない。人間、時には諦めも重要だが、すべてを諦めるわけではない。10のうち1を諦めても9は諦めない。9を諦めても最後の1は決して諦めない。すべてを諦めるのは、即ち死ぬことを意味する。……姉貴の受け売りだが、姉貴との思い出のほとんどない俺にとっては、こういう記憶は貴重だった。

洗面台の前に立って、鏡を見る。

『うわぁ…………』

思わず言葉が出た。

目が開き切っていないとか、髪がぼさぼさとか、そういう次元の話ではなく。そもそも、視線は鏡に映った俺には向いておらず。

背後にいる全裸の亜美^{つぐみ}さんに向いていた。

髪を拭き終わってバスタオルで隠れていた目が露わになった亜美さんは、俺を発見して、笑っているのか判断に困るような形に口を歪めた。

「どうした、ナツ。今日、休みだよ？」

さて、どうすべきなんだろうか。顔を洗う以外の用はここにはないし、それぐらいなら最悪、キッチンでもできる。別に、今すぐここを出ていってもなんら支障はない。

だが、この直後に出ていくと、まるで亜美さんを理由に出たよつで気分が悪い。40を過ぎたバブ…………女性に欲情するような趣味はないし、ましてや母親だ。意識していると思われるのは、非常に心外である。

「おい、なんか失礼なこと考えてないか？」

『いやいやまさかそんな』

「……………、まあいいや」

亜美さんは身体を拭き終わって部屋着を着ているところだった。

部屋着というと、この人の場合ジャージに限られるのだが。

「んで、ナツ。なんでこんな朝早くに起きたんだ？」

『朝早いつて……今、何時だ？』

「さあ？ 7時ぐらいだと思っけど」

なるほど。休日にかかる時間としては、少々早いかもしれない。俺に関しては、だが。唯利亜は平日も休日も関係なく、6時には起きている。平日だと5時に起きることもあるらしい。しかし、亜美さんとは俺と同じ、早起きするような習慣はないはずだった。

『亜美さんはなんでこんな早くに？』

「徹夜で書いてて、今さっき終わったところさ」

昨日は帰ってきてから、一度も亜美さんの姿を見なかった。食事も取っていないければ、風呂にも入っていない。だからこんな朝早くから風呂になんぞ入っていたというわけか。

ちなみに、この人の職業は小説家だ。といっても、どんなジャンルのものを書いているかは知らないし、ペンネームを教えられてないから調べようがない。積極的に知りたいと思っただこともない。

「……………」

「ん？ なにさ？」

『いや、なんでも』

昨日、訊こうと思って訊けなかったことを訊こうとしたが、これは唯利亜もいるところで訊くべきことだということに気付いて、やめておいた。

顔を洗った後に向かったリビングでは、唯利亜が無表情で朝の情報番組を見ているといういつもの朝の光景があった。嫌いなら見なければいいのに、といつも思うが、言ったことはない。

「唯利亜ー、朝飯いー」

俺の後から入ってきた亜美さんの母親らしからぬ発言によって、唯利亜はこちらに気付いた。

「母さんに兄さんじゃない。今日は早いね」

「まあねー。オールナイトだったから朝飯食ったら寝させてもらおうよ」

「そっか、大変だったね。これから作るから待ってて。兄さんも食べるよね？」

『ああ、もうっ』

「ん。了解」

そう言っただけで、唯利亜はエプロンを着けながらキッチンへ向かう。

ここ数年、というか姉貴がいなくなっただけから、家事をするのが主に唯利亜になってしまっている。一応、掃除と洗濯は俺も手伝うが、それ以外はほとんどすべて、唯利亜に任せている。唯利亜も別に好きでやっているわけではない。料理は特に難儀している。教える立場であるはずの亜美さんに、やる気も教える気もないのだから当然

かもしれない。唯利亞も色々試行錯誤しつつ、まともな料理は作れるようになったが、肝心のレパートリーが増やしていく。亜美さんは家事全般の能力自体は高いのだから、やる気さえ出してくれればなんとかなるのだが……

「唯利亞ー、まだー？」

この体たらくである。ソファに寝そべって自分の息子に朝食をねだるといふこの姿に、改めて母親という存在の役割を考えさせられる……と、いうこともなかった。両親にはもう、親らしい姿など期待していない。そもそも、親というものに何を期待すればいいのかもわからなくなっていた。かといって、失望とか嫌っているとか、そういうわけでもない。じゃあなんなのかと言われても困る。考えたこともない。

俺もイスに座って待っていると、しばらくして唯利亞が2人分の朝食を持ってやってきた。それを匂いだけで察知して、亜美さんはソファから起き上がってダイニングテーブルに座った。

「んじゃあ、いただくとしますか」

何が「じゃあ」なのか皆目見当がつかないが、それは適当に無視して、俺も続いて朝食をいただくことにした。

その直後、唯利亞がとんでもないことをしでかした。

「ねえ、母さん。魔術師って知ってる？」

汁物を口に含んでいなくて幸いだった。主に、向かいに座っている亜美さんの朝食と顔面が、大変なことになっていたかもしれないからだ。いや、そうならなかったで、唯利亞の発言もうやむやになつて助かったかもしれないが、後に来る俺への報復が怖いしとか

そういうことではなく。

確かに訊いてみるとは言われたが、そんなド直球に訊けとは言われていないし、むしろ、できるだけぼかしてさりげなく、と言われているはずだ。

思い出してみると

「ボクたちの親、にですか？」

「そう。あなたたちの家族にちゃんと血の繋がりがあんなら、両親も疵術師のはずよ。ただ、訊く時はできるだけさりげなく、ね。現代の日本だと、自分が魔術師であることを隠して、あるいは忘れて生活している魔術師も多いから。比率としては忘れてしまっているほうが多いわね」

「……えっと。これは、別に望んでいるわけではないんですけど」

「なにかしら？」

「ボクたちの親は、ボクたちみたいにADEOIAに入れたりしないんですか？ 戦力が欲しいなら、入れるのが当然じゃ……」

「確かに、戦力が欲しいのはその通りだけどね。戦力には将来性がないとダメでしょう？ DMFBは一過性のものではないの。倒しても、またすぐに次が出てくる。そんな中で、戦力として働ける期間の短い疵術師を一から育てるだけの余裕は、ここにはないのよ。十年やそこらで前線を退くような戦力は、求めてないの」

西園寺さんとやらの言う通りなら、これは亜美さんが自分は疵術師であるということを目覚めているかどうかという確認だ。隠していただけなら、俺たちが知ってしまった以上、隠す理由はなくなるから白状するだろう。自覚がないなら、「は？」で済む。果たして結果は

「そりゃあ、知ってるけど？」

「!？」

「でも、あんま詳しくはないよ？ あたしはそういうジャンルの書いているわけじゃないし。魔術師つてのは創作物の登場人物としちゃあ、ありきたりだからね。これから書くつもりも調べるつもりもないよ」

「ああ……そういつ……」

安堵なのか落胆なのか、その中間のような感覚だ。まあ、とりあえずは、亜美さんに対する隠し事が一つ増えたとも思っておけばいい。もし本当に疵術師だったとしても、知らなくてもいいのなら、知らない方がいい。唯利亜も俺と同じような心境らしく、安心したような困ったような、微妙な表情だった。

そして、唐突な質問に訝しさを覚えた亜美さんによる追求を適当に避けつつ、朝食の時間は過ぎていった。

同日同時刻。

西園寺九能は、A D E O I A 中国地方支部の副支部長室にいた。行っているのは、書類処理。書類といっても、紙媒体ではなく、ほとんどがデジタル化されたものだ。九能はそれを、画面を指でなぞりながら淡々と行っていた。

実際の支部長から全権を委任され、実質的な支部の長となっている九能の下には、多くの書類が端末を通して送られてくる。

種類も様々だ。各小支部からの疵術師の派遣要請、D M F B の発生、発生地域、発生数、討伐の報告、A D E O I A 側の犠牲者の数。この支部内でも、誰がどれだけどの程度のランクのD M F B を討伐したか、今日の内に派遣される疵術師、派遣先から帰ってくる疵術師のリスト、さらには民間に委託しているはずの企業としてのアイデアの日本での損益まで。重要なものからそうでもないもの、明らかに不要なものまで、様々にある。

特に、小支部からの派遣要請は、内容によって重要不要の差が激しい。その小支部では手に負えないD M F B の発生によって切羽詰まったものや、逆に戦力に余裕があるにも関わらず、考えもなしに出された要請もあるからだ。九能は、その是非を見極めねばならない。時には要請の出された小支部の構成を見て、要請の内容に虚偽がないか判断しなければならぬこともある。おざなりにできる仕事ではない。

書類の中には、昨日帰ってきた浄美未来小と浅木久宮の帰還報告もある。派遣先での仕事内容をまとめた報告書にも目を通してから、確認済みのサインを指で書いて次の項目へ。

「……あら？」

それは、疵術師の派遣要請。しかし、その派遣先が問題だった。

島根県と広島県にまたがる吾妻山の麓に近い小支部。それが、要請を出した小支部だった。しかし、この小支部の周辺はDMFBの発生が非常に少ないにもかかわらず、3人の疵術師が配属されている。しかもその内2人は、日本のADEOIAではそこそこの名を知れた疵術師であるという、異質な小支部である。

つまり、その小支部は増援を求める理由が生まれにくい。事実、今までその小支部から増援要請はなかったのだから。

九能は、改めてその要請理由の内容に目を通した。

「……………」

そして、絶句した。

画面に映っているのは、“ファントム”の文字。その単語は、九能の言葉を失わせるには十分だった。

ファントムとは、DMFBの中でもSランク、つまり最上級のもののことを指す。人間、爬虫類、ネコ科などの動物の純性魔力を核として生まれることが多く、特に人間のものだ。知性まで備えるため、危険性が計りにくくなる。しかし、出現数そのものはかなり少ない。一つの支部の管轄内で、一年に一回現れるかどうか、という頻度だ。これまでいくらかファントムとの交戦経験のある九能でさえ、その出現の脈絡のなさには驚かされる。

ファントムと戦える疵術師は限られる。特に、魔術師は数が戦力に直結しないため、少数精鋭か、圧倒的な戦闘力を持つ疵術師を派遣するしかない。この支部で、それに該当するのは

「私しかない、かな。私がいなくても瀬井がいれば問題ないでしょうし……………」

溜息混じりに一人ごちる。やる気がないというわけではない。やる気ならむしろ、大いにある。ただ、不安なのだ。

つい昨日、ADEOIAに入った二人のきょうだい。魔術師の存在を知ったばかりで、右も左もわからない状態だろう。その二人を置いて、この場を離れるには不安があった。

この支部の指揮に関しては、部下の雪川瀬井に任せればなんとかなる。しかしあの二人はどうだろうか？ 自分がいない状態で混乱しないだろうか。自分と離れて、自分以外の人間に二人を任せるというのは……

「……あ」

自分の思考が元の懸念とは違う方向に向いていることに気付いて、九能は頭を振って、突如湧いてきた自覚のない独占欲を追いだす。確かに彼ら二人は心配だが、それなら特殊遊隊の面々がいる。彼らなら、二人を上手く導いてくれるはずだ。疵術師としての実力も経験も、皆、それなりにある。戦い方はもちろん、疵術師そのものの生き方も知っている。それらを教えられるのは、九能だけではないのだ。

九能は部下を信じ、二人を彼らに任せることにした。

そして

「ええ！？ 唯利亜ちゃんって男の子なの！？」

「戸籍上ではそうなってますね。性別は、男性です」

「冗談だろ？ どうみても女だぜ？」

「私は見た時にすぐにわかりましたけど……。やっぱり見た目だけじゃ、性別ってわかりにくいものなんですね」

「そりゃそうよ。みんなが深夜みたいに、魔力を読んで性別を看破できるわけじゃないんだから。私だって、昨日、初めて知った時は驚いたわよ」

「もしかして、これがあの男の娘ってやつ？ 初めて見た……」

「そういう言い方って失礼じゃありませんか？ 未来小さん」

「そもそも、こういう話題で盛り上がっている時点で礼は失していると思うんだけど」

「さっすが魔術師……。人間そのものの常識すら、簡単に覆しやがるぜ……」

任せた結果がこれである。

第一特殊遊隊の面々は、任された幣原きょうだいのうちの弟である唯利亞に、その興味を注いでいた。

唯利亞の容姿は一見、女子にしか見えない。それどころか、見れば見るほど女の子にしか見えなくなる。その風貌だけではない。声も仕草も着ている服も、男のそれでは決してない。だというのに男だというのだ。興味をそられないほうがおかしかった。

そんな、実の弟がちゃほやされているという、兄にとっては実に微妙な光景を眺めている奈都海は、手持無沙汰な現状を見ないように、話題の中心にいるのに一言も発することができていない唯利亞に視線だけを向けていた。

意識と思考は、別にある。今朝、ここ、ADEOIAの中国地方

支部に来てすぐに、自分の部下に世話を任せたと、という一方的かつ事務的な報告をしただけで去っていった、西園寺九能について考えていたのだ。

口調や態度は、確かに事務的だった。しかし、その裏には大きな感情が隠されているように感じた。根拠はないが、奈都海は彼女に違和感を抱いた。昨日会った時のような余裕が、今日は見られなかったのだ。それを隠すために、努めて淡々とした態度を取っているようにしか見えなかった。

まるで、歳相応の少女のようでもあった。

「どうしたのかな、奈都海くん？」

思考に埋没していた奈都海の横から、男の声がかけられた。

奈都海が目を向けると、そこにいたのは、一見して人当たりの良さそうな好青年。しかし、その笑顔はどこか貼り付けたような印象で、作り物めいていた。

「奈都海くん、だよな？ …… つと、喋れないんだっけ。僕は読唇術も手話も知らないから、筆談でお願いできるかな？」

奈都海は頷く。そして、メモ帳とペンを取り出して筆談の準備をしておいた。

「僕の名前は小鳥遊尊何^{たかなしそんか}。あの子たちと同じ、第一特殊遊撃小隊の隊員だよ。で、あそこで舟を漕いでいるのが、三井魅戈^{みついまか}。僕も魅戈も、階級は大尉さ」

あそこみんなはもう知ってるよね？ と、唯利亞に群がる数人を指して最後に言って、尊何は自己紹介を終えた。

彼が自分と同時に紹介した三井魅戈という少女は、部屋の隅でソ

フアに寝転がっていた。居眠りどころか本気で寝てしまっている。

「ああ、魅戈のことは気にしないでくれるかな。今朝まで徹夜で仕事をしていたから、眠くなるのも仕方ないんだよ」

『はあ………』

「特にあの娘は実年齢に比べて幼いから。今後はその辺りも考慮して接してくれると嬉しいね」

『はあ、そうですか』

社交辞令の愛想笑いを浮かべながら質問攻めに対応する唯利亜を尻目に、奈都海と尊何は最低限の社交辞令すらなく会話を続ける。尊何は自分の思うままに一方的に話し、奈都海はそれに短い相槌を打つだけ。

そんな、なんの中身もない時間が無駄に過ぎていき、

「さて」

と、機会を見計らって、未永栖が彼らの会話を遮った。皆の注目は未永栖に向く。対して、未永栖は奈都海と唯利亜の二人を、厳しい目で見ていた。

二人は空気が張り詰めるのを感じていた。それまで喧しく喋っていた面々が口を閉ざし、空間に沈黙が降りた。

「あなたたちは、これから私たちと同じ世界に身を投じることになる。それは、死という終末の現象が至る所に転がっていて、殺すという未経験の悪夢を自分で行わなければならない、戦いの世界」

その沈黙の中に未永栖の声だけが響く。

「俺たちはそういう世界で、仲間が死ぬのも、化け物とはいえ何十何百と殺すのも、何度となく繰り返し返してきた。敵味方関係なく死を振りまくのが、俺たちの仕事だ。それでもお前らはやるか？ 俺らと一緒に」

久宮はいつもの軽薄さを消した笑みで、未永栖に続いた。

「正直なところ、私たちだって怖くないわけじゃないんだから、君らが怖がっても、誰も笑ったりはしないよ。むしろ、私は歓迎するよ？ 君たちの恐怖そのものは」

未来小は、朝食らしい菓子パンを齧りながら、しかし、その声音からは深刻さは消えていなかった。

「もう後戻りはできないでしょうけれど、どう戦うかはあなた方が決めることです。戦いという面において、それだけは私たちにも縛ることはできません。といっても、それが戦いの大半を占めるわけですが」

咲の無表情と淡々とした口調は、隊員にとってはいつも通りだった。

「僕たちには、あの化け物や自分の能力に憎しみがあるものだよ。でも、君たちにはそれがないはずだ。さて、そんな君たちがどんな戦いの糧を見つけるのか、とても楽しみだね」

虚構の笑みと虚飾に満ちたセリフは、尊何によって二人に向けられていた。

「私は別に直接戦っているわけではないので、なんとも言えませんが……。まあ、頑張ってください」

深夜は当たり前障りのない言葉で、連なつた皆の言葉を締めくくつた。

若干一名、寝ている者もいるが、とりあえず今はいないことにして、未永栖は最後に告げた。隊長でありこの支部の長でもある九能の代理として、彼女は奈都海と唯利亜の二人に、

「ようこそ、二人とも、私たちの世界へ。あなたたちにとっては未知の世界。けれど、これからはあなたたちのホームグラウンド。今までの常識をアウエーにする覚悟はあるかしら？」

歓迎も交えて、覚悟を問うた。

（寝ている一人を除いて）皆が二人を見つめる。その目には総じて、強制する光も、促す力も、拒絶の色もなかった。二人は、選択肢のない状況で享受も拒否も許すような、そんな空々しい好意を理解しながら、一拍置いて頷いた。

戦いという行為には、したこともないから当然実感もないが、自分に力があるのならそれを受け入れ、活かしてくれる場所が必要だった。その手段が戦いだとしても、二人には抵抗はなかった。相手が人間だと言われれば、また違ったかもしれないが、相手するのはDMFBと呼ばれる化け物だ。

「戦います。ボクも」

唯利亜の言葉に、奈都海も同意の首肯を繰り返す。

二人の反応を窺っていた特殊遊隊の皆は、その瞬間に表情に笑みを浮かべて、口々に歓迎の言葉を重ねた。

こうして、幣原奈都海、唯利亜の二人は、疵術師としての戦いを始めることになる。

各地の小支部は、怪しまれることのないよう、ありふれた店舗の体をとっていることがある。最も多いのが、どんな年齢層の人間が働いていても不自然に見えず、かつ大きなスペースを必要としない喫茶店である。その他、国や地域、勤める疵術師の好みによって、骨董店や学習塾、ペットショップ等、様々で、挙げればきりが無い。単に個人の家を小支部としているケースもある。

とにかく、ADEOIAの小支部は、多くは一般的な店として経営しているのである。

それは、この吾妻山ふもとの小支部も同様だった。吾妻山といえど日本に数ヶ所あるが、ふもとに小支部を構えるのは、島根県と広島県にまたがるそれだけだった。

この小支部は、実は日本のADEOIAでは少々名の知られたものだった。正確には、その小支部に所属する二人の疵術師が有名であったために、その二人が定住する小支部も必然的に知られるようになった、ということだ。

所属している疵術師は、そのよく知られた二人以外に、もう一人いる。この一人こそ、二人が居座る原因なのだが、それだけは誰にも知られていなかった。

原因となっている張本人さえ、知らなかったのだ。他人に知る由などなかった。

その小支部は、ペンションのような宿泊施設を経営していた。場所柄、泊まる客はほとんどが登山客。部屋数は4部屋と少ないが、登山用具の貸し出しなども行っている、山付近ならどこにでもありそうなペンション。

その運営を主として行っているのは、ADEOIA所属の梓弓音射あすさゆみ。階級は上級大尉で、他の二人より高いのだが、彼女はその二人がここに居着くことになった元凶である。彼女自体は、特段有名というわけでもない。

階級からしてかなり腕が立つことはわかるが、なにせ、同じ小支部に所属する疵術師が国内でも知られた疵術師である。彼女が前線に出ることも少なくなつて久しい。今や、彼女の仕事のほとんどが戦闘を伴わない、事務作業やペンションの経営に傾倒していた。

そんな彼女がいつものようにペンションの一階、食堂を掃除している時のこと。来客を知らせる鈴の音とともに、一人の少女が入ってきた。

女性の登山者というものは珍しくはないものの、それが一人となると話は別だ。が、音射は驚くことはなかった。その少女は、音射本人が呼んだ人物だったからだ。

音射は掃除を中断して、少女の前に立つ。

「いらつしやいませ。遠いところからお疲れ様です、准将」

「ええ。あなたが吾妻山小支部長の梓弓音射上級大尉ね？」

少女は高校生、よくて大学生という容姿。それに対して、音射は三十路に入った、いわゆる妙齡の美女という雰囲気の女性だ。だといふのに音射の少女に対する態度は、非常に慇懃だった。

少女の名は、西園寺九能。世界にも『巨斧の魔女』の名で知られ

る、強力な疵術師である。

音射は九能の所属する中国地方支部に、疵術師の派遣要請を出していた。所属している疵術師の実力の高いこの小支部では、初めての要請である。

それもそのはず、今回の敵は、並みの疵術師では到底叶わないとされる、SランクDMFB、ファントムだからだ。小支部の二人でも対応できないと判断した音射が、支部へ要請を出したというわけである。

「はい、西園寺九能准将。噂はかねがねより伺っております」

「そう。……それは一体、どんな噂なのかしら？」

「……」

意地の悪い質問で音射を黙らせてしまった九能は、すぐにそれを撤回した。

「いいわ、答えなくても。それよりもあなたのほうも、かなりやるらしいわね」

「それは……、昔の話ですよ。今はもう、すっかり鈍ってしまいましたし」

九能は音射の言葉に謙遜以上の何かを感じ取る。が、その“何か”はこの段階でわかるはずもなく、「そう、残念だわ」と、九能はこの話題を早々に切り上げた。

本題はお互いの能力への賛美ではない。九能にとっても、支部を空けるのは好ましいことではなく、さつさとファントムを殲滅して戻りたいところだった。それ故に、九能の言葉も、若干急ぐ。

「で、ファントムについて訊きたいんだけど。今のところ、確認できているのはその存在だけよね？」

これは支部に送られてきた派遣要請の情報。ファントムかどうかは、ここにいない二人のうちの片方が判断したそうで、実際に戦ってみれば、当然ながら全く刃が立たなかったという。しかし、今のところ被害は報告されていない。戦闘も一回きりで、しかもその間は姿を見せず、こちらが退けば追撃してくることもなかったらしい。これが支部に送られた要請の大まかな内容だ。その要請は今朝送られたもので、8時間程度でその情報に変化があるとは思えなかったのだが

「いえ、姿が確認できました」

「……また交戦したの？」

少々望ましくない予感に、九能は眉を寄せる。

「一応、交戦はしましたが、二度目も、二人の撤退を見てそのファントムも山に消えていったそうです」

九能の最悪の予感は当たらなかった。姿は確認できたが一人死んだ、などということになっていたら、九能は激昂する自信があった。しかし幸いにもそんなことはなく、ファントムと再度戦ったという行為は褒められるものではないにしろ、姿形の判明は大きな収穫である。

「ならいいわ。それで、そのファントムの姿は？ 人型？」

人型なら区別が付きやすいが、それ以外のものだと、外見だけでは雑魚と区別がつけにくい。雑魚に時間を費やしたくはなかった。故に、詳細な姿がわかっていると、時間の短縮に繋がるし、下手に油断して先手を打たれることもない。雑魚とファントムに区別できないと、常に気を張る必要があり、いずれ集中が切れれば結局は油断に繋がる。

敵の姿を知るとは、迅速な解決に繋がる。

音射は、九能の問いに答えた。

「人型ではなかったそうです。大きな獣のような……。頭部の特徴や全体像からして、イヌ科に近いものだ」と

「イヌ科、ね……」

「はい。それと」

九能は想像を巡らす。イヌ科といえば、その純性魔力がSランクDMFBになる個体が比較的多い動物だ。オオカミ、キツネ、タヌキ、ハイエナ、……。どれも、伝承、伝説、神話の中で特殊な存在として語られることが多い。さて、その内のどれだろうか、と九能は思索し

「その尾は、10本近くあったそうです」

あっさりと、決まった。

第2章 #6 火種が二つ（前書き）

先週に引き続き、非常にお待たせしてしまいました。すみません。

しかも、今回はいつもの半分ほどの文字数です。短いです。すみません。

最近、謝ってばかりな気がします。……すみm)r y

第2章 #6 火種が二つ

九能は一人、脳を思考に埋もれさせていた。

考えているのは、これから向かう吾妻山小支部の付近で現れたフアントムについて、ではない。

支部に残してきた、二人のきょうだいについて。厳密には、その兄について、だった。

似ていた。彼に。

信じられる家族のいなかった九能が、かつて兄と慕った彼に。

男という存在が恐怖の体現でしかなかった九能が、初めて恋心を抱いた彼に。

結局、初めて手に入れた感情の表現方法を知らなかった九能は、親友であり恋敵でもあった橘竜児たちばなりこに敗れ、二人の結婚を祝福する役目となった。だからといって、恋戦に負けただけ（とは本人たちは思っていないかったが）でその相手を恨むほど、九能はその十年余りの人生を順風満帆に生きていたわけではなかった。祝福そのものは心の底からできた。九能の壮絶な過去を知っても、態度を目に見える形で表さなかったのが、彼と竜児、二人だったのだ。彼のことは元より、竜児のことも恋敵として、ともに戦う程度には好意的だった。

家族への愛を知らなかった九能は、10以上年上の彼にまず抱くはずの親愛を、それまで、質は下劣なれど与えられ続けた“その感情”に昇華させた。

叶うことはなかった。

故に、似ている幣原奈都海に、そのかつての感情を重ねてしまった。

二人を同一視してはいけない、と、頭ではわかっている。だが、感情はそうはいかなかった。

60年である。

九能が恋破れてから、60年近く、他の男に靡くことはなかった。その間、抑えつけられた感情は、心の地下で育っていた。いずれ、それを放つ相手を探しながら。

その相手が、奈都海だった。

奈都海は、“彼”に似ていた。外見が、ではなく、魂が。厳密に言えば、純性魔力の特性が、似通っていた。故に、二人の性質、本質そのものが似ているのだ。外見だけ似ているのなら、切り替えは容易だ。仮に、彼と同じ顔をしただけの別人を殺せと言われても、躊躇いもなく殺す自信がある。

しかし、彼 奈都海になると、殺すどころか、ただのA D E O I Aの部下として見ることにすら、困難だった。

現在の人間を過去の人間と同一視してはいけない。九能の場合、それは代替行為にしかならない。人に代わりなどいないし、人は誰かの代わりになどなれない。

九能が奈都海を好きになっってしまうのは、奈都海とかつての想い人、二人に失礼だ。故に九能は、抑えられない感情を無視することで、平静を保つことになった。

しかし、と思う。

自分の抱いている感情は、紛れもない本物。なら、無視したり誤魔化したりする必要はない。正直に、告げてしまえばいい。まさに文字通り、衝動の赴くままに。

誰に止められることでもない。不要な我慢も必要ない。偽りだと思い込んで自らの感情を否定するなど、愚かでしかない。

などと、無理な正当化で逃げ道を作ろうとさえしてしまう。

たとえ、好きだという感情が本物だとしても、それは奈都海ではなく過去の人間に向けられたものだ。九能は奈都海そのものを見ていない。

九能の70年近い人生の中で、恋は一度だけ。

幼少時の牢獄と、短い自由の後の悪夢の影響で、その類の感情を半ば忘れていた。忘れなければ、正気を保てないレベルの環境だった。それを過ぎてからも、ほとんど戦いに傾倒していたために、経験は一度のみで終わった。

故に、と言えるのかもしれない。

九能は、その人生の長さに比して、自分の恋愛感情の扱いが、非常に下手だった。

吾妻山近くの駅へ向かう特急電車の中で、九能は久しく抱くことなかった感情を持て余していた。

九能が吾妻山小支部の食堂でコーヒーを飲みながら寛いでいると、

入口の扉が、鈴の音を控えめに鳴らしながら開いた。

目を向けた九能が見たのは、二人の男性。どちらも、20代前半から半ばくらい。同じく二人ともこれから山に登ろうというようには見えない、軽い服装。これは、二人がここに住んでいることを意味する。

つまり、疵術師だということだ。

二人の男は、九能には一瞬視線をやっただけで、すぐに外した。どうやら客としか思っていないらしい。九能の「巨斧の魔女」という名はよく知られているが、その反面、本名と容姿はほとんど広まっていない。

「あら。おかえりなさい、二人とも」

掃除をしていたのか、箒を持ったままの梓弓音射が、宿部屋のある2階から降りてきた。

「ういつす。ファントムの影響で発生したDMFBは今日もいませんでしたよ」

二人のうち、背の高いほうが音射へ簡潔に結果を報告する。

「ちよっと、夢月……」

そして、メガネをかけた細身のほうは、一般客である（と思いついでいる）九能の前でADEOIAの業務報告をした男を窺めた。二人は思わず様子を窺うように九能を見るが、当の九能はコーヒ―をすすりながら平然としている。

「うはたまむしき鳥羽玉夢月とゆづくよあかつき憂月夜暁ね？ お二人とは始めまして、ね」

九能のその言葉を聞いて、二人は察した。

「……関係者ですか」

「音射さん、こちらの方は？」

どうにも歓迎している風ではない二人に、音射はなぜか微笑んでいた。

「支部から来ていただいた、西園寺九能准将よ」

「准将……!?!」

「マジですか……。こんな若いのに？」

二人が驚いているのは、どうやら外見と階級のギャップについてらしい。この小支部は他の支部や小支部とはほとんど接点がなかったために、「巨斧の魔女」の本名を知らなくても不思議はない。九能が日本に来たのもたった一年半前であるために、尚更である。

とはいえ、彼らにとって上官であることに変わりはない。二人は居住まいを正した。

「吾妻山小支部所属、烏羽玉夢月。少尉です」

「同じく憂月夜暁少尉です」

名前を知っている九能に、形だけの自己紹介を行う。ちなみに、二人のこの名前はどちらも偽名である。本名は不明で、幼少期の二人を拾ったある疵術師がつけた名前だ。

二人に応えて、九能も立ち上がり名乗った。

「中国支部の西園寺九能准将。早速、ファントムをぶっ潰しに行きたいんだけど、居場所、わかる？」

そして、九能はさっさと仕事を終えるために、ついでになんとも物騒な言い回しでもって付け加えた。その好戦的な態度に、二人は若干驚いたように目を瞠ったが、すぐに平静に戻った。ファントムと戦うために派遣される疵術師なら、これだけ戦闘に対して肯定的でも問題ない。

音射は箒をしまいながら二人に言った。

「夢月さんと暁くんは准将の案内をしてちょうだい。ファントムとの遭遇場所は、ほとんど同じだったわね？」

「はい。一度目も二度目も、場所は憶えていますから」

「了解つす。音射さんも気をつけて。ここに来ないとも限らないんで」

三人の、ADEOIAではよくある何気ない会話を見て、九能はなぜこんな辺境の小支部に三人の有能な疵術師がいるのか、なんとなくわかってしまった。

自分の“それ”には疎い九能も、他人に関しては非常に聴かっただのである。

中国支部。

特殊遊隊と幣原きょうだいがいるのは教術室。

中国支部の入った高層ビルは、一階から八階までが企業としてのアディア、それ以上の階と地下にADEOIAの施設が集中している。ADEOIAのほうへ行くための手段は、微量の魔力を必要とするエレベーターだけとなっているため、一般人が迷い込むことはない。

そのため、ADEOIAにさえいけば、思う存分魔術談義をしていられるのである。

彼らがいるのも、その一角にある教術室。

教術とは、いわゆる魔術の教育のことで、魔術団の一つの機構、“*Magical training section*”の和訳である。教術課から来ている。魔術団と疵術師では学ぶべきことに違いがあるのだが、どちらにしても知識と実践、もう一つ発展すれば実践は必須事項と言える。それらを新米の魔術師に教えるのが、教術課の仕事で、教えることそのものを教術と呼ぶ。

ADEOIAに入ったばかりの幣原奈都海、唯利亞きょうだいま、今まさに教術を受けているところだった。

……………と、言っても。

「う、わっ!？」

「ほらー、防ぐんじゃなくて避けなきゃ。魔力の干渉力で防ぐだけなら、誰でもできるんだからさ、まずは銃弾くらい避けられるようになんなきゃ」

悲鳴を上げた唯利亞に、常人には無茶苦茶な注文をするのは、二挺の拳銃をその手に持つ浄美未来小。

教術室だからといって、机の並んだ学校の教室のような光景はA

DEIOAに限っては見られない。魔術師だけが通う魔術団の経営する魔術学校ではそれが中心だが、疵術師の実力の中で知識の比重はさほど大きくない。知識がなくても、疵術師は生来使える魔術だけである程度戦えるからだ。逆に、魔術師は自分に合った詠唱の考案、短縮に細かい知識が必要で、知識の習得は必須事項である。ここにいる彼らには関係のない話ではあるが。

「そんな……。銃を避けるなんて……」

「疵術師の動体視力ならできるよっ！」

気合たっぷりな激励する未来子に、唯利亞は冷めた目を向ける。

「……それも個人差ありますよね？」

「うん、あるね」

いけしゃあしゃあと云つてのけるその態度に、唯利亞は深い溜息をもらした。

未来小による唯利亞への訓練は、かれこれ3時間は続いている。それでも二人に疲労が見られないのは、疵術師たる所以か。体内の魔力が多いと、身体的な疲労はかなり抑えられる。

しかし、唯利亞は未来小の放つ銃弾を簡単な魔術で防ぐということは何度も繰り返している。ただ銃を撃っているだけの未来小とは違って、唯利亞はそろそろ疲労が見えてくるころだった。

「まあ、これでいいかな。避けられない攻撃を判断して防御するっていうのも、一つの技術だもんね」

「じゃあ、もう……」

「ってことで、今度は攻撃のほう、いつてみよっか」

身体ではなく精神的な面で休憩を取りたかった唯利亜は、続いた未来小の言葉に脱力した。3時間も銃弾に晒され続けていれば、精神もすり減るといふものである。

そんな唯利亜に、未来小は労いも込めて助言する。

「頑張れる時に頑張るとかないと、いざって時に痛い目見るよ？」

「痛い目見るだけならマシだろ。死ぬぞ」

唯利亜を叱咤する未来小の横から厳しい口調で言ったのは、奈都海の訓練を行う浅木久宮。

久宮は炎や氷塊を投げつけ、それを避けたり防いだりする奈都海を、ただ淡々と見ている。それを受ける奈都海はすでに息が上がっていた。身体中に小さくはあるが火傷や切り傷が見られる。火傷はともかく、切り傷があると魔力の消費は多くなる。魔力の多くは血管の中を廻っているからだ。

「久宮、ちょっとやりすぎじゃない？」

「そうかもな」

未来小は肩で息をする奈都海を見て、気分悪げに目を細める。

しかし、久宮は未来小の非難にすら頷くだけで、構うことなく奈都海に氷塊を投げつけた。

奈都海は避けられず、床に伏す。

『……………』

「痛えか。だつたら避けやがれ」

氷塊の直撃した右腕を押さえる奈都海に、冷徹に言い放つ。

さらに加えて、久宮は自身の拳に炎を纏わせた。それで何をすつもりなのかと、奈都海が眼前で、唯利亜が離れて見ている中、

ドンッ！！

と、未来小の拳銃が号砲を響かせた。

未来小の銃は久宮に、久宮の拳は未来小に向けられている。何が起こったかは、二人の動きが見えなかった奈都海と唯利亜にもわかつた。

「どういっつもりだ。てめえ」

「そういうの見てると気分が悪いの。弱い者いじめみたいで」

どちらも、向ける“得物”を下ろす気配はない。

「訓練なんだから両者に実力の差があるのはしょうがねえだろうがこいつらだつて戦うつってんだ。多少の怪我は元より、死ぬことも覚悟の上だろ」

「だから久宮が奈都海くんを痛めつけていいってことにはならないと思うんだけど。二人はまだA D E O I Aに入って二日だよ？ そこまでのスパルタは必要ないよ」

「スパルタだあ？ 実戦に出たら、こんな程度じゃ済まねえんだぞ？ 痛みも知らずに戦場に出られるかってんだよ」

「訓練の痛みと戦場の痛みは全くの別物だと思うよ。私は」

「そうかよ」

「うん。だからやめて。久宮はさ、奈都海くんに厳しくしてる自分に酔ってるだけなんじゃないの？」

「あ、あ？」

収束しかけた言葉の応酬が、未来小の余計な一言によって再燃した。

自分では気付いていないようだが、どうやら未来小も頭に血が上ってしまっているらしい。

「『新人に厳しくしてる俺カッケー』ってさ。そういうのみっともないよ？」

「っ、てめえ……！」

今まさに掴みかからんとする久宮を止めたのは、軽快な電子音だった。

その音源は二つ。久宮の懐と、未来小のポケットからだ。

久宮は舌打ちとともに、未来小は無理につくった（とわかる）涼しい顔で、それぞれその音源である業務用の携帯を取り出した。

「ちっ……出やがったかよ……」

ある山奥の一つの民家の扉が叩かれる。

出てきたのは、人好きのしそうな笑顔を湛えた男性。彼は、ここ最近になって唯一となったよく来る来客（前までは、来客そのものがなかった）を見て、笑みの親密度を上げた。

「ようこそ。どうぞ上がってください」

訪れた男はそれに応えて、少し遠慮がちに靴を脱ぎ始めた。

廊下に上がり、直進して襖で隔たれた居間へ入る。日本家屋然とした外見通り、広い居間には畳が敷き詰められ、他の家具も併せて、内装は完全な純和風だった。

しかし、来客はその居間の家具にも秀囲気にも、意識も目もくれない。彼の目は

「見て見て、お母さんっ。きれいなお花！」

「」

満面の笑みで椿の花を持つ少女と、それを慈愛に満ちた微笑みと無言でもって眺める女性。それに、向けられていた。

少女の年齢は10前後。髪と瞳は黒く、浴衣の上に子ども用の袴纏を羽織っている。おかつぱの髪型も含めて、時代錯誤的なファッションである。

その少女に「お母さん」と呼ばれた女性。女性も少女と同じく和装ではあるものの、その髪は少女のものとは違って、輝くような金髪。染めたもののような作りもの感もなく明らかな地毛であるはず

のなのに、顔は整った日本人女性のもの。その容姿には大きな矛盾があった。

なにより、彼女の姿を異質にしているのが、微笑んだ際に口元から覗く、短くも鋭い、“犬歯”だった。

「やっぱり……彼女を殺らせるわけにはいかない……」

少女と女性、二人の親子のような仲睦まじい光景をみて、疵術師である憂月夜暁は、改めて決意を口にした。

第2章 #7 一つ目 - 九尾という名の火種 -

特別なものは何もない、単なる山道。あるのは、草と木とそれに生える葉とたまに目に入る生えたばかりの山菜。この程度なら、吾妻山でなくても見られる。

しかし、その山道を歩く九能は、ただ漫然と歩いているわけではなかった。目的を持ち、その目的を達成するためにはどこへ向かえばいいかも、感覚的にわかっていた。

D M F Bの気配はない。そもそも、D M F Bの気配など疵術師にはわからない。探索術を使えばどうにかなるだろうが、九能は探索魔術を一つも知らない。が、ファントムという強大な存在を嗅ぎわけける“嗅覚”は、同じく化け物じみた強さを持つ九能にも備わっていた。

強さは、強さを求める。九能は強者に備わる本能に従って、ファントムという無類の強さを求めていた。

吾妻山中腹にひっそりと、隠れるように建てられた小さな平屋の民家。

その居間には、3人の人間がいた。

一人はこの家の主である尾前冬馬^{おのねふゆま}。さらに、その娘である尾前美冬^{おのねみふゆ}。そして先日この親子と知り合った疵術師の憂月夜暁^{うれづきよあかつき}。この3人

である。

しかし。

この3人以外に、ヒトの形をしたモノがいた。

輝く長い金髪とそれと矛盾する和の美貌。大人びた印象とは対照的な、ぎこちない手つきで湯呑を口に運ぶ子どものような動作も、美しさとは異なる愛らしさを助長している。しかし、熱いお茶に驚いて舌を突き出すその行動も、口から覗く犬歯も、人間のものとは思えない。

……なんにしろ、この場には異質な存在である。

美冬は、母親と慕っているが、暁と冬馬は彼女（？）が人間ではないことを知っている。暁が冬馬に教えたのだ。

暁もA D E O I Aに所属する疵術師である。任務を忘れてのほほんと過ごしているわけではない。初遭遇の際には、当然ながら戦った。

しかし、単独行動の際の二度目の邂逅で戦った時、逃げ帰る彼女を追ってこの家に辿りついた。このことは未だに報告しておらず、誰にも知らせていない。

何より、このファントムを慕う美冬の姿を見てしまうと、どうしても討伐するという行為に躊躇いを覚えてしまう。

もちろん、暁も疵術師である以上、ファントムを放っておくわけにはいかない。こうして毎日、ファントムの様子を見に来ることにしていた。常ならファントムの出没する地帯で単独行動をするなど愚の骨頂であり誰も許さないことだが、暁自身の実力とファントムは好戦的ではないという事実を他の二人も知っていることが幸いした。単独で探索すると言っても、不自然には思われないのだ。

だが、今回ばかりは少し事情が違う。会って早々、好戦的な面を見せる疵術師が、しかも准将という階級を与えられるほどの実力者が派遣されてきたのだ。彼女にここが見つかれば、いかにファントムといえども、無事では済まないだろう。下手をすれば、関係のな

い（こともないが）この親子すら巻き込まれる危険性がある。
今回は、それを伝えに来たのだ。

「やっぱり、今日も変化はなし、ですか」

「ええ。今まで10年近く、何もなかったので、これからもそうだと信じたいのですが……」

冬馬にとって、娘の美冬が母親と慕う彼女は、今や妻のような存在となっている。暁がここに来るまで、彼女のことは人間としか思っていなかったのだ。喋ることはできないが、文字を解することはでき、コミュニケーションに困ることはなかったという。

しかし、やはり事実を知ってしまうと、以前のように接することはできるはずもなく。

「彼女はやはり……、人間ではないのですね」

「……人を喰らい、僕たち疵術師と戦う異形の怪物　DMFB。
その最上位種であるファントムです」

「はい、人とは違う何かがあるとは感じていましたが……、人ではないとは思ってもみませんでした」

冬馬も、真実を知ってからには自分の娘と遊ぶファントムから目を離せなくなってしまった。魅了されてという意味ではなく、危険性を知ってしまったからという意味で。

ただ、このファントムも含めた家族は、真実を告げられるまでは何の問題もなく過ごしていたということ、暁は知っている。その平穩を壊してしまったような気がして、暁はこの時点で罪悪感を抱いていた。夢月や音射に黙っているということも罪悪感の原因だっ

た。

が、とりあえずそれは置いておいて、ここに来た本来の目的を達するために暁は改めて居住まいを正した。

「……冬馬さん」

「はい、なんでしょう」

暁から伝わる雰囲気を感じたのか、冬馬の声も少し震えていた。ように、暁は感じた。

「ファントムを　彼女を討つために、今日、強力な疵術師が派遣されてきました。僕よりも多分、段違いに強く、さらに好戦的です」

「……」

「もしかしたら、彼女もおされ　いえ、殺されるかもしれませ
ん」

「……そう、ですか」

冬馬も、おそらくは複雑だろう。

ファントムが危険な存在であるということは、暁の言葉を信じているのなら認識している。だが同時に、冬馬にとってこのファントムは、娘である美冬の母親代わり。本当の母親は美冬を産んで間もなく死んだため、美冬はファントムが本当の母親だとほとんど信じている。

冬馬の視線は、自然と、戯れる美冬とファントムの二人に向けられる。

美冬に抱きつかれて、言葉を発することはないがファントムは優

しく微笑みかける。美冬もそれを見て無邪気な笑みで応える。

その光景は、どう見ても親子のそれだ。この光景を10年も見てきた冬馬は当然、そしてつい最近知った暁も、美冬のを顔を壊すことはしたくないし、させたくないかった。

故に、暁の意志は既に決まっていた。

「俺が、止めます」

「……」

突然の暁の宣言に、冬馬は視線を戻す。何のことを言っているのかは、冬馬にもわかっていた。

「ここもすぐに見つかると思います。そうすれば、ファントムを討つために“あの人”は戦うでしょう」

「はい」

「ですが、仲間である僕がいれば、話ぐらいはできるかもしれません。一般人であるあなた方もいますし、上手くすれば説得できる可能性もあります」

「はい……、助かります。やはり彼女が “なりこ” がなんでもつても、失うのは、美冬にとっても、わたしにとっても考えたくないことですから」

“なりこ” という名を与えられたファントムは、本来相容れない存在であるはずの人の子をその腕に抱き、嫌うはずの平穏を享受していた。

突然、ぴくりと、ファントムが顔を上げ、耳をぴんと立てた。

目は見開かれ、宙を舞う埃すら見逃すまいと首を廻らす。耳はあらゆる方向に向けられ、蟻の足音まで聞き逃すことのないよう神経を集中する。鼻は絶え間なく大気を吸いこみ、気流の違いすら情報源に昇華する能力を最大限に発揮する。

結果。

壁を突き破って突っ込んできた上に振り抜かれた巨大重厚の斧を、間一髪で防ぐことに成功した。

斧は、ファントムの手の平に一寸ほどの隙間を空けて、停止していた。

斧の主はそれを見た瞬間に飛び退き、ファントムと距離を取った。

「さすがはDMFB最強種、ファントム。奇襲のつもりだったのに、事前に察知されていたのね」

重い音を立てて地面に斧を突き立てた「巨斧の魔女」西園寺九能は、悪戯で驚かせようとして失敗したかのような軽い調子で、おどけて見せた。

最も来てほしくなかった相手を前にして、暁は思わず叫んでいた。

「っ、西園寺准将……！」

「あら、あなたもいたのね。ちょうどいいわ、援護しなさい、憂月夜少尉」

暁がここにいる意味を考へることもせず、ただ事務的に九能は告げる。暁はその九能の機械的な態度に一瞬、怯んだが、怯えて言葉をなくす美冬が視界に入り、自らの使命を思い出した。

「じ、准将、あの……！」

「なに？ ファントムは目の前よ。無駄話なんかしている暇はないわ」

「話が」

「援護、頼むわよ」

暁の言葉を遮って九能はそれだけを言って、地面を蹴る。瞬きの間に九能はファントムに肉薄し、

「っふ！」

短く息を吐いて、斧ではなく足をファントムの側頭部目がけて叩きつけた。ファントムは反応できず、九能の蹴りをもろに喰らって横に吹っ飛んだ。

地面に叩き付けられ、なおも止まらないファントムに九能はその俊足で追いつき、今度は斧でその重量に任せて地面に縫い付ける。

「ッ」

血とありつたけの息を吐かされ、ファントムは力を失ってぐったりと地面に伏した。

わずか数秒。たった二撃。このあっけなさに、九能は不満げに眉を顰めた。

「なに、これ？ フォントムなのにこの程度なの？ 拍子抜けだわ」

それだけ言っつて、九能は手に持つ巨斧を振り上げる。狙うは頭部。フォントムであつても、頭部を失えば死ぬしかない。このまま振り下ろせば、フォントム討伐の任は終了である。

暁の見解は甘かつた。説得できるなどという考えは、すでになかつた。

話すらできない。フォントムを目の前にして、この西園寺九能という化け物は、ただ淡々と任務をこなすだけだつた。そんな相手に、制止など効くはずもない。

自分が止めに入れば、確実に殺される。目の前の疵術師は、そういうことのできる種類の人間だと、そんなことは暁にもわかつた。

九能は無言で、斧を持つ腕を下ろそうとした。
が

「やめ、て……やめてえ！」

人にあり得ない力を振るう人の形をしたものに恐れをなした冬馬ではなく、想像を超える臂力でフォントムを圧倒する九能に絶句する暁でもなく、それまでただ怯えて震えていた美冬が、九能の手を制止させた。

九能の温度のない冷めた視線が美冬に向けられる。

暁は戦慄した。さつきまで可能性が自分にしかなかつた、「止めたら殺される」という恐怖が、美冬にシフトされた。

だが、暁も戦闘経験豊富の実力派疵術師。恐怖は、瞬時に危惧へと変わり、やがて危険の排除という段階に至る。

しかし、その手段がない。実行ができない。実力で押さえつけるのは不可能だ。戦闘能力ではおそらく勝ち目はない。説得も意味はない。つい先ほど諦めたばかりだ。任務の解消も無理だ。派遣され

てきた、とはいえ、相手は准将。少尉風情にそこまでの力はない。
と、暁が手を拱こまねいている数秒の間に、

「……ADEOIA、第一規律第13条2項」

九能の口が、不穏な単語を紡ぐ。

それが続けられる直前に、暁はその内容を看破し、

「『任務における特殊状況下での対応について』」

自らの得意とする、“隠すこと”のできる魔術を発動しようとして、

「『任務を妨害し、その達成を著しく困難とした者は、任務執行者の判断において、排除する権利を有する』……！！」

その魔術は、間に合わなかった。

九能の斧は、地面を抉り、小さなクレーターを作った。

九能の斧は、美冬の立っていた所の地面“だけ”を抉った。

美冬は、ファントムによって助け出されていた。九能から30mの距離をおいて立つファントムに抱きかかえられ、何が起こったのかわからないというように、目をぱちくりさせていた。

「お母、さん……？」

物心ついたところから傍にいたファントムを、美冬はそう呼ぶ。自分を産んだ、本当の母親に向ける親愛と尊敬と憧れ。ファントムは果たして、自分はそれを向けられるに足る存在なのか、それを許される存在なのか、考えたことはあるのだろうか。

ファントムは、何かを諦めたかのような寂しい笑顔で美冬を見て、

次に冬馬を指差した。

自分から離れて父親の傍へ行っている、という意図を正しく読んだ美冬は、しかし、首を横に振って拒否を示した。

「やだ！ お母さんと離れたくない！ いっしょにいるの！」

言葉でも全力の拒否をする美冬を、ファントムは地面に下ろし、優しく頭を撫でた。

「お母、さ……」

それだけで美冬は意識を失う。その美冬が倒れる寸前でファントムは受け止め、離れた木の根を枕にして寝かせた。

そして

九能と対峙する、ファントム。

その姿の周囲を、渦巻く風が包む。やがてそれに、可視化された魔力が混じり、ファントムの姿は完全に隠れた。

風は大きく膨れ上がり、離れた九能の髪と服の裾を巻き上げ、乱れさせる。九能はそれに一切頓着せず、ただ、目の前の光景を無表情に見据えるだけ。

ただ、その眼光だけは、待ち望んだ強者との戦いを目前にした狂喜に彩られていた。

視界を阻む風が晴れてくると、徐々にその巨大な影が姿を現した。

金色の毛並み。去った風の余韻によって小さく波を作る。

巨大な体躯。肩までの高さ、つまり体高は、おそらく3m以上。

イヌ科の中でも面長の頭部。優しげな瞳と鋭い犬歯がその中に収まっている。

複数の尾。先端近くの毛が白く変色しているそれは、合計で9本。つまり、最高位の妖狐である、九尾の狐だった。

「これ、は……」

この姿に驚いているのは、冬馬だけ。

暁は既に三度、交戦経験があり、九能は驚く以前にこうなることを望んでいたのだから、驚く理由がなかった。

だが、次の瞬間に、その二人も驚く理由を与えられることになる。

『お主が巨斧を振るうという、かの“魔女”か。……確かに、強い』

空気ではなく大気中の術性元素まりよくを震わせた“コエ”が、その場にいた九能、暁、冬馬の3人の頭に響いた。

「あら、喋れるんじゃない。しかも綺麗な声」

『ふふ……それは恐悦の極みだ。我がコエを発するのも久々故、どうにも勝手が利かぬが、な』

声を失くす冬馬や暁とは違って、九能は驚きながらも、目の前の大狐に普段の如く話す。大狐もまた、世間話と同じトーンで九能に応じる。

「で、私のことを知っている理由は聞いてもいいのかしら？」

『簡単なことよ。ここは出雲に近いであろう？ 同胞より話を聞く機会が多いのだ』

「ふーん？ DMFBは神様でもなんでもないので、変な話ね？」

戦いの前に無駄話をするのは九能の癖である。

会話は重要な情報源となる。話し方からは性格を類推でき、そこから敵の戦い方がわかることもある。言葉のトーンからは敵のコンディションがわかる。魔術師同士の戦いなら、高名な魔術師なら名乗るだけで相手を萎縮させることもできる。

と、普通はなるのだが、相手はファントムで、名だけで怯むはずもない。さらに、九能には会話だけで相手の状態を察することができるほどの洞察力はなかったりする。今までDMFBの相手をする事が多く、そうでなくても基本的には力で捻じ伏せることができるために、その類を鍛える必要に迫られることがなかったのだ。故に、この無駄話に、無駄以上の意味はない。

戦闘態勢は、すぐに固まった。

『魔女よ、お主の戦う理由はなんだ』

「あ？」

『妾には、ある』

大狐は首を傾けて、視線を冬馬へ向ける。

『800年ぶりに人を好きになった。800年ぶりに人を守りたいと思えた。ただそれだけだが……、お主はどうだ？ 妾が知らねばならぬほどに名を高めたお主は、何をもって命を懸ける？』

「……………」

しばし沈黙。口を開けた九能は、

「え、なに？ 理由がなきゃ戦っちゃいけないの？」

心底からの疑問を、収めていた斧とともに出した。

大狐の目は、再び九能へ。静かに燃える闘志と、守る者を背負った強さをその目に宿す。

『そうか……。では、お主は妾には勝てぬ、な』

「あらそう。それは残念だわ」

『ああそうとも。何も背負わぬ貴様に、勝てる道理などないのだから！』

大狐はその顎を広げて、九能に迫った。

しかし、九能は余裕綽々にそれを避け、大狐の顎は地面を抉り、前足で勢いを殺す。

頭部を狙った九能の斧をバックステップでかわし、距離を取る。

さらに、九本の尾の先端を九能に向けてそこから矢を模った光を発射した。

九能はそれらを、頭部や脚、右腕に当たるものだけを避け、それ以外は無視して突き進む。光の矢は九能の脇腹や左腕を貫いていくが、九能の勢いは衰えない。

これが九能の、特異にして得意な戦法。驚異的な再生能力に任せて、負傷も顧みずただ攻撃だけに傾倒した戦い方。戦法とも言えないレベルの戦い方だが、九能にはそれを有効な戦法にできる特性と力がある。

攻撃を受けてなお止まろうとしない九能に、さしものファントムである大狐も驚いた。

『なるほど……故に“魔女”か……!』

九能は答えず、斧で最後の一発を防ぎつつ、傷の治った左の拳で大狐の鼻っ柱を殴り飛ばした。

拳の直撃した際の衝撃は、大狐であっても4本の足で踏ん張るだけで精いっぱいだった。

大狐の評価とは裏腹に、九能の戦い方は魔女というにはあまりにも肉体に頼り過ぎている。むしろ、九能の攻撃において魔術の占める割合は非常に小さい。

『ぐ、うつ……お主、本当に魔術師か?』

「あなた、言ってること面白いわね。ついさっき私のこと、魔女だつて言ってたくせに」

お互いに油断なく身構えるも、大狐は表情だけをわかりにくく呆れに歪めた。

『ここまでの肉体派だとは思わんだろうが。まったく、ここまで恐ろしい人間がいるとは終ぞ思わなんだぞ?』

「それはまたこれ以上ない褒め言葉だね。嬉しい……」

会話の途中で不意打ち気味に、九能は瞬間で接近し、大狐の顎を蹴り上げた。

『がつ!?!』

大狐は避けられない。九能は飛び上がって、軽く浮いた大狐の横面に斧の刃の腹による一撃を喰らわせた。

今度は苦悶の声もなく、横倒しに崩れ落ちた。

「本当に戦い慣れしていないのね、九尾の狐って。この程度の不意打ちに反応できないファントムは始めてだわ」

『……………ぐ、……………う』

大狐はついさっきまでの軽口どころか、たった一撃で言葉を発することすらできなくなっていた。

追い詰められた。

起き上がろうとするが、脚に力が入らない。

ここに至って、ようやく大狐は彼我の実力の圧倒的な差に気付いた。

今までファントムゆえの力によって、負け知らずだった彼女は、その戦いに緊張感がなかった。というより、緊張感を持つことが、その性質上、できなかった。自分に明らかに勝る敵が現れたことがなかったため、必要がなかった。

それだけではない。実力ではない、場数が足りなかった。

戦うという行為に慣れるだけの数を、こなしてこなかった。

だからといって、負けるわけにも諦めるわけにもいかなかった。

後ろにはあの娘がいる。あの人も見守ってくれている。初めて一緒にいたいと思えた。ここで死ぬわけにはいかない。

あの娘は自分の生きがいだ。あの娘が死ぬまでは少なくとも、自分も生き永らえていたいと、初めて本気で生きたいと、思った。無邪気なあの娘が、これから先、様々なことを知って、いずれここを離れていっても、自分だけは密かにでも彼女を見守っていきたいと

願えた。

化け物だと知っても、それを隠していたと知らされても、彼は嫌悪も忌避も排斥も、しなかった。全くと言つと嘘になるが、それでも可能な限りは変わらずに接してくれた。

そんな二人と別れるなど、考えただけで耐えられない。ゆえに彼女は、諦めない。

『も、はや……是非もなし、か』

「……………」

止めを刺そうとしていた九能は、尚も立ち上がる大狐に足を止める。

『負けるわけにはいかんだ、妾は……………』

諦念に濁りかけていたその瞳に、再び強い光が宿る。逆立つ毛が、金色の光を放つ。

放出された余剰魔力が、輝きとともに舞う。それは、DMFBの、いわゆる“本気”だった。

『たとえお主が神に等しくとも……………貴様が、神そのものであったとしても、だ!』

大きく開けた口から、劫火の如き息吹が吐き出された。それは、周囲の草木を燃やすことはなく、標的である九能のみを燃やしつくさんとして、迫る。

が、九能は、

「……………」

巨斧を振るって、その炎を二股に、自分は一步も動かずにやり過ぎた。熱気が顔を撫でるが、九能は右腕を動かす以外には微動だにせず、ただ大狐のいるはずの方向を瞬きもせずに見据える。

しかし、炎が消えると、そこに金色の姿はなかった。

背後から、大狐の顎が九能を襲った。九能は抵抗も回避もできずにその顎に挟まれ、牙は身体に食い込む。

身体の半分以上が隠れるほどの大きさの口に銜えられ、九能は身動きが取れない。大狐は自身の顎で九能を束縛したまま首ごと振り回し、最後に投げ飛ばした。

「かつ……!!」

九能は10mほど飛ばされ、容赦なく地面に叩きつけられた。衝撃で息が詰まり、無意識に喉を掻く。

大狐の攻撃はそれだけでは止まらない。

自身の周囲にボーリングボール大の球体を10ほども出現させ、しばし漂わせる。地面に衝突した衝撃でしばらく動けなかった九能が立ち上がる影を見た瞬間、

ドドドドドドドドドツ!!

と、その球体は九能へ向かって突撃し、直撃寸前に盛大な爆音とともに爆発した。

土煙が舞う。周囲の木々は吹き飛び、局地的な荒野と化していた。九能の姿は見えない。だが、大狐にはわかっていた。

九能は、まだ死んでいない。

驚異的な再生能力は、この目で見ている。が、死んではいなくても、これだけの攻撃を積み掛けて、無傷でいてほしくはなかった。せめて痛手は、小さくないダメージは、と、祈る。

だが、しかし。

「 気丈ね」

『 ……っ』

戦場で抱いてはいけけないはずの希望は、脆くも打ち砕かれた。

九能の、平静にすぎる言葉が、大狐に舌打ちをさせる。

九能は、余裕の表れともとれる柔らかい笑みを、未だに浮かべている。

「その姿はとても美しいわ。愛する者とともに在るためだからこそ、あなたは全力を出せるのね。私にはできないことだわ」

『 よくも、まあ……貴様は……』

大狐は恐怖ゆえの独白を、無意識に口にする。

この恐怖は、先の攻撃が大狐の持ちうる最強の手札であるという証だった。それが効かないということは即ち、大狐には勝ち目がなということ。

九能の勝利は決まった。だが、大狐の敗北が決まったわけではない。

負けないだけなら、勝つだけがその手段ではない。

大狐は、九能が反撃を始める前に、“負けないため”の行動を起こした。

九能が見据える中で、暁が介入するか悩む中で、冬馬が見守る中で、大狐は再び風を身に纏う。

九能は警戒するが、風が去った後に残ったのは、再度、人の形を取ったファントムの姿だった。

意図が読めない。冬馬や暁にはもちろん、九能にも。

負けを認めた、というわけではないということはある。あれだけ生きること执着していたのに、勝てないというだけであつさりとその生命を捨てるはずがないのだから。ならば、なぜか……？

問いかける前に、ファントムはその答えとして、膝き、腕を垂らし、頭を垂れた。

「……何のつもりかしら？」

半ば以上わかっかけていて訊いた九能に、ファントムは短く、

『わからぬか……、命乞いだ』

言つて、黙る。九能は、再び違うことを問うた。

「負けた、と認めたわけじゃないわよね？」

『そうだな。……妾にとつての負けとは、即ち“死”だ。だが、ここで命を断たれるわけにはいかぬ』

「ふーん？　ここまでやって見逃せつてこと？」

『図々しいことを言っているのは、承知の上。それでも妾は、お主に乞いたい。　助けてくれ』

「……」

すべての誇りも矜持もかなぐり捨てて、敵に頭を下げるファントム。その姿に、九能は小さく息を吐く。

冬馬と暁は、何も言えなかった。自分たちのためにそこまで、と

は、それが筋違いであるとわかっているがために言えず、それ以外の止める理由が見つからなかった。

だから二人は、九能が手を引くことを祈るしかなかった。自覚せず密やかな祈りを受ける九能は、

「……少し、語らせてもらってもいい？」

祈りに応えるように得物を下ろして、呟くようにそう訊ねた。ファントムは何も言わない。沈黙を是として、九能は続ける。

「私は……好きな人を、ファントムに殺されたわ」

『……！』

ファントムは顔を上げる。冬馬も何か思うところがあるのか気配を変えるが、それを察した暁だけは変わりがない。疵術師であれば、よくある話だったからだ。何を言いたいのかもわかっていた。

「私が初めて好きになったその人は、結局、私ではない女と結ばれて、子どもも残した。それでも私は好きだった」

九能は単純に“好き”と言うが、九能とそれ以外の人間には、その感覚に少々の違いがある。

魔術の世界に入るまでにいた場所が、虚飾の好意と愛情を与え、下劣なそれを受け続けるという環境にあったため、正常な恋愛感情に接する機会が少なかったのが原因だ。

しかし、この場にあつては、それを指摘できる者もない。

「だから私は、DMFBを憎んだ」

故に、九能のその憎悪の深さをはかることのできる者も、いない。

「彼を殺したファントムは、彼と相討ちだったから復讐することもできなかった。私は、それ以外のDMFBを殺して、復讐の代わりにするしかなかった」

その頃の九能を知る者はほとんどいない。50年以上も前のことだ。

「憎くて仕方なかった。憎しみだけで戦っていた。気付いたら強くなっていた。強くなりすぎて、禁断子にもされた。それすら、DMFBへの憎しみの糧にした」

声や表情に悲痛さはなく、ただ事実を語るだけの淡々としたものだった。

憎悪ゆえにただただ戦い続け、気付けば、味方だったはずのFASCAに囲まれていた。捕らえられ、監獄に囚われ、さらにそこで憎しみを深く募らせた。かつての自分すら、忘れて。

思い出したのは、憎んでいたはずの、あるファントムと出会ったからだった。

「今、私の所属する支部には、ファントムがいるわ」

「!?!」

先ほどまでとは一転して、その言葉の意味を理解して驚いたのは、暁だけだった。

支部と言えば、ADEOIAの支部。ADEOIAは、DMFBを駆逐することをその任務の軸としている。その支部にファントムがいるというその話が事実であれば、それが異常でなくてなんだ

というのか。

しかし九能は、平然としている。

「安心しなさいな。人と暮らす覚悟のあるファントムをわざわざ殺そうなんて、私はしないわ」

平然と、今までの自分の行動を完全無欠に端から端まで一切合切否定した。

冬馬も暁も口を開けて呆けてしまい、ファントムに至っては固まっ
つてしまっていた。

九能は3人の顔を楽しむように眺めていたが、やがて斧をしまい、
戦いで乱れた服を簡単に整えてから、踵を返し かけて、

『 待ってくれ 』

ファントムの制止に、足を止めた。

「なに？ 気が変わった？」

『 いや、そうではない 』

九能の冗談も、律儀に否定する。

「ならなに？ なぜ、なんて訊かないでね。答えるの、面倒だし」

『 違う。それも訊きたくはあるが、それよりもまず、訊きたいこと
がある 』

「どうぞ」

九能は促し、フロントムは少し躊躇いを見せてから、

『お主には、守りたいものがあるのか、ということを書きたい』

「……、訊いてどうするの？」

『別にどうも。ただの好奇心だ』

訊いて、訊かれて言外に答えなくてもいいと答える。
しかし九能は、なんとなく答えたくなかった。

「いるわ。……一人だけ」

一人、と言うまでに間隔が空いたのは、既に守ると決めていた少女以外に、一人だけ少年が思い浮かんだからだった。だが、ここで彼を含めてしまうと、後戻りできなくなる気がした。その後巡が、九能に“二人”と言うのを躊躇わせた。

「訊きたいのはそれだけ？ なら帰るわよ。……憂月夜少尉」

「……はい」

これ以上は何も言いたくないという意味表示も含めて、九能は暁を呼ぶ。

呼ばれた暁は、素直に応じて、冬馬に軽い会釈をしてから九能に従った。九能がフロントムを見逃すというのなら、暁に逆らう意思はない。

ただ、疑問はある。なぜ唐突に、彼女を見逃す気になったのか、ということ。心境の変化か、その変化の原因はなんなのか。最初から見逃す気だったのなら、それまで本気（に暁には見えた）で戦う

というその行為の意味がわからない。

しかし、ファントムに訊くなど言っていたから、どうにも訊きづらい。メガネを通して横顔を見ても、その表情から内心は読み取れない。

代わりに後ろを振り向くと、美冬を抱き起こす“なりこ”と、それに歩み寄る冬馬が見えた。

望んだ光景だったはずなのに、そこに自分がないということに、暁はなぜか不満を感じた。

小支部に帰ると、夢月と音射が待っていた。

二人はまず、服をボロボロにした九能を見て目を見開き、そう言った経緯を推測、一つの可能性に思い至って絶句した。

「准将、まさか……！」

「ファントムと、交戦を……？」

夢月は若干ならず慌てて、音射はあくまで冷静に、それぞれ自らの推測を口にした。

九能はそれを頷くだけで肯定し、

「梓弓上級大尉、代わりの服、借りられるかしら？　このままじゃ帰れもしないわ」

服の裾をつまんで、言う。

「え、はい。奥に部屋がありますので」

「そう、ありがとう」

音射が言いきる前に九能は短く礼を言って、示された部屋へ入っていった。

残されたのは、3人。

自然、音射と夢月の視線は暁に向けられる。求められているのは、当然ながら何があったのか、というただその一つに限られる。

どう説明しよう、どこから話そうか、と、求められた暁は考え

「夢月、音射さん」

まずは黙っていたことを謝るうと、そう決めた。

ADEOIAでは、支部や小支部の間での人員の動きが非常に活発である。

特定の支部や小支部に所属している疵術師がほとんどだが、それでもどの小支部も人員不足、戦力不足で、その時点で余裕のある支部から派遣する、あるいは支部からの指示で小支部から派遣することが多い。

それ故に、流動的なADEOIAの疵術師の中で、比較的長期間支部に留まっている第一特殊遊撃小隊は、貴重な存在なのである。

出現したDMFBへの対処に、特殊遊隊の浅木久宮中尉、浄美末来小中尉が選ばれた。

二人は、これまでに数多くのDMFBを討伐してきた実績がある。特にこの二人は、二人で一つとも言えるコンビネーションを発揮することで有名だ。中国支部では、この二人がどちらか一人でしか戦うことなどありえないとさえ、ほとんどの疵術師が言う。

この二人を選んだ支部の人は間違っていないかった。

今日、この時でさえなければ。

二人の険悪な雰囲気は、それに付き添う奈都海と唯利亞にも伝わっていた。

任務内容の確認のために交わす言葉にも、いちいち棘が隠されている。お互い笑顔もなく、口調も事務的。とても、二人で一つ、二人だけで30体ものDMFBを翻弄したと言われているコンビには

見えない。

奈都海や唯利亜は、その評判すら、知らないわけだが。

とはいえ、久宮と未来小の仲の良さは、二人の会話や周囲の目を見れば察せられることではある。

二人は、ともにいればいつも笑顔で言葉を交わす。それを見る者も、微笑ましく、あるいは羨望半分に、もしくは嫉妬半分に、しかし皆、二人の間にある好意は認めながら、眺めていた。

それが、今は剣呑に。その原因に自分たちが絡んでいることは否定できることではないため、奈都海も唯利亜も、二人の負の雰囲気解消するために行動することは躊躇ってしまう。そもそも、昨日今日会ったばかりの人間に、一体何を言えればいいのかなど、見当がつかない。

「……兄さん」

唯利亜が小声で兄の奈都海を呼ぶ。

「ボクたち……その、いいのかな」

『なにが、だ?』

奈都海は口だけを動かして、問う。

躊躇う気配を漂わせて、数秒、唯利亜は、

「ボくらさ、ついていっててもいいのかな、って思っ
て。未来小さんや久宮さんに」

『ついてこいと言われているんだから、問題はないだろ』

「まあ……そうだけど」

それだけ言って、再び黙る。

4人は全員、エレベーターに乗り込む。ボタンに近かった久宮が1階のボタンを押して、同時に微量の魔力を流して、エレベーターは下へ動き始めた。

未来小と久宮は、それぞれの持つ携帯の画面を見ながら、奈都海や唯利亞にはわからない単語も交えながら、相談をしている。

「で、今は阿澄中尉の小隊が足止めしてるらしいから、そこに私たちが奇襲をかける、と」

「敵の勢力は……10体、か」

「うち2体は阿澄中尉が撃破済み。それ以上はさすがに無理だったのかな」

「あの人の本業はあくまでも護衛だからな。しかも防御に傾倒している。鉄壁つちゃあ鉄壁だが、逆に攻撃はからきらしい」

「Cランクが限界だろうね、倒せるのは。だから私たちが増援に呼ばれたんだらうけど」

「なんにしる敵の数は多い。気が張っていくぞ」

表向きは普通に会話している。だが、言葉を交わしてはいるが、視線は一度も交わしていなかった。

傍から見ると、既に仲直りはできているようにも見える。事実、奈都海は二人のやり取りを見て、それまでの緊張はほとんど解れた、と安堵した。

しかし、唯利亞は違う。なぜか、あるいはどうやってか、唯利亞

は、この二人の水面下に燻る対立の火種に気付いていた。ただ、唯利亜は気付いていただけだった。それが表面化することに、なんの危惧も抱いていなかった。

戦場。

といつても、そこはただの河原である。一般人から見れば、の話であるが。

見る者が見れば、そこでは十数人の疵術師が8体のDMFBを一か所に押し留めるべく、奮闘している姿が見られるはずだった。

劣勢の中で、奮闘していた。

阿澄中尉の率いる斥候大隊第01防楯小隊には、今や負傷していない隊員がいない。

防護能力に優れた疵術師を集めた防楯小隊とはいえ、AランクのDMFBが相手では、分が悪い。相手がAランク単体だけならば格段に楽だったろうが、それも含めた8体のDMFBとなると、一か所に留めておくだけでも、非常に難しい。小隊は、包囲網を崩さないだけで精いっぱいだった。

そんな状況が、どれだけ続いただろうか。

隊員の一部に疲労が目に見えて影響し始め、限界を感じざるを得なくなってきたころ。

隊員の一人が、もう駄目だ、と決定的なそれを口にしかけた時。

一発の銃弾が、DMFBの上あごを貫いた。

上あごを半分以上砕かれたDMFBは怯み、苦痛に暴れて周囲の同胞を自身の爪牙で引つ掻きまわした。DMFBらに隙ができたところで、隊員は銃弾の飛んできた方向を見る。

現れたのは、浄美未来小と浅木久宮。

攻撃力に優れた疵術師の到着に、小隊の隊員は安堵の息を漏らし、しかし、気は抜かない。彼らの戦いはここで終わりではない。未来小と久宮のサポートという仕事が残っている。むしろ、そちらがメインだ。

二人は小隊長の阿澄中尉のもとへ向かい、状況の説明を求めた。

「どうですか」

「なかなかやばいな。お前らが来てくれなかったら、今頃、一人は死んでたかも、だ」

訊いた久宮に、阿澄は視線をDMFBに固定したまま、答える。

答えはそれだけで十分だった。

「今すぐ加勢したほうが？」

未来小が短く問い、

「ああ、頼む」

「了解」

二人同時に、同士討ちし始めたDMFBのもとへ、疾走した。

近づく殺気に気付いたのか、DMFBは一斉に二人のほうへ首を向けた。共通の敵である疵術師を前に、彼らは意識することもなく、ただ生存本能に従って、結束する。

8つの顎が、同時に威嚇の咆哮を上げた。

「は」

鼻で笑って、久宮は火炎弾を放つ。咆哮が一つ、断末魔に変わった。

追加で銃声。今度は断末魔を上げるための頭が吹き飛び、沈黙した。

崩れ落ち、ただの魔力となって拡散していく同胞を、なんのアクションもなく、眺める異形たち。完全に魔力となって大気に溶けて、それを見届けてから、1秒、2秒、3秒、4秒、……

カウント7つめで、残った6つの顎が、爪牙が、あるいは魔術によつて脅威と成り果てた自然現象が、未来子と久宮を襲った。

周囲に展開していた防楯小隊の隊員は無視して、自分たちを脅かす存在であると認識した二人だけを狙った、逃げ場のない猛攻。

それらはすべて、突如、中空に現れた城壁によつて阻まれた。

二人の後方で、阿澄中尉が手をかざしていた。が、DMFBにはそれが何を示すのかはわかつてはおらず、口惜しそうに唸りながら二人を睨んでいる。

「いけるか？」

「当然」

「んじゃ、3・3、になるか」

「そつだね」

「しくじんなよ」

「そつちこそ」

城壁の庇護の下で、二人は気楽に言い合う。

言い合ってお互いに戦意を確認してから、同時に右手を上げた。それを見た阿澄は、二人を守っていた厩気楼のように漂う城壁を消した。

この城壁は、鉄壁の防御力を誇るものの、内部からの攻撃ができなくなるという欠点もある。故に、阿澄の小隊には攻撃を得意とする疵術師が一人も配属されていない。

城壁が消えた瞬間、二人はDMFBが反応する前に、仕掛けた。

まず、最も近い2体に、それぞれ攻撃。

久宮は接近し、炎を纏わせた拳で殴りかかる。未来小は射程圏内に入ってすかさず、右手の銃を放つ。

当たりはしたが、どちらも致命傷には届かなかった。追撃するために再度、銃と拳をそれぞれ構えるが、その前に他のDMFBから横槍が入り、追撃は成らなかった。

振り下ろされた鋭い爪を備えた腕を避け、地面を抉ったそれに零距离で銃弾を撃ち込む。腕を途中で吹き飛ばされたDMFBは悲痛な雄叫びを上げた。

攻撃を掻い潜って接敵した久宮が、穿孔機の如く尖らせた氷塊を、腕を失って暴れるそれに突き刺し、さらに内部で破裂させた。細長い身体が二つに分かれたれ、絶命。

同胞を失った異形が、怒りに任せて久宮を背後から襲う。

しかしそれを、未来小の2発の銃弾が止める。銃弾はクマのような姿の異形の肩を襲い、ノックバックしたところに未来小がその高い身体能力に任せて急接近、喉元に二つの銃口を突き付けて、引き金を引いた。

重い銃声とともに、首が飛ぶ。

未来小が戦う間、久宮は他のDMFBを牽制していたが、未来小のリロードの音を聞いて、本格的に攻勢に入った。追従して、リロ

ードを終えた未来小も参戦。

次の標的は、“あれ”か……

言葉もなく、二人は当然のように1体のDMFBへ向かう。

二人の圧倒的な戦いを呆然と眺めていたのは、既に援護など必要ないと悟った防楯小隊だけではなかった。

戦いというものがどういものなのか、それを実際に目と肌で知るために連れてこられた、奈都海と唯利亜も、人智を超えたという表現も生温いその光景に、目を奪われていた。

二人の戦い方には無駄がない。

二人であるということ、二人しかないということ、最大限に活かしている。

二人いるから、選択肢が増える。

二人しかないから、敵の選択肢は減る。ただ本能に任せて攻撃を繰り返すだけのDMFBなら、標的の数だけ選択肢があるということになるからだ。

故に、対応がしやすい。対応できる力を、二人は持っている。

二人で同時に仕掛け、それを妨害するDMFBの突出を狙う。狙い通りに孤立したものをどちらかが全力で叩き、もう一人が他のDMFBを牽制して邪魔させるのを防ぐ。

二人が同時に仕掛けられれば、回避以外の自衛能力をほとんど持たない未来小に合わせて、無理せず避ける。迎撃は基本的に、瞬間火力に優れる久宮が行う。遠距離からの正確な狙撃を魔術で可能にした銃を持つ未来小は、久宮の背後からの援護を主に行い、時には高い身体能力と小回りを活かして敵の懐に飛び込み、翻弄する。

敵の数のほうが多いはずなのに、二人には傷の一つもつけること

ができない。

それどころか、その唯一と言ってもいい数の優位は、徐々に、確実に、崩されていった。

「お前ら……、准将が拾ってきたっていう新入りか」

幣原きょうだいの二人は、声を聞いて初めて、横に並んだ阿澄の存在に気付いた。

上着のポケットに手をつ込んで戦闘を眺める阿澄は、その目に必要のないはずの闘志を宿したまま、干渉のできない距離を保っていた。

「戦いを見るのは初めてだな？ ……勘違いしないでもらいたいが、残念ながら、あそこまで一方的な戦いはそうない」

「あの二人は例外だっただけですか？」

的確な質問をしてみせた唯利亜を、阿澄は意外そうな目で一瞥し、視線を戻してから質問には答えた。

「その通りだ。あいつらはある意味、規格外だ。あの二人は、互いにお互いを、ほとんど無条件に信頼している。だから」

言葉は途切れ、阿澄は戦う二人を示す。

さらに1体減って3体になったDMFBは、変わらず二人の疵術師に翻弄され続けている。

積極的に攻撃しているのは、その内の2体。爪を宿した指、牙を内包した頭、刃と化した翼を絶え間なく振るうが、それらはすべて

空を切る。

と、乱雑に振るわれた翼が、未来小の頭上すれすれを通る。自覚していた疲労が、ついに戦闘に支障を来しだしたのだ。乱れかけた息を整えるために、すかさず距離を取って久宮に並ぶ。

続いて、入れ替わるように久宮が前線へ。未来小は休憩の代わりに尽きた弾を補充する。

久宮は、ただ直進する。異形の爪牙は迫る。

それは、一瞬で久宮に到達する。その前に、未来小の銃が攻撃を弾き、軌道を久宮から逸らした。

「あんな、無茶な戦い方までできる」

ここまで見て、阿澄は言葉を続けた。

未来小の援護を前提とした、無駄を排した久宮の疾走。DMFBは懐に入れさせまいとさらに攻撃を続けるが、それは久宮に届く前に悉く弾かれた。銃弾は当然、久宮にはかすりもしない。

遮るものがなくなって、久宮はDMFBに接近することに成功する。

左右にはDMFBが1体ずつ。久宮はそれぞれに手を翳し、一言。

「未来小」

呼ばれた未来小は、空いていた距離をさらに離れた。ついでに銃弾を二発放ち、久宮からDMFBの気を逸らす。

直後。

「……！」

奈都海と唯利亞は、その光景に目を見開いた。

久宮の右手からは凄まじい劫火が、左手からは氷塊混じりの吹雪

が、吹き出てきて、周囲を凍らせた端から燃やしつくし、燃やしつくされて残った灰もたちまち冷気に覆われた。

劫火と吹雪が久宮の周囲をつむじ風のように廻り、やがてそれは竜巻とも呼べる規模にまで膨れ上がった。

巻き込まれたDMFBは、冷気で動きを止められ、炎で焼かれる。それを幾度となく繰り返し、異形の姿は蒸発し、やがて掻き消えた。二人の戦いにおける結末は、素晴らしかった。それこそ、支部で見せたあの険悪な雰囲気など嘘のように。

(……?)

唯利亜が人知れず、首を傾げる。

嘘のように、と言うが、あの時の雰囲気は本当に払拭できているのだろうか？ 唯利亜は、唐突に不安になった。

しかし、唯利亜の不安とは裏腹に、戦いは続いていく。残り1体。終結は間近。

未来小と久宮は、残った1体に殺気と得物を向ける。

このまま二人で一斉に仕掛ければ、この戦いは終わる。 かに見えた。

(まずい、あいつら……!?)

阿澄が心の声だけで絶叫する、その隣で、

「あれは……ダメ、だ」

唯利亜が、小さく呟くと同時、

ズガンッ……!

と、地を震わす轟音とともに、高く、土煙が舞った。
その中心には、厳然と屹立する異形の姿がある。未来小の銃弾も、
久宮の炎も、そのたった1体のDMFBによって無力化された。
たった、1体に。
それが意味するところは、

「こいつ…… Aランク並み、か……!？」

「……っ」

久宮が声を上げ、未来小は一転して劣勢に舌打ちする。
DMFBの、いわゆる強さの指標となる“ランク”。それはDM
FBの肉体を構成する魔力の密度によって決定される。

相手となる疵術師との相性もあり、ランクが純粋な強さを示すわけではないが、魔力の密度は、そのまま干渉力の高さに繋がる。
干渉力とは、つまり魔術の威力を示す。魔術同士がぶつかれば、
干渉力の高いほうが低いものを消すことができる。さらに、魔力の
密度と干渉力は比例するため、ランクの高いDMFBに決定打を与
えるには、相応の干渉力を持つ魔術が必要となる。

久宮と未来小の攻撃は、このDMFBの干渉力の鎧を砕くには足
りなかったのだ。

だが、阿澄はそれを、不審に思う。

「あいつらが気付けなかった……わけ、ないだろ？ あいつら、が
？」

阿澄は、彼らは分別に厳密な決まりのないランクはわからなくて
も、少なくとも他のものとは違うということは看破しているものと
ばかり思っていた。

普段、前線に出ない自分にすら、わかったというのに。

伝えるべきかどうかは二人の実力を鑑みて否と判断したが、そのミスを、阿澄は後悔した。

しかし、その後悔を拭うために自分もサポートに回る、そのことは、できなかった。

なぜなら、

「未来小！　なんでわからなかった!？」

DMFBの攻撃を掻い潜りながら、久宮がそう言った、からだつた。

未来小は当然、反論する。

「は、あ？　こっちのセリフなんだけど!？　前に出てた時間はあんなのほうが多かったでしょ？」

そんな風に喋りながらも、動きがほとんど鈍らない未来小の技量は大したものだ、と、実戦でなければ称賛したところだが、今はそれどころではない。

戦いの最中であるにも関わらず、二人は口げんかを始めたのだ。

「攻撃の機会はお前のほうが多かったろーが！　違和感かなにか感じなかったのか!？」

「他に敵がいるのに処理する必要のないやつ攻撃する暇あるわけないでしょ!？　あんたこそわかってなかったくせに、偉そうなこと言わないでくれる!？」

DMFBの攻撃　主に魔術による遠距離攻撃を避けながら、二人はギヤーギヤーと喚いている。

内容は、どちらにわからなかったことの責任があるか。非常に不

毛である。

阿澄は呆れ果てているが、このままでは喧嘩に気を取られてやら
れかねない、と、いうことに気付いて、

「おめえら、いっぺん黙れ！ 戦うなら黙って戦え！！」

二人なら避けられるだろう攻撃をわざわざ自分の創り出した城壁
で防ぎ、大声で叱咤した。

二人の強さは、ほとんど二人でのコンビネーションにかかってい
る。喧嘩しているなら当然だが、それを後に引きずってしまったのは、
勝てるものも勝てなくなる。

気付いた二人は、それぞれ相手に向けていた怒りを、DMFBに
向けた。

向けた怒りは、すぐにその原因を忘れて、殺意と闘志に変わった。

「ああ……もういいや。あれ殺したらすっきりするでしょ」

「なんとなく気に喰わねえが……まあ、今はやるか。殺るしかねえ
わな」

二人は、殺気を込めた視線はそのままに、脱力した風に言い合う。
空気を讀んだ阿澄は、黙って城壁を消した。

途端、DMFBから弾幕のような密度で、クナイのような形状の
魔術が飛来する。

が、今度はそれに、未来小が突っ込んでいった。

久宮は止めない。奈都海と唯利亜は明らかに狼狽するが、阿澄も
止めない。

迫る先頭のクナイを目前にして、未来小は左足でブレーキをかけ、
まずは4本のクナイの合間を縫って避ける。さらに、腰を落として
頭上に逸らし、足元のもの是最小限の高さを跳んで、避ける。短く

つて霧散した。その魔力が陽光を反射し、キラキラと輝くその中で、
未来小は、

「アイタタタ……」

頭を押さえて、そんなことを呟いていた。何が“イタかった”の
かなど、訊くまでもない。

「インフェルノナックルって……。かつこいいね？」

「……………言うな。なんか思いついたんだよ……………」

戻ってきた久宮は、顔を赤く染めていた。どうやら自分でも恥ず
かしかったらしい。

戦いはようやく終わった。

「じゃあ私は……………そうだ、ゲヘナバレット、とかどう？」

「やめるよ！ 人の傷、挟って楽しいかよちくしょうめ！」

未来小と久宮は、からかいからかわれながら、奈都海や唯利亜の
もとへ歩いてくる。

阿澄も部下に指示して帰還の準備をさせている。

奈都海も、それまで張っていた緊張の糸を解いて、力を抜いた。
戦いは、終わった。

誰もが、そう認識していた。

故に、

「っ！ 危ないっ！」

それに気付いたのは、唯利亜だけだった。

未来小と久宮の背後、地面から尾を根元から失った異形の大サソリが、ハサミ型の前足を広げて、二人に襲いかかるどころだった。

前兆のなかった襲撃に、二人は対処ができない。

阿澄もその部下も、気を抜いていたわけではなかったが、防御のための壁を出すには、距離がありすぎた。

「や」

やべえ！？ と、言う間もなかった。

「ッ」

あのムカデ型の異形はこれの尾だったのか、と悟るだけしかできなかった。

「っちい！」

間に合わないとわかっていながら、魔術を身の内に待機させながら、駆けだそうとすることしかできなかった。

反面、唯利亜は冷静に

魔術を、使った。

地面が隆起し、それは先端を槍のように尖らせ、サソリのハサミを貫いた。

地面に縫い付けられたサソリを見て、未来小が左右の銃で、それ

ぞれ右左のハサミを撃ち砕き、
跳躍した久宮はサソリの背を目がけて、

「っらあ！！」

特大の炎塊を思いつきり放った。炎はサソリの全身を焼き、炭化させ、やがて巨大なサソリは自重に耐え切れず崩れた。地面に散ったそれは、すぐに魔力に還って消えた。

最後のDMFBは、今度こそ殺した。だが、そのことを意識から排除できてしまうほどの出来事が、ついさつき、唯利亜によって起こされている。未来小と久宮は、単に反射として追撃を行っただけで、唯利亜が魔術を使ったことに驚いていないわけではない。奈都海は、違和感どころではない異常が弟に起こったことに（起こしたことに、ではない）、戸惑いも極致となって固まっていた。阿澄とその部下は、唯利亜を見る者と、唯利亜によるものと思われる3mに及ぶ石の槍を見る者とに分かれていた。

しかし、何よりも、誰よりもまず、

「えつと……………、あ、あれ？」

唯利亜自身が、自分のしでかしたことに最も驚いていた。

第2章 #8 二つ目 - 火種という名の痴話喧嘩…? - (後書き)

久宮、未来小主役回でした

当分、奈都海は活躍しそうにありません。主人公なのに

第2章 #9 覚悟させる言葉

吾妻山の夜。

山の中では、空から降り注ぐ小さな輝きを妨げる光がなく、街では見えないような弱々しい光しか放たない星さえも、鮮明に見える。月は、三日月。雲がうつすらとかかっついて、ぼんやりとした輝きが美しい。

まだ夜と朝は昼以上に冷える初春だということもあって、冬眠から覚めた虫の声は聞こえず、代わりに夜行性の鳥の声如山から風に乘って微かに聞こえてくる。

九能は柄にもなく、ペンションの部屋のベランダから夜空を眺めていた。

この日は客もなかったために、九能に宛がわれた部屋。一晩泊まるために最低限の家具しかないが、そのおかげで部屋は少し広めに感じられる。

泊まる用意をしていなかった九能は、音射から寝間着を借りて着ている。が、それだけではさすがに寒く、肩からカーディガンを羽織って凌いでいた。疵術師といえど、生身で寒さを遮断できるわけもなく、魔術で寒さを遮るほどの器用さも九能にはない。

とはいえ、風邪の心配などは必要ない。自分が寒くなければ、風呂上がりの身体を寒風に晒しても、なんの問題もないのである。ない、はずなのだが。

「へっくしっ」

「大丈夫ですか？ 准将」

思わず出たくしゃみを、開け放たれた部屋の入り口から、梓弓音射に聞かれていた。

「ええ、大丈夫よ。ありがと」

多少、恥ずかしくもあつたが、そこは上司の威厳で上塗りして隠し切った。隠し切れていなくても、それを指摘してわざわざ追求しようという人間では、音射はない。

が、九能が夜空に視線を戻しても、音射は一向に立ち去る気配を見せない。

まだ何か用が？ と、怪訝に思った九能が振り向くと、

「やはり駄目です。風邪をひきますよ？」

指一本を動かした気配すらなく、九能が気付けば、音射はいつの間にか九能の肩に毛布をかけるところだった。一瞬の間もかけずに音射は部屋の数mを通り過ぎ、しかも毛布を持って九能の背後に立っていた。

脊髓反射すらできなかった。九能は、ただ素直に、肩にかけられる毛布を受け入れていた。

「あなた……」

「ふふ……びつくりしました？」

久しくなかった不意をつかれるという現象に九能は驚愕し、音射は悪戯っぽい口調とは真逆の柔和な笑みで、それに返した。

少し考えればわかることではある。音射は疵術師なのだから、彼女特有の魔術を使ったと考えるのが当然だ。

だが、その程度は九能にもわかる。九能が驚いたのは、自分に反応できない速度で接近してきた、ということに、である。自惚れていると言われても仕方ないのかもしれないが、九能には自惚れても自惚れにならないほどの実力があるのだから、それこそ仕方ないことである。

「私もまだまだ、ねえ。反射神経と第六感には自信があったのに……」

かけられた毛布に礼を言ってから、九能はわざとらしく残念がつて、溜息をついた。

普通に残念がられた音射は、反応に窮する。

「ああ……その、魔術、ですし」

「それはそうでしょうけど。私、あなたに勝てる自信がないわ」

「はあ……」

と、音射は気付いた。

九能は、自分の使った魔術について聞きたいのだということに。しかし、音射は答える気などなかった。自分の持つこの能力には、あまりいい思い出がなかったからだ。

だから、気付かない振りをした。

「今のあたしでは負けますよ、准将には」

「あら、昔のあなたなら負けない、と？」

「勝つ自信はありませんが、負けただけなら」

見た目の印象からは思いもつかない強気な発言に、九能は思わず笑みをこぼす。

とはいえ、九能が聞く限りでは音射の実力も相当なものだ。気付かれずに九能に近付けたというその事実が、それを裏付けている。

字面で隠した質問を無視したことは、指摘しなかった。前線を退いた者に語らせる内容としては、ろくなものではない。

「ねえ」

ふと思いつき、少し考えてから九能は視線を空に固定したまま言った。

なんででしょうか、と音射は応じる。

言う瞬間になって気恥かしさを覚えたが、それはなんとか抑えることに成功した。そこまでして言うことではなかったが、なんとなくここで訊いておかないといけない気がした。

その、訊いた内容が、

「……人は、なんで人を好きになるのかしら、ね」

「……」

音射は、答えられなかった。それが哲学的、抽象的すぎて答えに窮したからではなく、九能の口から出る疑問には思えず、呆気にとられたからだだった。

しかし、時間が経って冷静になった音射は、九能もまだ一人の少女であることに気付いた。音射は九能の実年齢を知らない。が、どちらにしても、九能の精神が少女並みであることは事実であり、恋愛経験自体も平均よりもおそらく少ない。それは、九能自身も自覚するところだった。

故に生まれた疑問。客観的に見えて、そうではない疑問だった。そこまでわかっていたわけではなかったが、音射は、

「好きな人が、いるのですか？」

「……っ」

的確に言い当ててみせた。

九能の肩がピクリと動いたのを見て確信した音射は、しかし、それ以上は追及しなかった。代わりに、答えなかった九能の疑問に答えた。

「好きという感情に、理由を求めてはいけませんよ」

九能は首だけで振り返り、音射の顔を見る。

音射は微笑み返して、「ここからは私見ですけど」と断ってから続けた。

「好き、という感情はとも自分勝手なものです。モノに対する好意は当然ですが、人に対する好意も、それは相手の感情を考慮しません。ただ、自分がそういう感情を抱くだけです」

「……確かにそうかもね」

「はい。……それは自分の中にしかない、主観に満ちた感情です。人によってどんな形にも変容し得ます。ですから、その理由を他人に訊くのは筋違いではないでしょうか」

音射の言葉に、九能は苦笑を漏らした。

「手厳しいわね……」

「すみません、上官に向かって、こんな」

音射の謝罪には冗談めいた笑みが含まれていた。九能もそれを察して、笑いながら「いいわよ」と許した。

ADEOIAの疵術師たちは、特に戦場以外での場所では、上下関係に非常にルーズである。精々、上官には敬語を使うくらいで、わざわざ礼儀を徹底したり、上官による厳しい訓練があったりもしない。

それを知っている音射は、だから、あまり気負うこともなく、九能と話すことができた。

「そういえば」

と、二人の間に降りた短い沈黙を破り、

「暁くんから聞きましたけど……、ファントムを見逃したのも、好きな人が原因ですか？」

「え？」

九能は、今度は身体ごと振り返って音射を見た。

ファントムと交戦し、結果、見逃したという事実だけを伝えられたのなら、なぜ音射の言う発想が出てくるのか。

という疑問を込めた反応だったのだが、

「好きな人がファントムに殺されてしまった、とか……」

「……あなたたちはそんなことまで報告するの？」

音射によつて即座に解消され、九能はそれに怒るといつか、むしろ呆れた。

「暁くんつて、変に真面目ですから。源血とは真逆で、隠し事ができないんですよね」

「疵術師では珍しいわね、それ……………、じゃなくて」

さりげなく話題を逸らそうとして失敗した音射は、バレましたか、という顔をする。

「ヤバいと思うなら訊かなきゃいいのに」

「あたし、好奇心を優先してしまう性質でして」

「それはまた、損な性格ね」

「はい。それで、どうなのですか？」

音射は、意外にも貪欲に追求してくる。話せば話すほど第一印象とのギャップが出てくる音射に、九能は思わず笑ってしまった。

「あ……………まあ、違うわ。ファントムを見逃したことで、あなたの言ったことは関係ない」

笑いながらも、一応は答える。

しかし、聞いた音射は、納得するでもなく落胆するでもなく、なぜか深く考え込み始めた。

九能も怪訝そうに首を傾げる。

そして、しばらく。

音射は、とんでもないことを言い放った。

「今の好きな人が、昔の好きな人と似ている、とか……でしようか？」

「っ！」

自信なさげに紡がれたそれは、九能の心をこれ以上ないほどに掻き乱した。

なぜ判断材料の少ない中でそこまで思考を飛躍させられるのか、という疑問よりもまず、今この時、現在進行形で目を逸らしていたことを言いあてられたというそのことが、九能の心を大きく乱した。ついさっきまで見なくてよかった、逃避が許されていたのに、音射は、九能にそれを禁止した。

顔を俯け、目を泳がせる九能を見て、音射はようやく、自分の言ったことが九能にどれだけの衝撃を与えたのかを悟った。

悟って、しかし、音射は謝ることも発言の撤回もしなかった。

今の九能は、悪しき停滞に囚われている。そう、音射には見えたからだ。

ならばどうするか？ 答えは明白である。

迷う者、止まってしまった者に、道を示す。それは、音射が生涯“貫く”と決めたことだった。

故に、一言。

「好きなら、好きでいいじゃありませんか」

「え……」

九能は、音射の顔を涙さえ浮かびかけた目で、見る。

音射の表情は、優しかった。

初恋に悩む娘を諭す母親のように、未知の感情に戸惑う妹を勇気づける姉のように、音射の微笑みは九能の心に立った尋常ならざる波を鎮めてくれた。

しかし、ただ鎮めただけで、心の波は乱れたまま。安定するには、まだ遠い。

だから音射は、追撃の一手を、

「……………」

つまり、九能を抱擁した。

九能はわけもわからず、まるで子猫のように目を瞬かせる。音射は、子猫を愛でる母猫のように、九能の頭を撫でていた。

「准将は　いえ。九能、あなたは、」

耳元で囁かれるその言葉は、その響きは、九能がまだ母親に愛されていた時期　実に60年以上前以来の、懐かしさを想起させた。懐かしさと、愛されているという実感が、半世紀ぶりに心を満たした。

「あなたは、自分を縛り過ぎている。愛するという行為に、制約なんてないわ」

今まで、“巨斧の魔女”というその存在が万人から畏怖されるが故に、さらに准将、あるいはそこに辿りつくまでの中佐という階級が、九能に、戦い以外の行為を許さなかった。九能自身も、それを自らに課していた。

他人から求められ、頼られ、それ以上に畏れられ、それが自分なのだ。と自己暗示気味に思い込んでいた。

故に、九能は、自らに対して自由を許さない。戦いに関すること以外では、自分を主体にしない。

自分は常に客体だった。唯一、主体になり得る戦いの中でさえ、客体は殺される異形たちではなく、その戦いを課せられる九能自身だった。

「もし、昔、好きだった人に失礼だから、なんて思っているのなら、そんな考え方はすぐにやめなさい。そんな理由で愛するのをやめたというのなら、それはとんでもない甘えよ」

そして、その自縛は、他の価値観にまで及んだ。

九能は、愛するという行為を放棄した。

誰もが一度は経験する、自分という主体が相手という客体にすべてを求めてしまう、決して逃れ得ない深い熱情が、九能の中にも再び芽生えた。しかしそれは、放棄せざるを得なかった。

自分が主体となって“愛する”のは、今までの自分が否定したからだ。

だから

「“愛してくれる”のを待っているのだとしたら、あなたは愛そのものを舐めているわ」

「ッー!!」

「自分で自分を縛って、その自分を縛ってくれる自戒を装った怠惰の鎖に甘えている。待っているだけで実現するほど、愛はそこまで甘くない。それに　縛め如きで、愛は縛れない」

九能はついに、心に満ちて零れた何かを、涙という形で表出した。それまで厳しい表情で話していた音射が、ふいに、ふ、と笑った。

そして、

「愛してください。愛したい人を」

その言葉が、九能のところに、大きな変革をもたらした。

九能には、こうして真つ向から言ってくれる存在がいなかった。特に、今となつては九能に意見できる者など、ほとんどいない。色恋について教えられるくらいに優秀な先人も、いたことはいたものの、教えられることも教えを乞うこともなかった。

だから、こうしてはつきりと言ってくれる存在は、九能にとつてはほとんど初めてで、“巨斧の魔女”という大仰な二つ名を与えられてからは、どの分野においても諭す存在などいるはずもなかった。畏れが、そうしてくれるのを妨げていた。

一度決めたことは、確実に“貫くこと”のできる、梓弓音射だからこそできる、芸当だった。

翌日。朝か昼か判断に困る、そんな中途半端な時間。

吾妻山の中腹にある尾前邸に、二人の疵術師が訪れた。

一人は、ここに住む三人を知る、憂月夜暁。そしてもう一人は、暁に連れられてきた、烏羽玉夢月だった。

二人は冬馬に言われるままに、屋内には上がらず、回り込んで庭へ向かう。向かって、その先にあつたのは、一人の女性と一人の少女が和装を纏って手鞠について遊んでいる、という光景だった。

時代錯誤も甚だしいその光景に、夢月は少し黙ってしまい、さらにその片方が自分と二度も戦戈を交えたファントムであることを察して、固まった。

固まっている夢月、ではなく、対照的に躊躇なく歩み寄る暁に氣付いて、二人は手鞠を消した。手鞠が魔術によって作られたものだということに、暁と夢月はそこで初めて氣付いた。

「暁おにーちゃんっ！」

年齢は10前後と見える少女　尾前美冬が、草履で湿った土を蹴飛ばしながら、暁の下へ駆け寄ってくる。勢い余ってタックルになった美冬の身体を抱きとめて、暁はその元氣のよさに思わず笑った。

昨日も会ったはずなのに、なぜか懐かしかった。

と、原因のわからない感慨に浸る余裕もなく、ファントムは“なりこ”という名を与えられたファントムは、夢月と暁に一度ずつ視線を遣ってから、

『暁……昨日とはまた違う刺客かの？』

油断なく、言う。

「……違い、ますよ。今日は、ただ話があつて来ただけですから」

なりこの威圧感に、わずかに言葉に詰まりながら、暁はその懸念を否定する。

それでも警戒を解かないなりこを、冬馬が諫めた。

「あまり苛めるのはやめましょう、なりこ。　お二人とも、どうぞ上がってください。あ、縁側からでいいですよ」

言われたなりこは、おもしろくないという風に眉を寄せて短い溜息を吐いた。

『ふむう……前から思っていたが、冬馬はどうにも固すぎる。もう少し柔軟に考えてもよかる?』

「今、柔軟な考えが必要ですか。まったく、なりこは自由すぎるんです」

『……つまりぬ』

「知りません。……あ、どうぞ、お二人とも。遠慮なく」

二人の自然なやり取りに呆けていた暁と夢月は、冬馬に言われてようやく復活した。

美冬も、なりこに呼ばれて家へ上がる。

疵術師の二人は、ここに遊びに来たわけではない。あくまでA D E O I A に所属する疵術師として、この特殊な家を訪れた。

彼らの所属する小支部に派遣されてきた、西園寺九能。彼女が支部の識者に訊き、そして得られた情報。それは、日本で生まれ育った3人の疵術師にとっても驚かざるを得ない、奇妙な、しかし納得もしてしまふ、不可思議なものだった。

居間で5人が揃い、座る。

机を挟んで、尾前親子、なりこと、暁、夢月が向かい合う。

まず、話すのは九能の掴んだ情報。それが正しいかどうかを確認する必要がある。

話すのは、暁の役目。

「尾前家。……それは、古来より九尾の狐を始めとする複尾狐を祀り、時に使役する神官一族。元の姓は、“尾裂”。しかし、祀っていた九尾 玉藻の前が、朝廷に害を成したために、神官の位は剥奪。その上、他の神官、当然、彼らは魔術師ですが、彼らによつて危険と判断された複尾狐はほぼすべてが討伐された。祀る対象のなくなった尾裂家は、その後、没落。明治に尾前と名を変え、戦前にその血筋は絶えた、と。こちらでは、以上の情報が得られましたか」

「何か、資料に残っているのであれば、そう書かれているでしょうね」

「では……？」

含みのある冬馬の言い方に、暁は問い返す。

3人だけが見る中、冬馬は頷いて、

「ええ。こうして、山の中に潜んでいました」

暁の頭にあるだろう推測を肯定する。なりこは退屈そうに頼杖をついて外を眺めていた。それを横目で見て苦笑した冬馬は、しかしそれだけで続ける。

「大戦にも参加せず、霞翹家にも存在しない一族として認知されていたので、その配下に入ることもなく、平穩に過ごさせてもらっていたようですね。ご先祖様は」

「そうですか……」

「つてーことは、あんた……」

夢月は、冬馬の説明と暁の報告の相違に気付いた。

「こちらもまた、冬馬が頷いて肯定する。」

「お二人の思っている通り、憂月夜さんの前では、魔術師であることは隠していました。もちろん、なりこが人間ではないことも知っていましたし、あなた方が数年前から近辺で活動していたことも把握していました」

「!?!」

「もつとも、あなた方となりこが出会ってしまふという事態は、予想外でしたが。なりこから聞いた時は、焦りましたよ」

表情が強張る暁と夢月の前で、冬馬は言いながら笑う。

冬馬にその気がなかったから良かったものの、そうでなければ、つまり、冬馬がなんらかの理由で魔術師、あるいは疵術師に悪意を抱いていた場合、九尾を用いて自分たちを害していた可能性もあるのだ。尾前の一族は、かつて味方だったはずの魔術師に祀っていた復讐狐を殺された、という過去がある。恨みを抱いていたり復讐を考えていたりしても、おかしくはない。

当人に訊いても「昔過ぎて実感ありませんしねえ……」で済ませてしまうのが、幸いといったところか。魔術師であることに嫌気が差したり、魔術師自体やその境遇を恨んで魔術師であることを隠している者が多い中で、冬馬のような存在は珍しい。

それとはかく、冬馬と美冬、この尾前家の処遇は少々難しかったりする。

日本の魔術師を統括する霞翹家は、世界の魔術界から日本を隔離

してはいるものの、日本の魔術師に配下に入ることの強要はしていない。霞翹家への連絡は、不要だろう。

しかし、まだファントムが神格化されていたかつての時代ならともかく、今や単なる討伐対象となったそれと同居する彼らを、AD E O I Aの本部は果たして見逃すだろうか、という疑問が二人にはあった。

実質的に中国地方支部を指揮する九能は見逃したが、それは九能個人の意向であり、本部としては、当然ながら発見したDMFBは殲滅しなければならない。その方針を曲げてまで残しておくほどの安全性と価値が、この尾前家と九尾にあるかと言われると、激しく疑問である。

猶予はある。倒したと報告すれば、それで時間だけは稼げる。

「なので、その猶予のある間に、あなたたちには決めていただければなりません。その……九尾と、別れるかどうか、を」

「……っ」

諸々を説明し終えて、暁はそれから言った。

それまで無関心を装っていたなりこが、わずかに肩で反応した。

それを見咎められると悟ったなりこは、素直に暁に向き直ることにした。案の定、全員の視線がなりこに刺さっていた。

『……なんだ』

なりこは慚然と言い、暁は事務的に返す。

「この決断には、あなたの意思も重要なんです。あなたが、ここを去る、と言えば、それで解決する」

『お断りだ。ようやく、気兼ねなくここで暮らせるようになったというのに……なぜ去らねばならん』

なりこは頑として譲らない。これは暁も予想はしていたことだった。

だから、ここから去れ、とは、別に強要したりはしない。

「なら、いずれ、僕たちがあなたを討伐することになるかもしれないが……、それでも？」

「憂月夜さん！？」

昨日とは真逆のことを言われて、冬馬は抗議の声を上げようとするが、それをなりこに制止された。

『構わん。そもそも、こうして話していることのほうが異常なのだろう？』
その時になったら、来るがいい。歓迎してやる『

「ええ、そうさせてもらいます」

暁は平然と言って、出された冷めかけの茶をすすった。

夢月は何も言わない。夢月にとって、この人の形をした九尾はフアントム以外の何物でもなく、この家族がどんな、どれだけの絆で結ばれているのかも、知らない。

故に、夢月は黙っている。告げる役目を暁に任せる程度には、夢月は弁えていた。

「では」

言った暁に、皆の視線が向けられる。

「冬馬さん。美冬さんに関して、これから、将来どうするか、お聞きしても？」

「……それはあなた方の活動に、何か影響があるのでしょうか」

「いえ。ただ、個人的に気になるので」

暁の答えを聞いて、横からの視線がなぜか冷たくなった気がしたが、気にしないことにした。

冬馬は少し考えて、暁ではなく美冬を見て、

「美冬」

「はい、お父さま」

父の顔を見て、落ち着き払った様子で美冬は応じる。

答えた美冬の落ちつき方は、暁も知らない彼女の姿だった。思えば、この緊迫した場で、美冬は一度も不満を言うことなく、ずっと正座で話を待っていたのだ。

「美冬は、将来、どうしたい？」

「……時さえ過ぎれば、どうとでも」

「？」

その答えに疑問符を浮かべたのは、暁と夢月だ。冬馬は、納得したように頷いて、二人に言った。

「だ、そうです」

「いや、だそうですって言われても……」

「わかんねえっての」

浮かんだ疑問は消えることなく、しかし、冬馬にも美冬にも、答える気はなさそうだった。

なりこにも視線で問うが、肩をすくめて首を振るだけ。答えたくないというより、なりこにもわからないのだろう。

「わかりました。……いえ、わかってはいませんが、答えてもらえないようなので、ここで帰ります」

「いいのですか？」

立ち上がるうとする暁に、冬馬が訊く。

暁は訊かれたことには答えない。

「また何かありましたら、連絡をください。僕たちも、定期的に来ることにします」

『どつせすぐに敵になるといつのに、か？』

「……」

言ったのは、なりこ。人間にはできない惨忍な笑みを浮かべている。

固まる暁を、夢月が促した。

「暁。行くぞ」

「あ、ああ……、うん」

夢月とともに家の玄関へ向かい、靴に履き替えているところで、3人が見送りに来た。

美冬は、暁の知る天真爛漫な笑顔に戻っていた。

いや、“あちら”のほうが本性だということもあり得るから、戻った、という表現は正しくないのかもしれない。
ともかく、

「バイバイ、暁おにーちゃん」

「うん、じゃあ、また」

『世話になったの。お前たちには』

「俺は別に、何もしてないんっすけどね」

「いえいえ。あなた方の尽力で、私たちはここで暮らせるのですから。感謝しないと罰が当たりますよ」

口々に、心にもあることないことを言いつつ、二人と一体は見送り、二人は見送られた。

尾前家を去って、少し歩いて暁は振り返った。

美冬が、満面の笑みで腕を力いっぱい振っていた。それを見ている冬馬となりこは苦笑に近い笑みで、それでも美冬に倣って二人に手を振っていた。

暁に気付いて夢月も振り返り、二人揃ってそれに応じる。

か (またすぐに会いに来れるのに、いれじゃあまるで……いや、いい

曉は、少々、心配性だった。

第2章 #10 覚悟の結末

幣原奈都海、唯利亜は、ADEOAI中国支部の医務室にいた。そこでは、先の戦いで負傷した防楯小隊の隊員が、治療を受けている。

その中で、特殊遊隊の居川咲から治療を受けているのが、隊長の阿澄中尉だった。

「悪いな、居川特尉。鉄壁と言われる我が隊ながら、不甲斐ない」

「いえ。……相手がAランクでは、負傷程度は仕方ないかと」

咲は、いつも通りの作業を淡々としている。自らの能力を応用した治療を、咲は得意としていた。

大人数の収容を可能とするこの医務室には、負傷者とそれを治療する疵術師の他に、さらに4人の疵術師がいる。かなり広いため、その4人、つまり、幣原きょうだいと久宮と未来小がいても、邪魔にはならない。

「ま、俺らも阿澄さんとおこの隊のおかげで勝てたんすから、それも榮譽の負傷っつーことで」

「へっ、そりゃいいや。そういうことにしときゃあ、少しはカッコもつくかねえ」

「……治さないほうがよろしいでしょうか」

「いや、治してくれ頼むから」

冗談めかして懇願する阿澄に対して、咲は割と本気だったりする。そういうところでは、というより普段から咲は冗談の通じない性格である。

そんな、ある意味微笑ましい咲の言動に未来小は、笑みをこぼした。しかしそれも、すぐに厳しい表情に戻り、未来小は、戦いが終わってからずっと気にかかっていたことを思い出した。

「そういえばさ」

と、切り出して、皆の注目を集める。

「今回、戦ったDMFBさ、なんか変じゃなかった？」

「ん？ そうか？」

共に戦った久宮は同意しない。だが、阿澄は未来小の言葉を聞いて考えこんだ。

「あのでっかいサソリみたいなやつ。始めは尻尾だけで戦って、その後、本体を出すっていうのがさ。なーんか違和感っていうか？」

「どこがだ？ 自分の身体の一部を囿にして獲物をおびき寄せるところは、普通の動物でもやってるだろ？」

「それは……確かにそうだけど」

折れそうになった未来小に、阿澄が助け舟を出した。

「DMFBなら、尾がやられた時点で、すぐに飛び出てくるはずだ。だが、奴は、俺たちが油断する程度の時間を空けて、奇襲をかけた。Aランクとはいえ、そこまでの知能があるとは思えない。浄美が言いたいのは、そういうことだな？」

「そう！　そういうことが言いたい、私は！」

「なんだそりゃ……。つつつても、確かにそれは違和感だな。尾を吹き飛ばしたのに、暴れもせず奇襲するっつーのは……。確かに変だ」

調子よく阿澄に同意した未来小に呆れそうになったが、久宮は、指摘された違和感には同意せざるを得なかった。

通常、DMFBはただ、生存本能に任せて自分の持つ得物を振るうだけである。積極的に魔術師を襲わないDMFBが疵術師と戦う理由は、単に自分の身を守るためであって、殺すことそのものが目的ではない。そもそも、DMFBには奇襲という高度な戦術を取れるほどの知能は、ない。

ただ、

「で、それが異常だとして、どうすんだ？　それを」

久宮の言う通り、高い知能を持つDMFBが現れたからといって、何がどうなる、というわけでもない。そういうDMFBが出る可能性もあるから気をつける、くらいの注意喚起は必要かもしれないが、せいぜいその程度である。

それは未来小にもわかっていた。だから、久宮に反論できない。

……まあ、正論に対して反論する必要もないのだが。

「一応、報告書には書いておくとするか。もしかしたら、悪いこと

の予兆かもしれんし、な」

「予兆、ね。……この異変が、何かの結果ってんなら、気も楽なんだが……」

阿澄と久宮、二人が言った不穏な可能性は、果たしてどちらが現実なのか。

咲は、阿澄の折れた指を治療しながら、何か、嫌な影が近づいているのではないかと、小さくも確かな予感を抱いていた。

奈都海と唯利亜は、ともに違和感を抱きながら、何も言わない。

奈都海と唯利亜は、予想していた面倒な追求や検査の類も特になく、平穩無事に自宅に帰ることができた。

何に対する追求かといえば、それはやはり、唯利亜が唐突に使った魔術について、だ。それに関して最も驚いているのは、他でもない唯利亜自身であり、なぜ、とかどうやって、とか訊かれても答えられるはずがなかった。

だから、何も言わずに帰してくれたのは、非常に有難かった。

唯利亜は居間に入って、クッションの効いたソファに飛び込んだ。聞くに堪えない異常なコエを発する化け物との戦いを見せられて、もう既に精神は限界に近かった。聴覚や視覚だけではない、今までには知らなかった第六感すら疲弊していた。

奈都海も同様に疲れ切っていたが、それは、使わずのない魔術を使ってしまった唯利亜のそれには到底及ばない。すぐに何かに飛

び込みたいという衝動はさすがになく、それよりもまず、冷蔵庫の緑茶でのどを潤したくなった。

「帰ったかー？」

奈都海がキッチンに向かおうとすると、母親の幣原亜美が居間に入ってきた。

「唯利亚は　あ、いた。飯つくってー、飯」

「あゝゝ……無理。自分でつくって……」

母親らしからぬ、しかし彼女にとってはいつものように夕食を求めるが、疲れ果てた唯利亚に料理などできない。声変わりを忘れたソプラノが、今回に限っては本来の性別相応に低かった。

それを聞いて、さすがに無理だと悟った亜美は、ついに自分で作ることを決意

「ナツ、つくって」

するはずもなく、間髪もなく矛先を奈都海にシフトさせた。

予想していた奈都海は、拒絶が意味を成さないことを知っていたために、諦めて、それでも最後の抵抗を試みる。

『いいのか。俺で』

「いいわけないだろ。でも、とにかく今はなんか腹に入りたいの。カップ麺でもなんでもいいからなんかつくって」

自己中心主義もここに極まれりといった言動に、我が母親ながら

頭を抱えたくなくなったが、とりあえずは「なんでもいい」と言っている今がチャンスだと考えて、気が変わらない内につくってしまおうと、奈都海は迅速にキッチンへ向かった。

つくったのは、ラーメンだった。もちろん、袋のインスタントのものだ。

一応、冷蔵庫にあった、もやしやらスパムやら、ラーメンに入れても違和感のないものを入れて誤魔化しておいた。

とはいえ、奈都海は亜美の文句を怖れているわけではない。

「そんじゃ、いただきやーす」

亜美は、してもらったことに関しては、あまり文句は言わない。言っても、結局はおとなしくその恩恵に与ることが多い。作り直す羽目になるということは、ありえなかった。

半分ほど食べてから、亜美は気付いた。

「ナツ、食わねえの?」

『……食欲がないし、今はいい』

気付くのが遅すぎだろう、とは言わなかった。

「ふうん? 唯利亜は?」

『あれで食えると思うか?』

「つくったら食うんじゃない?」

『あんたを基準に考えるな。……俺は腹が減ったらつくって食べるし、唯利亚もそうするだろ』

ならいいや、と軽く流して、亜美は食事を再開した。

色々突っ込みたい部分はあったが、これ以上は付き合いきれなくなつて、黙ることにした。

食べ終わった亜美は、意外なことに食器を洗ってから自室へ戻っていった。奈都海は、自分の母親に一体、何があったのかと訝しんだが、そんなことよりもまず、優先すべき事項があった。

唯利亚のことだ。

今まで疲れやら何やらで話せなかったことを、奈都海は唯利亚と話したかったのだが……

「うゝあゝ……」

ソファに顔を埋めて呻く唯利亚には、そんな話をできるような気があるようには思えない。

どうにもなりそうにない状況に奈都海は諦念の溜息を吐いて、唯利亚の寝そべっているものとは違うソファに腰掛けた。

そろそろ午後9時を回ろついう時間。特に何か見たい番組があるわけでもないが、なんとなくテレビを点けようとする。が、リモコンが見当たらない。

軽く首を廻らし、ダイニングテーブルの上のリモコンに目が止まった。母親が昼食を食べながらテレビを見ていたのだろつ、なら戻しておけよ、とそんな無体なことを考えつつすぐに忘れて、行って取って、点ける。

しかし、チャンネルを回せど回せど、興味の惹かれるものがない。純愛ラブストーリーと謳っていたはずのドラマでなぜか血が舞っていたのだけには若干心が動いたが、そうなるということは物語も佳境なのだろうし、今から見ても楽しめないだろう。

他は時代遅れのバラエティや奈都海の嫌いな音楽番組。NHKは元々見ない。

いい加減うんざりしてきた奈都海は（自分で点けたのだから自業自得だが）、視覚と聴覚に障るテレビを消そうとして

「んー……あ」

やかましい音に反応したのか、唯利亜が起き上がってきた。が、結局テレビは消した。

唯利亜は頭を振り子のようにゆらゆら揺らしながら、あー、とかうー、とか唸っている。

「あー……やば。……どうしょ、体力がマッハで削られてく……」

『削られる体力はまだあるんだな』

「……あ？　なんか言った？」

唯利亜は視界の端で奈都海の口が動いたのを見て、訊ねた。別に怒っているわけではなく、口調に気を遣う余裕がないだけである。

それを知っている兄、奈都海は、ここに至ってようやく、本気で弟が心配になった。彼はよほど疲労していない限り、本性が出てこない。出さない、ではなく。

『大丈夫か、お前』

「……今は多分、大丈夫じゃない」

短く本音を漏らし、唯利亞はへなへなと再びソファに全身を預けた。

唯利亞は、先の戦いで魔術を使った。咲から教えられた、すべての基本となる魔術すら碌に使えなかったのに、唯利亞は地面の土を槍型に変化させ、それをさらにAランクDMFBすら貫く干渉力と硬さ（物理的な攻撃力も当然必要となる）を持つ武器にする、という初心者には大掛かりな魔術をやったのだ。

奈都海には、その事の大きさはわからなかったが、話を聞いた疵術師の一人からは、「今は大丈夫だと思うけど後で来るから気を付けて」という主旨の忠告を、唯利亞が受けていたのを見ている。「来る」のは、おそらく疲労のことであり、唯利亞が今、体力が削られていくと言ったのも、興奮で忘れていた疲労が思い出されたからだろう。この消耗具合を見れば、奈都海にも唯利亞のしでかしたことの深刻さが察せられた。

住宅街の夜は、静かだ。

たまに、どこかの家に帰っていくのだろう車が家の前を通っていくが、外から聞こえてくる音といえはその程度である。

と、唯利亞が、唐突に立ち上がった。

「……部屋で寝てくる」

『晩飯とか風呂は？』

「明日の朝でいいや……」

奈都海にもギリギリ聞こえるくらいの小さな声で、唯利亞は呟くように言った。奈都海の唇を読む余裕は、まだあるようだ。

しかし、気力が追い付かないのか、危なげな足取りで部屋を出て

いく。

一人残された奈都海は、天井を仰いで、大きな溜息を吐いた。状況に流される自分たちの身を憂えた、色々な意味の含まれた溜息だった。

対して、自室に戻った唯利亜。

電気を点けて、ベッドに腰掛ける。

視界に映るのは、床に散乱したゲーム機やラノベ、本棚にズラリと並んだゲームソフトにまたラノベ。その中に時代文学まで紛れ込んでおり、唯利亜はたまに自分の趣味がわからなくなる。

ともかく自分の部屋なんてものは、いつも見ている。今さら感慨を覚えることもなかった。

「姉さん」

だから、昔のままに、話しかけることができた。といっても、呼び方だけは「お姉ちゃん」から「姉さん」に変わっているが、その呼びかけに応える者は、部屋にはいない。が、

(や、唯利亜。どうしたの?)

「どうしたの?じゃないよ、もう……」

(ん? あたし、なんかしたっけか?)

「……白々しいよね、姉さんのとぼけ方って」

部屋にいるのは唯利亜だけ。傍から見れば、唯利亜は独り言を言

ってるようにしか見えない。

しかし、唯利亜には、ちゃんと声が聞こえていた。

違法薬物をキメて幻聴が聞こえるようになった、というわけでは、もちろんない。

なんの因果か、どんな原理かは唯利亜にもわからないが、死んだはずの姉が、自分の中にいた。

そう、唯利亜の、中に。

(なんか自分で言ってる信じられなくなってきた……)

(言ってるないだろ)

中にいるから、心も読まれる。まだ気付いて数日だが、いい加減、慣れてきた。

(ってゆーか、信じるも何も、あたしはここにいるんだけどね?)

「わかってるよ。でも、これってどういう原理なの?」

(知らない)

「や、知らないって……」

(なんかできちゃったんだもん。しょうがないじゃん)

「セフレだった男にできちゃった婚を要求する女みたいなこと言わないですよ。実際さ、姉さんってほんとに死んだの?」

昔のように、それこそ彼女が死んだその日の朝にもしたのと同じ調子で、二人は会話をします。唯利亜にとってはとても懐かしく、会

話の内容に関わらず、姉との会話に嬉しさが込み上げてきた。

しかし、それよりも何よりもまず、唯利亜には、姉に問い詰めねばならないことがあった。

「ところで、姉さん」

（なにさ？）

「今日、ボクが魔術を使っちゃったのって、姉さんのせいだよな？」

問われて、黙った。

唯利亜の姉である幣原奈唯^{しほはなゆた}他は、喋り好きな彼女の性質とは裏腹な沈黙を、唯利亜の中に降ろした。

黙った理由は考えず、唯利亜は続ける。

「別に魔術を使わせたことを、責めるわけじゃないよ？ ただ、さ

」

（条件反射だよ）

唯利亜の言葉を遮って、奈唯他は中で言った。

そんな思いついたような言い訳で、唯利亜が納得するわけがない。

「騙すのは得意なのに、嘘をつくのは下手なんだね、姉さんって」

（……うるさいよ）

「姉さんのそういふところは可愛いと思っよ」

唯利亜は笑うが、「でも」と言ったところで、表情は険しく変わ

った。表情そのものは誰も見ていないが、その心情の変化は、奈唯他には手に取るようにわかる。

隠し事をする姉に対する、怒りがあつた。

「姉さんの“そういうところ”は、卑怯だと思う。生きてる時だつて、ボクに一体どれだけのことを隠してたのさ？」

(隠し方は上手かつたろ?)

「そういうことを言ってるんじゃないんだよ、ボクはっ」

この期に及んで白々しく誤魔化そうとする姉に、唯利亜は思わず声を荒げてしまう。

自分の声の大きさに気付いて、改めて声を潜めつつ言う。

「そういうことじゃないの。ボクは……、信頼してほしいの、ボクを。姉さんに」

(は……なんだ、そりゃ)

奈唯他は笑おうとして失敗した。代わりに言ったのは、困った時の常套句。

思いの外、自分の弟が成長していることに、奈唯他は少々驚いていた。自分たちの弟のことになると、どうしても子ども扱いしてしまいがちだが、そろそろ、それもできなくなりそうだ、と奈唯他は驚きながらもしみじみ思う。

唯利亜は怒っているというより、どこか拗ねている風だった。子どもっぽい態度ではあるが、その理由を考えると、子ども扱いはしたくなかった。

(まったく……言うようになったねえ、あんたも)

「なにさ。急に」

(いんや、別に。あんたもさすがはあたしの弟だ、と違ってね)

軽薄な口調に反して、その言葉には尋常ならざる重みがあった。それを察せられない唯利亜は、

(そろそろ、かねえ……うん。そう、遠くはないのかも、ね)

奈唯他の言うその意味が、わからなかった。主語の判明しない言葉に、唯利亜は首を傾げる。

ただ、奈唯他は知っている。

何が遠くないのか、がわかってても、あるいは、たとえ奈唯他の言葉に含まれた真の意味がわかってても、唯利亜は決して“識ること”などできない、ということ。

知っていて、また、隠していた。

何かを隠していることだけはわかったから、唯利亜は頬を膨らませて、さらに拗ねて姉を困らせることにした。

暁と夢月がペンションに帰って来た時、派遣されてきていた西園寺九能は帰る準備をしていた。

といっても、彼女の荷物は出かけるのに必要最小限のものだけ。

例えば、財布とか。一泊もするつもりはなかったため、着替えや生理用品はもちろん、化粧道具も持ってきていない。

山のふもとにあるこのペンションではあまり見られない身軽な姿の九能は、帰って来た二人を見つけて、音射との会話を切り上げた。まずは、暁に。

「憂月夜少尉。どうだった？」

「ええ、その……仲良く、していたようですよ。おそらく、暴走の心配も少ないかと」

「10何世紀も生きていれば本能なんて忘れるでしょうし、別にそこまで心配はしてないわ。それよりも気懸りなのは、あなたのほうよ」

「えっ？」

思いがけないことを言われて、暁は少し戸惑う。

「これからも、DMFBを殺し続けられるでしょうね？」

「え……それは、」

「たまにいるのよ？ 人間に友好的なファントムに情が移ってしまつて、DMFBにまでそれを同化させて、戦えなくなる疵術師が。まあ、そんなファントム自体、数が少ないから、本当にごくたまに、なんだけどね。……で、そうならない自信はあるかしら？」

厳しく問われて、暁は考える。

なりこと呼ばれる九尾。それを慕う尾前冬馬。その二人が愛する

尾前美冬。改めて三人の姿を思い浮かべて、自分が九尾を守るうとした理由を、もう一度、考える。

なりこを守るうとした理由。彼女がいなくなったら、誰が悲しむか。彼女は、誰を最も、気にかけて、愛していたか。考えること、数秒。割とあっさり、答えは出た。

「大丈夫です。俺が戦う理由は、殺すためや守るためじゃない。ましてや、情に動かされて戦えなくなるなんて、ありえない」

「そう。ありがとう」

答えてすぐ、感謝された暁は、何に対する感謝なのかわからない。しかし、その意味を問う前に、九能は夢月に顔と意識を向けていた。

「あなたは……別に言うことはないわね」

「はは……今回は俺、これといってしてないっすから。いいですよ、別に」

笑って終わろうとする夢月。だが、九能は何かを思い出したように、ポンと手を打って、

「あ、そうだ。あなたには九尾の居場所を教えてもらったわね。あれは感謝しておくわ」

「なっ……夢月!？」

「い……」

暁は夢月に驚愕と詰責の視線を向け、夢月はその視線から逃れる

ように気まずげに顔を逸らす、そうなってしまつほどの秘事（だつたはずのこと）を暴露した。

「どういふことさ、夢月っ？ 僕があそこに行つていてこと、知つていたの！？」

「あー……まあ」

「どうしてさ？ 知つてたなら言つてよ！ なんか隠してた自分が馬鹿みたいじゃないか！ って、もしかして僕と准将が戻つてきた時に驚いたのも、演技だったつていつの！？」

「ん、まあ……」

「どうしてっ……、ああ、もうっ。言つても仕方ないのはわかつてるけど、なんかもういいんだけどさ、夢月ってなんでこう、わかんないかな！？ 夢月も知ってるつてわかつてたら、僕だつてッ」

捲し立てるように言つていた暁が言葉に詰まった。

突然、夢月が暁の首に腕を回したのだ。

「いいだろ、もう。細かいこと考えんな。俺はお前のことなら、なんだつてわかんだよ！ 俺に隠し事できると思つたら大間違いだかなな！？」

「い、いや、そんな、開き直られても……」

「開き直つて何が悪いっ！」

「わかつたよ。なんだよ、もう……」

突然の態度の変化に驚いた暁だったが、結局は呆れ果てて夢月の腕を振り払う。

こうやって開き直られては、これ以上責める気も削がれてしまうというものである。暁は仕切り直すために一度、溜息をついてから、それまで蚊帳の外にあった女性二人に目を向ける。

「……………」

「……………」

なぜか二人ともに、にやついていた。夢月もそれを見て、嫌な予感に囚われる。

九能が、一言。

「あなたたち……………できてるんじゃない？」

「あらいやだわー、男の子同士だなんてー」

九能は呆れており、音射はなぜか両手を頬に当てて身体をくねらせている。実際には「いやいや」と言っているが、その背後に、黄色い歓声が混じっていることは、想像に難くなかった。

その勘違いに、暁と夢月は危機感を覚える。

「いや、待ってください、音射さん！ そんなわけないですからね？」

「そうっすよ！ 俺らそういう趣味じゃないし、俺が好きなのは」

否定したいがために言いかけてしまった核心を、夢月は寸で飲み込んだ。

安堵も束の間、未だに笑みを浮かべる音射に気付いて、二人

「とにかくこいつじゃありませんから！好きなのは！」

ユニゾンしてしまい、さらに慌てる。

駅まで見送りに来たのは、音射一人だった。他の二人は、支部に送る、形だけの報告書を書かなければならない。

田舎の無人駅には、人は少ない。というか、今は二人以外に誰もいない。

九能と音射、二人は少し、よそよそしい。昨晚、お互いに恥ずかしいことを言い合っていたからだ。仲の良すぎる暁と夢月をからかっていた二人だが、見られていたら自分たちも何を言われていたかわからない。

本人たちにはわからないが、傍から見れば、それも気にしすぎだったのだが。

「さて、と」

気まずい沈黙を破るために、九能は会話の一步として言ってみるが、それだけで終わってしまう。

より気まずくなっただけだった。

さてどうしよう、と九能は考える。

音射には感謝しているのに、それを伝えられないのは心苦しい。

かといって、この雰囲気の中では少し話しづらい。だからこそ、さでどつしどつ、である。

このままだと電車が来るまで、むむむと唸っていきそうだったが、

「准将」

雰囲気を変えたのは、やはり音射だった。

「おつかれさまでした、准将。色々、感謝しなければならぬこともありますし」

腰を折る音射。九能はそれを無言で見つめて、しばらくして顔を上げた音射に、何を言うべきかを迷う。

「どうしました？ 准将？」

「あ、いえ。やっぱり、あなたには敵いそうにはないわね。梓弓上級大尉」

「ふふ、そうですね？ 光栄の至りです」

お互いに笑って、固まっていた空気がようやく動き出した感覚がした九能。同時に、自分の中でも固まっていた緊張が、解れていくような気がした。

「感謝しなければいけないのは私のほうよ」

「え？ …… ああ、そんな、あたしは何も」

「いいえ。あなたが昨日、言ってくれなかったら、私はまだ彼に対する気持ちにけじめをつけていなかったかも……いえ、今もつけられないままだったでしょうね。だから、感謝は言わせて。 あり

がとう」

強情に感謝されて、音射は照れ臭そうに頬をかく。見た目と仕草のギャップに、また一つ気付いた。

そうこうしているうちに、電車が彼方から迫ってくるのが見えた。機首だけが、ここからも見える。

別れの時も、同時に近づいてくる。

「あ、でもね、音射」

姓と階級ではなく名を呼ばれて、音射は驚く。しかし、九能という人間は、元来、こういう性格である。それを知らせる気になったということは、九能が心を開いた、ということなのだが、音射はそこまで知らない。

が、嬉しいのは事実だった。

「私は、覚悟、してしまったわよ。そして、させたのは、あなた。

………どういう意味かは？」

「わかります。責任を取れ、ということですね？」

「そういうこと。知らんぷりはなしよ。彼ともう一度ここに来るから、その時は、紹介させてもらうわよ。それに、惚気話なんて、一晩じゃ足りないくらいに言ってやるんだから。覚悟しなさい」

「はい。私も、覚悟する必要があるそうですね？」

お互いに笑って、笑顔でもって別れを告げる。さようならば、自然と出てこなかった。

九能は停まった電車に乗り込み、音射はそれを見送る。

ドアが閉まり、電車がそのたった2両の巨体を引きずりながら動き出す。

通って、過ぎて、電車は音射の前から姿を消す。音射は、踵を返して、自らの居場所へ、帰ることにした。

席のあり余った車内。

なんの苦もなく、むしろどこに座ろうかと迷う余地すらあって座った九能は、音射から借りた服の裾を握りしめながら、つらつらと考える。理屈など意味はないと知りながら、それでも考える。とにかく、考えれば考えるほど泥沼になっていく、そんなことを、延々と。

そうでもしなければ、数時間後に迫った一世一代の大勝負まで、心が持ちそうになかった。

ADEOIA中国支部。

夕方の赤陽に染まる、社内食堂。もちろん、一般社員と疵術師とで分けられているため、ここにいるのは、幣原のきょうだいと未来小、未永栖を含めて、疵術師のみ。料理を作るコックすら、疵術師である。

そろそろ夕飯時ということもあって、人は疎らではあるが、少しずつ増えている。

そんな中に、

唐突に、

尋常ならざる覇気と鬼気迫った表情で、

乗り込んできた者が、一人。

この中国支部の副支部長、西園寺九能准将だった。

彼女は、適当に駄弁っていた4人の下へ向かい、隊長の帰還に労いの言葉をかける未来小と未永栖を無視し、深呼吸を二度ほど繰り返して、幣原奈都海の前で、ついに

「幣原、奈都海……！ 私と」

食堂が、驚愕に湧いた。

翌日、ADEOIA中国支部は、疵術師の誰一人として例外なく、驚愕に震撼した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9819j/>

Silent Lyric ~ 疵だらけの魔術師 ~

2011年11月20日18時40分発行